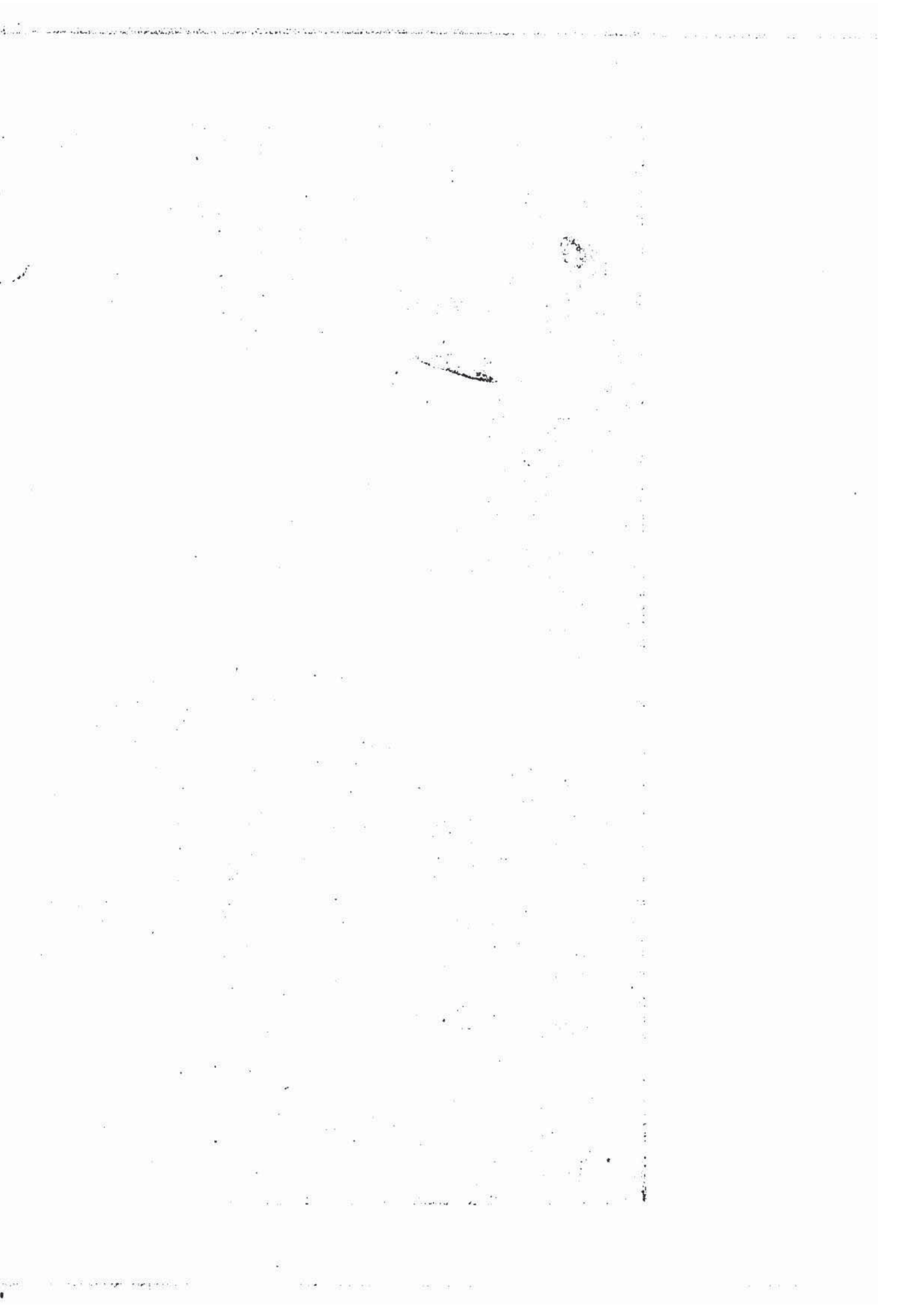


國文大觀

歷史部壹

四鏡

本居豐穎
木村正辭
小杉榲邨
井上賴圀
落合直文
監修

板倉屋書房

224492

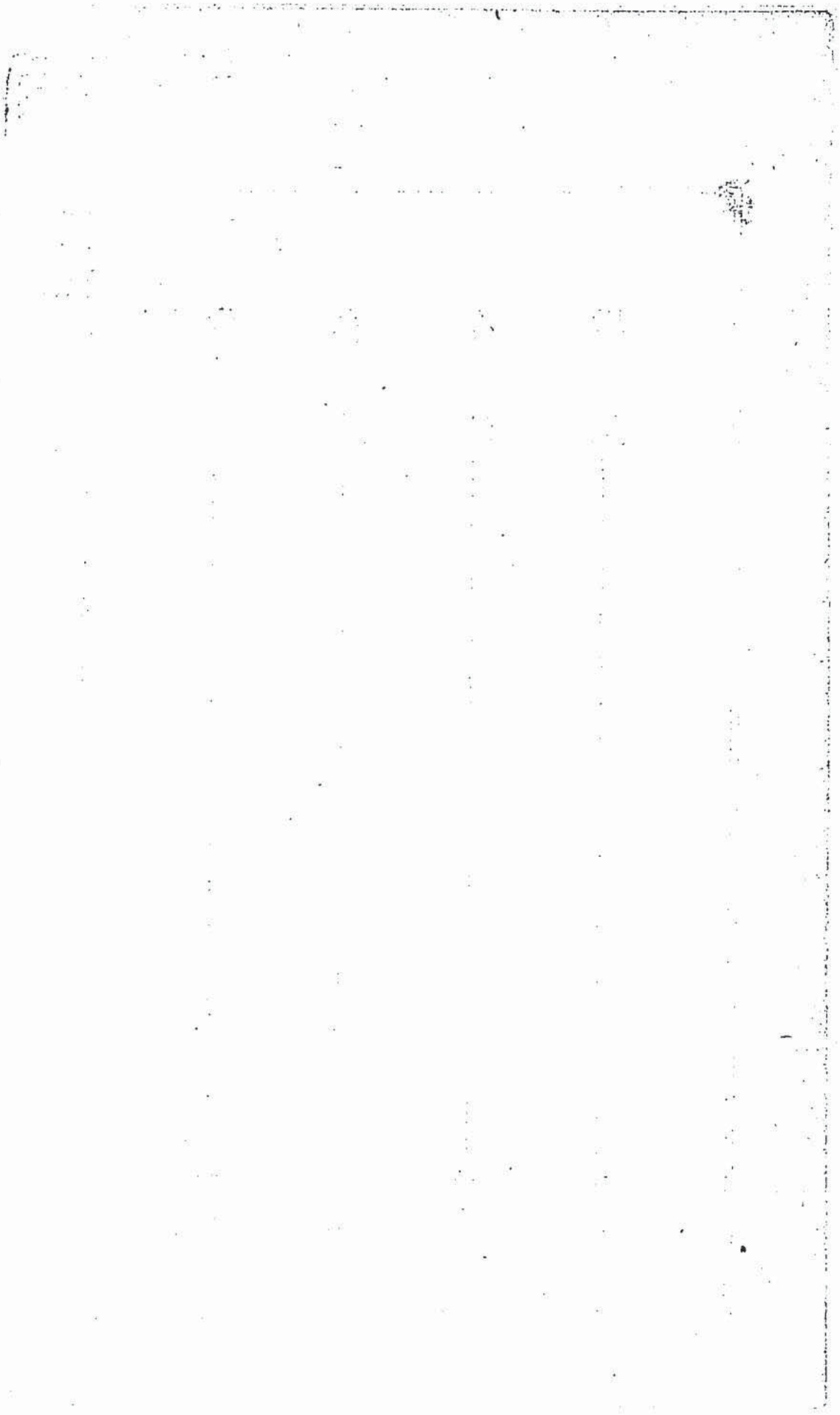
國文大觀歷史部壹目次

大鏡……一頁

水鏡……一九七頁

今鏡……二八五頁

增鏡……五一九頁



大鏡

大鏡卷之一

五十五 文徳天皇　五十六 清和天皇
五十七 陽成院　五十八 光孝天皇
五十九 宇多院　六十 醍醐天皇
六十一 朱雀院　六十二 村上天皇
六十三 冷泉院　六十四 圓融院
六十五 花山院　六十六 一條院
六十七 三條院　六十八 後一條院

さいつころ雲林院の菩提講にまうで〻侍りしかば、例の人よりはこよなく年老いうたてげなる翁二人おんなときおひて同じところにゐぬめり。哀に同じやうなるもの〻さまかなと見侍りしに、これらうち笑ひ見かはしていふやう二年ごろむかしの人に對面していかで世の中の見聞く事どもをきこえおはせむ、この唯今の入道殿下の御有樣をも申しおはせばやとおもひしに、おはれに嬉しくも逢ひ申したるかな。今ぞ心やすくよみぢもまかるべき。おぼしき事いはぬはげにぞ腹ふくる〻心ちしける。か〻ればこそ昔の人は物いはまほしくなれ

ば穴を堀りてはいひいれ侍りけめとおぼえ侍る。返す返す嬉しく對面したるかな。さてもいくつにかなり給ひぬる」といへば、今一人の翁、「いくつといふことも更に覺え侍らず。たゞしおのれは故太政のおとゞ貞信公の、藏人の少將と申し、折の小舍人わらは大犬丸ぞかし。ぬしはその御時の母の后の宮の御方のめしつかひ、かう名のおはやけのよつぎとぞいひ侍りしかしな。さればぬしのみとしはおのれにはこよなくまさり奉らむかし。みづからはこゝらはにてありし時、ぬしは廿五六ばかりのをのこにてこそはいませ元しかし」といふめれば、「世繼「ぢか」ぢか、さ侍りしことなり。さてもぬしのみ名はいかにぞや」といふめれば、「故太政大臣殿にて元服仕うまつりし時、きんぢが姓は何ぞと仰せられしかば夏山となむ申すと申しゝを、やがてしげきとなむつけさせ給へりし」などいふに、いとあさましくなりぬ。誰も少しよろしきものどもは見おこせぬよりあどしけり。年二十ばかりあるなまさぶらひめきたるものゝ、せちに近く寄りて、「いでいと興ある事いふらうざたちよな。更にこそ信ぜられね」といへば、翁二人見かはしてあざわらふ。繁樹となのるがかたざまに見やりて、「ぬしはいくつといふ事覺えずといふめり。この翁どもは覺え給ふや」と問へば、「更にもあらず。一百五十歳にぞ今年はなり侍りぬる。されば繁樹は百四十には及びさふらふらめ元」とやさしく申すなり。「おのれは水の尾の御門の坐しまず年のむつきのもちの日生れて侍れば十三代にあひ奉りて侍るなり。けしうはさふらはぬ年なりな。まことゝ人おぼさじ。されど父がなまがくしやうにつかはれ奉りて、げらうなれどもみやこはとりといふ事も侍れば目元を見たまへて

うぶきぬに書きおきて侍りけるいまだ侍り。丙申の年に侍り」といふもげにときこゆ。今ひとりに「猶もおきなの年こそ聞かまほしけれ。生れけむ年はしりたりや。それにていとやすく數へてむ」といふめれば、「これはまことの親にもそひ侍らず。こと人のもとにやしなはれて十二三までそひて侍りしかば、はかばかしうも申さず。唯我は子產むわざもしらざりしに、しうの御使にいちへまかりしに、又わたくしにもせに十貫を持ちて侍りけるに、にくげもなきちごを抱きたる女の、これ人にはなたむとおもふ、子を十人までうみて、これはし十たりの子にて、いとゞさつきにさへ生れてむづかしきなりといひ侍りければ、この持ちたる錢にかへてきにしなりと。姓は何とかいふと問ひ侍りければ夏山とは申しける。さて十二三にてぞおほき大殿には參り侍りし」などいひて、「さてもうれしく對面したるかな。佛の御しるしなんめり。年頃こゝ彼處の說經とのゝしれど何かはとて參るとも云侍らず、かしこくも思ひたちて參り侍りにけるが嬉しき事」とて「そこにおはするはそのをりの女人にやみえますらむ」といふめれば、繁樹がいらへ「いでさも侍らず。それははやうせ侍りにしかば、これはその後相添ひて侍るわらはべなり。さては閣下はいかに」といふめれば、世繼がいらへ「それは侍りし時のなり。今日も諸共にまゐらむと出でたち侍りつれど、わらはやみをしてあたり日に侍りつれば口をしうもえ參り侍らずなりぬる」などあはれにいひ語らひ泣くめれど、涙落つとも見えず。かくて講師侍つほどに我も人も久しうつれづれなるに、この翁どものいふやう「いでさうざうしきにいざたまへ、むかしの物語してこのおはさふ人々に、さはいに

しへの世はかくこそはありけれと聞かせ奉らむ」といふめれば、今一人「さか〳〵、いと興ある事なり。いでおぼえたまへ。時々さるべき事のさしいらへ繁樹もうちおぼえ侍らむかし」といひて、いはむいはむと思ひたる氣色どもいつかと聞かまほしく奥ゆかしき心ちするに、そこらの人おほかりしかどものはかばかしく聞きわき、耳とゞむるもあらめど、人めにあらはれてはこのさぶらひぞよく聞かむとわとうつめりし。世繼がいふやう「世はいかに興あるものぞや。さりとも翁こそ少々の事はおぼえ侍らめ。昔さかしき御門の御まつりごとのをりは國の内に年老いたる翁おんなやあると召したづねて、いにしへのおきての有樣を尋ね問はしめ給ひてこそは奏する事を聞し召し合せて世の政は行はしめ給ひけれ。されば老いたる身はいとかしこきものに侍り。若き人だち覺しなおなづりそ」とて黒がいの骨の九つあるに黄なる紙はりたる扇をさし隱して、けしきだち笑ふほどもさすがにをかし。「まめやかには世繼が申さむと思ふ事はことごとかは。唯今の入道殿下の御ありさまの世にすぐれておはしますとを道俗男女の御前にて申さむと思ふが、いと事多くなりて、あまたの御門ざさまた大臣公卿の御上をつゞくべきなり。その中に、さいはひ人におはしますこの御有樣申さむと思ふほどに、世の中の事のかくれなくあらはるべきなり。つてにうけたまはれば、法華經一部を説き奉らむとてこそまづ四經をば説きたまひけれ。それをなづけて五時教とはいふにこそはあなれ。さかのごとくに入道殿の御さかえを申さむと思ふほどに、よきやうの説かるゝといひつべし」などいふもわざわざしうことごとしう聞ゆれど、いでやさりとも何ば

かりの事をかと思ふに、いみじうこそいひ続け侍りしか。「世の中の摂政関白と申し、大臣公卿と聞ゆる、いにしへ今の時の入道殿の御有様のやうにこそはおはしますらめとぞ今やうのちごどもは思ふらむかし。されどそれさもあらぬ事なり。いひもていけば同じ種一つすぢにぞおはすめれど、かどわかれぬれば、人々の御心もちゐも又それにしたがひてことごとになりぬ。この世はじまりて後、みかどはまづ神のよ七代をおき奉りて、神武天皇を始め奉りて、當帝まで六十八代にぞならせ給ひにける。すべからくは神武天皇を始め奉りてつぎつぎの御門の御次第をおぼえ申すべきなり。しかりといへども、それはいとき〻耳遠ければ唯近きほどより申さむと思ふに侍り。文徳天皇と申す御門おはしましき。その御門よりこなた、今の御門まで十四代にぞならせ給ひにける。世をかぞへ侍れば、その御門位に即かせ給ふ嘉祥三年庚午の年よりことしまでは一百七十六年ばかりにやなりぬらむ。かけまくもかしこき君の御名を申すは忝なくさふらへども」といひつゞけはべりき。

五十五代　或る本に云ふ、田邑帝と申す。

「文徳天皇と申しける御門は仁明天皇の御第一の皇子なり。御諱は道康、御母は太皇太后藤原順子と申しき。その后左大臣贈正一位太政大臣冬嗣のおとゞの御むすめなり。この御門天長四年丁未八月に生れ給ひて、み心あきらかに、よく人をしろしめせり。承和九年壬戌二月廿六日御元服、同年八月四日東宮に立たせたまふ。御年十六。仁明天皇、もとおはする東宮をとりてこの御門を承和九年八月四日東宮に奉らせ給へるなり。いかに安からずおぼしけむ

とこそ覚え侍れ。嘉祥三年庚午三月廿一日位に即かせ給ふ。御年二十四。さて世を保たせ給ふ事九年。天安二戊刁の歳八月廿七日にうせさせ給ひぬ。御年三十二。陵、田村にあり。御母の后十九にてぞこの御門を産み奉りたまふ。嘉祥三年庚午の歳四月に后に立たせたまふ。御年四十三。齊衡元年甲戌皇太后宮にわがりね給ふ。貞觀三年辛巳二月廿九日御出家。（滋頂せさせ給へり。）同八年丙戌正月七日、太皇太后宮にわがりね給ふ。これを五條の后と申す。伊勢物語に業平の中將、「よひよひごとにうちもねなゝむ」とよみ給ひたるはこの宮の御事のやうにさふらふめる。いかなる事にか、二條の后に通ひ申されけるあひだの事とぞうけたまはり及ぶや。「春やむかしの」などもこの后の御家と侍るは、わかぬ御中にてその宮にやしなはれ給へれば同じ所におはしけるにや。

五十六代（この御門御かたちめでたく御心いつくし。）

つぎのみかど、清和天皇と申しける。御諱惟仁、文徳天皇の第四のみこなり。御母は明子（皇太后宮）とまうしき。太政大臣良房のおとゞの御むすめなり。このみかどは嘉祥三年庚午三月二十五日、母がたの御おほぢおほきおとゞの小一條の家にて、父みかどの位に即かせ給ひて五日といふ日生れ給へりけむこそいかに折さへ華やかにめでたかりけむと覚え侍れ。惟喬のみこの東宮あらそひし給へりけむもこの御事とこそ覚ゆれ。やがて生れ給へる年の十一月廿五日東宮に立ち給ひて、天安二年戊刁八月廿七日御年九歳にて位に即かせ給ふなり。貞觀六年正月七日御元服。（元日御元服なり。）御年十五なり。世をしらせ給ふ事十八年。（貞觀十八年十一月廿九日、染殿院にておりさせ給ふ。元慶四年十二

月四日うせさせたまふ。御歳三十一。元慶三年五月八日御出家なり。水の尾の御門と申す。この御すゑぞかし、今の世に源氏の武者のぞうは。これもおほやけの御かためとこそはなるめれ。御母二十三にて此の御門をうみ奉り給へり。貞觀六年甲申正月七日、皇后宮にあがりゐ給ふ。きさいのくらいにて四十一年おはします。そめどのゝきさきとまうす。その御ときの護持僧は智證大師におはします。天安二年つちのとらの年八月廿七日にぞうせさせたまふ。みさゝきたむらといふところにあり。天安以下四十二字イ無右傍御ものゝけのかなはざりけるこそ心うくは。今生寇なり。天安二年に唐よりかへりたまへり。

五十七代　この御門ものぐるほしくおはしましたりといへる本あり。

次の御門、陽成天皇と申しき。御諱さだあきら。清和天皇第一の皇子なり。御母は皇太后宮高子とまうしき。贈太政大臣長良のおとゞの御むすめなり。この御門、貞觀十年つちのえね十二月十六日、染殿院にて生れたまへり。同十一年つちのとのうし二月一日、二歳にて東宮に立たせ給ひて、同十八年丙申十一月廿九日に位に即かせ給ふ。御年九歳。元慶六年壬刁正月二日御元服。御年十五。世をしらせ給ふ事八年。元慶八年二月四日、おりさせ給ふ。御年十七。二條院におはましけるとぞ。のかせ給ひて六十五年なれば、八十一にて天暦二年九月廿九日にかくれさせ給ふ。御法事の願文に釋迦如來の一年のこのかみとは作られたるなり。智惠深く思ひよりけむ程いとけうあれど、佛の御年よりは御年高しといふ心の後世のせめとなむなれるとこそ人の夢に見えけれ。御母后、清和の御門よりは九年の御姉なり。廿七と申しゝとし、この陽成院をば逢み奉り給へるなり。元

慶元年正月に后に立たせ給ひて中宮と申す。御年三十六。同六年壬寅正月七日、皇太后宮にわがり給ふ。御年四十一。この后の宮づかへしそめ給ひけむやうこそおぼつかなけれ。いまだよごもりておはしける時、在中將の玄のびてゐてかくし奉りたりけるを御せうとの君たち、基經の大臣、國經の大納言などの若く坐しけむほどのことなりけむかし、とりかへしにおはしたりけるをり、「つまもこもれり我もこもれり」とよみ給ひたるはこの御事なれば「末の世に神代のことも」とは申しいで給ひけるぞかし。されば世のつねの御かしづきにては御覽じそめられ給はずやおはしましけむと覺え侍る。若し離れぬ御中にて染殿の宮に參り通ひなどし給ひけむほどの事にやとぞおしはからるゝ。及ばぬ身にかやうの事をさへ申すはいとかたじけなき事なれど、これは皆人のしろしめしたる事なり。いかなる人かはこの頃古今伊勢物語など覺えさせ給はぬはあらむずる。「見もせぬ人のこひしきは」など申す事もこの御中らひの程とこそはうけたまはれ。末の世まで書きおき給ひけむ、おそろしきすきものなりかしな。いかに昔はなかなかにけしきある事もをかしき事もありけるものとて」とうち笑ふけしきことになりていとやさしげなめり。「二條の后と申すはこの御事なり。業平の中將の「よひよひごとにうちもねなゝむ」とよみ給ひたるも「春やむかしの」などもこの御事なめり。

五十八代

次の御門、光孝天皇と申しき。御諱は時康、仁明天皇の第三の王子なり。御母贈皇太后宮澤子

とまうしき。贈太政大臣總繼の大臣の御むすめなり。このみかど淳和天皇の御とき天長八年辛亥東六條の家にて生れ給ふ。御親の深草のみかどの御時、承和十三年丙寅正月七日四品し給ふ。御年十六。嘉祥三年庚午五月中務卿になりたまふ。御年二十。仁壽元年辛未十一月十一日三品にのぼり給ふ。御年二十二。貞觀六年甲申正月十六日、上野の大守かけさせたまふ。御年三十四。同八年丙戌正月十三日太宰帥に遷兼す。御年三十六。同十二年庚寅二月七日二品に昇りたまふ。御年四十。同年上野大守、同十八年丙申十二月廿六日式部卿にならせ給ふ。御年四十六。元慶六年壬刁正月七日一品にのぼらせ給ふ。御年五十二。同八年甲辰二月四日位に即きたまふ。御年五十四。世をしらせたまふこと四年。小松のみかどと申す。この御ときにふぢつぼのうへの御つぼねのくろどはおきたると聞きはべるはまことにや。或本に仁和三年八月廿六日うせさせ給ふ。御とし五十八。

五十九代　この御門業平の中將と相撲とりたまひて、負けておうらん破れたることあり。おもひ人の時なり。

次の御門、亭子の御門と申しき。小松の御門の第三の王子なり。御諱さだみ、御母皇太后宮いみな班子と申しき。二品式部卿貞一品太政大臣中野親王の御むすめたり。この御門、貞觀九年丁亥五月五日生れかまふ。元慶八年甲辰四月十三日源氏になり給ふ。御年十八。王侍從など聞えて、殿上人にておはしける時、殿上のごいしの前にて業平の中將とすまひとらせ給ひける程に、ごいしに打ちかけられて、高欄折れにけり。そのをれめ今に侍るなり。仁和三年丁未八月廿六日東宮に立たせ給ひて、同じ日位に即かせ給ふ。御年廿一。世を去らせ給ふと十

年。寛平元年つちのとのとり十一月廿一日つちのとのとりの日、賀茂の臨時祭はじまる事この御時よりなり。使右近衛中將時平。（北野の御かたき、本院のおとゞの御事なり。）昌泰元年つちのえうま四月十日、出家させたまふ。この御門、いまだ位に即かせたまはざりける時、十一月廿よ日の程に賀茂のみやしろのへんに鷹つがひ遊びありきけるに、賀茂の明神託宣し給ひけるやう「このへんに侍るおきなどもなり。春はまつり多く侍り。冬のいみじくつれづれなるに、祭り給はらむ」と申し給へば、その時に賀茂の明神の仰せらるゝと覺えさせ給ひて、「おのれは力及び候はず。おはやけに申させ給ふべきことにこそ候ふなれ」と申させ給へば「力及ばせ給ひぬべきなればこそ申せ。いたくきやうきやうなるふるまひなさせ給ひそ。さ申すやうあり」とて「ちかくなり侍り」とてかいけつやうに失せ給ひぬ。いかなる事にかと心えず思しめすほどに、かく位に即かせ給へりければ、臨時の祭せさせ給へるぞかし。賀茂の明神の託宣して祭せさせ給へと申させ給ふ日、酉の日にて侍りければ、やがてしも月のはての酉の日臨時の祭は侍るぞかし。あづまあそびの歌は敏行の朝臣のよみけるぞかし。

「ちはやぶるかものやしろのひめ小松よろづ代ふとも色はかはらじ」。

これは古今に入りて侍り。人皆しらせ給へる事なれども、いみじくよみ給へるぬしかな。今に絶えずひろごらせ給へる御末、御門と申すともいとかくやはおはします。位に即かせ給ひて二年といふに始まれり。つかひ右近中將時平の朝臣こそはし給ひけれ。寛平九年七月五日おりさせ給ふ。昌泰二年つちのとのひつじ十月十四日出家せさせたまふ。御名金剛覺と申し

き。承平元年七月十九日うせさせ給ひぬ。御年六十五。肥前のぞう橘の良利殿上に侍ひける、入道してすけの御供にこれのみつかまつりける。されば熊野にても日根といふ所にて「旅寝の夢に見えつるは」ともよむぞかし。人々なみだおとす、ことわりにおはれなることかな。この御門のたゞ人になり給ふ程なむ(如元)おぼつかなし。よくもおぼえ侍らず。御母洞院の后と申す。仲野の親王は桓武天皇の御孫なり。この御門の、陽成院の御時、殿上人にて神社の行幸にはまゐ人などせさせ給へり。位に即かせ給ひて後、陽成院を通りて行幸ありけるには、「當帝は家人にはあらずや。悪しくも通るかな」とこそ仰せられけれ。

六十代　今の聖代桓算の事北野の御事をぞ世の中に申しつたへためる。

次の御門、醍醐天皇と申しき。御諱敦仁。是亭子太上法皇の第一の王子におはします。御母贈皇太后宮胤子と申しき。内大臣高藤此人は勧修寺の氏のはしめ　このおとゞの御女なり。この御門、仁和元年乙巳正月十八日に生れ給ふ。寛平五年みづのとのうし四月二日に東宮に立たせ給ふ。御年九歳。同七年乙卯正月十九日、十一歳にて御元服。又同九年丁巳七月三日位に即かせ給ふ。御年十三。やがて今宵よるのおとゞより俄に御かうぶり奉りて、さしいでおはしましたりける。御手づからわざと人の申すはまことにや。さて世を保たせ給ふ事三十三年。この御年ぞかし、村上か朱雀院か生れおはしましたる御いかのもちひ殿上に出させ給へるに、伊衡の中將、和歌つかまつり給へるとぞおぼゆめる。

「一とせにこよひかぞふる今よりはもゝとせまでの月かげを見む」

とよむぞかし。御かへし、御門の云おはしましけむかたじけなさよ。

「祝ひつることたまならばもゝとせののちもつきせぬ月をこそみめ」。

御集など見給ふるにぞ、いとなまめかしうかやうの方さへおはしましける。延長八年九月廿五日おりさせ給ふ。おなじ八日うせさせ給ふ。陵山科にあり。後の山科といふ。この時ぞかし。

六十一代　将門純友が事この時なり。

次の御門朱雀院天皇と申しき。御諱ひろあきら。これ醍醐の御門の御第十一の王子なり。御母皇太后宮穩子と申しき。太政大臣基經のおとゞの四つの娘なり。このみかど延長元年癸未四月廿七日生れさせ給ふ。同三年乙酉十月廿一日東宮に立ち給ふ。御年三歳。同八年庚寅九月廿二日位に即かせ給ふ。御年八歳。承平七年正月四日御元服。御年十五。世を保たせ給ふ事十六年。或本に廿四にて御すけ、天暦六年八月十五日うせ給ふとあり。御とし三十七、陵島邊野にあり。八幡の臨時の祭はこの御時よりあるぞかし。この御門生れさせ給ひては御格子もまゐらず夜晝火をともして御帳の内にて三つまでおはし奉らせ給ひき。北野におち申させ給ひてかくありしぞかし。この御門生れおはしまさずば藤氏のさかえいとかうしもおはしまさゞらまし。いみじきをりふし生れさせ給へりしぞかし。位に即かせ給ひて、將門がみだれ出できて、御願にてぞと聞え侍りし、この臨時の祭は。そのあづま遊の歌、貫之のぬしのよみたりし、

「松もおひまたもかげさむけすいはしみづゆくすゑとほくつかへまつらむ」。

六十二代　天暦聖主此也。殿上有和歌會。

次の御門、村上の天皇と申しき。御諱なりあきら。これ醍醐の御門の第十四の皇子なり。御母后朱雀院の御同じ腹におはします。この御門、延長四年丙戌六月二日生れさせ給ふ。桂芳坊にて生れさせ給へるとぞ。天慶三年庚子二月十五日御元服。御年十五。同七年甲辰四月廿二日に東宮に立たせ給ふ。御年十九。同九年丙午四月廿九日位に即かせ給ふ。御年二十一。世を去らせ給ふ事廿一年。ある本に庚保四年五月廿五日うせさせ給ふ。御年四十二。御陵村上。御母后、延喜三年癸亥前坊うまれさせ給ふ。御年十九。同廿年女御の宣旨下りたまふ。御年三十六。同廿三年みづのとのひつじ朱雀院生れさせ給ふ。同四月廿五日后の宣旨かうぶらせ給ふ。御年三十九。やがて御門うみ奉り給ふ。同じ四月に后にも立たせ給ひけるにや。四十二にて村上はうまれさせ給ひけり。后にたゝせ給ふ日、前坊の御事を宮の内にゆかしがりて申し出づる人もなかりけるに、かの御めのと子に御めの（五字右歌）大輔の君といひける女房のかくよみて出したりける、

「わびぬれば今はたものを思へどもこゝろに似ぬはなみだなりけり」。

又御法事はてゝ人々まかりいづる日もかくこそはよまれたりけれ、

「今はとてみ山をいづるほとゝぎすいづれの里になかむとすらむ」。

五月の事に侍りけり。げにいかにと覺ゆるふしぶし末の世まで傳はるばかりの事、いうに侍るかしな。さて前東宮におくれ奉りて限なく歎かせ給ふ。同じ年朱雀院生れさせ給ふ。われ后にたゝせ給ひけむこそ、さまざま御なげき御よろこび、かきまぜたる心ちつからまつれ。世におほささとこれを申す。

六十三代　この御門に、元方のもの〳〵けおはしまして、あさましかりしと、ある本に。

次の御門は、冷泉院天皇と申しき。御諱憲平。これ村上天皇の第二の王子なり。御母皇后宮安子と申す。右大臣師輔のおとゞの第一の御むすめなり。この御門天暦四年庚戌五月廿四日在衛のおとゞのいまだ從五位下にて備前介と聞えまつりし折の五條の家にて生れさせ給へり。同年七月廿三日東宮に立たせ給ふ。應和三年癸亥二月廿八日御元服。御年十四。康保四年丁卯五月廿五日、御年十八にて位に即かせ給ふ。世をたもたせ給ふ事二年。寛弘八年辛亥十月廿四日、御年六十にてかくれおはしましけるを、三條院位につかせ給ふ年にて大嘗會などの延びけるをぞ折あしと世の人申しける。

六十四代　寛和元年八月廿九日出家。年三十七。御名金剛法。同二年三月廿二日於東大寺受戒。正暦二年二月十二日崩。年三十二。同月十九日葬圓融寺北原、昼御骨於村上陵傍。

次の御門、圓融院天皇と申しき。御諱守平。これ村上の御門の第五の王子なり。御母冷泉院の同じ腹におはします。この御門、天徳三年己未二月二日生れさせ給ふ。この御門の東宮に立たさせ給ふ程はいと聞きにくゝいみじき事どもこそ侍な。これは皆人のゑろしめしたることなれば事も長し、とゞめ侍りぬ。安和二年己巳八月十三日にこそは位に即かせ給ひけれ。御年十一とぞ。さて天祿三年壬申正月三日御元服。御年十四。世を保たせ給ふ事十五年。惱ありて御出家、法名金剛法と申しき。正暦二年二月十二日うせさせ給ふ。御年三十三。母后の御年廿三四にて、うちつゞきこの御門冷泉院とうみ奉り給へり。御中に爲平の宮生れまたへり。うちつゞきはこの本のひが事なり。いとやんごとなき御宿世なり。御母方のおほぢ出雲守從五位下藤原の經邦といひし人なり。末の

世にはそうせさせ給ひてこそは贈三位を給ひしか。いまさぬ跡なれど、この世の光はいとめでたくありかし。おほささぎと申すこの御事なり。女十宮うみ奉り給ふたびかくれさせ給へりし御歎こそいと悲しく承りしか。村上の御日記御覧じたる人もおはしますらむ。ほのぼの傳へうけたまはれども、及ばぬ心にもいと哀にかたじけなうさふらふな。そのとゞまりおはします女宮こそはおほ齋院よ。

六十五代　諱師貞。寛弘五年二月八日崩。四十一。

次の御門、花山院天皇と申しき。御諱師貞。冷泉院第一の王子なり。御母贈皇后宮懐子と申す。太政大臣伊尹のおとゞの第一のむすめなり。この御門、安和元年つちのえたつ十月廿六日、母方の御おほぢ一條の御家にて生れさせ給ふとあるは世尊寺の事にや。その日は冷泉院の御時の大嘗會のごけいあり。同二年己巳八月十三日東宮に立たせ給ふ。御年二歳。天元五年壬午二月十九日御元服せさせ給ふ。御年十五。永觀二年甲申八月廿八日位につかせ給ふ。御年十七。寛和二年丙戌六月廿二日の夜あさましく候ひし事は、人にも知られさせ給はでみそかに花山寺におはしまして、御出家入道せさせ給へりしとぞ。御年十九。世を保たせ給ふ事二年。その後廿二年はおはしましき。おはれなる事はおりおはしましける夜は、藤壺の上の御局の小戸より出でさせ給ひけるに、有明の月のいみじうあかゝりければ、「見證にこそありけれ。いかゞあるべからむ」と仰せられけるを、「さりとてとまらせ給ふべきやう侍らず。神璽寶劔わたり給ひぬるには」と粟田のおとゞさわがし申し給ひけることは、まだ御門

出させ給はざりけるさきに神璽寶劔手づからとりて、東宮の御方にわたし奉り給ひてければ、かへり入らせ給はむ事はあるまじくおぼして左か申させ給ひけるとぞ。さやけき影をまばゆく思しめしつるほどに、月のかほにむら雲のかゝりて少しくらがりゆきければ、「我がすけは成就するなりけり」と仰せられて歩み出でさせ給ふ程に、こき殿の女御の御文のはこぞろやりのこして御身もはなたず御覽じけるを思しめしいで、、左ばしとてとりに入らせ給ひけるほどぞかし、粟田殿の、「いかにかくは思しめしなりぬるぞ。只今過ぎなば、おのづからさはりとて出でまうで來なむ」とそらなき左給ひけるは。さて土御門よりひんがしさまにおはしますに、晴明が家の前をわたらせ給へば、みづからの聲にて手をおびたゞしくはたはたと打つなる。「御門おりさせ給ふと見ゆる天變ありつるが、既になりにけりと見ゆるかな。參りて奏せむ。車にさうぞくとうせよ」といふ聲聞かせ給ひけむは、さりとも哀にはおぼしめしけむかし。「かつかつ式神一人だいりに參れ」と申しければ、目には見えぬもの、戸おしあけていづ。御うしろをや見まゐらせけむ、「唯今これより過ぎさせおはしますめり」といらへけりとかや。その家は土御門町口なれば御道なりけり。花山寺におはしましつきて、御ぐしおろさせ給ひて後にぞ、粟田殿は「まかりいで、、おとゞにもかはらぬ姿今一度見え、かくと案内も申して必ず參り侍らむ」と申したまひければ、「われをばはかるなりけり」とこそ泣かせ給ひけれ。哀に悲しきことなりな。日比かく御弟子にてさぶらはむと契りすかし申し給ひけむがおそろしさよ。東三條殿は、もしさる事や左給ふとおやふさに、さるべくおとなし

き人々、なにがしかゞしといふいみじき源氏の武者達をこそ御送にそへられたりけれ。京の程は隠れて、つゝみのわたりよりぞうちいで参りける。寺などにては、若しおして人などやなし奉るとて、一尺ばかりの刀どもを抜きかけて守り申しけるとぞ。或本に、寛弘五年二月八日うせさせたまふ。御年四十一。

六十六代

次の御門、一條院天皇と申しき。御諱やすひと。これ圓融院の御門第一の王子なり。御母皇太后宮詮子と申しき。これ太政大臣兼家のおとゞの第二の女なり。この御門、天元三年庚辰六月一日、兼家のおとゞの東三條の家にて生れさせ給ふ。東宮に立たせ給ふ事、永觀二年甲申八月廿八日なり。御年五歳。寛和二年丙戌六月廿三日位に即かせ給ふ。御年七歳。永祚二年庚寅正月五日御元服。御年十一。世をたもたせ給ふ事廿五年。御母は十九にてこの御門をうみ奉り給ふ。東三條の女院とこれを申す。この御母は津の守藤原仲正のむすめなり。或本に、寛弘八年六月十三日おりさせ給ふ。同月の廿二日うせさせ給ふ。御年三十二。

六十七代

次の御門、三條院のみかどゝ申しき。御諱ゐさだ。これ冷泉院第二の王子なり。御母贈皇后宮超子と申しき。太政大臣兼家のおとゞの第一の御女なり。この御門は貞觀元年丙子正月三日生れさせ給ふ。寛和二年丙戌七月十六日、東宮に立たせたまふ。同じ日御元服なり。御年十一。寛弘八年辛亥六月十三日位に即かせ給ふ。御年卅六。世をたもたせ給ふ事五年。院にならせたまひて御目を御覧せざりしこそいといみじかりし。とに人の見奉るには聊變らせ給

ふ事おはしまさゝりければ、そら事のやうにぞおはしましける。御眼あどもいときよらにおはしますばかり、いかなる折にか時々は御覽ずる時もありけり。「御簾のあみ緒の見ゆる」なども仰せられて、一品宮ののぼらせ給へりけるに、辨のめのとの御供に候ふが、さしぐしを左にさゝれたりければ、「あごよ、など櫛はあしくさしたるぞ」とこそ仰せられけれ。この宮をことのほかにかなしうし奉らせ給ひて、御ぐしのいとをかしげにおはしますをさぐり申させ給ひては、「かく美くしうおはする御ぐしをえ見奉らぬこそ心うけれ口惜しけれ」とて、ほろほろと泣かせ給ひけるこそあはれに侍れ。渡らせ給ふ度ごとにはさるべき物を必ず奉らせ給ふ。三條院の御劵を具して歸りわたらせ給へりけるを、入道殿御覽じて、「かしこくおはしける宮かな。幼き御心にふるほぐとおぼしてうち捨てさせ給はで、もてわたらせ給へるよ」と興じ申させ給ひければ、「まさなくも申させ給ふものかな」と御めのとたち笑ひ給ひける。冷泉院も奉らせ給ひけれど、「むかしより御門の御領にてのみさふらふ所を今更に私の物になり侍らむ、びんなきことなり。おほやけものにて候ふべきなり」とて返し申させ給ひければ、代々のわたりものにて、朱雀院のおなじ事に侍るべきにこそ。この御目のためによろづにつくろひおはしましけれど、そのしるしあることもなきいとゞみじき事にて、もとより御風重くおはしますに、くすしどもの「大小寒の水を御ぐしにいさせ給へ」と申しければ、氷りふたがりたる水を多くかけさせ給ひけるに、いといみじく慄ひわなゝかせ給ひて、御色もたがひにおはし給ひたりけるなむ、いとあはれに悲しく人々見まゐらせ給けるとぞうけた

まはりし。御病により金液丹といふ薬をめしたりけるを、その薬くひたる人はかく目を悩むなど人は申しゝかど、まことには桓算供奉の御ものゝけに顯はれて申しけるは、「御首にのりゐて左右のはねをうちおはひ申したるに、うちはぶき動かすをりに少し御覽ずるなり」とこそいひ侍りけれ。御位去らせ給ひしこと、多くは中堂にのぼらせ給はむとなり。さりしかどのぼらせ給ひて更にそのしるしおはしまさゞりしこそ口惜しかりしか。やがてをこたらせおはしまさずとも少しのしるしはあるべかりしとよ。さればいとゞ山の天狗のし奉るとこそさまざまに聞え侍るめれ。太秦にも籠らせ給へりき。さて佛のお前よりひんがしの廂にくみれはせられたるなり。御烏ばう子せさせ給へりけるは大入道殿にこそいとよく似奉り給へりけれ。御心さへいとなつかしうおいらかにおはしまして、世の人いみじうこひ申すめり。齋宮の下らせ給ふ別の御櫛さゝせ給ひては、かたみに見かへらせ給はぬとを、思ひかけぬに、この院はむかせ給へりし。あやしとは見奉りしものを」とぞ入道殿おはせられける。

寛仁元年五月九日うせさせ給ふ。御年四十二。

六十八代

次の御門、當代、御諱おつなり。これ一條院の御第二王子なり。御母今の入道殿下の第一の御むすめなり。皇太后宮彰子と申す。唯今は誰かはおぼつかなく覺し思ふ人の侍らむ。されどまづすべらきの御事を申すさまにたがへ侍らぬなり。寛弘五年戊申九月十一日、土御門殿にて生れさせ給ふ。同八年辛亥六月十三日、東宮に立たせ給ひき。御年四歳。長和五年丙辰五月

廿九日位に即かせ給ひき。御年九歳。寛仁二年戊午正月三日御元服。御年十一。位に即かせ給ひて十年にやならせ給ふらむ。今年萬壽二年乙丑とこそは申すめれ。おなじみかど〳〵申せども、御後見多くたのもしくおはします。御おばぢにて唯今の入道殿下出家せさせ給へれど、世のおや一切衆生一子の如くはぐゝみおはします。第一の御をぢにて唯今の關白左大臣、一天下をまつりごちておはしますべき。次の御をぢと申すは内大臣にて左大將かけておはします。次の御をぢと申すは大納言、或ひは東宮大夫、中宮權大夫、中納言などさまざまにて坐します。斯の如くにおはしまさせば御後見多くおはします。昔も今もみかどかしこしと申せど、臣あまたしてかたぶけ奉るときは傾き給ふものなり。されば唯一天下は我が御後見の限にておはしませば、いとたのもしくめでたき事なり。むかし一條の院の御惱のをり、仰せられけるは、「すべからくは次第のまゝに一のみこをなむ春宮とすべけれど、後見すべき人なきにより思ひかけず。さればこの二宮をば立て奉るなり」とおほせられけるもこの當代の御事よ。げにさる事ぞかし。御門の御次第は申さずともありぬべけれど、入道殿下の御榮華も何によりひらけ給ふぞと思へば、先づ御門后の御ありさまを申すなり。植木は根をおはして、つくろひおほしたてつればこそ枝も茂げりてこの實をもむすべや。云かおればまづみかどの御つゞきをおぼえて、次に大臣の御つゞきはおかさむとなりといへば、大犬丸をとこ、「いでいでいといみじうめでたしや。こゝらのすべらきの御有樣をだに鏡をかけ給へるに、まして大臣などの御事は年ごろ聞にむかひたるに朝日のうらゝかにさし出でたるにおへら

む心ちもするかな。又翁らが家の女どものもとなるくしげの鏡の影見えがたく、とぐわざも去らずうち納めて置きたるにならひて、おかく磨ける鏡にむかひて我が身のかたちを見るに、かつは影はづかしく、又いとめづらしきにもむかへりや。あな興ありのわざやな。翁今十廿年の命は今日延びぬる心ちし侍り』と痛くゆけするを、見聞く人々をこがましうをかしけれども、いひ續くる事どもはおろかならずおそろしければ物もいはで皆聞きゐたり。大犬丸をとこ、『いで聞きたまへや。歌ひとつ作りて侍り』といふめれば、世繼、『いとかんあることなり』とて、『うけたまはらむ』といふ。繁樹、いとやさしげにいひいづ。

『おきらけきかゞみにあへば過きにしも今ゆくすゑのことも見えけり』

といふめれば、世繼いたく感じて、あまた度ずじてうめきて返し、

『すべらぎの跡もつぎつぎかくれなくあらたに見ゆるふるかゞみかも。

今やうのおふひ八花がたの鏡、蒔繪螺鈿の箱に入れたるにむかひたる心ち去給ふや。いでやそれは、さきらめけど曇りやすきところあるや。いかにいにしへの古代の鏡はかね白くて人手ふれねどかくぞおかき』など、去たり顔に笑ふかほつき繪に書かまほしく見ゆ。あやしながら、さすがなるけつきて、をかしく誠に珍らかになむ。世繼『よしなしごとよりはまめやかなる事を申し出でむ。よりよりたれもたれも聞しめせ。今日の講師の說法は菩提のためとおぼし、又翁らが說く事は日本紀を聞くとおぼすばかりぞかし』といへば、僧俗『げに說經說法多くうけたまはれど、かくめづらしき事のたまふ人は更におはせぬなり』とて年老いたる尼

法師ども額に手をあて〳〵信をなしつ〳〵聞きゐたり。「世繼はいとおそろしき翁に侍り。眞實の心おはせむ人はなどかはづかしとおぼさゞらむ。世の中を見去り、うかべたて〳〵もちて侍る翁なり。目にも耳にも聞きあつめて侍る。よろづの事の中に唯今の入道殿下のありさま、いにしへを聞き今を見侍るにも、二つもなくまた三つもなく、ならびなくはかりなくおはします。たとへは一乘法のごとし。御有樣の返す返すめでたきなり。世間の太政大臣攝政關白と申せど、はじめをはりとめでたき事はえおはしまさぬことなり。法文聖教の中にものたまふなるは、魚の子おほかれど、まことの魚となることはかたし。ありのみといふ木は花はしげゝれどこのみをむすぶことかたしとこそは說き給へれ。天下の大臣公卿の御中に、このたからの君のみこそ世にめづらかにおはすめれ。今ゆくすゑも誰の人かかばかりはおはせむ。いとあがたき御事なりや。誰も心をひとつにてきこしめせ。世にある事は何事をかは見のがし聞き殘して侍らむ。この世繼が申すことゞもはしも知り給はぬ人々多くおはすらむとなむ思ひ侍る」といふめれば、「すべてすべて申すべきならず」とてきゝあへり。「世はじまりて後、大臣皆おはしけり。されど左大臣右大臣内大臣太政大臣と申す位、天下になりあつまり給へるがかずへてみなおぼえ侍り。世はじまりて後今にいたるまで、左大臣三十人、右大臣五十七人、内大臣十二人なり。太政大臣は古の御門の代にはたやすくおかせ給はざりけり。或ひは御門の御おほぢ、或ひは御門の御をぢぞなり給ふめる。又ゑかの如く帝の御おほぢをぢなどにて御後見し給ふ大臣納言かずおほくおはす。うせ給ひて後、贈太政大臣などにあり

給へるたぐひあまたおはすめり。さやうのたぐひ七人或本十人ばかりやおはすらむ。わざとの太政大臣はなりがたく、すなくぞおはする。神武天皇より三十七代に當り給へる孝徳天皇と申したる御門の御代より、幷に八省百官左右大臣内大臣なりはじめ給へらむ。左大臣には安倍の倉橋麻呂、右大臣には蘇我の山田の石川麻呂、これは元明天皇の御おほぢなり。石川麻呂大臣、孝徳天皇位に即き給ひて、元年乙巳大臣になり、五年つちのとのとり春宮のために殺され給へりとこそは。これはおまりあがりたる事なり。内大臣には大中臣の鎌子の連なり。かの時年號あらざれば月日申しにくし。又三十九代にあたり給へる御門天智天皇こそは始めて太政大臣をばなし給へりけれ。それはやがてわが第二の王子におはしける大友王子なり。正月に太政大臣になり給へり。天智天皇十年二月三日うせ給ひて後、大友の王子われ位に即かむとてしたまひしに、六月廿六日この王子を殺して、おほみの王子位に即き給ひて天武天皇と申し給ひき。世をしらせ給ふこと十五年。神武天皇より四十一代に當らせ給ふ持統天皇、又太政大臣にたけちの王子をなし給へり。天武天皇の王子なり。この二人の太政大臣はやがてみかどになり給へり。たけち王子、大臣ながらうせ給ひにけり。その後、太政大臣いとひさしく絶え給へり。但、職員令には太政大臣にはおぼろけの人はなすべからず。もしそれなくばたゞにおかるべしとこそありければ、おぼろけの位にはあらぬにや。四十二代に當り給ふ文武天皇の御時に年號定りて大寶元年といふ。文徳天皇の末の年、齋衡四年丁丑二月十九日、御門の御おほぢなりとも右大臣従一位藤原良房のおとゞ太政大臣になり給ふ。御年五十

四。このおとゞこそは始めて攝政も玄給ひつれば、やがてこの殿よりして今の閑院大臣まで太政大臣十一人續き給へり。たゞしこれより以前、大友皇子高市皇子くはへ、すべては十三人の太政大臣なり。太政大臣になり給ひぬる人はうせ給ひて後、必ずいみなと申すもののありけり。しかりといへど、大友皇子やがて御門にたち給へり。（御門ながらうせ給ひぬればいみななし。）高市皇子の御いみな覺束なし。又太政大臣といへど出家しつるはいみななし。さればこの十一人續かせ給ひたる二所は出家玄給ひつれば諱おはせず。この十一人の太政大臣たちの御次第はじめをはり申し侍らむと思ふなり。流を汲みて源を尋ねてこそはよく侍るべきを、大織冠より始め奉りて申すべけれど、其は餘りあがりての世の事なり。この聞かせ給はむ人々もあなづりどには侍れど、何ともおぼされざらむものから、こと多くて講師坐しなば、ことさめ侍りてくちをし。されば唯帝王の御事も文徳の御時より申して侍れば、冬嗣のおとゞより申すぞ。その御門の御おぢ冬嗣のおとゞと申すは鎌足よりは第六に當り給ふ。世の人はふぢさしとこそ申すめれ。その冬嗣の大臣より申し侍らむ。その中に思ふに唯今の入道殿勝れさせ給へり。

大鏡巻之二

臣家

冬嗣大臣（五條后のていなり）

良房大臣

良相大臣　長良中納言　二條后のゝてなり

昭宣公　基經　時平大臣　基經太郎

左大臣冬嗣

このおとゞは内麻呂のおとゞの三郎。公卿にて十六年、左の大臣の位にて六年、田邑の御おほぢにおはします。かるがゆゑに、嘉祥三年庚午七月七日、贈太政大臣になり給へり。閑院大臣と申す。このおとゞは大かたをのこ子十一人おはしたるなり。されどくだくだしきをんな子たちのことはくはしくしりはべらず。たゞし、田むらの御かどの御はゝさゝき、贈太政大臣なか良のおとゞ、太政大臣よしふさのおとゞ、右大臣よしすけのおとゞはひとつ御はらなり。

太政大臣良房

このおとゞは左大臣冬嗣の次郎なり。天安元年丁丑二月十九日太政大臣になり給ふ。同年四月十九日従一位。御年五十四。水の尾の御門の御孫におはしませば、天安二年八月廿七日に位に即かせ給ふ。同年戊寅十一月七日摂政の詔あり。年官年爵給はり給ふ。貞觀八年丙戌關白にうつりたまふ。御年六十三。うせ給ひての御いみな忠仁公となづけ奉る。又白川の大臣、染殿の大臣と申しつたへたり。たゞしこのおとゞは文徳天皇の御をぢ太皇太后宮明子の御父、清和天皇の御おほぢにて太政大臣准三宮位にのぼらせたまひ、年官年爵の宣旨くだり、摂政關白などゝたまひて十五年こそはおはせしか。大かた公卿にて三十年、大臣の位にて廿

五年ぞおはせし。この殿ぞ藤氏のはじめて太政大臣摂政ゑたまふ。めでたき御ありさまなり。和歌もあそばしけるにこそ。古今にも数多侍るめる。前のおほいまうちぎみとはこの御事なり。おほかる中にもいかに御こゝろゆきめでたくおぼえてあそばしけむとおしはからるゝ。御むすめ染殿の后のおまへに櫻の花のかめにさゝれたるを御らんじて、かくよませたまへるとぞ。

「年ふればよはひは老いぬゑかはあれど花をし見ればもの思もなし」。

后を花にたとへ申させ給へるにこそ。かくれ給ひて白川にをさめたてまつる日、素性の君のよみたまへりしは、

「ちのなみだおちてぞたぎつ白川は君が代までのなにこそありけれ」。

皆人ゑろしめしたらめど、物を申しはやりぬればさぞ侍る。かくいみにきさいはひ人の、子のおはしまさぬこそ口惜しけれ。御このかみの長良の中納言殊の外に越えられ給ひけむ折、いかばかりからう覺されけむ。又よじんもことの外に思ひ申しけめど、その御末こそ今に榮えおはしますめれば、行く末はことの外にまさり給へりけるものを。

右大臣良相

このおとゞは御母白川の大臣におなじ。冬嗣大臣の五郎。大臣の位にて十一年、贈正一位西三條大臣と申す。淨藏定額の御祈の師にておはす。千手堂にて驗徳かうぶり給へる人なり。この大臣の御女御子の事能くゑらず。ひとりぞ水の尾の御時の女御。をのこ子は大納言常行

卿とぞきこえし。御子二人おはせしも五位にて典藥助主殿頭などいひて、いと淺くてやみ給ひにき。かくばかり末榮え給ひける中納言殿をやへやへの御おとゝにて越え奉り給へりける、御おやまりにやとこそ覺え侍れ。

贈太政大臣權中納言從二位左兵衛督長良

この中納言は冬嗣のおとゞの太郎、母は白川大臣西三條大臣に同じ。公卿にて十三年、陽成院の御時に御おほぢにおはするが故に、元慶元年丁酉正月に贈左大臣正一位、又贈太政大臣枇把大臣と申す。このおとゞ御子六人おはせし。その中に基經のおとゞすぐれ給へり。

太政大臣基經

このおとゞは長良中納言の三郎におはす。この基經のおとゞの御むすめ、醍醐の御時の后、朱雀院天皇幷に村上二代の御母后におはします。このおとのゝ御母、贈太政大臣總繼の女、贈正一位大夫人乙春なり。陽成院位に即かせ給ひて攝政の宣旨をかうぶりたまふ。御年四十一。寛平の御時、仁和三年丁未十一月廿一日關白にならせ給ふ。御年五十六にて寛平三年正月十三日うせ給ひにき。御いみな昭宣公と申す。公卿にて廿七年。大臣の位にて二十年。世をしらせ給ふ事十餘年かとぞおぼえ侍る。世の人堀川の大臣と申す。小松の御門の御母、この殿の御母のはらからにおはします。さてちゝより小松の御門を親しく見奉らせ給ひて、事にふれてきやうざくにおはしますを、おはれ君かなと見奉らせ給ひけるが、良房のおとゞの大饗にや、むかしはみこたち必ずつかせ給ふことにて、渡らせ給へるに、雜足は必ず大饗にも

る物にてありけるを、いかゞしけむ、尊者の御前にとり落してけり。陪膳する人、みこの御前のをとりて惑ひて尊者の御前にすうるを、いかゞおぼしめしけむ、お前にともしたる御殿油をやをらかいけたせ給ひける。このおとゞはそのをりは下﨟にて、座の末にて見奉らせ給ふに、いみじくもせさせ給ふものかなといよいよ見めで奉らせ給ひて、陽成院おりさせ給ふべき定めにさぶらはせ給ふ。とほるの大臣やんごとなくて位につかせ給はむといふ御心深くて、「近き王胤をたづねば、とほるらも侍るは」といひ出で給へるを、この大臣「王胤なれどしやうをたまはりてたゞ人にてつかへて位につきたるためしやある」と申し出でたまへれば、さもある事なれば、この大臣のさだめによりて、小松の御門は位に即かせ給へるなり。御門の御末も遥につたはり、大臣の末もつたはりつゝ後見申し給ふ。さるべくは契りおかせ給へる御中にやとぞ思ひ侍る。おとゞうせ給ひて深草の山にをさめ奉る夜、勝延僧都のよみたまへる、

「空蟬はからを見つゝもなぐさめつふかくさの山けぶりだにたて」。

（かの歌、へんじやうが悲しさに、御門の御さうそうによみてうせたり。）又かんつけの峰雄といひし人のよみたる、

「深草の野べのさくらし心あらばことしばかりはすみぞめにさけ」

なども、古今に侍ることゝもぞかしな。御家は堀川院と閑院とにすませたまひしを、堀川院をばさるべきことのをり、はればれしきれうにせさせ給ひ、閑院をば御物忌や又疎き人などは參らぬ所にて、さるべくむつましくおぼす人ばかりを御供にさぶらはせて渡らせ給ふを、

りもおはしましける。堀川院は地ぎやうのいといみじきなり。大饗のをり、殿ばらの御車のたちやうなどよ、尊者の御車は川よりひんがしにたて、牛はみはしのひらきばしらにひきつなぎ、こと上達部の車をば川より西にたてたるがめでたきをば、尊者の御車のべちにことに見ゆるとは、こと所は侍らぬものをやと見給ふるに、この賀やう院殿にこそおされにて侍るめれ。方四町にて四面おほぢなる京中の家は冷泉院のみとこそ思ひ候ひつれ。世の末になるまゝにまさる事のみこそ出でまうでくめれ。この昭宣公のおとゞは陽成天皇の御をぢにてしまし、世覺えやんごとなしと申せばおろかなりや。御をのこ子四人おはしき。太郎左大臣時平、次郎左大臣仲平、四郎太政大臣忠平」といふに、繁樹がけしきことになりて、まづうしろの人の顔うち見わたして、「それぞこのいはゆる翁がたからの君、貞信公におはします」とて扇うちつかふかほもちことにをかし。「三郎に當らせ給ひしは從三位して宮内卿兼平の君と申してうせ給ひにき。さるは御母いとあてにおはす。みつよしの式部卿のみこの御むすめにて、かへすがへすもやんごとなくおはすべかりしかど、この三人の大臣たちを世の人三平と申しき。

左大臣時平

このおとゞは基經のおとゞの御太郎なり。御母四品彈正尹人康親王の御むすめ。醍醐のみかどの御とき、この大臣左大臣の位にて年いと若くておはします。菅原のおとゞ右大臣の位に

て坐します。そのをり御門おはん年いと若く坐します。左右大臣に世の政行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、そのをり左大臣御年廿八九ばかり、右大臣御年五十七八にやおはしけむ。共に世の政をせしめ給ひし間、右大臣ざえも世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきてもことの外にかしこくおはしまし、左大臣は御年もわかくざえも殊の外に劣り給へるにより、右大臣御おぼえことの外におはしましたるに、左大臣安からずおぼしたる程に、さるべきにやおはしけむ、右大臣の御ためによからぬ事出できて昌泰四年正月廿九日、太宰權帥になし奉りて流されたまふ。このおとゝの子どもあまたおはせしに、女君だちは皆ほどにつけて位どもおはせしを、これも皆かたがたに流され給ひてかなしきに、をさなくおはしける男君女君だち慕ひ泣きておはしければ、ちひさきはあへなむとおぼやけもゆるさしめ給ひしかば共にゐてくだり給ひしぞかし。みかどの御おきて極めてあやにくにおはしませば、この御子どもを同じ方にだに遣さゞりけり。かたがたにいと悲しくおぼして御まへの梅の花を御らんじて、

「こちふかばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな」。

又ていしの御門に聞えさせたまふ。

「流れゆくわれはみくづとなりはてぬ君しがらみとなりてとゞめよ」。

なき事によりかく罪せられ給ふをかしこくおぼし歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。その程極めて悲しき事おほかり。日ごろへて都遠くなるまゝに、あはれに心ぼそく

おぼされて、

「君がすむ宿の梢をいのゆくゆくとゐかくるゝまでも顧みしかあはや」。

又播磨の國におはしつきて、明石のうまやといふ所に御やどりせしめ給ひて、うまやの長のいみじう思へる氣色を御覽じて作らしめ給へる詩いとかなし。

「驛長無驚時變改　一榮一落是春秋」。

かくて筑紫におはしまし着きて、哀に心ぼそくおぼさるゝ夕、をちかたに所々けぶりたつを御覽じて、

「夕されば野にも山にもたつけぶりなげきよりこそもえさりけれ」。

又、雲の浮きてたゞよふを御覽じても、

「山わかれとびゆく雲のかへりくるかげ見る時は猶頼まれぬる、」。

さりともと世をおぼしめされけるなるべし。月のおかき夜、

「海ならずたゞよふ水のそこまでもきよきこゝろは月ぞてらさむ」。

これいと畏くあそばしたりかし。げに月日よりこそは照し給はめとこそはあめれ。誠におどろおどろしきことはさるものにて、かくやうのうたや詩などをさへ、いとなだらかにゆゑゆゑしういひ續け給ふ」と見聞く人めもあやにあさましく哀にもまもりゐたり。物のゆゑ知りたる人なども、むげに近く居よりてはかめせず見聞くけしきどもを見て、いよいよはへて物を繰り出すやうにいひ續くるほどぞ誠にけうなるや。繁樹、涙をのごひつゝけうじゐたり。

「筑紫におはします所の御門もかためておはします。大貳の居所ははるかなれども、樓の上のかはらなどの心にもあらず御覧じやられけるに、又いと近く観音寺といふ寺のありければ、鐘の聲をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。

「都府樓纔看瓦色　観音寺只聽鐘聲」。

これは文集白居易、遺愛寺鐘欹レ枕聽、香爐峰雪撥レ簾看といふ詩にも、まさり劣ざまに作らしめ給へりとこそむかしの博士どもの申しけれ。又かの筑紫にて、九月十日菊の花を御覧じけるついでに、まだ京におはしましゝ時、九月の今宵内裏にて菊の宴ありしに、このおとゞ作らしめ給へりける詩を御門かしこく感じたまひて御衣たまはり元如給へりしを、筑紫にもてくだらしめ給へりければ御覧ずるに、いとゞその折おぼしめしいでゝ、作らせ給ひける。

秋思詩篇獨斷腸　恩賜御衣今在レ此
去年今夜侍清涼　捧持毎日拜餘香」。

この詩いとかしこく人々感じ申されき。この事ども唯ちりぢりなるにもあらず、かの筑紫にて作り集めさせ給へりけるを、おのづから世に散りきこえしなり。世繼が若う侍りし時、々の歌書きおかせ給へりけるを書きあつめ一巻とせしめ給ひて後集となづけられたり。又折この事のせめて哀に悲しく侍りしかば、大學の衆どものなまふがうにはいますかりしを問ひ尋ねかたらひとりて、さるべき袋わりごやうの物調じて、うち具してまかりつゝならひとりて侍りしかど、老のけの甚しきことは皆こそわすれ侍りにけれ。これはたゞすこぶる覺

え侍るなり」といへば、聞く人々「げにげにいみじきすきものにものし給ひけるかな。今の人はさる心ありなむや」と感じおへり。「又雨のふる日、うちながめ給ひて

「あめのしたかわける程のなければや着てし濡衣ひるよしもなき」。

やがてかしこにてうせ給へる、夜の内に、この北野にそこらの松をおはさしめ給ひて渡り住み給ふをこそは唯今の北野宮と申して、おら人神におはしますめれ。おはやけも行幸せしめ給ふ。いとかしこく崇め奉り給ふめり。筑紫のおはしまし所は安楽寺といひて、おはやけより別當所司などなさせ給ひていとやんごとなし。内裏焼けて度々造らしめ給ひしも、圓融院の御時のことなり。たくみども、裏板どもをいとうるはしくかなかきて罷り出でつゝ、またのあしたに参りて見るに、昨日の裏板に物のすゝけて見ゆる所のありければ、はしにのぼりて見るに、夜の内に蟲のはめるなりけり。そのもじは、「つくるともまたもやけなむすがはらやむねのいたまのあらむかぎりは」とこそありけれ。それもこの北野の顯はし給へるとこそは申すめりしか。かくてこのおとゞは筑紫におはして、延喜三年みづのとのゐ二月廿五日にうせ給ひしぞかし。御年五十九。さて後七年ばかりありて左大臣時平のおとゞ、延喜九年己巳四月四日うせ給ふ。去年ばかりやおはしけむ。御年卅九。大臣の位にて十一年ぞおはしける。本院の大臣と申す。この時平のおとゞのむすめの女御もうせ給ひぬ。御孫の東宮も、一男八條の大將保忠卿もうせ給ひにきかし。この大將八條にすみ給へば、うちに参り給ふほどいとはるかなるにいかゞおぼされけむ、冬はもちひのいと大きなるをぞひとつ、ちひさきをばふたつ焼きてや

き石のやうに御身にあて〻持ちたまへりけるが、ぬるくなれば小きをばひとつづゝ、大きなるをば中よりわりて御車ぞひに投げとらせ給ひける、あまりなる御用意なりかし。その世にも耳とゞまりて人の思ひければこそかくいひ傳へ侍るらめ。この殿ぞかし、病つきたまひてさまざまのいのりし給ひしに、薬師經の讀經枕上にてせさせ給ふに、いはゆる宮毗羅大將とうちあげたるを、われをくびると讀むなりけりとおぼしける應病に、やがて絶えいり給へり。經のもんといふ中にもこはき物のけにとりこめられ給へる人に、げに怪しくうちあげ侍るかし。さるべきとはいひながら、物はをりふしことに侍る事なり。その弟の敦忠中納言もうせ給ひにき。世にめでたき和歌の上手、管絃の道にも優れ給へりき。かくれ給ひて後、御遊びなどあるをりに博雅三位のさはる事ありて參られぬ時は今日の御遊はとゞまりぬと度々召されてまゐるを見て、ふるき人々は「世の末こそあはれなれ。敦忠中納言のいませし時はかゝる道にこの三位の、おほやけを始め奉りて、世の大事に思はるべきものにとこそ思はざりしか」とぞのたまひける。先坊に御息所參り給ふと、本院のおとゞの御むすめ具して三四人なり。本院のはうせ給ひにき。中將の御息所ときこえし、後はしげあきらの式部卿のみこの北の方にて、齋宮の女御の御母にてそもうせ給ひにき。いとやさしくおはせし先坊を戀ひかなしみたまふ。大輔なむ夢に見奉るとき〻ておくり給へる、

御返事、大輔、

「時のまもなぐさめつらむ君はさぞゆめにだに見ぬわれぞかなしき」。

「こひしさは慰むべくもあらざりき夢のうちにもゆめと見しかば」。

今一人の御息所は玄上宰相の女にや。其後朝の使に敦忠中納言、少將にてし給ひける。宮うせ給ひて後、この中納言にはあひ給へるを、限なく思ひながら、いかゞ見給ひけむ、文範の民部卿、播磨の守にて殿のけひしにて侍らはるゝを「我は命みじかきぞうなり。かならず死なむず。その後君はこの文範にぞあひ給はむずる」とのたまひけるを「あるまじきこと」といらへ給ひければ、「天がけりても見む。世にたがへ給はじ」などのたまひけるが、誠にさていますぞかし。唯この君たちの御中には大納言源昇の卿御女の腹の顯忠のおとゞのみぞ右大臣までなり給へる。その位にて六年おはせしかど、少しおぼす所やありけむ、出でゝありき給ふにも家のうちにても大臣の作法をふるまひ給はず。御ありきのをりはおぼろげにて御さきつがひ給はず、まれまれもほのかにぞまゐりし。ごぜんつがひたまはず、僅に數すくなにてぞ侍ひし。御車ぞひ四人つがはせ給はざりき。又はんざふだらひにて御手すまさず、寢殿のひんがしのまに棚をして、小桶にちひさきひさげ具しておかれたれば、仕丁のつとめてごとに湯もて參りて入れければ入してもかけさせ給はず、我出でさせ給ひて御手づからぞすましける。御めしものはうるはしく、できなどにもまゐり、すべて只御かはらけにて臺などもなく、折敷にとりすゑつゝぞまゐらせける。儉約玄給ひしもさるべきことの折の御座と御ばんどころとにぞ大臣とは見えたまひし。かくもてなし給ひしにや、このおとゞのみぞ御ぞうの中に六十餘までおはせし。四分一の家にて大納玄給へる人なり。富の小路の大臣と申

す。これより外の君だち皆三十よ四十にすぎ給はず。その故はたゞ事にはあらず、この北野の御歎になむあるべき。顯忠大臣の御子、重輔の右衞門佐とて坐せしが御子なり。今の三井寺の別當心譽僧都、山階寺の權別當快公僧都などこの君達こそは物し給ふめれ。敦忠の中納言をのこゞあまたおはしける中に兵衞佐なにがしの君とかや申しゝ、その君出家して往生ぢ給ひにきとか。その僧の御子なり、いはくらの文慶僧都は。敦忠公の御むすめは枇杷の大納言の北の方にておはしきかし。あさましき悪事を申し行ひ給へりし罪により、このおとゞの御末はおはせぬなり。さるはやまとだましひなどはいみじくおはしましたるものを、延喜の世のなかの作法ぢたゝめさせ給ひしかど、くわさをえ去づめさせ給はざりしに、この殿制を破りたる御さうぞくのことの外にめでたきをして、うちに參り給ひて殿上にさぶらひ給ふを、御門こじとみより御覽じて、御氣色いとあしくならせ給ひて、職事を召して、「世間の過差の制きびしきところに、左のおとゞの一の人といひながら美麗殊の外にて參れる、びんなきことなり。速にまかり出づべきよしおほせよ」とおほせられければ、うけたまはるもいかなる事にかとおそれおぼえけれど、參りてわゝくわなゝくぢかじかの事と申しければ、いみじくおどろきて、かしこまりうけたまはりて御隨身のみさまをるも制し給ひて急ぎまかり出で給へば、御前どもゝあやしと思ひてなむ。さて本院の御門一月ほどさゝせて御簾のとにも出で給はず、人などの參るとも勘當の重ければとて逢はせ給はざりけり。さりしにこそ世の中に過差はたひらぎたりしか。內々にうけたまはりしかば、さてばかりぞ去づまら

むとて御門と御心合せさ せ給へりけるとぞ。この左大臣物のをかしさぞえねんせさせ給はざりける。笑ひたゝせ給ひぬれば、すこぶる事も亂れけるが、北野に世をまつりごたせ給ふ間、非道なる事仰せられければ、さすがにやんごとなくてせちに玄給ふことをばいかゞはとおぼして、「このおとゞの玄給ふことなればふびんなりと見れど、いかゞすべからむ」と歎き給ひけるを、なにがしの吏が「事にも侍らず。おのれがかまへにてかの御事をとゞめ侍らむ」と申しければ、「いとあるまじきこと、いかにしてかはなむ」とのたまはさせけるを、「只御覽せよ」とて座に着きて、事さびしく定めのゝしり給ふに、この吏、ふんばさみに文はさみて、いらなくふるまひて、このおとゞに奉るとて、いと高やかにならして侍りけるに、おとゞ文もえとらずしてわなゝきてやがて笑ひて、「今日はすぢなし。右のおとゞにまかせ申す」とだにいひやりたまはざりければ、それにこそ菅原のおとゞの心のまゝにまつりごち給ひけれ。又北野の神にならせ給ひていと恐ろしく神なりひらめき清涼殿に落ちかゝりぬと見えけるに、本院のおとゞ太刀を抜きさげて、「生きても我が次にこそものしたまひしか。今日神となり給ふとも、この世には我に所おき給ふべし。いかでかさらではあるべきぞ」と睨みやりてのたまひけるに、一度はゑづまらせ給へりけるとぞ世の人申し侍りし。されどそれはかのおとゞのいみじくおはするにはあらず、王威のかぎりなくおはしますによりて、理非を玄めさせ給へるなり。

大鏡巻之三

枇杷左大臣 仲平 基經次郎　　貞信公 忠平 基經四郎
清慎公 實頼　　廉義公 頼忠
小一條左大臣 師尹　　九條殿 師輔
左大臣仲平

このおとゞは、これ基經のおとゞの次郎御母は本院の大臣におなじ。大臣の位にて十三年ぞおはせし。枇杷左大臣と申す。御子もたせたまはず。伊勢が集に、

「花ずゝきわれこそ去たに思ひしかほに出でゝ人にむすばれにけり」

などよみ給へるはこの人におはす。貞信公よりは御兄に當らせ給へど、二十年まで大臣になり後れ給へりし。遂になり給へれば、おほきおほい殿の御よろこびの歌、

「おそくとくつひに咲きぬる梅の花たがうゑおきし種にかあるらむ」。

やがてその花をかざして御對面の日喜び給へる。庇の大廂せさせ給ひけるにも横ざまにすゑさせ給ひけるこそ、年ごろ少しかたはらいたく思されける御心とけて、いかにかたみに心ゆかせ給へりけむと御あはひめでたけれ。この殿の御心ぞ誠に美はしく坐しましける。皆人きゝ去ろしめしたる事なり。申さじ。このおとゞに伊勢の御息所の忘られてよむ歌なり、

「人忘れずやみなましかばわびつゝもなき名ぞとだにいはましものを」。

太政大臣忠平　貞信公

このおとゞは是基経のおとゞの四郎君、御母本院の大臣、枇杷の大臣におなじ。延長八年十一月廿一日攝政、天慶四年辛亜十一月、關白の宣旨うかぶらせ給ふ。公卿にて四十二年、大臣のくらゐにて三十六年、世をおさらせたまふこと二十年。天暦三年八月十四日うせさせたまふ。御年七十。のちのいみな貞信公となづけ奉る。小一條の太政大臣と申す。朱雀院並に村上の御をぢにおはします。この御子五人。そのをりは我が御位太政大臣にて、御太郎左大臣にて、實頼のおとゞこれ小野の宮殿と申す。次郎右大臣師輔のおとゞ、これを九條殿と聞えさせき。第四郎師氏大納言と聞えき。五郎に又左大臣師尹のおとゞ、小一條殿と申しきかし。この四人の君たち、左右の大臣大納言にて、さしつゞきおはしましゝ、いみじかりし御榮華ぞかし。をんな子一所は先坊の御息所にておはしましき。常にこの三人の大臣たちの參らせ給ふれうに小一條の南かんでの小路には石だゝみをぞせられたりしがまだ侍るぞかし。むながたの明神おはしませば、洞院こじろのつじよりおりさせ給ひしに、雨などの降る日の料とぞうけたまはりし。大方その一町は人まかりありかざりき。今はあやしきものも馬車に乗りつゝみしみしとありき侍るはとよ。むかしのなごりにいとかたじけなくこそ見給ふれ。翁どもは今もおぼろげにては通り侍らず。今日も參るらむが腰のいたく侍りつれば、術なくてまかり通りつれど猶石だゝみをばよきてぞまかりつる。南のつらのいと悪しき泥をば蹈みこみて候ひつれば、きたなき

ものもかくなりて侍るなり」とて引き出でゝ見す。「先祖の御物は何も惜しけれど、小一條のみなむように侍らぬ。人は子うみ去ぬるれうにこそ家もはしく侍るに、さやうのをりはばかへわたらむ所は何にかはせむ。又大方常にもたゆみなくおそろしと（ママ）そかの入道殿には仰せらるゝなれ。この眞信公は宗像の明神うつゝに物など申し給ひけり、「我よりは御位高くて居させ給へるなむ苦しき」、と申し給ひければ、いとふびんなる御事なるかなとて神位は申しまさせ給へるなり。かの殿いづれの御時とは覺え侍らず、思ふに延喜朱雀院の御程にこぞは侍りけめ。宣旨うけたまはらせ給ひて、おこなひて陣の座ざまにおはします道に南殿御帳の後の程通らせ給ふほどに、ものゝけはひして御太刀のいしづきを捕へたりければ、いと怪しくて捜らせ給ふに毛はむくむくとおひたる手の、爪は長く刀のはのやうなるに、鬼なりけりといとおそろしくおぼしめしけれど、臆したるさま見えじと念ぜさせ給ひて、「おほやけの勅定うけたまはりて、さだめにまゐる人とらふるは何ものぞ。ゆるさずばおしかりなむとて御太刀をひきぬきてかれが手をとらへさせ給へりければ、まどひもち放ちてこそうしとらの隅ざまへ罷りにけれ。思ふに夜のとなりけむかし。この殿ばらの御事よりもこの殿の御事申すは忝くも哀にも侍るかな」とて聲うち慓りて鼻度々うちかむめり。「いかなりけることにか、七月にて生れさせ給へるとこそ申し傳へたれ。天暦三年八月十四日にぞうせさせ給ひにける。正一位贈せさせたまふ。

太政大臣實頼　小野宮殿。安和三年五月十八日薨、七十一、贈正一位。

これ忠平のおとゞの一男におはします。小野宮のおとゞと申しき。御母寛平法皇の御むすめ。大

臣の位にて廿七年、天下執行攝政關白 玄給ひて二十年ばかりや坐しけむ。小野宮の大臣と申しき。天祿元年五月十八日うせさせ給ひにき。御年七十一と申しき。御いみな清慎公なり。和歌の道にもすぐれおはしまして、後撰にもあまた入れり。大かた何事にも有職に御心うるはしくおはします事は世の人の本にぞひかれさせ給ふ。小野宮の南おもてには御もとゞりはなちて出でさせ給ふ事なかりき。そのゆゑは「稲荷の杉のあらはに見ゆれば明神御覽ずらむに、いかでかなめげにては出でむ」との給はせていみじく謹ませ給ふに、自らおぼし忘れぬる折は御袖をかづかせ給ひてぞ驚き騒がせ給へる。このおとゞの御女子、女御にてうせ給ひにき。村上の御時にや、確に覺え侍らず。男君は時平のおとゞの娘の御腹に敦敏の少將とて坐せし、父おとゞの御先に隱れ給ひにきかし。さていみじう思し歎くに（これはみちのくにの守のめになりて御めのとの若君のがりとて御馬をまゐらせたるとぞ。）あづまの方よりうせ給へりとも玄らで馬を奉りたりければおとゞ、

「まだ玄らぬ人もわりけりあづまぢに我もゆきてぞすむべかりける」。

いと悲しき事なりな」とて目おしのごふに「おとゞの御わらはは名をばうしかひと申しき。さればその御ぞうは、うしかひをばうしつきとのたまふなり。敦敏の少將の男子佐理大貳、世の手かきの上手、任はてゝ上られけるに伊豫の國のまへなるとまりにて、日いみじう荒れ、海のおもておしくて風おそろしう吹きなどするを、少しなほりて出でむとし給へば、又同じやうにのみなりぬ。かくのみしつゝ日ごろの過ぐれば、いと怪しくおぼして、ものとひ給へば、神の御祟とのみいふにさるべき事もなし。いかなる事にかと恐れ給ひける。夢に見え給

ひけるやう、いみじうけだかきさましたる男のおはして、「この日の荒れて日ごろ經給ふは、おのがしはべる事なり。それは萬の社に額のかゝりたるにおのがもとにしもなきが悪しければかけむと思ふに、なべての手して書かせむがいとおろく侍れば、われに書かせ奉らむと思ふによりこの折ならではいつかはとてとゞめ奉りたるなり」とのたまふに、「誰とか申す」と問ひ申し給へば、「この浦の三島に侍る翁なり」とのたまふに、夢の中にもいみじうかしこまり申すとおぼすに、おどろき給ひては又さらにもいはず。さて伊豫へわたり給ふに多くの日荒れつる日ともなく、うらうらとなりて、そなたざまにおひ風吹きて飛ぶが如くまうで着き給ひぬ。湯たびたびあみ、いみじくげさいしてきよまはりて日の裝束して、やがて神の御まへにて書き給ふ。社のつかさどもを召し出でゝうたせて、よく法の如くして歸り給ふに、つゆ恐るゝことなくて、すゑずゑの船に至るまでたひらかにのぼり給ひにき。我がするとを人間の人のほめ崇むるだに興ある事にてこそあれ。まして神の御心にさまでほしくおぼしけむこそいかに御心おごりし給ひけむ。又大かたこれにぞ日本第一の御手のおぼえはこの後ぞとり給へりしか（仰）元。六波羅密寺の額もこの大貳のかき給へる。さればかの三島の神の額とこの寺のとは同じ御手に侍り。御心ばへぞ懈怠はすこし如泥人とも聞えつべくおはせし。故中關白殿東三條造らせ給ひて御障子に歌繪ども書かせ給ひし色紙形をこの大貳に書けとのたまはするを、いたく人さわがしからぬ程に參りて書かれなばよかりぬべかりけるに、關白殿わたらせ給ひて、上達部殿上人などさるべき人々あまた參りつどひて後に、日たかく待た

れ奉りて參り給へりければ、少しこつなくおぼしめさるれど、さりとてあるべき事ならねば書きて罷りいで給ふに、女のさうぞくかづけさせ給ふを、さらでもありぬべくおぼさるれど捨つべき事ならねば、そこらの人の中をわけ出でられけるなむ猶懈怠の失錯なりける。のどかなるけさ疾くもうち參りて書かれたらましかば、かゝらましやはとぞ見る人もおもひ、自らもおぼしたりける。むげのその道のなべての下﨟などにこそかやうなる事はせさせ給はめと殿をもそしり申す人々ありけり。その大貳の御むすめ、いとこの懐平の左衛門督の北の方にておはせしは經任君の母上、大貳に劣らず女手かきにておはすめる。大貳の御妹は法住寺つのみのおとゞの北の方にておはす。その御腹の女君は花山院の御時の弘徽殿の女御、又入道中納言の北の方にて、又をのこ子は今の中宮大夫貞信卿とぞ申すめる。小野宮のおとゞの三郎是は二郎とぞ。大よしとも。敦敏少將のおなじ腹の君、右門衛督までなり給へりし。たゞとしとぞ聞えしかし。その御男君、播磨守これふんのむすめの腹に三ところおはせし。太郎高遠の君、大貳にてうせ給ひにき。二郎かねひらとて中納言右衛門督までなり給へりし、その御をのこ子なり。今の右兵衛督經通の君、またおい大納言ときこゆ。經通、資平の母は源中納言保光の女子。侍從宰相資平の君、いまの皇太后宮權大夫にておはすめり。そのたゞとしの君の御をのこ子、御おほぢ小野の宮のおとゞ御子にし給ひて實資とつけ奉り給ひていみじうかなしうし給ひき。此のおとゞの御名の文字なり、さねもじは二といふ程もあまりざえがりたりや。二からは名はたいかく丸とぞつけたりける。その君こそ今の小野宮の右大臣と申して、いとやんごとなくておはすめり。賢人右大臣の事なり。九十三にてうせ給ふ。こ

のおとゞの御子のなきなげきをし給ひて、我が御をひの大納言のことも。今の殿の中將あきつねのおほち。資平の宰相を養ひ給ふめり。顯實宰相のおほち又末に宮づかへ人をおほしけるはらにいでおはしたるをのこゞは、法師にて内供良圓の君とておはす。又さぶらひける女房を召しつかひ給ひける程に、おのづから生れ給へりける女君、かぐや姫とぞ申しける。この女は賴定の宰相のめのと子、北の方は花山院の女御、爲平の式部卿の御むすめ。院背かせたまひて、この女御、殿にさぶらひ給ひしなり。この女君千日の講行ひたまふ。資家中納言のうへのはらなり。兼賴の中納言の北の方にてうせ給ひにき。大かた子かたくおはしけるぞうにや。これも中宮の權大夫のうへもまゝ子をやしなひ給へる。小野の宮のしん殿の東面に今の中宮權大夫のうへは、かくやひめのことなり。帳ゆかたてゝいみじうかしづきすゑ奉り、いかなる人か御聟となり給はむとすらむ。かの殿いみじきこもりとく人におはします。故小野宮のそこばくの寶の庄園は皆この殿にこそはおらめ。殿づくりせられたるさまいとめでたしや。對、寢殿、渡殿は例の事なり。たつみの方に三間四面の御堂建てられて、めぐり廊は皆供僧の坊にせられたり。湯屋におほきなる鼎二つぬりすゑられて烟絶えぬる日なし。御堂には金色の佛多くおはします。供米三十石定器ことにおかれて絶ゆる事なし。世の中に御堂にまゐる道には御前の池よりあなたを遙々と野に作らしめ給ひて、時々の花もみぢをうゑさせ給へり。又船にのりて池より漕ぎてもまゐる。これよりほかに道なし。住僧はやんごとなき智者、或は持經者、眞言師などゝもになむ。これに夏冬の法服をたまひ供料をあて給ふ。我が滅罪生善の御いのり、又姫君の御息災を祈らしめ給ふ。この小野の宮

をあけくれ造らせ給ふ事、日にたくみの七八人絶ゆる時なし。世の中にて斧の音する所は東大寺とこの小野の宮とこそは侍れ。おはぢおはい殿のとりわき給ひし云るしはおはする殿なり。まことこの御をのこ子、伯耆守資頼ときこゆめり。姫君の御ひとつはらにはおらず。いづれにかありけむ。

太政大臣頼忠

このおとゞは小野宮實頼大臣の次郎なり。御母、時平大臣の御むすめ、敦敏少將同じ腹なり。大臣の位にて十九年、關白にて九年、この生は極せさせ給へる人ぞかし。三條よりは北、西洞院よりは東に住み給ひしかば三條殿と申す。このおとゞいみじき事ども云おき給へる人なり。賀茂詣に檢非違使車の左りに具する事、又馬の上の隨身さうに四人つがはしむる事もこの殿の云ひ出給へり。いにしへはものゝふしの限り一人づゝありて府さうはなくて侍りしなり。一の人おはすなど見ゆる事侍らざりけり。必ずかく侍るなりける事なりかし。おまりよろづ云たゝめ餘り給ひて、おとゞの内によひにともしたる油を、又のつとめてさぶらひにあぶらがめをもたせて女房の局までめぐりて殘りたるをかへし入れて、又今日の油に加へてともさせ給ひけり。おまりにうたてある事なりや。一條院位に即かせ給ひにしかば、よそ人にて關白はのかせ給ひにき。唯おほきおほい殿と申して四條の宮にこそはひとつに住ませ給ひしか。それにこの前の帥殿は時の一の人の御孫にてえもいはず華やぎ給ひしに、六條殿の御聲にておはせしかば常に西洞院のほりにおりき給ふを、こと人ならばと方よりもよ

きゝてもおはすべきを、大后、太政大臣のおはします前を馬にてわたりたまふ。おはさおとゞいと安からずおぼせども、いかゞはせさせ給はむ。猶いかやうにてかとゆかしくおぼして、中門の北の廊の連子よりのぞかせ給へば、いみじうはやる馬にて、御紐おしのけて雑色二三十人ばかりに、さきいと高くおはせてうち見いれつゝ馬の手綱ひかへて扇高くつかひて通り給ふを、おさましくおぼせど、なかなかなる事なればこと多くもの給はで、たゞ「なさけなげなるをのこにこそありけれ」とばかりぞ申し給ひける。非常の事なりや。さるは帥の中納言殿のうへの六條殿の姫君は母は三條殿の姫君におはすれば御孫ぞかし。されば人よりは参り仕うまつりだにこそ云給ふべかりしか。この頼忠のおとゞ一の人におはしましゝかど御なほしにて内に参り給ふ事侍らざりき。奏せさせ給ふ事ある折は、ほうこにてぞ参り給ふ。さて殿上に侍はせ給ひ、年中行事の御障子のもとにてさるべき職事、くらびとなどしてぞ奏せさせ給ひ、又うけたまはり給ひてける。又あるをりは、御門鬼の間に出でさせ給ひてめしあるをりぞ参らせ給ひし。關白左たまへど、よそ人にておはしましければにや。故中務宮よしあきらのみこの御娘の腹に御娘二人男一人おはしまして、大姫君は圓融院の御時女御にて中宮と申しき。御年二十六。天元五年壬午三月五日后に立たせ給ひき。みこうまれおはせず。四條の宮とぞ申すめりし。いみじき有心者有識にぞいはれ給ひし。功徳も御いのりも如法に行はせ給ひし。年ごとの季の御どきやうなども常の事ともおぼしめしたらず、四日がほど二十人の僧を坊のかざりめでたうて、かしづきするさせ給ふ、湯わむしときなどかぎりなく如法に供養せさ

せ給ひ、御前よりもまたとりわきさるべき物ども出させ給ふ。御みづからも清き御ぞ奉り、かぎりなくきよまはらせ給ひて、僧にたまはらするものどもは、まづ御前にとりすゑさせて拝ませ給ひてぞ後につかはしける。惠心僧都の頭陁行せられけるをりも京中にこぞりてゐみじき御ときを設けつゝまゐりしに、この宮よりはうるはしくかねのごときどもうたせ給へりしかばこそ、かくてはおまり見苦しとて僧都乞食とゞめ給ひてき。今一所の姫君は花山院の御時の女御にて、四條の宮に尼にておはしますめりっやがて后女御のひとつはらの男君、唯今按察大納言の公任と申す。小野の宮の御孫なればにや歌の道すぐれ給へり。世にはづかしう心にくきおぼえおはす。その御娘唯今の内大臣の北の方にて、年頃多く公達産みつゞけ給へる、こぞの正月にうせ給ひて、大納言よゐづを知らずおぼし歎く事かぎりなし。又男君一人ぞおはする。左大辨定頼の君、若殿上人の中に心ゐり、歌なども上手に坐すめり。母北の方いとあてにおはすかし。村上の御九宮の御むすめ、多武峯入道少將まちをさ君の御娘の腹なり。内大臣殿のうへもこの辨の君もされば御中らひいといとやんごとなし。かの大納言殿、無心の言一度ぞのたまへるや。御妹の四條の宮后にたゝせ給ひて始めてうちへ入り給ふに、西洞院のぼりにおはしませば東三條の前をわたらせ給ふに、大入道殿も故女院も胸痛く思しめしけるに、按察大納言殿は后の御せうとにて御心ちよくおぼされけるまゝに、御馬をひかへて「この女御はいつか后に立ち給ふらむ」と、うち見いれてのたまへりけるを、殿をはじめ奉りて、その御ぞう安からずとおぼしけれど、男宮おはしませばたけくぞ、よその人々

もやくなくものたまふかなと聞き給ふ。一條院位に即かせ給へば又女御后に立たせ給ひて内に入り給ふに、この大納言殿のすけに仕うまつり給ふに、出車より扇をさし出して「やゝ物申さむ」と女房のきこえければ「何事にか」とてうちより給へるに、進の内侍顔をさし出して「御妹のすばらの后はいづくにかおはする」ときこえかけたりけるに、先年の事を思ひおかれたるなりけり。みづからだにいかにと覺えつる事なれば道理あり。「なくなりぬる身にこそとこそ覺えしか」とのたまひけれ。されど人がらよろづによくなり給ひぬれば、事にふれて捨てられ給はず、かの内侍のとがなるにてやみにき。一とせ入道殿大井川の逍遥せさせ給ひしに、作文の船、管弦の船、和歌の船と分たせ給ひて、その道にたへなる人々をのせさせ給ひしに、この大納言殿の參り給へるを、入道殿「かの大納言いづれの船にか乘らるべき」とのたまはすれば「和歌の船にのり侍らむ」とのたまひてよみたまへるぞかし。

「をぐら山あらしの風のさむければもみぢのにしききぬ人ぞなき」。

申しうけ給へるかひありてあそばしたりな。御みづからものたまふなるは「作文の船にぞ乘るべかりける。さてかばかりの詩を作りたらましかば名のあがらむこともまさりなまし。口をしかりけるわざかな。さても殿いづれにとか思ふとのたまはせしなむ、我ながら心おごりせられし」とのたまふなる。ひと事のすぐるゝだにあるに、ましてかくいづれの道もぬけ出でたまひけむはいにしへも侍らぬことなり。三條のおとゞ永祚元年六月廿六日にうせ給ひて贈正一位になりたまふ。廉義公とぞ申しける。このおとゞの御末かくなり。

左大臣師尹

このおとゞは忠平の大臣の五郎、小一條おとゞと聞えさすめり。御母九條殿におなじ。大臣の位にて三年。康保四年十二月に左大臣にうつり給ふ事、西宮の筑紫へ下り給ふ御かはりなり。安和二年五月右大臣になり給ひ、大將かけ給ふ。十月十四日うせさせ給ふ。御年五十。その御事のみだれば、この小一條のおとゞのいひいで給へるとぞ世の人聞えし。さて年もすぐさずうせ給ふなどこそ申すめりしか。それもまことにや。御むすめ村上の御時の宣耀殿の女御、かたちをかしげに美くしうおはしけり。内へ參り給ふとて御車にたてまつり給ひければ、我が御身は乘り給ひけれど、御ぐしのすそはもやの柱のもとにぞおはしける。一すぢをみちのくに紙におきたるに、いかにもさま見え給はずとぞ申し傳へためる。御目のえりの少しさがり給へるがいとゞらうたくおはするを、御門いとかしこく時めかさせ給ひてかく仰せられける。

「生きての世ぞにてののちの後の世もはねをかはせる鳥となりなむ」と

御かへし、女御、

「秋になることの葉だにもかはらずばわれもかはせる枝となりなむ」と

おなうかゞさせ給へりと聞かせ給ひて、御門試に本をかくして女御には見せ奉りたまはで、やまとうたはとあるをはじめにて、末の句のことばを仰せられつゝ問はせ給ひけるに、いひたがへ給ふことばにても歌にてもなかりけり。かゝる事など父おとゞは聞き給ひて、御裝束し御手あらひなどしてところどころに讀經などし念じ入りてぞおはしける。御門御さうの

琴をめでたくあそばしけるも、御心に入れてをしへなど限なく時めき給ふに、冷泉院の御母后うせ給ひてこそなかなかよなくおぼえ劣り給へりとは聞えしか。「故宮のいみじくめざましく安からぬものにおぼしたりしかば、思ひ出づるにいとほしく悔しきなり」とぞ仰せられける。この女御の御腹に八宮とてをとこ親王生れ給へり。御かたちなどは清げにおはしけれど、御心極めたる世のしれものとぞ聞き奉りし。世の中のかしこきみかどの御ためしには、もろこしには堯の帝と舜の帝と申す。この國には延喜天暦とこそは申すめれ。延喜とは醍醐の先帝の御事、天暦と申すは村上の先帝の御事なり。そのみかどの御子は小一條大臣のうまごにてしかしれ給へりける、いといと怪しき事なりかし。その母女御の御せうとなりときの左大將と申し、長徳元年四月二十三日にうせ給ひにき。御年五十三。この大將は父おとゞよりも御心ざまのわづらはしくくせぐせしき、おぼえまさりて、あまり名聞になどぞおはせし。御妹の女御殿に村上の御琴教へさせ給ひける御前に侍らひ給ひて聞きならひ給ふ程に、おのづから我もその道の上手に人にも思はれたまへりしを、おぼろげに心よくならひ給はず。さるべき事の折もせめてそゝのかされて、物一つばかりかきあはせなどこそし給ひしか。あまりけにくし」と人にもいはれ給ひき。人の奉りたるにへなどいふものはお前の庭にとりおかせ給ひて、夜はにへ殿に納め、晝は又もとのやうにとり入れつゝおかせなど、又人の奉り代ふるまではおかせ給ひて取り動すことはせさせ給はぬ、あまりやさしき事なりな。人などのまねるにもかくなむと見せ給ふれうなめり。むかし人はさる事をよきには云け

ければ、そのまゝの有様をせさせ給ふとぞ。かくやうにいみじう心ありと思したりし程よりは、よしなし事ゑ給へりとぞ人にいはれ給ふめりし。御甥の八宮に大饗せさせ奉り給ひて、上ごにおはすれば、人々ゑひはして遊ばむなど思して、「さるべき上達部達疾く出づるものならばゑばしあどをかしきさまにとゞめさせ給へ」とよく教へ申させ給ひけり。さこそ人がら怪しくゑれ給へれど、やんごとなきみこの大事に ゑ給ふことなれば人々あまた參り給へりしもこだいなりかし。されどおはやけ事さし合せたる日なれば急ぎ出でたまふに、まことさる事ありつと思しいでゝ大將の御方をあまた度見やらせ給ふに、めをくはせ申し給へば御おもていと赤くなりて、とみにえうちいでさせ給はず、物もえ仰せられで俄におびゆるやうに、おどろおどろしくおらゝかに人々のうへのきぬの片袖おちぬばかりとりかゝらせ給ふに、參りと參れる上達部は末の座まで見合せつゝ、えゑづめずやありけむ、顏けしきかはりつゝ、とりあへずごとに事をつけつゝ急ぎ立ちぬ。この入道殿などは若殿上人にておはしましける程なれば、事末にてよくも御覽せざりけり。唯人々のはゝゑみていで給ひしをぞ見しとぞこの頃をかしかりし事に語り給ふなる。大將は何せむにかゝる事をせさせ奉りて、又ゑかのたまへとも敎へ聞えけむとくやしくおぼすに、御色も青くなりてぞおはしける。誠にみこをばもとよりさる人と知り申したれば、人これをしもそしり申さず。この殿をぞかゝる御心と見る見るせめてなくてあるべき事ならぬに、かく見苦しき御ありさまをあまた人に見せ聞え給へる事とぞ誹り申しゝ。いみじき心ある人と覺えおはせし人の口惜しくてそくか

うとり給へるよ。この殿の御北の方にては批把大納言延光の御女ぞ坐せる。女君二所男君三人ぞおはせし。女君は三條院の東宮にておはしまし、折の女御にて宣耀殿と申していと時に坐しまし、。をとこみこ四所、女宮二人。さて女君は三條院の東宮にて坐しまし、時參り生れ給へりし程に東宮位につかせ給ひて又の年長和元年壬子四月十八日后に立ち給ひて皇后宮と申す。小一條の御母なり。又今一所の女君は父の殿うせ給ひにし後、御心わざに冷泉院の四のみこ帥宮と申す御うへにて二三年ばかりおはせし程に、宮、和泉式部に思し移りにしかばほいなくて小一條に歸らせ給ひし後、このころ聞けば心えぬ有樣のことのはかなるにてこそおはすなれ。小一條左大將殿の御おもて起し給ふは、皇后宮おはしますにはぢがましくいとほしきは今一人の御むすめにてこそあめれ。この宮の御腹の一のみこ敦明親王とて式部卿の宮とぞ申し、ほどに、長和五年正月廿九日三條院おりさせ給へば、當代位に即かせ給ひて、この式部卿の宮、東宮に立たせ給ひにき。御年二十三。但、道理あること、皆人思ひ申し、ほどに、院うせさせ給ひて後二年ばかりありていかゞ思し召しけむ、宮たちと申し、をり、よろづに遊びならはせ給ひて、うるはしき御有樣いとくるしく、いかでかゝらでもあらばやとおぼしなられて皇后宮にかくなむおぼえ侍ると申させたまふを、いかでかはげにさもとはおぼさむずる。すべてあさましくあるまじき事とのみ諫め申させ給ふに、おぼしあまりて入道殿に御消息ありければ參らせ給へるに、御物がたりこまやかにて「この位去りて唯心安くてあらむとなむ思ひ侍る」と聞えさせければ、「更に更にうけたまはら

じ。さは三條院の御末はたえねと思しめしおきてさせ給ふがいとおさましく悲しき御事なり。かゝる御心のつかせ給ふ御事はこと事ならじ。故冷泉院の御物のけなどの思はせ奉るおもり。さらさら（猶）おぼしめしそ」と啓し給ふに、「さらば唯はいもおもり。すけにこそはあなれ」とのたまはするに「さまで思しめすとならばいかゞは。ともかくも申さむ。内に奏し侍りてを」と（如元）させ給ふをりにぞ御氣色いとよくならせ給ひにける。さて殿うちに參らせ給ひて大宮にも内にも申させ給ひければ、いかゞは聞かせ給ひけむな。「このたびの東宮には式部卿の宮をとこそは思しめすべけれ。一條院のはかばかしき御後見なければ東宮に當代を立て奉るなり」と仰せられしかば、これもおなじ事なりとおぼし定めて、寛仁元年丁巳八月五日こそは九歳にて三宮東宮に立たせ給ひて、同月の廿三日にこそは壺切といふ太刀は内よりもて參りしか。當代位に即かせ給ひしかば、即ち東宮にも參るべかりしを、去かるべきにやありけむ、とかくさはりてこの年頃内のをさめ殿に候ひつるぞかし。寛仁三年己未八月廿八日、御年十一にて御元服せさせ給ひしか。さきの東宮をば小一院と申す。今の東宮の御有樣申す限なし。つひの事とは思ひながら、唯今かくとは思ひかけざりしことなりかし。小一條院、我が御心もてのがれ給へることは、これをはじめとす。世はじまりて後、東宮位とりさげられ給ふことは、八七代ばかりにやなりぬらむ。なかに法師東宮おはしけるこそは、うせ給ひてのちに贈太上天皇と申して祝ひすゑられ給へれ。おほやけもしろしめして崇道天皇とて官物のはつほさきに奉らせ給ふめり。この院のかくおぼし立ちぬる事、かつは殿下の御報の

早くおはしますに壓れ給へるか。又多くは元方民部卿の靈の仕うまつりつるなり」といへば、このさぶらひ、「それもさるべきなり。このほどの御事こそことの外に變りて侍れ。なにがしはいと委しく承りたる事侍るものを」といへば、世繼、「さも侍らむ。傳はりぬる事はいでいで承らばや。おらひにし事なれば物の猶聞かまほしく侍るぞ」といふ。興ありげに思ひたれば「事のやうだいは三條院のおはしましけるかぎりこそあれ、うせ給ひにける後は世のつねの東宮の御やうにもなく、殿上人など參りて御あそびせさせ給ふや。もてなしかしづき申す人などもなく、いとつれづれに紛るゝ方なく思し召されけるまゝに、心やすかりし御有樣のみ戀しく、ぼけぼけしきまで覺えさせ給ひけれど、三條院おはしましつるかぎりは院殿上人などもまゐりや、御使もしげく參り通ひなどするに八目もしげくよろづ慰めさせ給ふを、院うせおはしましては世の中のものおそろしく、大路のみちかひもいかゞとのみわづらはしくふるまひにくきにより、みやづかさなどだにも參り仕うまつるとも難くなりゆけば、ましてげすの心はいかゞはあらむ。とのもりづかさのしもべも朝ぎよめ仕うまることもなければ庭の草もしげりまさりつゝ、いとかたじけなき御すみかにておはします。まれまれ參りよる人々は世にきこゆる事とて、三宮かくておはしますを心苦しく殿も大宮も思ひ申させたまふに、「もし內に男宮も出でおはしましなばいかゞあらむ。さあらぬさきに東宮に立て奉らばや」となむなほせらるなる。「さればおしてとられさせ給へるなり」などのみ申すを、まことにしもあらざらめど、げに事のさまもよと覺ゆまじければにや、聞かせたまふ御

心ちはいとゞうきたちたるやうに思し召されて、ひたぶるにとられむよりは、われとやのきなましと思し召すに、又高松殿のみくしげ殿參らせ給ひて、殿の華やかにもてなし奉らせ給ふべかなりとて例の事なれば、世の人さまざま定め申すを皇后宮聞かせ給ひて、いみじう喜ばせ給ふを、東宮はいとよかるべき事なれど、さだにあらばいとゞ我が思ふ事えせじ、猶かくてえあるまじく思しめされて御母宮に、云かゞかとなむ思ふと聞えさせ給へば、「更なりや、いと いとあるまじ御事なり。みくしげ殿の御事をこそ誠ならばすゝみ聞えさせ給はめ、更に更に思し召しよるまじき事なり」ときこえさせ給ひて、御物怪のするなりと御いのりどもせさせ給へど更に思しめしとゞまらぬ御心の中をいかでか世ひともきゝけむ。さてなむみくしげ殿參らせ奉り給へとも聞えさせ給ふべかなるなどいふ事殿の方にもきこゆれば、誠にさもおぼしゆるぎてのたまはせば、いかゞすべからむなどおぼす。さて東宮は遂におぼしめしたちぬ。さて後にみくしげ殿の御事もいはむに、なかなかそれはなどかなからむなどよき方ざまに思しめしけむ、不覺の事なりやな。壺切などの事ひがことにあめり。故三條院たびたび申させ給ひしかども、とかく申しやりて奉らせざりしとこそ聞き侍りしか。されば故院もさばれなくとも立てゞはとておはしましゝなり。云かるべきとはおのづからのことを申させて、皇后宮にもかくとも申させ給はず、唯御心のまゝに殿に御消息聞えむと思しめすに、むつましうさるべき人も物し給はねば、中宮の權大夫殿のおはします四條の坊門と西の洞院とは宮近きぞかし。そればかりをこと人よりはとや思しめしよりけむ。藏人なにがし

を御使にて「おからさまに參らせ給へ」とあるを、おぼしもかけぬ事なれば驚かせ給ひて「何しに召すぞ」と問はせ給へば、「申させ給ふべき事のさぶらふにこそ」と申すを、この聞ゆる事どもにやとおぼせど、のかせ給ふ事にはさりとも世にあらじ、みくしげ殿の御事ならむとおぼす。「いかにも我が御心ひとつには思ふべき事ならねば驚きながら參り候ふべきを、おとゝにあない申してなむさぶらふべき」と申させ給ひて、まづ殿にまゐり給へり。「東宮よりぞかなむ仰せられたりつる」と申させ給へば、殿もおどろかせ給ひて「何事ならむ」と仰せられながら、大夫殿の御同じやうにぞ思しよられける。「誠にみくしげ殿の御事のたまはせむをいなび申さむも便なし。參り給ひなば、又さやうに怪しくてはあらせ奉るべきならず。又さては世の人の申すなるやうに春宮のかせ給はむの御思ひあるべきならずかしとはおぼせど、しかわざと召さむにはいかでか參らではあらむ。いかにものたまはせむ事を聞くべきなり」と申させ給へば、參らせ給ふ程日も暮れぬ。陣に左大臣殿の御車やどせんどものあるをなまむづかしとおぼせど、歸らせ給ふべきならねば殿上にのぼらせ給ひて、「參りたるよし啓せさせよ」と藏人にのたまはすれば、おほい殿のお前にさぶらはせ給へば、「唯今はえなむ申し候はぬ」ときこえさするほど、見まはさせたまふに、庭の草もいとふかく、殿上のあるさまも東宮のおはしますとは見えずおさましうかたじけなげなり。おほい殿出で給ひてかくと啓すれば、おさがれひの方にいでさせ給ひて、めしあれば參り給へり。「いと近くこち」と仰せられて「物せらるゝ事もなきに、おないするもはゞかり多かれど、おとゝに聞ゆべ

き事のあるを傳へものすべき人のなきにま近きほどなればたよりにもと思ひてせうそこし聞えつるなり。そのむねは、かくて侍るこそは本意あることゝ思ひ、故院のえおかせ給へる事をたがへ奉らむもかたがたに憚り思はぬにあらねど、かくてあるなむ思ひ續くるに罪深くも思ゆる。內の御行く末はいと遥にものせさせ給ふ。いつともなくてはかなき世に命もしりがたし。このありさまのきて心に任せておこなひをもし、物まうでをもし、安らかにてなむあらまほしきを、むげに先の東宮にてあらむは見苦しかるべきなむ。院號たまはりて、年にぶらうなどありてあむあらまほしきを、いかなるべき事にかと傳へ聞えられよ」と仰せられければ、かしこまりてまかでさせ給ひぬ。その夜はふけにければ、つとめてぞ殿に參らせ給へるに、內へ參らせ給はむとて御さうぞくのほどなればえ申させ給はず。大方には御供に參るべき人々、さらぬをいでさせ給はむにげさんせむと多く參りつどひて物さわがしければ、御車に奉りにおはしまさむに申さむとて、その程寢殿のすみのまのかうしによりかゝりて居させ給へるを、源民部卿よりおはして、「などかくてはおはします」と聞えさせ給へば、この殿には隱し聞えさせ給ふべきことにもあらねば、「えか〻かの事のあるを、人々のさぶらふめればえ申さぬなり」とのたまはするに、御氣色うちかはりてこの殿も驚きたまふ。いみじうかしこき事にこそあなれ。唯疾く聞かせ奉らせたまへ。內に參らせ給ひなばいとゞ人がちにてえ申させ給はじ」とあれば、げにとおぼして、おはします方に參り給へれば、さならむと御心えさせ給ひて、すみのまに出させ給ひて、「東宮に參りたりつるか」と問はせ給へ

ば、よべの御消息委しく申させ給ふに、さらなりや、おろかにおぼしめさむやは。おしておろし奉らむこと憚り思し召しつるに、かゝる事の出で來ぬる御喜なほつきせず。まづいみじかりける大宮の御宿世かなとおぼしめす。民部卿殿に申し合せさせ給へば、「唯疾く疾くせさせ給ふべきなり。何かよき日もとらせ給ふ。少しも延びばおぼしかへして、さらでありなむとあらむをばいかゞはせさせ給はむ」と申させ給へば、さる事とおぼして御こよみ御覽ずるに、今日もあしき日にもあらざりけり。やがて關白殿も參らせ給へるほどに、「疾く疾く」とそゝのかし申させ給ふ。「まづいかにも大宮に申してこそは」とて內におはしますほどなれば參らせ給ひて、かくなむと聞かせ奉らせ給へば、まして女の御心はいかゞは思し召されけむ。それよりぞ春宮に參らせ給ふ。かう申す事は寬仁元年八月六日の事なり。御子どもの殿ばら、又例も御供に參り給ふ上達部殿上人ひき具せさせ給へれば、いとこちたくひゞきことにておはしますを、待ちつけさせ給へる宮の御心ちはさりとも少しすゞろはしう思し召されけむかし。心もおよらぬ人は露參りよる人だになきに、昨日二位中納言殿の參り給へりしだに怪しと思ふに、又今日かくおびたゞしく賀茂詣などのやうに御さきの音もおどろおどろしう響きて參らせ給へるをいかなる事ぞとあきるゝに、少しよろしき程のものは、みくしげ殿の御事申させ給ふになめりと思ふは、さも似つかはしや。むげに思ひやりなきはのゝは、又我が心にかゝるまゝに、內のいかにおはしますぞなどまで心さわぎしあへりけるこそあさましうゆゝしけれ。母の宮だにも知らせ給はざりけり。かくこの御方に物さわがしきを

いかなる事ぞと怪しくおぼして、あないし申させ給へど、例の女房のまゐるみちをかためさせ給ひてけり。殿には年ごろ思しめしつる事などこまかに聞えむと心強くおぼしめしつれど、誠になりぬるをりは、いかになりぬる事ぞとさすがに御心さわがせ給ひぬ。むかひ聞えさせ給ひては方々に臆せられ給ひにけりとや。唯昨日のおなじさまになかなかことずくなに仰せらるゝ御をりは、「さりともいかにかくは思し召しよりぬるぞ」などやうに申させ給ひけむかしな。御けしきの心苦しさをかつは見奉らせ給ひて、少しおしのごはせ給ひて、「さらば今日よき日なり」とて院になし奉らせ給ひて、やがて事ども始めさせ給ふ日萬の事定め行はせ給ふ。判官代には宮づかさども藏人などかはるべきにあらず。別當には中宮の權大夫をなし奉り給へれば、坐して拜し申させ給ふ事ども定まりはてぬればいでさせ給ひぬ。いとあはれに侍りける事は、殿のまださぶらはせ給ひける時、母宮の御方よりいづかたの道より尋ね參りたるにか、「あらはに御覽ずるも知らぬ氣色にていと怪しげなる姿したる女房のわなゝくわなゝくいかにかくはせさせ給へるぞと聲もかはりて申しつるなむ哀にも又をかしうも」とこそ仰せられけれ。勅使こそ誰ともえたしかにも聞き侍らね。祿などにはかにていかにせられけむ」といへば「殿こそはせさせ給ひけめ。さばかりの事になりて逗留せさせ給はむやは。火たきや陣屋などやらせけるほどにこそえ堪へず忍びなく人々侍りけれ。まして皇后宮堀川の女御殿などはさばかり心深くおはしまさふ御心どもに、いかばかり思し召しけむとおぼえ侍りし。世の中の人、堀川の女御殿の、

「雲ゐまでたちのぼるべき烟かとみえしおもひのほかにもあるかな」

などいふ歌よみ給へりなど申すこそ更によもと覺ゆれど、いとさばかりの事に和歌の道思しよらじかしな。御心の中には自ら後にも覺えさせ給ふやうもありけめど、人の聞き傳ふばかりはいかがありけむ」といへば、翁「げにそれはさる事に侍れど、昔も今もいみじきとの折かゝることいと多くぞ聞え侍りし」とてさゝめく。「さていかなる事にか、東宮御位せめおろしとり奉り給ひては、又御弟にとり奉らせ給ふほど、もてかしづき奉らせ給ふ御有樣、誠に御心も慰ませ給ふばかりこそ聞え侍りしか。おものまゐらするをりは大盤所におはしまして、御臺や盤などまで手づからのごはさせ給ふ。何をも召し試みつゝなむまゐらせ給ひける。御さうし口までもておはしまして、女房にたまはせ、殿上に出すほどにも立ちそひて、よかるべきさまにをしへなど、これこそは御ほいよとおはれにぞ。このきはに故式部卿の宮の御事ありけりといふ事もそらごとなり。何故ある事事もわらなくに昔事どもこそ侍れ、おはします人の御事申す、すぢなきことなりしかしな。さて式部卿の宮と申すは故一條院の一のみこにおはします。その宮をば年ごろそちの宮と申しゝを、小一條院の式部卿にておはしましゝが東宮にたゝせ給ふ。あく所にそちの宮をばのかせ給ひて式部卿の宮と申しゝぞかし。（是高倉の宮の御おぼちなり。）その後の度の春宮にもはづれ給ひておぼし歎きしほどに、うせ給ひて後又この小一條院御さしつぎの二の宮敦儀の親王をこそはいはくらの式部卿とは申すめれ。又次の三の宮敦平の親王を中務の宮と申す。次の四の宮師明親王と申す。幼くより出家して仁和寺

僧正御かしづきものにておはしますめり。この宮たちの御妹の女宮二人、一所はやがて三條院の御時の齋宮にて下らせ給ひにしを、のぼらせ給ひて後、荒三位道雅におたらせ給ひければ、三條院も御惱みの折いとあさましきことにおぼし歎きて、尼にならせ給ひてうせ給ひにき。今一所の女宮は坐します。これは大二條殿の北方。小一條大將の御姫君こそは唯今の皇后宮と申しつるよ。三條院の御時に后に立て奉らむとおぼしけるに、うちよりて大納言の娘にて后に立つ例なかりければ、御父のおとゞ小一條の大將を贈太政大臣になしてこそは后に立てさせ給ひてしか。されば皇后宮いとめでたくおはしますめり。御せうと一人は侍從入道、今一所は大藏卿通任の君こそはおはすめれ。又伊豫の入道もそれぞかし。今一所の女君こそはいと甚しく心うき御ありさまにておはすめれ。父大將のとらせ給へりけるそうぶんの領所近江にありけるを、人にとられければすべきやうなくて、かばかりになりぬれば物のはづかしさも知られずや思はれけむ、よるかちより御堂に參り給ひてうれへ申し給ひしはどよ。殿のおまへは御堂の佛の御前にねんじゆしておはしますに夜いたく更けにければ御脇息によりかゝりて少しねぶらせ給へるに、いぬふせぎのもとに人のけはひのきこえければ、怪しとおぼしめしけるに女のげはひにて忍びやかに、「物申し候はむ」と申すを、御ひが耳かど思しめすに、あまた度になりぬれば誠なりけりとおぼしめして、いとあやしくはあれど「たぞ、あれは」と問はせ給ふに、「云かく云かの人の申すべきことき候ひてまゐりたるなり」と申し給ひければ、いといとあさましくは思し召せど、荒く仰せられむもさすがにいとほしくて、「何事ぞ」と問はせ

給ひければ、「これ忘ろめしたることに候ふらむ」とて事のありさまこまかに申したまふに、いとおはれにおぼしめして、「さらなり、皆聞きたることなり。いとふびんなることにこそあなれ。今左かすまじきよし速にいはせむ。かくいましたるいとあるまじき事なり。人してこそいはせたまはめ。疾くかへられね」とおはせられければ、「さこそは返す返すも思ひたまひ候ひつれど、申しつぐべき人の更にさぶらはねば、さりともおはれとは仰事に候ひなむとおもひかまへて参り候ひながらも、いみじくつゝましくさぶらひつるにかくおぼせらるゝ申しやる方なくうれしく候ふ」とて、手をすりて泣くけはひに、ゆゝしくも哀にもおぼしめされて殿も泣かせ給ひにけり。出でさせたまふ道に南大門に人々ゐたる中をおはしければなにがしのぬしの引きとゞめられけるこそ、いとぶあいのことなりや。後に殿も聞かせたまひければ、いみじうむづからせ給ひて、いと久しう御かしこまりにていましき。さて御うれへのところは長く論あるまじく、この人の御領にてあるべきよし仰せ下されにければもとよりもいとしたゝかに領じたまふ。極めていとよし。さばかりになりなむには物の恥もしらでありなむ。かしこく申したまへるいとよきことゝ口々はめ聞えしこそなかなかにおぼえ侍りしか。大門にてとらへたりし人は式部大夫政成が父なり。さばかり優におはしけむ御すゑこそ少しはかばかしき人なけれ。甲斐前司師季が先祖しなのゝいかうこそはあれどほふしなれば。

大鏡卷之四

右大臣師輔
關白次第
世繼名

右大臣師輔 九條殿

このおとゞは忠平のおとゞの御二郎君、御母右大臣源能有の御女（此の有能は田村帝の親王。）いはゆる九條殿におはします。公卿にて廿六年、大臣の位にて十四年ぞおはしまし〳〵。天祿二年五月二日出家せさせたまひにき。御年五十三にて御孫にて春宮又四五宮を見おき奉りて隱れたまひけむは極めて口をしき御事ぞや。御年まだ六十にもたらせ給はねば、行く末遙にゆかしき事多かるべきほどにて」と世繼せめてさ〳〵やぐものから手をうちてわふぐ。「その殿の御公達十一人、女五六人ぞおはせし。第一の御女は村上の先帝の御時の女御、多くの女御御息所の中に勝れてめでたくおはします。天德二年十二月廿六日后に立たせ給ふ。皇后宮と申しき。御年三十二。御門もこの女御殿にはいみじう心おき申させ給ひき。ありがたき事をも奏せさせ給ふ事をば、いなびさせ給ふべくもあらざりけり。いはむや自餘の事をば申すべきならず。少し御心さがなく、御物うらみなどもせさせ給ふやうにぞ世の人にいはれおはしましし。御門をも常にふすべ申させ給ひて、いかなる事のありける折にか、夕さり渡らせおはしましたりけるを、御格子を叩かせ給ひけれどあけさせ給はざりければ、叩きわづらせ給ひて女房に

「などあけぬぞと問へ」となにがしのぬしのわらは殿上ぢたるが御供なるに仰せられければ、おきたる所やあるとこゝかしこ見給ひけれど、さるべき方は皆たてられて、ほそどのゝ口のみあきたるに人のけはひしければ、よりてかくとのたまひければ、いらへはともかくもせでいみじく笑ひければ、参りてありつるやうを奏しければ、御門もうち笑はせ給ひて、「例のことあり」と仰せられてぞ帰り渡らせおはしましける。このわらはゝ伊賀の前司資國がおほぢなり。藤壺弘徽殿とのうへの御局はほどもなく近きに、藤壺の方にはこの后のぼりておはしましあへるを、いと安からず思しめして、えやぢづめ難くおはしましけむ、中へだての壁に穴をあけてのぞかせ給ひけるに、女御の御かたちの八宮の御母よ。御かたちは今少しよろしくとも世のつねの子をうみ給へる。いと美しうめでたくおはしければ、うべ時めくにこそありけれと御覧ずるに、いとゞ心やましくならせ給ひて、穴より通るばかりのかはらけのわれして打たせ給へりければ、御門のおはします程にてかの女御の御袂のうへにかはらけのわれ當れり。これればかりにはえ堪へさせ給はず、むつがりおはしまして、「かうやうの事は女房はえせじ。これまさ、兼通、兼家などがいひもよほしてせさするならむ」とおぼせられて、皆殿上にさぶらせ給ふ程なりければ、みところながら御かしこまりになり給ひしかば、この折に后いとゞ大きに腹だゝせ給ひて、「渡らせ給へ」と申させ給へれば、思ふにこの事ならむと思しめして渡らせ給はぬを、度々なほなほと御せうそこありければ、渡らずばいとゞこそむつがらめと恐しくいとほしく思しめしておはしましたるに、「いかでかゝる事はせさせ給ひたるぞ。いみじからむさかさまの罪ありともこの人々をばおぼし免すべきなり。いはむやまろが方ざまにてかくせさせ給ふは

いとあるまじく心うき事なり。唯今召しかへせ」と申させ給ひければ、「いかでか唯今はゆるさむ。音ぎゝ見苦しき事なり」と聞えさせ給ひけるを、「更にあるべき事ならず」とせめ申させ給ひければ、「さらば」とて歸り渡らせ給ふを、おはしましなば唯今しも免させ給はじ。唯こなたにてを召せ」とて御袖をとらへ奉りて立て奉らせ給はざりければ、いかゞはせむと思しめして、この御方にしきじ召して歸り參るべきよしの宣旨下させ給ひける。これのみにもあらず、かやうなる事どもいかに多く聞え侍りしかど、大方の御心はいとひろく、人の御ためなどにも思ひやりおはしまし、あたりあたりにあるべきほどはすぐさせ給はず御かへりみあり、かたへの女御達の御ためにも、かつは情あり、御みやびをかはさせたまふに、心より外にあまらせ給ひぬる時の御物ねたみのかたにや、いかゞおはしましけむ。この小一條の女御は、いとかく御形のめでたうおはすればにや、御ゆるされに過ぎたる折々の出でくるによりかゝる事もあるにこそ。その道に心ばへ侍るにもよらぬ事にやな。かやうの事までは申さじ。いとかたじけなし。大方殿上人女房さるまじき女官までもさるべき折のとぶらひをせさせ給ひ、いかなる折も必ず見すぐし聞き放たせ給はず、御覽じ入れてかへりみさせ給ふ。まして御はらからだちをばさらなりや。御兄をば親の樣に頼み申させ給ひ御おとゝをば子の如くにはぐゝみ給ふ御心おきてぞや。さればうせおはしましたりし、ことわりとはいひながら、ゐなかせかいまでこそ聞きつぎ奉りて惜み悲しび申しゝか。御門よろづの政をば聞えさせ合せてせさせ給ひけるに、人のためなげきのあるべき事をばなはさせ給ひ、よろこび

になりぬべき事をばそゝのかし申させ給ふ。おのづからおはやけきこしめして、悪しかりぬべき事など人の申すをば、御口より出させ給はず。かうやうの御心おもむけのありがたくおはしませば、御祈ともなりて永く栄えおはしますにこそあべかめれ。冷泉院、圓融院、為平の式部卿の宮と女宮四人との御母后にて又ならびなくおはします。御門東宮と申し代々の關白攝政と申すも多くは唯この九條殿の一すぢにおはしますなり。男宮達の御ありさまは代々の御門の御事なれば返す返す又はいかゞは申し侍らむ。この后の御腹には式部卿の宮こそは冷泉院の御次にまづ東宮にも立ち給ふべきに、西宮殿の御聟にておはしますにより、御おとゝの圓融院次の宮に引き越されさせ給へる程などのどもいとゝいみじく侍り。其の故は式部卿為平御門にゐさせたまひなば西宮殿の高明御ぞうに世の中うつりて源氏の御栄になりぬべければ、御をぢ達の魂しひ深く、非道に御おとゝをば引き越し申させ奉らせ給へるぞかし。世の中にも宮の中にも殿ばらのおぼしかまへけるをばいかでかはさらむ。次第のまゝにこそはと式部卿の宮の御事を思ひ申したりしに、俄に「若宮の御ぐしかいけづり給へ」など御乳母だちに仰せられて、大入道殿御車にうち乗せ奉りて、北の陣よりなむおはしましけるなどこそ傳へ承りしか。されば道理あるべき御方の人だちはいかゞはおぼされけむ。その頃宮達あまたおはせしかど、ことしもあれ威儀のみこをさへせさせ給へりしよ、見給へりける人も哀なる事にこそ申しけれ。その程西宮殿などの御心ちよな、いかゞおぼしけむ、さてぞかし。恐しく悲しき御事ども出できにしかば、かやう申すもなかなかにいとゝと事愚なり

や。かくやうの事は人中にて下臈の申すにいとかたじけなし。とゞめさぶらひなむ。されどなほわれながらぶあいのものにておぼえ候ふにや。式部卿の宮爲平我が御身の口をしうほいなきをおぼしくづほれてもおはしまさで、猶末の世に花山院の御門は冷泉院のみこにおはしませば御甥ぞかし。その御時に御女奉り給ひて御みづからも常に參りなど玄給ひけることさらでもありぬべけれ。世の人もいみじう誹り申しけり。さりとても御つぎなどのおはしまさば、いにしへの御はいのかなふべかりけるとも見ゆべきに、御門出家玄給ひなどせさせ給ひて後、又この今の小野宮左大臣殿の北の方にならせ給へりしよ、いと怪しかりし御事どもぞかし。その女御殿には道信中將の君も御せうそこ聞え給ひけるに、それはさもなくて、かのおとゞに參り給ひにければ、中將の申したまふぞかし。

「うれしきはいかばかりかはおぼゆらむうきは身にぞしみこゝちこそすれ」。

今に人の口に入りたる秀歌にて侍るめり。まことこの式部卿の宮は世におはせ給へるかひある折一度おはしましたるは。御ねの日のひぞかし。御おとゝのみこだちもいまだ幼くおはしまして、かの宮おとなにおはしますほどなれば、世おぼえ御門の御もてなしもことに思ひ申させ給へるあまりに、その日こそは御供の上達部殿上人などの狩さうぞく馬鞍まで内裏のうちに召し入れて御覽ずるはまたなき事とこそは承はれ。瀧口をはなちては布衣のもの内に參ることは、かしこき君の御時もかゝる事の侍りけるにや、大方いみじかりし日の見物ぞかし。物見車は大宮のぼりに所やは侍りしとよ。さばかりの事こそこの世には候はね。殿

ばらののたまひけるは、「大路わたる事は常なり。藤つぼのうへの御局につとふ、えもいはぬうちいでどもわざとこぼれいで、后の宮うちの御前などさしならび御簾の内におはしまして御覧せしに、お前通りしなむたふれぬべき心ちせし」とこそのたまひけれ。又それのみかは、大路にも宮の出車十ばかりをば引續けて立てられたりしは、一町かねてはあたりに人もかけらず、瀧口さぶらひの御前どもにえりとゝのへさせ給へりしさるべきもの、子どもにて、心のかぎり今日は我が世と人はらはせ、きらめきあへりしきそくどもなど、よそ人誠にいみじう見侍りしか」とて車のきぬの色などをさへ語り居たるぞあさましきや。「さてこの御腹におはしまし、女宮一人はいとはかなくうせ給ひにしぞかし。又女七の宮は御物のけこはくてうせ給ひにき。九の宮は今入道一品宮とて三條におはしましき。うせ給ひて十四年にやならせ給ひぬらむ。うみおき奉らせ給ひしたびの十の宮こそは今の齋院におはしませ。いつきの宮世に多くおはしませど、これは殊にうごきなく世に久しくたもちおはしますも、唯この御すぢのかく榮え給ふべきぞと見申す。御門たびたびうせ給へど、この齋院はうごきなくおはします。それも賀茂の明神のうけ給へればかくうごきなくおはしますなり。佛經などの事は昔の齋宮齋院はいませ給ひけれど、この宮には佛法さへ崇め申し給ひて朝ごとの御念誦欠かせ給はず。近うはこの御寺のけうの講にはさだまりて布施をこそおくらせ給ふめれ。いととうより神人にならせ給ひて、いかでかゝる事思し召しよりけむと覺え候ふは、賀茂のまつりの日、一條の大路にそこら集まりたる人、さながら共に佛とならむとちかはせ

給ひけむこそなほあさましく侍れ。さりとて又現世の御榮華をとゝのへさせ給はぬかは。御禊よりはじめ、三箇日の作法、出車などのめでたさは、大方御さまのいとゝいうにらうらうしくおはしましましたるぞ。今の關白殿、兵衛佐にて御禊の御前せさせ給ひしに、いとをさなくおはしませば、例は本院にかへらせ給ひて、八々に祿などたまはするを、これは河原より出でさせ給ひしかば、思ひかけぬ御事にてさる御心まうけもなかりければ、御前にめしおりて御對面などせさせ給ひて、奉り給へりける御こうちぎをぞかづけ奉らせ給ひける。入道殿聞かせ給ひて、「いとをかしくも去給へるかな。祿なからむもびんなく、とりにやり給はむも程經ぬべければ、とりわきたるさまを見せ給ふなめり。えせものはえ思ひよらじかし」とぞ申させ給ひける。この當帝や東宮などのまだ宮達にておはしましゝ時、まつり見せ奉らせ給ひし御さじきの前過ぎさせ給ふほど、殿の御膝に二所ながらするゑまゐらせ給ひて、「この宮だち見奉らせ給へ」と申させ給へば、御輿のかたびらより赤色の御扇のつまをさし出で給へりけり。殿をはじめ奉りて、「猶心ばせめでたくおはする院ありや。かゝるをゝるしを見せ給はずば、いかでかは見奉らせ給ふらむとも去らまし」とこそは感じ奉らせ給ひけれ。さて齋院より大宮に聞えさせたまへる、

「光いづるあふひのかげを見てしよりとしつみけるも嬉しかりけり」。

御かへし、

「もろかづら二葉ながらに君にかくあふひやかみの去るしなるらむ」、

げに賀茂明神などのうけ奉り給へればこそは五代までうち續きさかえさせ給ふらめな。この事いとをかしうせさせ給へりと世ひと申しき。前の帥殿のみぞ「追從深き老ぎつねかな。あな愛敬な」と申し給ひける。誠このきさいの宮の御おとゝの中の君は重明の式部卿の宮の北の方にてぞおはせしかし。そのみこは村上の御はらからにおはします。この宮の上さるべき事のをりは、物見せ奉りにとて后迎へ奉り給へば、忍びつゝ參り給ふに、御門ほの御覽じて、いと美くしうおはしましけるをいと色ある御心くせにて、宮にかくなむ思ふとおながちに責め申させ給へば、一二度左らず顏にてゆるし申させ給ひけり。さて後御心はかよはせ給ふげなる御氣色なれど、さのみはいかゞはとや思しめしけむ。后さらぬことだにこの方ざまにはなだらかにえつくりあへさせ給はざめる中に、ましてこれはよその事よりは心づきなうも思しめしぬべけれど御わたりを廣う願み給ふ御心のふかさに、人の御ため聞きにくゝうたてあればなだらかに色にもいでずすぐさせ給ひけるこそいとかたじけなう悲しきとなれな。さて后の宮もうせおはしまし、式部卿の宮もうせ給ひて、御門わりなく戀しと思しければ、召しとりていみじく時めかさせ給ひて、貞觀殿の內侍のかみとこそ申しゝかし。世になくおぼえおはして、こと女御御息所猶み給ひしかどかひなかりけり。これにつけても九條殿の御さいはひとぞ人申しける。又三の君は西宮殿の北の方にて坐せしを、御子うみてうせ給ひしかばよそ人は君だちの御爲あしかりなむとて又御おとゝの五に當らせ給ふめい宮と申すにうつらせ給ひにき。四の君は疾くうせ給ひにき。六の君は冷泉院の東宮におはしまし

丶に參らせ給ふなんど女君たちは皆かくなり。男君たちは十一人の御中に五人は（五人の中三人は關白攝政。）太政大臣にならせ給へり。それもさましくおどろおどろしき御さいはひなりかし。その御外は右兵衛督忠君、又北野三位（還度、）又大藏卿（還昌、）多武峯入道少將君なり。法師にては飯室の權僧正、今の禪林寺の僧正などにこそはおはしますめれ。法師といへど世のなかの一の驗者にて、佛の如くに公私たのみ仰ぎ申さぬ人なし。又北野三位の御子は尋空律師、朝源律師なり。又大藏卿の御女子は（今の左兵衛督の母上の事なり。）粟田殿の北の方、今の左衛門のかみの母上、この御ぞうかやうにておはしますべきなかに、多武峯の少將の出家ぎ給へりしほどは、いかにおはれにもやさしくもさまざまなる事どもの侍りしかば、なかにも御門の御消息遣したりしこそおぼろげならずば御心もやみだれ給ひけむとかたじけなくうけたまはりしか。

「みやこより雲のやへたつおく山のよかはのみづのきはすみよかるらむ」。

御かへし、

「こゝのへのうちのみつねにこひしくてくもの八重たつ山はすみうし」。

始はよかはにすませ給ひしぞかし。後には多武峯にすませ給ひき。いとゝみじく侍りしことぞかし。されどもそれは九條殿后宮などうせおはしまして後の事なり。この右馬のかうの殿の御出家こそ親だちの築えさせ給ふことのはじめをうちすてゝ、いとゝとありがたう悲しかりし御事よ。とうよりさる御心まうけはおぼしよらせ給ひにけるにや、御はらからの公達に具し奉りて、正月二七夜のほどに中堂に上らせ給へりけるに、更に御おこなひもせで大殿

籠りたりければ、殿ばら「曉になどかくして臥し給へる。起きて念誦もせさせ給へかし」と申させ給ひければ、「今一度に」とのたまひしを、そのをりは思ひも咎められざりき。かやうの御有樣をおぼし續けゝるにやとこそこのをりには君達おぼしいでゝ申し給ひけれ。さりとてうちくんじやいかにぞやなどある御氣色もなかりけり。人よりことにはこりかに心ちよげなる人がらにてぞおはしける。この九條殿は百鬼夜行にもわはせ給へるは何ほどゝいふことはえ承らず。いみじう夜更けて內より出させたまふに、大宮より南ざまへおはしますにおはのゝ辻のほどにて御車のすだれうち垂れさせ給ひて「御車牛もかきおろせかきおろせ」と急ぎ仰せらるればあやしと思へどかきおろしつ。御隨身御前どもゝ「いかなる事のおはしますぞ」と御車のもとに近く參りたれば、御したすだれうるはしく引き垂れて御さくとりてうつぶさせ給へるけしきいみじきを人に畏まり申させ給へるさまにて坐します。「御車は去ぢにかくな。唯隨身どもはながえの左右のくびきのもとにいと近く侍ひて、さきをたかくお奉らせ給ふ。牛をば御車のかくれの方にひきたてさせ給へり。さて時中ばかりありてぞ御すだれ上げさせ給ひて、「今は御牛かけてやれ」と仰せられけれど、つゆ御供の人々は心えざりけり。後々にぞかしかの事のありしなど、さるべき人々にこそは忍びて語り申させ給ひけめどさるめづらしき事はおのづから散り侍りけることにこそは。元方の民部卿のうまご、まうけの君にておはする頃御門の御庚申せさせ給ふにこの民部卿參り給へるさらなり、九條

殿さぶらはせ給ひて人々あまたさぶらひ給て、碁うたせ給ふついでに、冷泉院の孕まれおはしましたるほどにて、さらぬだに世ひといかゞと思ひ申したるに、九條殿「こよひのすぐ六つかうまつらむ」と仰せらるゝまゝに、「この孕まれ給へるみこ、男におはすべくは、でう六いでこ」とて打たせ給ひけるに、唯一どに出でくるものか。ありとある人目を見かはして感じもてはやし給ふ。我が御みづからもいみじとおぼしたりけるに、この民部卿の氣色いとあしうなりて、色もいと青くこそなりたりけれ。さて後に靈にいでまして、その夜やがて「胸に釘はうちてき」とこそのたまひけれ。大かたこの九條殿、いとたゞ人にはおはしまさねにや。思しめしよる行く末の事などもかなはぬはなくぞおはしましける。口をしかりけることは、いまだいと若くおはします時、「夢に朱雀院の前に左右の足を西ひんがしの大宮にさしやりて北むきにて内裏を抱きて立てりとなむ見えつる」、とおほせられけるを、御前になまさかしき女房の侍ひけるが、「いかに御股痛くおはしましつらむ」と申したりけるに、御夢違ひてかく御子孫は榮えさせ給へど、攝政關白え左おはしまさずなりにしなり。又御末に思はずなるさまに御事のうちまじり、そち殿の御事などもこれがたがひたる故に侍るなり。いみじき吉左右の夢もあしざまに合せつればたがふと昔より申し傳へて侍る事なり。荒涼して心ぎらざらむ人の前にて夢がたりな、この聞かせ給ふひとびと左おはしましそ。今ゆくすゑも九條殿の御ぞうのみこそ、とにかくにつけてひろごり榮えさせ給はめ。いとをかしき事はかくやらむ、事なくおはします殿の貫之のぬしの家におはしましたりしこそ猶和歌はめざましき

ことなりかしと思え侍りしか。正月一日つけさせ給ふべきぎよたいの損はれたりければつくろはせ給ふほど、まづ真信公の御もとに参らせ給ひて、かうかうの事の侍れば内に遅く参るよしを申させ給ひければ、おほき大殿驚かせ給ひて、年ごろもたせたまへりけるとりいでさせ給ひて、やがてゑえものにもと奉らせたまふを、ことうるはしう松の枝につけさせ給へり。その御かしこまりのよろこびは御心の及ばぬにしもおはしまさゞらめど、猶貫之にめさむと思しめして渡りおはしましたるを、待ちつけ申しけむめいぼく、いかゞはおろかなるべきな。

「吹く風にこほりとけたる池のうへをちよまで松のかげにかくれむ」。

集にかきいれたることわりなりかしな。いにしへより今に限もなくおはします殿の、唯冷泉院の御ありさまのみぞいと心うく口をしきことにては、おはします」といへば、さぶらひ「されどこのれいには、まづその御時をこそはひかるめれ」といへば、「それはいかでかさらでは侍らむ。「その御門のいでおはしましたればこそは永く藤氏の殿ばら今に榮えおはします。さらざらましかばこの頃儻に我は諸大夫ばかりになりいでゝ、所々の御せんの雑役につかれありきなまし」とこそ入道殿は仰せらるれば、源民部卿は、「さるかたちしたるまうちきみたち候はましかばいかに見苦しうはべらまし」とこそ笑ひ申させ給ふなれ。かゝればおほやけわたくしその御時の事をためしと思ふことわりなり。御物怪こはくていかゞとおぼしゝに、大嘗會の御けいにこそいとうるはしくて渡らせ給ひにしか。それは人の目にあらはれ

て「九條殿なむ御うしろをいだき奉りて、御輿の内にさぶらはせ給ひける」とぞ申しゝ。げにうつゝにても、いとたゞ人とは見えさせ給はざりしかば、ましておはしまさぬ跡にはさやうに御まもりにてもそひ參らせ給ひつらむ。さらば殊に元方の卿、桓算供奉をぞ逐ひのけさせ給ふべきな。それは又云かるべきさきの世の御報にこそはおはしましけめ。さるは御心いとうるはしくて、世間の政もかしこくせさせ給ひつゞ(無)べかりしかば、世にいみじうおたらしき事にぞ申すめりし。さて又今はこの九條殿御子どものかず、冷泉院、圓融院の御母后、貞觀殿の内侍のかみ、一條の攝政、堀川關白、大入道殿、忠君の兵衛督と六人は武藏守從五位上經邦のむすめのはらにおはしまさふ。世の人をんな子といふことはこの御事にや。大かた御腹ことなれど、男君たち五人は太政大臣、三人は攝政云たまへり。

關白次第

良房　忠仁公
忠平　貞信公
伊尹　謙徳公
賴忠　廉義公　三條殿
道隆　中關白殿
道長　御堂入道殿　法名行覺　大二條殿
基經　昭宣公
實賴　清慎公
兼通　忠義公
兼家　大入道殿　東三條殿法名如實　粟田殿　七日關白
道兼　大宇治殿
賴通
師實　京極殿

師通　後二條殿
忠通　法性寺殿
基房　號松殿
師家　號松殿小殿下

忠實　知足院殿　法名圓理
基實　號中殿
基通　號近衛殿
兼實　號九條殿

世繼名

一　月　の　宴
二　花山たづぬる中納言
三　よろこびの巻
四　見はてぬゆめ
五　浦々のわかれ
六　かゞやく藤壺
七　とりべの〻巻
八　はつはなの巻
九　いはかげの巻
十　ひかげかつら
十一　つぼみのはな
十二　玉のむらぎく

七六

十三　ゆふしでの巻
十四　あさみどり
十五　うたがひの巻
十六　もとのしづく
十七　おんがくの巻
十八　玉の臺の巻
十九　御もぎのまき
二十　御賀のまき
廿一　のちくいの大將
廿二　鳥のまひ
廿三　駒くらべの行幸の巻
廿四　わかばの巻
廿五　たまやの巻
廿六　そこのゆめの巻
廿七　衣のたまのまき
廿八　わかみづのまき
廿九　たまのかざり

三十　つるのはやし

大鏡巻之五

摂政謙徳公　伊尹　　摂政忠義公　兼通
恒徳公　為光　　仁義公　公季
摂政大入道殿　兼家

已上九條殿息

太政大臣伊尹のおとゞ

このおとゞ一條摂政と申しき。これ九條殿の一男におはします。いみじき御集つくりてとよかげとなのらせ給へり。大臣になり榮え給ひて三年、いと若くて天祿三年十一月一日にうせ給ひにき。御年四十九。御いみな謙徳公と申しき。いと若くて失せおはしましたるとは九條殿の御遺言をたがへさせ給へるけとぞ人申しける。されどいかでかはさらでもおはしまさむ。御葬送のさたをむげに略定に書きおかせ給へりければ、いかでかいとさはとて例の作法に行はせ給ふとぞ。これはことわりの御しわざぞかし。唯御かたち身のさえ、何事もあまりすぐれさせ給へれば、御命のみとゝのはせ給はざりけるにこそ。折々の御和歌などこそめでたく侍れな。春日の使におはしまして、かへさに女のもとに遣したりける、

「くればとくゆきて語らむあふことのとほちの里のすみうかりしも」。
御かへし、
「逢ふことはとほちの里にほどへしもよし野の山とおもふなりけむ」。
助信の少將、宇佐の使にて下られしに、殿上にてはなむけに菊の花のうつろひたるを題にて別の歌よませたまへる、
「里とほくうつろひぬとかきくの花をりて見るだにあかぬこゝろを」。
御門の御をぢ東宮の御おほぢにて攝政せさせ給ひて、寢殿の裏板のかべの少し黑かりければ俄に御らんじつけてとかくみちのくに紙をつぶと押させ給へりけるが、なかなか白く清らに侍りける。思ひよるべきことかはな。御家は今の世尊寺ぞかし。御ぞうの氏寺にておかれたるを、かやうの序には立ち入りて見給ふれば、まだその紙のおされて侍るこそ昔にあへる心ちしておはれに見給ふれ。かくやうの御さかえを御覽じおきて、御年五十にだに足らでうせさせ給へるあたらしさは、父おとゞにも劣らせ給はずとこそ世ひと惜み奉りしか。その御をとこ女の君達あまたおはしましき。女君一人は冷泉院の御時の女御にて花山院の御母、贈皇后宮にならせ給ひにき。次々の女君二人は法住寺の大臣の北の方にてうち續きうせさせ給ひにき。九の君は冷泉院の御みこの彈正宮と申し、御うへにておはせしを、その宮うせ給ひて後、尼にていみじう行ひ勤めておはすめり。又忠君の兵衛督の北の方にておはせし

が、後には六條の左大臣殿の御子の左大辨のうへにておはしけるは四君とこそは。又花山院の御妹の君、一宮はうせ給ひにき。女二君は圓融院の御時の齊宮にたゝせ給ひて、天延三年になり給ひて、貞元三年に圓融院の御時女御に參り給へりし。程もなく内の焼けにしかば火の宮と世の人もつけ奉りき。さて一二度參り給ひて程もなくうせさせ給ひにき。この宮に御覽せさせむとて三寶繪はつくれるなり。男君達は代明の親王の御女のはらに藏人の前少將後少將とて花を折り給ひし君達の、殿うせ給ひて三年ばかりありて、天延二年甲戌のとし、もがさおこりたるに煩ひたまひて前の少將は朝に失せ給ひ後の少將は夕にかくれ給ひしぞかし。一日がうちに二人の子を失ひ給へりし母北の方の御心ちいかなりけむ、いとこそ悲しく承りしか。後少將は義孝とぞきこえし。御かたちいとめでたくおはし年ごろきはめたる道心者にぞおはしける。病重くなるまゝに生くべうも覺え給はざりければ、母上に申し給ひけるやう、「おのれ死に侍りぬとも、とかく例のやうにせさせ給ふな。しばし法華經誦じ奉らむの本意侍れば、必ずかへりまうでくべし」とのたまうて、方便品を誦み奉り給ひてぞうせ給ひける。その遺言を母北の方忘れ給ふべきにあらねど物覺えでおはしければ、思ふに人のし奉りてけるにや、枕がへしなどにやと、例のやうなるありさまどもにしてければ、えかへり給はずなりにけり。後に母北の方の御夢に見えたまひける、

「去かばかり契りしものゝをわたり川かへるほどには忘るべしやは」

とぞよみ給へりける。いかなる心ちし給ふ、悔しくおぼしけむな。さてのちほどへて賀縁阿

闍梨と申すの僧の夢に、この君達二人おはしけるが、兄の前少將はいたう物思へるさまに見え給ひ、この後少將はいと心ちよげなるさまにて見えたまひければ、阿闍梨、「君はなど心ちよげにてはおはする。母上は君をこそおもに君よりはいみじうこひ聞え給ふめれ」ときこえければ、いとあたはぬさまのけしきにて、

「時雨とはちぐさの花ぞちりまがふなにふる里に袖ぬらすらむ」

などうちよみ給ひて、又誦し給ひける、

「昔契蓬萊宮裏月　今遊極樂界中風」

とぞのたまひける。さて後小野宮の實資のおとゞの御夢に、おもしろき花の陰におはしけるを、うつゝにも語らひ給へりし御中にて、いかでかくはいづくにいてかなとめつらしがり申したまひければ、御いらへにこの詩はありけり。極樂に生れ給へるにぞあなる。かやうにも夢などしめい給はずとも、この人の御往生を疑ひ申すべきにあらず。世のつねの君達のやうにうちわたりなどにても、おのづから女房とかたらひ、はかなき事をだにのたまはせざりけるに、いかなるをりにかありけむ、はそどのに立ちより給へれば、例あらずめづらしくて物語聞えさせけるに、やうやう夜中などにもなりやしぬらむと思ふ程に立ちのき給ふを、いづかたへかとゆかしうて、人つけ奉りて見せたりければ、北の陣より出で給ひけるほどより、法華經をいみじくたふとく誦し給ひ大宮のぼりにおはして世尊寺におはしましつきぬ。なは見れば東の對のつまなる紅梅のいみじう盛に咲きたる下に立たせたまひて、滅罪生善往生極樂といふぬかを西にむかひてあまた度つかせ給ひけり。歸り侍りて御有樣語りければ、いといと哀に聞き奉らぬ人なし。この

おきなもその頃大宮なる所にやどりて侍りしかば御聲にこそおどろきていとゆみじう承りしかば、翁いで〳〵見奉りしかば、空はかすみわたりたるに月はいみじうあかくて、御なほしのいと白きにこき指貫に、よい程に御くゝりあげて、何色にか、色ある御ぞどものゆたちより多くこぼれ出で〳〵侍りし御容體などよ。御顔の色月かげにはえて、いと白う見えさせ給ひしにびんぐさのけちえんにめでたくこそおはしまし〳〵か。やがて見つぎ見つぎにおほん供に參りて御ぬかづかせ給ひて見も奉りはべりき。いと悲しくあはれにこそ侍りしか。御供にわらは一人ぞさぶらふめりし。又殿上の逍遙侍りし時さらなり、こと人は皆こゝろ〴〵ろに狩裝束めでたうせられたりけるに、この殿はいとうまれ給ひて、白き御ぞどもにかうぞめの御狩衣、薄色の御指貫、華やかならぬあはひにてさし出で給ひけるこそなかなか心を盡したる人よりはいみしうおはしけれ。常の御事なれば法華經御口につぶやきて、紫檀の御數珠の水精のさうぞくしたるひきかくして持ち給ひたりけり。御用意などの優にこそおはしけれ。大かた一生精進始め給へる、まづありがたき事ぞかし。猶々同じ事のやうに侍れどいみじと見給へ聞きおきつる事は申さまほしくて。此の殿は御かたちのありがたく末の代もさる人や出でおはしましたがたからむとまでこそ見給へりしか。雪のいみじう降りたりし日、一條左大臣殿に參らせ給ひて、御前の梅の木に雪のいたう積りたるを折りてうちふらせ給へりしかば、御上にはらはらとかゝりたりしを、御なほしの裏の花なりけるがかへりていとまだらになりて侍りしにもてはやされさせ給へりし御かたちこそいとめでたくおはし

ましゝか。御兄の少将もいとよくおはしき。このおとゞのかくおまりにうるはしくおはしゝをもどきて少しよう悍におしき人にてぞおはせし。その義孝少将、桃園の源中納言保光卿の女の腹に生ませ給へりし君ぞかし、今の侍従大納言行成卿世の手かきとのゝしり給ふは。この殿の御をのこゞ唯今の但馬守實経の君、尾張權守良経の君二人は泰清三位の女の腹なり。むかひばらは少将行経の君、又女君は入道殿の御子高松ばらの權中納言殿の北の方にておはせし。姫君十五にてうせ給ひにきかし。又今のたばの守経頼の君の北の方にておはす。又大姫君おはしますとか。この侍従大納言殿こそひごのすけとてまだ地下にておはせし時藏人頭になり給ふなれ。いと珍らしき事よな。その頃は源民部卿殿は、この民部卿心うるはしくして、おまわうくうに生れたるほやけにつかまりしにより、ゑんと夢に見ねたる人なり。職事にておはしますに、上達部になり給ひければ、一條院、「この次には又誰かなるべき」と問はせ給ひければ「行成なむまかりなるべき人に候ふ」と奏せさせ給ひけるを、「地下のものはいかゞあるべからむ」とのたまはせければ、「いとやんごとなきものに候ふ。地下など思し憚らせ給ふまじ。行く末にもおほやけに何事にもつかまつらむに堪へたるものになむ。かくやうなる人を御覧じわかぬは世のためあしき事に侍り。善悪を辨へおはしませばこそ人も心づかひは仕うまつれ。このさはになさせ給はゞらむはいと口惜しきことにこそさぶらはめ」と申させ給ひければ、道理の事といひながらなり給ひにしぞかし。大方むかしは前の頭の舉によりて後の頭はなることにて侍りしなり。されば殿上にわれなるべしなどさだのぶの民部卿中將にておはせしをり思ひ給へりける。この人はこよひと聞

きて参り給へるに、いづこもとくかにさしあひ給へりけるを「たれぞ」と問ひ給へるに、御名のり給へば、思ひかけずおぼして、「何事に参り給へるぞ」とあれば、「頭になしたびたれば参りて侍るなり」とあるにあさましとおきれてこそ動きもせで立ち給ひたりけれ。げに思ひかけず道理なりや。この源民部卿、かく申しなし給へる事をおぼし歎きて、従二位のをりかとよ、越え申し給ひしかど更にかみに居給はざりき。かの殿出で給ふ日はわれ病申し、又共にいで給ふ日はむかへ座などにだ居給ひし。さて民部卿正二位のをりこそはもとのやうに下臈になり給ひしか。大方この御ぞうの頭あらそひにかたきをつぎ給へば、これもいかゞおはすべからむ。皆人知しめしたるとなれどあさなりの中納言と一條攝政と同じ折の殿上人にて、さなの程こそ一條殿とひとしからね、身のざえ世おぼえやんごとなき人なりければ頭になるべき次第いたりたるに、又この一條殿、さうなく道理の人にておはしましけるを、このあさ成の君申し給ひけるやう「殿はならせ給はずとも人わろく思ひ申すべきにあらず。のちのちにも御心に任せさせ給へり。おのれはこの度まかりはづれなばいみじうからかるべきことにてなむ侍るべきを、のかせ給ひなむや」と申し給ひければ、「こゝにもさ思ふ事なり。さらばさりまさむ」とのたまふを、いとうれしと思はれけるにいかにおぼしなりにけることにか、やがてとひ事もなくなり給ひにければ、かくはかり給ふべしやはといみじう心やましと思ひまされけるほどに、御中よからぬ事にて過ぎ給ふほどに、この一條殿の御つかうまつる人とかやのためになめき事ざ給ひたりけるを、ほいなしなどばかりは思ふとも、いかに事

に觸れて我などをばかくなめげにもてなすぞとむづかり給ふと聞きて、あやまたぬよしも申さむとて參られたりけるに、さやうの人は我よりたかき所にまうでゝは、こなたへとなきかぎりはうへにものぼらでしもにたてる事にてあむありけるをこれは六七月のいと暑く堪へがたき頃、かくとまさせて今や今やと中門に立ちて待つ程に西日もさしかゝりて暑く堪へがたしとはおろかなり。心ちも損はれぬべきに、早うこの殿は我をあぶり殺さむとおぼすにこそありけれ、やくなくも參りにけるかなと思ふにすべて惡心起るなどはおろかなり。夜になる程さてあるべきならねば、さくをおさへて立ちければ、はたうと折れける。いかばかり心を起されにけるにか。さて家に歸りて、「このぞう永くたゝむ。若しをのこ子もをんな子もありともはかばかしくてはあらせじ。哀といふ人もあらば、それをも恨みむ」など誓ひてうせ給ひにければ、だいだいの御惡靈とこそはなり給ひたれ。さればましてこの殿近うおはしませば、いとおそろし。殿の御夢に、南殿の御後の戸のもと、必ず人の參るにたつ所よな。そこに人の立ちたるを誰ぞと見れば、顏は戸のかみに隱れたればよくも見えず。あやしうて、「たぞたぞ」とあまた度問はれて「朝成に侍り」といらふるに、夢の中にもいとおそろしけれど、念じて「などかくては立ち給ひたる」と問ひ給ひければ、「頭辨の參らるゝを待ち侍るなり」といふと見給ひて、おどろきて、「今日は公事ある日なれば疾くまゐるらむ。ふびなるわざかな」とて、「夢に見え給ひつることあるを、今日は御病申などもして物忌かたくして何かまゐり給ふ。こまかにはことづから」と書きて「急ぎ奉り給へ」とちかひて、いと疾く參り

給ひにけり。まもりのこはくやおはしけむ、例のやうにはあらで、北の陣より藤壺後涼殿のはざまより通りて殿上に参り給へるに、こはいかに、「御消息奉りつるは御覧せざりつるか、かゝる夢をなむ見侍りつる。とくいでさせ給ひねかし」と聞えさせ給ひければ、手をはたとうちて、いかにぞとこそかにも問ひまさせ給はず、またふたつものたまはで出で給ひにけり。さてぞ御祈など云給ひて、云ばしは内へも参り給はざりけり。このものゝけの家は三條より北、西の洞院よりは西なり。今に一條殿の御ぞう、あからさまにも入らぬ所なり。この大納言殿萬にとゝのひ給へるを、和歌の方やすこし後れ給へりけむ。殿上にうたろぎといふ事出できて、その道の人々いかゞもだふすべきなど歌の學問より外の事もなきに、この大納言殿は物もの給はざりければ、いかなる事ぞとてなにがしとのゝ、「難波津にさくやこの花冬ごもり、いかに」ときこえさせ給ひければ、とばかり物ものたまはで、いみじうおぼし案ずるさまにもてなして、「え云らず」と答へさせ給へりけるに、人々笑ひてことさめ侍りにけり。少しいたらぬ事にも御たましひ深くおはして、らうらうしくなし給ひける御本性にて、みかどをさなくおはしまして、人々に「あそびものまゐらせよ」とおほせられければ、さまざまこがね云ろがねなど心をつくして、いかなる事をがなとふりうをしいでゝもて参りあひたるに、この殿はこまつぶりにむらごの緒つけて奉り給へりければ、「あやしのものゝさまや。これは何ぞ」と問はせ給ひければ、「云か云かの物になむと申す。舞はして御覧じおはしませ。興ある物に」など申されければ、南殿に出させ給ひて舞はさせ給ふに、いと廣き殿のうちに殘

らずくるべきあるけば、いみじう興せさせ給ひて、をこれのみ常に御覽じ遊ばせ給へば異物どもはこめられにけり。又殿上の人々扇どもして參らするに、こと人々は骨にまさるをし、或は玄ろがね、こがね、ぢん、紫檀の骨になむすぢを入れはりものをし、えもいはぬ紙どもに人のなべて知らぬ歌や詩や、又六十餘國の歌枕に名あがりたる所々などを書きつゝまぜらするに、例のこの殿はほねの漆ばかりをかしげに塗りて、黄なるかうがみの下繪はのかにをかしきほどなるに、おもての方には樂府をうるはしう眞にかき、裏には御筆をとゞめて草にめでたくかきて奉り給へりければ、うちかへしうちかへし御門御覽じて御手箱に入れさせ給ひて、いみじき御寶と思しめしたりければ、ことあふぎどもは唯御覽じ興ずるばかりにてやみ侍りにけり。いづれもいづれも帝王の御感侍るにますことやはあるべきな。いみじきすくの給へる人なり。このかや院殿にてくらべ馬ある日、皷は讃岐の前司あきまさの君ぞうち給ひし。一番にはなにがし、二番にはかゞしなどいひしかど、その名こそおぼえね、勝つべき方のつゞみをおしくうちさげてまけになりければ、その隨身のやがて馬の上にのりながら、ないばらをたちて見かへるまゝに「あなわざはひや、かばかりのことをだに玄そこなひ給ふよ。かゝれば明理行成と一雙にいはれ給ひしかども、一の大納言にて、いとやんごとなくてさぶらはせ給ふに、くさりたる讃岐の前司ふるずらうの皷うち損ひてはたちたまひたるだかし」とはうでしたいまつりたるを、大納言殿聞かせ給ひて、「明理のらんかうに行成がしこな呼ぶべきにあらず。いとからい事なり」とて笑はせ給ひければ、人々いみじうの給はせた

りと興じ奉りて、その頃のいひごとにこそ侍りしか。又一條攝政殿の御をのこ子、花山院の御時御門の御をぢにてよしちかの中納言と聞えし少將だちの御同じはらよ。その御時はいみじう華やぎ給ひしに、御門出家せさせ給ひてしかば、やがて我もおくれ奉らじとて花山寺まで尋ね參りて中日一日をはさめて法師になり給ひき。飯室といふ所にいとたふとく行ひてぞかくれ給ひし。その中納言文盲にはおはせしかど、御心だましひいとかしこく、いうそくにおはして、花山院の御時のまつりごとは唯この殿とこれしげの辨として行ひ給へればいといみじかりしぞかし。その御門をば内おとりのとめでたとぞ世の人申しゝ。「冬の臨時の祭の日の暮るゝおしき事なり。辰の時に人々參れ」と宣旨下させ給ふを、さぞ仰せらるともみうまの時にぞおはしますらむなど思ひ給へりけるに、舞人の君だちさう束賜はりに參りおはさうじたりければ、御門は御さう束奉りて立たせおはしましたりける。この入道殿も舞人にておはしましければ、この頃語らせ給ふなるを傳へてうけたまはるなり。わかく大路あどわたるがよかるべきにやと思ふに、御門馬をいみじう興せさせ給ひければ、舞人の馬をこうらう殿の北のめだうよりとはさせ給ひて、あさがれひの壺にひきおろさせ給ひて、殿上人どもを乘せて御覽ずるをだにあさましう人々思ふに、はては乘らむとさへせさせ給ふに、すべき方もなくてさぶらひわひ給へる程に、さるべきにや侍りけむ、入道中納言さし出で給へりけるに、御門御おもていと赤くならせ給ひて、すぢなげにおもはしめしたり。中納言もいとあさましう見奉り給へど、人々の見るに制し申さむもなかなかに見苦しければ、も

てはやし興じ申し給ふさまにもてなしつゝ、自らしたがさねのしりはさみて乗り給ひぬ。さばかりせばき壺にをりまはし、おもしろうあげ給へば御氣色なほりて、あしき事にはあらぬことなりけりと思し召して、いみじう興せさせ給ひけるを、中納言あさましうも哀にもおぼさるゝ御けしきは、同じ御心によからぬ事をはやし申し給ふとは見えず。誰もさぞかしとは見しり聞えさする人もありければこそはかく申し傳へたれな。又みづから乗り給ふまではあまりなりといふ人もありけり。これならずひたぶるに色にはいたくも見えず、唯御本性のけしからぬさまに見えさせ給へばいと大事にぞ。されば源民部卿は「冷泉院のくるひよりは花山院のくるひこそすぢなきものなれ」と申し給ひければ、入道殿は「いとふびなる事をもまさるゝかな」とおほせられながら、いみじう笑はせたまひけり。この義懐の中納言の御出家、惟成辨のすゝめ聞えられたりけるとぞ。いみじういたりわりける人にて、「今更によそ人にてまじらひたまはむほど見苦しかりなむ」ときこえさせければ、げにさもといとゞおぼしてなり給ひにしを、もとより起し給へる道心ならねばいかゞと人おもひ聞えしかど、おり居給へる御心の本性なればけたいなく行ひ給ひてうせ給ひしぞかし。その御子は唯今の飯室僧都守禪の君、又繪阿闍梨の君、入道中將成房の君なり。この三人は備中守爲雅が女の腹あり。その中將の御女は定經ぬしの御めにてこそはおはすめれ。一條殿の御ぞうはいかなる事にか御命みじかくぞおはしますめる。花山院の御出家の本意あり、いみじう行はせ給ひ、修行せさせ給はぬところなし。されば熊野の道にちざとの濱といふ所にて御心ちそこなはせ

給へれば、漸づゝに石のあるを御枕にて大殿ごもりたるに、いと近くあまの鹽焼く煙のたちのぼる心ぼそさ、げにいかにおはれにおぼされけむな。

「旅の空夜はのけぶりとのぼりなばあまのもしほ火たくかとやみむ」。

かゝるほどに御驗もいみじうつかせ給ひて、中堂にのぼらせ給へる夜、驗くらべしけるを試みむとおぼしめして、御心のうちにねんじおはしましければ、護法つきたる法師おはしますふをりぞつけつるを、僧どものがりをどりいぬるを早う院の御護法のひきとるにこそありけれと人々あはれに見奉る。それさることに侍り。驗もしなによるとなればいみじきおこなひ人なりともいかでかなずらひ申さむ。前生の戒力に又國王位をすて給へる出家の御功徳限なき御事にこそおはしますらめ。行く末までもさばかりにならせ給ひなむ御心には懈怠させ給ふべき事かはな。それにいと怪しくならせ給ひし、御心あやまちも唯御物怪のし奉りぬるにこそは侍るめりしか。中にも冷泉院の南の院におはしましゝ時、燒亡ありし夜、御とぶらひに參らせ給へりしあり樣こそふしぎにさぶらひしか。御親の院は御車にて二條町しもの辻に立たせ給へり。この院は御馬にて頂にかゞみ納れたる笠頭光に奉りて、「いづこにか坐しますいづこにか坐します」と御手づから人毎に尋ね申させ給へば、「そこそこになむ」と聞かせ給ひて、おはしまし所へ近くおりさせ給ひぬ。御馬の鞭かひなにいれて御車の前に御袖うちあはせて、いみじうつきづきしう居させ給へりしは、さる事やは侍りしとよ。

それに又冷泉院の御車のうちより高やかに神樂歌をうたはせ給ひしはさまざま興ある事をも見きくかなとおぼえ候ひしに、おきのぶのぬしのけはひいと猛なりや」との給ひけるにこそ萬人えたへず笑ひ給ひにけれ。さて又花山院のひと〳〵せ祭のかへさ御覽せし御ありさまは誰も見奉りけむな。まへの日事いださせ給へりし度のことぞかし。さる事あらむ時、今日は猶御ありきなどなくてもあるべきにいみじき異樣一のものども、からぼうのらいせいをはじめとして御車のえりにうちむれ多く參りしきそくども、いへばおろかなり。何よりも御數珠のいと興ありしなり。ちひさき柑子を大方の玉につらぬかせ給ひて、だつまには大柑子をしたる御數珠いとながく御指貫に具して出させ給へりしはさる見ものやは候ひしな。人々むらさい野にて御車に目をつけ奉りたりしに檢非違使まゐりて、昨日事出したりしわらはべとらふべしといふ事出できにけるものか。この頃の權大納言殿、またその頃は若くおはしましゝほどぞかし、人はしらせて、「からかうの事候ふ。疾くかへらせ給ひね」と申させ給へりしかば、そこらさぶらひつるものども蜘蛛の子を風の吹きはらふ如くに逃げぬれば、唯御車ぞひのかぎりにてやらせて、見もの車のうしろの方よりおはしましゝこそさすがにいとほしくかたじけなく覺えおはしましゝか。さてけびゐしつきや、いといみじうからうせめられ給ひて、太上天皇の御名は永くくださせ給ひにき。かゝればこそ民部卿殿の御いひごとはげにと覺ゆれ。さすがに遊ばしたる和歌はいづれも人の口にのらぬなく、優にこそうけたまはれな。

「こゝろみにほかの月をも見てしがな我が宿からのおはれなるかと」

などは、この御有様に思し召しよりける事とも覚えず、心苦しうこそさぶらへ。さて又冷泉院にたかんな奉らせ給へるをりは、

「世の中にふるかひもなき竹の子はわがへむ年をたてまつるなり」。

御かへし、

「年へぬるたけのよはひは返してもこの世をながくなさむとぞおもふ」。

かたじけなく仰せられたりと御集に侍るこそおはれに候へ。誠にさる御心にも祝ひ申さむと思し召しけむ悲しさよ。この花山院は風流者にさへこそおはしましけれ。御家造らせ給へりしさまなどよ、寝殿、對、渡殿などはつくりわひ、ひはだふきわはすることもこの院のしいでさせ給へるなり。昔はべちべちにてわはひに樋かけてぞはべりし。内裏は今にさこそは侍るめれ。御車やどりには板敷を奥は高く端はさがりて大きなる妻戸をせさせ給へる故は、御車のさうず𥫱くをさながら立てさせ給ひて、おのづからとみの事の折にとりわへず戸おしひらかばからからと人の手ふれぬさきにさし出されむがれうと面しろく思し召したる事ぞかし。御調度どもなどのけうらさこそえもいはず侍りけれ。六の宮のたえいり給へりし御誦經にせられたりし御硯の箱見給へき。海賦に蓬萊山手長足長などこがねしてまかせ給へりしこそ、かばかりの箱の漆つき蒔繪のさまくちおかれたりしやうなどのいとめでたかりしなり。又木だちつくらせ給ひしをりは、「櫻の花はいうなるに枝ざしのこはごはしくて、もとの

やうなどもにくし。梢ばかりを見るなむをかしきとて中門よりとに植ゑさせ給へる、何よりもいみじく思しめしよりたりと人は感じ申しき。又撫子の種をついぢの上にまかせ給へりければ思ひかけず四方にいろいろに唐錦をひきかけたるやうに咲きたりしなどを見給ひしはいかにめでたく侍りしかば、入道殿のくらべ馬せさせ給ひしははむかへ申させ給ひけるに、渡りおはします日の御よそほひは更なりおろかなるべきにもあらねど、それにつけても誠に御車のさまこそ又世にたぐひなくさふらひしか。御くつに至るまで、唯人の見物になるばかりこそ後にはもてありくと承りしか。あて御繪遊ばしたりしさまにけうあり。さはは車の輪には湖墨にぬらせ給ひて、大きさの程やなどしるしには墨をにはは せ給へりし、げにかくこそ書くべかりけれ。あまりにはしる車はいつかはくろさのほどやは見え侍る。又たかんなのはを男のおよびごとに入れて、めかゝうしてちごをおどせば、顔赤めてゆゝしうおぢたるかた、また徳人、たよりなしの家の内の作法などかゝせ給へりしが、いづれもいづれもさぞありけむとのみあさましうこそ候ひしか。この中に御覧じたる人もやおはしますらむ。

太政大臣兼通のおとゞ

これ九條殿の二郎君、堀川の攝政と聞えさせき。攝政し給ふこと六年、安和二年正月七日宰相にならせ給ふ。閏五月廿一日宮内卿とこそは申しゝか。天祿二年壬二月廿九日中納言にならせ給ひて、大納言をばへで、十一月廿七日内大臣にならせ給ふ。いとめでたかりしことな

り。弟の東三條殿の中納言殿におはしましゝに、まだこの殿は宰相にて、いとからき事に思したりしに、かくならせ給ひし、めでたかりし事なりかし。天延二年正月七日從二位せさせ給ふ。二月廿八日に太政大臣にならせたまふ。やがて正二位せさせ給ひててぐるまゆるさせ給ひて、三月廿六日關白にならせ給ひにしぞかし。宰相にならせ給ひし年より六年といふにかくならせ給ひにき。天延三年正月七日一位せさせ給ひてき。貞元二年十一月八日うせさせ給ひにき。御年五十三。同二十日贈正一位の宣旨あり。後の御いみな忠義公と申しき。この殿かくめでたくおはします程よりは、ひまなくて大將にえなり給はざりしぞ口をしかりしや。それかやうならむためにこそあれ、さてもありぬべき事なり。たゞ思しめせかしな。御母のことなきは一條殿のおなじにや。圓融院の御母后、このおとゞの妹におはしますぞ。この后村上の御時、康保元年四月廿九日にうせ給ひにしぞかし。この后のいまだおはしましゝ時に、このおとゞいかゞおぼしけむ。「關白は次第のまゝにせさせ給へ」とかゝせ奉りて、とり給ひたりける御文をまもりのやうに首にかけて年頃もちたりけり。御おとゝの東三條殿は冷泉院の藏人頭にて、この殿よりも先に三位して中納言にもなり給ひにしに、この殿ははづかに宰相ばかりにておはせしかば、世の中すさまじがりて內にも常に參り給はねば、御門も疎くおぼしめしたり。その時に兄の一條攝政、天祿三年十月にうせ給ひぬるに、この御ふみを內にもてまゐり給ひて、御覽せさせむとおぼすほどに、うへ鬼の間におはします程なりけり。をりよしと思し召すに、御をぢたちの中に疎くおはします人なれば、うち御覽じて入ら

せ給ひき。さしよりて「奏すべきこと」と申し給へば、立ちかへらせ給へるに、この文をひきいで〳〵参らせ給へれば、とりて御覧ずれば、紫のうすえふ一かさねに故宮の御手にて、「關白をば次第のまゝにせさせたまへ。ゆめゆめたがへさせ給ふな」とかゝせ給へる、御覧ずるまゝにいとあはれげに思し召したる御氣色にて、「故宮の御手よ」などおほせられ、御文をばとりて入らせ給ひけりとこそは。さてかくいで給へるとこそは聞え侍りしか。いと心かしこくおぼしける事にて、さるべき御宿世とは申しながら、圓融院けうやうの心深くおはしまして母宮の御遺言たるべしとて、なしたてまつらせ給へりける、いとあはれなる事なり。その時賴忠のおとゞ右にておはしまし〳〵かば道理のまゝならばこのおとゞの玄給ふべきにてありしに、この文にてかくありけるとこそは聞え侍りしか。東三條殿もこの堀川殿よりは上臈にておはしまし〳〵かば、いみじう思し召しよりたる事ぞかし。御はてのなきは一條殿のおなじにや。この殿の御袴着に眞信公の御もとに参り給へるを、物にそへさせ給ふとて貫之のぬしにめしたりしかば奉られたりし歌ぞかし。

「ことに出で〳〵心のうちに玄らるゝは神のすぢなはぬひけるなりけり」。

ひきいで物に事をせさせ給へるにや。御かたちいと清げにきら〳〵かになどぞおはしまし〳〵。堀川院にすませ給ひし頃、臨時かくの日寢殿のすみの紅梅盛に咲きたるを、事はてゝうへ参らせ給ふまゝに花の下にたちよらせ給ひて、一枝おしをりて御かざしにさして、けしきばかりうちかなでさせ給へりし日などはいとこそめでたく見えさせ給ひしか。この殿にはごや

にめすばうすの御さかなには唯今殺したる雉子をぞまゐらせおけるにもてまゐりわふべきならねば宵よりぞ設けておかれける。業遠のぬしのまだ六位にて始めてまゐらるゝ夜、御沓樋のもとにゐられたりければ樋の内に物のほとほとゝしけるが怪しさに、暗きまぎれなればやをら細目にあけて見給ひければ、雉子のをとりはかゞまりをるものか。人のいふことはまことなりけりとあさましくて、人のねにけるをりにやをらとりいでつ。ふところにさし入れて冷泉院の山にはなちたりしかば、ほろほろと飛びてこそいにしか。「事ゑえたりし心ちはいみじかりしものかな。それにぞ元如我はかう人なりけりとはおぼえしか」となむ語られける。殺生は殿ばらのみなせさせ給ふ事なれどこれはむげのむやく事なり。この殿の御むすめ式部卿の宮、元平のみこの御女の腹の姫君、圓融院の御時の女御に参り給ひて、天延元年七月十一日后にたゝせ給ひて堀川の中宮と申しき。みこうまれ給はずなりにき。天延二年六月二日うせ給ひにき。をさなくおはしましゝほどは、いかなりけるにか、例の御おやのやうに常に見奉りなどもゑ給はざりしかば、御心いとかしこく又御後見などこそは申しすゝめけめ。物詣、のりをいみじうせさせたまひけるとか。稲荷の坂にてもこの女ども見奉りけり。いと苦しげにて御うしろおしやりて、おふがれさせ給ひける御姿つき、指貫のこしきはなども、さはいへど多くの人よりはけだかく、なべてならずぞおはしましける。かやうに勤めさせ給ふつもりにやゝやうやうおとなび給ふまゝに、これよりおとなある御娘もおはしまさねば、さりとも后に立て奉らであるべきならねばかく参らせ給ひて、いとやんごとなく

さぶらはせ給ひしぞかし。今一所の姫君、内侍のかみにならせ給へりし、今におはします。六條左大臣殿の御子の讃岐の守のうへにて坐するとかや。又太郎君の顯光と聞えし、堀川の左大臣と申す。長徳二年丙申七月二十日右大臣にならせ給ひにき。御年七十三四にやおはしましけむ。治安元年五月廿五日ぞうせ給ひし。この五年ばかりにやなりぬらむ。惡靈の左のおほいどのと申し侍へたるいと心うき御名ぞかし。その故ども皆はかたり侍るべし。この北の方には村上の先帝の女御の宮ひろかたの御息所の御腹ぞかし。その御腹に男一人女二人ぞおはしまし、。男君は重家の少將とて心ばへいうそくに世おぼえ重くてまじらひ給ひし程に、世に久しくおはしますまじかりければにや出家してうせ給ひにき。女君一所は一條院の御時の承きやう殿の女御とておはせしかど、院うせ給ひて後、末には爲平の式部卿の宮の御子源宰相頼定の君の北の方にて、あまたの君達うみつゞけておはすめり。そのほどの御事どもは皆人ゑゑろしめしたらむかし。その宰相うせ給ひてしかば尼になりておはします。今一所は今の小一條院のまだ式部卿の宮と申しゝをり、聟にとり奉らせ給へりしほどに、東宮に立たせたまへりしをうれしき事に思しゝかど、院にならせ給ひにし後は高松殿のみくしげ殿渡らせ給ひて、御心ばかりは通はせ給ひながら通はせ給ふ事絶えにしかば、女御も父おとゞもいみじうおぼし歎きし程に、御病にもなりにけるにや、過ぎにしひつじの年の二月ばかりにうせ給ひにき。いみじきものになりて、父おとゞ具してこそしありき給ふなれ。院の女御には常に附き煩はせ給ふなり。その腹に宮達あまた所おはす。又堀川の攝政殿の御次郎

兵部卿おりおきら、この親王の御女の腹の君、中宮の御ひと腹にはおはせず。これは又閑院左大将あさ光と申して、父おとゞのおはしまし〳〵折、このかみの大臣宰相にておはしける程はこの殿は中納言にておはしける、ひきこされ給ひけるぞめでたく。その頃などすべていみじかりし御世覚えにて、かたちも心もすぐれ給へり。御まじらひの程など殊の外にきらめき給ひき。やなぐひの水晶の筈もこの殿の思ひより出いで給へるなり。なにごとの行幸に仕うまつり給へりしに、このやなぐひ負ひ給へりしは、朝日の光にかゞやきてさるめでたき事やは侍りし。今はめなれにたれば珍らしからず人も思ひて侍るぞ。何事につけても華やかにもていでさせ給へりし殿の、父どのうせ給ひにしかば、世の中おとろへなどして、御病もおもくて、大将も辞し給ひてしこそ口をしかりしか。さて唯藤大納言とぞ聞えさせし。和歌などこそいとかしこく遊ばし〳〵か。四十五にてうせ給ひにき。北の方には貞観殿の内侍のかみの御腹の左げおきらの式部卿の宮の御中姫君ぞおはせしかし。その御腹に男君三人、女君のかがやくごとなるおはせし。花山院の御時に参らせ給ひて一月ばかりいみじう時めかせ給ひしを、いかにしてける事にかありけむ。まうのぼり給ふこともとゞまり御門も渡らせ給ふことと絶えて御文だに見え聞えずなりにしかば、一二月さぶらひわびてこそは出させ給ひにしか。又さあましかりし事やはありし。御かたちなどの世のつねならずをかしげにて、おぼし歎く見奉り給ふ父の大将御せうとの君だちいかゞはおぼしけむ。その御一つ腹の男君三所太郎君は今の藤中納言ともつねの卿におはすめり。人に重く思はれ給へり。二郎三郎君は

馬の頭、少将などにて皆出家ぜつゝうせ給ひにき。この馬の入道の御をのこゞなり、今の右京の大夫は。この閑院の大将殿は後にはこの君達の母をばさりて枇杷の大納言延光の卿のうせ給ひにし後、その上の年老いてかたちなどわろくおはしけるにや、殊なる事聞え給はざりしをぞすみ給ひし。とくにつき給へるとぞ世の人申しゝ。さて世おぼえも劣り給ひにしぞかし。もとのうへ御かたちもいとうつくしく、人のほどもやんごとなくおはしましゝかど、不合におはすとて、かゝる今北の方をまうけて去り給ひにしぞかし。この今のうへの御もとには女房卅人ばかり裝唐衣きせて、えもいはずさうぞきてすゑならべて、ぜつらひありさまより始めてめでたくぜたてゝかしづき聞ゆる事かぎりなし。大将ありきて歸り給ふをりは、冬は火おほらかにうづみて、たきものおほきにつくりて、ふせごうちおきて、けに着たまふ御ぞをば暖かにてぞ着せ奉りたまふ。すびつにぜろがねのひさげ二十ばかりをすゑて。さまざまの薬をおき並べてまゐり給ふ。又寐たまふ疊のうはむしろに綿入れてぞぜかせ奉らせ給ふ。寢給ふ時には大きなる熨斗もちたる女房三四人ばかりいできて、かのお殿籠るむしろをば暖二のしなでゝぞ寢させ奉り給ふ。あまりなる御用意なりしかば大方のぜつらひありさま、女房のさうぞくなどはめでたけれども、この北の方はねり色のきぬの綿厚きふたつばかりに、白袴うちきてぞおはしける。年四十よばかりなる人の、大将にはおやばかりぞおはしける。色黑くて額に花がたうちつきて、髪ちゞけたるにぞおはしける。御かたちのほどを思ひしりて、さまにおひたるさうぞくとおぼしけるにや。誠にその御さうぞくこそかたちに

あひて見えけれ。さばかりの人の北の方と申すべくも見えざりけれど、もとの北の方重明の式部卿の宮の姫宮、貞観殿の内侍のみの御腹、やんごとなき人と申しながら、かたち有様めでたくおはしけるに、かゝる人に思しうつりてさり奉らせ給ひけむほど思ひはべる、たゞとくのありてかくもてかしづき聞ゆるに思ひのおはしけるにや。やんごとなき人だにこそかくはおはしけれ。あはれ翁らが心にだに、いみじき寶をふらしてあつかはむといふ人ありとも、年ごろの女どもをうち捨てゝまからむは、いとをかしかりぬべきに、さばかりにやんごとなくおはします人は不合におはすといふとも、翁らがやどりのやうに侍らむやは。この今の北の方、とに世の人にも輕く思はれ、世おぼえも劣り給ふらし。いと口をしきことに侍るや。さばかりの事おぼしわかぬやう侍るべしや。あやしの翁らが心に劣らせ給はむやはと思ひ給ふれど、口をしく思ひ給ふることなりしかば申すぞや」とてはゝゑむ氣色はづかしげなり。「さばかりの人だにかくおはしましければ、それより次々の人のいかなるふるまひもせむ、ことわりなりや。翁らが心ちの年頃あやしのやどりに、わりなき世を念じすごして侍りつるこそ有難く覺え侍りつれ。心よくうちすみたりし顔氣色こそいとをかしかりしか。さて時々もとの上の御もとへ坐しまさむとて、牛かひ車ぞひなどに「そなたへ車をやれ」と仰せられけれど更に聞かざりけり。この今の北の方、侍、雜色、隨身、車ぞひなどにさうぞくものとらする事はさるものにて、日毎に酒をいだして飲ませ遊せ、いみじき志どもをしける、そのけにやかくしけるを、それ又いと怪しき御心なりや。雜色牛かひの心にまかせて、それに

224492

よりてえおはしまさゞりけむよ。さることやは侍るな。さばこの大將は御心ばへもかたちも人にすぐれてめでたくおはせし人なり。堀川殿の御子大藏卿正光ときこえしが御娘、源帥殿の御中の君の御腹ぞかし、今の皇太后宮のみくしげ殿とてさぶらひたまふ。唯今の左兵衛督の北の方、又かんづけのさきのかみ兼定の君ぞかし、まことや北面の中納言とかや世に人の申しゝは。時光の卿それ又右京のかみにておはせし。この右京のかみの御子ぞかし、今の仁和寺の別當律師尋清君。堀川殿の御すゑかばかりか。このおとゞすべてひざうの御心ぞおはしましゝ。かばかり末絶えずさかえおはしましける東三條殿をゆゑなきことにより御つかさ位をとり奉り給へりし、いかに惡事なりしかば、天道も安からずおぼしめしけむを、その折の御門圓融院にぞおはしましゝ。東三條殿、かゝるなげきのよしを長歌によみて奉り給へりしかば、御門の御かへり、「いなふねの」とこそ仰せられければ、をばしばかりをおぼし歎きしぞかし。堀川殿はては我うせ給はむとては關白をば御いとこの賴忠のおとゞに讓り給ひしこそ世ひとのいみじきひが事と誹り申しゝか」。このむかひをる侍のいふやう「東三條殿のつかさなどとり奉らせ給ひしほどの事はことわりとこそ承りしか。おのれがおはぢおやはかの殿の年頃のものにて侍りしかば、こまかにうけたまはりしは、この殿たちのおにおとゞの御中、年頃のつかさ位のおとりまさりの程に御中おしくて過ぎさせ給ひしおひだに、堀川殿病重くならせ給ひて、今はかぎりにておはしましゝ程に、ひんがしの方にさきおふ音のすれば御まへにさぶらふ人だち「たれぞ」などいふ程に、「東三條の大將殿參らせ給ふ」と

人の申しければ、殿聞かせ給ひて「年ごろなからひよからずして過ぎつるに、今はかぎりになりたると聞きてとぶらひにおはするにこそは」とてお前なるくるしきものとりやり、おとのごもりたる所引きつくろひなどして、入れ奉らむとて待ち給ふに「早く過ぎて内へまゐらせ給ひぬ」と人の申すに、いとあさましく心うくて、お前に侍ふ人々もをこがましく思ふらむ。「おはしたらば關白など讓るとなど申さむとこそ思ひつるに、かゝればこそ年頃中らひよからで過ぎつれ。あさましく安からぬ事なり」とて、かぎりのさまにてふし給へる人の「かきおこせ」とのたまへば、人々あやしと思ふほどに「車にさうぞくせよ。御前もよほせ」と仰せらるれば、物のつかせ給へるか、うつし心はなくて仰せらるゝかと怪しく見奉るほどに、御かぶり召しよせてさうぞくなどせさせ給ひて内へ參らせ給ひて、陣のうちは君だちにかゝりて、瀧口の陣の方より御前へ參らせ給ひて、こうめいちのざうしのもとにさし出でさせ給へるに、日の御座に東三條の大將御前に侍ひ給ふ程なりけり。この大將殿は堀川殿既にうせさせ給ひぬと聞かせ給ひて、内に關白の事申さむと思ひ給ひて、この殿の門を通りて參りて申し奉るほどに、堀川殿のめをつゞらかにさしいで給へるに、御門も大將もいとあさましくおぼしめす。大將はうち見るまゝに立ちて鬼のまのかたにおはしぬ。關白殿御まへについゐ給ひて、御けしきいとあしくて、「最後の除目おこなひに參り給へるなり」とて、藏人頭召して、關白には賴忠のおとゞ、東三條殿おとゞをとりて小一條のなりときの中納言を大將になし聞ゆる宣旨下して、東三條殿をば治部卿になしきこえて出でさせ給ひて、程なくうせ給

ひしぞかし。心いぢにておはせし殿にて、さばかりかぎりにおはせしに、ねたさに内に参りて申させ給ひしほど、こと人すべてもなかりし事ぞかし。されば東三條殿つかさどり給ふ事も、ひたぶるに堀川殿のひざうの御心にも侍らず。事のゆゑはかくなり。關白は次第のまゝにといふ御文思しめしよりも、御いもうとの宮に申してとり給へるも、最後におぼす事どもしてうせ給へるほども思ひ侍るに心強くかしこくおはしましける殿なり」。この堀川の攝政の御末おひさらすこそあれいりけるごとかな。

太政大臣爲光のおとゞ

「これ九條殿の御九郎君、大臣の位にて七年、法住寺のおとゞと聞えさす。正暦三年六月十六日にうせ給ひにき。御年五十一。後の御いみな恒德公と申しき。御子をとこ七人、女君五人おはしき。女二所はすけまさの兵部卿の御いもうとの腹、今三所は一條攝政の御むすめの腹におはします。男君たちの御母、皆あかれおかれにおはしましき。女君一所は花山院の御時の女御、いみじう時におはせし程に、御子はらませ給ひて八月にてうせ給ひにき。今一所は入道中納言の北の方にてうせ給ひにき。男君太郎は左衛門督さねのぶときこえさせし、三十八にて惡心起してうせ給ひにしありさまは、いとあさましかりし事ぞかし。人に越えられからいめ見ることは、さのみこそおはしあるわざなるを、さるべきにこそはおりけめ。同じ宰相納言におはすれなど弟には人から世おぼえの劣り給へればにや、大納言おくきはに我もならなむとおぼして、わざとたいめし給ひて、「この度の大納言のぞみ申し給ふな。こゝに申

し侍るべきなり」ときこえ給ひければ、「いかでか殿の御前にはまかりなり侍らむ。ましてかく仰せられけむにはあるべき事ならず」と申し給ひければ、御心ゆきて、ゑかおぼして、いみじう申し給ふに及ばぬほどにやおはしけむ。入道殿このおとゞに、「そこは申されぬか」とのたまはせければ、「左衛門督の申さるればいかゞは」と云ふ云ふげに申し給ひけるに、「かの左衛門督はえならじ。又そこにさらずばこと人こそはなるべかめれ」とのたまはせければ、「かの左衛門督まかりなるまじくばよしなし。たゞべきなり」と申し給へば、又かくおらむ、こと人はいかでかとてなりたまひにしを、いかに我にむかひてあるまじきよしをいひてはかりけるぞとおぼすに、いとゞ悪心おこして、ちもくのおしたより手をつよくにぎりて、「我はたゞのぶ道長にはまれぬるぞ」といひいりて、物もつゆ参らずうつぶしうつぶし給へる程に、病づきて、七日といふにうせ給ひしに、握り給ひたりけるおよびはおまりつよくてうへにこそ通りていで給へりけれ。いみじき上戸にてぞおはせし。故中の關白殿の一とせの臨時客に、おまりゑひて御座に居ながら立ちもあへ給はで、物つき給へるにこそかう名のもゐろたかゞ書きたる樂府の御屏風にかゝりてそこなはれたなれ。この大納言になり給へるは今の中宮大夫たゞのぶの卿いと世覺えあり、よき人にておはしき。又權中將道信の君、いみじき和歌の上手にて心にくきものにいはれ給ひし程にうせ給ひにき。又唯今の左衛門督きんのぶの卿、法住寺の僧都の君、おざりの君おはす。又一條攝政殿の御むすめの腹の女君たち、三四五の御方おはします。三の御方は應司殿のうへとて尼になりておはします。四の御方は

今の入道殿の俗におはしまし、折の御子うみてうせたまひにき。五の君は今の皇后宮にさぶらはせ給ふ。このおとゞの御ありさまかくなり。たゞし法住寺をぞいとゞかめしうおきてさせ給へる、攝政關白せさせ給はぬ人の御ありさまにてはいとまうなりし。このおとゞいとやんごとなくおはしまし、かど御末はそくぞ。

太政大臣公季

このおとゞたゞいまの閑院のおとゞにおはします。これ九條殿の十一郎、御母宮腹におはします。御子の女をぞ北の方にてはおはしまし、。その御はらに女君一ところ、男君二ところ。女君は一條院の御時の弘徽殿の女御、いまにおはします。男一人は三昧僧都如源と申し、うせたまひにき。今ひとところの男君は唯今の右衞門督さねなりの卿にぞおはする。この殿の御子、播磨守陳政の御むすめのはらに女君二ところ男一人おはします。大姫君は今の中宮の權太夫殿の御北の方、今一ところ源大納言俊賢の卿。これ民部卿と聞ゆ。其御子の唯今の頭中將顯基の君の御北の方にてぞおはすめる。男君をば御おほぢの太政大臣殿、我が御子にゝたてまつり給ひて公成とつけ奉らせ給へるなり。藏人頭にて、いとおぼえことにておはする君になむ。この太政大臣殿の御ありさまかくなり。御門后立たせ給はず。このおほきおほとの、御母うへは延喜の御門の御女、女四宮と聞えさせき。延喜いみじくときめかせおもひたてまつらせたまへりき。御裳着の屏風に公忠の辨「ゆきやらで」とよむはこのみこの宮のなり。つらゆきなどあまたよみて侍りしかども、人にとりて勝れのゝしり給ひし歌よ。朱雀院、

村上二代のみかどのひとつ御腹のいもうとにおはします。さて内ずみしてかしづかれおはしましゝを、九條殿の女房をかたらひて、みそかに參らせ給へりしぞかし。世の人びなきとに申しゝ、村上のすめらぎも安からぬ事に思し召しおはしましけれど、色にいでゝ咎め仰せられざりにしも、この九條殿の御おぼえのかぎりなきによりてなり。さて又人々うちさゝめき、うへにも聞し召さぬ程に、雨おどろおどろしくふり神なりひらめきし日、この宮うちにおはしますに、「殿上の人々四の宮の御方に參れ。恐しく思し召すらむ」と仰ごとあれば誰もまゐり給ふに、小野宮のおとゞぞかし、「まゐらせしはおまへのきたなきに」とつぶやき給ふは。後にこそみかど思し召しわはせけめ。さて殿にまかでさせ奉りて、思ひかしづき奉らせ給ふといへば、さらなりや。さる程にこの太政大臣をはらみ奉り給ひて、いみじう物の心ぼそく覺えさせ給ひければ、「まろは更にわるまじき心ちなむする。よし見たまへよ」と男君に常にきこえさせ給うければ、「まことにさもおはしますものならば、片時もおくれ申すべきあらず。もし心にあらずながらへさぶらはゞ、出家ゑ必ず侍りなむ。又ふたつこと人見るといふ事はあるべきにも侍らず。天がけりても御覽せよ」と申させ給ひける。法師にならせ給はむことはあるまじとや思し召しけむ。ちひさき御唐櫃一よろひに片つかたは御ぞぼうし今かたつ方には玄たうづを一からびつづゝ御手づからつゝふとぬひいれさせ給ひけるを殿はさも知らせ給はざりけり。さて遂にうせさせ給ひにしは。さればこの太政大臣は生れさせ給へる日をやがて御忌日にておはしますなり。かのぬひおかせ給ひし御ぞぼうし、御したうづ

御覧ずる度ごとには九條殿をはたれさせ給はぬをりなし。まことにその後はひとりずみにてぞやませ給ひにし。このうみおき奉らせ給へりし太政大臣殿をば御姉の中宮更なり、世のつねならぬ御ぞう思ひにおはしませば、やがて養ひ奉らせ給ふ。内にのみおはしまして、御門もいみじうらうたきものにせさせ給へば、常には御前にさぶらはせ給ふ。何事も宮達の御同じやうにかしづきもてなし申させ給ふに、御物めす御臺のたけばかりをぞ一寸おとさせ給ひけるをけぢめに云るき事にはせさせ給ひける。昔はみこたちにもをさなくおはします程は内ずみせさせ給ふ事なかりけるに、この若君のかくてさぶらはせ給へば、あるまじき事とそしり申せど、かくておひたゝせ給へれば、なべての殿上人などになずらはせ給ふべきならねど、若うおはしませばおのづから御たはぶれなどの程にも並々にふるまはせ給ひしなれば、圓融院の御門同じほどのをのこどもと思ふにや、「かゝらでわらばや」などぞうめかせ給ひける。かゝる程に御年積らせ給ひて、又御うまごの頭中將公成の君をことの外にかなしがり給ひて、内にも御車の云りに具せさせ給はぬかぎりはまゐらせたまはず。さるべき事のをりもこの君遲くまかりいで給へば、ゆば殿に御さきばかり參らせ給ひてぞ待ち立たせ給へれば、見奉り給ふ人「などかくてはたゝせ給へる」と申させたまへば、「いでまかり侍るなり」とぞおはせられける。無量壽院の金堂供養に東宮行啓ある御車に侍はせたまひて、「ひとみち公成おぼしめせよおぼしめせよ」とおなじ事を啓せさせ給ひける、「おはれなるものから、をかしくなむありし」とこそ宮おはせられけれ。繁樹がめひのむすめの中務のめのとの

ものに侍るがまうで來て語り侍りしなり。頭中將顯基の君の御若君おはすとかや。御いかをば四條に渡しきこえて、太政大臣殿こそくゝめさせ給ひけれ。御おほぢの右衞門督ぞ抱き聞えたまへるにこの若君のなき給へば、「例はかくもむづからぬに、いかなればかゝらむ」と右衞門督たちゐ慰め聞え給ひければ、「おのづからちごはさこそはあれ、ましもさぞありし」と太政大臣殿のたまはせけるにこそさるべき人々參り給へりける皆はゝゑみ給ひにけれ。中にも四位少將隆國の君は常に思ひ出でゝぞ今にわらひ給ふなる。かやうにわまりに古代にぞおはしますべき。むかしの御童名は宮を君とこそは申しゝか。

太政大臣藤家のおとゞ

これ九條殿の三郎君、東三條のおとゞにおはします。御母一條攝政におなじ。冷泉院圓融院の御をぢ、一條院三條院の御おほぢ、東三條女院贈皇后宮の御父。公卿にて二十年、大臣の位にて十二年、世をしらせ給ふ事榮えて五年ぞおはします。正暦元年七月二日うせさせ給ひにき。御年六十二。出家せさせ給ひてしかば後の御いみなし。內に參らせ給ふにはさらなり、牛車にて北の陣まで入らせ給へば、それより內は何ばかりのほどならねど、紐解きて入らせ給ふとぞ。されどそれはさてもありなむ。すまひのをり東宮のおはしませば、二所のぎよ前に何をもおしやりて御汗とりばかりにてさぶらはせ給ひけるこそ世にたぐひなくやんごとなき事なれ。末には北の方もおはしまさゞりければ男ずみにて、東三條殿の西の對を清涼殿づくりに御しつらひより始めてすませ給ふなどをぞ、おまりなる事に人申すめりし。なほた

ゞ人にならせ給ひぬれば、御果報の及ばせ給はぬにや、さやうの御みもちに久しくは保たせ給はぬとも定め申すめりき。そのはどは夢ときもかんなぎも、かしこきものどもの侍りしぞとよ。堀川の攝政のはやり給ひし時に、この東三條殿は御つかさどもとゞめられさせ給ひて、いとからくおはしましゝ時に、人の夢に、かの堀川院より矢をいと多くひんがしざまに射るをいかなるぞと見れば、東三條殿に皆落ちぬと見えけり。よからず思ひ聞えさせ給へる方より矢おはせ給ふはおしき事あらむと思ひて殿にも申しければ、恐れ給ひて夢ときに問はせ給ひければ、「いみじうよき御夢なり。世の中のこの殿にうつりて、あの殿の人のさながら參るべきが見えたるなり」と申しけるが、あてざらざりしことかは。又その頃よきかんなぎ侍りき。賀茂の若宮のつかせ給ふとてふしてのみ物を申しゝかば、うちふしのみことぞ世ひとつけて侍りし。大入道殿召して物問はせ給ひけるに、いとかしこく申しければ、さしあたりたること、過ぎにしかたとは皆さいふことなれば、しか思し召しけるに、かなはせ給ふ事どものいでくるまゝには、後々には御さうぞくたてまつり御かうぶりせさせ給ひて御膝に枕せさせてぞものは問はせ給ひける。それに一事として後々の事申しあやまたざりけり。さやうに近く召しよするに、いふかひなき程のものにもあらで、少しおもと程のきはにてぞありける。この殿法興院におはしますことをぞ心よからぬ所と人はうけ申さゞりしかど、いみじう興せさせ給ひて聞きもいれで渡らせ給ひて程なくうせおはしましにき。御物忌の折渡らせ給はむとて、おはしましてはいがゞあると御うらをせさせおはしまして、そのたび

ばこ院にて御病づきてうせさせ給へるぞかし。みまやの馬に御ずゐじは乗せて粟田口へ遣はしたるが、「あらはにはるばると見ゆる」などをかしき事に仰せられて、月のおかき夜はげからしもせでながめさせけるに、目に見えぬものゝはらはらとまゐりわたしたりければ、さぶらふ人々はおぢさわげど、殿はつゆおどろかせ給はで、御枕がみなる太刀をひき抜かせ給ひて、「月見るとて上げたる格子をおろすは何物のするぞ。いとびんなし。もとのやうに上げわたせ。さらずばわしかりなむ」とおほせられければ、やがてまゐりわたしなど大方おちゐぬ事どゝも侍りけり。さて遂に殿ばらの御領にもならで、かく御堂にはなさせ給へるなめり。このおとゞの御君達、女君四ところ、男君五人おはしましき。女二ところ男三ところは摂津守藤原中正のぬしの御むすめの腹におはします。三條院の御母の贈皇后宮と女院大臣三人ぞかし。この御母いかにおぼしけるにか、いまだ若うおはしけるをり、二條の大路に出でゝゆふけとひ給ひければ、をらいがいみじく気ろき女のたゞ一人ゆくがたちとゞまりて、「何わざしたまふ人ぞ。もしゆふけとひ給ふか。何事なりともおぼさむことかなひて、この大路よりも廣く長くとも築えさせ給へ、よ」とうち申しかけてこそまかりにけれ。人にあらで、さるべきものゝ気めし奉りけるにこそ侍りけめ。女君一人は女院の后の宮にておはしましゝ折の宣旨にておはしき。又對の御方と聞えし御腹のむすめ、おとゞいみじう悲しうし聞えさせ給ひて、十一におはせし折、内侍のかみになし奉らせ給ひて内ずみせさせ奉らせ給ひし。御かたちいとうつくしうて、御ぐしも十一十二のほどに絲をよりかけたるやうにて、いとめ

でたくおはしませば、ことわりとて三條院の東宮にて御元服せさせ給ふ夜の御そひぶしに參らせ給ひて、三條院もにくからぬものに思し召したりき。夏いと暑き日わたらせ給へるに、御前なるひをとらせ給ひて、「これ云ばしもち給ひたれ。まろをおもひ給はゞ今はといはざらむ限は置き給ふな」とてもたせ聞えさせ給ひて御覽じければ、まことにかたの黒むまでこそ持ち給ひたりけれ。「さりとも云ばしぞあらむとおぼしゝに、おはれさ過ぎてうとましくこそ覺えしか」とこそ院は仰せられけれ。あやしき事は、源宰相賴定の君通ひ給ふと世に聞えて、さとに出で給ひにきかし。たゞならずおはすとさへ三條院聞かせ給ひて、この入道殿に「さるとのおるはまことにやあらむ」と仰せられければ、「まかりて見て參り侍らむ」とておはしたりければ、例ならず怪しくおぼして几帳ひきよせ給ひけるを、押しやらせ給へれば、もと華やかなるかたちにいみじうけさうし給へれば常よりもうつくしう見えたまふ。春宮に參りたりつるに、「云か云か仰せられつれば見奉りに參りつるなり。空言にもおはせむに、云か聞しめされ給はむがいとふびんなれば」とて御胸をひきあけさせ給ひて、ちをひねり給へりければ御顔にさらと走りかゝるものか。ともかくものたまはせでやがて立たせ給ひぬ。東宮に參らせ給ひて、「まことに候ひける」とて、云たまひつるありさまを啓せさせ給へれば、さすがにもと心苦しう思し召しならせ給へる御中なればにや、いとほしげにこそ思し召しけれ。內侍のかみ參殿かへらせ給ひてのちに人やりならぬ御心づからいみじう泣き給ひけりとぞそのをり見奉りたる人かたり侍りし。東宮にさぶらひ給ひしほども宰相は

通ひまゐり給ふこと、おまりこといでゝこそは宮もきこしめして「たちはきどもして騒させやせましと思ひしかど、故おとゞの事をなきあとにもいかゞといとはしかりしかばさもせざりし」とぞ仰せられける。この御わやまちより、源宰相、三條院の御時は殿上もゆるたまはで地下の上達部にておはせしに、この御時にこそは殿上し、検非違使の別當などになりてうせ給ひにしか。今ひとつの御腹のおほい君は冷泉院の女御にて、三條院、彈正宮、帥宮の御母にて、三條院位に即かせおはしましゝかば贈皇后宮と申しき。かの三人の宮たちをおほぢ殿殊の外にかなしう申させ給ひき。世の中にすこしの事もいでき、かみもなりなゐもふるときは、まづ東宮の御方に參らせ給ひて、をぢの殿ばらそれならぬ人々などを、「うちの御方にはまゐれ。この御方には我侍はむ」とぞ仰せられける。雲形といふ高名の御帶は三條院にこそは奉らせたまへれ。かこの裏に「東宮にたてまつる」と刀のさきして自筆にかゝせ給るなり。この頃は一品の宮にとこそうけ給はれ。この東宮の御おとゞの宮たちは少し輕々にぞおはしましゝ。帥の宮のまつりのかへさ、和泉式部とあひのらせ給ひて御覽せしさまもいとけうありきやな。御車の口のすだれを中よりきらせ給ひて、我が御方をば高う上げさせ給ひ、式部のかたをばおろして、きぬながら出させて、くれなゐの袴に赤き色紙のものいみひろきつけて土とひとしう下げられたりしかば、いかにぞ物見よりはそれをこそ人見るめりしか。彈正の宮のわらはにおはしましゝ時の御かたちの美くしげさはかりもしらず、輝くとこそは見えさせ給ひしに、御元服おとりの殊の外にせさせ給ひにしをや。この宮達は御心の少し

輕くおはしますこそ一家の殿ばらうけ申させ給はざりしかど、さるべき事の折などはいみじうもてかしづき申させ給ひし。帥の宮、一條院の御時の御作文に參らせ給ひしなどには御前などさるべき人多くて、いとこそめでたうて參らせ給ふめりしか。御前にて御したうづのいたうせめさせ給ひけるに、御心もたがひていと堪へ難うおはしましければ、この入道殿にかくと聞え申させ給ひて、鬼のまにおはしまして御したうづをひきぬぎ奉せ給へりければこそ御心ちなほらせ給へりけれ。贈皇后宮の御一つ腹の今一所の姫君は圓融院の御時、梅壺の女御と申して、一のみこ生れ給へりき。そのみ子五つにて東宮に立たせ給ひ、七つにて位に即かせ給ひにしかば、御母女御殿、寛和二年ひのえいぬ七月五日后にたゝせ給ひて、中宮と申しき。この御門を一條院と申しき。その母后入道せさせ給ひて、太上天皇とひとしき位にて女院ときこえさせき。一天下をあるまゝにしておはしましゝ。この父おとゞの太郎の君、女院の御ひとつ腹の道隆のおとゞ、内大臣にて關白せさせ給ひき。次郎君は陸奥守倫寧ぬしの女の腹におはせし君なり。道綱ときこえさせて大納言までなりて右大將かけ給へりき。この母君極めたる和歌の上手におはしければ、この東三條殿の我が方に通はせ給ひけるほどの事、歌など書きあつめて、かげろふの日記となづけて世にひろめ給へり。殿のおはしましたりけるに、門をおそくあけゝれば、度々御せうそこいひいれさせたまふに、女君、

「歎きつゝひとりぬる夜のあくるまはいかにひさしきものとかはしる」。

いと興ありとおぼしめして、

「げにやげに冬の夜ながらまさの戸もおそく明くるはくるしかりけり」。さればその御腹の君ぞかし。この道綱卿後には東宮の傅になり給ひて、ふの殿とぞ申すめりし。いとあつしくて大將をも辭し給ひてき。その殿今の入道殿の北政所の御はらからをすみ奉り給ひてうまれ給へりし君、宰相中將兼經の君よ。道命阿闍梨、極めたる和歌の上手におはしける。父大納言殿は寛仁四年十月十三日に出家、同十六日にうせ給ひにき。御年六十六とぞ聞き奉りし。大入道殿の御三郎は粟田殿、又四郎は堀川の治部少輔の君とて、世のゑれものにて交らひもせで止み給ひぬとぞ聞き侍りし。五郎君は唯今の入道殿におはします。女院の御母北の方の御腹の君達三所の御ありさま申し侍らむ。昭宣公の御君達三平とは聞えさすめりしに、この三所をば三道とや世の人申しけむ。えこそうけたまはらずなりしか」とてほゝゑむ。

大鏡巻之六

中關白　内大臣道隆
粟田關白　右大臣道兼
東三條殿息

内大臣道隆　正暦六年三月日依病辭關白。四月六日出家。十月薨。四十二。

「このおとゞ、これ東三條のおとゞの一男なり。御母は女院の御同じ腹なり。關白になり榮え給ひて六年ばかりや坐しましけむ、大疫癘の年にてうせさせ給ひしか。されどもその御病にはあらで御みきのみだれさせ給ひにしなり。をのこは上戸ひとつの興の事にすれど、過ぎぬるはいと不便なる折侍りや。祭のかへさ御覽ずとて、小一條大將、閑院大將と二つ御車にて紫野に出させ給ひぬ。烏のつゐゐたるかたをかめに作らせ給ひて、興あるものにおぼして、ともすれば大みき入れてめす。今日もそれにて參らする。もてはやさせ給ふ程に、あまりやうやう過ぎさせ給ひて後は、御車の左りぐちのすだれ皆上げて、三所ながら御もとゞりはなちておはしましけるは、いとこそ見苦しかりけれ。大方この大將殿達の參り給へる、尋常にて出で給ふをばいとはいなく口惜しき事におぼしめしたりけり。ものもおぼえず御裝束もひきみだりて御車さしよせつゝ、人にかゝりて乘り給ふをぞいと興あることにせさせ給ひける。但この殿の御酔のほどよりは疾くさむるとをぞせさせ給ひし。御賀茂詣の日は社頭にて三度の御かはらけ定りにてまゐらするわざなるを、その御時には禰宜神主も心えて、大かはらけをぞまゐらせしに、三度はさらなることにて七八度などめして、上社に參り給ふ道にては、やがてのけざまに左りの方を御枕にて不覺におほとのごもりぬ。一の大納言にてはこの御堂ぞおはしましゝかば、御覽ずるに、夜に入りぬれば御前の松の光にとほりて御覽ず

るに、御すき影のおはしまさぬは怪しと思し召しけるに、参りつかせ給ひて御車かきおろしたれど、え下ろさせ給はず。いかにと思へど、御前どもゝえおどろかし申さで唯侍ふなめるに、入道殿おりさせ給へるに、さてあるべき事ならねばながえのとながら高やかに「やゝ」と御扇をならしなどせさせ給へど、おどろき給はねば、ねよりてうへの御袴の裾を荒らかにひかせ給ふをりぞ、おどろかせ給ひて、さる御用意はならはせ給へれば、御櫛笄ぐし給へりける、とりいでゝつくろひなどしておりさせ給ひけるに、いさゝかさりげなく清げにおはしましければ、さばかり酔ひなむ人の、その夜は起きあがるべきかは。それぞこの殿の御上戸はよくおはしましける。その御心のなほをはりまでも忘れ給はざりけるにや、御病つきてうせ給ひけるとき、西にかきむけ奉りて、「念佛申させたまへ」と人々のすゝめ奉りければ、「濟時朝光などもや極楽にはあらむずらむ」と仰せられけるこそあはれなれ。つねに御心にならひおぼしたることなれば、あの地獄の鼎のふたにかしらうちあてゝ、三寶の御名思ひ出でけむ人のやうなることなりや。御輿のいとけそうにおはしましゝぞや。帥殿に天下執行の宣旨下し奉りに、この民部卿殿の頭辨にて参り給へりけるに、御病いたうせめて御装束もえ奉らざりければ、御直衣にて御簾のとにねざり出させ給ひしにも長押をおりわづらはせ給ひて、女装束御手にとりて、かたのやうにかづけさせ給ひしなむいとあはれなりし。「こと人のいとさばかりなりたらむはことやうなるべきを、なほいとかはらかにあてにおはせしかば、病つきてしもこそ貌はいるべかりけれとなむ見えし」とこそ民部卿殿はつねにのたまふなれ。その

關白殿は腹々に男子女子あまたおはしましき。今北の方は大和守高階成忠のぬしの御女なり。後の世は高二位とこそいひ侍りしか。さて積善寺の供養の日、この入道殿のかみに侍りしはいとめづらかなりしわざかな。その腹に男君三所、女君四所おはしましき。大姫君は一條院の十一にて御元服せさせ給ひしに、十五にてや參らせ給ひけむ。やがてその年の六月一日に后にたゝせ給ふ。中宮と申しき。さて關白殿などうせさせ給ひて後に、男みこ一人、女みこ二人うみ奉らせ給へりき。女宮は入道殿の一品宮とて三條におはします。女二宮は九歳にてうせさせ給ひにき。男親王式部卿の宮敦康親王とこそ申しゝか。たびたび御思ひたがひて、世の中をおぼし歎きてうせ給ひにき。御年廿九にておさましうてやませ給ひにしかな。冷泉院の宮達などのやうに輕々におはしまさましかば、いとほしさもよろしうや世の人おもひ申さまし。御ざえいとかしこく、御心ばへもいとめでたくぞおはしましゝ。さてこの宮の御母后の弟中の御方は三條院の東宮と申しゝをりの淑景舍とて、華やかせ給ひしも、父殿うせさせ給ひし後御年廿二三ばかりにてうせさせ給ひにき。三の御方は冷泉院の四のみこ帥の宮と申しゝをこそは父殿聟どり奉らせ給へりしも、後々はやがて御中絶えにしかば、末の世は一條わたりいと怪しくておはするとぞ聞え給へりし。まことにや御心ばへなどのいとおちゐずおはしましければ、かたへは宮も疎み聞え給へりけるとかや。僧まらうどなどの參りたる折は、御簾をいと高やかにおしやりて御懷をひろげて立ち給へりければ、宮は御面うち赤めてなむおはしましける。さむらふ人も面の色たがふ心ちして、うつぶしてなむ、立

たむもはしたにすぢなかりける。宮のちには「見かへりたりしまゝにうごきもせられず、物こそ覺えざりし」とこそ仰せられけれ。又學生ども召しあつめて作文しあそばせ給ひけるに、こがねを二三十兩ばかり屏風のかみより投げ出して人々うち給ひければ、ふさはしからずにくしとは思はれけれど、その座にて經應し申してとりあらそひけり。「金賜はりたるはよけれども、さも見苦しかりしものかな」とこそ今に申さるなれ。人々文作りて講じなどするにも、よしあしいと高やかに定め給ふ折もありけり。二位の新發の御流にて、この御ぞうは女もみなざえのおはしましたるなり。母うへは高内侍ぞかし。されど殿上せられざりしかば、行幸節會などには南殿にぞまゐられし。それはまことしきもんざにて、御前の作文には文奉られしはとよ、少々のをのこにはまさりてこそ聞え侍りしか。さやうのをり召しけるにも、大盤所の方よりは參り給はで、弘徽殿の上の御局の方より通りて、二間になむ侍ひ給ひけるとこそ承りしか。古體に侍るにや。女のおまりざえかしこきはものおしと人の申すなるに、この内侍後にはいといみじう墮落せられにしも、そのけとこそ覺え侍りしか。さてその宮の上のさしつぎの四の御方は、みくしげどのと申し、御かたちいと美くしうて、式部卿の宮の母しろにておはしまし、も早うせ給ひにき。一つ腹の女君達かくなり。對の御方と聞えさせし人の御腹にも女君おはしけるは今の皇太后宮にこそはさぶらひ給ふなれ。また聞え給ひし男君達は太郎君、故伊豫守守仁のぬしの女のはらにてかし。大千與君それは祖父おとゞの御子にし奉り給ひて道頼六郎君とこそは申し、か。大納言までなり給へりき。

父の關白殿うせ給ひし年の六月十一日にうち續きうせ給ひにき。御年廿五とぞ聞えさせ給ひし。御かたちいと清げに、あまりあたらしきさまして物よりぬけ出でたるやうにぞおはせし。御心ばへこそこと御はらからにも似給はね、いとよく又ざれをかしくもおはせし。この殿はことはらにおはす。皇后宮とおなじ腹の君、法師にて十あまりのほどに僧都になし奉り給へりし、それも三十六にてうせ給ひにき。今一所は小千與君とて後ほかばらの大千與君にはこよなくひきこし、廿一におはせし時に内大臣になし奉り給ひて、我うせ給ひし年、長德元年の事なり、御病重くなるさはに内へ參り給ひて、おのれかくまかりなりて候ふ程、この内大臣伊周のおとゞに百官幷に天下執行の宣旨給ふべきよし申し下さしめ給ひて、我が出家せさせ給ひてしかば、この内大臣殿を關白殿とて世の人集り參りし程に、粟田殿に渡りにしかば、手にするたる樣をそらいたらむやうにて歎かせ給ふ。一家にいみじき事におぼしみだれしほどに、そのうつりつる方も夢の如くにてうせ給ひにしかば、今の入道殿、その年の五月十一日よりして世をおろしめしゝかば、かの殿いとゞ無得におはしましゝ程に、又の年花山院の御事出できて、御官位とられて、唯太宰の權帥になりて長德二年四月廿四日にこそは下り給ひしかは。御年二十三。いかばかり哀に悲しかりしとなりあ。されどげに必ずかやうの事、我がをこたりて流され給ふべくもあらず。よろづの事身に餘りぬる人のもろこしにもこの國々にもあるわざにぞ侍るなる。むかしは北野の御事ぞかし」などいひて鼻うちかむ程あはれに見ゆ。「この殿も御ざえ日本には餘らせ給へりしかば、かゝる事もおはしますに

こそ侍りしか。さて式部卿宮の生れさせ給へるよろこびにこそはめしかへされたまへれ。さて大臣になどらふる宣旨かうぶらせ給ひて、あるき給ひしありさまもいとおちゐても覚え侍らざりき。いと見苦しき事のみいかに聞え侍りしものなとて内に参らせ給ひけるに、北の陣より入らせ給ひて西ざまにおはしますに、入道殿も侍はせ給ふ程なれば、梅壺の東の塀のはざまに下人どものいと多く居たるを、この帥殿の御供の人々いみじく拂へば、行くべき方のなくて梅壺の塀の内にはらはらと入りたるを、これはいかにと殿御らんず。おやしと人々見れど、さすがにえともかくもせぬに、なにがしといひし御隨身のそら去らずして、「何にか」といたうはらひ出せば、又とざまにいとらうがはしく出づるを帥殿の供の人々この度ははらひあへねば、ふとり給ひたる人とてすがやかにもえ歩み給はで、登華殿のはそどのゝ部に押し立てられ給ひて、「やゝ」と仰せられけれど、せばきところにて雑人いと多くはらはれておしかけられ奉りぬれば、とみにえのかでいとこそふびんに侍りけれ。それはげに御罪にもあらねども、唯華やかなる御ありきふるまひをせさせ給はずば、さやうに軽々なる事おはしますべきことかはとぞかし。又入道殿御嶽にまゐらせ給へりし道にて、帥殿の方より便なき事あるべしと聞えて、常よりも世をおそれさせ給ひてたひらかに歸らせ給へば、「かの殿もかゝる事聞えたりけり」と人の申せば、いとかたはらいたくおぼされながら、さりとてあるべきならねば参り給へり。道のほどの物語などせさせ給ふに、帥殿いたく慮し給へる御氣色のしるき、をかしくも又さすがにいとほしくもおぼされて、「久しくすぐ六つかうまつら

でいとさうざうしきに、今日あそばせ」とてすぐ六の杯を召しておしのごはせ給ふに、御氣色こよなうなほりて見え給へば、殿をはじめ奉りて參り給へる人々、おはれになむ見奉りける。さばかりの事を聞かせ給はむにすさまじくもてなさせ給ふべけれど、入道殿はあくまで情おはします御本性にて、人のさ思ふらむ事をばおしかへしなつかしくもてなさせ給ふなり。この御ばくやうはうちたゝせ給ひぬれば、二所ながらはだかにこしからませ給ひてよなか曉までおそばす。心をさなくおはする人にて、便なき事もこそ出でくれと人はうけ申さゞりけり。いみじき御かけ物どもこそ侍りけれ。帥殿はふるきものどもえもいはぬ、入道殿はあたらしきが興ある、をかしきさまに玄なしつゝぞかたみにとりかはさせ給ひけれど、かやうの事さへ帥殿は常にまけ奉らせ給ひてぞまかでさせ給ひける。かゝれど唯今は一の宮おはしますをたのもしきものにおぼし、世の人もさはいへど、玄たにには追從しおぢ申したりし程に、今の御門東宮さし續き生れさせ給へりしかば、世をおぼしくづほれて、月ごろ御病もつかせ給ひて、寛弘七年正月廿九日うせさせ給へ御にしぞかし。御年三十七とぞ承りし。かぎりの御病とてもいたう苦しがり給ふ事もなかりけり。御玄は、ふき病にやあどぞ覺えける程におもり給ひければ、修法せむとて僧めせど參るものなきに、いかゞはせむとて道雅の君を御使にて入道殿に申し給ひにけり。夜いたうふけて人もしづまりにければ、やがて御格子のもとゐよりてうちしはぶき給ふ。「誰ぞ」と問はせ給へば御なりの申して、「玄かじかの事にて修法始めむとつかうまつれば、阿闍梨にまうでくる人も候はぬを、給はらむ」と申し給へ

ば、「いと不便なる御事かな。えこそ承らざりけれ。いかやうなる御心ちにぞ。いとだいたいしき御事にもあるかな」といみじう驚かせ給ひて、「誰を召したるに参らぬぞ」と委しく問はせ給ふ。なにがし阿闍梨をこそは奉らせ給ひしか。されど世のすゑは人の心も弱くなりにけるにや、悪しくおはしますなど申しゝかど、元方の大納言のやうにやは聞えさせ給ふる。又入道殿猶すぐれさせ給へる威のいみじきに侍るめり。老の波にいひすごしもぞし侍る」とけしきだちてこの程はうちさゝめく。「源大納言重光卿の御女のはらに女君二所男君三所おはせしが、この君だち皆おとなび給ひて、女君は后がねとかしづき奉り給ひしほどに、さまざまおぼしゝ事どもたがひて、かく御病さへおもり給ひにければ、この姫君達をするならべてなくなくのたまひける。「年來佛神にいひにく仕うまつりつれば何事もさりともとこそ頼み侍りつれど、かくいふかひなき玄にをさへせむことの悲しさ。かく知らましかば君達をこそ我よりも先にうせ給ひねといのり思ふべかりけれ。おのれ死なば、いかなるふるまひありさまを玄給はむずらむと思ふがかなしく人わらはれになるべき事」といひ續けて泣かせ給ふ。「怪しきありさまをもし玄給はゞなき世なりとも必ず恨み聞えむ」とぞ母北の方にもなくなく遺言玄給ひけるかし。その君達大姫君は高松殿の春宮大夫殿の北の方にて、あまたの君だちうみ續けておはすめり。それはおしかるべき事なちず。お一所は大宮に参りて、帥殿の御方とていとやんごとなくて侍ひ給ふめりとこそはおぼしかけぬ御ありさまなめれ。あはれなめるかし。男君は松君とて生れ給ひしより祖父おとゞいみじきものにおぼしむかへ奉り

給ふ度ごとに、贈物をせさせ給ふ。御乳母も饗應ぜ給ひし君ぞかし。この頃三位しておはするは、この君を父おとゞ「あなかしこ、我がなからむ世にあるまじきわざをせず、又みすてがたしとてものおぼえぬみやうぶうちして、我がおもてませて、いでやさありしかどかゝるぞかしと人にいひのけてせさすなよ。世の中にありわびなむきは、出家すればかりなり」となくなくいひ仰せ給ひけるに、この君當代の東宮にておはしまし、折の亮になり給ひて、いとめやすき事と見奉りしほどに、春宮亮通雅の君とていとおぼえおはしきぞかし。それもいかゞしけむ、位につかせ給ひし後に藏人の頭にもえなり給はず、坊官の勞に三位ばかり去給ひて中將をだにかけ給はずなりにしこそいとかなしかりし事ぞかし。あさましく思ひかけぬ事どもかな。この君故帥の中納言惟仲の女とぞすみ給ひて、男一人うませ給へりしは法師にて明尊僧正の御房にこそおはすめれ。女君いかゞ思ひ給ひけむ、みそかに逃げて今の皇太后宮にこそ參りて、大和宣旨とておはしたまふなれ。されば年ごろのめことやはたのむべかりける。なかなかそれしもこそあなづりてをこがましくもてなしけれ。おはれ翁が童部のさやうに侍らましかば、白髪をもそりて鼻をもかきおとし侍りなまし。よき人と申すものはいみじからぬなのをしければ、ともかくも去給はぬにこそあめれ。さるはかの君さやうに去れ給へる人かは。たましひはわき給ふ君をば、帥殿はこの内の生れさせ給へりし七夜に和歌の序題かゝせ給へりしぞかし。なかなか無心のとかな。本體は參らせ給ふまじきを、それにさし出で給ふより、多くの人のめをつけ奉り、いかにおぼすらむ、なにせむに參り給へるぞとの

みまもられ給ふ。いとはしたなき事にはあらずや。それにこの入道殿まことにかくすさまじからずもてなし聞えさせ給へるかひありて、にくさはめでたくこそかゝせ給へれ。當座の御おもては優にて、それこそ人々ゆるし申し給ひけれ。この帥殿の御一腹の十七にて中納言になりなどして、世の中のさかるものといはれ給ひし殿の御童名は阿古君ぞかし。この兄殿の御のゝしりにかゝりて、出雲權守になりて但馬にこそおはせしか。さて帥殿のかへり給ひしをり、この殿ものぼり給ひてもとの中納言になりし。又兵部卿などこそは聞えさせしか。それもいみじうたましひおはすと世人におもはれ給へりし。あまたの人々の下臈になりて、かたがたすさまじくおぼされながら、あるかせ給ふに、御賀茂詣につかうまつり給へるに、むげにくだりておはするがいとほしくて、殿の御車に乘せ奉らせ給ひて御物語こまやかにあるに、「ひとゝせのことはおのれが申し行ひたるとぞ世間にはいひ侍りける。そこにもしかぞおぼしけむ。されどもさもなかりし事なり。宣旨ならぬこと一言にても加へて侍らましかば、この御社にかくて參りなましや。天道も見給ふらむとおそろしき事とまめやかにのたまはせしなむ、なかなかにおもておかむ方なく術なくおぼえし」とこそ後にのたまひけれ。それもこの殿におはすれば、さやうにも仰せらるゝにぞ、帥殿にはさまでもや聞えさせ給ひける。この中納言殿は、かやうにえ去りがたきかたのをりをりばかりあるき給ひて、いといにしへのやうにまじらひ給ふ事はなかりけるに、入道殿の土御門殿にて御遊あるに、「かやうのことに權中納言のなきこそなほさうざうしけれ」とのたまはせて、わざと御消息聞えさ

せ給ふほど、さかづきあまた度になりて、人々みだれ給ひて紐おしやりてさぶらはるゝに、この中納言参り給へれば、うるはしくなりてゐなほりなどせられければ、殿「とかく御紐解かせたまへ。ことやぶれはべりぬべし」とおほせられければ、かしこまりて逗留し給ふを、公信卿うしろより解き奉らむとて寄り給ふに、中納言殿御氣色あしくなりて、「隆家は不運なる事こそあれ、そこだちにかやうにせらるべき身にもあらず」と荒らかにのたまふに、人々御氣色變り給へるなかにも、今の民部卿殿はうはぐみて人々の御顔をとかく見給ひつゝ、こといできなむず、いみじきわざかなとおぼしたり。入道殿うちわらはせ給ひて、「今日はかやうのたはぶれ事侍らでありなむ。道長とき奉らむ」とて、よらせ給ひて、はらはらと解き奉らせ給ふに、これらこそあるべきことよとて御氣色なほりて、さしおかれつる盃とり給ひておまたゝびめし、常よりもみだれ遊ばせ給ひけるさまなど、おもしろくおはしましけり。殿もいみじうもてはやし聞えさせ給ひけり。さて式部卿宮の御事をのみさりともさりともと待ち給ふに、一條院御惱み重らせ給ふきはに御前に参りたまひて御氣色たまはり給ひければ、「案の御事こそつひにえせずなりぬれ」と仰せられけるに、「あはれの人非人やと申さまほしくこそおはしましか」とのたまひけれ。さてまかで給ひて、我が御家のひがくしのまに尻うちかけて、手をはたはたとうち居給へりける。世の人は宮の御事ありて、この殿御後見も玄給はゞ天下の政はしたゝまりなむとぞ思ひ申したりしかども、この入道殿の御さかえのわけらるまじかりけるにこそは。三條院の大嘗會の御禊にさらめかせ給へりしさまなどぞ常

よりもことなりしか。人のこのきはゝ、さりともくづほれ給ひなむと思ひたりしところを、たがへむとおぼしたりしなめり。さやうなる所おはしましゝこそ、節會行幸にはかいねりがさね奉らぬ事なるを、單衣青くつけさせ給へれば紅葉襲にてぞ見えける。うへの御袴龍膽の二重織物にて、いとめでたくけうらにこそきらめかせ給へりしか。御目の損はれ給ひにしこそいとあたらしかりしか。よろづにつくろはせ給ひしかども、やませ給て御まじらひ絶え給へる頃、大貳の闕いできて、人々のぞみのゝしりしに、唐人の目つくろふがあるなるに見せむとおぼして、「こゝろみにならばや」と申し給ひければ三條院の御時にて、又いとはしくもやおぼしめしけむ、ふたととなくならせ給ひてしぞかし。その北の方には、伊豫守兼資のぬしの御女なり。その御腹の女君二所おはせし。一所は三條院の御子の式部卿の宮の北の方、今一所は傅殿の御子の今宰相中將兼經の君とぞ聞ゆる。二所の御聟をとり奉り給ひて、いみじういたはり聞え給ふめり。政よく去たまふとて、筑紫人さながら隨ひ申したりけり。例の大貳、十年が程にて上り給へりとこそ申しゝか。かの國におはしましゝ程、刀伊國のもの俄にこの國をうちとらむとや思ひけむ越えきたりけるに、筑紫には兼ての用意もなくて、大貳殿弓矢の本末をも去り給はねばいかゞと思しけれど、倭心かしこくおはする人にて、筑後、肥前、肥後、九國の人をおこさせ給ふをばさることにて、府の內につかうまつる人をさへおしとりて戰はしめ給ひければ、かやつが方のものどもいと多く死にけるに、さはいへど家たかくおはします。げにいみじかりし事平げ給へりし殿ぞかし。おほやけ大臣大納言にもな

させ給ひぬべかりしかど、御まじらひ絶えにたればたゝにはおはするにこそあめれ。この中にむねと射返したるものどもをるして、おほやけに奏せられたりしかば、みな賞せさせ給ひき。たねきは壹岐守になされ、その子は太宰監にこそはなさせ給へりしか。このたねきがぞうは純友うちたりしもの、すぢなり。この純友は將門おなじ心にかたらひて、おそろしき事企てたるものなり。將門はみかどをうちとり奉らむといひ、純友は關白にならむと同じく心をあはせて、この世界に我と政をし、君となりてすぎむといふ事を契り合せて、一人は東國にいくさをとゝのへ、一人は西國の海にいづくともなく大筏を數をらず集めて、筏の上に土をふせて植木をたふし、四方山の田をつくりすみつきて大方おほろげのいくさにどうずべくもなくなりゆくを、かしこくかまへてうちてたてまつりたるはいみじき事なり。それはげに人のかしこきのみにはあらじ、王威のおはしまさむかぎりはいかでかかゝることはあるべき。さて壹岐對馬の人をいと多く刀伊國にとりもていきたりければ、新羅のみかど軍を起し給ひて、皆うちかへし給ひてけり。さて使をつけて、たしかにこの島に送り給へりければ、かの國の使には大貳金三百兩とらせてかへさせ給ひける。この程の事もかくいみじう云たゝめ給へるに、入道殿猶この帥殿を捨てぬものに思ひ聞えさせ給へるなり。さればにや世にもいとふり捨て難き覺えにてこそおはすれ。みかどにはいつかは馬車の三四絕ゆる時のある、又道もさりあへず立つ折もあるぞかし。この殿の御子男君、唯今藏人少將良頼の君、又右中辨經輔の君、又式部丞などにておはすめり。誠に世にあひて華やぎ給へりし折、この帥殿は

花山院とあらがひ事申させ給へりしはとよ。いとふしぎなりし事ぞかし。「わぬしなりとも我が門はえ渡らじ」と仰せられければ、隆家「などてか罷り渡り侍らざらむ」と申し給ひて、その日に定められぬ。輪強き御車にいちもちの御牛かけて、御烏帽子直衣いとあざやかにさうぞかせ給へり。えびぞめの織物の御指貫少しぬ出させ給ひて、祭のかへさに紫野走らせ給ふ。君達のやうに、ふみ板にいと長やかにふみ出だかせ給ひて、くゝりは王に引かれて、すだれいと高やかに巻きあげて、雑色五六十人ばかり聲のあるかぎりひまなく御さき参らせ給ひて、院には更なり、えもいはぬ勇悍幹了の法師ばら大中童子など合せて七八十人ばかりに大なる石五六尺ばかりなる杖ども持たせて、北南の御門辻より西へ、小一條の前、洞院のうらうへにひまなくたちみちて御門の内にも侍ひ、僧の若やかに力強き限さる設して侍ふ。さる事をのみ好み思ひたる、上下の今日にあへる氣色どもはげにいかゞはありけむ。いづ方にも石杖ばかりにて、誠しき弓矢は設けさせ給はず。中納言殿御車一時ばかり立ち給ひて、かでの小路よりは北に、御門の邊まではやり寄せ給へりしかど、猶え渡り給はで歸らせ給ふ。院方にそこら集ひたるものどもひとつ心に目もかためまもりまもりて、やりかへし給ふほどは一度に笑ひ合せたりし聲こそいと夥しかりしか。さる見ものやは侍りしとよ。「王威はいみじきものなりけり。え渡らずなりぬるよ。無益の事をいひてけるかな。いみじきそくかうなりつる」とてこそ笑ひ給ひけれ。院はうちゑませ給ひけるをいみじと思したるさまも、ことしもあれ、誠しき事やうなり。この帥殿の御はらからといふ君だち數あまたおはすべ

し。頼親の内藏頭、周頼の木工頭などいひし人、片はしよりなくなり給ひて今は唯兵部大輔周家の君ばかりほのめき給ふなり。小一條院の御宮達の御乳母の夫にて、院のかくごして候ひまたふ、いとかしこし。又井手の少將とありし君は出家とか。故關白殿御心おきていとうるはしくあてにおはしましゝかど、御するあやしく御命も短くおはすめり。今の入道一品宮とこの帥殿脱歟中納言のみこそは殘らせ給ふめれ。

右大臣道兼

このおとゞは、この大入道殿の御三郎、粟田殿とこそは聞えさすめりしか。長徳元年乙未五月二日關白の宣旨かうぶらせ給ひて同じ月の八日うせさせ給ひにき。大臣にて五年、關白と申して七日こそ坐しましゝか。この殿ばらの御ぞうにやがて世をえろしめさぬたぐひ多く坐すれど、まだあらじかし。夢のやうにてや見給へるは、出雲守すけゆきのぬしのみ家にありからさまに渡り給へりしをり、關白の宣旨の下りしに、あるじの喜び給ひたるさま推し量り給へ。せばうて事の作法もあるまじとてたゝせ給ひし日ぞ御喜びをも申させ給ひし。殿の御前はえもいはぬものゝかぎりすぐれたるに、北の方の二條にかへり給ふ御供人が、よきもあしきも數知らぬまで、布衣などにてあるもまじりて殿出したて奉りて渡り給ひしほどの、殿の内のさかえ人のけしきは唯おぼせ脱歟やれ。あまりにもと見る人もありけり。御心ちは少し例ならずおぼされけれど、おのづからの事にこそはいまいましく、今日の御悦申しとゞめじとおぼして、念じてうち參らせ給へるに、いと苦しう泣らせ給ひにければ、殿上よりはえ

いでさせ給はで御湯殿のめだうの戸口に御前を召してかゝりて北の陣より出でさせ給ふに、こはいかにと人々見奉る。殿には常よりもけいめいして待ち奉り給ふに、人々にかゝり給へる御心ち、出で給ひつるをりにたとしへなし。されどたゞさりともとさゝめきにこそも聞えず、今の小野宮の右大臣殿の御悦に参り給へりけるをり、も屋の御簾おろして呼び入いでねばかくて申し侍るなり。年ごろはかなき事につけても心のうちに喜び申す事なむ侍れど、させる事なきほどは毎事にもえ申し侍らでなむ過ぎまかりつるを、今はかくまかりなむ無禮をもえはゞからず、かくらうがはしき方に案内申しつるあり」などこまかにのたまへどげなるを、いと不便なるわざかなと思ひしに、風の御簾を吹き上げたりしはざまより見入れしかば、さばかりの重き病をうけ給ひてければ、いかでかは御色もたがひてきらゝかにおはする人ともおぼえず、ことの外に不覺になり給ひにけりと見え給ひながら、長かるべき事どものたまひしなむ哀なりし」とこそ後に語り給ひけれ。この粟田殿の御男君達三人ぞおはせしか。太郎君は福足の君と申しゝをさなき人はさのみこそはと思へどいと淺ましくまさな

く惡しくぞおはせし。東三條殿の御賀に、この君舞をせさせ奉らむとてならはせ給ふ程も、あやにくがりすまひ給へど、よろづにをこづりいのりをさへして敎へ聞えさするに、その日になりて、いみじう玄奉り給へるに、舞臺の上にのぼり給ひて、物の調子吹きいづるほどに、「わざはひかな、あれはまはじ」とて、びんづらひきみだり、御裝束をはらはらと引きやり給ふに、粟田殿御色をまめをになら世給ひて、あれにもあらぬ御氣色も、ありとある人さおもへることよと見給へど、すべきやうもなきに、御をぢの中關白殿のおりて舞臺に上らせ給へば、いひをこづら世給ふべきか、又にくさにえたへず追ひおろさせ給ふべきかとかたがた見侍りし程に、この君を御腰の程にひきつけさせ給ひて、御手づからいみじう舞はさせ給ひしこそ、樂もまさりおもしろく、かの君の御耻もかくれ、その日の興はことの外にまさりたりけれ。祖父殿もうれしとおぼしたりけり。父おとゞはさらなり、よその人だにこそすゞろに感じ奉りけれ。かやうに人のためなさけあさけしき所おはしましけるに、など御末かれさせ給ひにけむ。この君人しもこそあれ、くちなはれうし給ひて、そのたゝりにより、かしらに物はれてうせ給ひにき。この御弟の二郎君、今の左衞門督兼隆卿は大藏卿の女の腹なり。この左衞門督の君達男女あまたおはするなり。大姫君は三條院の三の御子敦平の中務宮を、このきさらぎかとよ、聟とり奉り給へるほどに、またしき御中にておはしますめり。また姫君なる四人おはす。また粟田殿の三郎前頭中將兼綱の君、その君の祭の日調じ給へりし車こそいとをかしかりしか。檜網代といふものをはりて、的のかたちに色どられたりし、車のよこざ

まのまとを弓の形にゑたて、ふちをば矢の形にせられたりしさまの興ありしなり。和泉式部の君歌よまれて侍りき。

「とをつらのうまならねども君のれば車もまとに見ゆるものかな」。

さてよき風流と見えしかど、人のくちやすからぬものにて、「賀茂明神の御矢めおひ給へり」といひなしてしかば、いと便なくやみにき。この君は頭とられ給ひにし、いとゝいみじう侍りしことぞかし。頭になりて驚き喜び給ふべきならねど、あるべき事にてあると、粟田殿花山院すかしおろし奉り、左衛門督小一條院すかしおろし奉り給へり。御門東宮のあたり近づかりたる事なれど、男君たちかくなり。女君は故一條院の御乳母の藤三位の腹にいでおはしましたりしを、やがてその御時のくらべやの女君と聞えし、後にこの大藏卿通任の君の北の方にてうせ給ひにしぞかし。御むかへ腹に佛神に申して孕まれ給へる君、今の中宮に二條殿のり給はずなりにき。かやうに哀なる事どもの世に侍るぞかし。その殿の御北の方、粟田殿の御後は堀川殿の御子の左大臣の北の方にてこそは年ごろおはすと聞き奉りしか。その北の方九條殿の御子の大藏卿の君の女ぞかし。さればこの粟田殿の御ありさま、ことの外にあへなくおはしましき。さるは御心いとさがなくおそろしくて人々いみじうおぢられ給へり し殿の、あやしく末なくてやみ給ひにき。この殿父おとゞの御忌には御殿などにも居させ給

はで、あつきにことつけて御簾も上げわたして、御念誦なども怠給はず、さるべき人々呼びあつめ、後撰古今ひろげて興言し遊びてつゆなげかせ給はざりけり。そのゆゑは花山院をば我こそすかしおろし奉りたれ、されば關白をもゆづらせ給ふべきなりといふ御恨なりけり。世づかぬ御事なりや。さまざまよからぬ御事ども聞えしを、傅殿この入道殿二所は如法に孝し奉り給ひきとぞうけたまはりし。

大鏡卷之七

太政大臣　道長

太政大臣道長

このおとゞの、法興院のおとゞの御五男。御母從四位上行攝津守右京大夫藤原中正朝臣の女なり。その朝臣は從二位中納言山陰卿の七男なり。この道長大臣は今の入道殿下これにおはします。一條院三條院のをぢ、當代東宮の御おほぢにておはします。この殿宰相にはなり給はで永延二年正月廿九日權中納言にならせ給ふ。御年二十三。その年上東門院生れさせ給ふ。正暦二年九月七日大納言にならせ給ふ。正暦三年四月廿七日に從二位したまふ。中宮大夫とぞ申しゝ。御年二十七。宇治殿生れ給ふとしなり。長徳元年乙未四月廿七日、左近衞大將かけさせ給ふ。その年の祭のまへより世の中極めてさわがしきに、またの年いとゞいみじくなり

たりしぞかし。まづは大臣公卿多くうせ給ひしに、まして四位五位のほどは數やはおはしたりし。まづその年うせ給へる殿ばらの御數、閑院大納言殿三月廿八日、中關白殿四月六日出家おはして、十日うせ給ひぬ。それは世のえにはおはしまさず、唯同じをりのさし合せたりし事なり。小一條左大將濟時卿は四月廿三日うせ給ふ。六條左大臣殿重信、粟田右大臣殿道兼、桃園源中納言保光卿、この三人は五月八日一度にうせ給ふ。山井大納言殿は道頼と申しゝ、六月十一日ぞかし、御年二十五にて又ありしかし。あがりての世にもかく大臣公卿七八人、二三月の中にかきはらひうせ給ふは希有なりしわざなり。それも唯この入道殿の御幸のかみ極め給へるにこそ侍るめれ。かの殿ばら次第のまゝに久しく保ち給はましかば、いとかくしもやはおはしまさまし。まづは帥殿の御心用ゐのさがさがしくおはしまさば父おとゞの御病のほど、天下執行の宣旨下り給へりしまゝに、おのづからさてもやおはしまさまじ。それに又おとゞうせさせ給ひにしかば、いかでかはちごみどり子のやうなる心おはする。殿の世の政ごと給はむとて、粟田殿に渡りにしぞかし。ふりをこはゞうつはものをまうけよと申す事誠にある事なり。さるべき御次第にて、それ又あるべきことを、あさましく夢などのやうにとりあへずならせ給ひにし、これはあるべきことかはな。この今の入道殿、そのをり大納言中宮大夫と申して御年いと若く、行く末を待ちつけさせ給ふべき御よはひのほどに、卅にて四月廿七日に大將にならせ給ふ。五月十一日に官中雑事まづ内覧の關白の宣旨うけたまひ、榮えそめさせ給ひにしぞかし。おなじ年の六月十九日に右大臣にならせ給ひて、長徳二年七月

二十日又左大臣にならせ給ひき。そのまゝにはかざまへも別れなりにしぞかし。今にもさこそは侍るめれ。この殿は北の政所二所おはします。この宮々の御母うへと申すは土御門左大臣雅信のおとゞの御女におはします。その雅信のおとゞは亭子の御門の御子一品式部卿宮敦實のみこの御子、左大臣時平のおとゞの御女の腹に生ませ給へりし御子なり。その雅信のおとゞの御女を今の入道殿下の北政所と申すなり。その御腹に女君四所、男君二所ぞ坐します。その御ありさまは唯今のことなれば皆人見奉り給ふらめど、ことばつゞけ申さむとなり。第一の女君は一條院の御時に長保元年十一月一日、御年十二にて女御に參らせ給ふ。又の年同じ長保二年かのえね三月廿五日、十三にて后に立たせ給ひて中宮と申しゝほどに、うちつゞき男御子二人うみ奉り給へりしこそは今の御門東宮におはしますめれ。二所の御母后、太皇太后宮と申して天下第一の母にておはします。その御さしつぎの女君、內侍のかみと申しゝ、三條院の東宮におはしましゝに參らせ給ひて、東宮位に即かせ給ひしかば、長和元年二月十四日に后にたゝせ給ひて中宮と申しき。御年十九。さて又の年長和二年みづのとのうしの年七月廿六日に女御子生れさせ給へるにこそは三四ばかりにて一品にならせ給ひて今に坐します。この頃はこの御母宮を皇太后宮と申して枇杷殿に坐します。一品宮は三宮になずらへて千戸のみふをえさせ給へるはこの宮に后二所おはしますが如くなり。又次の女君、これも內侍のかみにて、今の御門十一歳にて寛仁二年つちのえうま正月三日に御元服させ給ひて、その三月七日まゐり給ひて、おなじ年四月十八日女御の宣旨下されき。この日、

内裏造りいだして渡らせ給ふ日なり。おなじ年の七月廿九日、后に立て奉るべき宣旨ありき。使は源民部卿俊賢の君ぞ出たまひし。中宮大夫にておはせしかば出給ひしにこそ侍るめれ。たゞ今の中宮と申して、うちにおはします。又次の女君はそれも内侍のかみ、十五におはしますに今の東宮十三にならせ給ふ年、治安元年二月一日參らせ給ひて、春宮の女御にてさぶらはせ給ふ。登華殿にぞおはしまし〳〵。殿入道せしめ給ひて後の事なれば、今の關白殿の御女となづけ奉りてこそは參らせ給ひしか。今年は十九にぞならせ給ふ。姫ぎみたまひて七八月にぞ當らせ給へる。入道殿の御有さま見奉るに、必ずをのこ子にてぞおはしまさむ。この翁ら更によも申しおやまち侍らじ」と扇をたかくつかひしこそをかしかりしか。「女君達の御ありさまかくの如し。男君二所と申すは今の關白左大臣頼通のおとゞと聞えさせて、天下を我がまゝにまつりごちておはします。御年廿六にや内大臣攝政にならせ給ひけむ。御門およすげさせ給ひにしかば、寛仁三年十二月廿二日攝政の表奉らせ給ひて、同じき日關白の宣旨下りて、關白にておはします。二十餘にて納言などになり給ふをぞいみじき事にいひしかど今の世の御ありさまかくおはしますぞかし。これを宇治殿と申す。わらは名はたゞ君なり。今一所は唯今の内大臣にて、左大將かけて敎道のおとゞと聞えます。世の一の人にておはしますめり。これは二條殿、御わらは名をや元如君。かゝれば女の御さいはひ、あるはこの北の政所のさかえ極めさせ給へり。御門東宮の御母后とならせ給ふ。あるは御親世の一の人にておはするには、御子も生れ給はねども后にゐさせ給ふめり。女の御さいはひは后こそ極め

ておはします御事なめれ。されどそれはいと所せげにおはします。いみじきとみの事あれどおぼろげならねばえうごかせ給はず。陣屋なゐぬれば女房たはやすくも心に任せてもえつかまつらず。かやうに所せげなり。たゞ人と申せど御門東宮の御うばにて三后になずらふ御位にて千戸のみふえさせ給ふ。年官年爵を賜はらせ給ひからの御車にていとたはやすく御ありきなどもなかなか御身安らかにてゆかしう思しめしけることは、世の中の物見何の法會やなどあるをりは御車にて御さじきにても必御らんずめり。内、東宮、宮々とおかれわかれこそをしくておはしませど、いづかたにも渡り參らせ給ひてはさしならびおはします。唯今三人の后、東宮の女御、關白左大臣の御母、御門東宮はた申さず、大方世のおやにて、二所ながらさるべき權者にこそおはしますらめ。御ながらひ四十年ばかりにやならせ給ひぬらむ。哀にやんごとなきものにかしづき奉らせ給ふといへばこそおろかなれ。世の中には、いにしへ今の國母大臣皆藤氏にてこそおはしますに、この北の政所ぞ源氏にて御さいはひ極めさせ給ひたる。をとゝしの御賀のありさまなどこそ皆人見聞き給ひしことなれど、猶返す返すもいみじく侍りしものかな。又高松殿のうへと申すもこれ源氏におはします。延喜の御子高明親王、左大臣左大將までならせ給へりしに思はざるほかの事により大臣とられて太宰權帥にならせ給ひて、ながされ給ひし、いとゞ心うかりし事ぞかし。その御女におはします。それをかの殿筑紫におはしましける年、この姫君まだいとをさなくておはしけるを、御をぢの十五の宮と申したるも同じ延喜の御子におはします。女子もおはせざりければ、この君をと

り奉りて養ひかしづき奉りて用ゐ給へるに、西宮殿も十五の宮もかくれさせ給ひにし後に、故女院の后に坐しましゝをり、この姫君を迎へとり奉らせ給ひて、東三條殿の東の對に帳をたてゝ壁しろをひき、我が御しつらひにいさゝかおとさせ給はず、云ふかひなきこえさせ、女房、侍、けいし、云も人までべちにわかちおてさせ給ひて姫宮などのおはしまさせし如くに限もなく思ひかしづき聞えさせ給ひしかば、御せうとの殿ばら我も我もとけさうじ奉り給ひけれど、后かしこく制し申させ給ひて、今の入道殿をぞゆるし聞えさせ給ひければ、通ひ奉らせ給ひしほどに、女君二所男君四所おはしますぞかし。女君と申すは今の小一條院の女御、今一所は故中務卿宮具平親王と申す。村上の七のみこにおはしましき。その御男君三位中將師房の君と申すを今の關白殿の上の御はらからなる故に關白殿聟とり奉らせ給へり。淺はかに心えぬ事とこそ世の人申しゝか。殿の内の人も思したりしかど入道殿思ひおきてさせ給ふやうありけむとぞ元かしな。男君は大納言にて春宮大夫頼宗と聞ゆ。御わらは名いは君。今一所はおなじ大納言中宮權大夫能信ときこゆ。今一所中納言長家、御わらは名こわか君。今一所は馬頭にて顯信とておはしき。御わらは名こけ君なり。長和元年壬子正月十九日入道玄給ひて、この十餘年佛の如くして行はせ給ふ、いと思ひかけずおはれなる御事なり。みづからの御菩提申すべからず。殿の御ためにも、又法師なる御子のおはしまさぬが口をしうことかけさせ給へるやうなるに「されればやがて一度に僧正になして奉らむ」となむ仰せられけるとぞうけたまはるを、いかゞ侍らむ。うるはしき御法服宮々よりも奉らせ給ひ、殿より

一三八

はあさの御衣奉るをばあるまじき事に申させ給ふなるをぞいみじくわびさせ給ひける。出でさせ給ひける日は、緋の御あこめのあまた候ひけるを、これかれあまた重ねて着たるなむうるさき。「綿をひとつに入れなして、一つばかり着たらばや。去かせよ」と仰せられければ、「これかれそゝぎ侍らむもうるさきに、綿を厚くして参らせむ」と申しければ、「それは久しくもなりなむ。唯疾くと思ふぞ」と仰せられければ、思しめすやうこそはと思ひて、あまたが綿をひとつに入れて参らせたるを奉りてぞその夜はいでさせ給ひける。されば御めのとは「かくて仰せられけるものをなにしにまゐらせけむ、例ならずあやしと思はざりけむ心のいたりのなさよ」と泣きまどひ給ひけむこそいとことわりにおはれなれ。今年もそれにさはらせ給はむやうにかくと聞きつけ給ひては、やがて絶え入りて、なき人のやうにておはしけるを、かく聞かせ給はゞいとほしとおぼえて御心や亂れたまはむと今さらによしなし。「これぞめでたき事。佛にならせ給ひて我が御ためにも後の世のよくおはせむこそつひのこと」と人々いひければ、「佛にならせ給はむもうれしからず、我が身後に助けられ奉らむも覺えず、唯今のかなしさよりほかの事なし。殿もうへもおはしませばいとよし。唯我ひとりが事ぞや」とぞふし轉び給ひけむ、げにさる事なりや。道心なからむ人は後の世の事までもしるべきかはな。高松殿の御夢に、左の方の御ぐしうしろを、なからよりそり落させ給ふと御覽じけるを、かくて後にぞこれが見ゆるなりけりと思ひさだめて、「ちがへさせいのりなどをもすべかりけるを」と仰せられける。かは堂にて御ぐしおろさせ給ひて、やがてその夜山

へ上らせ給ひけるに、「賀茂川わたりしほどのいみじうつめたく覚えしなむ少しおはれなりし。今はかやうにてあるべき身ぞかしとおもひながら」とこそ仰せられけれ。いまの衛門督ぞ疾くより「この君は出家の相こそおはすれ」とのたまひて、中宮大夫殿のうへに御せうそこ聞えさせ給ひけれど、さる相ある人をばいかでかとて、後にこの大夫殿をばとりたてまつり給へるなり。正月にうちよりいで給ひて、この衛門督、「馬頭の物よりさしいでたりつるこそむげに出家の相近くなりて見えつれ。いくつぞよ」とのたまひければ、頭中将「十九にこそなり給ふらめ」と申し給ひければ、「さてはことしぞ玄給はむ」とありけるに、かくと聞きてこそ、「さればよ」とのたまひけれ。相人ならねど、よき人はものを見給ふなり。入道殿は「やくなし。いたうなげきて聞かれし心みだれせむもかの人のためいとほし。法師子のなかりつるいかゞはせむ。をさなくてもなさむと思ひしかど、すさみしかばこそあれ」とて唯例の作法の法師の御やうにもてなし聞え給ひき。受戒にはやがて殿のぼらせ給ふ。人々の我も我もと御供にまゐり給ひて、いとよそほしげなりき。威儀僧はえもいはぬものども立たせ給へり。御さきにうしき僧綱どもやんごとなきさまぶらふ。山の所司殿の御随身どもの人笑ひのゝしりて、戒壇にのぼらせ給ひけるほどこそ入道殿はえ見奉らせ給はざりけれ。御みづからは本意なく傍いたしとおぼしたりけり。座主のたごしに乗りて、がいさゝせてのぼり給ひける程こそ、あはれ天台座主の戒和尚の一やと見え給ひけれ。世継が隣に侍るものゝその際にあひて見奉りけるが語り侍りしなり。春宮の大夫殿、中宮の権大夫殿などの大納言にならせ給

ひしをり、されど御耳とゞまりて聞かせ給ふらむとおぼえしかど、その大納言の座去きそへられしほどなど、語り申せ如しかどいさゝか御氣色かはらず念ずうちして「かやうのことたゞ去ばしの事なりとぞうちのたまはせしあむ、めでたく優に覺えし」とぞみちなりの君のたまひける。この殿の君たち、男女合せて十二人、數のまゝにおはします。男も女も御官位こそ心にまかせ給ひつらめ、御心ばへ人がらどもさへいさゝか片はにて、もどかれさせ給ふべきにもおはしまさず、とりどりにいうそくにめでたくおはしまさふも、たゞことならず、入道殿の御さいはひのいふかぎりなくおはしますなめり。さきざきの殿ばらの君だちおはせしかども、皆かうしも思ふさまにや坐せし。おのづから男も女もよきおしきまじりてこそおはしまさふめりしか。この北政所、二方ながら源氏におはしませば、末の世の源の榮え給ふべきと定めますめり。かゝればこの二ところ御わりさまかくの如し。但し殿の御前は三十より關白せさせ給ひて、一條院、三條院の御時世をまつりごち、我が御心のまゝにて坐しましゝに、又當代九つにて位に即かせ給ひにしかば、御年五十一にて攝政させ給ふとし、我が御身は太政大臣にならせ給ひ、攝政をば今の關白おとゞにゆづり奉らせ給ひて、御年五十四にならせ給ふ。寛仁三年つちのとのひつじ三月十八日夜中ばかりより胸やませ給ひて、わざとにはおはしまさねど、いかゞ思しめしけむ、俄に廿一日のひつじの時ばかりに起きゐさせ給ひて御かうぶりめし、かいねりの御したがさねに、ほうこをさしそがせ給ひて御てうづめせば、なに事にかと關白殿をはじめて殿ばらも思しめすに、寢殿の

西の渡殿に出でさせ給ひて、南にむきて拝せさせ給ふ。春日の明神にいとま申させ給ふなりけり。さやうめい僧都、長義律師して御ぐしおろさせ給ふ。關白をはじめとして、君だち殿ばらなどいとあさましとおぼしめせどおぼしたちて俄にせさせ給ふことなれば、たれもたれもあきれてえせいし申させ給はず、あさましとはおろかなり。ねげむ法印戒の師したまふ。信ゑ僧都の袈裟衣をぞ奉りそめける。俄の事にてまうけさせ給はざりけるにや、御名行觀とぞつかせ給へりし。後にぞもの文字かへて行覺とぞ侍りし。かくて後にぞ、內、東宮の宮たちにもかくと聞えさせ給ひける。聞きつけさせ給へる宮たちの御心ども、あさましくおぼし騒ぐとも事もおろかなり。さるの時ばかり小一條院渡らせ給ひ、御門のとにて御車牛かけおろして、ひき入れて中門のとにておりさせ給ひてこそはおはしましゝか。よせておりさせ給ひて、かしこまり申させ給ふほど、いともかたじけなくめでたき御ありさまなりしぞかし。宮たちも夕さりこそは渡らせ給ひしか。中宮皇后宮などはひとつ御車にてぞ渡らせ給へりし。行啓のありさまもにはかにて例の作法にも侍らざりけり。おなじき年の九月廿七日奈良にて御受戒侍りし。かゝる御ありさまにつけても、めでたき事ども多く侍りしかば皆人しり給へる事どもなればこまかに申し侍らじ。御出家したまへれど、猶又おなじ五月八日准三宮の位にならせ給ひて、年官年爵えさせ給ふ。三人の后、關白左大臣內大臣あまたの納言の御父、御門東宮の御おほぢにておはします。世を知り保たせたまふこと、かくて三十一年ばかりにやならせ給ひぬらむ。今の年は六十におはしませば、かんのとのゝ御産の後に御賀あるべし

とこそ人申すめれ。いかにまたさまざまおはしまさひてめでたく侍らむずらむ。大かた又世になき事なり。大臣の御むすめ三人、后にてさしならべ奉らせ給ふ事、おさまましくけうのことなり。もろこしには昔三千人の后おはしけれど、それはすぢも尋ねでたゞかたちありと聞ゆるを隣の國までえらびいだして、その中に楊貴妃ごときはあまり時めき過ぎて悲しき事あり。王昭君はえびすの王にたまはりて胡の國の人となり、上陽人は楊貴妃にそばめられて御門に見え奉らで、春のゆき秋のすぐることをも知らずして、十六にて參りて六十まであり けり。かやうなれば三千人のかひなし。我が國にはなゝ后こそおはすべけれど代々に四人ぞたてたまふ。この入道殿下のひとつかどばかりこそは、太皇太后宮、皇太后宮、中宮、三所出でおはしたれ。誠に希有希有の御さいはひなり。皇后宮一人のみこそはすぢ別れ給へりといへども、それも貞信公の御末におはしませば、それよそ人とおもひ申すべきことかは。しかあれば唯世の中はこの殿の御光ならずといふことなし。この春こそはうせ給ひにしかば、いとゞ唯三人の后のみこそは世におはしますめれ。この殿ことにふれて遊ばせる詩和歌など居易や赤人、人麿、躬恒、貫之といふともなどえ思ひよらざりけむとこそおぼえ侍れ。春日の行幸は、さきの一條院の御時よりはじまれるぞかし。それにまた當代をさなくおはしませども必ずおるべきことにて、はじまりたる例になりにたれば、大宮御與にそひ申させ給ひておはします。めでたしなどいふも世のつねならず、時の御おぼえにてうちそひ仕うまつらせ給ふ。殿の御ありさま御かたちなど少し世の常にもおはしまさましかば、他かぬことにや、そ

こら集まりたる田舎世界の民百姓、此こそ確かに見奉りけめ。唯轉輪しやう王などはかくやと光るやうにおはしますに、佛を見奉りたらむやうに、額に手をあて〳〵拜み惑ふさまことわりなり。大宮の赤色の御扇さしかくして、御かたのほどなどは少し見え給ひけり。かばかりにならせ給ひぬる人は、つゆの御すきかげもふたぎ、いかゞとこそもてかくし奉るに、ことかぎりあれば今日はよそほしき御ありさまも少しは人の見奉らむもなどかはやともやおぼしけむ、殿も宮もいふよしなく御心ゆかせ給へりける事推し量られ侍るは。殿、大宮に、

「そのかみやいのりおきけむ春日野のおなじ道にもたづねゆくかな」。

御かへし、

「くもりなき世のひかりにや春日野のおなじ道にもたづねゆくらむ」。

かやうに申しかはさせ給ふほどの、げにげにと聞えてめでたく侍りし。中にも大宮のおそばしたりし、

「三かさ山さしてぞきつるいそのかみふるきみゆきのあとを尋ねて」。

これらぞな、翁などが心の及ばぬにや、あがりてもかばかりの秀歌えさふらはじ。その日にとりては春日明神のよませ給へりけるにおぼえ侍り。今日かゝる事どものはえあるべきにて、前の一條の院の御時にも大入道殿の行幸申し行はせ給ひけるにやとこそ心えられ侍れな。大方さいはひおはしまさむ人の和歌の道後れ給ひつらむはことのはえもなくや侍らまし。この殿はをりふしごとに必ずかやうの事を仰せられて、ことをはやさせ給ふなり。ひと

とせの北の政所の御賀によませ給へりしは、

「あかざり（れい）しちぎりは絶えて今更にこゝろけがしに千代といふらむ」。

又この一品の宮の生れおはしましたりし御うぶやしなひの日、大宮せさせ給へりし夜の御歌は聞かせ給へりや。それこそいと興あることと人思ひよるべきにも侍らぬ和歌のていなれ。

「おと宮のうぶやしなひをおねみやのやしなふ見るぞうれしかりける」

とかやぞうけたまはりし」とて心よくゑみたり。「四條大納言のかく何事もすぐれめでたくおはしますを、大入道殿、「いかでかゝらむ。うらやましくあるかな。我が子どもの影だにふむべくもあらぬこそ口惜しけれ」と申させ給ひければ、中關白殿、粟田殿などはげにさもやおぼすらむと耻かしげなる御氣色にて物ものたまはぬに、この入道殿はいと苦うおはしますす御身にて、「かげをばふまで、つらをやはふまぬ」とこそ仰せられけれ。誠にこそさおもはすめれ。内大臣殿をだに近くて見奉り給はぬよ。さるべき人はとうより御心たましひのたけう御まもりもこはきなめりと覺え侍れば、花山院の御時に、五月ながつやみに、五月雨も過ぎて、いとおどろおどろしくかきみだれ雨の降る夜、御門さうざうしくや思しめしけむ、殿上に出でさせおはしまして遊びおはしましけるに、人々物がたりなどまひて、昔恐ろしかりける事どもなど申させ給へるに、「今宵こそいとむつかしげなる夜なめれ。かく人がちなるにだにけしきおぼゆ。まして物離れたる所などいかならむ。さあらむ所に一人いなむや」とおはせらけに、「えまからじ」とのみ申し給ひけるを、入道殿は「いづくなりともまかりなむ」

と申し給ひければ、さる所おはしますみかどにて、「いと興あることなり。さらばいけ。道隆はぶらく院、道兼は仁壽院の塗籠、道長は大極殿へいけ」とおほせられければ、よその君たちはびんなきことをも奏してけるかなと思ふ。又承り給へる殿ばらは御氣色かはりてやくなしとおぼしたるに、つゆさる御氣色もなくて、「私の從者をば具し候はじ。この陣の吉上にまれ瀧口にまれ一人、昭慶門まで送れと仰せごとたべ。それより內に一人入り侍らむ」とまうし給へば、「證なき事にこそ」と仰せらるれば、「げに」とて御手箱におかせ給へる刀さして立ちぬ。今二所もにがむにがむおのおのおはさうじぬ。ね四つと奏してかく仰せられ議するほどに丑にもなりにけむ。「道隆は右衛門の陣よりいでよ。道長は承明門より出でよ」とそれをさへ分かせ給へば、左かおはしましわへるに、中關白殿、陣まで念じておはしたるに、宴の松原のほどにそのものともなき聲どもの聞ゆるに、すぢなくてかへり給ふ。粟田殿は露臺のあるやうに見え給ひければ、ものもおぼえで、「身のさぶらはゞこそ仰せ事もうけたまはらめ」とておのおのかへり參り給へれば、御扇をたゝきて笑はせ給ふに、入道殿はいと久しう見えさせ給はぬを、いかゞと思しめすほどにぞ、いとさりげなく事にもあらずげにて參らせたまへる。「いかにいかに」と問はせ給へば、いとのどやかに、御刀に削られたるものをとり具して奉らせ給ふに、「こは何ぞ」と仰せらるればたゞにて歸り參りて侍らむは證さぶらふまじきによりて、高みくらの南おもての柱のもとを削りてとりて候ふなり」とつれなく申し

給ふに、いとおさましうおぼしめさる。こと殿達の御けしきはいまにもなほならでこの殿のかくて参り給へるを、御門より始め感じのゝしられ給へど、うらやましきにや、又いかなるにか、物もいはでぞ侍ひ給ひける。猶疑はしく思しめされければ、つとめて藏人して「削りくづを遣し見よ」と仰せ言ありければ、もていきておしつけて見たうびければつゆたがはざりけり。そのけづりあとはいとけざやはやかにて侍るめり。末の世にも見る人はなほあさましきことにぞ申しゝかし。故女院の御修法して、飯室權僧正のおはしまし候ふ伴僧にて相人の候ひしを、女房どもの呼びて相せられけるついでに「内の大臣殿はいかゞおはする」と問ふに、「いとかしこうおはします。中宮大夫殿こそいみじくおはしませ」といふ。又粟田殿をとひ奉れば、「それもいとかしこうおはします。大臣の相おはします。又おはれ中宮大夫殿にこそいみじうおはしませ」といふ。また權大納言殿を問ひ奉れば、「それもいとやんごとなくおはします。いかづちの相おはします」と申しければ「いかづちはいかなるぞ」と問ふに、「ひときはいと高くなれどのちどものなきなり。されば御末いかゞおはしまさむと見えたり。中宮大夫殿こそかぎりなくきはなくおはしませ」とこと人をとひ奉る度にはこの入道殿を必ずひきそへ奉りてはめ申す。「いかにおはすればかく度ごとには聞え給ふぞ」といへば、「第一の相には虎子如渡深山峰なりと申したるに、聊かもたがはせ給はねばかく申し侍るなり。このたとひは虎の子のけはしき山の峰をわたるが如しと申すなり。御かたちようて、いはゞ毘沙門のいきほひ見奉るがやうにおはします、御さうかくの如しといへば、誰よりもすぐれ

給へり」とこそ申しけれ。いみじかりける上手かな。あてたがはせ給へる事やはおはしますめる。帥のおとゞは大臣までですがやかになり給へりしを、はじめよしとはいひけるなめり。いかづちのおちぬれど又もあがるものを、星のおちて石となるにぞ譬ふべきにや。それこそかへりあがる事なけれ。をりをりにつけたる御かたちなどは、げに永きおもひいでとこそは人申すめれ。中にも三條院の御時賀茂の行幸の日、雪のことのほかにいたう降りしかば、御ひとへの袖をひきいでゝ、御扇をたかくもたせ給へるに、いと白く降りかゝりたれば「あないみじ」とてうち拂はせ給へりし御もてなしはいとめでたくおはしましゝものかな。上の御ぞは黒きに、御ひとへぎぬはくれなゐの華やかなるあはひに雪の色ももてはやされて、えもいはず坐しましゝものかな。高名のなにがしといひし御馬いみじかりしわくめなり。あはれそれを奉り鎭め給へりしはや。三條院もその日の事をこそ思しめしいでおはしますなれ。御病のうちにも、「賀茂の行幸の日の雪こそ忘れがたけれ」と仰せられけむこそ哀に侍れ。かく世間のひかりにておはします殿の、一年ばかり物をやすからず思しめしたりしよ、いかに天道御らんじけむ。さりながらもいさゝかひげし御心やは徹させ給へりし。おほやけざまの公事作法ばかりにはあべき程にふるまひ、時たがふることなく勤めさせ給ひて、うちうちには所もおき聞えさせ給はざりしぞかし。帥殿の南の院にて人々集めて弓あそばしゝにこの殿渡らせ給へれば、思ひかけずあやしと中關白殿おぼし驚きて、いみじう饗應し申させ給ひて、下﨟におはしませど、さきに立て奉りて、まづ射させ奉り給ひけるに、帥殿の矢かず今

ふたつおとり給ひぬ。中關白殿、又御前に侍ふ人々も「今二度のべさせ給へ」と申してのべさせ給へりけるに、安からずおぼしなりて、「さらばのべさせ給へ」と仰せられて、又射させ給ふとて仰せらるゝやう、「道長が家より御門后立ち給ふべきものならば、この矢あたれ」と仰せらるゝに、おなじものを中心には當るものかは。次に帥殿射たまふに、いみじう隱し給ひて御手もわなゝき候ふにや、的のあたり近くだにえやらず無邊世界を射給へるに、關白殿色青くなりぬ。又入道殿射させ給ふとて「攝政關白すべきものならばこの矢當れ」とおはせらるゝに始めとおなじやうに的のわるゝばかり射させ給ひつ。響應しもてはやし聞えさせたまへる興もさめてことにがうなりぬ。父おとゞ、帥殿に、「なにかいる。ないそいそ」と制せさせ給ひて事さめにけり。入道殿矢もどして、やがて出でさせ給ひぬ。その折は左京大夫とぞ申しゝ。弓をいみじく射させ給ひしなり。又いみじく好ませ給ひしなり。けうに見ゆべき事ならねども人のさまのいひ出で給ふことのおもむきより、かたへは隱せられ給ふなめり。又故女院の御石山詣に、この殿は御馬にて帥殿は車にて參り給ふに、さはる事ありて粟田口より帥殿かへり給ふとて、院の御車のもとに參り給ひてあない申させ給ふに、御車もとゞめたればながえおさへて立ち給へるに、入道殿は御馬を押しかへして、帥殿の御うなじのもとにいと近ううちよらせ給ひて、「疾くつかうまつれ。日の暮れぬるに」とおはせられければ、あやしくおぼされて見かへり給へれど、驚きたる御氣色もなく、とみにものかせ給はで、「日くれぬ。疾く疾く」とそゝのかせ給ふを、いみじう安からずおぼせどいかゞはせさせ給はむ、やを

ら立ちのかせ給ひにけり。父おとゞにご申させ給ひければ、「大臣かろむる人のよきやうなし」とぞのたまはせける。三月上の巳日の御はらへに、やがて逍遙玄給ふとて、帥殿、河原にさるべき人々あまた具していで給へり。ひらばりどもあまたうち渡したるおはし所に、入道殿もいでさせ給ひたる。御車を近くやれば、「便なきこと、かくなせそ。やりのけよ」とおはせられけるを、なにがし丸といひし御車副の、「何事のたまふ殿にかあらむ。かくきこえたまへれば、この殿は不運にはおはするぞかし。わざはひやわざはひや」とて、いたく御車牛をうちて、今少し平張のもと近くこそ仕うまつりよせたりけれ。「からうもこの男にいはれぬるかな」とぞ仰せられける。さてその御車副をば、いみじくらうたくせさせ給ひ御かへりみありしかば、かやうの事にてこの殿達の御中いとあしかりき。女院は入道殿をとりわき奉らせ給ひていみじう思ひ申させ給へりしかば、帥殿はうとうとしくもてなさせ給へりけり。御門、皇后宮をねんごろに時めかさせ給ふゆゑに、帥殿はおけくれ御前に侍はせ給ひて、入道殿をば更にも申さず、女院をもよからずことにふれて申させ給ふを、おのづから心やみさせ給ひけむ、いとゞはいなきことに思しめしける、とかやなり。故入道殿の世を去らせ給はむとを御門いみじう去ぶらせ給ひけり。皇后宮父おとゞおはしまさで、世の中をひきかはらせ給はむとをいと心苦しうおぼしめして、粟田殿をもとみにやは宣旨下させ給ひし。されど女院の道理のまゝの事をもおばしめし、又帥殿をばよからず思ひ聞えさせ給ひければ、入道殿の御事をいみじう去ぶらせ給ひけれど、「いかでかくは思しめしおはせらるゝぞ。大臣越えられた

る事だにいといとほしう侍りしに、父おとゞのおながちにし侍りしことなれば、いかゞはせ給はずなりにしにこそ侍れ。粟田のおとゞにはせさせ給ひて、これにしも侍らざらむはいとほしさより御ためなむいとたよりなく世の人もいひなし侍らむ」など、いみじう奏せさせ給ひければむつかしうや思しめされけむ、後には渡らせたまはざりけり。されば入道殿はうへの御局に侍はせ給ふ。そのほどは入道殿はうへの御局に侍はせ給ふ。いと久しういでさせ給はねば、御胸のぼらせたまひて、こなたへとは申させ給はで、我が夜のおとゞに入らせ給ひてなくなく申つぶれさせ給ふ。そのほどは入道殿はうへの御局に侍はせ給ふ。いと久しういでさせ給はねば、御胸赤みぬれつやめかせ給ひながら、御口は心よくゑませ給ひて、「あはや宣旨下りぬ」とこそ申させ給ひけれ。いさゝかの事だに皆この世ならず侍るなれば、いはむやかばかりの御ありさまは人のともかくも思しおかむによらせ給ふべきにもあらねど、いかでかは院をおろかに思ひ申させ給はまし。その中にも道理すぎてこそは報じ奉り仕うまつらせ給ひしか。御骨を さへこそはかけさせ給ひてしか。中關白殿、粟田殿うち續きうせさせ給ひて、入道殿に世うつりしほどは、さもむねつぶれてきよきよと覺え侍りしわざかな。いとあがりての世はさり侍らず。翁ものおぼえてのちはかゝる事候はぬものをや。今の世になりては一の人の貞信公小野宮殿をはじめ奉りては、十年と坐する近く侍らねば、この入道殿もいかゞと思ひ申し侍りしにいとゞかゝる運におされて、御兄だちはとりもおへず亡び給ひしにこそおはすめれ。それも又さるべくあるやうある事を、皆世はかゝるなめりと申す人々覺しめすとて、有樣少

し又申すべきなり。世の中のみかど神の代七代をばさるものにて、神武天皇よりはじめ奉りて三十七代にあたり給ふ孝徳天皇の御代よりこそはさまざまの大臣定まり給ふなれ。但しこの御時、大中臣の鎌子の連と申して内大臣になりはじめ給ふ。そのおとゞは常陸の國にて生れ給へりければ、三十九代にあたり給へる御門天智天皇と申す、その御門の御時にこそこの鎌足のおとゞの御姓、藤原と改まり給ひたれ。されば世の中の藤氏の初めは内大臣鎌足のおとゞを云奉れり、そのする名ずゑより多くの御門、后、大臣、公卿さまざまになりいで給へり。たゞしこの鎌足のおとゞをこの天智天皇いとかしこく時めかしおぼして、わが女御一人をこのおとゞに譲らしめ給ひつ。その女御、唯にもあらず孕み給へりければ御門の思さしめ給ひけるやう、この女御の孕める子、男ならば臣が子とせむ、女ならば朕が子とせむとおもほして、かのおとゞに仰せられけるやう、「男ならば大臣の子にせよ。女ならばわが子にせむ」と契らしめ給へりけるに、この御子男にて生れ給へりければ内大臣の御子と云給ふ。このおとゞはもとより男一人女一人をぞもち奉らせ給へりける。この御腹にさしつゞき女二人男二所生れ給ひぬ。その姫君は天智天皇の御皇子大友の皇子と申しゝが太政大臣の位にて、次にはやがて同じ年の内に御門となり給ひて天武天皇と申しける御門の御時の女御にて、二所ながらさし續きおはしけり。おとゞのもとの太郎君をば大中臣のおいみまろとて宰相までなり給へり。天智天皇の御子の孕まれ給へしは左大臣までなり給ひて藤原不比等のおとゞとておはしける。うせ給ひて後贈太政大臣になり給へり。鎌足のおとゞの三郎は宇

合とぞ申しける。四郎はふじ丸と申しき。この男君たちみな宰相ばかりまでぞなり給へる。かくて鎌足のおとゞは天智天皇の御時、藤原の姓たまはりて、その年ぞうせさせ給へりける。内大臣の位にて廿三年そおはしましける。太政大臣極め給はねど、藤原の御いではじめのやんごとなきによりて、うせ給へる後のいみな淡海公と申しけり」。この繁樹がいふやう、「大織冠をばいかで淡海公とは申させ給ふぞ。大織冠は大臣の位にて廿五年、御年五十六にてなむかくれおはしましける。ぬしののたまふことゞも天の川をかきながすやうに侍れど、をりをりかゝるひが事ぞまじりたる。されど誰か又かくは語らむな。佛在世の淨名居士とおぼえ侍るものかな」といへば、世繼がいはく、「むかしからくにに孔子と申すものしりのたまひけるやう侍り。「智者も千のおもひばかりも必一つのあやまちあり」となむあれば、世繼年百歳におほくあまり、二百をかぞへぬほどにて、かくまでとはずがたりを申せば、むかしの人々もおとらざりけるにやあらむとなむおぼゆる」といへば、繁樹、「さか〴〵かまことに申すべき方なくこそ侍れ」とて、かつは涙おしのごひあど感ずるさまことなるまことにいひてもあまりにぞ覺ゆるや。「御子右大臣不比等のおとゞは實は天智天皇の御子なり。されど鎌足のおとゞの二郎になり給へり。この不比とうのおとゞ、御名のもじより始めてならずおはしましけり。ならびひとしからずとつけられ給へる名にぞこのもじは侍りける。この不比等の大臣の御男君たち二人ぞおはしける。太郎は武智麿ときこえて左大臣までなりたまへり。二郎房前と申して宰相までなりたまへり。この不比等の大臣の御女二人おはしける。一

所は聖武天皇の御母后、光明皇后とぞ申しける。今一所の御女は聖武天皇の御女御にて、御女子をぞうみ奉りたまへりける。女御子を聖武天皇、女帝にする奉り給ひてけり。この女帝をば高野女帝とぞ申して二度位につかせ給ひたりける。弓削の法皇はこの時ぞかしさて不比等の大臣男子四所を四家となづけて、皆門をわかち給へりけり。その太郎左大臣武智麿をば南家と名づけ、二郎房前をば北家と名づけ、御はらからの宇合の式部卿をば式家を名づけ、そのおとゞの大夫ふじ丸をば京家と名づけ給ひて、これを藤氏の四家とは名づけられたるなりけり。この四つの家より數多のさまざま國王、大臣、公卿おほくいで給ひてさかえおはします。去かあれと、北家の末今にえだ廣ごり給へり。その御次をまた一すぢに申すべきなり。絶えにたるかたは申さじ。人ならぬほどのものどもは、おのづからその御末にもや侍らむ。かの鎌足のおとゞよりの御つゞき、今の關白殿まで十三代にやならせ給ふらむ。その次第をきこしめせ。藤氏と申せば唯藤原をばさいふなりけりとぞ人はおぼさるらむ、さはあれど、もとすゑ知ることはいとありがたきことなり。

一　内大臣鎌足大臣、藤原の姓賜はり給ひての年の十月十六日うせさせ給ひぬ。御年五十六。大臣の位にて廿五年。この姓の出でくるを聞きて紀の氏の人のいひける、「藤かゝりぬる木は枯れぬるものなり。今ぞ紀氏はうせなんずる」とぞの給ひてけるに、まことにこそ去かたやすく侍らずやありけむ。聖徳太子の傳へ給ふといへども、この頃だに生れたるちごも法

一五四

花經を讀むと申せども、また讀まぬも侍るぞかし。百濟の國より渡りたりける厄して維摩經供養ぜたまへりけるに、御心ち一度にをこたり侍りければ、その經をいみじきものに玄給ひけるまゝに維摩會は侍るなり。

一　鎌足の大臣の次郎、左大臣正一位不比等大臣、御年六十二、養老四年八月三日うせたまふ。大臣の位にて十三年。贈太政大臣にならせ給へり。元明天皇、元正天皇の御時二代大臣にておはしましき。

一　不比等大臣の次郎、房前大臣、宰相にて二十年。大炊天皇の御時、天平寶字四年庚子八月七日贈太政大臣になり給ふ。元正天皇、聖武天皇二代、この間宰相にて、天平九年四月十七日にうせ給ひにき。

一　房前のおとゞの四男、眞楯大納言、稱德天皇の御時、天平神護二年三月十六日にうせ給ひぬ。御年五十二。贈太政大臣。公卿にて七年。年中行事、十二日うせ給ふとあり。

一　眞楯大納言の御二郎、右大臣從二位左近衞大將内麿の大臣、御年五十七。公卿にて二十年、大臣の位にて七年。贈從一位左大臣。桓武天皇二代にわひ給へり。

一　内麿大臣の御三郎、冬嗣大臣は、右大臣までなり給へり。贈太政大臣。この殿よりつぎさまざまわかしたればこまかに申さじ。

鎌足の御代よりさかえひろごり給へり。御末々やうやうせ給ひて、この冬嗣のほどはむげに心ほそくなり給へり。その程は源氏のみこそさまざま大臣公卿に多くおはせしに、このおとゞ南圓堂をたて、丈六のふくえん供養ずゑ奉り給ふ。さてやがて福緣讀經一千卷供養ぜ給

へり。今にその經ありつゝ、藤氏の人々とりてまもりに志あり給へり。その佛經の力にこそ侍るめれ。またさかえて御門の御後見今にたえず。するすゑせさせ給ふめるはその供養の日の大臣公卿日のうちに十一人うせ給ひにけりとあり。或本に、源氏の内

一　冬嗣大臣の御太郎、長良中納言は、贈太政大臣までなり給ふ。

一　長良大臣の御三郎、基經のおとゞは、太政大臣までなりたまふ。

一　基經大臣の御四郎、忠平のおとゞは、太政大臣までなたまりふ。

一　忠平大臣の御次郎、師輔大臣は、右大臣までなりたまふ。

一　師輔右大臣の御三郎、兼家大臣は、太政大臣までなり給ふ。

一　兼家大臣の御五郎、道長大臣は、太政大臣までなりたまふ。

一　道長大臣の御太郎、只今の關白左大臣頼通のおとゞ、これにおはします。この殿の御子の今までおはしまさゝりつるこそいとふびんに侍りつるを、この若君の生れさせ給へるいとかしこき事なり。母は申さぬことなれど、これはいとやんごとなくさへおはするこそ、故左兵衛督は人がらこそいとゞも思はれ給はざりしかども、殿あて人におはするに、又かく世をひゞかす御孫のいでおはしたる、なきあとにもいとよし。七夜の事は入道殿せさせ給へるにつかはしたる歌、

「年をへてまちつる松のわか枝にうれしくあへる春のみどりご」。

御門東宮をはなち奉りてはこれぞうまごの御さととてやがて御わらはなををさ君とつけ奉らせ給ふ。この四家の君たち、昔も今もおまたおはします中に、みちたえずすぐれ給へるはかくなり。その鎌足のおとゞ生れ給へるは常陸の國なれば、かしこの鹿島といふ所に氏の御神をすましめ奉り給ひて、その御世より今にいたるまで、あたらしき御門、后、大臣立ち給ふ折はみてぐら使必ずたつ。御門奈良におはしましゝ時は、鹿島祭とて大和國三笠山にふり奉りて、春日明神となづけ奉りて、今に藤氏の御氏神にて、おほやけ男女つかひたてさせ給ひ、后の宮その氏の大臣公卿皆この明神に仕うまつり給ひて二月十一月上の申日御祭にてなむさまざまの使立ちのゝしる。御門この京にうつらしめ給ひては、又近くふり奉りて大原野と申す。さゝらぎの初卯の日、霜月初子の日と定めて年に二度のまつりあり。又同じくおほやけの使たつ。藤氏の殿ばら皆この御神にみでぐら十列奉り給ふ。なほも近くとて、又ふり奉りて吉田と申しておはしますめり。この吉田の明神は山陰の中納言のふりたて奉り給へるぞかし。御祭の日四月、後の子日と十月下の申日とを定めて我が御ぞうに御門后の宮たち給ふものならば、おほやけまつりになさむと誓ひ奉りて坐しましければ、一條院の御時よりおほやけまつりにはなりたるなり。又鎌足大臣の御氏寺、大和國多武峯に造らしめ給ひて、そこに御骨ををさめたまひて、今に三昧行ひ奉りたまふ。不比等大臣は山階寺を建立せしめ給へり。それによりかの寺には藤氏をいのり申すに、このみ寺ならびに多武峯、春日、大原野、吉田に例にたがひ怪して事出できぬれは、御寺の住僧禰宜等など、おほやけに奏し申して、

その時藤原氏長者殿占なはしめ給ふに、御つゝしみあるべきは、年の當り給ふ殿ばらたちのもとに御物忌とかきて一の所よりくばらしめ給ふ。大方かの寺よりはじまりて年に二三度會をおこなはる。正月八日より十四日まで八省にて奈良がたの僧を講師として御齋會行はしめ、おはやけより始め、藤氏の殿ばら皆かぐ玄給ふ。又三月七日よりはじめて十三日まで藥師寺にて最勝會七日、又山階寺にて十月十日より維摩會七日、皆これらの度に勅使下向してふすまつかはす。藤氏の殿ばらより五位まで奉り給ふ。南京法師は三會講師しつれば已講となづけてその次第をつくりて律師僧綱になる。かゝればかの御寺、いかめしくやんごとなき所なり。いみじき非道の事も山階寺にかゝりぬれば、又ともかくも人ものいはず、山玄な道理とつけておきつ。かゝれば藤氏の御ありさまたぐひなくめでたし。おなじ事のやうなれど又つゞきを申すべきなり。后の宮の御おや、御門のおはぢとなり給へるたぐひをこそはあかし申さめとてこそ、さうをば申すべからず。

一　内大臣鎌足のおとゞの御女二所、やがて皆天武天皇に奉り給へり。をとこ女みこたちおはしけれど、御門東宮立たせ給はざめり。いみななし。

一　贈太政大臣不比等のおとゞの御女二所、一人の御女は文武天皇の時の女御。み子生れ給へり。其を聖武天皇と申す。御母をば宮子のいらつめと申しき。今一人の御女はやがて御甥の聖武天皇に奉りて后に立たせたまふ。これを光明皇后と申しき。この御腹に女御子をうみ奉り給へるを、女帝に立て奉り給へるなり。高野の女帝と申すこれなり。四十六代にあた

り給ふ。それおり給へるに、又御門ひとりを隔て、又四十八代にかへりゐ給へるなり。母后を贈皇后と申す。おかれば不比等の大臣の御女二人ながら后におはしますめれど、高野女帝の御母后は贈皇后と申したるに、おはしまさぬよに后にゐ給へると見えたり。かるがゆゑに不比等大臣は光明皇后、又贈皇后宮の御父、聖武天皇ならびに高野女帝の御おほぢにおはします。或る本、又高野女帝の御母后生き給へる世に后に立ち給ひて其の御名を光明皇后と申すとなり。聖武の御母も坐しまし、世に后となりて、贈后と見ゆ給はず。

一贈太政大臣多嗣のおとゞは、太皇太后順子の御父、文徳天皇の皇祖父。

一太政大臣良房のおとゞは、皇太后宮明子の御父、清和天皇の御おほぢ。

一贈太政大臣長良のおとゞは、皇太后宮高子の御父、陽成院の御祖父。

一贈太政大臣總繼のおとゞは、贈皇后宮澤子の御父、光孝天皇の御おほぢ。

一内大臣高藤のおとゞは、皇太后后胤子の御父、醍醐天皇の御祖父。

一太政大臣基經のおとゞは、皇后宮穩子の御父、朱雀天皇并に村上帝二代の御祖父。

一右大臣師輔のおとゞは、皇后宮安子の御父、冷泉院并に圓融院の御祖父。

一太政大臣伊尹のおとゞは、贈皇后宮懐子の御父、花山院の御祖父。

一太政大臣兼家のおとゞは、皇太后宮詮子并に贈后の御父、一條天皇并に三條天皇の祖父。

一太政大臣道長のおとゞは太皇太后宮彰子上東門院、皇太后宮妍子、中宮威子、尚侍嬉子、春宮の御息所の御父、當代并に春宮の御祖父に坐します。こゝらの御中に后三人並びすゑて見奉らせ給ふことは、入道殿より外に聞えさせ給はざめり。關白左大臣、内大臣、大納言二人、中納

言の御親にておはします。さりや聞し召しあつめよ。日本國には唯一無二におはします。まづは造らしめ給へる御堂などのありさま、鎌足のおとゞの多武峰、不比等大臣の山階寺、基經寺も、佛ばかりこそはおほきにおはしますめれど、猶この無量壽院にはおらび給はず。ましてほの寺々はいふべきにあらず。大安寺は都率天の一院を天竺の祇園精舍にうつしつくれり。天竺の祇園精舍もろこしの西明寺に寫して造り、もろこし西明寺の一院をこの國の御門は大安寺にうつさしめ給へるなり。しかあれども唯今はこの無量壽院まさり給へり。南京のそこばく多かる寺どもに猶あたり給ふなし。恒德公の法住寺いと猛なれど、猶この無量壽院すぐれ給へり。難波の天王寺など聖德太子御心に入れて造り給へれど、なほこの無量壽院まさり給へり。ならは七大寺十五大寺などを見くらぶるに、なほこの無量壽院いとめでたく、極樂淨土この世に顯れにけると見えたり。故にこの無量壽院を思ふに、おぼし願ずることも侍りけむ。淨妙寺は東三條殿、大臣になり給ひての御慶に木幡にまねらせ給へり。御供に入道ことなり。我が身おもふさまになりたらば三昧堂建てむと御心のうちに思しめしくはだてたりけるとこそはうけたまはれ。昔もかゝる事多く侍りけるなかに、極樂寺法性寺ぞいみじく侍るや。御年などもおとなびさせ給へるだにも、思しめしよるらむ程なべてならず覺え侍るに、いづれの御時とはたしかにえ聞き侍らず。唯深草の御程にやなどぞ思ひやられ侍り。

片川のみゆきせしめ給ひけるに、昭宣公童殿上にて仕うまつらせ給へりける。御門琴をあそばしける。この琴ひく人はべつのつめをつくりておよびにさし入れてぞ彈くことにて侍りし。さてもたせ給ひけるを落しおはしまして、大事におぼしめしけれど又造らせ給ふべきやうもなかりければ、さるべきにぞ思しめしよりけむ、おとなしき人々にも仰せられで、をさなくおはします君にしも、「もとめて參れ」と仰せられければ、御馬をうちかへしておはしましけれど、いづこをはかりともいかでかは尋ねさせ給はむ。見出でゝ參らせざらむことのいみじう思しめされければ、これ求め出でたらむ所には一伽藍を建てむと願じおぼして、もとめさせ給ひけるにいできにたる所ぞかし、極樂寺は。をさなき御心にいかでか思しめしよらせ給ひけむ。さるべきに御爪もおち、をさなくおはします人にも仰せられけるにこそははべりけめ。さてやんごとなくならせ給ひて、御堂建てさせにおはします御車に貞信公はいとちひさくて具し奉り給へりけるに、法性寺の前わたり給ふとて、てゝごに、「こゝこそよき堂どころなめれ。こゝに建てさせ給へかし」とききこえさせ給ひけるに、いかに見てかくいふらむとおぼえて、さし出でゝ御覽ずれば、まことにいとよく見えければ、をさなきめにいかでかく見つらむ、さるべきにこそあらめと思しめして、「げにいとよき所なめり。ましが堂をたてよ。われはしかじかの事のおりしかば、そこに建てむずるぞ」と申させ給ひける。さて法性寺は建てさせ給ひしなり。また九條殿の飯室の事などはいかにぞ。横川の大僧正御房にのぼらせ給ひし御供には繁樹もまゐりて侍りき。かうやうのことどもきこえ給ふれど、猶この入道

殿世にすぐれ抜けいでさせ給へり。天地にうけられさせ給へるはこの殿こそおはしませ。何事も行はせ給ふなりに、いみじき大風吹きなが雨降れども、まづ二三日かねて空晴れ土かわくめり。かゝれば、或は聖徳太子の生れ給へると申す。或は弘法大師の佛法興隆のために生れ給ふとも申すめり。げにそれは翁らがさがなめにもたゞ人とは見えさせ給はざめり。猶權者にこそおはしますめれとなむあふぎ見奉る。かゝればこの御世のたのしき事かぎりなし。そのゆゑは、むかしは殿ばら宮はらの馬かひ牛かひ、何の御靈會祭のれうとて、錢紙米などこひのゝしりて野山の草木をだにやはからせし。仕丁おものもちいできて人のものとり奪ふこと絶えにけり。又さとのとね村の行事出できて、火祭やなにやとわづらはしくせめし事今は聞えず。かばかり安穏泰平なる時にはあひなむやと思ふは、翁らが卑しきやどりも帶紐をときて、門をだにさゝで、安らかにのび臥したれば年もわかく命も延びたるぞかし。まづは北のかた賀茂河原につくりたる、のゝまめ、さゝげ、うり、なすびといふもの、この中ごろは更に術なかりし者をや。この年ごろはいとこそたのしけれ。人のとらぬをばさる者にて馬牛だにぞはまぬ。されば唯まかせ捨てつゝ置きたるぞかし。かくたのしき彌勒の世にこそあひて侍れや」といふめれば、今ひとりの翁、「唯今はこの御堂の夫を玄きりに召すこととそのことぞある。二三日まゐにめすぞかし。されどそれ奉るにわしからず。故は極樂淨土のあらたに顯れ出で給ふべきためにめすなりと思ひ侍れば、いかで力堪へば參りて仕うまつら

む。行く末にこの御堂の草木となりにしがなとこそ思ひ侍れ。されば、もの〳〵心ぢりたる人は望みても參るべきなり。されば翁らまだあらしか一度か〳〵ず奉り侍るなり。さて參りたれば、あしきことやはある。いひさけ、ちげくたび、もてまゐるくだものをさへ惠みたび、常に仕うまつるものは衣裳をさへこそはたまひ行はしめ給へ。されば參る下人もいみじういそがしがりて、進み集ふめる」といへば、「ぢかそれさる事に侍り。但し翁が思ひえて侍るやうは、いとたのもしきなり。翁いまだ世に侍るに、衣裳やれむづかしきめ見侍らず、又いひ酒にともしきめ侍らず、もしこの事どもすぢなからむ時は、紙三枚をぞともむべき。故は入道殿下のお前に申文を奉るべきなり。その文につくるべきやうは、翁、故太政大臣貞信公の殿下の御時の小舍人童なり。それおほくの年つもりて、すぢなくなりにて侍り。閤下の君すゑの家の子におはしませば、おなじ君とたのみ仰ぎ奉る。物少し惠みたまはらむと申さむには、少々の物はたばじやはと思へば、それあるものにて倉におきたるが如くなむ思ひ侍る」といへば、世繼、「それはげにさる事なり。家貧しくならむをりはみ寺に申文奉らしめむとなむ、卑しきわらはべとうちかたらひ侍る」とおなじ心にいひかはす。「さてもさても嬉しく對面ぢたるかな。年ごろの袋の口あけはころびをたち侍りぬることゝ、さてもこののゝしる無量壽院には、いくたび參りて拜み奉り給ひつ」といへば、「おのれは大御堂供養の年の會の日は人いみじうはらふべかなりと聞きしかば、試樂といふ事三日かねてせしめ給ひしになむ參りて侍りし」といへば、世繼、「おのれはたびたび參り侍りぬ。供養の日のありさまのめでたさ

はさらにもあらずや。又の日、今日は御佛など近くて拝み奉らむ、ものどもとりおかれぬ先にと思ひて、参りて侍りしに、宮たちの諸堂拝み奉らせ給ひし見申し侍りしこそ、かゝる事にあはむとて今まで生きたるなりけりと覚え侍りしか。物覚えて後、さる事をこそまだ見侍らね。御てぐるまに四所奉りしぞかし。口に大宮、皇太后宮、御袖ばかりをいさゝかさし出でさせ給ひて侍りしに、枇杷殿の宮の御ぐしの土にいと長くひかれさせ給ひていでさせ給へりしは、いと珍らかなりし事かな。去りの方には中宮、かんの殿奉りて、唯御身ばかり御車におはしますやうにて、御ぞども皆ながらいでゝ、それも土までこそ引かれ侍りしか。一品の宮も中に奉りたりけるにや、御ぞどもはなにがしのぬしのもち給ひて御車の去りにぞさふらはれし。ひとへの御ぞばかりを奉りておはしますなめり。御車はまうち君達ひかれて、去りには關白殿をはじめ奉り、殿ばらさらぬ上達部殿上人、おほん直衣にて歩みつかせ給へりし。いでおないみじや。中宮權大夫殿のみぞ堅固の物忌にてまゐらせ給はざりし。さていみじく口をしがらせ給ひける。中宮の御装束は權大夫殿せさせ給へりし。いと清らにてこそ見え侍りしか。供養の日啓すべき事ありて、おはします所に参りて、いつところ居並ばせ給へりしを見奉りしかば「中宮の御ぞの優に見えしは我が去たればにや」とこそ大夫殿おはせられけれ。かく口ばかりさかしうたち侍れど、下臈のつたなき事は、いづれの御ぞもほどへぬれば色どものふつと忘れ侍りにけるよ。殊にめでたくせさせ給へりければにや、下はくれなゐうす物の御ひとへがさねにや、御うはぎよくも覚え候はず。袙の織物の三重がさねの御唐

衣に秋の野を縫ひものし、繪にも書かれたる綾とぞ目もおどろきて見給へし。こと宮々のも殿ばらの調じて奉らせ給へりけるとぞ人申し〳〵。大宮は二重織物おり重ねられて侍りし。皇太后は總じてから裝束、かんの殿のは殿よりこそはせさせ給へりしか。と御方々のもるかきなどせられたりと聞かせ給ひて、俄にはくおしなどせられたりければ、入道殿御らんじて、「よき呪師の裝束かな」とわらひ申させ給ひけり。殿はまづ御堂御堂わけつ〳〵待ち申させたまふ。南大門のほどにて見申すだにゑましくおぼえ侍りしに御堂渡殿のはざまより、一品の宮の辨の乳母、今一人はそれも一品の宮の大夫、輔の乳母、中將の乳母とかや、三人とぞ承りし。御くるまよりおりさせ給ひてねざりつ〳〵かけ給ひつるを見奉り給へるぞかし。おそろしさにわな〳〵かれしかど、今日さばかりの事はありなむやとおもひて見まねらするに、などてかはとて申しながら、いづれ聞えさすべくもなくとりどりにめでたくおはしまさふ。大宮の御ぐし御ぞの裾にあまらせ給へりし。中宮は御たけに少し餘らせ給ふにや。御扇をいと近くさしかくしておはします。皇太后宮は御ぞのすそに一尺ばかり餘らせ給へる御裾扇のやうにぞ。かんの殿、御たけに七八寸あまらせ給へりけり。一品宮は「殿の御前なにかゐさうらひ」せ給ふ。立たせ給へ」とて長押のせり昇らせ給ふ御手をとらへつ〳〵、たすけ申させたまふ。あまりあまりなる事は目もおどろく心ちなむ玄給ひける。あらはならず引きふたぎなどつくろはせ給ひける程に、御覽じつけられたるものかは。あないみじ、宮づかへに宿世のつくる日なりけりと、生けるこ〳〵ちもせで三人な

がらさぶらひ給ひける程に、「宮だち見奉りつるか。いかゞおはしましつる。このおい法師のむすめだちには、けしうはあらずぞおはしますな。なおなづられそよ」とうちゑみて仰せられかけて痛うもふたがせ給はで坐しましたりしなむ、いき出でたる心ちして嬉しなどはいふべきやうもなく、かたみに見れば顔はそこらけさうじたりつれども、草の葉の色のやうにて又、赤くなりさまざまのやうに汗水になりて見かはしたり。さらぬ人だにおぢれたるものぞきは、いとびなきことにするを、せめてめでたう思しめされければ、御悦に堪へでまたわれと思し召しつるにこそと思ひなすも、心おとりなむする」とのたまひいまさうじける。かうやうの事どもを見給ふまゝには、いとしもこの世の榮花の御さかえのみ覺えてそみつく心のいとゞますますにおこりつゝ道心つくべうも侍らぬに、河内の國そこそこに住むなにがしひじりは庵より出づるともせられねど後世のせめを思へばとてのぼり參らせたりけるに、關白殿の參らせ給ひて、雜人どもをはらひのゝしるに、これこそは一の人におはしますめれと見奉るに、入道殿の御前にゐさせ給へば、猶まさらせ給ふなりけりと見奉るほどに、また行幸なりてらんじやうし、まちうけ奉らせ給ふさま、み輿のいらせ給ふ程など見奉りつる殿達のかしこまり申させ給へば、猶國王こそ日本第一の事なりけれと思ふに、おりおはしまして阿彌陀堂の中尊の御まへについゐさせ給ひて拜み申させ給ひしに、猶々佛こそかみなくはおはしましけれと、この會の庭にはかしこう結緣し申して、道心なむいとゞ熟し侍りぬるとこそ申され侍りしか。傍にゐられたりしなり。やゝまことに忘れ侍りにけり。世

の中の人の申すやう「大宮入道せしめ給ひて、太上天皇の御位とならせ給ひて女院となむ申すべき。この御寺に戒壇たてられて御受戒あるべきなれば、世の中の尼ども参りてうくべきなり」とてよろこびをこそなすなれ。この世繼がおんなどもゝかゝる事を傳へ聞きて申すやう、おのれもその折にだに去らがのすそそぎ捨てむとなむ。何か制する」とかたらひ侍れば、「何せむにか制せむ。たゞしさらむ後には、若からむめのわらはべもとめて、えさすればかりぞ」となむいひ侍れば「我がめひなる女ひとりあり。それを今よりいひかたらはむ。いとさしはなれたらむも情なき事なり。近くも遠くも身のためにおろかならむ人を、今さらによすべきかは」となむかたらひ侍る。「やうやう衣裳裝などのまうけに、よきぬ一二疋もとめ侍るなり」などいひて、さすがにいかにぞや、ものおはれげなる氣色のいでくるは、女どもに背かれむことの心ぼそきにやとぞ見え侍りし。さて今年こそは天變去きりにし、世の妖言などよからず聞え侍るめれ。かんの殿のかく懷姙せしめ給ひ、院の女御殿の常の御惱の中にも今年となりてはひまなくおはしますなりなどこそおそろしう承はれ。いでやかうやうの事う ち思ひ續け申せば、昔の事こそ唯今のやうにおぼえ侍れ」など見かはして、繁樹がいふやう「いでおはれ、かくさまざまにめでたき事ども、哀にもそこら多く見聞き侍れど、猶我がたからの君に後れ奉りたりし折のやうに物の悲しく思ひ給へらるゝをりこそ侍らね。八月十日あまりの事に候ひしかば、折さへこそ哀に、時しもあれと思ひ侍りしものかな」とて鼻度々かみて、えもいひやらずいみじと思ひたるさま、まことにその折もかくこそはと見えた

れ。「一日片時生きて、世にめぐらふべきこゝちもえ侍らざりしかど、かくまでさぶらふはいよいよひろごりさかえおはしますを見奉り悦び申さむとに侍り。さてまたの年の五月廿四日こそは冷泉院は誕生せしめ給へりしか。それにつけて、いとゞこそ口をしきをりのうれしさ、かばかりもおはしまさいりしかな」といへば、世繼「えかしかと快く思へるさまおろかならず。朱雀院、村上などのうち續き生れおはしましゝは、又いかになどいふほどあまりに申してむ。この一品宮の御ありさまのゆかしく覺えさせ給ふにこそ、又命をしう侍れ。その故は、生れおはしまさむとて、いとかしこき夢想見給ひしなり。さおぼえ侍りし事は、故女院この大宮など孕まれさせ給はむとてみえし、唯同じさまなる夢に侍りしなり。それにて萬推し量られさせ給ふ御ありさまなり。皇太后宮の宮にいかで啓せしめむと思ひ侍れど、その宮のへんの人にこそえあひ侍らぬが口をしさに、こゝら集り給へるなかに、もしおはしましやすらむと思ひ給へて、かつはかくは申し侍るぞ、行く末にもよくいひけるものかなとおぼしおはする事も侍りなむ」といひしをりこそ、こゝにありとてさしいでまほしかりしか。

大鏡巻之八

賀茂臨時祭始事

八幡臨時祭始事
九月九日節止事

いといとおさましくめづらかにつきせず二人かたらひしに、この侍二いといと興ある事をもうけたまはるかな。さても物の覚えはじめは何事ぞや、それこそまづ聞かまほしけれ。語られよ二といへば、世継、二六七歳より見聞き侍りし事はいとよくおぼえ侍れど、そのことゝなき事は證なければ用ゐる人も候はじ。九つに侍りし時の大事を申し侍らむ。小松の御門のみこたちにておはしましゝ時の御所は皆人去りて侍り。おのが親の候ひし所、大炊の御門よりは北、町尻よりは西にぞ侍りし。されば宮の傍にて、常に参りてあそび侍りしかば、いと閑散にてこそおはしましゝか。さゝらぎの三日はつうまといへど、甲午最吉日常よりも世てぞりて稲荷まうでにのゝしりしかば、父のまうで侍りし供に去たがひまかりて、さは申せどをさなきほどに坂のこはきを登り侍りしかば、こうじてえその日の中に還向仕うまつらざりしかば、父がやがてその御社の禰宜の大夫が後見仕うまつりて、いとうるさくて候ひし宿にまかりよりて、一夜は宿り候ひて又の日帰り侍りしに、東の洞院よりのぼりまかるに大炊の御門より西ざまに人々のさゝとはしれば怪しくて見候ひしかば、我が家のほどにしも、いとくらうなるまで人たちこみて見ゆるに、いとゞおどろかれて、もし焼亡かと思ひてかみを見上ぐれば烟もたゝず。さは大きなるつゐぶくかなと、かたがたに心もなきまで惑ひまかりしかば、小野宮の程にて上達部の御車や、鞍おきたる馬ども、かうぶりうへのきぬあど着たる

人々などの見え侍りしに心えずあやしくて、「何事ぞ何事ぞ」と人ごとに問ひ候ひしかば「式部卿の宮、御門にゐさせ給ふとて、大殿をはじめ奉りて皆人まゐらせ給へるなり」とて急ぎ罷りしなどぞ物覚えたる事にて見給へし。又七つばかりにや、元慶六年ばかりにや侍りけむ、式部卿宮の侍従と申して、寛平の天皇、常に狩をこのませおはしまして、霜月の廿餘日のほどにや、鷹狩に式部卿宮より出でおはしまし、御供に走り参りてはべり。賀茂のつゝみのそこそこなる所に侍従殿鷹つかはせ給ひて、いみじう興にいらせ給へるほどに、俄に霧たちて、世間もかいくらがりて東西も覚えず、くれのいぬるとやとおぼえて、數の中にたふれふしてわなゝきまどひ候ふほどに、時中ばかりや侍りけむ、後にぞうけたまはれば、賀茂の明神顯れおはしまして、侍従殿に物申させおはしける程なりけり。その事は世に日記しおかれて侍るなればなかなか申さじ。おろしめしたらむ。おはそかに申すべきにも侍らず。さて後六年ばかりありて賀茂の臨時の祭はじまりけむ、位に即かせおはしまし、年とぞおぼえはべる。その日の酉の日にて侍りければ、やがて霜月のはての酉の日にては侍るぞ。はじめたるあづまあそびの歌、敏行の中將ぞかし。

「ちはやぶる賀茂のやしろの姫小松よろづ代までもいろはかはらじ」。

古今に入りて侍り。皆人おろしめしたる事なれど、いみじくよみ侍るぬしかな。今に絶えずひろごらせ給ふ。御末に、御門と申せどかくしもやおはします。八幡の臨時の祭、朱雀院の御時よりぞかし。朱雀院生れさせ給ひて三年はおはします。殿の御格子参らず、夜晝火をとも

して御帳の内にておほしたて奉らせ給ふ。北野におち申させ給ひてなりけり。天暦の御門をばいとさもまもり奉らせ給はず、いみじき折ふしに生れさせ給へるぞかし。朱雀院生れおはしまさずは、藤氏のさかえいとかうしも侍らざらまし。さて位に即かせ給ひて將門がみだれ出で來てその御願にてとぞ承りし。その東遊の歌、貫之のぬしぞかし、集にもかきて侍るは。

「松もおひまたもこけむすいは清水ゆくすゑとほくつかへまつらむ」

といへば、また左げき、「この翁もそのぬしの申されつるがごとくだくだしき事は申さじ。おなじ事のやうなれど、寛平延喜などの御讓位のほどの事などはいとかしこくたしかに覺えたる人侍るをや。伊勢の君の弘徽殿の壁に書きつけ給へりし歌こそは、そのかみ哀なる事と人申しか。

「わかるれどあひも思はぬもゝしきを見ざらむことのなにか悲しき」。

法皇の御かへし、

「身一つのおらぬばかりをおしなべてゆき歸りてもなどかみざらむ」

といへば、傍なる人「法皇のかゝせ給へりけるを、延喜の後に御覽じつけて、傍に書きつけさせ給へるとも承るはいづれかまことならむ。おなじ御門と申せど、その御ときに生れわひて候ひけるは、あやしの民のかまどまで、やんごとなくこそ。大に寒きころほひ、いみじう雪降りさえたる夜は、諸國の民百姓いかに寒からむとて御衣をこそ夜のおとゞより投げ出しおはしましければ、おのれらまでも恵み憐びられ奉りて侍る身とおもだゝしうこそは。されば

その世に見給へしことは、猶末までもいみじきことゝ覚え侍るぞ。人々きこしめせ。この座にて申すははゞかりある事なれど、かつは若く候ひしほど、いみじと身に沁みて思ひ給へしは延喜の帝の一つ腹の御兄弟に坐します。野の行幸せさせ給ひしに、この宮供奉せしめ給ふべかりけれど、京の程遅参せさせ給ひしかば桂の里にぞ参りあはせ給へりしかば、御輿留めて先だて奉らせ給ひしに、なにがしといひし犬かひの、犬の前足を二つながらに肩にひきして深き河の瀬渡りしこそ行幸につかうまつり給へる人々さながら輿じ給はぬなく、御門も興ありげにおぼしたる御氣色にこそ見えおはしましゝか。さて山ぐちいらせ給ひしほどに、ゑらせうといひし御鷹の鳥をとりながら御輿の鳳のうへに飛び参りてゐて候ひし。やうやう日は山の端に入がたに光のいみじうさして山の紅葉錦をはりたるやうなるに、鷹の色はいと白くて、雉子は紺青のやうにて、羽うちひろげて居て候ひしほどは、まことに雪少しうち散りて、折ふしとり集めて、さる事やは候ひしとよ。身に沁むばかり思ひ給へしかば、いかに罪得侍りけむとて、爪弾きはたはたとす。大かた延喜の帝常にゑみてぞおはしましけるのはいひよき。されば大小の事聞かむがためなり」とぞおはせ言ありける。それさることなり。けにくき顔には物いひふれにくきものなり。さて「我いかでかゝる月なが月に沁にせじ。すまひのせち九日のせちのとまらむが口をしきに」とおはせられけれど、九月にうせさせ給

一七三

ひて九日のせちは其よりとまりたるなり。その日左衛門の陣の前にて御鷹ども放たれしは、哀なりしものかな。とみにこそ飛びのかざりしか。公忠の辨をば大方のことにとりてもやんごとなきものに思しめしたりしなかにも、鷹のかたざまにはいみじう興せさせ給ひしなり。日々に政どを勤め給ひて、馬をいづこにぞや立て給ひて、事はつるまゝにこそ中山へはいませしか。官のつかさの辨の曹司の壁にはその殿のたかのものは未だつきて侍らむ。くせのとりかたのゝとりのわざはひはまねりしりたりき。かたへは「そらごとをのたまふにこそ。試み奉らむ」とて、みそかに二所の鳥をつくりませて、しるしをつけて人のまねりたりければ、いさゝかとりたがへず、「これは久世の、これは交野のなり」とこそまねりしりたりけれ。かゝりければ、「ひたぶるの鷹飼にて侍ふものゝ、殿上に侍ふこそ見苦しけれ」と延喜に奏し申す人のおはしけれど、「公事をおろかにして狩をのみせばこそ罪はあらめ。一度まつりごとをもかゝで、おはやけ事をよろづ勤めて、後にともかくもあらむはなでふ事かあらむ」とこそ仰せられけれ。いで又いみじくはべりしことは、やがておなじ君の大井河の行幸に、とみの小路の御息所の御腹の御子の七歳にてまひせさせ給へりしばかりの事こそ侍らざりしか。萬人しほたれぬ人侍らざりき。あまり御かたちの光るやうにし給ひしかば、山の神めでゝとり奉り給ひてしぞかし。その御ときに、いとおもしろき事ども多く侍りきや。さて大かた申し盡すべきならず。まづ申すべき事も唯覺ゆるにしたがひてしどけなく申さむ。法皇の所々す行しあそばせ給ひて、宮瀧御覽せしほどこそいみじう侍りしか。そのをり菅原

一七三

のおとゞのあそばしたりし和歌、

「水ひきの玄ら糸はへておるはたはたびのころもにたちやかさねむ」。

大井の御幸も侍りしぞかし。さてみゆきありぬべき所と申させたまふ。事のよし奏せむとて、小一條のおはいまうちぎみぞかし、

「をぐら山もみぢの色もこゝろあらば今ひとたびのみゆきまたなむ」。

あはれ優にも侍ひしものかな。さて行幸にあまたの題をたまはりて、やまと歌つかうまつりしなかに、猿山のかひにさけぶといふ題を、躬恒、

「わびしらにましらな鳴きそ足曳の山のかひある今日にやはあらぬ」。

その日の序題は貫之のぬしこそ仕うまつりしか。朱雀院の母いうにおはしますとこそはいはれさせ給ひしかども、將門が亂などいできて、おそれすぐさせおはしましゝ程に、やがてかはらせ給ひにしぞかし。そのほどの事のありさまこそいとあやしう侍りけれ。母后の御もとに行幸せさせたまへりしを、かゝる御ありさまの思ふやうにめでたくうれしき事など奏せさせ給ひて、「今は春宮ぞかくて見聞えさせまほしき」と申させ給ひけるに、「心もとなく急ぎ思しめす事にこそありけれ」とて程なく讓り聞えさせ給ひけるに、さきの宮は「さおもひて申さゞりしことを、唯行く末の事をこそ思ひしか」とていみじく泣かせ給ひけり。さておりさせ給ひて後、人々のあげきけるを御覽じて、院より后の宮にきこえさせ給へりし、

國ゆづりの日、

一七四

「日のひかりいでそふ今日のおぐるゝはいづれのかたの山邊なるらむ」。
さきいの宮の御かへし、
「おらくものおりゐるかたやおぐるらむおなじみ山のひかりながらに」
などぞきこえ侍りし。院は數月綾綺殿にこそはおはしましゝか。後には少し悔いおぼしめすことありて、位にかへり即かせ給ふ御いのりなどせさせ給ひけりとあるはまことにや。御心いとなまめしくおはしましゝ、御心ち重くならせ給ひて、太皇太后宮のをさなくおはしますを見奉らせ給ひて、いみじくおぼたれさせ給ひて、
「くれ竹のわが世はことになりぬともねはたえせずだなはなかるべき」。
誠に悲しくあはれにこそ承はりしか。村上の御門はた申すべきならず。なつかしうなまめきたる方は延喜にもまさり申させ給へりとこそ人まうすめりしか。「我をば人はいかゞいふなる」と人に問はせたまひけるに「ゆるになむおはしますと世には申す」と奏しければ、「さてはほゐるなり。王のきびしくなりなば世の人いかゞたへむ」とこそ仰せられけれ。いとをかしうあはれに侍りし事は、この天暦の御時に清涼殿の御前の梅の木の枯れたりしかば、もとめさせ給ひしに、なにがしのぬしの藏びとにていまするかりし時うけたまはりて、「若きものどもはえ見知らじ。きんぢもとめよ」とのたまひしかば、ひと京詣りありきしかども侍らざりしに、西の京のそこそこなる家に、色濃く咲きたる木のやうだい美しきが侍りしをほりとりしかば、家あるじの、「木にこれゆひつけ候ひてもて參れ」といはせたまひしかば、あるや

うはこそはとてもてまゐりて候ひしを「何ぞ」とて御覧じければ、女の手にて書きて侍りける、

「勅なればいともかしこし鶯のやどはととはゞいかゞこたへむ」

とありけるに、おやしく思し召されて「何ものゝ家ぞ」と尋ねさせ給ひければ、貫之のぬしのみむすめの住む所なりけり。「遺恨のわざをもしたりけるかな」とて、おまえおはしましけるぬかづけられたりしもからくなりにき」とてこまやかにわらふ。繁樹「又いとせちにやさしく思ひ給へしことは、このおなじ御時の事なり。承香殿の女御と申すは齋宮の女御よ。御門久しく渡らせ給はざりける秋のゆふぐれに、琴をいとめでたく彈き給ひければ、急ぎわたらせ給ひて御傍におはしましけれど、人やあるともおぼしたらで、せめて彈き給ふをきこしめせば、

「さらぬだにおやしき程の夕暮に荻吹くかぜのおとぞきこゆる」

とひきたりし程こそせちなりしかと御集に侍るこそいみじう候へといふはあまりかたじけなしやな」。ある人「城外や玄給へる」といへば「遠國にはまからず。和泉の國にこそ貫之のぬしのみにんに下りて侍りしか。「ありどほしとは思ふべしやは」とよまれて侍りしたびのともにもさぶらひき。雨の降りしさまなど語りしこそ、ふる草子にあるを見れば程經たる心ちし侍るに、昔におひたる心ちしてをかしかりしか」。この侍もいみじう興じて繁樹がめに、

一七六

「女どもこそ今少しこまやかなる事どもは語られめ」といへば、「我は都人にも侍らず。たかき宮づかへなども侍らず。若くよりこの翁にそひ候ひにしかば、はかばかしき事をも見給はぬものを」といらふれば、「いづれの國人ぞ」と問ふ。「陸奥の國あさかの沼にぞはべりし」といふ。「いかで京にはこしぞ」。「その人とはえ知り奉らず。歌よみ給ひし北の方おはせし守の御任にぞのぼり侍りし」といふに、中務の君にこそと聞くもをかしくなりぬ。「いといたきことかな。北の方をたれとかきこえし。よみ侍りけむ歌はおぼゆや」といへば、「その方に心もえでおぼえ侍らず。たゞのぼり給ひしに、逢坂の關におはしてよみ給へりし歌ぞところどころおぼえ侍る。

「みやこにはまつらむものをあふ坂の關まできぬとつげやらまし」

など、いとたどたどしげに語るさま、まことに男にたとしへなし。繁樹、「この人をばひとゝおぼすかとよ。さやうの方は覺ゆらむものぞ。世間たましひはしもいとかしこく侍るをとりどころにてえさり難くおぼえ侍るなり」といふに、世繼、「いでこのおきなの女一人こそいとかしこく物はおぼえ侍れ。今ひとめぐりがこのかみにて候へば、見給へぬほどの事などもあれは知りて侍るめり。染殿の后の宮のひすましに侍りけり。母もかんの刀自にて仕うまつりければ、をさなくより參りかよひて、忠仁公をも見奉りけり。からはべかたちの程のいと物きたなうも候はざりけるにや。やんごとなき公達も御覽じいれて、兼輔中納言令峰衆樹の宰相の御文などもちてはべるめり。中納言はみちのくに紙に書かれ、宰相のはくるみ色の薄葉

にてぞ侍るめる。この宰相は五十までさせる事なくほとほとおほやけに捨てられたるやうにていますかりけるが、八幡に参らせ給ひたるに雨いみじうふる。石清水の坂登り煩ひつゝ参り給へるに、お前の橘の木少し枯れたりけるに立ちよりて、

「千早振神のおまへのたちばなもろきもともに老いにけるかな」

とよみ給へば、神聞きあはれみさせ給うて、橘もさかえ、宰相も思ひかけず頭になりて宰相までまゐり給ふとこそ承りしか」といへば、さぶらひ、「賀茂の御まへにとかや、はるかの世のものがたりにわらはも去侍るは」といらふれば、「さもや侍りけむ。程經てひが言も申し侍るら十六にてぞ宰相になり、左近中將かけてこそいませしか。そのをりは何とも覺え侍らざりしかど、この頃思ひいで侍れば、見苦しかりけることかなと思ひ侍れ。この侍、「いかでさるいきおき侍ひしものゝ心にもあらず、世繼が家にはまうできよりては、はちにしていかばかりのいさかひ侍りしかど、さばかりにこかけそめておからめせさせ侍りなむや。さる程にねつき候ひては、翁をまた一夜もはかめせさせはべらぬをや」とほゝゑみたる口つきいとをこがり。「乘輔の中納言もろきの宰相も、今までおとかばねだにおはせず、世繼にも今やうの若きものども更にかたらはれ侍らじ。かゝる命ながらの生きおはざらましかば、いと怪しう侍ら

ましⅡとてこゝろよくわらふ。げにと聞えてをかしくもあり、聞くもうつゝの事とはおぼえず。二おはれ今日具して侍らましかば、女房たちの御耳に今少しとまる事どもは聞かせ給ひてまし。私のたのむ人にては、兵衛内侍の御おやをぞ左侍りしかば、内侍のもとへは時々まかるめりき二といふに、二こはたれにか二といふ人のあれば、二いでこの高名の琵琶ひきよ。すまひの節に玄上たまはりて、御前にて青海波仕うまつられたりしはいみじかりしものかな。博雅三位などだにおぼろげにはえならし給はざりけるに、これは承明門まで聞え侍りしば、左の樂屋にまかりて承りしぞかし。かやうに物のはえかひがひしき事どもゝ、天暦の御時までなり。冷泉院の御代になりてこそ世にくれふたがりたるこゝちし侍りしか。世の哀ふるともその御時よりなり。小野宮殿も一の人と申せど、よそ人にならせ給ひて、若く華やかなる御をぢだちにうちまかせ奉らせ給ふ。又みかどはた申すべきにあらず。おはれに候ひける事、村上うせおはしまして、またの年小野宮に人々まゐり給ひて、いと臨時客などはなけれど、嘉辰令月などうち誦せさせ給ふついでに、一條左大臣殿、六條殿など柏子とりてむしろ田うちいでさせ給ひけるに「おはれ先帝のおはしまさましかば」とて御笏もうちおきつゝあるじ殿を始め奉りて事忌もせさせたまはず、うへの御衣どもの袖ぬれさせ給ひにけり。さる事なりや。何事も聞き知り見わく人のあるはかひあり、なきはいと口惜しきわざなり。今日かゝる事ども申すもわどのゝ聞きわかせ給へば、いとゞ今少しも申さまほしきなり二といへば、さぶらひもあまえたりき。二藤氏の御事をのみ申し侍るに、源氏の御事も申し侍らむ。こ

の一條殿六條殿たちは六條一品式部卿の御子どもにおはします。寛平の御孫なりとばかりは申しながら、人の御ありさまいうそくにおはしまして、いづれをも村上の御門時めかし申させ給ひしに今すこし六條殿をば愛し申させ給へりけり。兄殿はいとあまり麗しく、公事より外の事は多分にはませさせ給はで、ゆるぎたる所の坐しまさゞりしなり。おと、殿はみそか事には無才にぞおはしましゝかど、わからかにわいぎやうづき、なつかしき方はまさらせ給へりしかばなめりとぞ人申しゝ。父の宮は出家せさせ給ひて仁和寺におはしましゝかば、六條殿修理のかみにて坐しましゝ程なれば、仁和寺へ參らせ給ふゆきかへりの道を、一度は東大宮より上らせ給ひて一條より西ざまにおはしまし、又一度は西大宮より下らせ給ひて二條より東ざまなどに過ぎさせたまひつゝ、内裏を御らんじて、やぶれたるところあれば修理せさせ給へり。いと手きゝたる御こゝろばへなりな。又一條殿の仰せられけるは、「親王たちのなかにて世の案内も知らず、たづきなかりしかば、さるべき公事の折は人よりさきにまゐり、事はてゝも最末にまかりいでなどして、見ならひしなり」とぞのたまはせける。八幡放生會には御馬奉らせ給ひしを、御使などにも淨衣をたまはせ、御みづからもきよまはらせ給ひしかばにや、お前近き木に山鳩のかならずゐて、ひき出づるをりに飛びたちければ、かひありと喜び興せさせ給ひけり。御心いとゞうるはしくおはします人の、信をいたさせ給ひしかば大菩薩のうけ申させ給へりけるにこそ、一とせのひでりの御いのりにこそは。東三條院の御賀茂詣せさせ給ひしには、この一條殿も參らせ給ひき。大臣にならせ給ひぬればある例

なけれども、天下の大事なりとて御出立の所にはおはしまさず、我が御殿の前わたらせ給ひし程に、ひきいでゝ具し申させ給ひしなり。この生に御珠数とらせ給ふ事はなくて、唯毎日に南無八幡大菩薩、南無金峰山金剛藏王、南無大般若波羅密多心經とふゆの御扇をかずにとりて一百八遍づゝぞ念じ申させ給ひける。それよりほかの事勤めさせ給はず。四條大宮の太后宮にかくなど申す人のありければ、聞かせたまひて、「なつかしからぬ御本尊かな」とぞおぼせられける。この殿はおらたにおふるをば、なべてのやうに諾ひ返させ給ひければ、一條院の御時の臨時の祭に御まへのとはてゝ、上達部だちの物見にいで給ひしに、外記のすみの程過ぎさせ給ふとて、わざとはなくて口ずさみのやうに諾はせ給ひしが、なかなかいうに侍りし。とみくさの花手につみいれて、宮へまゐらむのほどを、例のには變りたるやうに承りしかば、とほきほどに、老のひが耳にこそはと思ひたまへりしを、この按察大納言殿も云かぞのたまはせける。殿上人にてありしかば遠くてよりも聞かざりき。「變りたる云やうのめづらしうさまかはりて覺えしは、あの殿の御事なりしかばにや、又も聞かまほしかりしかど、さもなくてやみにしこそ今に口をしくおぼゆれ」とこそのたまふなれ。この大臣殿たちの御おとゝの大納言優に坐しましき。大かた六條宮の御子どもの皆めでたくおはしましゝなり。御法師子は廣澤の僧正、勘修寺の僧正二所こそはおはしましゝか。大かたそのほどにはかたがにつけつゝ、いみじき人々のおはしましゝものをや」といへば、「この四人の大納言たちよ、齊信、公の人はおはしまさずやはある」とさぶらひのいへば、

任、行成、俊賢など申す君たちはまたさらなり。さて又おほくのみものし侍りし中にも花山院の御時の石清水の臨時祭、圓融院の御覧せしばかり興ある事候はざりき。そのをりの藏人のとうにては今の小野宮の右大臣殿ぞおはしましゝ。御前の事はてけるまゝに、院はつれづれにおはしますらむかしと思しめして参らせ給へりければ、さるべき人もさぶらひ給はざりけり。藏人判官代ばかりしていとさうざうしげにておはします。かく参らせ給へるをいと時宜善う思しめしたる御けしきをいとあはれに心苦しう見参らせさせ給ひて、「物御覧せよ」など御けしきたまはらせ給へば、「俄にはいかゞあるべからむ」とおほせられけるを、「かくて實資侍へば又殿上に侍ふをのこどもばかりにてあへるなむ」とそゝのかし申させ給ふ。御まやの御馬ども召して、さぶらひしかぎり御前つかうまつり、頭中將束帶ながら参り見るに、布衣衣冠なる御前ぞたる車の、いみじう人はらひ、なべてならぬいきほひなるがくれば、誰ばかりならむと怪しく思ひあへるに、頭中將したがさねの尻はさみて、うつしおきたる馬に乗りておはするに院の坐しますなりけりと見て、車どもゝかち人も手惑し立ち騒ぎていと物騒がし。二條よりはすこし北によりて、冷泉院のついぢづらに御車たてつ。御前どもおりてさぶらひなみ給ふほどに、内より見物につぐき出で給ふ上達部たちの見給ふに、大路のいみじくのゝしれば、怪しくて「何事ぞ」と問はせ給ふに、「院のおはしますなり」と申しけるを、世におらじとおぼすに「頭中將殿もおはします」といふにぞ、まことなりけ

りとおぼえつゝ、御車より急ぎおりつゝ皆參り給ひし。大臣二人は左右の御車のどうおさへて立たせ給へり。東三條殿、一條左大臣殿よ。さて納言以下は轅のこなたかなたにゐあませ給ふ。殿上人は御車の左り轅のかたに侍ひたまふ。なかなかうるはしからむ事の作法よりもめでたく侍りしものかな。舞人陪從はみな乘りてわたるに、時中源大納言のいまだ大藏卿と申しゝをりぞつかひにておはせし。御車の前近くたちとゞまりて、もとめこを袖のけしきばかり仕うまつり給ひてついゐたまひしまゝに、御片袖を顏におしあてゝ侍ひ給ひしかば、かうなる御扇さし出させ給ひて、「はやう」とかゝせ給ひしかば、少しおしのごひて立ち給ひしが、すべてさばかり優なる事又候ひなむや。げに哀なるとざまなれば、人々も御けしきばかり院の御まへにもすこし涙ぐみおはしましけりとぞ後にうけたまはりし。神泉のうしとらのすみの垣の内にて見給へしなり。又若く侍りしをりも、佛法うとくて世のゝしる大法會ならぬにはまかりあふこともなかりしに、まして年積りては動きがたく候ひしかど、參河入道殿の入唐のうまのはなむけの講師、清昭法橋のせられし日こそまかりたりしか。さばかり道心の無きものゝ始めて心起ることこそ候はざりしか。まづは神分の心經表白のたまひて鐘うち給へりしに、そこばく集まりたりし萬人さとこそ泣きて侍りしか。其は道理の事なり。又清範律師犬のために法事をける人の講師に請せられていくを、清昭律師同定の說法者なれば、いかゞすると聞くに、かしらつゝみて誰ともなくて聽聞しければ、「只今や過去聖靈は蓮臺のうへにてほとほえ給ふらむ」とのたまひけるを、「さればこそ、こと人はかく思ひよ

一八三

りなましや。猶かやうの魂しひある事はすぐれたるみばうぞかし」とこそほめ給ひけれ。まことに承りしにをかしくこそ侍りしか。これは又聽聞の衆どもさゝと笑ひてまかり歸りにき。いと輕々になる徃生人なりやな。むげによしなし事に侍れど、人のかどかどしくたましひあるとの興ありて、いうに覺え侍りしかばなり。法成寺の五大堂の供養ぎはすには侍らずやな。極めて寒かりし頃、百僧なりしかば御堂の北の廂にこそは題名僧の座はせられたりしか。その料にその堂の庇はいれられたるなり。わざとの僧膳はせさせ給はで、ゆづけばかりたぶ。行事二人に五十人づゝ分たせ給ひて、僧座せられたる御堂の南おもてに鼎をたてゝ湯をたぎらかしつゝ、おものを入れて、いみじう熱くて參らせ渡したるを、ぬるくこそはあらめと僧たち思ひてざふざふと參りたるぞ、はしたなききはに暑かりければ、北風はいとつめたきにさばかりにはあらでいとよくまゐりたるみ房たちも今はさはしけり。後に「北むきの座にていかに寒かりけむ」など殿の問はせたまひければ「ぎかぎか候ひしかば、こよなくあたゝまりて寒さも忘れはべりき」と申されければ、行事だちをいとよしと思しめしたりけり。ぬるくてまゐりたりと別の勘當などあるべきにはあらねど、殿を始め奉りて人にほめられ、行く末にもさこそありけれといはれたうばむは、たゞなるよりは惡しからずよき事ぞかし。いで又故女院の御賀にこの關白殿陵王、春宮大夫殿なつ蘇利舞はせ給へりしめでたさをいかに、陵王はいと氣高くあてに舞はせ給ひて祿賜はらせ給ひてもまひすてゝ、知らぬさまにて入らせ給ひぬる美くしさめでたさにならぶ事あらじと見參らするに、なつそりのいと

一八四

かしこく又かうこそはありけめと見えて舞はせ給ふに、御祿をこれはいと左たゝかに御肩にかけさせ給ひて、今一かへりえもいはず舞はせ給へりし。今日は又かゝるべかりける業かなとこそ見え侍りしか。御師の陵王は必ず御祿はすてさせ給ひてむぞ、同じ樣にせさせ給はむめなれたるべければ、さまかへさせ奉り給へるなりけり。心ばせまさりたりとこそいはれ侍りしか。女院かうむり給はせしは大夫殿をいみじくかなしがり申させ給へばとぞ。陵王の御師は賜はらでいとからかりけり。それにこそ北の政所少しむつがらせ給ひけれ。さて後にこそ給はすめりしか。かたのやうに舞はせ給ふとも、あしかるべき御年の程にもおはしまさず、わろしと人申すべくも侍らざりしに、二所ながらこの世の人と見えさせ給はで、天童などのおりきたるとこそ見えさせ給ひしか。又この大宮の大原野の行啓はいみじく侍りし事ぞや。雨のふりしこそいと口をしう侍りしとよ。舞ひ人にたれたれそれぞれの君達など數へて一の舞はこの關白殿の君とこそはまはせ給ひしか。試樂の日掻練襲の下がさね、黑半臂奉りたりしはめづらしく侍りしものかな。わきあけに人のき給へりしは、また見侍らざりしかば、行啓には入道殿のなにがしといひし御馬に奉りて、御隨身四人と我もらんもんにあげさせ給へりしはきやうきやうしかりしものかな。公忠がすこしひかへつゝ所おき申しゝを制せさせ給ひしかば、猶少し恐れ申すまでこそありしか。かしこく京の程は雨も降らざりしぞかし。閑院の太政大臣殿の西の七條より歸らせ給ひしこそ入道殿いみじう恨み申させ給ひけれ。堀川左大臣殿は御社まで仕うまつらせ給ひて御ひきいで物御馬あまりき。枇杷殿の宮中

宮とはこがねづくりの御車にて、まうち君たちのやんごとなき限えらせ給へる御まへ具し申させ給へりき。御車のえりには皇后宮の御めのと維經のぬしの御母、中宮の御めのと衆安實任ぬしの御母こそ侍ひけれ。殿の君達まだ男にならせ給はぬわらはにて皆仕うまつらせ給へりき。ついでなきことに侍れど、物のけと人の申し、事どものさせる事なくてやみにしはさきの一條院の御即位の日、大極殿の御裝束すとて人々おつまりたるに、たかみくらの内に髪つきたるものゝかしらのちうちつきたるを見つけたりける、あさましくいかゞすべきと行事思ひわつかひて、かばかりの事を隱すべきかはとて、大入道殿に「かゝる事なむ候ふ」となにがしのぬし云て申させけるをいとねぶたげなる御けしきにもてなさせ給ひて物も仰せられねば、もし聞しめさぬにやとて、又御けしきたまはれど、うちねぶらせ給ひて猶御いらへなし。いとあやしく、さまで御殿籠り入りたるとは見えさせ給はぬに、いかなればかくておはしますぞと思ひて御前に侍ふにうち驚かせたまふさまにて「御裝束ははてぬなりや」と仰せらるゝに、聞かせ給はぬやうにてあらむと思しめしけるにこそと心えて、たちたうびける。げにかばかりのいはひの御こと、又今日になりてとまらむもいまいましきに、やをら引き隱してあるべかりける事を、心もなく申すものかなと、いかにおぼしめし候ふらむと後にぞその殿もいみじく悔しがり給ひける。さる事なりかしな。さればなでふの事か坐します。よき事にこそありけれ。又大宮のいまだをさなくおはしましける時、北の政所具し奉らせ給ひて春日にまゐらせ奉りけるに、おまへのものどもの參らせするをたりけるを、俄につじ風の

吹きまろびて、東大寺大佛殿の御まへにおとしたりけるを春日の御まへなるもの、源氏の氏寺にとられたるを、よからぬ事にやとこれをもてその をり世ひと申し、かど、永く 御末つがせたまふは吉相にこそはありけれとぞ覺え侍るな。夢も現もこれはよきと、人申せど、させることなくてやむこと侍り。かやうにあやしだちて見給へ聞ゆる 事もかくよき事も候ふな。まことに世の中にいくそばく哀にもめでたくも興ありて、うけたまはり見給へ集めたることの數しらず積りて侍るが翁どもとか人々思しめす。やんごとなくも又下りても、ま近くみす簾垂の内ばかりやおぼつかなさ殘りて侍らむ。それなりともおのおの 宮殿ばら次々の人のあたりに、人のうち聞くばかりの事は女房わらはべ申し傳へぬやうやは侍る。さればそれも不意に承らずしも候はず。されどそれをば何とかは語り申さむずる。唯世にとりて人の御耳とゞめさせ給ひぬべかりし昔の事ばかりをかくかたり申すだに、いとをこがましげに御覽じおこする人もおはすめり。今日は唯殿のめづらしう興ありげにおぼして、あとをようたせ給ふにはやされ奉りて、かばかりも口わけそめて侍ればなかなかのこりおほく、又々申すべき事はでもなく侍るを、若しまことに聞しめしはてまほしくば駄一疋をたまはせよ。はひのりて參り侍らむ。かつは又やどりに參りて殿の御才學のほども承らまほしう思ひ給ふるやうは、いまだ年ごろかばかりもさしらひ玄給ふ人に對面たまはらぬに、時々くはへさせ給ふ御ことばのみ奉るは、翁らがやしは子のほどにこそはと覺えさせ給ふに、この玄ろしめしなる事どもは、思ふにふるき御日記などを御覽ずるならむかしとこゝろにくゝ、下臈は

さばかりのざえはいかでか侍らむ。唯見聞き給へし事を心に思ひおきて、かくさかしがり申すにこそあれ。まことに人にあひ奉りては、思し咎め給ふことも侍らむとはづかしうおはしませば、事はおいの學問にも承りあかさまほしうこそ侍れ」といへば繁樹も「たゞかうなりからなり。さらむをりは必ず告げ給ふべきなり。杖にかゝりても參りあひ申し侍らむ」とうなづきあはす。「たゞしさまでのわきまへをばせぬ若き人々は、そら物語する翁かなとおぼすもわらむ。我が心におぼえて一言も空しき事加へて侍らば、この御寺の三寶今日の座の戒わ玄やうに講ぜられ給ふ佛菩薩を證と玄奉らむ。中にも若うより十戒の中に妄語をば保ちて侍る身なればこそ命もたもちて候へば、今日この御寺のむねとそれを授け給ふ。講の庭にしも參りてあやまち申すべきならず。大かた世のはじめは人の壽は八萬歳なり。それがやうやう減しもていきて百歳になる時に佛いでおはしますなり。されど生死の定なきよしを人に玄めし給ふとて猶二十年つゞめて八十と申しゝ年入滅せさせ給ひにき。その年より今年まで一千九百七十三年になり侍りぬる。釋迦如來滅したまふを期にて八十に究むべけれども、佛の命を不定なりと見せさせ給ふにや、この頃も九十百の人おのづから聞え侍るめれどこの翁どもの命はまれなる事甚深甚深希有希有なりとはこれを申すべきなり。いとむかしはかばかりの人侍り。神武天皇をはじめ奉りて二十餘代までの間に十代ばかりがほどは百歳百餘歳までは持ち給へる御門もおはしましたれど、末代にはけやけき命もちて侍る翁どもなりかし。かゝれば前生にも戒をうけたもちて候ひけると思ひ給ふれば、この生にも破ら

でまかりかへらむとおもう給ふるなり。今日この御堂に影向を給ふらむ神明冥道たちも聞しめせ」とうちひひて、左たりがほに扇うちつかひつゝ見かはしたるけしきどもありに、何事よりもおほやけわたくしうらやましくこそ侍りしか。「さてもさても繁樹が年かぞへさせたまへ。たゞなるよりは年を知り侍らぬが口惜しきに」といへば、侍「いでいで」とて、「十三にておほき大殿にまゐりきとたのまへば、十ばかりにて陽成院おりさせ給ふ年はいますかりけるにこそ。これにて推し思ふに、あの世繼の主は今十餘年がおとゝにこそあめれば百七十には少し餘り、八十にも及ばれにたるべし」など手を折りかぞへて「いとかばかりのみとしどもは相人などに相せられやせし」と問へば「させる人にも見え侍らざりき。唯こまうどのもとに二人つれて罷りたりしかば、二人長命と申しゝかど、いとかばかりまで侍ふべしとは思ひかけ候ふべきとか。異でと問はむと思う給へし程に、昭宣公の君達三人おはしましにしかばえ申さずなりにき。其ぞかし、時平のおとゞをば「御かたちすぐれ、心だましひかしこく、日本のかためと用ゐむに餘らせ給へり」と申す。枇杷殿仲平をば「あまり御心うるはしくすなほにて諂ひかざりたる事なくて、日本の小國にはおはせぬ相なり」と申す。貞信兵をば、「あはれ日本のかためやな。かく世をつぎ門を開く事唯この殿」と申したれば「我をあるが中にざえなく心てんでくなりと、かくいふはづかしきこと」と仰せらけるは。されどその儀にたがはずかどをひろげ榮花をひらかせ給へば、なほいみじかりと思ひ侍りて、又まかりたりしに、小野宮どのおはしましゝかばえ申さずなりにき。ことさらに怪しき姿をつくりて下﨟

のなかに遠く居させ給へりしを、多かりし人のなかより延びあがり見奉りて、およびをさして物を申しゝかば何事ならむと思ひ給へしを、後にうけたまはりしかば、貴臣よと申しけるなり。あるはいと若くおはします程なりかしな。いみじきおぼえ事どもに侍れど、誠にこれは徳入りたる翁どもに候ふ。などか人のゆるさせ給はざらむ。又拙き下臈のさる事もありけるはときこしめせ。亭子院の河尻におはしましゝに、をろ女といふおそびもの召して御覧じなどせさせ給ひて「遥に遠く侍ふよし歌に仕うまつれ」と仰事ありければ、よみて奉りし、

「濱千鳥とびゆくかぎりありければ雲たつ山をあはとこそみれ」。

いといみじうめでさせ給ひて、ものかづけさせ給ひき。

「命だに心にかなふものならばあにかわかれのかなしかるべき」。

この女ろ女がうたなり。又鳥飼の院におはしましたる、例のあそびどもおまた参りたるなかに、大江の玉淵が娘のこよなくかたちをかしげなれば、おはれがらせ給ひて、うへに召しあげて、「玉淵はいとらうありて歌などよくよくみき。このとりかひといふ題を人々のよむに、おなじ心に仕うまつりたらば、誠の玉淵が子とはおぼしめさむ」と仰せ給ふ。承りて、即、

「深緑かひある春にあふときはかすみならねどたちのぼりけり」

などめでたがりて御門よりはじめ奉りてものかづけたまふ。二ほどの事、南院の七郎君にこゝろむべき事など仰せられけるほどなど委しくかたる。三延喜の御時古今撰ぜられしをり貫之はさらなり、忠岑や躬恒などは御書所に召されて候ひるけほどに、櫻の木に郭公の鳴く

をきこしめして、四日二日なりしかばまだ去のびねの頃にて、いみじう興じおはします。貫之召しいだして歌つかうまつらせ給へり。

「ことならばいかゞなきけむ郭公このよひばかりあやしきぞなき」。

それをだにけやけき事に思ひたまへしに、おなじ御時に御あそびありし夜、御せんのみはしもとに躬恒をめして、「月をゆみはりといふこゝろは何のこゝろぞ、これがよしつかうまつれ」とおほせ事ありしかば、

「てる月を弓はりとしもいふことは山邊をさしていればなりけり」

と申したるをいみじう感せさせ給ひて、おほうちぎたまはりて肩にうちかくるまゝに、

「白雲のこのかたにしもおりゐるはあまつ風こそ吹きてきぬらし」。

いみじかりしものかな。さばかりのものを近う召しよせて勅祿賜はるべきとこそ思ひ給へしか。かのあそびどもの歌よみしを感じ給へるはさぞ侍る。院にならせ給ひ、都離れたる所なればといふこそあまりにおよすけたれ」。この侍問ふ、「圓融院紫野の子日のひ、曾禰好忠いかに侍りけることぞ」といへば「それいと希有に侍りしとなり。さばかりの事に上下をえらばず和歌を賞せさせ給はむことげに口をしき事に侍れど、かくろへて優なる歌をよみ出さむだにいと無禮に侍るべき。殊に座にたゞつきにつきたりし、おさましき事ぞかし。小野宮殿、閑院大將殿などぞかし、ひきたてよひきたてよとおきてさせ給ひ」は。躬恒が別祿たま

はるにたとしへなき歌よみなりかし。歌いみじうとも折ふしきやうめを見て仕うまつるべきなり。けしうおらぬ歌よみなれど、からく劣りにしことぞかし」といふ。さぶらひこまやかにうち笑ひて、「いにしへのいみじき事どもの侍りけむはしらず、あにがし物覚えて不思議なりしことは、三條院の大嘗會の御禊のいだし車、大宮皇太后宮より奉らせ給へりしぞありしや。大宮の一の車の口のまゆにかうなうかけられて、空だき物たかれたりしかば二條の大路のつふとけぶりみちたりしさまこそめでたく、今にさばかりのみもの又なし」といへば、世繼、「云か云か、いかばかり御心に入れていとみさせ給へりしかば、それに女房の御心のおはけなさはさばかりの事を簾垂おろして渡りたまひしはとよ。おさましかりし事ぞかしな。ものけたまはる口に乘るべしと思はれけるが、しりに押し下され給へりけるとこそ承りしか。げに女房のからきことにせらるなれども、云うの思しめさむ所もしらず、をとこはえしかあるまじくこそ侍れ。大かたその宮には心おそましき人のおはするにや。一品宮の御裝着に、入道殿より玉を貫きいはほをたて水をやり、えもいはず調せさせ給へる裝唐ぎぬをまづ奉らせ給ひて「中にもとりわきて思しめさむ人にたまはせよ」と申させたまへりけるをさりともと思ひ給ひける女房のたまはらでやがてそのなげきに病づきて七日といふにうせ給ひにけるを、いとさまで覺え給ひけむ罪ふかく、ましていかにものねたみの心ふかくいましけむ」などいふぞおさましくいかでかく萬の事御簾の内まで聞きたらむと恐しく、かやうなるおんなおきな、どのふる事するはいとうるさく、聞かまうきやうにこそ覺ゆるに、此は唯昔

に立ちかへりあひたる心ちして、又々もいへかしと、さしいらへと問はまほしき事多く、心もとなきに、『講師おはしましにたり』と立ち騒ぎのゝしりし程に、かきさましてしかばいと口をしき、事はてなむに人つけて家はいづこぞと見せむと思ひしも、例のなからばかりが程に、その事となくとよみとてかいのゝしり出できて、居込みたりつる人も皆くづれ出づるほどに紛れていづれともなく見まぎらはしてし口をしさこそ、何事よりもかの夢の聞かまほしさに居所も尋ねさせむと玄侍りしかども、ひとりひとりをだにえ見つけずなりにしよ。まことまことと御門の母きさいの御もとに行幸せさせ給ひて、御輿寄することは深草の御時よりありけることこそ。それがささはおりて乗らせ給ひけるを后の宮「行幸のありさま見奉らむ。唯寄せて奉れ」と奏せさせ給ひければ、その度さておはしましけるより、今はよせてのらせたまふとぞ。皇后宮の大夫殿書きつがはれたる夢なり。この年ごろ聞けば、百日千日の講行はぬ家々なし。老いたるも若きも後の世のつとめをのみ思し申すめるに、一日の講も行はず、唯つらつらといたづらに起きふしてのみ侍る罪ふかさに、ある所の千日の講、卯の時になむ行ふと聞きて参りたりけるに、人々所もなく車もかちの人もありけむ。やゝ待てど講師見えず、人々のいふを聞けば、『今日の講は夕つ方ぞあらむ』などいふに、帰らむも罪えがましくおもふに、百とせばかりにやあらむと見ゆる翁の居たる傍に、法師のおなじほどに見ゆる、人の中を分けてきてこの翁に『いとかしこく見奉りつけてあながちに参りつるなり。そもそもおまへは一とせ世継の菩提講にて物語玄給ひしに、あながちに居寄りて、おとうち給

ひしと見奉るは老法師のひがめか」といへば、男「さもや侍りけむ」といふ。これはいでけうありて、「その世繼には又やあひ給へりし」といへば、「後三條院生れさせ給ひてなむあひて侍りし」といへば、「さてさていかなる事か申されけむ。そのかみごろも、みゝも及ばず承り思う給へし。その後さまざま興ある事も侍るを聞かせ給ひけむ。まことに今の世の事とりそへてたまはせよ。あはれいく年にならせ給ひ侍りぬらむ」といへば、「二のまひの翁にてこそは侍らめ。さはありときかむと思しめさばすこぶる申し侍らむ。まづその年萬壽二年きのとの亜の年今年つちのとの亥の年とや申す。八十三年にこそなりにて侍りけれ。いでや何ばかり見聞きたる事のなさけも侍らず。かの世繼の申されし事も耳にとゞまるやうにも侍らざりき」といへば、法師、「いでいでさりとも八十三年の功徳のはやしとは今日の講を申すべきなめり。今もむかしもしかぞ侍りし。二のまひの翁ものまねびの翁、僧らが申さむことを正教になずらへて誰も聞しめせ」といへば、翁「きこしめしどころも侍るまじけれど、かくせちにすゝめ給へば、今はのきざみにをこのものに笑はれ奉るべきにこそ。見聞き侍りしは、後一條院長元九年四月十七日うせさせ給へる、保天下二十一年、そのほどいらなく悲しき事多く侍りき。中宮はやがておぼしめし歎きて、おなじ年の九月六日うせさせ給ひにし。上東門院おぼしめし歎きしかど、これにも後れ奉らせたまひて、一品の宮さきの齋院をこそはかしづき奉らせ給ひしか。院のおはん葬送の夜ぞかし、常陸の國の百姓とかや、

「かけまくもかしこき君が雲のうへにけぶりかゝらむものとやは見し」。

一九四

五月ばかり郭公をきこしめして、女院、

「ひとことを君につげなむほとゝぎすこのさみだれはやみにまどふと」。

このおほんおもひに源中納言顯基の君す家ゑ給ひて後、女院に申したまへりし、

「身をすてゝ宿をいでにし身なれどもなほこひしきはむかしなりけり」。

御かへし、

「時のまもこひしきことのなぐさまば世はふたゝびもそむかれなまし」。

その時は、かやうなる事多く聞え侍りしかど、かずかず申すべきならず。後朱雀院位に即かせたまうて、さはいへど華やかにめでたく世にもてなされて、ゑばしこそあれ。一宮の方に居させ給ふ一品宮、后に立たせ給ふ。後三條院生れさせ給ひにしかば、さればこそ㒵昔の夢は空しかりけりや。なからむ末傳へさせ給ふべき君におはしますとぞ世繼申されし。今后弘徽殿におはしまし、春宮梅壺におはしまして、先帝の一品の宮、春宮にまゐらせたまひて藤壺におはしまして女院入らせ給ひて、ひとつにおほしたてまつらせ給へる宮達、いづれとも覺束なからず見奉らせ給ふめでたさに、故院のおはしまさぬなげき盡せず思しめしたりけり。關白殿に養ひ奉らせたまひし故式部卿の宮の姫君、うちにまゐらせ給ひて、弘徽殿におはしますべしとて、かねてきさいの宮いでさせ給ひしこそ、いかに安からず思しめすらむと世の人なやみ申しゝか。おすまかでさせ給はむとてうへにのぼらせ給ひて、御門いかゞ申さ㒵給ひけむ、宮、

「今はたゞくもゐの月をながめつゝめぐりあふべきほどもおぼえず」。この宮に女宮二所おはします。齋宮齋院に居させたまうて、いとつれづれに宮だちこひしく、世もすさまじくおぼしめすに、五月五日にうちより、

「もろともにかけしあやめの根をたえてさらにこひぢに惑ふ頃かな」。

御かへし、

「かたがたにひき別れつゝあやめ草あらぬ根をやはかけむと思ひし」。

殿の御もてなし、かたはらいたくわづらはしくて、久しく入らせ給はず。されどこの宮おはしますこそはたのもしき事なれど、今の宮に男みこうみ奉り給ひては、うたがひなきまうけの君と思しめしたることわりなり。よき女房おほく、出羽少將、小辨、小侍從などいひて、手かき歌よみなど華やかにていみじうて侍はせたまふ」。

大鏡　終

水鏡

水鏡卷上

第一 神武天皇　二 綏靖天皇
三 安寧天皇　四 懿德天皇
五 孝昭天皇　六 孝安天皇
七 孝靈天皇　八 孝元天皇
九 開化天皇　十 崇神天皇
十一 垂仁天皇　十二 景行天皇
十三 成務天皇　十四 仲哀天皇
十五 神功皇后　十六 應神天皇
十七 仁德天皇　十八 履中天皇
十九 反正天皇　二十 允恭天皇
廿一 安康天皇　廿二 雄略天皇
廿三 清寧天皇　廿四 飯豐天皇
廿五 顯宗天皇　廿六 仁賢天皇

廿七　武烈天皇　　廿八　繼體天皇
廿九　安閑天皇　　三十　宣化天皇
廿一　欽明天皇

つゝしむべき年にて過ぎにし二月の初午の日、龍盖寺へまうで侍りて、やがてそれより泊瀬にたそがれの程に參りつきたりしに、年のつもりにはいたく苦しう覺えて師のもとにゑばし休み侍りしほどにうちまどろまれにけり。初夜の鐘の聲におどろかれて御前に參りて通夜し侍りしに、世の中うち玄づまるほどに修行者の三十四五などにやなるらむと見えしが經をいとたふとく讀むわり。傍近くゐたれば「いかなる人のいづこより參り給へるぞ。御經などの承らまほしからむにはたづね奉らむ」といふにこの修行者いふやう、「いづこと定めたる所も侍らず。すこしものゝ心つきてのちこの十餘年世のなりまかるさまの心とゞむべくも見え侍らねば、人まねにもし後世やたすかるとて、かやうにまどひありき侍るなり」といへば「誠にかしこくおぼしとりたる事にこそ。誰もさすがにこのことわりは思へどもまことしく思ひたゝぬこそおろかに侍るめれ。この尼今まで世に侍るは希有の事なり。けふあすとも玄らず今年七十三になむなり侍る。三十三を過ぎがたく、相人なども申しおひたりしかば岡寺は厄を轉じ給ふと承りてまうでそめしよりつゝしみの年ごとに二月の初午の日參りつる玄るしにこそ今まで世にはべれば、今年つゝしむべき年にて參りつる身ながらもをかしく、今はなにの命かはをしかるべきと思ひながら、年比參り習ひて侍るにあはせてやが

てこの御寺へも參らむと思ひたちてなむ。今この御寺には偏に後世たすかり侍らむ善知識におはさせ給へと申し參れるに、かくいさぎよく後世おぼす人にあひ奉りぬるは去かるべきにこそ。世をそむく人もおのづから物いひふれ給ふ人なきはたよりなかるべき事なり。この尼も偏に子とも思ひ奉らむ。又必ず善知識となり給へ」といへば、修行者「いとうれしきことなり。今日よりはさこそ頼み申し侍らめ」とて又經など讀みてざさしはてし程に「後夜うち過ぎてわれも人もねぶられしかば、修行しありき給ひけむ物がたりしたまへ。目をもさまし侍らむ。大峰葛城などには尊き事にも又おそろしき事にもあひ侍るなるは、いかなる事か侍りし」と問へば「年比はべちにさる事もなかりしに一昨年の秋葛城にてこそあさましき事に逢ひ侍りたりしか。常よりも心すみて哀におぼえて經を誦し奉りしに、谷の方より人のけしきのしてまうでこしかばいと物恐しくおぼえながら經を誦し奉りしに、九月上の十日ごろの事にて月の入方になり侍りしほどにほのかにそのかたちを見れば、翁のすがたきたるもの丶あさましげに瘠せ神さびたるが藤の皮をあみて衣とし竹の杖をつきたるがきたれるなりけり。やうやう傍へ來寄りていふやう「御經のいとたふとく聞えつればまうできたる」といふ。物恐しくおぼえ侍りしかども鬼魅などの姿にもあらざりしかば、仙人といふものにやと思ひてかく申すほどに、八の巻のすゑつかたなりしかばまた一部を誦して聞かせ侍りしかば、この仙人よろこびて「修行し給ふ人おはくおはせどまことしく佛道を心にかけ給ふやらむと見奉るが尊くおぼえ侍るなり。いかなる事にて心を起し

その給へりしぞ」と問ひしかば、さきに申しつるやうに申しゝを仙人聞きて「いとかしこきことなり。大かたは今の世をはかなく見うとみたまひていにしへはかくしもあらざりけむとあさくおぼすまじ。すべて三界は厭ふべき事なりとぞおぼすべき。このめのまへの世のありさまはをりに従ひてともかくもなりまかるなり。いにしへをほめ今をそしるべきにあらず。神代よりこの葛城吉野山あどをすみかとして時々はかたちを隠して都のありさまも諸國に至るまで見聞きて過ぎ侍りき。よしなき事どもに侍れども御經を承りぬるよろこびに偏に目の前のことばかりをのみそしる心おはして、いにしへはかくしもなかりけむなどおぼす。一すぢなる心のおはする方をも申し聞かせば、一分の執心をもうしなひ奉りなば佛道にすゝみ給ふ方ともなどかならざらむ。神の世より見侍りし事おろおろ申し侍らむ」といへば、「いみじくうれしく侍るべき事なり。生年二十などまでは男のまねかたにて世に立ちまじらひ侍りしかども、はかばかしく昔の事考へ見ることもなかりき。唯遊びたはぶれにて夜をあかし日をくらしてのみ過ぎ侍りしに、近頃の事などを人のかたり傳へ申すを聞くに、この世の中はいかにかくはなりまかるやらむと、事にふれて哀にのみおぼえてかゝる道に入りにたれば一かたになべての世をそしる心ある罪もさためて侍らむ。いでのたまはせよ。うけたまはらむ」といふに、仙人のいはく「さてはこの世のありさまのみならず、内典の方などもとくこそはおはすらめ。はしはしを申さむ。生死は車の輪の如くにしてはじまりてはをはり終りてははじまり、いつをはじめ、いつををはりといふ事あるべから

ず。まづ劫のありさまを申して世のなりゆくさまもかくぞかしと知らせ奉らむ。人の命の八萬歳ありしが、百年といふに一年の命のつゞまりつゞまりして十歳になるを、一の小劫とは申すなり。さて十歳よりまた百年に一年の命をそへて八萬歳になりぬ。これをも一の小劫と申す。この二の小劫をあはせて一の中劫とは申すなり。さて世のはじまる時をば成劫と申してこの中劫と申しつる程を二十すぐすなり。そのはじめの一劫の始の程はつやつやと世の中なくて空の如くにてありしに、山河などいできてかく世間の出でくるなり。今十九劫には極光浄といふ天よりひとりの天人生れて大梵王となる。その後次第にやうやう玄もざまに生れて次にひと生れ、餓鬼畜生いできてはてに地獄は出でくるなり。かくて成劫廿劫はきは まりぬ。世間も有情も成り定まるによりて成劫とは申すなり。次に住劫と申して又二十の中劫のほどをすぐすなり。但しはじめの一劫は命次第に劣りのみして増ることなし。されば住劫のはじめの人、命は八萬歳にはあらで、無量歳にて、それより十歳までなるなり。されどもほどの經ることは一の中劫のほどなり。さて第二の劫より十九の劫までさきに申しつるやうに、八萬歳より十歳になり十歳より八萬歳になり、劫毎にかく侍るなり。さて第二十の劫は十歳より八萬歳まで増るとのみありて劣るとなし。これも過ぐる程は一の中劫なり。これは天より地獄まで成劫にいできたるのほりて有情のある程なり。さて住劫とは申すなり。次に壊劫と申して、この程また二十の中劫の程なり。始の十九劫には地獄より始めて有情みなうせぬ。この失すると申すはいづこともなく失せぬるにはあらず。しかるべくして天上へ

生るゝなり。但し地獄の業なはつきぬ衆生をばこと三千界の地獄へ去ばしうつしやるなり。かくて第二十の劫に火いできて去も風輪とて風吹きはりたる所のうへより梵天まで山川も何もかもなくやけ失せぬ。かく破れぬれば壊劫とは申すなり。次に空劫と申して又二十の中劫の程を世の中になにもなくて大空の如くにて過ぐるなり。空しければ空劫とは申すなり。この成住壊空の四劫をふるほどは八十の中劫を過ぐしつるぞかし。これを一の大劫とは申すなり。かくて終りてはまた始まり終りてはまた始まりして、いつを限といふことなし。かく給ふあり。その中に人の命まさりざまなるをりは樂み奢れる心のみありて敬にかなふまじければいで給はず。命やうやうおちつかたに物のあはれをもしり敬事にもかなひぬべきほどを見計ひて出で給ふなり。この住劫にとりてはじめ八劫には佛いで給はず、第九の減劫に七佛のいで給ひしなり。釋迦のいで給ひしは人の命百歳の時なれば、第九劫のむげにすゑになりにたるにこそ。第十の減劫のはじめに彌勒はいで給はむずるなり。第十五の減劫に、九百九十四佛いで給ふべし。かくの如く世に從ひて人の命も果報もなりまかるなり。大方はさることにてこの日本國にとりても又なかなか世あがりては事定まらず、却りてこの頃にわひ似たる事も侍りき。佛法わたり因果辨へなどしてより、やうやう去づまりまかりしなごりのまた末になりて、佛法もうせ世のありさまもわろくなりまかるにこそあるべきことわりなればよしあしを定むべからず。偏にあらぬ世になるにやなどあざむき思ふべからず。萬壽

のころほひ世繼と申しゝさかしき翁侍りき。文德天皇より後つかたの事は暗からず申しおきたるよし承る。その先はいと耳きゝどほければとて申さゞりけれども、世の中をきはめ玄らぬはかたおもむきに今の世をそしる心の出でくるもかつは罪にも侍らむ。目の前の事をむかしに似ずとは世を玄らぬ人の申す事なるべし。かの嘉祥三年より先の事をおろおろ申合せて十二代の事は詞に顯し申さむにつけて、憚多く侍るべし。神武天皇より申し侍るべき數まで五代、すべし。まづ神の代七代その後伊勢大神宮の御世よりうのかやふきあはせずの尊まで五代、なり。その御門位に即き給ひし辛酉の年より嘉祥三年庚午の年まで、千五百二十二年にやなりぬらむ。その程御門五十四代ぞ坐しましけむ。まづ神武天皇より」とていひ續け侍りし。

第一　神武天皇　七十六年三月甲辰日崩。年百廿七。
九月丙寅日葬大和國畝火山東北陵。

「神武天皇と申しゝ御門はうのかやふきあはせずの尊の第四の御子なり。御母海神の女玉依姫なり。又まことの御母は海にいり給ひて玉依姫は養ひ奉りたまへりけるとも申しき。その世に侍りしかどもこまかに知り侍らざりき。この御門父の御門の御世庚午の年生れ給ふ。甲申の歳東宮に立ちたまふ。御年十五。辛酉の年正月一日位に即き給ふ。御年五十二。さて世をたもち給ふ事七十六年。神代より傳はりて劒三つあり。一つは石上布留の社にます。一つは熱田の社にます。一つは内裏にます。又かゝみ三つあり。一つは大神宮におはします。一つは日前におはします。一つは内裏におはします。内侍所にこそおはしますめれ。この日の本をおきつしまとつけられし事はこの御時なり。年遥にしてこまかに申しがたし。位に即かせ

おはしまし〳〵年ぞ釋迦佛涅槃にいり給ひて後二百九十年にあたり侍りし。されば世おがりたりと思へども佛の在世にだにもあたらざりければやうやう世の末にてこそは侍りけれ。

第二　綏靖天皇　三十三年五月崩。年八十四。十月葬大和桃花鳥田岳陵。

次の御門綏靖天皇と申しき。神武天皇の第三の御子なり。御母事代主神の御女五十鈴姫なり。神武天皇の御世四十二年正月甲寅の日東宮に立ち給ふ、御年十九。庚辰の年正月八日己卯位に即き給ふ。御年五十二。世をたもち給ふ事三十三年。父御門うせ給ひて諒闇のほど世の事を御兄のみこに申しつけ給へりしを、この御兄のみこのおとゝたちを失ひ奉らむとはかり給へりしを、このおとゝのみこ心え給ひて、御はてなど過ぎて御門今一人の御兄のみこと御心をあはせてかの兄のみこを射させ奉らせ給ふに、この兄のみこ手をわなゝかしてえ射給はずなりぬ。御門その弓をとりて射殺し給ひつ。このえ射ずなりぬる兄のみこのたまふやう「われ兄なりといへども心よわくしてその身堪へず、汝はあしき心もちたる兄を既にうしなへり。速に位に即き給ふべし」と申し給ひしに、かたみに位をゆづりて誰も即き給はで四年過し給へりしかども、つひにこの御門、兄の御すゝめにて位に即き給へりしなり。

第三　安寧天皇　三十八年十二月崩。明年八月葬大和御陰井上陵。年五十七。

次の御門安寧天皇と申しき。綏靖天皇の御子。御母皇太后宮五十鈴依媛なり。綏靖天皇の御世廿五年正月戊子の日東宮に立ち給ふ。御年十一。父御門うせ給ひて明くる年十月廿一日ぞ位につき給ひし。御年二十。世をたもち給ふ事三十八年なり。

第四　懿德天皇　三十四年九月八日崩。年七十七。葬大和國畝傍山東南御陵。

次の御門懿德天皇と申しき。安寧天皇の第三の皇子。御母皇后渟名底中媛なり。安寧天皇の御世十一年正月壬戌の日東宮に立ちたまふ。御年十六。辛卯の年二月四日壬子位に即かせ給ふ。世を治らせ給ふ事三十四年なり。三十二年と申しゝにぞ孔子はうせ給ひにけるとうけたまはりし。

第五　孝昭天皇　八十三年崩。年百十四。葬大和國掖上博多山上陵。

次の御門孝昭天皇と申しき。懿德天皇第一の御子。御母皇太后宮天豐津媛なり。懿德天皇の廿二年三月戊午の日東宮に立ち給ふ。御年十八。丙寅の年正月九日位に即き給ふ。御年三十二。世をたもたせ給ふ事八十三年なり。

第六　孝安天皇　百二年崩。年百三十七。葬大和國玉手岳上陵。

次の御門孝安天皇と申しき。孝昭天皇の第二の皇子。御母世襲足姫なり。孝昭天皇の御世六十八年正月に東宮に立ちたまひき。御年二十。己丑の年正月十三日辛卯位に即き給ふ。御年三十六。世をたもたせ給ふ事百二年なり。

第七　孝靈天皇　七十六年崩。年百三十四。葬大和國片岳馬坂陵。

次の御門孝靈天皇と申しき。孝安天皇第一の御子、御母皇太后姉押姫なり。孝安天皇の御世七十六年正月に東宮に立ちたまふ。御年二十六。父みかどうせ給ひて次の年辛未正月二日ぞ位に即き給ひし。御年五十三。位をたもち給ふ事七十六年なり。この御代とぞおぼえ侍る。天

竺の祇園精舎の焼けて後旃育迦王の造り給ふとうけたまはり侍りしは。須達長者造りて佛に奉りて二百年と申しゝに焼けにけるを、祇陀太子またもとのやうに造り給へりける後五百年にて焼けたるを今旃育迦王は造り給ふとぞ聞えし。

第八　孝元天皇　五十七年崩。年百十七。葬大和國輕劔池島上陵。

次の御門孝元天皇と申しき。孝靈天皇のみ子。御母皇后宮細媛なり。孝靈天皇の御世三十六年丙午正月東宮に立ちたまふ。御年十九。丁亥の年正月十四日に位に即きたまふ。御年六十。世を治らせ給ふ事五十七年なり。三十九年乙丑六月にゆゝしき大雪の降りたりしこそあさましく侍りしか。

第九　開化天皇　六十年崩。年百十五。葬大和國春日率川坂本陵。

次の御門開化天皇と申しき。孝元天皇の第二の御子、御母皇太后鬱色謎命なり。孝元天皇の御世二十年正月に東宮に立ちたまふ。御年十六。癸未の年十一月十二日くらゐにつき給ふ。御年五十一。世を治め給ふ事六十年。この御代の程とぞおぼえ侍る、南天竺に龍猛菩薩と申す僧いますありと承りし。眞言を始めてひろめ給ひし事はこの菩薩なり。又祇園精舎はふたたびまで焼けしを旃育迦王の造り給へりけるを百年と申しゝにぬす人やき侍りにけり。いづこもいづこも心うきは人の心なり。その後十三年ありて、六師迦王又造り給へると承りしはこの御時位に即かせ給ひて十年など申しゝほどとぞおぼえ侍る。

第十　崇神天皇　六十八年崩。年百十九。葬大和國山邊道上陵。

次の御門崇神天皇と申しき。開化天皇第二の御子、御母皇后伊香色謎命なり。甲申の年正月十三日位に即き給ふ。御年五十二。世を去り給ふ事六十八年なり。六年と申しゝに齋宮はじめて立ち給へりしなり。又國々の貢物かちよりもてまゐる事民も苦び日數も經るゝ、あしきことなりとて諸國に船を造らさ(仰)せたまひき。六十二年と申しゝころほひ天竺に惡王おはして祇園精舍を毀ちて人を殺す所を定め給ひしかば、四天王沙竭羅龍王いかりをなしてこぼちける人を大なる石をもちて押し殺し給ひけるとぞうけたまはり侍りき(仰)。六十五年と申しゝに熊野の本宮は出でおはしましゝなり。凡そこの御門御心めでたくとにおさてくらからずおはしましき。

第十一　垂仁天皇

九十九年崩。年五十一。葬大和國添上郡伏見東陵。

次の御門垂仁天皇と申しき。崇神天皇第三の御子。御母皇后御間城姫なり。崇神天皇の四十八年四月に御夢のつげありて東宮に立て奉り給ひき。御年二十。壬辰の年正月二日位に即き給ふ。御年四十三。世を去りたまふ事九十九年あり。四年と申しゝに后の兄よきひまをうかゞひて后に申し給ふやう、「このかみとをうととたれをか志ふかく思ひ給ふ」と申し給ふに后何ともおぼさで「兄をこそは思ひまし奉れ」とのたまふを聞きて、この御兄のたまはく「去からばをうとは我が色おとろへず盛なる程なり。世の中にかたちよくわれもわれもと思ふ人こそ多かることにて侍れ。われ位につきなばこの世にはせむほどは世の中を御心にまかせ奉るべし。御門をうしなひ奉りたまへ」とて劍をとりて后に奉り給ひつ。后おさましく

おそろしくおぼせどかくいひかけられなむ事遁るべき方もなくて常に御ぞのうちに劍をかくしてひまをうかゞひ給ふに、明くる年の十月に御門后の御膝を枕にして晝御殿ごもりたりしに、この事唯今にこそとおぼしゝに、おのづからなみだ下りて御門の御顏にかゝりしかば御門おどろき給ひてのたまふやう「われ夢に錦の色の小ぐちなはわが首をまつふと見つ。又おほきなる雨后の方より降りきてわが顏にそゝぐと見つ。いかなる事にか」と仰せられしに、后えかくしはて給はでふるひおぢ恐れ給ひて涙にむせびてありの儘の事を申し給ふを、御門きこしめして「この事后の御咎にあらず」とおぼせられながら、このかみの王又后をもうしなはせ給ひにき。ゆゝしくわさましかりし事に侍りき。七年と申しゝにぞ、すまひのはじまり侍りし。十五年と申しゝに、丹波の國にすみ給ひしみこの御女五人おはしき。御門これを皆まゐらすべきよし仰せ事ありしかば、奉りたまへりしに、おのおの時めかせたまひしに、中のおとゝのおはせし、かたちいとみにくゝなむおはしければもとの國へかへし遣しゝほどに、桂川をわたりて心うしとやおぼしけむ、車より落ちてやがてはかなくなり給ひき。おはれに侍りし事なり。さてそれよりかしこをおちくにと申しゝを、この頃はおとくにとぞ人は申すなる。その年の八月星の、雨の如くに降りしをこそ見侍りしか。淺ましかりし事に侍り。廿五年と申しゝに大神宮ははじめて伊勢の國におはしましゝなり。これより先に天降りおはしましたりしかども、所々に坐しまして、伊勢に宮うつりおはしますことは、天てる御神の御をしへにてこの年ありしなり。廿八年と申しゝに御門の御弟の御子うせ給ひにき。

その程の世のならひにて近くつかうまつる人々を生きながら、御墓にこめられにけり。この人々久しく玄なずしておさ夕に泣きかなしぶを、御門聞しめして仰せらるゝやう「生きたる人をもちて死ぬるに玄たがへむことは、いにしへより傳れることなれども、われこの事を見聞くに悲しきことかぎりなし。今よりこの事永くとゞむべし」とのたまひて、その後はじの氏の人、土にて人がた、けものゝかたなどを作りてなむ、人のかはりにこめ侍りし。おはやけこれをよろこびて、はじといふ姓をたまはせしなり。この比大江と申す姓はその土師の氏のすゑなるべし。八十二年この程とぞうけたまはりし。祇園精舎は荒れはてゝ人もなくて九十年ばかり過ぎにけるを忉利天皇の第二の御子を下して人王となして又造りみがゝるとうけたまはりき。佛などのおはしましゝにもまさりてめでたくぞ造られにける。九十三年と申しゝにぞ後漢の明帝の御夢にこがねの人きたると御覽じて、明くる年天竺より始めて佛法もろこしへ傳りにし。

第十二　景行天皇　六十年崩。年百四十三。葬大和國山邊道上陵。

次の御門景行天皇と申しき。垂仁天皇の第三の御子、御母の皇后日葉酢媛命なり。垂仁天皇の御世三十年辛酉正月甲子の日東宮に立ちたまふ。父みかど二人の御子に申し給ふやう「おのおの心に何をかえむと思ふ」とのたまふに、兄のみこ「われは弓矢なむほしく侍る」と申し給ふ。おとゝのみこ「我は皇位をなむえむと思ふ」と申したまふ。この言に從ひてこのかみの御子には弓矢をたてまつり、弟の御子をば東宮に立て奉り給へりしなり。辛未の年七月十

一日位に即きたまふ。御年八十四。世をたもち給ふ事六十年なり。五十一年と申しゝに内宴行ひ給ひしに、成務天皇のいまだみこと申しゝと、武内こそ其座に參り給はざりしかば、御門たづねさせ給ひしに、申したまはく「人々皆御あそびの間心をゆるぶべきをりなり。その時もしひまにうかゞふ心あるものも侍らむにと思ひて、門をかためてなむ侍る」と申し給ひしかば、御門いよいよならびなく寵し給ひき。武内は孝元天皇の御孫あり。この後代々の御門の御後見として世に久しくおはしき。今にやはたの御傍に近くいはゝれ給へるは、この人にいます。五十八年二月に近江の穴穂宮にうつりにき。熊野の新宮はこの御時にぞはじまり給へりし。

第十三　成務天皇　六十一年崩。年百九。葬大和國狹城楯列池後陵。

次の御門成務天皇と申しき。景行天皇の第四の御子。御母の皇后兩道入姫なり。景行天皇の御世五十一年辛酉八月壬子の日東宮に立ち給ふ。辛未の年正月五日戊子位に即き給ふ。御年四十九。世をたもちたまふ事六十一年。御かたちことにすぐれ、御たけ一丈ぞおはしましゝ。武内この御時三年と申しゝにぞ大臣になり給へりし。大臣と申す事はこれよりぞはじまれる。もとは棟梁の臣と申しき。これも唯大臣とおなじことなり。つかさの名をかへ給へりしばかりなり。この御門御子おはせざりしぞ口をしくは侍りし。さて御甥のみこぞ位には即き給へりし。

第十四　仲哀天皇　九年崩。年五十二。葬河内國惠我長野西陵。

次の御門仲哀天皇と申しき。景行天皇の御子に、日本武尊と申しゝ第二の御子におはします。御母垂仁天皇の御むすめなり。成務天皇三十八年三月に東宮にたち給ふ。壬申の年正月十一日に位に即き給ふ、御年四十四。世をたもち給ふ事九年。筑紫にてうせ給ひにしかば、武内御骨をばとりて京へ歸りたまへりしなり。

第十五　神功皇后　六十九年崩。年百。葬大和國狹城楯列池上陵。

次の御門神功皇后と申しき。開化天皇の御ひゝこなり。仲哀天皇の后にておはせしなり。御母葛木高額媛。辛巳の年十月二日位に即き給ひき。女帝はこの御時はじまりしなり。世をたもち給ふ事六十九年。御心ばへめでたく、御かたち世にすぐれ給へりき。仲哀天皇の御時八年と申しゝに、筑紫にて、神この皇后につき給ひてのたまはく「さまざまのたから多かる國あり、新羅といふ。行きむかひ給はゞおのづから隨ひなむ」とのたまひき。去かるにその事なくて止みにき。皇后今のたまはく「御門神のをしへに隨ひ給はで、世をもたち給ふこと久しからずなりぬ、いとかなしき事なり。いづれの神のたゝりをなし給へるぞ」と七日いのりたまひしに、神託宣してのたまはく「伊勢の國鈴鹿の宮に侍る神なり」とあらはれ給ひしによりて、皇后うらにいでさせ給ひて、御ぐしを海にうち入れさせ給ひて、「この事かなふべきならばわが髮わかれて二つになれ」とのたまひしにふたつになりにき。すなはちみづらにゆひ給ひて臣下にのたまはく「軍をおこす事は國の大事なり。今この事をおもひたつ、偏になんだちにまかす。われ女の身にして男の姿をかりて軍をおこす。上には神のめぐみをかうぶ

り、下にはなんだちのたすけを頼む」とて、まつらといふ河におはして、祈りてのたまはく、「若し西の國を得べきならばつりに必ず魚をえむ」とて釣りたまひしに、年魚をつりあげ給ひにき。その後諸國に船をめし、つはものをあつめて、海をわたり給はむとてまづ人を出して國のありなしを見せさせ給ふに、見えぬよしを申す。又人をつかはして見せしめ給ふに、日數おほく積りてかへり參りて、「いぬゐの方に山あり。雲かゝりてかすかに見え侍る」と申しゝかば、皇后その國へむかひ給はむとて石をとりて御腰にさしはさみ給ひて「事終りてかへらむ日この國にしてうみ奉らむ」と祈り誓ひ給ひき。この程やはたを孕み奉らせおはしましたりしなり。仲哀天皇うせさせおはします事は二月なり。この事は十月なればたゞならずおはしますとも、御門は知らせ給はぬ程にもや侍りけむ。さて十月辛丑の日ぞ新羅へ渡り給へりしに、海の中の樣々の大きなる魚ども、船どもの左右にそひて、大きなる風ふきて速にいたる。船に隨ひて波わらく立ちて新羅國の内へたゞ入りに入りくる時に、かの國の王おぢおそりて臣下をあつめて「昔よりいまだかゝる事なし。海の水既に國の内にみちなむとす。運の盡きをはりて國の海になりなむとするか」と歎きかなしぶ程に軍の船海にみちて鼓のこゑ山を動かす。新羅の王これを見ておもはく、これより東に神國あり、日本といふなり、その國のつはものなるべし、われたちおふべからずと思ひて、かの王すゝみて皇后の御船の前にまゐりて「今よりながく隨ひ奉りて、年ごとに貢物を奉るべし」と申しき。皇后その國へ入りたまひて、さまざまの寶のくらを封じ、國の指圖文書をとりたまひき。王さまざまの寶を

船八十に積みてたてまつる。高麗百濟といふ二つの國この事をきゝておぢ恐れて進みて玄たがひ奉りぬ。かくて筑紫にかへり給ひて十二月に王子をうみ奉り給ひき。これぞやはたの宮にはおはします。わくる年皇后京へかへり給ひしを、御まゝ子の御子たち思ひ給ふやう、父みかどうせ給ひにけり、又皇后既に皇子をうみ奉り給ひてけり、これを位に即けむとこそはかり給ふらめ、我らこのかみにていかでかおとゝに從ふべきとて、播磨の明石にて皇后を待ち奉りて傾け奉らむとはかり給ひしを、皇后きゝ給ひて、みづから王子を抱き奉りたまひて武内の大臣に仰せられて、南海へ御船をいだし給ひしかば、おのづから紀伊の國にいたり給ひにき。その後御子たちむほんを起し給ひて、皇后をかたぶけ奉らむと玄給ひしほどに、赤きゐのしゝ出できたりて、このかみの御子を食ひ殺してき。その後次の御子武内の大臣と又戰ひ給ひしもうしなはれ給ひにき。さてもあさましかりし。このたゝかひの間晝も夜の如くに暗くて日數のすぎしを、皇后大にあやしみ給ひて、年老いたるものどもに問ひ給ひしかば「二人を一所に葬りたるゆゑなり」と申しゝかば、尋ねさせ給ふに、小竹祝と天野祝といふものいみじきともにてとしを經るに、この小竹祝うせにけるを、天野祝なきかなしびて、我れ生きて何にかはせむとて傍に臥しておなじくなくなりにけるを、ひとつ塚にこめてけりと申しゝかば、その塚を毀ちて見せたまふに、誠に申すが如くなりしかばほかほかにうづまさせ給ひて後、即ちヨの光あらはれにしなり。十月に臣下たち皇后を皇太后にあげたてまつる。この程とぞおぼえ侍る、祇園精舎を天魔やき侍りにけりときゝはべりし。

第十六　應神天皇　四十一年崩。御年百十一。葬河内國惠我藻陵。

次の御門應神天皇と申しき。今のやはたの宮はこの御事なり。仲哀天皇第四の御子、御母神功皇后におはします。神功皇后の御世三年に東宮に立ちたまふ。御年四歳なり。庚寅の年正月丁亥の日位に即きおはしましき。御年七十一。世を去らしめすこと四十一年なり。八年と申す四月に武内の大臣を筑紫へつかはして事を定めまつりごたせ給ひしに、この武内の御おとゝにておはせし人の御門に申し給はく「武内の大臣常に王位を心にかけたり。筑紫にて新羅高麗百濟この三つの國をかたらひておほやけを傾け奉らむとす」となき事を讒し申しゝかば、御門人を遣はしてこの武内を討たしめ給ふに、武内なげきて「われ君のため二心なし。今罪なくして身をうしなひてむとす。心うき事なり」とのたまふ。その時に壹岐直の祖真根子といふものありき。かたち武内の大臣に違はず相似たりき。この人大臣に申していはく「かまへて遁れて都へ參りて罪なきよしを奏し給へ。われ大臣にかはり奉らむ」とて進みいでゝみづから去ぬ。武内密に都にかへりて事のありさまを申し給ふに、おとゝたち二人を召して重ねて問はせ給ふに武内罪おはせぬよしおのづからあらはれにき。その後御門この武内の大臣を寵したまひしなり。

第十七　仁徳天皇　八十七年崩。年百十。葬和泉國百舌鳥野陵。

次の御門仁徳天皇と申しき。應神天皇第四の皇子。御母の皇后仲姫なり。癸酉の年正月己卯の日位に即き給ふ。御年二十四。世を去り給ふ事八十七年なり。この御門の御おとゝを東宮

と申しゝかば、すべからく位を繼ぎ給ふべかりしに、兄にゆづり申し給ひしかども、互につぎ給はずして空しく三年をすぐさせ給ひしかば、東宮みづから命をうしなひ給ひにき。御門この事をきこしめして、かの東宮へ急ぎおはしまして泣きかなしび給ひしかども、かひなくて、その後位には即かせたまひしなり。四年と申しゝ二月に高き樓に登りて四方の民のすみかを見給ひて、烟絶え寂しかりしかば、今より後三年民を休め、九重の内の修理をとゞめさせ給ひき。さて七年と申しゝ四月に、又樓にのぼりて御覽せしに、民のすみかにぎはひて御覽せられければ、御門よませたまひし、

「たかき屋にのぼりて見れば煙たつ民のかまどはにぎはひにけり」。

四十二年と申しゝ九月にぞ、鷹の鳥をとるといふことは知りそめて、かりはじめ給ひし。五十五年と申しゝに、武内の大臣うせ給ひにき。年二百八十にぞなりたまひし。六代の御門の御後見をして、大臣の位にて二百四十四年ぞおはせし。六十二年と申しゝに、氷すうることは出できはじめて、今にいたるまで供御にそなふるなり。この御門御かたち世にすぐれて御心ばへめでたくおはしましき。

第十八　履中天皇　六年崩。年六十七。葬和泉國百舌鳥耳原陵。

次の御門履中天皇と申しき。仁徳天皇第一の御子。御母の皇后磐之媛なり。仁徳天皇三十一年に東宮にたちたまふ。御年五歳。庚子の年二月一日位に即き給ふ。御年六十二。世をたもち給ふ事六年。父みかどうせおはしまして後いまだ位に即き給はざりし程に、壁田宿禰のむす

め黒媛といひし人を后とせむとおぼして、御弟の住吉仲皇子をつかはしてその日おはすべきよし仰せられしに、この皇子、我が名をかくして東宮のおはするさまにもてなしてこの姫君に親しきさまになむなりにける。さてもちたりつる鈴を忘れて歸りにけり。その次の夜東宮姫君のもとへおはしたるに、居給へる傍に鈴のありければ、あやしくおぼして姫君に問ひ奉り給ひければ「これこそはよべもておはしたりし鈴よ」とのたまふに、東宮、われと名のりて皇子の近づき給ひにけるにこそとおぼして歸り給ひにけり。皇子この事を東宮聞き給ひぬらむ、我が身たひらかならむ事難かるべしとおもはして、東宮を傾け奉らむとはかりてつはものを起して宮を圍みしをり、大臣たち東宮にかゝる事侍ると告げ奉りしにいふかひなくゐひ給ひておどろき給はざりしかば、大臣たち、この東宮を馬にかきのせ奉りて逃侍りにき。皇子この事をゑらずして宮に火をつけて燒きてきっこれは津の國の難波の宮なり。東宮大和の國におはしてゐひさめ給ひて「此はいづれの所ぞ」と問ひ給ひしかば大臣たち事のありつるさまを申し給ひき。さて石上の宮に坐しつきたりしに又の御おとゝに、みづはの皇子と申しゝ人急ぎまゐり給へりしを、疑ひ給ひてあひ給はざりしかば、この皇子「われにおきては更におなじ心に侍らず」と申し給ひしかば「ゑからばかの住吉仲皇子を殺して後にきたるべしとたのまはせしかば、このみづはの皇子即ち難波にかへりて住吉仲皇子の近くつかひ給ひし人をかたらひて「わがいはむ事に從ひたらばわれ位をたもたむ時なんぢを大臣になさむ」とのたまひしかば「いかにもおほせに從ふべし」と申しゝかば、多く物どもをたま

ひて「汝からば汝が汝うを殺してわれにえさすべし」とのたまふに、そのことに汝たがひて汝うの皇子の側におはするをほこをもちて刺し殺してき。みづはの皇子、その人を相具して まゐりてこのよしを申したまふに、東宮ののたまはく、「この人はわがためにくらうあれども、おのれが汝うを殺しつればうるはしき心にあらず。されども大臣の位にのぼさせ給ひて今日大臣とさかもりせむ」とのたまはせて、顔隠るゝほどの大なる盃にて東宮まづ飲みたまふ。次にみづはの皇子飲み給ふ。次に大臣のむをりに太刀を抜きて首をきり給ひてき。さて次の年位に即き給ひてのちその黒姫をば后にたて奉らせ給ひしなり。五年九月に、御門淡路の國におはして狩したまひしにそらにかせのおとに似てこゑするものありしほどに、にはかにひとはしりまゐりてきさきうせたまひぬるよしまうしゝこそ、いとあへなくはべりしか。

第十九　反正天皇　六年崩。年六十。葬和泉國百舌鳥耳原北陵。

次の御門反正天皇と申しき。仁徳天皇第四の御子。履中天皇の御おとゝなり。御母皇后磐之媛なり。履中天皇の御世二年正月に東宮に立ちたまふ。御年五十。履中天皇の御子おはせしかどもこの御門を東宮には立て奉らせ給ひしなり。丙午の年正月二日位に即き給ふ、御年五十五。世を汝らせ給ふ事六年。御門御かたちめでたくおはしましき。御たけ九尺二寸五分、御歯のながさ一寸二分、上下とゝのほりて玉を貫きたるやうにおはしき。生れ給ひしとき、や がて御歯ひとつ骨のごとくにておひ給へりき。さてみづはの皇子とぞ申し侍りし。この御世

には雨風も時にあたがひ世安らかに民ゆたかなりき。位に即き給ひて次の年十月に都河内國柴垣の宮にうつりにき。

第二十　允恭天皇　四十二年崩。年八十。葬河内國惠我長野北原陵。

次の御門允恭天皇と申しき。仁徳天皇第五の御子。御母皇后磐之媛なり。壬子の年十二月に位に即き給ふ。御年三十九。世をさり給ふ事四十二年なり。兄の御門うせ給ひてのち大臣をはじめて「位にはこの君こそ即き給ふべけれ」とて、さるしの箱を奉りしかども、うけとり給はずして「我が身久しく病にさづめり。おほやけの位はおろかなる身にて保つべき事ならず」とのたまひしを、大臣以下猶進め奉りて「帝王の御位の空しくて久しかるべきにあらず」と、度々申しゝかども、猶聞しめさずして正月に兄御門うせおはしまして明くる年の十二月まで御門おはしまさでありしを、御乳母にておはしましゝ人の、水をとりて御うがひを奉り給ひしついでに「皇子はなど位に即きたまはで年月をばすぐさせ給ふにか侍る。大臣よりはじめて世の中のなげきに侍るめり。人々の申すに從ひて位に即かせ給へかし」と申したまふを、なほきこしめさでうち後むき給ひて、物のたまはざりしかば、この御うがひをもちてさりともとかく仰せらるゝ事もやと待ち居侍りしほどに、十二月の事にていと寒かりしに、久しくなりにしかば御うがひもこぼりて持ち給へる手もひえとほりて既にあにいり給へりしを、皇子見驚き給ひて、抱きたすけて「位を繼ぐ事はきはまりなき大事なれば、今までうけとらぬとにて侍れども、かくのたまひあひたる事なれば、あながちに遁れ侍るべきことにあ

らず」とおほせられしかば、一天下の人よろこびをなしき。かくて位には即き給ひしなり。三年と申し、正月に新羅へくすしをめしに遣したりしかば、八月に参りたりき。御門の御病をつくろはさせ給ひしに、そのゑるしありて御病いえさせおはしましにしかば、さまざまの祿どもなど賜はせて、かへしつかはしてき。七年と申し、十二月に御あそびありしに、御門琴をひき給ふを后聞きめで奉りて、まひてうち居給ひしをり「おはれひめごをまねらせばや」と申し給ひしを、御門「ひめごとは誰が事にか」と問ひ申させ給ひしを「御琴のめでたさにわれにもあらず申し給へりけることにや侍りけむ。さりながらも申しいだし給ひぬる事なれば隠し給ふべきならで、わがおとゝに侍るおと姫となむ申す。色かたちなむ世に又ならぶたぐひ侍らず。衣のうへひかりとほりかゞやき侍り。世の人はされば衣通姫とぞ申す」。御門これをきこしめして「それ奉り給へ」と、后を責め申させ給ひしかども、ともかくも御返事も申し給はざりしかば、御使をつかはして七度まで召し、かども参り給はざりしかば、又御使を替へて遣したりしに、その御使庭にひれふして七日までつやつやと物を食はざりしを、御使のいふかひなく死なむことのあさましさに、おと姫うちへ参り給ひにき。御門悦び給ふことかぎりなくて、時めき給ふさまならぶべき人なかりき。この事を姉后やすからぬとに云給ひしかば、宮をべちに造りてぞすゑ奉り給へりし。四十二年おはしまし、に御門うせ給ひにしを新羅より年ごとの事なれば船八十にさまざまの物を積みて樂人八十人相副へて奉りたりしに、御門うせ給ひにけりと聞きて泣き悲ぶこと限なし。難波の津より京までこの貢物をも

てつゞけ奉りおきてかへりにき。この後は僅に船二つなどをぞ奉りし。又をこたる年々も侍りき。

第廿一　安康天皇　三年崩。年五十六。葬大和國菅原伏見西陵。

次の御門安康天皇と申しき。允恭天皇の第二の御子。御母皇后忍坂大中姫なり。甲午の年十月に御兄の東宮を失ひ奉りて、十二月十四日に位には即きたまひしなり。御年五十六。世をさり給ふ事三年なり。明くる年の二月に御弟の雄略天皇の大泊瀬のみこと申しておはせし御めになし奉らむとて御をぢの大草香のみこと申し、人の御妹を奉り給へど、御門おはせ事ありて御使を遣したりしに、この皇子よろこびて「身に病をうけて久しくまかりなりぬ、世に侍ること今日明日といふ事を知らず。この人みなし子にて侍るを見おきがたくてよみぢも安くまかられざるべきに、そのかたちの見にくきをも嫌ひ給はず、かゝる仰せをかうぶるかたじけなき事なり。この志をあらはし奉らむ」とて、御使につけてめでたき寶をたてまつれるを、この御使これを見て恥ける心いできて、この寶物をかすめかくしつ。さてかへり參りて御門に申すやう「更に奉るべからず。おなじ皇子たちといふとも我れらが妹にていかでかおはせ奉るべき」と申すよしを僞り申しゝかば、大きにいかり給ひて軍をつかはして殺し給ひてき。そのめをとりてわが后と定給ひ、その妹を召して本意の如く大泊瀬のみこにあはせ給ひつ。三年と申す八月に御門樓にのぼり給ひてみきなど進めて遊び給ひて、后の宮に「何事か思す事はある」と申し給ひしかば、后の宮「御門の御いとほしみをかうぶれり。何事

をかは思ひ侍るべき」と申したまふ。御門おはせられていはく「我が身には恐るゝ事あり。このまゝ子の眉輪の王おとなしくなりて、わがその父を殺したりと云りおば、定めておしき心をおこしてむ」とのたまふを、この眉輪の王、樓の下に遊びありきて聞き給ひてけり。さて御門のをひて后の御膝を枕にして晝御殿ごもりたるを、傍なる太刀をとりて眉輪の王あやまち奉りて逃げて大臣の家におはしにき。御門の御おとゝの大泊瀬のみこ、この事を聞きて、軍をおこしてかの大臣の家をかこみて戰ひたまひき。眉輪王「もとよりわれ位に即かむとの心なし。唯父のかたきを報ゆるばかりなり」といひて、みづから首を斬りて死ぬ。この眉輪王七歳になむなり給ひし。

第廿二　雄略天皇　二十三年崩。年九十三。葬河内國高原驚陵。

次の御門雄略天皇と申しき。允恭天皇第五のみこ。御母皇后忍坂大中姫なり。丙申の年十一月十三日位に即き給ふ。御年七十。世を去り給ふ事廿三年なり。この御門生れ給ひし時宮の内なむ光りたりし。おとなになり給ひて後御心たけくして多くの人を殺したまひき。世の人大惡天皇と申しき。二年と申しゝ七月に御門愛せさせ給ひし女こと男におひにけり。みかどいかり給ひて男女二人ながら召しよせて、四のえだを木の上にはりつけて、火をつけて燒きころし給ひてき。四年二月と申しゝに御門この葛城山にて狩をし給ひしに、御門の御かたちにいさゝかも違はぬ人いで來れりき。御門「これは誰の人ぞ」とのたまはせしに、その人「まづ王の名をなのり給へ。その後まをさむ」と申しゝかば、御門なのり給ひき。その後「われは

一言主の神に侍る」と申して、相共に狩をして日暮れてかへり給ひしに、この一言主の神おくり奉りしかば、世の中の人「たゞ人にはおはせぬか」とぞ申しあひたりし。廿三年と申しゝ七月に浦島の子蓬萊へまかりにけりといふ事侍りしなり。皆人のしり給ひたる事なればこまかには申すべからず。

第廿三　清寧天皇　五年崩。年四十一。葬河内國坂門原陵。

次の御門清寧天皇と申しき。雄略天皇の第三の御子。御母皇太夫人葛城韓姫なり。雄略天皇の御世廿二年正月に東宮に立ちたまふ。御年三十五。世を去り給ふ事五年。御門生れ給ひて御ぐし白く長かりき。さて白髪皇子とは申しゝなり。民を愛し給ふ御心ありしを父御門御子たちの中に寵じ給ひて東宮に立て奉りしなり。庚申の年正月四日位に即きたまふ。御年三十七。世を去り給ふ事五年なり。この御門位を繼ぐべき人なき事を歎きてよろづの國々に使をつかはして王孫をもとめ給ひしに履中天皇のうまごといふ人二人を播磨國よりもとめ出して、兄をば東宮に立て、弟をば皇子と去給ひき。

第廿四　飯豊天皇　即位年崩。年四十五。葬大和國垣内丘陵。

次の御門飯豊天皇と申しき。これは女帝におはします。履中天皇のみこに押羽皇子と申して黒媛の御腹に王子おはしき。その御むすめなり。御母茅媛なり。甲子の年二月に位に即き給ふ。御年四十五。この御門の御弟二人かたみに位を讓りて繼ぎ給はざりしほどに、御妹を位に即け奉り給へりしなり。さて程なくその年のうち十一月にうせ給ひにしかば、この御門を

ば系圖などにも入れ奉らぬとかやぞうけたまはる。されども日本紀には入れ奉りて侍るなれば、次第に申し侍るなり。

第廿五　顯宗天皇　三年崩。年三十八。葬大和國磐杯丘陵。

次の御門顯宗天皇と申しき。飯豐天皇の同じ御腹のおとゝに坐します。乙丑の年正月一日位に即きたまふ。御年三十六。世を去り給ふ事三年。御父の押羽の皇子は安康天皇の御世三年と申しゝに安康の御弟の雄略天皇と申しゝ御門のいまだ皇子にておはしましゝに失はれ給ひしかば、その皇子二人丹波國へ逃げて坐したりしに、猶世の中をおそりたまひて、弟の君兄の君をすゝめ奉りて播磨國へおはして御名どもをかへて郡のつかさに仕へ給ひき。さて年月を過ぐし給ひし程に、おとゝの君兄の君に申し給はく「我等命を遁れて此所にて年を經にたり。今は名をあらはしてむ」とのたまひしに、兄の君、「去からば命をたもたむといと難かるべし」とのたまひしかば、又弟の君「われ等は殿中天皇の御孫なり。身をくるしめて人に仕へて、馬牛をかふ生けるかひなし。唯名を顯して命をうしなひてむ。いとよき事なり」とのたまひて、兄弟かたみに抱きつきて泣き給ふことかぎりなし。兄の君「さらば疾くわれ等が名をあらはし給ひてよ」とのたまひしかば、二人相具して郡のつかさの家におはしてあまだりのもとに居給へりしかば。呼びいれ奉りて盃の前にすゑて、酒のみ遊びなどしておのおの立ちて舞ふに、このおとゝの君我が御身の有樣をいひ續けて舞ひ給ふを、郡のつかさ聞きおどろきて、おりさわぎ拜し奉りて郡のうちの民どもを起して俄に宮づくりしてかりそめに

すゑ奉りて、御門に「この二人の王をむかへ奉り給へ」と申しゝかば、清寧天皇よろこびて即ちむかへとり給ひつ。「われ子なし位を繼ぎ給ふべし」とて兄の王を東宮に立て奉り給ひき。さて清寧天皇うせ給ひにしかば、東宮位に即き給ふべかりしを、御弟にゆづり給ひしかどもあるべき事にあらずと申し給へりき。かくてかたみに位につき給はざりしかば、御妹の飯豊天皇をつけ奉り給ひしほどに、その年のうちにうせ給ひにしかば、猶弟の王東宮の御すゝめに從ひて位に即きたまひき。そのとし三月上巳の日始めて曲水宴を行はせ給ひし。二年八月と申しゝに御門御兄の東宮に申し給はく「わが父のみこ罪なくして雄畧天皇にうしなはれ給へりき。うらみの心今にやむとなし。われかの御門の陵をこぼちてその骨をくだきて捨てむ」とのたまひしを、東宮申し給はく「雄畧天皇は御門におはします。我が父は御門の御子なりといへども、位にのぼり給はざりき。また御門清寧天皇の御恵をかうぶり給へり。雄畧天皇は清寧天皇の御父におはせずや。今位にのぼりたまひいかでかその志を忘れたまはむ。陵を破りたまはむ事あるべからず」と申し給ひしかば、その言にしたがひ給ひき。この御時世治り民やすらかに侍りき。

第廿六　仁賢天皇　十一年崩。年五十。葬河内國埴生坂本陵。

次の御門仁賢天皇と申しき。顯宗天皇のひとつ御腹の兄なり。清寧天皇の御世三年四月に春宮に立ちたまふ。戊辰の年正月五日位に即かせたまふ。御年四十。世を去りたまふ事十一年なり。この御門の御ありさま顯宗天皇の御事の中にこまかに申し侍りぬ。御心ざまめでたく

おはしましき。

第廿七　武烈天皇　八年崩。年十八。葬大和國傍丘磐杯丘北陵。

次の御門武烈天皇と申しき。仁賢天皇の御子。御母皇后春日の大娘なり。仁賢天皇七年正月に東宮に立ちたまふ。御年六歳。戊寅の年十二月に位に即き給ふ。御年十歳。世を去り給ふ事八年。そのほど人を殺す事朝夕のえわざとしたまふ。孕める人の腹をさきわりてその子を見たまひ、人の爪をぬきていもをほらせ、人を木にのぼせて落してころし、或時は人を水にいれてはこにて刺し殺し、或時は女をはだかになして板の上にすゑて、馬のゆゝしきわざを見せさせ給ふに、そのかたに入りたる女は板をうるほすを、御門これをにくみてやがて殺し給ひき。さなきをば召して宮づかへすべきよしの仰せありき。かやうのわざましく心うき事多かりし御世なり。御年十八にてうせ給ひにき。御子もおはせず。

第廿八　繼體天皇　二十五年崩。年八十二。葬摂津國三島藍野陵。

次の御門繼體天皇と申しき。應神天皇第八の御子隼總別皇子と申しき。その御子を大迹王と申しき。その御子を私斐王と申しき。又その御子に彦主人の王と申しゝ王の子にて、この御門はおはしましゝなり。御母垂仁天皇の七世の御孫振姫なり。丁亥の年二月に位に即き給ふ。御年五十八。世を去り給ふ事二十五年。武烈天皇うせ給ひてのち位を繼ぎ給ふべき人なきことを、大臣をはじめて一天下の人なげきて、仲哀天皇の五代の御孫丹波國におはすときこゆ。かの王を迎へ奉りて位に即け奉らむとて、つかさつかさ御迎へにまゐりしを、遙に見

やりておぢおそれ色をうしなひて山中にかくれ給ひてそのゆきがたを知らずなりにき。かくてあくる年の正月に越前國に應神天皇の五代の御孫の王おはすといふ事聞えて、又つかさつかさ御迎へに參りたりしに、この王驚く御氣色なくして、あぐらに尻をかけて御前に候ふ人々かしこまり敬ひ奉る事おほやけの如くなりき。この御迎へにまゐりたる人々いよいよかしこまりて事のよしを申しき。王この事をうたがひ給ひて空しく二日二夜をすぐさせ給ひき。御迎への人々重ねて大臣の迎へ奉るよし、事のありさまを申し侍りし時に京へ入り給ひしなり。さりながらも位をうけとり給はざりしかば、大臣をはじめてあながちに勸め奉りしかば、遂に位に即き給ひしなり。この御時、都うつり三度ありき。

第廿九　安閑天皇　二年崩。年七十。
葬河内國古市高屋丘陵。

次の御門安閑天皇と申しき。繼體天皇の御子。御母妃尾張目子媛。癸亞の年二月に位に即き給ふ。御年六十八。世を去り給ふ事二年。御位に即きたまひて明くる年正月に都大和の高市郡にうつりにき。

第　卅　宣化天皇　四年崩。年七十二。
葬大和國身狹桃花鳥坂上陵。

次の御門宣化天皇と申しき。安閑天皇のひとつはらの御弟におはします。乙卯の年十二月に位に即き給ふ。御年六十九。世を去り給ふ事四年。位に即き給ひて三年と申しにぞ、天台大師生れ給ひし時に侍りしと、後にうけたまはりし。

第卅一　欽明天皇　二十二年崩。年八十。
葬大和國檜隈坂合陵。

次の御門欽明天皇と申しき。安閑天皇の御兄弟。御母皇后手白香なり。癸亥の年くらゐにつき給ふ。世をおさめたまふこと十三年。十三年と申しゝに百濟國より佛經わたりたまへりき。みかどよろこび給ひてこれを崇め給ひしに、世の中の心ちおこりて人おほくわづらひき。尾興の大連といひし人「佛法を崇むるゆゑにこの病起るなるべし」と申して寺を燒きうしなひしかば、空に雲なくして雨ふり、內裏やけ、かの大連うせにき。この後さまざまの佛經猶渡りたまひき。繼體天皇の御世にもろこしより人わたりて佛を持したてまつりて崇め行ひしかども、その時の人唐土の神とあづけて佛とも知り奉らず、又世の中にもひろまり給はずなりにき。この御世よりぞ、世の人佛法といふ事は知りそめ侍りし。三十三年と申しゝに聖德太子はうまれ給ひき。御父の用明天皇はこの御門の第四の御子と申しゝなり。太子の御母の御夢に金の色したる僧の「われ世をすくふ願あり。しばらく君が腹にやどらむ」との給ひしかば、御母「かくのたまふは誰にかおはする」と申し給ひき。その僧「われは救世菩薩なり。家はこれより西の方にあり」とのたまひき。御母申したまはく「我が身はけがらはし。いかでかやどりたまはむ」とのたまふに、この僧「けがらはしきを厭はず」とのたまひしに、しからばとゆるし奉り給ひしに從ひて母の御口におどり入り給ふとおぼして、驚き給ひたりしに御喉に物ある心ちし給ひて孕み給へりしなり。八月と申しゝに腹の內にてもののたまふ聞え侍りき。このころほひに宇佐の宮は顯れ始めおはしましき。よしなき事に侍れどもこの御時とぞおぼえ侍る、野干をきつねと申し侍りしは。事のおこりは、美濃國に侍りし人、顏よき妻を

もとむとてものへまかりしに、野中に女にあひ侍りにき。この男かたらひよりて「我が妻になりなむや」といひき。この女「いかにものたまはむに從ふべし」といひしかば、相具して家にかへりてすむ程に、をのこ子一人うみてき。かくて年月をすぐすに家にある犬十二月十五日に子をうみてき。その犬の子すこしおとなびてこのめの女を見る度毎にほえしかば、かのめの女いみじくおぢて、男に「これうち殺してよ」といひしかども、をうとの男聞かざりき。このめの女米しらぐる女どもに物くはせむとて、からうすのやに入りにき。その時この犬走りきてめの女を食はむとす。このめの女懼き恐れてえたへずして野干になりてまがきの上にのぼりてをり。男これを見てあさましと思ひながらいはく「汝と我とが中に子既にいできにたり。われ汝をわするべからず。常にきて寢よ」といひしかば、その後きたりて寢侍りき。さてきつねとは申しそめしなり。そのめは桃の花染の裳をなむ著て侍りし。その産みたりし子をばきつとぞ申し、。力つよくして走ること飛ぶ鳥の如く侍りき。

水鏡巻中

卅二　敏達天皇
卅三　用明天皇
卅四　崇峻天皇
卅五　推古天皇
卅六　舒明天皇
卅七　皇極天皇

廿八　孝徳天皇　大化五　白雉五
四十　天智天皇
四十二　持統天皇　朱鳥八　大寶二
四十四　元明天皇　和銅七
四十六　聖武天皇　神龜五　天平廿

廿九　齊明天皇
四十一　天武天皇　朱雀一　朱鳥一　白鳳十三
四十三　文武天皇　大寶三　慶雲四
四十五　元正天皇　靈龜二　養老七　天平勝寶八
四十七　孝謙天皇　天平寶字二

第廿二　敏達天皇　十四年崩。年二十四。
葬河内國長嶺中屋陵。

次の御門敏達天皇と申しき。欽明天皇の第二の御子。御母宣化天皇の御女石姫の皇后なり。欽明天皇の御世十五年甲戌正月に東宮に立ち給ふ。壬辰の年四月三日位に即き給ふ。世を去り給ふ事十四年なり。今年正月一日ぞ聖徳太子は生れ給ひし。父の用明天皇は御門の御弟にて、いまだ皇子と申しゝなり。御母宮の内を遊びありかせ給ひしに既のまへにて御心にいさゝかも惱えさせ給ふ事もなくて俄に生れさせ給ひしなり。この月までは十二ヶ月にぞおたらせ給ひし。人々急きいだきとり奉りてき。かくて赤く黄なるひかり西の方よりさして御殿の内をてらしき。御門このよしを聞し召して行幸なりて事のありさまを問ひ申し給ふに、又ありつるやうに宮の内光さしてかゞやけり。みかどおさましと思して「たゞ人には坐すまじき人なり」とぞ人々にはのたまはせし。四月になりにしかば、物などいとよくのたまひき。今年の五月とぞおぼえ侍る。高麗より烏の羽にものを書きて奉りたりしを、いかにして讀むべしとも覺えぬ事にて侍りしを、なにがしの王とかや申しゝ人のこしきの内におきてうつし

とりて讀みたりしこそいみじきことにて侍りしか。御門めでほめ給ひてその王は御前近く常に侍ふべきよしなど仰せられき。二年と申す二月十五日聖德太子東に向ひて掌をあはせて「南無佛」とのたまひき。御年二つにこそはなり給ひしか。三年三月三日父の皇子聖德太子を愛し奉りて抱き給へりしにいみじくかうばしくおはしき。その後多くの月日をすぐるまでそのうつり香失せ給はざりしかば宮のうちの女房たち、われもわれもと爭ひいだき奉り侍りき。六年十月と申しゝに、百濟國より經論又あまた渡り給へりしを、太子「これを見侍らむ」と御門に申し給ひしかば、御門その故を問ひ給ひ、太子申し給はく「昔もろこしの衡山に侍りしに佛敎は見給へりき。今その經論を奉りて侍るなれば見給へらむと思ひ給ふるなり」と申し給ひしかば、御門あさましとおぼしめして「汝は六歲になりたまふ。いつのほどにもろこしにありしとはのたまふぞ」と仰事ありしかば、太子「前の世の事のおぼえ侍るを申すなり」と申し給ひし時に、御門をはじめ奉りて聞く人手をうちあざみ申しき。法華經はことしわたり給へりけるとぞうけたまはりし。七年と申しゝ二月に、太子よろづの經論を披き見給ひて「六齋日は梵天帝釋おり下り給ひて國の政を見給ふ日なり。ものゝ命を殺す事をとゞめたまへ」と申し給ひしかば、宣旨をくだし給ひき。今年太子七歲にぞなり給ひし。八年と申しゝ十月に新羅より釋迦佛をわたし奉りしかば御門悅び給ひて供養したてまつりき。山階寺の東金堂におはしますはこの佛あり。十二年と申しゝ七月に、百濟國より日羅といふ人來れりき。太子あひ給ひて物がたりをし給ひしほどに、日羅身より光をはなちて太子を拜み奉

ると て「敬禮救世觀世音傳燈東方栴散王」と申しき。太子又眉間より光をはなち給ひき。かくて人々にのたまひき「われ昔もろこしにありし時、日羅は弟子にてありしものなり。常に日を拜み奉りしによりてかく身より光をいだすなり。のちの世に必ず天にうまるべし」とのたまひき。十三年と申しゝ九月に、百濟國より石にて造りたる彌勒をわたし奉りたりしを、蘇我馬子の大臣、堂をつくりてすゑ奉りき。今元興寺におはします佛なり。十四年と申しゝ三月に、守屋の大臣御門に申さく「先帝の御時より今にいたるまで世の中の病いまだをこたらず。蘇我の大臣佛法を行ふゆゑなるべし」と申しゝかば、佛法を失ふべきよし宣旨下りにき。守屋みづから寺にゆきむかひて堂を切りたふし、佛像を破りうしなひ火をつけて燒き、尼の着る物をはぎ、ともをもちて打ちし程に、空に雲なくして大きに雨ふり風ふきゝ。御門も守屋も忽に瘡をわづらひ天下に瘡おこりて命をうしなふもの數を知らず。その瘡をやむ人身をやき切るが如くになむおぼえける。佛像を燒きし罪によりてこのやまうおこれりしなり。六月に蘇我の大臣病久しくいえず。「猶三寶をあふぎ奉らむ」と申しき。御門「ゆからば汝ひとりおこなふべし」とのたまはせしかば喜びてまた堂塔をつくりき。佛法はこれよりやうやう弘まりはじまりしなり。かくて八月十五日に御門はうせさせ給ひにき。この御時とぞおぼえ侍る、尾張の國に田を作るものありき。夏になりて田に水まかせむとせし程に、俄に神なり雨降りしかば、木の下にたち入りてありし程に、その前にいかづち落ちにき。その形幼き子のごとし。この男すきをもちて打たむとせしかば、いかづち「われを殺すことなかれ。必

ずこの恩を報いむ」といひき。をのこのいはく「何事にて恩を報ゆべきぞ」といひき。いかづち答へていはく「汝に子を設けさせて、かれにて恩をむくいむ。われにくすの木の船を造りて水を入れて竹の葉をうかべて速に與へよ」といひしかば、このをのこ、いかづちのいふが如くにして與へつ。いかづちこれをえて、即ち空へのぼりにき。その後をのこ子を設けてき。生れし時にくちなはその首をまとひて、尾頭うなじの方にさがれりき。力世にすぐれたり。年十餘になりて方八尺の石をやすく投げき。このわらは元興寺の僧につかへしほどに、その寺のかねつき堂に鬼ありて夜ごとに鐘つく人を食ひ殺すを、この童「鬼の人を殺す事をとゞめてむ」といひしかば、寺の僧ども悦びて速に留むべきよしをすゝめき。その夜になりて、童鐘撞堂にのぼりて鐘をうつ程に、例の如く鬼きたれり。童鬼の髪にとりつきぬ。鬼は外へひき出さむとし、童は内へひき入れむとする程に夜たゞ明けに明けなむとす。鬼去わびてかうぎはを放ち落して逃げさりぬ。夜明けて血をたづねてもとめ侍りしかば、その寺の傍なる塚のもとにてなむ血とまり侍りにし。昔心おしかりし人を埋めりし所なり。その人鬼になりたりけるとぞ人々申しあひたりし。その後鬼人を殺す事侍らざりき。鬼の髪は寶藏にをさめていまだ侍るめり。この童をとこになりてなはこの寺に侍りき。寺の田をつくりて水をまかせむとせしに、人々さまたげて水を入れさせざりしかば、十餘人ばかりして擔ひつべき程のすきがらを作りてみな口にたてたりしを、人々ぬきて捨てたりしかば、この男又五百人してひく石をとりてこと人の田のみな口におきて水を寺田に入れしかば、人々おぢ恐れてその

みな口を塞がずなりにき。かくて寺田やくるとなかりしかば、寺の僧、この男法師になる事をゆるしてき。世の人道場法師とぞ申しゝ。

第卅三　用明天皇　二年崩。葬大和國磐余池上陵。

次の御門用明天皇と申しき。欽明天皇の第四の御子。御母大臣蘇我宿禰稻目の女妃堅鹽姫。乙巳の年九月五日位に即き給ふ。世を去り給ふ事二年。位に即き給ひて明くる年聖徳太子父みかどを相し奉りて「御命ことのほかに短く見えさせ給へり。政事をよくすなはに去給ふべし」と申し給ひき。かくて次の年の四月に、父御門御心ち例ならずおはせしに、太子夜晝附きそひ奉りて聲だえもせず祈り奉り給ひき。御門「大臣以下三寶を崇め奉らむ。いかゞあるべき」と仰せられおはせ給ひしに、守屋は「あるべき事にも侍らず。我が國の神を背きていかでかこと國の神をば崇むべき」と申しき。蘇我の大臣は「唯仰せ事に去たがひて崇め奉らむ」と申しき。御門蘇我の大臣のとに從ひ給ひて法師を內裏へ召しいれられしかば、太子大きによろこび給ひて、蘇我の大臣の手をとり涙をながし「三寶の妙理を人去ることなくしてみだりがはしく用ゐ奉らざるに、大臣佛法を信じ奉るいとありとかしこき事なり」とのたまひしを、守屋大きに怒りて腹たちにき。太子人々にのたまはく「守屋因果を知らずして今ほろびなむとす。悲しきことなり」とのたまひしを、人ありて守屋に告げきかせしかば、守屋いとゞいかりをなしてつはものをあつめさまざまのまじわざどもをしき。この事聞えて太子の舍人をつかはして守屋にかたよれる人々を殺させ給ひしほどに、四月九日御門うせさせ給ひにき。七

月になりて、太子かの大臣もろともに軍を起して守屋と戦ひたまふ。守屋が方のいくさ敗れ去らざりしかば、太子の御方の軍おぢおそれて三度までも退きかへりき。その時に太子大誓願をおこし、ぬるでの木をとりて四天王をきざみ奉りて頂の上におき奉りて「今はなつ所の矢は四天王の放ち給ふところなり」とのたまはせて、舎人をして射させしめ給ひしかば、その矢守屋が胸にあたりて立所に命を失ひつ。秦河勝をして首を斬らしめたまふ。守屋が妹は蘇我の大臣のめにて侍りしかば、その妻の謀にて守屋はうちとられぬるなりとぞ、その時の人は申しあへりし。さてこの守屋を射殺して侍りしとねりをば、赤檮とぞ申し侍りし。水田一萬頃をなむたまはせし。かくて今年天王寺をば造りはじめられしなり。

第卅四　崇峻天皇　五年崩。年七十二。葬大和國倉橋山岡陵。

次の御門崇峻天皇と申しき。欽明天皇の第十二の御子。御母稻目大臣の女小姉君姫なり。丁未の年八月二日位に即き給ふ。御年六十七。世を去り給ふ事五年。位に即き給ひて明くる年の冬、御門、聖徳太子を呼び奉りて「汝よく人を相す。われを相し給へ」とのたまひしかば、太子「めでたくおはします。たゞし横ざまに御命の危みなむ見えさせおはします。心去らざらむ人を宮の中へ入れさせ給ふまじきなり」と申し給ひしかば、御門「いかなる所を見てのたまふぞ」とおほせられしに、太子「赤き筋御眼をつらぬけり。これは傷害の相なり」と申し給ひしかば、御門御鏡にて見給ひしに、申し給ふ如くにおはしましゝかば大に懼きおそりおはしましき。かくて太子人々に「御門の御相は前の世の御事なればかはるべき御事にあらず」

とぞのたまひし。三年と申し、十一月に太子御年十九にて元服ありたまひき。五年と申し、二月に御門忍びやかに太子にのたまはく「蘇我の大臣、内にはわたくしをはしきまゝにし、外にはいつはりをかざり、佛法を崇むるやうなれども、心正しからず。いかゞすべき」とのたまひしかば、太子「唯この事をおのび給ふべし」と申し給ひしほどに、十月に人のおのしゝを奉りたりしを御門御らんじて「いつか猪の首を斬るが如くに、わがきらふ所の人をたちうしなふべき」とのたまはせしかば、太子大におどろき給ひて「世の中の大事この御詞によりてぞ出でくべき」とて俄に内宴をおこなひて、人々に祿賜はせなどして「今日御門ののたまはせつる事ゆめゆめもらすな」とかたらひ給ひしを、誰かいひけむ、蘇我の大臣に「御門かゝる事をなむのたまひつる」と語りければわが身をのがれむとはかりて東漢駒といふ人をかたらひて十一月三日御門をうしなひ奉りき。宮の中の人おどろきさわぎしを蘇我の大臣その人を捕へさせしめしかば、人々この大臣のおわざにこそと知りて、とかくものいふ人なかりき。大臣駒を賞してさまざまの物を賜はせて我が家の中に、女房などの中にも憚りなく出で入り心に任せてせさせし程に、大臣のむすめを忍びてをかしき。大臣この事をきゝて大きにいかりて、髪をとりて木にかけて自らこれを射き。「汝おろかなる心をもちて御門をうしなひ奉る」といひて矢を放ちしかば、駒叫びて「われその時に大臣のみをおもれりき。御門といふことを知り奉らず」といひしかば、大臣この時いよいよ怒りて、劍をとりて腹をさき頭を斬りてき。大臣の心おしきことといよいよ世間にひろまり

しなり。

第卅五　推古天皇　三十六年崩。年七十三。葬磯長山田陵。

次の御門推古天皇と申しき。欽明天皇の御女。御母稲目大臣の女蘇我小姉君姫なり。壬子の年十二月八日位に即き給ふ。御年三十八。世を玄ろしめす事三十六年。位に即き給ひて明くる年の四月に御門「我が身は女人なり。心にものをさとらず。世の政事は聖徳太子に玄給へ」と申し給ひしかば、世の人よろこびをなしてき。太子はこの時に、太子には立ち給ひて世の政事を玄給ひしなり。そのさきはたゞ皇子と申しゝかども、今かたり申す事なればさきざきも太子とは申し侍りつるなり。以下十三行女ら給ひき底流れ本無御年廿二になむなり給ひし。今年四天王寺をば難波荒陵には移し給ひしなり。もとはたまつくりの岸にたて給へりき。三年と申しゝ春、沉はこの國に始めて浪につきて來れりしなり。土佐國の南の海に、夜ごとに大に光る物ありき。その聲いかづちの如くにして、卅日を經て、四月に淡路の島の南の岸によりきたれり。大さ人の抱くほどにて、長さ八尺餘ばかりなむ侍りし。その香しき事譬へむかたなくめでたし。これを御門に奉りき。島人何とも玄らず、多く薪になむ玄ける。これを太子見給ひて、沉水香と申すものなり。この木を栴檀香といふ。南天竺の南の海の岸におひたり。この木のひやゝかなるによりて、夏になりぬれば、もろもろの蚘まとひつけり。その時に人かの所へ行きむかひて、その木に矢をいたてゝ、冬になりて蚘の穴にこもりて後、射たてし矢を玄るしにてこれをとるなり。その實は鷄舌香、その花は丁子、その油は薫陸、久しくなりたるを沉水香といふ

ふ。久しからぬを淺香といふ。御門佛法を崇め給ふがゆゑに、釋梵威德のうかべおくり給ふなるべし」と申し給ひき。御門この木にて觀音を作りて、ひそ寺になむ置き奉り給ひし、時々光を放ちたまひき。六年と申しゝ四月に、太子よき馬を求めしめ給ひしに、甲斐の國より黑き馬の四つの足白きを奉りき。太子多くの馬の中よりこれを選び出して、九月にこの馬に乘り給ひて雲の中に入りて東をさしておはしき。麻呂といふ人ひとりぞ御馬の右の方にとりつきて雲に入りにしかば見る人おどろきあざみ侍りしほどに、三日ありて歸り給ひて「われこの馬に乘りて富士のだけに至りて信濃の國へつたはりて歸りきたれり」とのたまひき。十一年と申しゝ十一月に太子のもち給へりし佛像を「この佛誰かあがめ奉るべき」とのたまひしに、秦の河勝進みいでゝ申しうけ侍りしかば、たまはせたりしを、はちをか寺を造りてすゑ奉りき。そのはちをか寺と申すは今のうづまさなり。佛は彌勒とぞ承り侍りし。十四年と申しゝ七月に、御門「わが前にて勝鬘經講じたまへ」と申したまひしかば、太子師子のゆかにのぼりて三日講じ給ひき。そのありさま僧の如くになむおはせし。めでたかりし事なり。翁その庭に聽聞して侍りき。はての夜とぞ覺え侍る。はちすの花の長さ二三尺ばかりなる空よりふりたりし、おさましかりし事ぞかし。御門、その所に寺を建て給ひき。今の橘寺これなり。十五年と申しゝ五月に、御門に申し給はく「昔もち奉りし經、もろこしの衡山と申す所におはします。とり寄せ奉りてこの渡れる經のひが事の侍るに見合せむ」と申し給ひて、小野の妹子を七月にもろこしへつかはしき。明くる年の四月に妹子一卷に玄たる法華經をもて

來れりき。九月に太子いかるがの宮の夢殿に入り給ひて七日七夜出で給はず。八日といふあしたに御枕上に一卷の經あり。太子のたまはく「この經なむ我が前の世に持し奉りし經にておはします。妹子がもて來れるは我が弟子の經なり。この經に三十四のもじあり。世の中にひろまる經はこの文字なし」となむのたまひし。廿九年二月廿二日太子うせ給ひにき。御年四十九なり。御門をはじめ奉りて一天下の人父母を失ひたるがごとくにかなしびをなしき。大かた太子の御事萬が一を申し侍り。事新しくも申し續くべくもなけれども、めでたき事は皆人ぢり給へれどもくりかへし申さるゝなり。太子世に出で給はざらましかば、暗きよりくらきに入りて永く佛法の名字を聞かぬ身にてぞあらまし。天竺よりもろこしに佛法傳りて三百年と申しゝに百濟國につたはりて百年ありてぞこの國へ渡り給へりし。その時太子の御力にあらざりせば守屋が邪見にぞこの國の人は去たがひ侍らまし。三十四年と申す六月に大雪ふりて侍りき。

第廿六　舒明天皇　十三年崩。葬押坂内陵。

次の御門舒明天皇と申しき。敏達天皇の御子に彦人大兄と申しゝ皇子の御子なり。御母敏達天皇の御女糠手姫なり。つちのとのうしの年正月四日位に即き給ふ。御年四十七。世を去りたまふ事十三年なり。三年と申しゝにぞ玄弉三藏もろこしより天竺へわたり給ふとうけたまはり侍りし。

第廿七　皇極天皇　治三年。

次の御門皇極天皇と申しき。敏達天皇のひこにおはします。舒明天皇の后にておはしき。御母欽明天皇の御孫に、吉備姫と申し侍りしなり。壬寅の年正月十五日位に即き給ふ。世を去り給ふ事三年。女帝におはします。七月に世の中ひでりしてさまざまの御祈侍りしかども、そのしるし更になし。大臣蝦夷と申しゝは蘇我馬子の大臣の子なり。この事を歎きてみづから香爐をとりて祈りこひしかどもなほしるしなかりき。八月になりて御門河上に行幸ありて、四方を拝み、天に仰ぎて祈りこひ給ひしかば、忽に神なり雨くだりて五日をへき。世の中皆直り百穀ゆたかなりき。いみじく侍りし事なり。十一月十一日蘇我の蝦夷の大臣の子入鹿その罪といふ事もなかりしに、聖徳太子の御子孫廿三人をうしなひ奉りてき。軍を起していかるがの宮を圍みて攻め奉りしに、太子の御子に大兄王と申しゝ、けものゝ骨をとりて御殿籠りし所におきて、われは逃げて生駒山に入り給へりしに、入鹿が軍火をはなちていかるがの宮を焼きて灰の中を見しに物の骨ありき。これを大兄王のなりと思ひて歸りにき。この大兄王六日といひしにこの所に歸りきたり給ひて、香爐をさゝげて誓ひ給ひしかば、煙雲にのぼりて後仙人天人のかたちあらはれて西にむかひて飛び去りたまひにき。光をはなち空に樂の聲聞えしかば、これを見聞きし人は遥に禮拜をなしき。入鹿が父の大臣これを聞きて「罪なくして太子の御後をうしなひ奉れり。われら久しく世にあるべからず」と驚き歎き侍りき。三年と申しゝ三月に天智天皇の中大兄皇子と申しゝ、法興寺にて鞠をあそばし給ひし程に御沓の鞠につきて落ちて侍りしを、鎌足のとりて奉り給へりしを皇子うれしきことに

おぼして、その時より相互におぼす事露へだてなく聞え合せ奉り給ひて、その御末の今日までも御門の御後見は玄給ふぞかし。よき事もあしき事もはかなき程の事ゆゑに出でくることなり。十一月に大臣蝦夷その子の入鹿いかめしき家を造りて内裏の如くに宮門といひて、我が子どもをば皆王子とおづけき。五十人のつはもの身に玄たがへて出で入りに聊かも立ちはなれざりき。かくてひとへに世の政事をとれるが如くなりしかば、御門入鹿をうしなはむの御心ありき。また天智天皇のいまだ皇子と申しゝもおなじくこの事を御心のうちにおぼしたちしかども、思ひのまゝならざらむ事をおぼし恐れし程に、鎌足皇子をすゝめ奉りて蘇我宿禰山田石川麿が女をかりそめにあはせ奉りて、この事をはかり給ひき。鎌足願をおこして丈六の釋迦佛の像をあらはし奉りき。今の山階寺の金堂におはしますはこの御佛なり。六月に御門大極殿に出で給ひて入鹿を召しき。入鹿めしにしたがひて參りぬ。人の心をうたがひてよるひる太刀を佩きてなむ侍りしを、鎌足何ともなきさまにたばぶれにいひなし給ひて太刀をとかせて座にする玄給ひつ。その後十二門をさしかためて、山田石川麿にて新羅高麗百濟この三韓の表を讀ませしめ給ひしに、石川麿この事を謀りたまふを心の中におぢ恐れ思ひけるにや、身ふるひ聲わなゝきて、えよまずなりにければ、入鹿、「いかなればかくおぢ恐れ侍るぞ」と問ひしかば「御門に近づき奉ること恐れ思ひ侍るなり」と答ふ。かくて入鹿が首を斬るべきにてあるに、その事を承りたる人二人ながらおぢ恐れ汗を流してよらざりしかば、皇子その一人を相具したまひて、入鹿が前にすゝみよりてその人をして肩を斬らせ

しめ給ひつ。入鹿おどろき立ちさわぎしに又足を斬りつ。入鹿御門に申していはく「われ何事の罪といふ事を知り侍らず。その事をうけたまはらむ」と申しき。御門大きにおどろき給ひて「いかなる事ぞ」と問ひ給ひしかば、王子、「入鹿は多くの王子をうしなひ、御門の御位を傾け奉らむとす」と申し給ひしかば、御門立ちて内へ入り給ひにき。このをり遂に入鹿が首をきりてき。その後入鹿がかばねを父の大臣にたまはせしかば、大臣大にいかりて、みづから命をほろぼして大鬼道に堕ちて、蘇我の一門時のほどに亡びうせにき。この御時とぞおぼえ侍る、但馬の國に人ありき。幼き女子をもちたりき。その子庭にはひありきし程に俄に鷲いできたりて子をとりて東をさして飛びさりぬ。父母泣きかなしめども行き方をしらず。その後八年といひしにその子の父事のゆくりありて丹後の國へゆきてやどれる家にめのわらはあり、井にゆきて水を汲む。このやどれる男井のもとにて足を洗ひて立てるほどに、その村のめのわらはども來り集まりて水を汲むとておりつるめの童の汲みたりつる水を奪ひとりてければとられじとをしむ程にこのめの童べども「おのれは鷲のくひのこしぞかし。いかでわれ等をばいるがせにはいふべきぞ」とてうちしかば、めのわらは泣きてこの宿りたりつる家にかへりぬ。男家ぬしに「このめの童を鷲のくひのこしと申しあひたりつるはいかなる事ぞ」と問へば家あるじ、「その年のその月日、我木にのぼりて侍りしに、鷲幼き子をとりて西の方より來りて、巣におとしいれて、鷲の子にかはむとせしほどに、この子なく事かぎりなし。鷲の子その聲におどろき恐れて食はざりき。我ちごのなく聲をきゝて巣のもとによ

りてとりおろし侍りし子なり。さてかく申しあひたるにこそ」といひしを聞くに、我が子の鷲にとられにし月日なり。この事を聞くにあさましく覚えて、泣きかなしびて親子といふ事知りにき。人の命のかぎりある事はあさましく侍る事なり。

第卅八　孝徳天皇　白雉五年十月十日崩。年五十九。葬河内國大坂磯長陵。

次の御門孝徳天皇と申しき。皇極天皇の御弟。御母欽明天皇の御孫吉備姫なり。乙巳の歳六月十四日位に即きたまふ。世を去り給ふ事十年なり。皇極天皇は「位をわが御子天智天皇のいまだ皇子と聞えしに、譲り奉らむ」とのたまひしを、皇子「あるべきことに侍らず」と申し給ひて、鎌足に「御門かゝる事をなむのたまはせつる」といひあはせ給ひしに、鎌足「この御門の御子、御をぢの皇子を越え奉りて、いかでかその先に位をつぎ給ふべき。世の人のうけ申さむこともありがたく侍るべし」と申し給ひしかば、みこ我が御心にかなひておぼしければあながちに申し返し給ひしかば、この御門にゆづり奉り給ひしを、これもまた度々返し奉り給ひき。又天智天皇のこのかみの御子に譲り奉られしに、御子あるべき事に侍らずとて、出家して吉野山へ入り給ひにき。二人の御子あながちにかく返し奉り給ひしかば、遂にこの御門は位に即き給ひしなり。かくて鎌足、大臣の位になずらへて内臣となむ始めて申し侍りし。大化二年に道登といひしもの、宇治橋は渡しはじめたりしなり。この御時に元興寺に智光頼光といふ二人の僧ありき。幼くより同じ所にて學問をす。頼光身にするつとめもなく又人にあひて物などいふ事もなし。唯徒にして月日をすぐす。智光わやしみをなして「いか

に徒にてはおはするぞ」と問へども、ふつといらふる事もなし。かくて多くの年を經て頼光うせにき。智光歎きて、年來の友なりき、いかなる所にか生れぬらむ、おこなひする事もなく物をだにはかばかしくいはざりつれば、後世のありさまいと覺束なしと思ひて、二三月のほど「頼光があり所知らせ給へ」と、佛に祈り申しゝほどに、智光ゆめに、頼光が居たる所へ行きて見れば、たとへむ方なくめでたし。智光「これはいかなる所ぞ」と問へば、頼光「これは極樂なり。汝おながちに祈りつればわれ生れたる所を見するなり。汝があるべき所にあらず。疾くかへりね」といふに智光「われ淨土をねがふ身なり。いかでかかへらむ」といふ。頼光「汝させるおこなひをせず。云ばしもいかでかこの所に留らむ」といふ。智光「汝世にありし時せる行も云給はざりき。いかにしてこの所に生れ給へるぞ」といふ。頼光「いかでか知り給はむ。むかし經論を見給ひしに、極樂にうまれむことといとかたくおぼえしかば、偏に世の事をすて物いふ事をとゞめて、心の中に彌陀の相好淨土の莊嚴を觀じて、多くの年をつもりて、わづかに生れて侍るなり。汝心みだれ善根すくなくて淨土へ參るべき程にいまだいたらず」と云ふを智光聞きて泣きかなしびて「いかにしてか決定して往生すべき」と問ひしかば頼光「佛に問ひ奉れ」とて智光を相具して佛の御前に參りぬ。智光佛を禮拜し奉りて「いかなる事をしてかこの所に參るべき」と申しき。佛智光に告げてのたまはく「佛の相好淨土の莊嚴を觀ずべし」と。智光「この土の莊嚴心も眼もおよばず。凡夫はいかでかこれを觀ずべき」と申しゝかば、佛右の御手をさゝげ給ひて、掌の中にちひさき淨土をあらはし給ひき。智光夢さ

めてこの淨土のありさまを寫し書かせて朝夕にこれを觀じて遂に極樂にまゐりにき。かゝれば佛道は唯心によるべき事なり。

第卅九　齊明天皇　治七年　年六十八。
葬越智大間陵。

次の御門齊明天皇と申しき。此は皇極天皇と申しゝ女帝の又かへり即き給ひしなり。乙卯の年正月三日位に即き給ふ。世を去り給ふ事七年なり。二年と申しゝに鎌足病をうけて久しくなり給ひしかば御門大きに歎かせ給ひしに、百濟國より來れりし尼法明といひし「維摩經を讀みてこの病を祈らむ」と申しゝかば御門大きに悦び給ひき。法明この經を讀みしに即ち鎌足の御病をこたり給ひにき。さて明くる年山階寺をたてゝ維摩會を始め給ひしなり。七月に智通智達といふ二人の僧をもろこしにつかはして玄奘三藏に法相宗をば傳へ習はせ給ひしなり。この御時に義覺といふ僧ありき。百濟國より來れりし人なり。難波の百濟寺になむ住み侍りし。其の寺に惠義といふ僧ありき。夜中ばかりに出でゝ義覺がある所をよりて見れば室の内に光を放てり。惠義あやしく思ひて密に窓の紙をやぶりて見れば義覺經を讀みける口より光を放てるあり。惠義あさましく思ひて明くる日なむ人々にかたり侍りし。義覺弟子に語りしを聞き侍りしかば「一夜心經を讀み奉りて百返ばかりになりし程に目を見上げて室の内を見しかば、めぐりにへだても更になくて庭のあらはに見えしかば、いかなる事にかと思ひて室を出でゝ寺の内を見めぐりて歸りたりしかば、もとの如く壁もありとぼそも閉ぢたりしかば、室のほかのゆかにゐて又心經を讀み奉りしに、先にありつる樣に隔てもなく

なりにきこれは般若のふしぎなり」となむ申しゝ。心に萬法皆空しと思ひて觀念のいたりけると覺えておはれに侍りし事なり。

第四十　天智天皇　治十年崩。葬山城山科北陵。

次の御門天智天皇と申しき。舒明天皇第二の御子。御母は齊明天皇なり。孝德天皇位に即き給ひし日東宮に立ち給ひき。壬戌の年正月三日位に即き給ふ。世を去り給ふ事十年なり。七年と申しゝ十月十三日鎌足内大臣におりたまふ。この御時に始めて内大臣といふつかさはいできしなり。御姓は中臣と申しゝを、藤原とたまはせき。大織冠となむまうしゝ。かゝりし程に御心ち例ならずおぼされしが、まことしく重り給ひし時に御門行幸し給ひて「おぼしおく事あらばのたまはせよ」と仰せ事ありしかば、大臣「今はかぎりに侍る。何事をかは申し侍るべき」と申し給ひしを聞し召して御門御涙に咽びて歸らせ坐しまして、御おとゝの東宮を又大臣の家に遣して「の給はせよ」とて「さきざきの御門の御後見多かりしかども、大臣の志に比ぶべき人更になし。われ一人かく去り難く思ふのみにあらず、次々の御門大臣の末をめぐみて年比の恩を必ずむくゆべし」とのたまはせて、太政大臣にあげ奉り給ふよし仰せ給ふと、その時の人申しあひたりしかども、この事はたしかにも聞き侍らざりき。内大臣になり給ふを太政大臣とはひが事ぞとも申しあひたりしなり。十六日に遂にうせ給ひにき。御門歎きかなしび給ふ事かぎりなし。先に申し侍りつるやうに御門も王子と申し、大臣もいまだ位淺くおはせしに御沓とりて奉り給へりし。はかなかりし御心よせの後位に即き給ひ

て今日にいたるまでかたみにふた心なくおぼし通はし給へるに、御年の程の今はいかゞはなどおぼし慰むべきにもあらず。今年五十六にこそはなり給ひしか。事にふれておぼし續くるに、げにことわりと御門の御心の中推しはかられ侍りし事なり。大臣は大中臣美氣子卿の子におはす。十年と申しゝ正月五日、御門の御子に大友皇子と申しゝを太政大臣になし奉り給ひき。二十五にぞなり給ひし。東宮などにぞ立ち給ふべかりしを御門の御おとゝの東宮にては坐しましゝかばかくなり給へりしにこそ。九月に御門例ならずおぼされしかば、東宮を呼び奉りて「わが病重くなりたり。今は位ゆづり奉りてむ」との給はせしかば東宮「あるべき事にも侍らず。身に病多く侍り。后宮に位を讓り奉りたまひて大友の太政大臣を攝政と玄給ふべきなり。われ御門の御爲に佛道を行はむ」と申し給ひて、やがてかうべをそりて吉野山に入り給ひにき。さて十月にぞ大友太政大臣は東宮に立ち給ひし。十二月三日御門御馬にたてまつりて山科へおはして林の中に入りてうせ給ひぬ。いづくにおはすといふことを知らず。唯御沓の落ちたりしを陵にはこめ奉りしなり。

第四十一　天武天皇　治十五年崩。年。葬大和國檜隈大内陵。

次の御門天武天皇と申しき。舒明天皇の第三の御子。御母齊明天皇なり。天智天皇の御世七年二月に東宮に立ち給ふ。癸酉の年二月廿七日に位に即き給ふ。世を知り給ふこと十五年なりこの御門うち任せては位を繼ぎ給ふべかりしかども又あり難くして即き給ひしなり。世を遁れ給ひしと、天智天皇の御事の中に申し侍りぬ。天智天皇十二月三日うせさせ給ひにし

かば、同五日大友皇子位をつぎ給ひて明くる年の五月になほこの御門を疑ひ奉りて、出家して吉野の宮に入り籠らせ給へりしを、左右の大臣諸共につはものをおこして吉野の宮を圍み奉らむと謀りし程に、この事漏り聞えにき。美濃尾張の國に天智天皇の陵をつくらむ料とて人夫をその數召すに、皆つはもの〻具をもちて參るべきよし仰せ下さる。「この事更に陵のことにあらず。必ず軍の起り侍るべきにこそ。この宮を逃げ去り給はずばおしかりなむ」と告げ申す人あり。又「おふみの京よりやまとの京まで所々に皆つはものをおきて守らしめ侍り」など申す人もありき。大友皇子の御めはこの御門の御女なりしかばみそかにこの事のありさまを御消息にて告げ申し給へりけり。吉野の宮には位をゆづり世を遁るゝ事は病をつくろひ命をたもたむとこそ思ひつるに、思はざるに我が身を失ふべからむには、いかでかうちとけてもあるべきとおぼして、皇子たちをひき具し奉りて物にも乘り給はずして東國の方へ入り給ひし道に、縣犬養大伴といひしものおひ奉りて馬に乘せ奉りてき。又后宮をこしに乘せ奉りて御ともには皇子二人をのこども二十餘人女十餘人ぞつき奉りたりし。その日勦田（略）といふ所におはしつきたりしに狩人二十餘人從ひ奉りにき。またよね負はせたる馬卅疋ばかりおひ奉りたりしを、そのよねをおろしすてゝかちにて御供にさぶらふ人を皆乘せたまひて夜中ばかりに伊賀の國におはしつきて國の軍おまた從ひ奉りしを相具して明くる日伊勢の國におはして天てる御神を拜し奉り給ひき。國の守五百人の軍をおこして鈴鹿の關をかため、大友皇子三千人の軍をひきゐて不破の關をかたむ。御門ふはの宮におはしての

國々の軍をおこし給ひしにつはものその數を知らず。かくて七月六日より所々にして大友皇子とたゝかひ給ふ。廿一日に勢田に攻めより給ひしに、大友皇子左右の大臣相共に橋の西に陣をはりてたゝかふ。こなたかなたの軍雲霞の如くにしてその數を知らず。矢の下る事雨のごとし。かゝりしほどに皇子の方の軍やぶれて皇子も大臣も僅に命を遁れて山に入りにき。廿三日に皇子みづから遂に命をうしなひてしかば、廿六日にぞその首をとりてふはの宮に奉りし。廿七日に右大臣殺され左大臣ながされにき。そのほかの人々罪をかうぶるおほく侍りき。やがてその日ぞ軍に力をいれたる人々官位どもをたまはせし。御門は皇子の御叔父にておはせしうへに、御ちうとにてもおはしましゝぞかし。かたがた忘たがひ奉り給ふべかりしをあながちに勝にのり給ひしとの佛神もうけ給はずなりにしにこそ侍るめれ。八月に御門野上の宮に移り給ひたりしに筑紫より足三つある雀の赤きを奉りしかば年號を朱雀元年とぞ申し侍りし。明くる年の三月に備後國より白き雉子を奉りしかば朱雀といふ年號を白鳳とぞかへられにし。三月に河原寺にて始めて一切經をかゝしめ給ひき。九年と申しゝ十一月に后宮御病によりて藥師寺を建てさせ給ひしなり。十三年と申しゝに御門例ならず坐しまして、東宮を始め奉りて百官大安寺にまうでゝ「御門この寺にして法會を行はむとおぼす御願あるを果し遂げ給はずしてやみなむとす。たとひ定業なりとも三年の御命を延べ奉りたまへ。この願を遂げさせ奉らむ」と祈り申しゝに御門御夢に御命延び給ふよし御覽せられて御病をこたらせ給ひにしかば、三年の間佛をおろがみ經をうつして本意の如く供養し

奉り給ひき。十四年と申しゝ十月廿三日天文悉くにみだれ、星のおつる事雨の如く侍りき。十五年と申しゝに大和の國より赤き雉子を奉れりき。さて朱鳥元年と年號をかへられにき。明くる年大友皇子の御子父ののたまはせおきしによりて、三井寺をつくりたまひしなり。

第四十二　持統天皇　大寶二年十二月十日崩。年卅。葬大内陵。天武同陵。此後火葬。

次の御門持統天皇と申しき。天智天皇の第二の御女。天武天皇の后なり。御母山田の大臣石川麿の女越智姫なり。丁亥の年を元年として第四年に位に即き給ひて世を治り給ふ事十年なり。七年と申しゝ正月にぞ踏歌ははじまり侍りし。十年と申しゝに位を去り給ひて太上天皇と申し侍りき。

第四十三　文武天皇　慶雲四年崩。年二十五。葬大和國檜前安古岡上陵。

次の御門文武天皇と申しき。天武天皇の御子に草壁の皇子と申しゝ皇子の第二子。母元明天皇なり。丁酉の年八月一日位に即き給ふ。御年十五。世を治り給ふこと十一年。三年と申しゝ五月に役の行者を伊豆國へ流しつかはしてき。その行者は大和國の人なり。ひろく物をならひ、深く三寶をあふぎて、三十二といひし年よりこの葛城山に籠りゐて、三十餘年のほど藤の皮を着物とし、松の葉を食物として、孔雀の神呪をたもちてさまざまの驗をほどこしき。五色の雲に乗りて仙宮にいたり、鬼神をつかひて水をくませ薪木をとらす。又「御嶽とこの葛城の峰とに石橋をわたせ」とこの鬼神どもにいひしかば、よるよるいはほを運びて削りとゝのへて、既に渡しはじめし程に、行者心もとながりて「晝も唯かたちを顯して渡せ」とせめ

しを、ひとことぬしの神、わがかたちの見にくきことを耻ぢて、なほよるよるばかり渡し侍りしかば、行者いかりて、神呪をもちてこのひとことぬしの神を去ばりて、谷の底に投げいれてき。その後ひとことぬしの神、御門に近く侍ひし人につきて、「われは御門の御ためにあしき心を起す人を鎮むるものなり。役の行者御門を傾け奉らむとはかる」と申しゝかば、宣旨を下して行者をめしに遣したりしに、行者空に飛びあがりて、捕ふべき力も及ばで使かへり参りてこのよしを申しゝかば、行者の母をめしとられたりしをり、すぢなくて母に代らむがために行者まゐりしを、伊豆の大島へは流し遣したりしに晝はおはやけに従ひ奉りてその島にゐ、夜は富士の山にゆきて行ひき。六月に御門丈六の佛像を造り奉らむとて、佛師のよからむをもとめ給ひしに、その人なかりしかば、御門大安寺に行幸ありて、佛の御前に掌を合せ願をおこし給ひて「よき佛師にあひてこの佛を造り奉らむ」と申し給ひしに、その夜の御夢に一人の僧ありて「この寺の佛を造り奉りしは化人なり。又きたるべきにあらず。たとひよき佛師にあひ給ふとも猶斧のつまづきあるべし。たとひよき繪師にあひ給ふともいかでか筆のあやまちなからむ。唯大きならむ鏡を佛の御前にかけてその寫り給へらむ影を禮し奉り給へ。書けるにもあらず造れるにもあらずして、三身具足し給はむ。その形を見るは應身の躰なり。その影をうかゞふは化身の相なり。その空しきことを觀ずるは法身の理なり。功徳の勝れたる事これに過ぎたるはなかるべし」と申しき。御門御夢さめ給ひて如來の御願に應じ給ふことを悦びたまひて大なる鏡を佛前にかけて五百人の僧を請じて供養し奉

り給ひき。眞實の功德とおぼえ侍りしことなり。この頃もこの思ひをなしてする人侍らばいかにめでたき事にか侍らむ。四年と申しゝ三月に道昭和尚と申しゝ人の室のうちに俄に光滿ちて香しき事かぎりなし。道昭弟子を呼びて「この光を見るや」と問ひしに、弟子見るよしを答へしかば、道昭「ものないひそ」といひし程に、室より光いでゝ寺の庭にめぐりてやゝ久しくしてその光西をさして行きさりて後、道昭繩床に端座して命終りにしかば、弟子ども火をもちてはふりてその骨をとらむとせしに、俄に風吹きて灰だにもなくふき失ひてき。日本に火葬はこれになむはじまり侍りし。五年と申しゝ正月に、不比等中納言になり給ひてやがてその日大納言になり給ひにき。その月とぞ覺え侍る、役の行者伊豆の國より召しかへされて京に入りて後空へ飛びのぼりて我が身は草座にゐ母の尼をば鉢にのせてもろこしへ渡り侍りにき。さりながらも本所を忘れずして三年に一度、この葛城山と富士の峰へとは來り給ふなり。時々はあひ申し侍り。もろこしにては第三の仙人にておはするよしぞ語り給ふ。二月丁未の日釋奠ははじまるとうけたまはり侍りき。三月二十一日に對馬より始めてしろかねをまゐらせたりしかば、大寶元年と年號を申しき。この後より年號は相續きて今日までたえず侍るにこそ。二年と申しゝ七月よりぞ御子だち馬に乘りて九重の內に出で入り給ふ事はとゞまりにし。四年と申しゝ五月五日大極殿の西の樓の上に慶雲見えしかば、年號を慶雲とかへられにき。二年と申しゝに世の中の心ちおこりて煩ふ人おほかりしかば追儺といふ事ははじまれりしなり。

第四十四　元明天皇

養老五年十二月四日崩。年六十一。
葬大和國添上郡椎山陵。

次の御門元明天皇と申しき。天智天皇の第四の御女。御母蘇我の大臣山田石川麿の女嬪姪娘なり。この御門は文武天皇の御母におはします。文武天皇いまだ三十にだに及び給はでうせさせおはしましにし。いと心うかりしことなり。その時聖武天皇はいまだいとけなく坐しまししき。八歳にやならせ給ひけむ。この頃こそ二つ三つにても位に即かせ坐しますめれ。その程まではさる事なかりしかば、御母にて位に即かせ給へりしなり。慶雲四年七月十七日位に即き給ふ。御年三十六。世を去り給ふ事七年なり。五年正月十一日に武藏より銅をはじめて奉りしかば、年號を和銅とかへられにき。三月不比等右大臣になり給ふ。同二年五月に、新羅の使さまざまの物を相具して參れりしに、不比等その使にあひ給ひにき。「昔より執政の大臣のおふ事はいまだなき事なり。去かれどもこの國のむつましき事を顯すなり」とのたまひしかば、使ども座を去りて拜し奉りて、うるはしく父座に即きて「使どもは本國の賤しきものどもなり。きみの仰せをかうぶりて今みやこに參れり。さいはひのはなはだしきなり。去かるに忝くあひまみえ奉りぬ、悦び恐るゝ事かぎりなし」と申しき。國王大臣も時に隨ひてふるまひ給ふべきにこそ。この頃ならばかたおもむきに異國の人に一の人のあひ給ふなき事などぞ誹り申さまし。同三年三月に難波より大和の平城の京へみやこ遷りて、左右京の條坊を定め給ひき。これよりさきざきも代々常にみやこうつり侍りしかども、ことならぬをば申し侍らず。この月に不比等興福寺を山科より奈良の京にうつし建て給ひき。同六年國

々の郡の名を去るしさまざまの出でくる物どもの數を目錄をさせしめ給ひき。同七年十月維摩會を山階寺にうつし行ひ給ひき。この會はこゝの所にて行はれしに、その事中絶えて今年四十二年になり侍りし。同八年九月三日位を御女の元正天皇の、氷高内親王と聞え給ひしにゆづり奉り給ひき。

第四十五　元正天皇　天平廿年四月廿一日崩。年六十九。葬佐保山陵。

次の御門元正天皇と申しき。文武天皇の御姉。これも元明天皇の御腹におはします。元明天皇位を去り給ひし時聖武天皇を東宮と申しゝかば、位を繼ぎ給ふべかりしかども、その年ぞ御元服ゑたまひて御年十四になり給ひしに、なほいまだいとけなくおはしますとて、この御門は御をばにて讓を得給ひしなり。和銅八年九月三日位に即き給ふ。御年三十六。世を知り給ふ事九年なり。年號かはりて靈龜と申しき。三年と申しゝ九月に御門美濃の國ふはの山のいでゆに行幸ありき。その湯をあみし人白髮かへりて黑くなりき。目暗かりしものたちまちにあきらかになり、痛き所を洗ひしかば即ちいえにき。かくて御門かへり給ひて十一月七日年號を養老とかへられにき。二年と申しゝに不比等律令を撰びて御門に奉り給ひき。同三年と申しゝ二月に百官を召して笏をもつ事ははじまり侍りしなり。同四年八月三日不比等うせ給ひにき。九月に大隅日向の國におはやけに隨ひ奉らぬものどもありしかば宇佐宮の禰宜宣旨をうけたまはりて、軍を起してこれらを討ち平げてき。その時に宇佐宮の詫宣したまひて「たゝかひの間多くの人をころせり。これによりて放生會をすべし」とのたまはせしか

ば、これより諸國の放生會ははじまりしなり。同五年八月三日御門太上天皇もろともに不比等の御はてに山階寺の内に北圓堂をたて給ひき。八年二月四日御門位を東宮に讓り奉り給ひて、太上天皇と申しき。

第四十六　聖武天皇

天平勝寶七年五月二日崩。年五十二。葬佐保山陵。

次の御門聖武天皇と申しき。文武天皇の御子。御母不比等の御女皇太后宮の御子なり。養老八年二月四日位に即き給ふ。御年二十五。世を去り給ふ事廿五年なり。年號を神龜とかへられにき。二年と申しゝにもろこしより柑子の種をもて來れりき。これより始めてこの國に出できそめしなり。三年と申しゝ七月に太上天皇れいならずおはしましゝ御祈に御門山階寺の内に東金堂をば建て給ひしなり。その年行基菩薩山崎の橋を造りてその上に法會をまうけて供養ぜ給ひしに、俄に大水出でゝ流れ死ぬる人おほかりき。四年と申しゝ三月二十日泊瀨は供養せられしなり。行基菩薩ぞ導師にておはせし。天平五年七月に盂蘭盆ははじまりしなり。同六年正月十一日に、光明皇后御母の橘の氏の御ために山階寺の内に西金堂を建て給ひき。同七年吉備の大臣もろこしにとゞめられて日月をふんじたりければ、十日ばかり世の中くらゝくなりにけり。この事を占はしけるに「日本國の人をとゞめて歸さゞるによりて秘術をもちて日月をかくせるなり」と申しければこの國へは歸り來れりしなり。同十二年九月に太宰少貳廣繼と申しゝ人は宇合の子におはす。その人一萬人のつはものをおこして御門を傾け奉らむと謀り奉るといふ事きこえて、東人といふ人に國々のいくさ一萬七千餘人を相

具して八幡の宮に祈り申してたゝかはしめにつかはす。十一月に御門伊勢太神宮に行幸玄給ひて、この事を祈り申し給ひしに、この月十一日に肥前國松浦の郡にて少貳玄づまり給ひしところなり。今かゞみの宮とておはします。同十三年六月戊寅の日の夜京中の條々にいひふりて侍りき。同十四年十一月に陸奥に赤き雪降り侍りき。十五年十月十五日おふみの信樂給ふ。同十九年九月廿九日大佛を鑄奉りたまふ。同二十年正月に陸奥よりこがね九百兩を奉れりき。日本國にこがね出でくる事これよりはじまれりき。これによりて四月十八日に年號を天平勝寶元年とかへられにき。されどもこの年號はやがて又かはりにしかば年代記などには入り侍らざるなり。七月二日位を去りて御ぐしおろして太上天皇とぞ申し侍りし。御年五十にならせ給ひしなり。

第四十七　孝謙天皇

次の御門孝謙天皇と申しき。聖武天皇の御女。御母不比等の御女光明皇后におはします。天平勝寶元年七月二日位に即き給ふ。御年三十一。世を玄り給ふ事十年なり。御おとゝに東宮おはしましゝかども神龜五年に御年二歳にてうせ給ひにしかば、この御門位をつぎおはしましき。天平勝寶元年十月廿四日に東大寺の大佛を鑄奉りをはりにき。三年のほど八度といふに事はてにしなり。十一月に八幡の宮託宣玄たまひて十二月に筑紫より京へうつりおはしましき。梨原に宮づくりしていはひ奉りしなり。七日丁亥東大寺供養侍りき。行幸ありき。

また聖武天皇は太上天皇とて同じくこの供養にあはせ給ひき。八幡の宮もおはしましき。めでたく侍りし事どもなり。皆人しり給へる事どもなり。天平勝寶四年三月廿四日に東大寺の大佛に始めてこがねを塗り奉りき。四月九日萬僧を請じて供養ぜたてまつり給ひき。今年ぞかし、道鏡内へまゐりて如意輪法を行ひし程に、やうやう御門の御おぼえいできはじまりしかば、弓削の法皇と申しゝはこの人なり。寶字二年御門位を東宮に譲り奉り給ひて太上天皇と申しき。

水鏡卷下

四十八　廢　帝　天平寶字六
五　十　光仁天皇　寶龜十一　天應一
五十二　平城天皇　大同四
五十四　淳和天皇　天長十
四十九　稱德天皇　天平神護二　神護慶雲三
五十一　桓武天皇　延曆廿四
五十三　嵯峨天皇　弘仁十四
五十五　仁明天皇　承和十四　嘉祥三

第四十八　廢帝　天平寶字九年十月崩。年廿三。葬淡路國三原郡陵。

次の御門廢帝と申しき。天武天皇の御子に一品舍人親王と申しゝ第七の御子なり。御母は上總守當麻老の女なり。天平寶字元年四月に東宮に立ち給ふ。御年二十五。おなじ二年八月一日位に即き給ふ。御年二十六。位にて六年ぞおはしましゝ。この御門東宮に立ち給ひしをり

はゆゝしき事どゝ侍りき。孝謙天皇の御時東宮は新田部親王の子道祖王とておはせしに、聖武天皇うせさせ給ひて諒闇にてありしに、この東宮この程をも憚りたまはず、女の方にのみ亂れたまへりしかば、孝謙天皇をりふしもえり給はず「かくなおはせそ」と申させ給ひしかども、つゆそのことに從ひ給はざりしかば、天平勝寶九年三月廿九日大臣以下この東宮は聖武天皇の御すゝめにて立て奉りき。えかるにその事をも思ひえり給はず、かくみだりがはしき心の玄給へるをば「いかゞえたてまつるべき」とのたまはせしに、人々みな「唯仰せ言にえたがふべし」と申しゝかば、東宮をとりたてまつり給ひて、四月に大臣以下を召して「東宮には誰をか立て奉るべき」と定め申すべきよしおはせ言ありしに、右大臣豐成式部卿永手は「さきの東宮の御兄幽燒の王立ち給ふべし」と申しき。攝津大夫珍努左大辨古麿は「池田王立ち給ふべし」と申しき。大納言仲麿は「臣を知るは君にはえかず。子をえるは父にはえかず。唯御門の御心にまかせ奉る」とおのおの思ひ思ひに申しゝかば、御門ののたまはく「御子だちの中に舍人新田部、この二人はむねとおはせし人なれば、新田部親王の子を東宮に立てたりつれども、かくをしへに從ひ給はずありぬれば、今は舍人親王の子を立て申すべきに、おのおのとがどもおはす。その中に大炊王は年若くおはせど、させる咎聞えず、この人を立てむと思ふはいかゞあるべき」とのたまはせき。大臣以下皆仰せごとにえたがふべきよし申しき。このさだめより先に仲麿の大納言、この大炊王をむかへとり奉りて、わが家にすゑ奉りたりしが、內よりの御使その殿にまゐりて迎へたてまつりて東宮には立ち給ひしなり。大炊

王と申すは即ちこの御門におはします。かくて後この東宮に選びすてられ給ひつる王たち、また志ある人々おまたよりおひて、みかど東宮を傾けたてまつり、仲麿を失はむとするといふ事おのづからもれ聞えしかば、仲麿内にまゐりてこのよしを申しゝかば、さまざまの罪を行はれき。その程の事どもおしはかり給ふべし。この程は道鏡もいまだほひろかに參り仕うまつらざりしかば、この仲麿御門の御おぼえならびなかりき。天平寶字二年八月廿五日仲麿大保になりにき。これは右大臣をかく申しゝなり。やがてその日大將になりて本の藤原の姓にゑみといふ二文字を加へ給はせき。これらも皆太上天皇の御おぼえならびなくてせさせ給ひしなり。ゑみといふ姓も御覽ずるたびにゑましくおぼすとて賜はするとぞ申しおひたりし。又仲麿といふ名を加へておしかつとぞ申しゝ。同三年六月二日道のほとりに果物の木を植うべきよし仰せ下されき。この事は東大寺の普照法師と申す人の申し行ひ侍りしなり。そのゆゑは國々の民往來絕ゆるとなし。そのかげにやすみ、その實をとりてつかれをさゝへむとなり。いみじき功德とおぼえ侍りし事なり。八月三日鑑眞和向と申しゝ人聖武天皇の御ために招提寺をたて給ひき。同六年六月太上天皇尼になり給ひてのたまはく「われ菩提心を起して尼となりぬれども、御門にふれてうやうやしきけ更におはせず。かやうにいはるべき身にはあらず。世の政事の常の小事をば行ひ給へ。世の大事賞罰をばわれ行はむ」とのたまはせて、この後世を行ひ給ひき。同七年九月に道鏡少僧都になりて常に太上天皇の御傍にさぶらひて御おぼえならびなかりしかば、惠美の大臣御門を恨み奉る心やうやう出できにき。同

八年九月二日惠美の大臣私に太政官の印をさして事を行ふといふことを、大外記比良麿忍びやかに申したりしかば、十一日に太上天皇少納言をつかはして鈴印ををさめさせしめ給ひしを惠美の大臣聞きつけてその道に我が子の宰相といひしをやりて奪ひとゞめさせしかば、又太上天皇人を遣して射殺させしめ給ひしに、大臣の使又相互に射殺してき。かゝる世のみだれいできて大臣つかさ位とられ、關を固め軍を起して討たしめむと云給ひしかば、大臣その夜逃げて近江の國へ行きしに、御方の軍外の道よりさきに至りて勢田の橋を燒きてき。大臣これを見て高島郡の方へにげて小領といふもの丶家にとまれりしに星の大きさもたゞの程なりしが、その屋の上におちたりし、いかなる事にてか侍りけむ。さて越前の國に行きて相具したりし人々を「これは御門におはす、これは上達部なり」など僞りいひて、人の心をたぶらかしき。かくて御方の軍追ひいたりて攻めしかば、大臣また近江の國へかへりて船に乘りて逃げむとせしほどに、おしき風吹きておぼれなむとせしかば、船よりおりて相戰ひしほどに、十八日に大臣うちとられにき。その頭をとりて京へもて參れりしにこそ。おなじ大臣と申せども世のおぼえめでたくおはせし人の時の間にかくなり給ひぬるおはれに侍りしことなり。又心うき事侍りき。その大臣のむすめおはしき、色かたちめでたく世にならぶ人なかりき。驗眞和尚の「この人千人の男にあひ給ふ相おはす」とのたまはせしを、たゞうちあるほどの人にもおはせず、一二人の程だにもいかでかと思ひしに、父の大臣うちとられし日、みかたの軍千人悉くにこの人ををかしてき。相はおそろしき事にぞはべる。二十日

太上天皇のたまはく「仲麿さきの東宮のこのかみの鹽燒の王を位に即けむといふことをはかりて官のおして、をさして國々に遣して人の心をたぶろかし、關をかためつはものをおこし罪もなかりけるこのかみの豐成の大臣を讒し申して位を退けたりけり。この事仲麿が僞れる事とぞ知り給ひぬ元。豐成を元の如く大臣の位にをさめ給へ。またこの禪師朝夕に仕うまつれるありさまを見るに、いとたふとし。われ髮をそりて佛の御袈裟をきてあれども、世の政事をせざるべきにあらず。佛も經に國王位に即き給はむをりは菩薩戒をうけよとこそ說きおき給ひたれ。これをおもへば尼となりても世の政事をせむに何のさはりかあるべき。さかれば御門の出家していませむに又出家してあらむ大臣もあるべしと思ひて、この道鏡禪師を大臣禪師と位を授け奉る」とのたまはせて、十月九日太上天皇つはものをおこして內裏をかぐみ給ひしかば、宮の內に侍ひし人々皆遁げうせしかば御門御母又そのつかうまつる八二三人ばかりを相具して、かちにて圖書寮の方におはして立ち給へりしにこそは、少納言迎ひ奉りて位をおろし奉るよしの宣命をば讀みかけ奉りしか。その御ことばには位を保ち給ふべきうつはものにおはせぬに合せて、仲麿とおなじ心にてわれをそこなはむと謀り給ひけり。しかれば御門の位を退け奉りて親王の位をたまふとて淡路の國へ流し奉りたまひてき。心うく侍りしことなり。

第四十九　稱德天皇

神護景雲三年八月四日崩。年五十二。
葬添下郡高野陵。

次の御門稱德天皇と申しき。これは孝謙天皇のまたかへり即き給へりしなり。天平寶字八年

十月九日位に即き給ふ。御年四十七。世を去り給ふ事五年なり。同九年に淡路廢帝國土をのろひ給ふによりて、日でり大風ふきて世の中わろくて飢ゑ死ぬる人おほかりきと申しあひたりき。十月に廢帝恨の心に堪へずして垣をこえてにげ給ひし、國守つはもの起して留め申しゝかばかへりたまひて明くる日うせ給ひにき。閏十月二日大臣禪師道鏡太政大臣になりき。十一月に大嘗會ありしに、「われ佛の御弟子となれり」とて出家の人も相まじりてつかはるべきよし仰せられき。今年西大寺をつくり給ひて金銅の四天王を鑄奉り給ひしに、三體は成り給ひて今一體の七度まで鑄損はれ給ひしかば、御門誓ひたまひて「もし佛の德によりて永く女の身をすてゝ佛となるべくば、銅のわくに我が手をいれむ。この度鑄られたまへ。もしこのねがひかなふべからずば、我が手燒け損はるべし」とのたまひしに、御手にいさゝかなる疵なくして天王の像成り給ひにき。神護景雲二年十月廿日道鏡に法皇の位をさづけ給ひき。神護景雲三年七月に和氣清麿が姉の尼僞りて八幡の宮の御詫宣といひて、道鏡を位に即け給ひたらば世の中大きによかるべきよしを申しき。道鏡この事を聞きて喜ぶ事かぎりなかりしほど程に、八幡の宮御門の御夢に見え給ひて「我が國は昔より唯人を君とする事はいまだなき事なり。かく横ざまなる心あらむ人をば速にはらひのくべし」とのたまはせしを、道鏡大きにいかりをなして、御門をすゝめ奉りて清麿を御使として、宇佐の宮へたてまつりてこの事を申しこはしめ奉りしに、詫宣去給ひし事、御門の御夢にいさゝかも違はざりしかば、清麿「この事極りなき大事なり、詫宣ばかりは信じがたるべし。なほその去るしを顯し給

へ」と祈り申しゝかば、即ちかたちを顯し給ひき。御たけ三丈ばかりにてもち月の如くにて光り耀き給へり。清麿きもたましひも失せてえ見奉らざりき。この時に重ねて詫宣したまはく「道鏡諂へる幣帛をさまざまの神たちに奉りて世を亂らむとす。我れ天の日繼のよわくなりゆくことをあげき、惡しきともがらの起り出でむとすることをうれふ。彼は多くわれはすくなし。佛の御力をあふぎて御門のすゑを助け奉らむとす。速に一切經を書き佛像をつくり最勝王經一萬卷を讀み奉り、一つの伽藍を建てゝこのわしき心ある輩をうしなひ給へと申すべし。この事一言も落すべからず」とのたまはせき。清麿かへりまゐりてこのよしを申しゝかば、道鏡大にいかりて、清麿がつかさをとり大隅の國へ流しつかはしてよぼろの筋を斷ちてき。清麿かなしびをなして輿に乘りて宇佐の宮へまゐりしに、猪三萬ばかりいできたりて道の左右に歩みつらなりて十里ばかり行きて山の中へ走りいりにき。かくて清麿宇佐に參りつきて拜し奉りしに、即ちもとの如く立ちにき。詫宣ありたまひて神封の綿八萬餘屯をたまはせき。同四年三月十五日に御門由義の宮に行幸ありき。道鏡日にそへて御おぼえさかりにて世の中既にうせなむとせしを、百川うれへ歎きしかども力も及ばざりしに、道鏡御門の御心をいよいよゆかし奉らむとて思ひかけぬものを奉れたりしに、わさましきこといできてならの京へかへらせおはしましてさまざまの御樂どもありしかども、その ゑるし更に見えざりしに、ある尼一人いで來りていみじき事どもを申して「やすくをこたり給ひなむ」と申しゝを、百川怒りて追ひいだしてき。御門終に此事にて八月四日うせさせ給ひにき。こまかに

申さばおそりも侍り。この事は百川の傳にぞこまかに書きたるとうけたまはる。この御門たゞ人にはおはしまさゞりしにこそ。かやうの事も世の末をいましめむがためにやおはしましけむとぞおぼえ侍りし。

第五十　光仁天皇　天應元年十二月廿三日崩。　年七十三。

次の御門光仁天皇と申しき。天智天皇の御子に施基皇子と申しゝ第六子におはす。母は贈太政大臣紀諸人の女、贈皇后橡姫なり。神護景雲四年八月四日稱徳天皇うせさせおはしましにしかば位を繼ぎ給ふべき人もなくて、大臣以下おのおのこの事を定め給ひしに「天武天皇の御子に長親王と申しゝ人の子に大納言文屋淨三と申す人を位に即け奉らむ」と申す人々ありき。又「白壁王とてこのみかどのおはしましゝを即け奉らむ」と申す人々もありしかども、猶淨三をと申す人のみ強くて、既に即き給ふべきにてありしに、この淨三「我が身そのうつはものにかなはず」と、おながちに申し給ひしかば「そのおとゝの宰相大市と申しゝを、さらば即け申さむ」と申すに、大市うけひき給ひしかば、既に宣命を讀むべきになりて、百川、永手、良繼、この人々心を一つにて目をくはせて密に白壁王を太子と定め申すよしの宣命を作りて宣命使をかたらひて大市の宣命をば卷きかくして、この宣命を讀むべきよしをいひしかば、宣命使庭にたちて讀むを聞くに、事俄にあるによりて諸臣たちはからく、白壁王は諸王の中に年たけたまへり、また先帝の功ある故に太子と定め奉るといふよしを讀むを聞きて、この大市を立てむといひつる人々あさましく思ひてとかくいふべき方もなくてありし

ほどに、百川やがて兵をもよほして白壁王を迎へ奉りて御門と定め奉りてき。この御門の位に即き給ふことはひとへに百川のはかり給へりしなり。廿一日に道鏡をば下野國へ流し遣す。大納言ゆげのきよ人を土佐へ流しつかはす。このきよ人は道鏡がおとゝなり。十一月一日位に即き給ふ、御年六十二。世を去り給ふ事十二年なり。粉河寺は今年建てられしなり。寶龜三年に御門井上の后と博奕ぎ給ふとて、たはぶれ給ひて「われ負けなばさかりならむ男をたてまつらむ。后負け給ひなば色かたちならびなからむ女をえさせ給へ」とのたまひてうちたまひしに、御門負け給ひにき。后まめやかに御門をせめ申し給ふ。御門たはぶれとこそおぼしつるにことにがりて思ひわづらひ給ふほどに、百川この事を聞きて「山部親王を后にたてまつり給へ」と御門にすゝめ申しき。この山部親王と申すは桓武天皇なり。さて百川また親王の御もとへ參りて「御門この事を申し給はむずらむ。あなかしこいなび申し給ふな。思ふやうありて申し侍るなり」と申しゝほどに、御門親王を呼び奉りたまひて「かゝる事なむある。ささきの御もとへおはせ」と申し給ひしに、親王おそれかしこまりて「あるべきことに侍らず」と申してまかり出で給ひしを、たびたび強ひ申し給ひしかども、なほうけたまはり給はざりしかば、御門「孝といふは父のいふ事にそたがふなり。われとし老いてちから堪へず。すみやかに后のもとへまゐりたまへ」とせめのたまひしかばえのがれ給はずして、遂に后の御もとへ參り給ひにき。さて后この親王をいみじきものにそたてまつり給ひし。いとけしからず侍りし事なり。この后御年五十六になり給ひき。この御腹の他戸の親王は御門の第

四の御子にて御年などもいまだいとけなくおはしまして、ことし十二にぞなり給ひしかども、この后の御腹にておはせしかば兄たちをおきたてまつりて、こぞの正月に東宮に立ち給ひしぞかし。后御年もたけ、東宮の御母などにていみじくおもおもしくおはすべかりしに、この山部親王御まゝ子にて御年などもことの外にわひ給はず、ことし三十六になりたまひしを、またなきものとおもひ申したまへりしいとみぐるしくこそ侍りしか。常にこの親王をのみ呼びたてまつり給ひて御門をうとくのみもてなしたてまつり給へば、御門耻ぢうらみたまふ御心やうやういできけり。百川このほどの事どもをうかゞひ見るに、后ましわざをして御非に入れさせたまひき。御門をとくうしなひたてまつりて、我が御子の東宮を位に即けたてまつらむといふ事どもなり。その井に入りたるものをある人とりて宮の内にもてあつかひしかば、この事みな人知りにき。百川御門に「この事すでにあらはれにたり。又后の宮の人八人このごろ横さまなる事をのみつかうまつりて、世の人たふべからず。人のめをうばひてやがてそのをとこの前にてゆゝしきわざをして見せ、またその男をころし、かやうの事申しつくすべからず。この八人をとらへさしめて人のうれへを去づめむ」と申しゝかば、御門申しゝまゝに許し給ひしかば、百川つはものを遣して召しとりし程に、その八人をうち殺してき。その使かへりてこのよしを申すに、后、御門のおはします所へいかりておはして、「おいくちは己れがおいほれたるをば知らずして、我が宮が人どもをばいかで殺さするぞ」とのり申し給ひしかば、百川この事を聞きて「おさましく侍る事なり、后を暫し縫殿寮にわたし

奉りてこらしめ奉らむ。又東宮もおしき御心のみおはす、世のためいとゝ不便に侍る」と申しゝかば御門「よからむさまに行ふべし」とのたまひしかば、三月四日后の位をとり奉りていで給ふべきよし啓せしかども后の更に出で給はずしてしのびやかにかむなぎどもを召しよせて、さまざまの物どもをたまはせて御門を呪咀し奉り給へりしを、百川聞きつけて、かむなぎを尋ね召さしめしに、かむなぎ逃げ失せにしかばそのかむなぎの親しかりし者を召して「更におそりをあすべからず。ありのまゝにこの事を申さばわれ必ず位を申し授くべし」といひしかば、即ちこのよしをかのかむなぎに告げいひしかば、かむなぎ誅られて申していはく「君をあやまち奉らむと謀れる罪は遁れがたかるべき事なり。后宮われ等を召してさまざまの物を賜はせたりしかども、いかにすべしとも覚え侍らで、たゞ御門の御ためにかへりて寺々に誦経にして悪き心つゆ起さずなり侍りき」といひき。このよしを百川つぶさに御門に申しゝかば、そのかむなぎどもを召しよせて重ねて問はしめ給ひしに、おのおの皆おち伏しにき。御門この事をきこしめして、涙を流したまひて「われ后のためにいさゝかもおろかなる心なかりつるに、今この事あり、いかにすべきことぞ」と仰せ事ありしかば、百川申していはく「この事世の中の人皆聞き侍りにたり。いかでかさではおはしますべき」と申しゝかば、御門「誠にいかでかたゞもあらむ」とのたまはせて、后のみふなど皆とめ給へりしかども后さらに憚り給ふけしきなくて、唯御門をさまざまのあさましきことばにて、みだりがはしくのり申し給ふ事より外になし。百川「東宮もえばし退け奉りて心をえづめ奉らむ」と

申しゝかば、御門ゆるし給ひき。百川僞りて宣命をつくりて人々をもよほして太政官にして宣命を讀ましむ。皇后及び皇太子をはなち追ひ奉るべしとなり。この事をある人御門に申すに、御門大におどろき給ひて、百川を召して「后なはこり給はず、ゑばし東宮をゑりぞけむことこそ申しこひつるに、いかにかゝる事はありけるぞ」とのたまふに、百川申していはく「退くとは永く去りぞくる名なり。母つみあり、子おごれり、誠にはなち追はむに足れることなり」と少しもわたくしあるけしきなく、偏に世のためと思ひたる心かたちに顯れて見えしかば、御門かへりて百川におぢ給ひて、ともかくものたまはせずしてうちうちになげき悲び給ふ事限なかりき。これも百川のはかりごとにて位に即き給へりし功勞のはかりもなかりしかば、唯申すまゝにておはしましゝなり。同四年正月十四日に山部親王の中務卿と申しておはせし、東宮に立ちたまふ。この事偏に百川のちからなり。その故は、まづ等定と申しゝ僧を百川梵釋寺にこめて、この親王を位に即け奉らむといふことを祈り申さしめき。その僧、親王の御たけの寸法をとり奉りて、梵天帝釋を造り奉りて行ひ奉りき。大臣以下御門に申していはく「儲の君ゑばしも坐せずしてあるべき事ならず。速に立て奉り給へ」と申しゝかば、御門「誰をか立つべき」とのたまはせしかば、百川すゝみて「第一の御子山部親王を立て申し給ふべし」と申しき。御門仰せらるゝやう「山部は無禮の親王なり。我いかにいふともいかで后をばをかすべきぞ」とのたまはせしを、百川申していはく「この仰せ事いはれなく侍り。父のいふ事を違へざるを孝子とはいふなりと仰事ありしかばこそ、親王はおはせに從ひ給ひしか。

始めすゝめ給ふも御門におはします。後に嫌ひ給ふも御門なり。いかにかくば仰事あるぞ」と申すに、濱成申していはく「山部親王は御母いやしくおはす。いかでか位に即き給はむ」と申しゝかば、御門「まことにさる事なり。酒人内親王を立て申さむ」とのたまひき。濱成又申していはく「第二の御子薭田親王御母いやしからず。この親王こそ立ち給ふべけれ」と申しゝを、百川目をいからし、太刀をひきくつろげて、濱成をのりていはく「位に即き給ふ人更に母のいやしきたふときを擇ぶべからず。山部親王は御心めでたく世の人もみな従ひ奉るこゝろあり。濱成申す事道理にあらず。我命をも惜み侍らず、また二心なし。唯早く御門の御ことわりをかうぶり侍らむ」とせめ申しゝかば、御門ともかくものたまはで立ちて内へ入りたまひにき。百川このことを承りきらむとて、歯をくひしばりてすこしもねぶらずして四十餘日立てりき。御門、百川が心の強くゆるばざる事を御覧じて、「さらば疾く山部親王の立つべきにこそ」と云ぶしぶにおほせ出し給ひしを、御ことばいまだ終らざりしに、庭におりて手をうち喜ぶ聲おびたゞしく高くして人々みなおどろきさわぎ、百川やがてつかさづかさを召して山部親王の御もとへたてまつりて、太子に立て奉りにき。御門おわだゝしくおぼしてわされ給へるさまにてぞおはしましゝ。濱成色をうしなひ朽ちたる木などの如くに見え侍りき。百川君の御ために力をつくし身を捨つる事、いにしへもかゝるためしなしと人々申しあへりき。同六年四月廿五日井上の后うせ給ひにき。現身に龍になり給ひにき。長部親王もうせ給ひにきといふ事世にきこえ侍りき。同七年九月に二十日ばかり夜ごとに兎石つ

ちくれふりき。つとめて見しかば屋の上にふりつもれりき。同八年冬雨もふらずして世の中の井の水みな絶えて宇治川の水既に絶えなむとする事侍りき。十二月に百川が夢に、鎧兜を着たるもの百餘人きたりてわれをもとむとたびたび見えき。又御門東宮の御夢にも、かやうに見えさせ給ひてなやましくおぼされき。これ皆井上の后長部の親王の靈と思して、御門深く愛へ給ひて諸國の國分寺にて金剛般若を誦ましめさせ給へりき。同九年二月に長部の親王いまだ世におはすといふことを、ある人御門に申しき。御門この親王を東宮にかへし立てむの御心もとより深かりしかば、人を遣して見せしめ給ひしに、百川御使を呼びよせて「汝おなかしこまことを申すことなかれ。もし申しては國は傾きなむずるぞ。やすく生けらむものと思ふな」といひしかば、この御使おぢおなゝきながら、行きて見るに、うせ給ひにきと聞え給ひし長部の親王はいさゝかのつゝがもなくておはするものか。あさましく思ひながらこの使かへり参りて百川におぢ恐りて「ひが事に侍り。あらぬ人なり」と申しゝを、親王の乳母仕うまつり人集り参りて御使とかたみに爭ひ申すに、御使ちかごとを立てゝ「若し僞れることを申さば二つの目ぬけおち侍るべし」と申しゝかば人みなひが事と思ひて親王をおひうて申して後、いくばくのほどもなくてその御使の目二つながら抜け落ち侍りにし、あらたにあさましく侍りし事なり。十月に東宮伊勢太神宮へ参り給ひき。過ぎぬる春の比御病重くてさまざまにせさせ給ひしかども、その去るしなかりき。その時の御願にてをこたり給ひて後まゐらせ給ひしなり。今年とぞおぼえ侍る、傳教大師大安寺に行表と申しゝ僧の弟子にな

りて法師になり給ひしは。年十二になり給ふとぞ承りし。もと近江の國の人に坐しき。同十年五月に阿部仲麿もろこしにてうせにけりと聞え侍りき。家乏しくして後の事などかなはずと、御門聞しめして絹百疋綿三百屯をおほ給はせし、この人なり。もろこしにて月のいづるを見て、この國の方を思ひ出して「三笠の山にいでし月かも」とよめりき。七月五日あるかむなぎ百川に、「この月の九日物忌かたくすべし。あなかしこ」といひしかば、百川常に夢見さわがしきことを思ひ合せて、かむなぎの事を頼みて、九日になりて戸をさしかためて籠り居たるほどに、泰隆といふ僧は年ごろ百川がいのりをして相頼めりしものなり。その僧の夢に、井上の后を殺すによりて百川が首を斬る人ありと見て、おどろきさめて、即ち百川がもとへはしり行きてこの事を告げむとするに百川かむなぎのをしへに從ひてこの泰隆にあはず。泰隆爪はじきをしてかへりにき。この日百川俄にうせにき。年三十八になむなりし。私の心なく世のためとてこそは申し行へりしかども、遂にかくまたなりにし。凡夫の心はいかに侍るべきにか。御門「わが位をたもてることは偏に百川が力なり。永くそのかたちをも見るまじきこと」とのたまひ續けて泣き歎かせ給ふ事かぎりなかりき。さらなり、又東宮の御なげきおぼしやるべし。御かたちも變るほどにならせ給ひしかば、見奉る人「いかにかくならせ給へるぞ」と申しゝかば、「百川我がために身をも惜まず力をつくせりき。われさせるむくいなし。今計らざるに命をうしなひつ。この事を思ふにかくなれるなり」とのたまひし、誠にことわりと覺え侍りしことなり。天應元年四月三日、御門位を東宮にゆづり奉り給ひて太

上天皇と申しき。

第五十一　桓武天皇　延暦廿五年三月十七日崩。年七十。葬柏原陵。

次の御門桓武天皇と申しき。光仁天皇の御子。御母贈正一位乙繼の女、皇太夫人高野新笠なり。寶龜四年正月十四日東宮に立ち給ふ。御年三十七。そのほどの事百川が力をいれ奉りしさま光仁天皇の御事の中に申し侍りぬ。天應元年四月廿五日位に即き給ふ、御年四十五。世を去り給ふ事廿四年なり。延暦元年五月四日宇佐の宮詫宣したまふやう「吾が無量劫の中に三界に他生して方便をめぐらし衆生をみちびく、名をば大自在王菩薩となむいふ」とのたまひき。たふとく侍る事なり。同三年五月七日、蛙三萬ばかりあつまりて三町ばかりにつらになりて難波より天王寺へ參りにき。「この事都うつりのあるべき相なり」と申しあへりしほどに廿六日に山城の長岡に京たつべしといふ事出できて、人々を遣してその所を定めさせ給ひき。六月に長岡の京に宮づくりを始めさせ給ふ。諸國の正税六十八萬束を大臣以下參議已上にたまひて、長岡の京の家を造らしめ給ふ。十一月八日の戌の時より丑の時まで空の星はしりさわぎき。十一日戊申長岡の京にうつり給ふ。同四年七月中の十日頃に傳敎大師比叡の山に登りて住みはじめ給ひき。生年十九にぞなり給ひし。八月にならの京へ行幸侍りき。こぞ都長岡にうつりにしかども、齋宮は猶奈良におはしまし、かば伊勢へ下らせ給ふべき程近くなりて行幸ありしなり。長岡の京には中納言種繼留主にて侍ひしを、御門の御弟の早良親王東宮とておはせしが、人をつかはして射殺さしめ給ひてき。事のおこりは御門常にこ

こかしこに行幸ゑ給ひて、世の政事を東宮にのみあづけ奉り給ひしかば、天應二年に佐伯今毛人といひし人を宰相になさせ給ひたりしを、御門かへらせ給ひたりしに、この種繼「佐伯の氏のかゝる事はいまだ侍らず」と御門に申しゝかば、宰相をとり給ひて三位を經させたまひてしを、東宮世に口をしきことにおぼして「種繼をたまはらむ」と申しゝを、御門むづかり給ひて更に聞き給はずして、この後東宮に政事をあづけ奉り給ふことなくなりにしを、安からずおぼして、そのひまを年比うかゞひ給ひつるによき折ふしにてかく ゑ給ひつるなり。御門おらより歸り給ひにき。丙戌の日行幸はありて、今日は壬辰の日なれば七日といひしに歸り給へりとぞ覺え侍る。この頃はいむなど申すとかや。かくて十月に東宮を乙訓寺にこめ奉り給へりしに、十八日までその命たえ給はざりしかば、淡路の國へ流し奉り給ひしに、山崎にてうせ給ひにき。延暦七年にこぞの冬より今年の四月まで五月のほど雨ふらで世の人この事をなげきしに、御門御ゆどのありて御身を清めて庭におりて祈りこひ給ひしかば、ゑばしばかりありて空くらがり雲いできて忽に雨くだりて世の人よろこぶ事かぎりなかりき。今年傳敎大師比叡の山に根本中堂を建て給ひき。生年二十二にぞなり給ひし。やがて今年とぞ覺え侍る、弘法大師讃岐より京へ上り給ひき。生年十五にぞなり給ひし。同十年八月辛卯の日の夜ぬす人伊勢太神宮を燒き奉りき。今もむかしも人の心ばかりゆゝしきものは侍らず。十月に東宮伊勢へまゐらせ給ひき、御病のをりの御願とぞうけたまはりし。この東宮と申すは平城天皇におはします。同十二年に今の京の宮城を造り給ひき。同十三年十二月廿二

日辛酉、長岡の京より今の京にうつり給ひて賀茂の社に行幸ありき。同十五年に御門東寺をつくり給ふ。今年又藤原いせ人といひし人貴船の明神の御をしへにて鞍馬をばつくり奉りしなり。同十七年に勅使を淡路の國へつかはして早良親王の骨をむかへ奉りて大和の國八島の陵にをさめたまひき。この親王流され給ひてのち世の中こゝち起りて人おほく玄にうせしかば、御門おどろき給ひて御迎に二度まで人をたてまつり給ひし、皆海に入り波に漂ひて命を失ひてき。第三度に親王の御甥の宰相五百枝を遣しき。ことに祈り請ひて平にゆきつきて渡し奉りしなり。七月二日田村將軍清水の觀音をつくり奉り、又我が家をこぼちわたして堂に建てき。同十九年七月己未の日、御門「思ふ所あり」とのたまひて前東宮早良親王を崇道天皇と申す。又井上内親王を皇太后とすべきよし仰せられき。おのおのおはしまさぬあとにもうらみの御心をしづめたてまつらむとおぼし召しけるにこそ侍るめれ。同廿一年正月十九日わけのひろよたかをの法華會を行ひはじめき。九月二日傳敎大師もろこしへわたり給ひて天台の敎文をつたふべきよしの宣旨を下され侍りしなり。十月に維摩會をもとのやうに山階寺にて行ひてながく外にて行ふべからざるよし宣旨を下さる。これよりさきには長岡にして行はるゝ事もありき。又ならの法花寺にても行はれしなり。同廿二年閏十月廿三日傳敎大師筑紫におはしてもろこしへ平にわたり給はむの御いのりに、かまどの山寺にて藥師佛四體を造り給ひき。同廿三年五月十二日弘法大師生年三十一と申しゝにもろこしへわたり給ひき。七月に傳敎大師おなじくもろこしへわたり給ひき。同廿四年六月に傳敎大師

もろこしよりかへり給ひて天台の法文これよりひろまりしなり。

第五十二　平城天皇　天長元年七月七日崩。年五十一。葬楊梅陵。

次の御門平城天皇と申しき。桓武天皇の御子。御母内大臣藤原良繼の女、皇后乙牟漏なり。延暦元年十一月廿五日に東宮に立ち給ふ。御年十二。早良親王の御かはりなり。同六年五月に御元服ありき。大同元年五月廿八日に位に即き給ふ。御年三十二。世を知り給ふ事四年なり。御心さとく御ざえかしこくおはしましき。十一月に天台の受戒はじまりき。今年崇道天皇の御ためにやましなに八島寺を建てたまひて諸國の正税の上分を奉りて祈り玄づめたてまつり給ひき。御門位に即き給ひしは、御弟のさがのみかどを東宮に立て申させ給ひたりしを、御門すて奉らむの御心ありしに、冬嗣の東宮の傅にておはせしがかゝる事なむ」と告げ申し給ひしかば、東宮おぢ恐り給ひて「いかゞせむずる」とのたまはせしかば冬嗣「この事今日あす既に侍るべきことにこそ。人の力の及ぶべきにあらず。父みかどの陵に祈り申したまふべきなり」と申し給ひしかば、東宮日の御さうぞく奉りて庭におりて遙に柏原の方を拜し、雨玄づくと泣きうれへ申させたまひしに、俄に烟世の中にみちて夜の如くになりにしかば、御門驚きおのゝき給ひて御占ありしに、柏原の御祟と占ひ申しゝかば、御門おほきに驚き給ひてこの事を陵に悔い申させ給ひしかば、二日ありて烟やうやううせにき。同二年十月廿二日に弘法大師もろこしよりかへり給へりき。東寺の佛法これよりつたはれりしなり。この大師あらはに檻者とふるまひたりき。御手ならびなく書かせ給ひしかば、もろこしにても御殿の

壁の二ま侍るなるに義之といひし手かきの物を書きたりけるが、年久しくなりてくづれにければ、又改められてのち大師に書き給へと唐土の御門申し給ひければ、五つの筆を御口左右の御足手にとりて壁に飛びつきて、一度に五くだりになむ書き給ひける。この國に歸り給ひて南門の額は書き給ひしぞかし。さて又應天門の額を書かせ給ひしに、かみのまろなる點を忘れ給ひて、門にうちてのち見つけ給ひて驚きて筆をぬらして投げあげ給ひしかばその所につきにき。見る人手をうちあざむ事かぎりなく侍りき。只空に仰ぎて文字を書き給ひしかばその文字あらはれき。これのみならず事にふれてかやうのこと多く侍れど、唯今思ひ出さるゝ事を片はし申すなり。十一月に中務卿伊與親王、御門を傾け奉らむとはかり奉るといふ事聞えて、母の夫人ともに河原寺の北なりし所に籠められ給へりしに、みづから毒を食ひてうせ給ひにき。その親王管絃の方勝れ給へりき。その後世の中心ちおこりて大嘗會もとまりにき。同三年慈覺大師生年十五にて比叡の山にのぼり給ひて、傳敎大師の御弟子になり給ひしなり。もとは下野國の人におはす。いまだ下野におはせしに傳敎大師を夢に見奉りてあけくれいかで大師の御許へ參らむと思ひ給ひしに、遂に人につきて上り給ひて、山に登りて見奉り給ひしに、夢の御すがたにいさゝか違ひ給はざりき。同四年に御門春の頃より例ならず思されてをこたり給はざりしかば、位を御をとゝの東宮にゆづり奉りて太上天皇と申しき。御子の高岳親王を東宮に立て申したまふ。

第五十三　嵯峨天皇　承和九年七月十五日崩。年五十七。
葬嵯峨西山陵。

次の御門嵯峨天皇と申しき。桓武天皇の第二の御子。平城天皇のひとつ御腹なり。大同元年五月十八日に東宮に立ちたまふ。御年廿一。同四年四月十三日に位に即きたまふ。御年廿四。弘仁元年正月に太上天皇ならの都にうつり住み給ふ。中納言種繼のむすめに内侍のかみと申しゝ人をおぼしめしき。そのせうとの右兵衛督仲成心落居ずして妹の威をかりてさまざまの横さまの事をのみせしかども、世の人はゞかりをなしてとかくいはざりき。内侍のかみも心さまをづまり給はざりし人にて太上天皇に事にふれて位を去り給ひにし事の口をしきよしをのみ申し聞かせしかば、悔しくおぼす心やうやういで來給ひし程に、九月に内侍のかみ太上天皇を勧め奉りて位にかへり即きてわれ后に立たむといふ事いできて、世の中をづかならずさゝめきあへりし程に、御門内侍のかみのつかさ位をとり給ひ、仲成を土佐國へ流し遣すよし宣旨を下させ給ひしに、太上天皇大きに怒り給ひて十日丁未畿内のつはものを召し集め給ひしかば、御門關をかためしめ給ひて田村麿の中納言の大將と申しゝを俄に大納言になし給ひてき。事既におこりにしかばかねて將軍の心を勇ましませ給ひしにこそ。さて十一日に太上天皇軍を起して内侍のかみとひとつ御輿にたてまつりて東國の方へむかひ給ひしに、大外記上毛頴人ならより馳せ參りて「太上天皇既に諸國の軍を召し集めて東國へ入り給ひぬ」と御門に申しゝかば、大納言田村麿、宰相綿麿をつかはしてその道を遮りて仲成を射殺してき。太上天皇の御方の軍逃げうせにしかば、太上天皇すぢなくて歸り給ひて御ぐしおろして入道ぢ給ひてき。御年三十七なり。内侍のかみみづから命をうしなひてき。おそ

ろしかりし人の心なり。太上天皇の御子の東宮を捨て奉りて御門の御弟の大伴親王とて淳和天皇のおはしましゝを東宮に立て申させ給ひき。すべて太上天皇の御方の人罪をかうぶる多かりき。同二年正月七日初めて青馬を御らんじき。廿三日に豊樂院に出給ひて弓あそばして親王以下射させ奉らせ給ひしに、御門の御弟の葛井親王はいまだ幼くおはして弓射給ふうちにもおぼしよらざりしを、御門たはぶれて「親王幼くとも弓矢をとり給ふべき人なり。射給へ」とのたまはせしに、親王たちはしりて射給ひしに二つの矢みな的に當りにき。生年十一にぞあり給ひし。母方のおほぢにて田村麿大納言その座に侍りて驚き騒ぎ喜びて、えゑづめあへずして座を立ちてうまごの親王をかき抱き奉りて舞ひかなでゝ御門に申していはく「田村麿むかし多くの軍の將軍としてえびすを討ち平げ侍りしは唯御門の御威なり。つはものゝ道を習ふといへどもいまだ極めざる所おはし。今親王の年幼くしてかくおはする、田村麿更に及び奉るべからず」と申しき。今もむかしも子孫を思ふ心はおはれに侍る事なり。さてほどなく五月廿三日に田村麿うせにき。年五十四になむなりし。かたちありさまゆゝしかりし人なり。丈五尺八寸胸のあつさ一尺二寸、目は鷹のまなこの如く鬚はこがねの糸すぢをかけたるが如し。身を重くなすときは二百一斤、輕くなすをりは六十四斤、心にまかせて折にしたがひしなり。怒れるをりは眼を廻らせばけだもの皆仆れ、笑ふ時はかたちなづかしく幼き子もおぢ恐れずいだかれき。たゞ人とは見え侍らざりしなり。同四年正月に御齋會のうち論義は始まりしなり。今年冬嵩山階寺の内に南圓堂を建て給ひにき。その時藤氏の人僅

に三四人おはせしを歎きて、氏のさかえを願してたて給へりしなり。誠にその志るしと見え侍り。神武天皇より後御門の御後見代々におはすれども、子孫相繼ぎて今日おすまでかくおはするはこの藤氏こそはおはすめれ。六月一日官府を下し給ひて病人を道のほとりに出し捨つる事をとゞめさせ給ひき。「尊きもいやしきも命をしむ心はかはる事なきを、世の人生けるをりは苦しめ使ひて病づきぬれば即ち大路にいだす。扱ひ養ふ人さらになければつひに飢ゑ死ぬ。永くこの事をとゞむべし」とおほせ下されしこそめでたき功徳とおぼえ侍りしか。この頃もやすくありぬべき事なり。五年の春傳敎大師もろこしへ渡り給ひしをりの願を遂げむとて、筑紫へおはして佛をつくり經をうつしたまふ。又宇佐の宮の神宮寺にてみづから法華經を講じたまひしに、大菩薩託宣し給ひて「われ久しくのりを聞かざりつ、今わがためにさまざまの功徳を行ひ給ふ、いとうれしき事なり。わがもてる衣あり」とのたまひて託宣の人御殿に入りて紫の七條の御袈裟一帖、紫の襖一領を大師に奉り給ひき。ねぎはふりあど「昔より斯る事をいまだ見聞かず」と申し侍りき。その御袈裟襖今に比叡の山にあり。五月八日皇子たち源といふ姓をたまはり給ひき。同七年弘法大師入定のところを高野の山に定め給ひき御年四十三。同十三年六月四日傳敎大師うせ給ひにき。生年五十六年になむなり給ひし。同十四年御門位を御おとゝの東宮に譲り奉りて、やがてその御子の治部卿親王恒世を東宮に立て申し給ひしを、親王おながちに遁れ申し給ひて籠り居て御使をだに通はし給はざりしかば、仁明天皇の御子にておはしましゝを東宮に立て給ひき、位をこそ東宮にてお

はしませばかぎりありて譲り奉り給はめ、我が御子のおはしまさぬにてもなきに、おとゝの御子を東宮にさへ立て奉らむと云給ひし御心はありがたかりしことなり。

第五十四　淳和天皇　承和七年八月日崩。年五十五。葬物集陵。

次の御門淳和天皇と申しき。桓武天皇の御三の御子。御母は參議百川の女旅子なり。弘仁元年九月に東宮に立ちたまふ。御年二十五。平城天皇の御子高岳親王の御かはりなり。同十四年四月廿八日に位に即きたまふ。御年三十八。世を去りたまふ事十年なり。天長二年十一月四日丙申御門嵯峨の法皇の四仁十の御賀したまひき。ことし浦島の子はかへれりしなり。もたりし玉の箱をあけたりしかば紫の雲西ざまへまかりて後、いとけなかりけるかたちたちまちに翁となりてはかばかしく歩みをだにもせぬほどになりにき。雄畧天皇の御代にうせて今年三百四十七年といひしに歸りたりしなり。同四年に智證大師生年十四にて讃岐國よりのぼり給ひて比叡の山へのぼり給ひき。はゝは弘法大師の御めいなり。同九年十一月十二日に弘法大師高雄より高野へかへり居給ふべきよし申し給ひしかば、太上天皇弘福寺たまはせき。高野より都に通ひ給はむ道のやどり所にしたまへとぞの給はせし。弘福寺は天武天皇の御願なり。同十年二月廿八日に御門位を御甥の東宮にゆづり申し給ひて西院にうつりおはしましき。

第五十五　仁明天皇　嘉祥三年三月廿一日崩。年四十一。葬深草山陵。

次の御門仁明天皇と申しき。嵯峨天皇の第二の御子。御母太皇大后橘嘉智子なり。弘仁十四

年四月東宮に立ちたまふ。御年十五。天長十年二月六日位に即き給ふ。御年二十四。世を治り給ふ事十七年。御ざえかしこく管絃の方もいみじくおはしましき。すべて御身の能いにしへの帝王にも勝れ給ひて、くすしの方などさへならび奉る人なかりしなり。今年慈覺大師如法經をかき給ひき。承和元年正月二日淳和院へ朝覲行幸侍りき。弘法大師の申し行ひ給ひしによりて今年より後七日の御修法はじまりしなり。三月廿一日に弘法大師定に入り給ひにき。生年六十二なり。同四年六月十七日慈覺大師もろこしへわたり給ひき。同五年十二月十九日に佛名ははじまりしなり。この月に小野篁を隱岐國へ流しつかはしき。その故は度々もろこしへ遣さむとせしめども、身に病侍るよしなど申してまからざりしにおはせて、もろこしへ遣しける文のことばのつゞきにひかされて世のためによからぬ事どもを書きたりけるを、嵯峨の法皇御覽じて大きにいかり給ひて流しつかはさせ給ひしなり。同六年正月に篁おきへまかりし。

「わたのはらやそ島かけてこぎいでぬと人にはつげよあまのつり船」

とはこの時によみ侍りしなり。同七年四月八日始めて灌佛は行はれしなり。六月に小野篁召し還されて未だ位もなかりしかば黃なるうへのきぬを着てぞ京へは入れりし。同九年七月十五日に嵯峨法皇うせさせ給ひにき。當代の御父に坐します。十七日平城天皇の御子に阿保親王と申し、人嵯峨のおほ后の御許へ御消そくを奉りて申し給ふやう「東宮の帶刀こはみねと申すものまできて太上法皇既にうせさせ給ひぬ。世の中の亂出で來侍りなむず。東宮を

東國へわたし奉らむ」と申すよしを告げ申し給ひしかば、忠仁公の中納言と申しておはせしを后呼び申させ給ひて、阿保親王の文を御門に奉り給ひき。この事こはみねと但馬權守橘逸勢とはかれりける事にて、東宮は知り給はざりけり。廿四日に事あらはれて廿五日に但馬權守を伊豆國へつかはし、こはみねをおきへつかはす。又中納言よしの宰相あきつなど流されにき。この但馬權守と申すは世の人きせいとぞ申す神になりておはすめり。東宮おそりおぢ給ひて太子を遁れむと申し給しひかば、御門「この事はこはみねひとりが思ひたちつる事なり。東宮の御あやまりにあらず。とかくおぼす事あかれ」とてたゞもとのやうにておはしまさせき。東宮と申すは淳和天皇の御子なり。御門には御いとこにておはしましゝなり。今年十六にぞなり給ひし。八月三日御門冷泉院に行幸ありてすゞませ給ひしに、東宮もやがて參らせ給ひたりしに、いづ方よりともなくて文をなげいれたりき。こはみねが東宮を敵へ奉りたる事どもありしかば俄に東宮の宮づかさ帶刀おもと人など百餘人とらへられて、東宮をば淳和院へかへし奉りて、四日當代の第一の親王を東宮に立て申し給ひき。文德天皇これにおはします。嘉祥元年三月二十六日に慈覺大師もろこしよりかへりたまふ。もろこしにおはせし間惡王にあひたてまつりてかなしきめどもを見給へりしなり。佛經をやきうしなひ尼法師を還俗せさせしめ給ひしをりにあひて、この大師も男になりて頭をつゝみておはせしなり。同三年三月に御門御病重くならせ給ひて、御ぐしおろして中一日ありてうせおはしましきとぞ。さてこの申す事は、見聞きし事ばかりなれば、大切なる事もおほくおち侍りぬら

む。これは唯おほやうのありさまをおぼし合せさせむと思ひ給ふるばかりなり。この申し續けつる事ども曉のねぶりのほどの夢にいづこか違ひ侍りたる。いづらはめでたかりし世の中いづらはわろかりし事、たとひ神武天皇の御代より生ける人ありとも、我が身にて思ふにながき夢見たる人にてぞ侍らむ。ましてこの頃の人命長からむ定七八十なり。とてもかくてもありぬべし。大かた世の中の滅劫のする佛の滅後に小國のなかに生れて、見聞く事のわろからむこそまことのことわりなれ」とて、もとの道さまへ歸りまかりにき。今かくかたり申すも、猶仙人の申し、事十が一をぞ申すらむ。そのなかに猶ひが事多く世の人の皆知りをこがましき事どもにてこそ侍らめ。いなづらにいをねむよりは御目をもさまし奉らむとてあさましかりし事のありさまを語り申すなり。御心の外に散し給ふな」とて、夜明けがたになりしかば又所作などして「京へ必ずおはせ」と契りてまかりいでにき。その後ゆきがたをしらず。尋ねてきたることもなし。本意なきことかぎりなし。心より外にはといひしかどもこの事をけちてやまむ、口をしくて書きつけ侍るなり。世あがりざえかしこかりし人の大かゞみなどいひて書きおきたるにはにずして、ことば卑しくひが事多うして見所なく、文字おち散りて見む人にそしりわざむかれむ事うたがひなかるべし。紫式部が源氏など書きて侍るさまは、たゞ人のきわざとやは見ゆる。されどもその時には日本紀の御つぼねなどつけて笑ひけりとこそは、やがて式部が日記には書きて侍るめれ。ましてこの世の人のくちかねて推し量られてかたはらいたく覺ゆれども、人のためとも、思ひ侍らず。唯若くよりかやうの事

の心に玄みならひて行のひまにも捨てがたければ、われ一人見むとて書きつけ侍りぬ。大鏡の巻も凡夫の玄わざなれば佛の大圓鏡智の鏡にはよも及び侍らじ。此も若し大かゞみに思ひよそへばそのかたち正しく見えずとも、などか水かゞみのほどは侍らざらむとてなむ。

水鏡 終

今鏡

今鏡第一

すべらぎの上

やよひの十日あまりの頃、同じ心なる友だちあまたいざなひて、はつせに詣で侍りしついでに、よきたよりに寺めぐりせむとて大和のかたに旅ありき日ごろするに、路遠くて日もあつければ、木かげに立ちよりて休むとてむれゐる程に、みづはさしたる女の杖にかゝりたるがめのわらはの花がたみにわらび折りいれてひぢにかけたるひとり具して、その木のもとにいたりぬ。「遠き程にはあらねど苦しくなりて侍れば、おはしあへる所はゞからしけれど、都のかたよりものし給ふや。むかし戀しければ、をばしもなづさひたてまつらむ」といふけしきも、口すげみわなゝくやうなれど、年よりたるほどよりも、昔おぼえてにくげもせず。「此のわたりにおはするにや」など問へば、「もとは都に百とせあまり侍りて、その後山城の狛のわたりにいそぢばかり侍りき。さて後おもひもかけぬ草のゆかりに、春日野わたりに住み侍るなり。すみかのとなりかくなりし侍るも、あはれに」といふに、年の積り聞く程に、みな驚きておさましくなりぬ。「昔だにさほどの齢はあり難きに、いかなる人にかおはすらむ。誠ならばあり難き人見たてまつりつ」といへば、うち笑ひて「つくも髪はまだおろし侍らねど、は

とけの五つのいむ事をうけて侍れば、いかゞ浮きたるとは申さむ。おほぢに侍りし者もふたゝちに及ぶまで侍りき。おやに侍りしもそればかりこそ侍らざりしかども、もゝとせに餘りて身まかりにき。おうなも、其の齢を傳へ侍るにや。いまいまと待ち侍りしかど、今はおもなれてつねにかくてあらむずるやうに、念佛などもうとりのみなるもあはれになむ」といへば「さていかにおはしけるつゞきにか。あさましくも、長くもおはしける齢どもかな。からのふみ讀む人の語りしは、みちよへたる人も有りけり。もゝとせを七かへり過ぐせるも有りければこの世にも、斯る人のおはするかな」と此の友だちの中にいふめれば、「おほぢはむげに賤しき者に侍りき。ささいの宮になむ仕へまつり侍りける。名は世繼と申しき。おのづから聞かせ給ふらむ。くちにまかせて申しける物語、とゞまりて侍るめり。親に侍りしは、なま學生にて大學に侍りき。この嫗をも若くては、宮仕へなどせさせ侍りて、からの哥やまとの歌などよく作りよみ給ひしが、越の國の司におはせし御むすめに式部の君とまし〳〵の、上東門院の后の宮と申し〳〵時、御母の應司殿にさぶらひ給ひし局に、あやめと申してまうで侍りしを、「五月に生まれたるか」と問ひ給ひしかば「五日になむ生まれ侍りける。母の志賀のこそわなれ、午の時にや生れたる」と侍りしかば「云かはどに侍りけるとぞおやは申し侍りし」など申せば、もゝたび錄りたるおかゞねなゝりとて、いにしへをかゞみ今をかゞみるなどいふ事にてあるに、いにしへもあまりなり。今鏡とや云はまし。まだをさをさしげなる程

よりも、年もつもらずみめもさゝやかなるに、小鏡とや付けまし」など語れば、「世に人の見興ずる事語り出だされたる人のうまごにこそおはすなれ。いとあはれにはづかしくこそ侍れ。式部の君たれがことにか」と問へば「紫式部とぞ世には申すなるべし」といふに、「それは名高くおはする人ぞかし。源氏といふめでたき物語作りいだして、世にたぐひなき人におはすれば、いかばかりの事どもか聞きもちたまへらむ。うれしき道にも逢ひきこえけるかな。昔の風も吹き傳へ給ふらむ。然るべき言の葉をも傳へ給へ」といへば「かたがたうけたまはると多かりしかども物語どもに皆侍らむ」といへば「その後の事こそゆかしけれ」といふに、「近き世の事も、おのづから傳へき、侍れば、おろおろ年の積りに申し侍らむ。若く侍りし昔は然るべき人の子など三四人生みて侍りしかど、此の身の怪しきにや皆法師になしつゝ、あるは山ぶみしわりきて跡もとゞめ侍らざりき。あるは山籠りにておほかた見る世も侍らず。たゞ養ひて侍る五節の命婦とて侍りし、内わたりの事も語り世の事もくらからず申して、琴のつまならしなどして聞かせ侍るも、齢のぶる心ちし侍りし。早くかくれ侍りてまた殿守のみやつこなるをのこの侍るも、うひかうぶりせさせ侍りしまで養ひたてゝ、この春日の里に忘れずまうでくるが、朝ぎよめ御垣の内に仕うまつるにつけて、此の世の事も聞き侍る。みなもとを知りぬれば末の流れきくに心くまれ侍り。世繼が申しおける萬壽二年よりことしは嘉應二年かのえ寅なれば、もゝとせあまりよそぢの春秋に、三とせばかりや過ぎ侍りぬらむ。世は十つぎあまり三つぎにやならせ給ふらむとぞおぼえ侍る。その折萬壽二年に、こと

しなると申したれば、彼の後一條のみかど世をたもたせ給ふ事廿年おはしましゝかば、萬壽二年の後いまとかへりの春秋はのこり侍らむ。神武天皇より六十八代にあたらせ給へり。その御世より申し侍らむ」とて、

くもゐ

「後一條のみかどゝは、前の一條の院の第二の皇子におはします。御母上東門院、中宮彰子と申しき。入道前の太政大臣道長のおとゞの第一の御むすめなり。このみかど寛弘五年長月の十日あまり、ひとひの日生れさせ給へり。同じ年の十月十六日にぞ親王の宣旨きこえさせ給ひし。同じ八年六月十三日東宮に立たせ給ふ。御年四つにおはしましき。一條の院位さらせ給ひて、御いとこの三條の院東宮におはしましゝにゆづり申させ給ひしかば、その御かはりの東宮に立たせ給へりき。かの三條の院位におはします事、五とせばかり過ぐさせ給ひて、長和五年むつきの廿九日に、位を此の帝に譲り申させ給ひき。御年九つにぞおはしましゝ。さて東宮には、かの三條の院の式部卿のみこを立て申させ給へりき。攝政は、やがて御おほぢの入道おとゞ、左大臣とて先のみかどの關白におはしましゝ、ひきつゞかせ給ひて次の年の三月に御子の宇治のおとゞ、右大將と聞こえさせ給ひしに、譲り申させ給ひにき。その日やがて内大臣にゝならせたまふと聞こえさせたまひにき。その八月九日、東宮わが御心とのかせ給ひき。三條の院も卯月に御ぐしおろさせ給ふ。五月にかくれさせたまひぬるにも、世の中さうざうしくおぼしめすにや。御病ひなどきこえてかくさらせ給ひぬれば、みかどの御

おとうとの第三の親王を、このかはりに立て申させ給ひて、廿五日にぞ、さきの東宮に院號きこえさせ給ひて、小一條院と申す。年毎のつかさくらゐ、もとの如く給はらせたまふ。御隨身などきこえ給ひき。堀河の女御の「見えしおもひの」などよみたまへる、ふるき物語に侍るめれば、こまかにも申し侍らず。寛仁二年正月には上の御年十にわたらせ給ひて、三日御元服せさせたまへれば、きびはにおはしますに、御かうぶりたてまつりて、おとなにならせ給へる御姿もうつくしう、いとめづらかなる雲ゐのはるになむ侍りける。卯月の廿八日に大内やうやう造り出だしてわたらせ給ふ。玄ろがねのうてな玉のみはし、磨きたてられたる有樣、いときよらにて、おきらけき御世の曇りなきもいとゞあらはれ侍るなるべし。御格子ゝ御簾も、あたらしくかけわたされたるに、雲の上人の夏頃も御だちのよそひなど、いとゞ涼しげになむ侍りける。おほ宮もいらせ給ふ。東宮もわたらせ給ひて、梅壺にぞおはします。入道おとゞの四の君は、威子の内侍のかみと聞こえたまひし、こよひ女御に參り給ひて、藤壺におはします。神無月の十日あまりのころ、ささきに立たせ給ふ。國母も后もおねおとゝにおはしませば、いとたゞひなき御榮えなるべし。廿二日に上東門院にみゆきありて、柱を折る試みせさせたまふ。題、霜をへて菊の性をしる。又みどりの松色を改むる事なし、などぞ聞えし。おほきおとゞたてまつらせ給へるとなむ。八月二十八日東宮御元服せさせ給ふ。御年十一にぞおはしましゝ。九月廿九日に、入道おとゞ東大寺にて御戒うけさせ給ひき。同四年かのえさる、三月廿二日に無量壽院つくり出ださせ給ひて、供養せさせ給ふ。ささき、みところ行啓

せさせたまふ。御ありさまども、ふるき物語に、こまかにはべれば、さのみ同じことをや申しかさね侍るべき。十月には入道のおとゞ、比叡にのぼりたまひて、廻心とかいひて、御戒重ねて受けさせたまふ。治安二年みづのえの戌の七月十四日法成寺に行幸せさせ給ひき。入道大臣金堂供養せさせ給ひしかば、東宮もきさきたちも、皆行啓せさせ給ひき。罪あるものども皆赦され侍りにけり。三年正月に太皇太后宮に朝覲の行幸せさせ給ひき。東宮もおなにやうに行啓せさせたまひける。ふたりの御子おはしませば、いとたぐひなき宮のうちなるべし。十月十三日に上東門院の御母慶司どの、六十の御賀せさせ給ふ。その御ありさまむかしの物がたりに侍れば、この中にも御覧せさせたまへる人も、おはしますらむ。萬壽元年九月十九日、關白殿の高陽の院に行幸ありてくらべ馬御覧せさせ給ふべきにて、太皇太后宮まづ十四日にわたりねさせたまひてぞ、まち奉らせ給ひける。かくて廿一日に、大宮は内へいらせ給ひき。高陽院の行幸には、かの家の司、加階などし侍りけり。村上の中務の宮の御子源氏の中將を、入道おとゞの御やしなひ子ときこえ給ふ。このたび三位中將になりたまひき。二年八月三日東宮のみやす所、をとこ宮うみたてまつり給ひて、五日にかくれさせ給ひき。入道おとゞの六の君におはする、御さいはひの中に、あさましく悲しと申すもおろかに侍れど、後冷泉院を生みおきたてまつり給へれば、いとやんごとなくおはします。そのをりの悲しさはたぐひなく侍りしかども、いきて后に立ちたまへる御姉たちよりも、おはしまさぬあとのめでたさは、こよなくこそ侍るめれ。

子の日

三とせの正月十九日、太皇太后宮御さまかへさせたまひき。后の御名も止めさせ給ひて上東門院と申しき。よそぢにだにまだ満たせたまはぬに、いと心かしこく世をのがれさせ給ふ。めでたくもおはれにも、きこえさせ給ひき。大齋院と申しゝは、選子内親王ときこえさせ給ひし、この御事を聞かせ給ひて、よみてたてまつらせ給へる御うた、

「君はしもまことのみちに入りぬなり獨やながきやみにまどはむ」。

此の齋院は、村上の皇后宮の生みおきたてまつらせ給へりしぞかし。東三條殿の御いもうとなれば、この入道殿には、御をばにあたらせ給ふぞかし。長月には中宮御産ときこえさせ給ひて、姫宮うみたてまつらせたまふ。左衛門の督兼隆ときこえたまひしが家をぞ御うぶやにはせさせ給へりし。男宮におはしまさぬは、くちをしけれど、御うぶやしなひなど、心ことにいとめでたく、ことわりと申しながら聞こえ侍りき。この姫宮は後冷泉院のきさき、二條の院と申しゝ御事なり。東宮に始めてまゐらせ給ひけるころ、出羽の辨見たてまつりて、

「春ごとの子の日はおほく過ぎぬれどかゝる二葉の松はみざりき」

とぞよめりける。同四年正月には、上東門院に年の初めのみゆきありて、朝覲の御拜せさせたまひき。常の所よりも御すまひありさま、いとはえばえしく、唐繪などのやうに、山の色水のみどり、木だちたて石などいと面白きに、位に玄たがへる色々の衣の袖、近衛司の平胡簶、平緒などめもあやなるに、きぬの色まじはれるうちより、からのまひ、こまの舞人、左右

かたがたに袖ふるほどなど、所にはえておもしろしなども、言葉も及ばずなむ侍りける。霜月には入道おほきおとゞ御病ひ重らせたまひて、千人の度者とかやいひて、法師になるべき人の數のふみたまはらせ給ふときこえ侍りき。法成寺におはしませば、その御寺に行幸ありて、とぶらひたてまつらせ給ふ。御誦經御布施など、さまざまきこえはべりき。東宮にも行啓せさせ給ふ。御うまご内東宮におはしませば、御病ひの折節につけても、御榮えのめでたさ、むかしもかゝる類ひやは侍りけむ。去はすの四日に入道殿かくれさせ給ひぬれば、年もかはりて、春のはじめの節會などもとゞまりて、位などたまはすることも、程すぎてぞ侍りける。長元二年きさらぎの二日、中宮又ひめ宮うみたてまつらせ給へり。この姫宮は後三條院のきさきにおはします。二人の姫宮たち、二代の帝の后におはします、いとかひがひしき御有樣なり。六年霜月に、たかつかさ殿の七十の御賀せさせ給ふとて、女院中宮關白殿内のおはいどの、かたがた營ませ給ひき。童舞などいとうつくしくて、まだいはけなき御齡どもに、から人の袖ふり給ふ有樣、いとらうありて、いかばかりか侍りけむ。又の日うちに召して、きのふのまひどもを御らんせさせ給へり。まひ人雲のうへゆるさるゝ人々ときこえ侍りき。舞の師もつかさ給はりて、近衛のまつりごと人など、加へさせ給ひけりとなむ。かの御賀の屏風に臨時客のところを、あかぞめの衛門がよめる、

「紫の袖をつらねてきたるかな春たつことはこれぞ嬉しき」。

又子の日かきたる所よめる歌も、いうにきこえ侍りき。

「萬代のはじめに君が引かれば子の日の松もうらやみやせむ」。
おなじき九年やよひの十日あまりの程より、うへの御悩みときこえさせ給ひて、神々にみてぐら奉らせ給へる、さまざまの御祈りきこえ侍りき。殿上人御使にて、左右の御馬など引かれ侍りけり。御年みそぢにだに、いま一つたらせ給はぬ、いとあたらし。されど廿年たもたせ給ふ、すゑの世にありがたく聞こえさせたまひき。まだおはします有様にて、御おとうとの東宮に、位譲り申させ給ふさまなりけり。後の御事の、よそほしかるべきによりて、くらゐおりさせ給ふ心なるべし。をとこ御子のおはしまさぬぞくちをしき。いづれの秋にか侍りけむ、翁の花星に似たりといふ題の御製、からの御言のはきこえ侍りき。

「司天記取葩稀色　分野望看露冷光」

とか人の語り侍りし。御ざえもかしこくおはしけるにや。菩提樹院に、此のみかどの御影おはしましけるを、出羽の辨がよめりける。

「いかにしてうつしとめけむ雲居にてあかずかくれし月の光を」。

かの菩提樹院は、二條院の御堂なれば、御心ざしのあまりに、父のみかどの御すがたをかきとゞめて、置き奉らせたまひけるなるべし。おもひやり参らするも、いとあはれに悲しくこそはべれ。

はつ春

後朱雀院と申す、さきの一條院の第三の皇子。御母上東門院、先代とおなじ御はらからにお

はします。このみかど寛弘六年つちのとの酉と申し、年の霜月の廿五日にうまれさせたまひけり。七年正月十六日に、親王とききこえさせ給ふ。御年九つとききこえさせ給ひき。長元九年四月十七日位につかせたまふ。御とし二十八。其の年御即位大嘗會など過ぎて、年もかはりぬれば、いつしか、む月の七日、關白左のおとゞとて宇治のおほきおとゞおはしまし、、女御たてまつらせ給ふ。帝の御兄におはしまし、式部卿の御子の女ぎみの、むらかみの中務の宮の御むすめの御はらにおはせしを、關白殿御子にしたてまつり給ひて、女御にたてまつり給へるなり。一條院の皇后宮の生みたてまつりたまへりし一の御子におはしませば、東宮にもたち給ふべかりしを、御後見おはしまさずとて、二のみこにて、先帝、三のみこにて此のみかどふたり、御堂のうまご、關白の御甥におはしませば、うちつゞき即かせたまへるなり。彼の一條院の皇后宮は、御せうとの内の大臣の、筑紫におはしまし、事どもに、おもはしなげかせ給ひて、御様かへさせ給へりしのちに、式部卿の御子を生みたてまつらせ給へるなり。から國の則天皇后の御ぐしおろさせ給ひてのちに、皇子生み給ひけむやうにこそおぼえ侍りしか。されどかれはさきのみかどの女御にて、彼の帝かくれさせ給ひにければ、世をそむきて、威業寺とかいふ寺に住み給ひけるを、先のみかどの御子位につき給ひて、かの寺におはして見たまひけるに、御心やよりたまひけむ。さらに后に立て奉りけるを、これは同じ御代の元のささきなれば、いたくかはり給はぬさまにて、なのめなる様にて侍りき。かしこき御世の御事申し侍るもかたじけなく。かの皇后の女房、肥後守元輔と申すがむすめ、清少納言

とて殊になさけある人に侍りしかば、常にまかりかよひなどして、彼の宮のこともうけ給はりなれ侍りき。その式部卿の親王の御むすめにおはしませば、みかどには姪に當らせ給へり。かくて彌生のついたちに、后に立たせ給ひぬ。御とし二十二にぞおはしましゝ。もとの后は皇后宮にならせたまひき。そのもとの后は、みかど東宮におはしましゝ時より、參り給へりき。三條院の姫宮におはします。それは御とし廿五にならせたまへりき。陽明門院と申すはこの御事なり。御ぐしのうつくしさを、故院「見まゐらせぬ、くちをし」とて、さぐり申させ給ひけむも思ひやられて。同じささきと申せども、やんごとなくおはします。久しく內へ參らせ給はざりけるころ、うちより、

「おやめ草かれし袂のねをたえてさらに戀路にまどふころかな」

と侍りけむ、御返事はわすれにけり。東宮におはしましゝ時の御息所なり。この后に御室の六の君まゐり給ひて、內侍のかみときこえたまひし、後冷泉院の今の東宮におはしましゝ生みおきたてまつりて、うせ給ひしかば、この宮は、その後參り給へるなり。故內侍のかみの御もとに、「かすみのうちにおもふ心を」とよませ給ひたる御歌、たまはり給ひけると聞こえ侍りしものを。長曆元年神無月の廿三日、關白殿の高陽の院に、上東門院わたらせ給ひて、行幸ありて、きんだち院司など加階どもし給ひき。かくて年もあけぬれば、又正月二日上東門院に朝覲の行幸ありて、いづくと申しながら、猶この院のけしき有樣、山の嵐よろづ世よばふ聲をつたへ、池の水も、ちとせのかげをすまして、まちとりたてまつり給ひき。先帝かくれさ

せ給へれども、かくうちつゞきておはします、二代の國母とまうすもやんごとなし。又三日は東宮朝覲の行啓とて、内に參らせ給ふ。みかどのみゆきよりも、事しげからぬものから、はなやかにめづらしく、ゆげひのすけ一員などひきつくろひたるけしき、こゝろ殊なるべし。すべらぎの御よそひ、みこの宮の御ぞの色かはりてめづらしく、御拜のありさまなど袖ふりたまふたちゐの御よそひ、うつくしうて、喜びの涙もおさへがたくなむ有りける。列なれるむらさきの袖も、ことに玄たがへるあけもみどりも、華やかなる御垣のうちの春なりけるとなむきこえ侍りし。

はしわひ

中宮こぞより、いつしか唯ならず成らせたまひて、霜月の十三日に、左のおとゞの高倉殿に出でさせ給へりしが、次の年四月一日、女みこ生み奉らせ給ひて、又うちつゞき、またの年も同じやうにまかり出でさせ給ひて、丹後守行任のぬしの家にて、長暦二年八月十九日に、なほ女宮うみたてまつり給ひて、おなじき廿八日にうせ給ひにき。御とし廿四、おさなしくあはれなる事かぎりなし。いとゞ秋のあはれそひて、有明の月の影も心をいたなしむる色、ゆふべの露のしげきも、涙をもよほすつまなるべし。かくて九月九日に内より故中宮の御ために、七寺に御誦經せさせ給ふ。みかど御服たてまつりて、廢朝とて清涼殿の御簾おろしこめられ、日のおもの參るも、聲たてゝ奏しなどするともせず、よろづ玄めりたるまゝには、ゆふべの螢をもあはれとながめさせ給ふ。秋のともし火かゞけつくさせたまひつゝぞ、心ぐる

しき折ふしなりけるに、廿日ぞ解陣とかいひて、よろづ例ざまにて、御殿の御簾なども巻きあげられ、すこし晴るゝ景色なりけれど、なほ御けしきは霽させずぞ見えさせ給ひける。神無月も過ぎぬれば、御忌すゑになりて、かの失せ給ひにし宮にて、御佛事あり。こずゑの色も風のけしきも、思ひしりがほなるさまなり。くれなゐ掛はぬ昔のおとも、法のにはとて、殊に清められゝにつけても、折にふれて、おはれつきせざりけり。霜月の七日ぞ、内にははじめて、まつりごとせさせ給ふ。南殿に出でゐさせ給ひて、官奏などあるべし。後一條の院の中宮に侍りける、出雲の御といふが、この宮に侍りし伊賀の少將がもとに、

「いかばかり君なげくらむかずならぬ身だに去ぐれし秋のあはれを」

とよめりけり。秋の宮うちつゞき、秋うせさせ給へるに、いとらうありて、思ひよられけるもおはれにこそ聞こえはべりしか。またの年の七月七日、關白殿に、内より御消息ありて、

「こぞのけふ別れし星もおひぬなりなどたぐひなき我が身なるらむ」

とよませ給ひて侍りけむこそ、いとかたじけなく、なさけ多くおはしましける御ことかなとうけ給はりしか。楊貴妃のちぎりも思ひ出でられて、星合の空、いかにながめ明かさせ給ひけむといとおはれに「尋ねゆくまぼろしもがな」などや、おぼしけむと推しはかられてこそ、傳へきゝ侍りしか。詩などをも、をかしく作らせ給ひけるとこそ聞こえ侍りしか。「秋のかげいづちかへらむとす」などいふことに、

「路非山水誰堪趁　跡任乾坤豈得辭」

など作らせ給ひけるとこそうけたまはりしか。乾坤といふはおめつちといふことにぞ侍りける。長久二年三月四日、花の宴せさせたまひて、歌の舌は爲にしかずといふ題たまひて、柱を折る試みありと聞こえ侍りき。つぎの年のやよひの頃、堀川右大臣その時春宮の大夫と申しゝに、女御たてまつり給ひき。帥の内のおとゞのむすめの御はらなり。おとゞたちにも劣りたまはず、いとめでたく侍りき。神無月の比、おは二條殿内大臣ときこえ給ひし、二の君内侍のかみになりてまゐりたまひて、方々華やかにおはしき。十一月には二の宮御書始とて、式部大輔擧周ときこえし博士、御注孝經といふ文教へたてまつりき。藏人賀政、尚複とて、それも御師なるべし。同じき四年の三月にも、佐國孝言時綱國綱などいふ者ども、試みさせ給ひき。弓場殿にてぞ、作りてたてまつり給ひける。もと柱を折りたるは、博士をのぞみ、まだ折らぬ者は、ともしびの望みなむありける。句毎にもろこしの博士の名などおきければ、つゞりかなふる人かたくなむありける。寛徳元年八月に、大隅守長國但馬介になり、民部の丞生行おなじ國の掾になしたまひて、こまうどの、彼の國に着きたる、とぶらはせ給ひき。御あやみとて、明くる年正月十六日に、位さらせ給ひ御ぐしおろさせ給ふ。御年卅七になむおはしましゝ。世をたもたせたまふ事九年なりき。まだ若くおはしますさまを、惜しみ奉らずといふ人はなし。先帝廿九にておはしましき。これはされど、みそぢ餘りの春秋すぎさせ給へり。母ささきの、餘り永くおはしますに、かくのみおはしませば、御幸ひの中にも、御歎きに堪へざるべし。なほ御うまごの一の御子はみかど、二のみこは東宮におはしませば、いとや

んごとなき御有樣なるへし。

もち月

世繼もみかどの御ついでに、國母の御事申し侍れば、この帝の御母后の御事、この序に申し侍るべし。御年二十一二におはしましゝ時、後一條院、後朱雀院うちつゞき生み奉らせ給へり。土御門殿にて御一條院うみ奉らせ給へりし七夜の御遊びに、御簾のうちより出だされ侍りける、さかづきに添へられ侍りし歌は、むかしのみつぼねのよみたまへりし、

「珍らしき光さしそふさかづきはもちながらこそ千世はめぐらめ」

とぞおぼえ侍る。その女院十三より后におはしましき。一條院かくれさせ給ひて、後一條のみかど、をさなくおはしましけるに、なでしこの花をとらせ給ひければ、御母ぎさき、

「見るまゝにつゆぞこぼるゝおくれにし心も知らぬなでしこの花」。

五節のころ、昔を思ひいでゝ殿上人參りて侍りけるに伊勢の大輔、

「はやくみし山井のみづのうす氷うちとけざまはかはらざりけり」

とぞよみて出だし侍りける。寛弘九年二月に皇太后宮にあがらせ給ふ。御年廿五と聞こえさせ給ひき。後一條のみかど位に即かせたまひて、寛仁二年正月に太皇太后宮にならせたまひき。萬壽三年正月十九日に、御さまかへさせ給ふ。御とし卅九、御名は清淨覺と申しけり。きさきの御名とゞめさせ給ひて女院と聞えさせ給ふ。年毎のつかさ位たまはらせ給ふ事は、同じやうにかはり侍らざりけり。長曆三年五月七日御ぐしおろさせ給ふ。顯基の入道中納言、

「世をすて、宿を出でにし身なれどもなほ戀しきはむかしなりけり」

とよみて、この女院へたてまつり給へる御返事に、

「つかのまも戀しきことのなぐさまば二たび世をもそむかざらまし」

とよませ給へる、はじめは御ぐしそがせ給ひて、後に皆おろさせ給ふ心なるべし。かの中納言は後一條院の御おぼえの人におはしけるに、御忌におはして、宮のうちに御となぶらもたてさつらず侍りければ、いかにと尋ね給ひけるに、女官ども今の内に參りて、かきともしする人もなし、などきゝ給ふに、いとゞ悲しくて、帝のかくれさせ給ひて、六日といふに、かしらおろして、山ふかくこもりたまへりけり。年卅七になむおはしける。聞く人涙を流さずといふ事なくなむ侍りける。花山の僧正の、深草のみかどの御いみに、御ぐしおろし給ひけむにも、おくれぬ御心なるべし。猶つきせずおもほしけるにこそとかなしく、御返しもいとあはれに、御母后さこそはおもほしけめとおぼえて。かの東北院はこの院の御願にて、ちゝおとゞの御堂、法成寺のかたはらに作らせたまへり。山のかたち池のすがたもなべてならず、松のかげ花のこずゑも外にはすぐれてなむ見え侍りける。九月十三夜より望月の影まで、佛のみかほも光りそへられ給へり。御念佛はじまりける程に、上達部殿上人參り集まり給へるに、宇治のおほきおとゞの「朗詠侍りなむ」と勸めさせ給ひければ、齊信の民部卿、年たけたる上達部にて「極樂會を念じたてまつる事一夜」とうち出だし給ひけむ、折ふしいかにめでたく侍りけむ。齊名といふ博士のつくりたるが、生けるよに、いかにいみじく侍りけむ。此の世

ならば、今の人の作りたることよも出だし給はざらまし。殿上人紫苑色の指貫、この御念佛よりこそ着始め給ひしか。此の堂土御門の末にあたれば、上東門院と申すなり。この後代々の女院の院號、かどの名きこえ侍るめり。陽明門も、近衛にあたりたれば、此の例によりて附かせ給へり。郁芳門待賢門などは、大炊御門、中のみかどに御所おはしまさねど、なぞらへて附かせたまへるとぞ聞こえ侍る。待賢門院の院號のさだめ侍りけるに、なぞらへて付かせたまふならば、などさしこえて、郁芳門院とは付けたてまつりけるにか、など聞こえければ、顯隆の中納言といひし人の「此の御料に遣しておかれけるにこそ侍るめれ」と申されけるとかや。さてぞ付かせ給ひにけるとなむ。みかどの御前などにては、土御門近衛などは申さで、上東門の大路よりはいづかた、陽明門のおほぢよりはそなたなどぞ奏すなる。されば一條二條など申すにもおなじ心なるべし。この上東門院の御年は、八十七までおはしましき。

菊の宴

此の次のみかどは、御冷泉の院と申しき。後朱雀院の第一の皇子。御母内侍のかみ、贈皇太后宮嬉子と聞えき。入道おほきおとゞの第六の御むすめなり。上東門院のおなじ御はらからにおはします。此のみかど萬壽二年きのとの丑の年の八月三日生れさせ給へり。長暦元年七月二日御元服、やがて三品の位たまはらせ給ふ。八月十七日に東宮に立たせ給ひて、寛徳二年正月十六日に即かせたまふ。御とし二十一にぞおはしましゝ。永承元年やよひの比、いつきたち、おのおの定めさせ給ふ。七月十日中宮たゝせたまひき。東宮の御時より御息所にてお

はしまし〳〵、後一條院の姫宮なり。神無月も過ぎて、みかど今年ぞ豊のみそぎせさせ給ふ。正月十六日御いみの月とて、踏歌の節會もなし。十月に關白殿のおとうとの右の大臣女御たてまつりたまふ。大二條殿と申し〳〵御事なり。同じき四年十一月に、殿上の歌合せさせ給ひき。村上の御時、花山院などの後、めづらしく侍るに、いとやさしくおはしまし〳〵にこそ。能因法師の「いはねの松も君がため」と一番の歌によみて侍る。このみちのすきもの時にあひて侍りき。「たつたの川のにしきなりけり」といふ歌も、此のたびよみて侍るぞかし。五年しはす關白殿のみむすめ女御に參り給ふ。四條の宮と申し〳〵御事なり。六年二月十日、后にたち給ふ。皇后宮と申しき。もとの后は、皇太后宮にわたり給ひき。さつき五日殿上のあやめ根あはせせさせ給ひき。その歌ども、歌合の中に侍るらむ。后の宮さとにおはしましける時、良遲法師「もみぢ葉のこがれて見ゆる御ふねかな」といふ連歌、殿上人の付けざりけるをも、みかどの御恥におぼしめしたりけるも、いとなさけおはしましけるにこそ。九月九日菊の宴せさせ給ひて、「菊ひらけて水の岸からばし」といふ題を作らせ給ひけるとぞ聞こえ侍りし。七年神無月のころ、釣殿にて御あそびあり。文つくらせ給ひけるとそきこえ侍りし。かやうの御あそびつねの事なるべし。

こがねのみのり

いづれの年にか侍りけむ。九月十三夜高陽院の内裏におはしましけるに、瀧の水音すゞしくて、岩まの水に月やどして御覽せさせ給ひて、よませたまひける、

「岩間より流るゝ水ははやけれどうつれる月の影ぞのどけき」

とぞ聞こえはべりし。治暦元年九月廿五日に、高陽院にてこがねの文字の御經、みかど御みづから書かせ給ひて、御八講行はせ給ひき。村上の御代のみづぐきの跡を、流れくませ給ふなるべし。はじめの御導師は勝範座主の、まだ僧都などきこえし折ぞせらるゝと聞こえ侍りし。いづれの問とかいひて、論義の事のよしなども、彼の村上の御時のをぞ、塵ばかり引きかへたるやうなりけるとぞ、聽聞しける人など傳へ語り侍りし。五巻の日は宮々上達部殿上人みな捧げ物たてまつりて、たつとりのから船池にうかびて、水の上にこゑごゑ調べわひて、佛の御國うつし給へり。紅葉のにしき水の綾、所も折もかなへる御のりの庭なるべし。三年十月十五日には宇治の平等院にみゆきありて、おほきおとゞ二三年かれにのみおはしましゝかば、わざとのみゆき侍りて、見奉らせ給ふとぞうけたまはりし。うちはしの遙かなるに舟より樂人參り向ひて、宇治川に浮べて、漕ぎのぼり侍りける程、から國もかくやとぞ見えけると語り侍りし。御堂の有樣、川のうへに、錦のかりや造りて、池の上にも、から船に笛のね、さまざましらべて、御前のものなどは、こがね白がね、色々の玉どもをなむ、つらぬき飾られたりける。十六日にかへらせ給ふべきに、雨にとゞまらせ給ひて、十七日にふみなど作らせたまふ。そのたびのみかどの御製とてうけ給はり侍りしは、

「忽看烏悪三朋伴　影暫駐鸞輿一日蹤」

とかや作らせたまへると、ほのかにおぼえはべる。「折にあひて、おぼしよらせ給ひけむほど

ひとめでたき事」と知りたる人申しける。そのたびぞ准三宮の宣旨は、宇治殿かうぶらせ給ひけると聞こえさせ給ひし。その頃にや侍りけむ。内裏にて童舞御覧ぜさせ給ひき。上達部の若君たち、おのおの舞ひ給ひき。樂人は殿上人、さまざまのふきもの、ひきものなどせさせたまふ。其の中に六條の右のおとゞの中納言と聞こえたまひし時、その若君胡飲酒まひ給ふを、御前にめして、御ぞ賜ふに、おほぢの内大臣とておはせし、座をたちて拜し給ひけるは、土御門のおとゞとぞきこえ給ひし。舞ひたまひしは、太政のおとゞとや申しけむ。かくて去はすの十二日、廿二社にみてぐらたてまつらせ給ひき、みかどの御悩みの事とて。つぎの年正月一日は日蝕なりしかば廢朝とてみすもおろし、世の政事も侍らざりき。さきのおはきおとゞも御悩みとて、さきらぎのころ、皇后宮もさとに出でさせ給ひき。内には孔雀明王の法おこなはせ給ひて、大御室とておはしましゝ仁和寺の宮、御弟子僧綱になり、我が御身も牛車など蒙りたまひき。みかど御心ちをこたらせ給ふなるべし。四月にはこがねしろがね、綾錦などのみてぐら、神々の社に奉らせ給ひき。かゝる程なれど、左の大臣のみむすめの女御皇后宮に立ちたまひき。ちゝおとゞも關白になりたまひき。内にも御なやみ怠らせ給はず。おはきおとゞも、よろづのがれ給ひて、譲り申し給ふなるべし。みかど世をたもたせ給ふ事、廿三年なりき。御とし四そぢに四年ばかりあまらせ給へりけるなるべし。をとこにても女にても、御子のおはしまさぬぞくちをしきや。御はゝ内侍のかみ御とし十九にて、このみかど生みたてまつりたまひて、かくれさせたまひにき。寛徳二年八月十一日に、皇后宮おくりた

てまつられき。國忌にて、その日はよろづのまつりごと侍らず。昔は后にたち給はでうせたまへれど、みかどの御母なれば、後にはやんごとなき御名とゞまりたまへり。

司めし

此の次のみかど後三條の院にぞおはしましゝ。まだ御子におはしましゝ時、父の帝後朱雀院さきの年の冬よりわづらはせ給ひて、むつきの十日あまりの比、位さらせ給ひて、みこの宮にゆづり申させたまふとばかりにて、東宮の立たせ給ふ事は、ともかくも聞こえざりけるを、能信大納言とて、宇治どのなどの御弟の、高松の腹におはせしが、御前にまゐりて「二の宮をいづれの僧にか付け奉りはべるべき」と聞こえさせ給ひけるに「坊にこそは立てめ。僧にはいかゞ附けむ。關白の、東宮のことはしづかにといへば、後にこそは」と仰せられけるを「けふ立たせ給はずは、かなふまじきことに侍り」と申したまひければ、「さらば今日」とてなむ東宮はたゝせ給ひける。やがて大夫には、その能信大納言なりたまへりき。君の御ため、たゆみなくすゝめたてまつり給へりけむ、いとありがたし。されば白河院は、まことにや大夫どのとぞ仰せらけるとぞ人は申し侍りし。二の宮とは後三條院の御事なり。このみかどは、後朱雀院の第二の皇子におはします。御母太皇太后宮禎子の内親王と申す。陽明門院この御事なり。みかど寛徳二年正月十六日に東宮に立たせ給ふ。御とし十二。治暦四年四月十九日位に即かせたまふ。御年三十五。大極殿もいまだ造られねば、太政官の廳にて御即位侍りける。世を治めさせ給ふ事、昔かしこき御世にも恥ぢずおはしましき。御身の才はやんごとなき博士

どもにもまさらせ給へり。東宮におはしましける時、匡房中納言まだ下﨟に侍りけるに、世を恨みて山の中に入りて、世にもまじらじなど申しければ、經任の中納言と申し人の、「われは、やんごとなかるべき人なり。然あらば世のため身のため、くちをしかるべし」といさめければ、宇治のおほきおとゞ心得ずおぼしたりけれど、東宮に參り侍りければ、宮も喜ばせ給ひて、やがて殿上して、人のよそひなど借りてぞ、ふだにもつきける。さてよる晝文のみちの御ともにてなむ侍りける。位に即かせ給ふ始めに、つかさもなくて、五位の藏人になりたりければ藏人の式部大夫とてなむ。おきたるにしたがひて中務の少輔にぞなり侍りける。大貳實政は東宮の御時の學士にて侍りしを、時なくおはしませば、かまへて參りよらぬ事にならむと思ひけるに、さすが痛はしくて甲斐守に侍りければ、かの國よりのぼりて參るまじき心がまへしけるに、くだりけるに、餞せさせたまふとて、

「州民縱發作甘棠詠　莫忘多年風月遊」

と作らせ給へりけるにあむ。え忘れ參らせざりける。甘棠の詠とは、から國に國の守になりける人のやどれりける所に、やまなしの木のおひたりけるを、その人の都へかへりてのち、政事うるはしく、玄のばしかりければ、「このなしの木伐る事なかれ。かの人のやどれりし所なり」といふ歌をうたひけるとなむ。さてみかど位につかせ給ひて後、「左中辨に加へさせ給へ」と申しければ、「つゆばかりもことわりなきことをばすまじきに、いかでかゝることをば申すぞ。正左中辨に始めてならむ事あるまじき」よし仰せられければ、藏人の頭にて、資仲の中納

言侍りけるが、重ねて申しけるは、「實政申す事なむ侍る。木津のわたりの事を、一日にても思ひ知り侍らむ」と奏しければ、其の折おもはししづめさせ給ひて、計らはせたまふ御けしきなりけり。昔實政は東宮の春日の使にまかり下りけり。隆方は辨にて罷りけるに、實政まづ船など設けて渡らむとしけるを、隆方おしさまたげて、「待ち幸ひする者、何に急ぐぞ」などないがしろに申し侍りければ、からくおもひて、かくなむと申したりけるを、おもはし出して、此のことわり天照る御神に申しうけむとて、左中辨には加へさせたまひてけり。隆方はかりなき心はへにて、殿上に司召のふみ出だされたるを、上達部たち、かつかつ見たまひて、何になりけり、かれに成りにたりなどのたまはせけるを、隆方つかうまつりて侍らむなど、得たりがほに云ひけるを、さもあらぬ者のかみに加はりたるぞなど、人々侍りければ、うちしめりて出でにけり。次のあしたの陪膳は、隆方が番にて侍りけるを、「よも參らじ。こと人をもよほせ」と仰せられける程に、午の時よりさきに、隆方まゐり侍りければ、みかどさすがにおもはしめして、日ごろは御ゆする召して、うるはしく御髮かゝせ給ひて、たしかにつかせたまふ御心に、けふは待ちけれども、程すぎて出でさせたまへりけるに陪膳つかうまつりて、辨も辭し申して、こもり侍りにけりとなむ。御代のはじめつ方の事にや侍りけむ。内裏燒亡の侍りけるに、殿上人上達部なども、さぶらひあひたまはね程にて、南殿に出でさせたまへりけるに、御覽じもしらぬ者、すくよかに走りめぐりて、内侍所出だしたてまつり、右近の陣に、御輿たづね出だして、御はしに寄せて、載せたてまつりなどしければ、「おのれは誰れ

ぞ」と問はせたまひけるに「右少辨正家」と申ければ、「辨官ならば近くさぶらへ」とぞ仰せられける。正家匡房とて、時にすぐれたる一つがひの博士なるに、匡房は朝夕さぶらひけり。これは御覽じも知られまゐらせざりけるにこそ。つかさをさへ具して、名對面申しけむ、折節につけて、いとかどある心ばへなるべし。さてこそ、これかれの殿上人上達部、束帶なるも、又直衣狩衣などなる人も、とりもあへずさまざまに參りあつまりたりけれ、となむきこえ侍りし。

今鏡第二

すべらぎの中

たむけ

此の帝、世を去らせ給ひてのち、世の中みな治まりて、今にいたるまで、其のなごりになむ侍る。たけき御心おはしましながら、又なさけ多くぞおはしましける。石清水の放生會に上卿宰相諸衞のすけなどたてさせ給ふ事も、この御時より始まり、佛の道もさまざまそれよりぞまことしき道は、おこれる事多く侍るなる。圓宗寺の二會の講師おかせ給ひて、山三井寺ざえ高き僧など、位たかくのぼり、深き道もひろまり侍るなり。又日吉の行幸はじめてせさせ給ひて、法華經おもくあがめさせ給ふ。かの道ひろまる所を、おもくせさせ給ふ事は、誠に御

法をもてなさせ給ふにこそはべるなれ。ひえの明神は法華經守り給ふ神におはします。深き御法を守り給ふ神におはすれば、動きなく守り給はむ爲に、世の中の人をも廣く恵み、去るしをも極め施したまふなるべし。石清水の行幸、はじめてせさせ給ひけるに、物見車どものかな物うちたるを御覽じて、御輿とゞめさせ給ひて、ぬかせ給ひける。御めのとの車より「いかでか我が君のみゆきに此の車ばかりはゆるされ侍らざらむ」と聞こえければ、此のよしを奏しけむ。それぱかりぞ、ぬかれ侍らざりけるとかや。賀茂のみゆきには、金物ぬきたる跡ある車どもぞ、立ちならびて侍りける。大極殿、さきのみかどの御時、火事侍りしのち、十年過ぐるまで侍りしに、位につかせ給ひて、いつしか造りはじめさせ給ひて、よとせといふに、つくり建てさせ給ひにしかば、わたらせ給ひて、慶びの詩など、作られ侍りけり。よろづの事昔にも恥ぢず行はせ給ひて、山の嵐枝もならさぬ御世なれば、雲居にて千歳をも過ぐさせ給ふべかりしを、世の中さだまりて、心安くやおぼしめしけむ、また高き雲の上にて、世の事もおぼつかなく、深き宮の中は、世を治めさせたまふも、わづらひ多く、今すこしおりゐのみかどゝて、御心のまゝにとやおぼしめしけむ。位におはしますこと四年ありて、白河のみかど東宮におはしましゝに譲り申させ給ひき。御母女院、御むすめの一品の宮など、具したてまつらせ給ひて、住のえにまうでさせ給ふとて、

「住よしの神もうれしと思ふらむむなしき船をさしてきたれば」

とよませ給へる、みかどの御歌とおぼえて、いと面白くも聞こえはべる御製なるべし。おり

ゐの帝にて、久しくもおはしまさば、いかばかりめでたくも侍るべかりしに、次の年かくれさせ給ひにし、世にくちをしきことは申せども、くらゐの御時よろづ去たゝめおかせ給ひて、東宮に位譲り申させ給ひて、かくれさせ給ひぬれば、今はかくてと、おぼしけるなるべし。ある人の夢に、こと國のそこなはれたるをなほさむとて、此の國をば去らせ給ふと見たることも侍りけり。又嵯峨に世をのがれて、籠もり居たる人の夢に、樂の聲そらに聞こえて、紫の雲たなびきたりけるを、何事ぞとたづねければ、院の佛の御國に生れさせたまふと見たりけるに、院かくれさせ給ひぬと世の中に聞こえけるにぞ、まさしき夢と、たのみはべりけるとなむ。

みのりのし

むかしみこの宮におはしまし、時より法の道をも知ろしめされけり。勝範座主といふ人、參り給へりけるに「眞言止觀かねまなびたらむ僧の、俗のふみも心得たらむ、一人たてまつれ。さるべき僧のおのづからたのみたるがなきに」と仰せられければ「顯密かねたるは、常の事にてあまたはべり。からのふみの心去りたる者こそありがたく侍れ。さるにても、尋ねて申し侍らむ」とてかへりて藥智といふ僧をぞ奉られけるに、わざと取りつくろひて車などをも借されざりけるにや。かりばかまに馬にのりたる僧の、座主のもとよりとて參りたりければ、召しよせて、御簾ごしにたいめさせ給ひけるに、時繪の御硯の函のふたに、止觀の一の卷をおきて、さし出ださせ給ひて、讀ませて問はせ給ひければ、明らかに說き聞かせ參らせけ

り。眞言の事は、ふみはなくて唯聞はせ給ひければ、事の有樣、又申し述べなどしけり。其の後、俗の文の事を仰せられければ、法文にあはせつゝ、それもおぼえしらひ申しけり。末つ方に「極樂と兜率と、いづれをか願ふ」とのたまはせければ、「いづれをも望みかけ侍らず。たゞ日毎に法華經一部兩界など行ひ侍るを、怠らで彌勒の世まで去はべらばやと思ひ給へて、大鬼王のいのち長きにて行ひ此の定に去つゝ侍らむとぞ願ひはべる」とぞ申しける。須彌山のほとりに、去かある鬼の行ひなどするありと見ゆる經の侍るとぞ、後に誰れとかや申され侍りける。鬼は化生のものなれば、生れて程なく行ひなど去つきて、怠るまじき心に申しけるとぞ。さて又仰せられけるは、御祈りなど、取りたてゝせむこともかなひ難ければ、さしたるとも仰せられつけず。たゞ心にかけて、行ひのついでに祈りて、穩かに保たむ事を、心に掛くべきなりとぞのたまはせける。位につかせ給ひて、たづねさせ給ひければ、藥智は身まかりにけり。弟子なりける法師をぞ僧綱になさせ給ひける。おほうへの法橋顯耀とか云ひけるとなむ。東宮におはしましける時、世のへだて多く坐しましければ、危く思しけるに、檢非違使の別當にて經成優といひし人、直衣に柏夾にて、やなぐひ負ひて中門の廊に居たりける日は、いかなる事の出できぬるぞとて、宮のうちの女房より始めて、隱れ騷ぎけるとかや。おはしましける所は、二條東の洞院なりければ、そのわたりを、いくさのうち廻りて、つゝみたりければ、「かゝる事こそ侍れ」など申しあへりける程に、別當の參りたりければ、東宮も御直衣たてまつりなどして御用意ありけるに、別當、檢非違使めして「をかしの者は召し捕りたりや」

と問はれければ「既にめして侍り」といひければこそ、ともかくも申さで、罷り出でられけれ。重くおやまちける者おはしまず近きあたりに籠もりゐたりければ、うちつゝみたりけるに、もし東宮に逃げ入る事もやあるとて参りたりけり。かやうにのみあやぶまれ給ひて、東宮をも捨てられやせさせ給はむずらむとおもはしけるに、殿上人にて衛門權佐ゆきちかと聞こえし人の相よくする、おぼえありて、いかにも天の下知ろしめすべきよし申しけるかひありてかくならびなくぞおはしましゝ。このみかどの御母陽明門院と申すは、三條の院の御むすめあり。後朱雀院、東宮の御時より御息所におはしまして、このみかどをば、廿二にて生みたてまつらせ給へり。長元十年二月三日、皇后宮にたち給ふ。御とし廿五。其の時、江侍従たゝせ給ひきとゝきゝて、

「紫の雲のよそなる身なれどもたつと聞くこそうれしかりけれ」

となむよめりける。寛徳二年七月廿一日、御ぐしおろさせ給ふ。治暦二年二月、陽明門院と聞こえさせ給ふ。御歌などこそ、いとやさしく見え侍るめれ。後朱雀院にたてまつらせ給ふ、

「今はたゞ雲居の月をながめつゝめぐり逢ふべき程も知られず」

などよませ給へるむかしに耻ぢぬ御歌にこそ侍るめれ。この女院の御母、皇太后宮妍子と申すは、御堂の入道殿の第二の御むすめなり。

紅葉のみかり

白河の院は後三條の院の一の御子におはしましき。その御母贈皇后宮茂子と申す。權大納言

能信の御むすめとて、後三條の院の東宮におはしましゝ、御息所に參り給へりき。誠には閑院の左兵衛の督公成の中納言の女なり。此の中納言の御いもうとは、能信の大納言の北の方なり。このみかど天喜元年みづのとの巳六月廿日生れさせ給ひ、延久元年四月廿八日に東宮にたゝせ給ふ。御とし十七、同四年十二月八日、位につかせ給ふ。御とし廿にやおはしましけむ。位讓りたてまつらせ給ひて、次の年の五月に後三條の院かくれさせ給ひにしかば、國のまつりごと、廿一の御年より、みづから玉らせ給ひて、位におはします事十四年なりしに、卅四にて位おりさせ給ひてのち、七十七までおはしましゝかば、五十六年、國のまつりごとをせさせ給へりき。延喜のみかどは三十三年たもたせたまへりしかども、位の御かぎりなり。陽成院は八十一までおはしましゝかども、院の後久しくて、世をば玉らせ給はざりき。此の院は父の太上天皇世を玉らせたまひしこと、いくばくもおはしまさず。さきの御なごりにて一の人のわがまゝに、行ひ給ふもおはせねば、若くより世を玉らせ給ひて、院の後は、堀河の院鳥羽の院讃岐の院御子うまごひゝご、うちつゞき三代のみかどの御世、法皇の御まつりごとのまゝなり。かく久しく世を知らせ給ふ事は昔も類ひなき御有樣なり。後二條のおとゞこそ、「おりゐのみかどの門に、車立つる樣やはある」などのたまはせける。それかくれ給ひて後は、少しもいさゝかなどたつる人やは侍りし。このみかど、かん日に生れさせ給ひたるとぞ聞こえ侍りし。又誠にやありけむ。御めのとの二位も、かん日に參りそめられたりけるとかや。されども末のさかえ給ふこと、此のころまでいやまさりにおはすめり。おしき日參れ

りとも聞こえざりし。今ひとりの御めのとの、知綱のぬしの御母にていますかりしは、日野三位のむすめにて、世おぼえも殊の外に聞こえ給ひしかども、みかどの五つにおはしまし、年、かのめのと、かくれられにしかば、二位のみ並びなくおはすめり。宿世かしこければおしき日もさはりなかるべし。去かおらざらむ人は、いかゞ其のまねもせむ。従二位親子の草子合とて、人々よき歌どもよみて侍るも、いとやさしくこそ聞こえ侍りしか。このみかどは、御心ばへ、たけくもやさしくもおはしましけるさまは、後三條の院にぞ似たてまつらせ給へりける。さればゆゝしく事々しきさまにぞ、好ませ給ひける。白河の御寺もすぐれておぼきに、やおもてこゝのこしの塔など建てさせ給ひ、百體の御佛など常は供養せさせ給ふ。百臺の御おかしを、一度に、ほどなくそなふる、ふりうおぼしめしよりて、前栽のおなたに、物の具かくしおきて、おづかり百人めして、一度にたてまつらせ給ひけるに、事おこなひける人、心も得で少々まつともしなどしたりけるをも、むつからせ給ひて、さらに一度にともされなどせられけり。鳥羽などをも廣くこめて、さまざま池山など、こちたくせさせ給へり。後三條の院は五壇御修法せさせ給ひても、「國やそこなはれぬらむ」など仰せられ、圓宗寺をもこちたく造らせ給はず。漢の文帝の露臺造らむとし給ひて、國堪へじなどいひてとゞめ給ひ、女御愼夫人には、裾もひかせず。御帳のかたびらにも、あやなきをせられける御心なるべし。おのお の時に從ふべきにやあらむ。白河の院は御弓なども上手にておはしましけるにや。「いけの鳥を射たりしかば、故院のむつからせ給ひし」など、仰せられけるとかや。まだ東宮のわか宮

と申しける時より、和歌をも重くせさせ給ひて、位にても後拾遺わつめさせ給ふ。院の後も金葉集えらばせ給へり。いづれにも御製ども多く侍るめり。承保三年十月廿四日、大井川にみゆきせさせ給ひて、嵯峨野に遊ばせ給ひ、みかりなどせさせ給ふ。そのたびの御歌、

「大井川ふるき流れを尋ねきてあらしの山の紅葉をぞ見る」

などよませ給へる、むかしの心ちして、いとやさしくおはしましき。承暦二年四月廿八日殿上の歌合せさせ給ふ。判者は六條右のおとゞ、皇后宮大夫と申し、時せさせ給ひき。歌人ども時にあひ、よき歌も多く侍るなり。歌のよしあしはさることにて、事ざまの儀式など、えもいはぬ事にて、天徳歌合、承暦歌合をこそは、むねとある歌合には、世の末まで思ひて侍るなれ。又から國の歌をも、もてあそばせ給へり。朗詠集に入りたる詩の殘りの句を、四韻ながらたづね具せさせ給ふ事もおぼしめしよりて、匡房中納言なむ集められ侍りける。その中にさ月の蟬の聲は、なにの秋を送るとかやいふ詩の殘りの句をえたづね出ださゞりけるほどに、ある人これなむとてたてまつりたりければ、江帥見給ひて「これこそ此の殘りともおぼえ侍らね」と奏しける後に、仁和寺の宮なりける手本の中に、誠の詩、いできたりけるなどぞ聞こえ侍りし。又本朝秀句と申すなる文の後しつがせ給ふとては、法性寺の入道おとゞにえらばせたてまつり給ふとぞうけ給はりし。さて其のふみの名は、續本朝秀句と申して、みまきなさけ多く選ばせ給へるふみなり。五十の御賀こそめでたくは侍りけれ。康和四年三月十八日、堀川のみかど、鳥羽に行幸せさせ給ひて、父の法皇の五十の御よはひを、よろこび給ふな

り。舞人樂人などは、殿上人中少將さまざま左右のしらべし給ひき。童舞三人、胡飲酒、陵王、納蘇利なむ侍りける。その中に胡飲酒は源氏の若君なむ舞ひ給ひし。袖ふり給ふさま、天童の下りたる樣にて、此の世の人のしわざともなく、めもあやになむ侍りける。御ぞかづけ給へるをば、御おやの大納言とて、太政のおほい殿おはせしぞ、とりて拜し給ひける。その若君は中の院の大將と聞こえ給ひしなるべし。

つりせぬうらうら

此の御時ぞ、昔のあとを起こさせ給ふ事は多く侍りし。人のつかさなどなさせ給ふ事も、よしありて、たはやすくもなさせたまはざりけり。六條の修理大夫顯季といひし人、世のおぼえありておはせしに、敦光といひし博士の「など殿は宰相にはならせ給はぬぞ。宰相になる道は七つ侍るなり。中に三位におはすめり。又いつ國治めたる人も成るとこそは見え侍れ」といひければ「顯季も、さおもひて、御氣色とりたりしかば、それも物かくうへの事なりと仰せられしかば、申すにもおよばでやみにき」とぞいはれ侍りける。また顯隆の中納言といひし人、世にはよるの關白など聞こえしも「辨になさむと思ふに、詩つくらではいかゞならむ。四韻詩つくる者こそ辨にはなれ」と仰せられければ、おどろきて好みなどせられけり。殊に明らかにおはしまして、はかなき事をも、はえばえしく感せさせ給ふ。又やすき事をもきびしくなむおはしましける。いづれの山とか。御祈りの賞行はむとおぼされけるに、たゞ御布施ばかり給はむは、愚におぼしめす本意なかるべし、阿闍梨など寄せおかむこそかひある

べきに、さすがさせる事なくて、さる事もたはやすかるべしと、おぼしわづらはせ給へるを、顯隆の中納言「去か侍らば、たゞこのたび阿闍梨の宣旨を下させ給ひて、永くよせらるゝ事はなくて候へかし」と申されければ「誠にしかこそあるべかりけれ。おのれなからましかば、われいかゞせまし」とぞかひがひしく感せさせ給ひける。その子の顯賴といひし。「中納言をも、夢に手をひかれてゆくと見たりしものを」など仰せられて、殊の外におもはしめせりける人にて、ふみの函など、ひきさげなどする事をも、下らうなどめして、持たせさせ給ふなど、重くおもはしめせりけるに、五位の藏人にて、除目の目錄とか奏せられけるに、御覽じて、わらゝかに裂かせ給ひてかへしたびければ、何事にかと恐れ思ひて、まかりいでゝその後父の中納言まゐりたりけるにぞ「大外記師遠は、津の國の公文も、まだ勘へぬものをばいかで目錄に入れてたてまつりけるぞ」と仰せられなどして、さやうの事も、かくなむおはしける。法文などをも誠しく習はせ給ひけるにこそ。良眞座主に、六十卷といひて、法華經の心とける文うけさせ給へりけるに、西京にこもりゐ給ひて、比叡の山の大衆のゆるさゞりければ、さて居給へりける所とぶらはせ給ひけり。西院のはとけをがませ給ふ序とてぞ御幸ありける。御法のためも、人の爲も面目ありけるとなむ聞き侍りし。金泥の一切經かゝせ給へるも、もろこしにも類ひすくなくやと聞こえし。その後こそ、此國にも、あまた聞こえ侍れ。この院の去はじめさせ給へるなり。又生きとし生けるもの〳〵命をすくはせ給ひて「かくれさせ給ふまでおはしましき。皐月のさやまに、ともしする賤のをもなく、秋の夕ぐれ浦に釣する

あまも絶えにき。おのづから網など持たるあまの笘屋もあれば、とり出だしてたぐなはの殘るもなく烟りとなりぬ。もたる主はいひ忘らぬめどもみて、罪をかぶる事かずなし。神の御厨ばかりぞゆるされて、かたのやうに備へて、その外は、殿上の臺盤なども六齋にかはる事なかりけり。位におはしまし〳〵時は、中宮の御事なげかせ給ひて、多くの御堂ども作らせ給ひき。院の後はその御むすめの郁芳門院かくれさせ給へりしこそ、限りなく歎かせ給ひて、御ぐしもおろさせ給ひしぞかし。四十五六の程にやおはしましけむ。御なげきのあまりに世をばのがれさせ給へりしかども、御受戒などは聞こえさせ給はで、佛道の御名などもおはしまさゞりけるにや。敎王房と聞えし山の座主、御祈りの祭文に、御名の事申されけるに「いまだ付かぬと仰せられければ、其の心を得侍りてこそ申しあげ侍らめ」と申されけるとかや。そののち久しく世を治めさせ給ひしほどに、七月七日俄に御心ちそこなはせ給ひて、御霍亂などきこえしほどに、月日も歷させ給はで、やがてかくれさせ給ひにしかば、そらのけしきも、常にはかはりて、風雨の音もおどろおどろしく、日を重ねて世のなげきもうちそへたる心ちして侍りき。あさましき心のうちにも、すきずきしかりし人にて、平氏の刑部卿忠盛とききこえし、この折何のかみとか申しけむ。その歌とて傳へ聞き侍りし、

「又もこむ秋をまつべき七夕のわかるゝだにもいかゞ戀しき」

とかや。鳥羽の院、花園のおとゞ、攝政殿などの、若き御すがたに御ぞども染めさせ給ひて、御忌の程、佛の道のこととぶらひ申させ給ふ。いづれのほどに、たれかよませ給ひけるとか

や。

「いかにして消えにし秋の白露をはちすの上の玉とみがゝむ」

といふ御歌侍りけるとなむ。鳥羽殿は、この法皇の作らせ給へれば、さやうにや申さむとおもへりしかども、白河にもかたがた御所ども侍りしかば、白河院とぞさだめ參らせける。

此のみかどの御母は、東宮の御息所とて、うせさせ給へれば、延久三年五月十八日、從二位贈りたてまつらせ給ふ。位につかせ給ひて、同五年五月六日、皇后宮おくりたてまつらせ給ふ。國忌みさゝきなどおかれて、おなじき日、能信の大納言殿、おほきおとゞ、おほき一つの位贈らせ給ふ。御息所の御母藤原秀子と申しゝにも、おほきひとつの位を贈り給ふ。これはきびのなかのつかさ知光のぬしのむすめなり。

たまづさ

堀川のみかどは、白河の法皇の第二の御子におはしましき。その御母、贈太皇太后宮賢子中宮なり。關白太政大臣師實のおとゞの御むすめなり。このみかど、承暦三年つちのとの未、二月十日生れさせ給へり。應德三年十一月廿六日位につかせ給ふ。御とし八つ。この御門御心ばへあてにやさしくおはしましけり。その中に笛をすぐれて吹かせ給ひて、あさ夕に御あそびあれば、瀧口のなだいめんなど申すも調子たかうとて、曉になるをりもありけり。その御時、笛ふき給ふ殿上人も、笛の師など、皆かの御時給はりたるふみなりなどいひて末の世まで持ちおはれ侍るなり。時元といふ笙のふえふき、

御覧えにて夏はみづし所に氷めしてたまふ。おのづからなき折ありけるには、すゞしき御扇なりとて、たまはせなどせさせ給ひけり。宗輔のおほきおとゞ、近衛のすけにおはしけるほどなど夜もすがら御笛ふかせ給ひてぞおかさせ給ひける。和歌をもたぐひなくよませ給ひて、さつきの比、つれづれにおぼしめしけるにや。歌よむをとこ女、よみかはさせて御覧じけり。大納言公實中納言國信などよりはじめて、俊頼などいふ人々も、さまざまの薄葉に、かきてやり給ひけり。女は周防内侍、四條宮の筑前、高倉の一宮の紀伊、前齋宮のゆり花、皇后宮の肥後、津の君などいふ、ところどころの女房、われもわれもと返しあへり。又女のうらみたる歌よみて、男のがりやりなどしたる、堀川院の艶書合とて、末の世までとゞまりて、よき歌はおほく撰集などに入れるなるべし。ふたまにてぞ、講にてきこしめしける。又時のうたよみ十四人に、百首歌おのおのにたてまつらせ給ひけり。をとこ女僧など、歌人みな名あらはれたる人々なり。題は匡房の中納言ぞたてまつりける。この世の人、歌よむなかだちには、それなむせらるなる。尊勝寺作られ侍りけるころ、殿上人に、華鬘あてられ侍りけるに、俊頼歌人にておはしけるに、百首歌あんせむとすれば、いつもじには華鬘とのみおかるゝと聞かせたまひて、「ふびんの事かな」とて、のぞかせ給ひけるとぞきこえ侍りし。いづれの頃にかありけむ。南殿か仁壽殿かにて、御覧じつかはしけるに誰れにか有りけむ。殿上人のまゐりて、殿上にのぼりてゐたりければ、

「雲の上に雲のうへ人のぼりゐぬ」

と仰せられけるに、俊頼のきみ、

「ゑもさぶらひにさぶらひもせで」

と付けられたりけるを、詞とゞこほりたりと聞こゆれど、心ばせもある事と聞こゆめり。歌のふせい、いたづらにうする事なりとて、連歌をば大方せられざりけりと聞こえ侍りしに、金葉集にぞいとしもなき多く集められたる。いたづらに出できたるを、惜まれ侍るなるべし。基俊の君が連歌は、「月くさのうつしのもとのくつわ虫」などしたるをいふなり。又「からかどやこのみかど〳〵もた〳〵くかな」など侍りけり。木工の頭俊頼も、高陽院の大殿のひめ君と聞こえ給ひし時、つくりてたてまつり給へりとか聞こゆる和歌のよむべきやうなど侍るふみには、道信の中将の連歌、伊勢大輔が、「こはえもいはぬ花の色かな」と付けたる事などいとうなることにこそ侍るなれば、連歌をもうけぬことにひとへにし給ふとも聞こえず。おほかたは、見る事聞くことにつけて、かねてぞよみまうけられける。當座によむことはすくなく、擬作とかきてぞ侍りつる。さて侍りけるにや。家集に、きゝときゝ給へりけると覚ゆることをよみ集められ侍るめり。これは連歌の序に、うけたまはりしことを申し侍るになむ。さてこの御時に、御息所は、これかれ定められ給へりけれども、御をばの前齋院ぞ女御に参り給ひて、中宮にたち給ひし。殊の外の御よはひなれど、幼くより類ひなく見とりたてまつらせ給ひて、たゞ四宮をとかや、おぼせりければにや侍りけむ。参らせ給ひける夜も、いとあはぬ事にて、御車にもたてまつらざりければ、暁ちかくなるまでぞ、心もとなくはべりける。

鳥羽のみかどの御母の女御どのも參り給ひて、院もてなしきこえさせ給へば、はなやかにおはしましゝかども、中宮はつきせぬ御心ざしになむきこえさせたまひし。女御うせさせ給ひてのころ、

「梓弓はるの山べのかすみこそ戀しき人のかたみなりけれ」

とよませ給へりけることそ、おはれに御あさけ多くきこえ侍りしか。末の世のみかど、廿一年までたもたせ給ふ、いとありがたき事なり。時の人を得させ給へる、誠にさかりなりけり。一のかみにて堀河の左のおとゞ物かく宰相にて通俊、匡房、藏人頭にて季仲あり。「昔に恥ぢぬ世なり」などぞおほせられける。みちみちの博士も、すぐれたる人、多かる世になむ侍りし。このみかどみそぢにだに滿たせ給はぬ世の惜みたてまつる事、限りあかるべし。その御ありさま內侍のすけ讃岐とか聞こえ給ひし、こまかにかゝれたるふみ侍りとかや。人のよまれしを、ひとかへりは聞き侍りし。この中にも御覽じてやおはしますらむ。

ところどころの御寺

此のみかどの御母、權中納言隆俊の御むすめの腹に、六條の右のおとゞの御むすめにおはしまし、大殿の御子にしたてまつりて、延久三年三月九日御とし十五にて、白河院東宮におはしましゝ御息所にまゐらせ給へり。同五年七月廿三日女御ときこえ給ひて、四位の位給はり給ふ。承保元年六月廿日ささきに立ち給ふ。御とし十八におはしましき。十二月二十六日前坊うみたてまつらせ給ふ。三年四月五日郁芳門院うまれさせ給ひて、その後二條の大ぎさき

の宮、生みたてまつらせ給へり。御年廿三にて、此のみかどは生みたてまつらせ給へり。應徳元年九月廿三日、三條の内裏にてかくれさせ給ひにき。御年廿八とぞ聞こえ給ひし。村上の御母、梨壺にてうせ給ひてのち、内にてささきかくれ給ふ事これぞおはしましける。廿四日に備後守經成のぬしの四條高倉の家にわたしたてまつりて、神無月の一日ぞ、鳥部野におくりたてまつりて、烟とのぼり給ひにし、悲しさたとふべきかたなし。まだ三十にだに足らせ給はぬに、多くの宮たち生みおきたてまつり給ひて、上の御おぼえ類ひもおはしまさぬに、はかなくかくれさせ給ひぬれば、世の中かきくらしたるやうなり。白河のみかどは、くらゐの御ときなれば、廢朝とて、三日は、日の御座のみすもおろされ、世のまつりごともなく、なげかせ給ふ事、から國の李夫人楊貴妃などの類ひになむ聞こえ侍りし。御なげきのあまりに、多くの御堂御佛をぞ作りてとぶらひたてまつらせ給ひし。ひえの山のふもとに、圓徳院ときこゆる御堂の御願文に、匡房中納言の、「七夕の深きちぎりによりて、驪山の雲に帳望する事なかれ」とこそかきて侍るなれ。飯室には勝樂院とて御堂つくりて、又の年のささらぎに、供養をせさせ給ひき。八月には法勝寺の内に、常行堂つくらせ給ひて、仁和寺の入道の宮して供養せさせ給ふ。同日醍醐にも圓光院とて供養せさせ給へり。九月十五日、白川の御寺にて御佛事せさせ給ふ。廿二日御正日に、同じ御寺にて行はせ給ふ。事にふれて悲しさこと、見たてまつる人まで、胸あかぬ時になむあるべき。朝な夕なの御心ち、「御垣の柳も池のはちすも、むかしを戀ふるつまとぞなり侍りける。寛治元年しはすのころ、皇太后宮を贈りたてま

つらせ給ふ。いにしへも今も、かゝるたぐひなむおはしましける。

白河の花の宴

鳥羽の院は堀川の先帝の第一の皇子。御母贈皇太后宮茨子と申しき。寶季大納言の御むすめなり。このみかど康和五年みづのとの未、正月十六日生まれさせ給へり。八月十七日東宮にたち給ひて、嘉承二年七月十九日位につかせ給ふ。天永四年正月一日御元服せさせ給ひき。十六年位におはしまして、一の御子にゆづり申させ給ひき。白河の法皇のおはしましゝ限りは、世の中の御まつり事なかりしに、彼の院うせさせ給ひて後は、ひとへに世をおさらせ給ひて、廿八年ぞおはしましゝ。白河の院おはしましゝ程は、本院新院とて、ひとつ院に御かたがたにて、三條室町殿にぞおはしましゝ。待賢門院又女院の御かたとて、三院の御かた、いとはなやかにて、若宮姫宮たち、皆ひとつにおはしましき。本院新院、常には、ひとつ御車にて、御幸せさせ給へば、法皇の御車なれど、さきに御随身ぐせさせ給へりき。保安五年にや侍りけむ。きさらぎに閏月侍りし年、白河の花御覽ぜさせ給ふとて、御幸せさせ給ひしこそ、世にたぐひなき事には侍りしか。法皇も院も、ひとつ御車にたてまつりて、御随身に、錦縫ひもの、色々にたち重ねたるに、上達部、殿上人、かりさうぞくにて、さまざまに色をつくして、われもわれもと詞も及ばず。こがの太政のおとゞも御馬にて、それは直衣にかうぶりにて仕うまつり給へり。院の御車の後に、待賢門院ひきつゞきておはします。女房のいだし車のうちいで、おろがねこがねに玄かへされたり。女院の御車の左りには、皆くれなゐの十ばかりなるいだ

されて、紅のうちぎぬ、櫻萠黄のうはぎ、赤色の唐衣に、ちろがねをのべて、くわんの紋おかれて地ずりの裳にも、かねをのべて、洲濱鶴龜をしたるに、裳の腰にもちろがねをのべて、うはざしは、玉をつらぬきてかざられ侍りける。よしだの齋宮の御はいや、乘り給へりけむとぞ聞こえ侍りし。又いだし車十輛なれば、四十人の女房おもひおもひに裝ひども心を盡して、けふばかりは制もやぶれてぞ侍りけるっあるは五つにはひにて、紫紅、もえぎ、山吹、すはう廿五重ねたるに、うちぎぬ、うはぎ、裳、唐衣、皆かねをのべて紋におかれ侍りけり。あるは柳さくらをまぜかさねて、上はおりもの、うらはうちものにして、裳の腰には、錦に玉をつらぬきて「玉にもぬける春の柳か」といふ歌、「柳さくらをこきまぜて」といふ歌の心なり。裳はえび染を地にてかいふをむすびて、月のやどりたるやうに、鏡を下にすかして、「花のかげみとなるみづは」とせられたり。からぎぬには日をいだして「たがはるの日にまかせたらなむ」といふ歌の心なり。あるは唐衣に錦をして、櫻の花をつけて、うすき綿を、あさぎに染めて上にひきて、「野べの霞はつゝめども」といふ歌の心あり。袴もうちばかまにて花をつけたりけり。このこぼれてにほふは、七の宮など申す御母のよそひとぞきゝ侍りし。御車ぞひの狩衣はかまなど、いろいろの紋押しなどして、かゞやきあへるに、やりなはといふものもあしつをなどにや、より合せたる。色まじはれるみすの掛け緒などのやうに、かな物ふさなどゆらゆらとかざりて、何事も常なくかゞやきあへり。攝政殿は御車にて、隨身などきらめかし給へりしさま、申すもおろかなり。法勝寺にわたらせ給ひて、花御覽じめぐりて、白河殿にわたらせ

給ひて、御あそびありて、上達部の座に、御かはらけたびたびすゝめさせ給ひて、おのおの歌たてまつられ侍りける。序は花園のおとゞぞかき給ひけるとなむうけ給はり侍りし。新院の御製など集にいりて侍るとかや。女房のうたなどさまざまに侍りけるとぞ聞き侍りし。

「よろづ代のためしと見ゆる花の色をうつしとゞめよ白河の水」

などぞよませ侍りけると聞き侍りし。御寺の花、雪のおしたなどのやうに咲きつらなりたる上に、わざとかねて外のをも散らして、庭に玄かれたりけるにや、牛のつめもかくれ車のおとも入るほどに花つもりたるに、こずゑの花も雪のさかりにふるやうにぞ侍りけるとぞ、傳へうけ給はりしだに、思ひやられ侍りき。まいて見給へりけむ人こそおもひやられ侍れ。その後いづれの年にか侍りけむ、雪の御幸せさせ給ひしに、たびたび晴れつゝ、けふけふと聞こえけるほど、俄に侍りけるに、西山船岡のかた、御覽じめぐりて、法皇も院も都のうちには、ひとつ御車にたてまつりて、新院御直衣に、くれなゐのうち御ぞいださせ給ひて、御馬にたてまつりけるこそ、いとめづらしく繪にもかゝまほしく侍りけれ。二條の大宮の女房、いだし車に、菊もみぢの色々なる衣どもいだしたるに、うへ玄たに、白き衣をかさねて、縫ひめはせたれば、ほころびは多く、ぬひめはすくなくて、あつきぬのわたなどのやうにて、こぼれいでたるが、菊紅葉のうへに、雪のふりおけるやうにて、五車たてつゞけ侍りけるこそいと見所おほくはべりけれ。このみかど、御心はいといたく好かせ給ふ事はなくて、御心ばへうるはしく、御みめも清らに、功德の道たうしも御祈りをのみせさせ給ひき。御笛をぞ、えな

らず吹かせ給ひて、堀川の院にも、劣らずやおはしましけむ。樂あどもつくして吹らせ給ふ。御笛のねも、あいつかはしく、すゞしきやうにぞおはしましける。公敎公能など申しゝおほいどの伊實、成通など申す中納言など皆御弟子なりとぞきゝ侍りし。例ならぬ御心ち、久しくならせ給ひて、世など心ぼそくおぼしめしけるにや、德大寺の左のおとゞにや、花をりて給はすとて、御哥侍りける、

「心あらばにほひをそへよ櫻花のちの春をばいつたれか見るべき」

となむよませ給ける。

鳥羽の御賀

此の院世を知らせ給ひて、久しくおはしましゝに、よろづの御まつりごと、御心の儘なるに中の院のおとゞの、大將になり給ひしたび、人々あらそひて讃岐の院位におはしましゝかば吹ぶらせ給ひしにこそ。近衛のみかど東宮にてまなめしける夜、俄に內へ御幸とて殿上人せうせうかぶりして、夜に入りて北の陣に御車たてさせ給ひて、「權大納言大將にまかりならむ事、わざと申しうけに參りたる」と申しいれさせ給へりしかば、さてこそ、やがて其の夜なり給ひけれ。實能の大將、下臈なれどももとよりなりぬ給へれば、かみに加へじとおさへ申し給ふ。實行の大納言「われこそ上臈なればならめ」といひて、下臈ふたりに越えられむ事と、內をふたりして、かたがた申し給へば、御をぢのこと、さりがたくて押さへさせたまふなり。院には、さきに下臈をこしてなさせ給ひしかども、なほいとほしみ出できて、なさむとお

ぼしめしかためけるに、うちのおさへさせ給へば、年ごろはかゝる事もなきにいと心よからずおぼしめして、御幸あるなりけり。とかく申させ給ひ、めして仰を下されなどする程に、御くるまにて、「春の夜あけなむとす」といふ朗詠、又「十方佛土の中には」などいふ文を詠ぜさせ給ひて、佛の御名たびたび唱へさせ給ひける、聞く人みな涙ぐましくぞ思ひあへりけるとなむきこえ侍りし。かくて次の年御ぐしおろさせ給ひき。御とし四十にだに滿たせ給はねども、年ごろの御ほいも、又つゝしみのとしにて、年比は御隨身などもとゞめさせ給ひて具せさせたまはねども、白河の大炊の御門どのゝむかひに御堂つくらせ給ひて、供養せさせ給ふに、兵仗かへし給はらせ給ひて、めづらしく太上天皇の御ふるまひなり。うちつゞき八幡賀茂など御幸ありて、三月十日ぞ鳥羽殿にて御ぐしおろさせ給ふ。少しも御なやみもなくてかくおもほしたつ事を、世の人涙ぐましくぞ思ひあへる。御名は空覺とぞ聞こえさせ給ひし。五十日御佛事とてせさせ給ふほど大路にありく犬や、き積みてありく車牛などまで養はせ給ひ、御堂の池どものいをにも、庭の雀からすなどかはせ給ふ。山々寺々の僧にゆおむし、御布施などは云ひしらず、たゞの折も、かやうの御功德は、常の御營みなり。人のたてまつるもの、多くは僧の布施になむなりける。おはしますあたり、おまたの御所どもには、いひしらぬ、綾錦、唐綾、唐絹、さまざまのたから物、所もなきまでぞおさめでられ侍りけるを、御布施にせさせ給へば、來む世の御功德いかばかりか侍らむ。白河の院はおはします所、きらきらと掃きのごひて、たゞうちの見參とて、かみや紙にかきたる文の、日毎にまゐらするばかり

を、御厨子にとりおかせ給ひて、さらぬ物は御あたりに見ゆるものなかりけり。ましてたちぬはぬ物などは、御前にとりいだざるゝことなくて、かたしはぶきうちせさせ給ひて、たゞ一所おはしまして、近習の上臈下臈などを、とりどり召しつかひつゝおはしましける。おのおの御有樣かはらせ給ひてなむ聞え侍りし。仁平二年三月七日近衛の御門、鳥羽の院に行幸せさせ給ひて、法皇の五十の御賀せさせ給ひき。等身の御佛、壽命經もゝまき、玉のかたちかぎりをみがき、黃金の文字になむありける。僧はむそぢの數、ひきつらなりて、佛をほめたてまつり、舞人は近きまぼりのつかさ、雲の上人靑色のわきあけに、柳さくらの下襲、平やなぐひの水晶のはず日の光りにかゞやきあへり。つぎの日も猶とゞまらせ給ひて、法皇をがみたてまつり給ふ。さまざまの供へども庭もせにつらねてたてまつらせたまふ。池の船、春の調べとゝのへて、みぎはに漕ぎよせて、おのおのおりて左右のまひの袖ふりき。靑海波、左のおとゞの御子、右大將の孫の中將の公達舞ひ給ふ。はてには、左大將の御子とて、胡飮酒、童舞し給ふ。ふるきあと、家のことなれば、かづかり給ふ御ぞ、父のおとゞとりて、袖ふり給ひて庭におりてよろこび申しのやうに、更に拜し給ふ。ゆふ日のかげに紅の色かゞやきあへり。其の若君は、誠は御わらは名、くま君とて、前中納言師仲の子を大將殿の子にし給へるとぞ。この若君の母は、鳥羽の院の御子たち生み奉られたる人とぞきゝたてまつりし。かやうにはなやか侍にりしほどに、なか二年ばかりや隔て侍りけむ。近衛のみかど、かくれさせ給ひしかば、おぼしめし歎きて、鳥羽に籠もりゐさせ給ひて、年のはじめにも、門廊などさして、人もまゐ

らざりき。御とし五十四までぞおはしましける。御母贈皇太后宮は承徳二年十一月に内に參り給ひて、康和五年正月に、このみかど生みおきたてまつりて、かくれさせ給ひにしかば、きさき贈りたてまつりたまへり。

春のきらべ

仁和寺の女院の御腹の一の御子は、位おりさせ給ひて、新院ときこえさせ給ひし。後に讃岐におはしましゝかば、讃岐のみかどゝこそ聞こえさせ給ふらめな。御母女院は中宮璋子と申しき。公實大納言の第三の御むすめなり。鳥羽の院の位におはしましゝ時、法皇の御むすめとて參り給へりき。此のみかど元永二年己亥五月十八日にうまれさせ給へり。保安四年正月廿八日に位に即かせ給ふ。大治四年御元服せさせ給へり。御とし十一。法性寺のおほきおとゞの御むすめ、女御に參り給ひて、中宮に立ち給ひし。皇嘉門院と申す御事なり。時の攝政の御女、さきの宮におはします。白河の院、鳥羽の院おやおほぢとておはします。御母女院あらぶ人なくておはしましゝかば、御せうとの侍從中納言實隆、左衞門の督通季、右衞門の督實行、左兵衞の督實能などを申して、帝の御をぢにて、直衣ゆるされて常に參り給ふ。その公達近衞のすけにて、あさ夕さぶらひ給ふ。みかどの御心ばへ絶えたる事をつぎ、古きあとを興さむとおもはしめせり。幼くおはしましけるより歌を好ませ給ひて、朝夕さぶらふ人々に、かくし題よませ、「紙燭の歌かなまりうちて響きのうちによめ」などさへ仰せられて、常は和歌の會ぞせさせ給ひける。さのみうちうちにやはとて、花の宴をせさせ給ひけるに、松に遙

なる齢を契るといふ題にて上達部束帯にて、殿よりはじめてまゐり給ひけり。まづ御あそびありて、關白殿ことひき給ふ。花園のおとゞ、その時右大臣にて琵琶ひき給ふ。中の院の大納言笙のふえ、右衞門の佐季兼俄に殿上にゆるされて篳篥仕うまつりけり。拍子は中の御門大納言宗忠、笛は成通實衡などの程にやおはしけむ。季成の中將、和琴などぞきゝ侍りし。序は堀川の大納言師頼ぞかき給ひける。講師は左大辨實光、御製のは誰れにか侍りけむ。常の御歌どもは、朝夕の事なりしに、つねの御製などきこえ侍りしに、珍らしくありがたき御歌ども多くきこえ侍りき。遠く山の花をたづぬといふ事を、

「たづねつる花のあたりになりにけり匂ふに志るし春の山風」

などよませ給へりしは、世の末にありがたしとぞ人は申し侍りける。まだ幼くおはしましゝ時、

「こゝをこそ雲の上とは思ひつれ高くも月のすみのぼるかな」

などよませ給へりしより、かやうの御歌のみぞおほく侍るなる。これらおのづから傳へ聞こえ侍るにこそあれ。天承二年三月にや侍りけむ。臨時客せさせ給ひき。臨時の祭の試樂のさまになむ侍りける。清涼殿のみすおろして孫庇に御倚子たてゝ、みかど御直衣にておはします。北の廊の立蔀とりのけて、御簾かけて、きさいの宮の女房うちいでの衣さまざまに出だされたり。二間には中宮おはします。左右の舞人かさねのよそひして、月華門に集まれり。樂の行事、重通季成の中將ぞうけ給はりてせられける。春の志らべ、先は吹きいだして、春の庭

といふ樂をなむ奏して參りける。みかど出でさせ給ひて、關白殿右のおとゞよりはじめて、贄の子にさぶらひ給ふ。宰相は例の事なれば、なかはしにおはしけり。然るべきまうちぎみなど賞かぶりける中に、成通の宰相中將とておはしける、わざと遙かに北の方にめぐりてもとまさといふ笛の師かぶり給はれる、よろこび云ひにおはしたりけるこそ、いと優しく侍りけれ。百首の歌あども、人々によませさせ給ひけり。又撰集などせさせ給ふと聞え侍りき。かばかり好ませ給ふに、歌合侍らざりけるこそ、くちをしく侍りしか。古き事ども興さむの御志はおはしましながら、世を心にえまかせさせ給はで、院の御まゝなれば、易き事もかなはせ給はずなむおはしましける。歌よませ給ふにつけて、朝夕さぶらはれける修理權大夫行宗、三位せさせむとて、德大寺のおとゞにつけて「院に見せ參らせよ」とて、

「我が宿に一本たてるおきなぐさあはれといかゞ思はざるべき」

とぞよませ給ひけると聞こえ侍りし。

八重の汐路

もとの女院ふたところも、かたがたに輕からぬさまにおはしますに、いまの女院時めかせ給ひて、近衞のみかど生みたてまつらせ給へる、東宮に立てまつりて、位ゆづりたてまつらせ給ふ。その日辰の時より、上達部、さまざまのつかさづかさ參り集るに、內より院に度々御使ありて、藏人の中務少輔とかいふ人、かはるがはる參り、又六位の藏人、御文捧げつゝ參る程に、日くれがたにぞ神璽寶劒など、東宮の御所昭陽舍へ、上達部引きつゞきてわたり給ひけ

る。みかどの御養ひ子、例なきことゝて、皇太弟とぞ宣命にはのせられ侍りける。その御さだに、「けふ延ぶべし」など内より申させ給ひけれど「事始まりていかで」とてなむその日侍りけるとぞ聞え侍りし。今のうちには、職事殿上人など仰せ下され、おるべきことどもありて、新院は九日ぞ三條西の洞院へわたらせ給ふ。太上天皇の御尊號たてまつらせ給ふ。かくて年へさせ給ふほどに、近衛のみかどかくれさせ給ひぬれば、今の一院の、今宮とておはします、位につかせ給ひにき。さるほどに鳥羽の院御心ちおもらせ給ひて、七月二日うせさせ給ひぬれば、みかどの御代にて定まりぬるを、院のおはしましゝ折より、きこゆる事どもありて、御垣のうち、きびしく固められけるに、嵯峨のみかどの御時、兄の院と爭はせ給ひけるやうなる事いできて、新院御ぐしおろさせ給ひて、御おとゝの仁和寺の宮におはしましければ、しばしはさやうに聞えし程に、八重の汐路をわけて、遠くおはしまして、上達部殿上人の、ひとり參るもなく、一宮の御母の兵衛の佐ときこえ給ひし、さらぬ女房、ひとり二人ばかりにて、男もなき御旅ずみも、いかに心ぼそく朝夕におぼしめしけむ。親しくめしつかひし人どもは皆うらうらに都を別れて、おのづからとゞまれるも、世の怖ろしさにあからさまにもまゐることだにもなかるべし。皇嘉門院よりも、仁和寺の宮よりも、志のびたる御とぶらひなどばかりやありけむ。たとふる方なき御すまひなり。あさましき鄙のあたりに、九年ばかりおはしまして、憂き世のあまりにや、御病も年にそへて重らせ給ひければ、都へかへらせ給ふこともなくて、秋八月廿六日に、かの國にてうせさせ給ひにけりとなむ。白峰のひじりといひて、かの

國に流されたる阿闍梨とて、昔ありけるが、この院に生まれさせ給へるとぞ、人の夢に見えたりける。その墓のかたはらによき方にあたりたりければとてぞおはしますなる。八重の汐路をかき分けて、はるばるとおはしましけむ、いと悲しく、心ちよきだにおはれなるべき道を人もなくて、いかばかりの御心ちせさせ給ひけむ。このみかどの御母ぎさき、十九と申しゝ御年此の帝をうみたてまつらせ給ひて、御子位につかせ給ひてのち、廿三の御年后の位をさらせ給ひて、待賢門院と申す。同じ國母と申せど、白河の院の御むすめとて養ひ申させ給ひければ、ならびなく榮えさせたまひき。まして院號はじめなどはいかばかりかもてなし聞こえたまひし。多くの御子うみたてまつらせ給ひ、今の一の院の御母におはしませば、いとやんごとなくおはします。仁和寺に御堂つくらせ給ひ、こがねの一切經などかゝせ給ひて、康治二年御ぐしおろさせ給ふ。御名は眞如法とつかせ給ふとぞ。久安元年八月廿二日、かくれさせ給ひにき。又のとしの正月に、かの院の女房の中より高倉のうちのおとゞのもとへ、

「みな人はけふのみゆきといそぎつゝ消えにし跡はとふ人もなし」。

顯仲の伯のむすめ、堀河の君の歌とぞきこえ侍りし。この女院の御母は、但馬守隆方の辨の女なり。從二位充子とて、ならびなく世におはしたまへりし人におはすめり。

今鏡第三

すべらぎの下

をとこ山

鳥羽のみかど御位の御時より、まゐりたまへりしささきは、御子たちあまた生みたてまつりて、位おりさせ給ひしかば、女院と申しておはしましき。法皇の養ひたてまつりて、はたもてかしづき給ひしに、法皇おはしまさで後、宇治のささき参り給ひて、御かたがたいどましげなれども、院にはいづ方にも、うときやうにてのみおはしましゝに、去のびて参り給へる御かたおはしまして、やゝ朝まつりごとも怠らせ給ふさまにて、夜がれさせ給ふ事なかるべし。いとやんごとなきさはにはあらねど、中納言にて御おやはおはしけるに、母北の方は、源氏の堀河のおとゞの女におはしける上に、類ひなくかしづき聞えて、たゞ人にはえゆるさじと、もてあつかはれける程に、中納言かくれ侍りける後、院にもとよりおぼしめしつゝ過ぐし給ひけむ。かの父の御忌など過ぎけるまゝに、去のびて御せうそこありてかくれつゝ参り給ひけるほどに、日にそへて類ひなき御志にて、ときめき給ふほどにたゞならぬ事さへおはしければ、御祈りおどろおどろしきまでかたがたせさせ給ふ程に、女宮うみたてまつらせ給へれば、珍らしきをば喜びながら、男におはしまさぬをぞ、くちをしうおぼしめしたるに、又

生み奉り給へるも、おなじさまなれば、まめやかに口をしうおぼしめしたれど、さすが、いかゞはせむにておはしますなるべし。姉宮をば宇治のきさき、御子おはしまさぬにあはせて、大きおとゞの御心とゞむとにや、この宮にむかへ申させたまひて、養ひ申させ給ふ。のちに生まれさせ給へるをば、院にみづから養ひたてまつり給ふ。御母きさき、亡ばしはあの御方など申しておはしましゝ程に、三位のくらゐそへさせ給ひて、この御事をのみ類ひなき御もてなしなれば、世の人ならびなく見たてまつれるに、又たゞならぬ事おはしませば、此の度さへうちつゞかせ給はむも口をしき上に、おぼしめしはからふ事やあらむ、をとこ宮生みたてまつり給ふべき御祈り、いひしらず營ませ給ふ。石清水に般若會などいひて、山三井寺などのやんごとなき智恵深き僧ども參りゐて、日ごろ法文のそこをきはめて行はせ給ふ。帥の中納言といふ人、御後見にて都の事も大事なれど、かの宮に日ごろ籠もりて、御かはりにや、日毎に、束帶にて御講もよほし行はれけるを、われもわれもと御法ときて、祈り申されける中に、忠春とか聞こえしが、「滄海の西にはうみの宮、御産平安たのみあり。鳳城の南には男山、皇子誕生疑ひなし」と申したりけるとなむ聞き侍りし。奈良の濟圓といひし僧都、さきの日このこゝろを云たりけるにめでたしなど聞こえけるを、山に忠春己講と聞こえしが、後の日、かやうにむすびなしていひける。とりどりにえも云はずなむきこえ侍りける。はての日は、上達部引きつれまゐりて、御布施とり御神樂などせらる。上達部歌も笛も、おのおの心をつくして、清涼堂のやうなり。かうに云ひ知らぬ御祈りども有りける程に、保延五年にや

侍りけむ。つちのとの未の年五月十八日、よになくけうらなる玉のをのこ宮、生れさせ給ひぬれば、院のうちさらなり、世の中も動くまで、歓びあへるさま、いはむかたなし。ひつじの時ばかりなれば、御祈りの僧、御前に参りたるに、おのおの御馬ひき、女房のよそほひなどたまはす。仁和寺の法親王、山の座主など、僧綱賜はり、さまざまの賞どもありて、まかで給ひぬ。御うぶ養ひ七夜など、關白殿よりはじめて参り給ひて、御遊びどもあり。御湯殿南おもてに左つらひて、弦うち五位六位左らがさねに立ちならべり。男宮におはしませば、文よみ式部大輔左中辨などいふ博士、大外記とかいふもの、明經博士とて、つるばみのころも、あけのころも、袖をつらねて、うちかはりつゝ、日毎によむけしき、いはむかたなくめでたし。御子の御祈りはじめてせさせたまひ、七瀬の御祓へに、辨ゆげひのすけ、五位の藏人など、時にあへる七人、御ころも筥取りてたつほど、おぼろげの上達部なども、あふぐべくもなかりけり。御めのとには、二條の關白の御子に、宰相の中將といひし人のむすめ、内藏の頭、男にておれば、えらばれてやしなひ奉るなるべし。日に添へてめづらかなるちごの御かたちなるにつけても、いかでかすがやかに、みこの宮にも、位にもとおぼせども、ささばらに、御子たちおはしますを、さし超ゆべきならねば、おもほしめしわづらふ程に、當帝の御子になし奉り給ふ事いできて、みな月の廿六日、御子内へいらせ給ふ。御ともに上達部、殿上人えらびて、常のみゆきにも心ことなり。都のうち車もさりあへず、見るもの所もなき程になむはべりける。内へいらせ給ふに、てぐるまの宣旨など、藏人おほせつゝ、既に参らせ給ひて、中宮を

御母にて、まだ御子も生ませ給はねば、めづらしく養ひ申させたまふ。さきの親にては、關白殿おはしませば、御子のおはぢにて、かたがたみかどもさきも、御子おはしまさぬに、院も御心ゆかせ給ひて、いと心よき事いできて、いつしか八月十七日東宮にたゝせ給ふ。昭陽舍に御ぞつらひありて渡らせ給ふ。大夫には堀川大納言なり給ふ。御母のをぢに坐して殊に選ばせ給へるなり。御母女御の宣旨かぶり給ふ。願ひの御まゝなり。男宮の嬉しさもいふばかりなきうへに、御みめも御心ばへも、いと美くしう、此の世のものにもあらず。さかしくおとなしくて、日の御座の事ある毎に、大夫の抱き參らせ給へるにも、泣きなどし給はず。ねさせ給ふ程には、御ぞとねの上にひとりねさせ給ひて、おとなのやうにおはしませば、かひがひしく見奉る人も歡びの涙おさへがたかりけり。かくて同七年十二月七日、御年三つにて、位讓り申させ給ふ。近くは五つなどにてぞつかせ給へども、心もとなさにやすがやかにねさせ給ひぬ。御母女御殿、皇后宮に立たせ給ふ。御年廿五にや。御即位大嘗會など、心ことに世も靡きてなむ見え侍りける。おとなにならせ給ふまゝに、御有樣然るべき前の世の御契と見え給へり。攝政殿の御弟の左のおとゞ、女御奉らせ給ひて、皇后宮にたち給ひぬ。猶足らずや思しめすらむ、院より御さたせさせ給ひて、大宮の大納言のむすめ、關白殿の御子とて、北の政所の、御せうとのむすめれば、御子にし奉り給ふ。御かたがたはなばなといどみ顏なるべし。殿のおに弟の御中よくもおはしまさねば、宮もいとゞ隔多かるに、關白殿は、うちのひとつにて、ひとへに中宮のみのぼらせ給ひて、皇后宮の御かたをは、疎くおはしましける。か

くて年ふる程に御母ささき院號ありて、女院とておはしませば、院の后の女院、三人おはします。内には后二人立ち給ひて、いとかたがた、多くおはする頃なるべし。

虫のね

此のみかど御みめも御心ばへもいとなつかしくおはしましけるに、末になりて、御目を御覧せざりければ、かたがた御祈りも御薬も、然るべきにや、かひなくて、すゑざまには年のはじめの行幸などもせさせ給はずなりにけり。攝政殿たぐひなく思ひたてまつらせ給ふ。みかどもおろかならず思ひかはさせ給ひて、殿の、御弟にこめられさせ給ひて、藤氏の長者などものかせたまひたるを、幼き御心に歎かせ給ふ。殿もみかどの例ならぬ御事を歎かせ給ふほどに、十七にやおはしましけむ。初秋の末に、日ごろ例ならぬ事おはしまして、かくれさせ給ひぬれば、世の中はやみに惑へる心ちしおへるなるべし。さりとてあるべきにあらねば、鳥羽の院には、次のみかど定めさせ給ふに、誠にや侍りけむ。女院の御事のいたはしさにや。姫宮を女帝にやあるべきなどさへ計らはせ給ふ。又仁和寺の若宮をなど定めさせ給ひけれどことわりなくて、ひと日は過ぎて世の中思しめし恨みたる御有様なるべし。たゞおはしまさむだにをしかるべきを、歌をも幼くおはします程に、すぐれてよませ給ひ、法文のかたも、然るべくてやおはしましけむ。心にしめて、經などをも訓に讀せ給ひて、それにつけても二十八品の御歌などよませ給ふ。おなじ歌と申せども此の比のうちあるさまにもあらず、昔の上手などのやうによませ給ひける。おほくよませ給ひける中に、世を心細くや思しめしけむ。

「虫のねの弱るのみかは過ぐる秋を惜む我が身ぞまづ消えぬべき」
などよませ給へりける、いとあはれにかなしく、又から萩などいふことを、かくし題にて、
「つらからばきしべの松の波をいたみねに顯れて泣かむとぞ思ふ」
など多くきゝ侍りしかども、おぼえ侍らず。位におはしますこと、十四年なりき。御わざの夜さねしげといひしが、むかし藏人にて侍りける、おもひ出でゝよめる。
「おもひきや虫のねしげき淺茅生に君を見すてゝかへるべしとは」。
殿の御子の、大僧正と聞こえ給ふ、みかどの植ゑさせ給へりける弱を見給ひて、
「よはひをば君にゆづらで去ら弱のひとりおくれて露けかるらむ」
とよまれ侍りけるこそあはれに聞こえ侍りしか。備前の御とてはべりけるが、みかどおはしまさで後、むかし思ひいでけるに、去のばしき事、多く覺えければ、星合の比、内侍土佐が、かのみかどの御事の悲しみにたへで、頭おろして籠りゐ侍りけるもとにいひつかはしける。
「あまのかはほしあひの空はかはらねどあれし雲居の秋ぞ戀しき」
とよめりけるこそいとなさけ多く聞きはべりしか。此のみかどの御母は、贈左大臣長實中納言のむすめなり。得子皇后宮と聞え給ふ、美福門院と申しき。この御有樣さきに申し侍りぬ。且は近き世の事なれば、たれもきかせ給ひけむ。されども事のつゞきに申し侍るになむ。猶あさましくおはしましゝ御すぐせぞかし。御親もおはせずなりにしかば、いかゞなりたまはむずらむと見え給ひしに、去のびて參り初め給ひて、御子たち生み奉り給ひ、女御さゝきみ

かどの御母におはしますのみにあらず、行く末までの御有様申すもおろかなり。始めかやう院のやしなひ申させ給ひしは、叡子内親王と聞こえたまひしは、うせさせ給ひにき。其のつぎ姫宮は暲子内親王八條の院と申すなるべし。院にやがて養ひ申させ給ひて、わさ夕の御なぐさめなるべし。をさなくて物などうつくしうおはせられて、「わか宮は東宮になりたり。われは東宮のおねに成りたり」など仰せられければ、院は「さる司やはあるべき」など興じ申させ給ひけるなどぞ聞こえはべりし。この宮保延三年ひのとの巳の年に生まれさせ給ひて、保元二年六月御ぐしおろさせ給ふ。御とし廿一とぞ聞こえさせ給ひし。應保元年十二月に、院號きこえさせ給ふ。二條のみかどの御母とて、后にもたゝせ給はねども、女院と申すなるべし。小一條院の、東宮より院と申しゝやうなるべし。近衛のみかど生まれさせ給ひてのち、永治元年十一月にや侍りけむ。かのとの酉の年、又姫宮、六條殿にて生みたてまつり給へりし、二條のみかど、東宮ときこえさせ給ひし時、保元元年の比、御息所と聞こえさせ給ひて、みかど位につかせ給ひしかば、平治元年十二月廿六日、中宮ときこえさせ給ひしに、永暦元年八月十九日御なやみとて、御ぐしおろさせ給ふ。御とし廿とぞきこえさせ給ひし。いとたぐひなく侍りき。應保二年二月十三日、院號ありて高松の院と申す。この宮々の御母、國母にておはしましゝ程に、近衛のみかどかくれさせ給ひて、歎かせ給ひしに、次の年鳥羽の院うせさせ給ひし時は、北おもてに侍ふと侍ふ下臈どもかきたてゝ、「院のおはしまさゞらむには、たしかに女院に侍へ」とてわたされ侍りけり。女院は法皇の御病ひのむしろに、御ぐしおろさ

せ給へりき。三瀧のひじりとか聞こえしは、御戒の師と聞こえ侍りし、よろづおもはしすてたる御有様にやあらむ。鳥羽などをも、よろづ女院の御まゝとのみさたしおかせ給へれど、後の世のことを、おもはし掟てさせ給ふうへに、心かしこく何事にものがれさせ給へりき。姫宮たち御母おはしまし、折、皆御ぐしおろさせ給ひてしこそいとあはれに聞こえ侍りしか。むかしの佛の、やたりの王子十六の沙彌などの御有様なるべし。なかにも、當時のきさきの宮にて、佛の道にいらせ給ふ。世にたぐひなし。この世をつらねくおぼしめしとりて、わが御身もひめ宮たちをもすゝめなし奉りて、つとめさせ給ふほどに、わづらはせおはしますに御事ありて、應保元年十一月廿三日に、かくれさせおはしましにき。紫の雲たなびきて、ねながら、うせさせおはしにけるとぞうけ給はりし。かねて高野の御山に、玄のびて、御堂建てさせ給ひて、それにぞ御舍利をば送りまゐらせたまひけるとなむ。かの御ともには、さもあるべき人々、おのおの御さはりありて、贈左大臣の末の子時通の備後守とか聞こえし、後には法師になられたりけるに、年ごろも契りおかせ給へりけるとて、その人ばかりぞ、首にかけ參らせて、たゞ一人參られければ、若狹守にて、たかのぶと申して、むげに年若き人、をさなくより、なれ仕うまつりて、御なごりの玄のびがたさに、事にのぞみて、慕ひまゐりけるに、御山へいらせ給ふ日、雪いたくふりければ、よみ侍りける、

「誰か又けふのみゆきを送りおかむわれさへかくて思ひ消えなば」。

大内わたり

過ぎたる方の事は、遠きも近きも見及び聞き及ぶ程の事申しはべりぬるを、今の世の事は、はゞかり多かる上に、誰れかはおぼつかなく思されむ。云かはあれども、事のつゞきなれば申しはべるになむ。當時の院は、鳥羽の院の第四のみこ、御母待賢門院、大治二年ひのとの未の年、生み奉り給へりしにやおはしますらむ。多くの宮たちの御中に天の下つたへたもたせ給ふ、いとやんごとなき御榮えなり。保延三年十二月御ふみはじめに式部の大輔敦光といひし博士、御侍讀には參るとうけたまはりしに、上達部殿上人まゐりて、詩などたてまつられける。近くはさることも聞こえ侍らぬに、この御文はじめにしも、云か侍りけむ、よき例にこそせられ侍らむずらめ。同五年十二月廿日、御元服せさせ給ひしは、十三の御年にこそおはしましけめ。久壽二年七月廿五日、位に即かせたまふ。御とし廿九におはしましき。院の仰せごとにて、内大臣とて、徳大寺のおとゞおはせし、具し奉りて、まづ高松殿にわたり給ふ。夜に入りて、上達部引きつれてまゐり給ひて、近衛の内裏へわたらせおはします。十月廿六日御即位ありて、東宮たゝせ給ふ。大嘗會など有りて年も替りぬれば院の姫宮東宮の女御に參り給ふ。高松の院と申す御事なり。前の齋院とて今の上西門院のおはしましゝを、御母に云たてまつらせ給ふとうけ給はりし。母ぎさき美福門院おはしませば、べちの御母なくても坐しましぬべけれど、今すこしねんごろなる御心にや侍りけむ。五月の末に故院の御なやみまさらせ給ひて、七月にうせさせ給ひしほどに、世の中にさまざま申す事ども出できて、もの騒がしく聞こえしほどに、誠に、いひしらぬいくさの事いできて、みかどの御かた、勝たせ給ひ

しかば、賞ども行はせ給ひき。其のほどの事、申し盡すべくも侍らぬ上に、みな人知らせ給ひたらむ。世を治めさせ給ふ事むかしに恥ぢず。記錄所とて後三條の院の例にて、かみは左大將公敎、辨三人、寄人などいふもの、あまた置かれはべりて、世の中を玄たゝめさせ給ふ。次の年も、諒闇にて三月にぞつかさめしなどせさせ給ふ。十月に大内造り出だしてわたらせたまふ。殿舍どもも門々などの額は、關白殿かゝせ給ふ。宮造りたる國の司など七十二人とか、位賜はりなどす。中頃かばかりのまつりごとなきを、千世にひと度すめる水なるべしとぞおもひあへる。上は、清涼殿、藤つぼ、かけておはします。女房、弘徽殿、登華殿などにつぼねたび、皇后宮は、弘徽殿におはします。女房それも、登華殿のつぎに、つぼねして侍ふ。中宮は、承香殿におはします。その女房、麗景殿につぼねあり。内のおとゞの奉りたまへる女御は、梅壺に坐す。その女房、襲芳舍につぼね賜はりき。かんなりのつぼなるべし。東宮は桐壺におはします。女房はその北舍につぼねまつゝ侍ふ。東宮のみやす所は、梨壺なれば女房その北につぼね賜はり。關白殿は宣耀殿を御とのゐどころとせさせ給へり。近き世には、里内裏にてのみ有りしかば、かやうの御すまひもなきに、いとなまめかしう、珍らかなるべし。弓矢などいふ物あらはに持ちたるものやはありし。ものに入れかくしてぞ大路をもありきける。都の大路をも、鏡の如くみがきたてゝ、つゆきたなげなる所もなかりけり、世の末ともなく、かく治まれる世の中、いとめでたかるべし。

ない宴

かくて年もかはりぬれば、朝覲の行幸、美福門院にせさせ給ふ。誠の御子におはしまさねども、近衛のみかどおはしまさぬ世にも、國母になぞらへられて坐します。いとかしこき御榮えなり。又東宮行啓ありて、姫宮の御母とて、拜し奉り給ふ。この姫宮と申すは、八條の院と申すなるべし。廿日内宴おこなはせ給ふ。もゝとせあまり絶えたる事を、行はせ給ふ。世にめでたし。題は春生二聖化中一とかやぞきこえ侍りし。關白殿など、上達部七人、詩つくりて參り給へり。青色の衣、春の御あそびにおひて、珍らかなる色なるべし。舞姫十人、綾綺殿にて、袖ふる氣色、から女を見るこゝちなり。ことしは、にはかにて、誠の女はかなはねば、童をぞ、仁和寺の法親王奉り給ひける。ふみをば仁壽殿にてぞ講ぜられける。尺八といひて、吹きたえたる笛、此のたび始めて吹きいだしたりとうけ給はりしこそいとめづらしきことなれ。七月すまうの節行はせ給ふ。これも久しく絶えて、年ごろ行はれぬ事なり。十七番なむ有りける。ふるき事どもの、あらまほしきを、かく行はせ給ふ。ありがたき事なり。且は君の御すぐせもかしこくおはします上に、少納言通憲といひし人、後は法師になりたりしが、鳥羽の院にも朝夕仕うまつり、この御時には、ひとへに世の中をとりおこなひて、古きあとをも起こし、新しきまつりごとをも速かに計らひ行ひけるとぞきゝ侍る。此のみかど、御めのとは修理のかみ基隆のむすめ、大藏卿師隆のむすめなど、二三人おはしけれど、あるはまかり出で、あるはかくれなどして、紀の御とて、御乳の人と聞こえしがをとこにて、かの少納言通憲の子あまたうみなどして、今は御めのとにて、やそ島のつかひなどせられければ、並ぶ人もなきにこ

そ。

「すべらぎの千代のみかげにかくれずばけふ住吉の松を見ましや」

などよまれはべりけると聞こえ侍りし。誠にかひがひしき人におはすべし。かの少納言、からの文をも博く學び、やまと心もかしこかりけるにや。天文などいふ事をさへ習ひて、才ある人になむ侍りける。よはひさまで古き人にても侍らざりしに、今の世にも、いかにめでたく侍らまし。御めのとは、代々もなきにはあらぬを、近衛のすけなど、かりそめにもあらで、四位の少將中將なるに、樣々の國の司などかけて、あまりに侍りけるにや。はねあるものは前の足なく、角あるものは、かみの歯なき事にて侍るを、さして道の人ならぬ、天文などのおそれある事にや。よろづめでたく侍りしに、惜しくも侍るかな。かくて保元三年八月十六日くらゐ東宮にゆづり申させ給ふ。位におはします事三年なりき。おりゐのみかどにて、御心のまゝに世をまつりごたむとおもほしめすなるべし。さまざまのみかど位につかせ給ひ院など申せどもわがまゝにせさせ給ふ事は有り難きに、並ぶ人もおはしまさず。八巻のみのりをうかべさせ給ひて、さまざま勤め行はせ給ふなれば、昔の契りにおはしますなるべし。千體の千手觀音の御堂たてさせ給ひて、天龍八部衆などいきてはたらかすといふばかりこそは侍るなれ。鳥羽の院の千體の觀音だにこそ、ありがたく聞こえ侍りしに、千手の御堂こそ、おぼろげの事とも聞こえ侍らね。熊野をさへうつして、都につくらせ給へらむこそ、遠くまゐらぬ人のためも、いかにめづらしく侍らむ。比叡などをもいはひすゑたてまつらせ給へ

らむ、神佛の御事、かたがたおこしたてまつらせ給へる、かしこき御心ざしなるべし。みくま野まうで、年毎にせさせ給ひ、ひえの山、高野などきこえ侍り。然るべき御ちぎりなるべし。今は御ぐしおろして、法皇と申すなれば、いかばかり尊くおはしますらむ。御子たちも、おのおの道にとりて、ざえおはしますことききこえさせ給へるこそ、たれも知らせ給へることなれば、何とかはさのみ申し侍るべきな。されども事のつゞきを申し侍りつるなり。

をとめの姿

二條のみかど、申すは、此の院の一の御子におはしましき。此のをさなくおはします新院の御おやにおはします。其の御母右大臣有仁のおとゞの御むすめ、誠の御親は、經實の大納言におはす。このみかど、東宮にたゝせ給ひて、保元三年八月十一日、位につかせ給ひき。御年十六とぞ承はりし。十二月二十日御即位ありて、年もかへりにしかば、正月三日、朝覲のみゆきとて、院へ行幸せさせたまふ。二十一日、ことしも内宴ありて、上達部七人、四位五位十一人、ふみ作りてまゐると聞こえ侍りき。序は永範の式部大輔ぞかゝるゝとうけたまはりし。題は花下歌舞を催すとかや。法性寺のおとゞ奉りたまへりとぞ聞こえ侍りし。舞姫ことしはうるはしき女舞にて、日ごろよりならはされけるとぞ、聞こえ侍りし。通憲の大徳、樂のみちをさへ好み玄りて、さもありぬべき女ども習はしつゝ、神の社などにもまゐりて、舞ひあへりと聞き侍りしに、ゆかしく見ばやと思ひはべりしかど、おいのくちをしき事は、心にもえまかせ侍らで、さる所どもにえまゐりあはで、見はべらざりき。此の御中には定めて御覽

せさせ給ひけむかし。かの入道事にあひ、世にあさましき事ども出でまうできてだ、内宴もたゞ二年ばかりにて行はれぬ事になりて侍るにこそ。其の事のとがにや侍らむ。猶もあらまほしき事あれど且はえたつる人もかたく、久しく絶えたる事を行はれて、世のさわぎも出できにしかば、時におはぬ事とてはべらぬにや。春のはじめに詩作りて、上達部より下ざま、たてまつる事、かしこき御時、もはらあるべき事なり。さる事もはべらば猶いみじかるべし。二月廿四日、きさき立ち給ひき。鳥羽院の姫宮にて、高松院、東宮の御時より女御におはしましし、中宮に立ち給ひて、もとの中宮は院のきさき、公能右大臣の御むすめ、皇后宮にあがり給ふ。ことしぞ大嘗會ときこえ侍る。御かたがた侍ひおはせ給へりしも、皆まかりいでさせ給ひにき。此の御時は、いまだ御かたがたも、おはしまさぬ程なれば、上は清涼殿ばかりに、常のやうにおはしまして、藤壺には、中宮ぞおはしましける。殿の御とのゐ所は、猶宣耀殿なり。いづくも廣らかにていとめでたく聞こえ侍りしにその年のえはすに、あさましきみだれ都の内に出できにしかば、世もかはりたるやうにて少納言の大德もはかなくなり、めでたく聞えし上達部、このゑのすけなどきこえし子ども、あるは流され、あるは法師になりなどしていとあさましき頃なり。信頼の右衛門の督と申しゝは、かの大德が中あしくてかゝるおさましさを、をいだせるなりけり。御おぼえの人にて、いかなるつかさもならむと思ふに、入道謀むるをいぶせく思ひて、軍を起したりけるを、大とこさとりて、行くかた知らずなりにけるに、彼のみかきもりも、その報いに、思はぬかばねになむなりにける。いとあさましと

も、詞も及ばぬ事なるべし。

ひなの別れ

彼の通憲の夫とこのゆかり、浦々に流されたる、皆召しかへして、世みな靜まりたれば、内の御まつりごとのまゝなりしに、みかどの御母方、又御めのとなどいひて、大納言經宗、別當惟方などいふ人ふたり、世を靡かせりしほどに、院の御ため、御心にたがひて、おまりの事どもやありけむ。ふたりながら内に侍ひける夜、おさましき事どもありて、おもひたゞしきさまに聞こえけるを、法性寺のおほき大臣の、せちに申しやはらげ給ひて、おのおの流されにき。此のころは召し返されて、大臣の大將までなりたまへるとこそうけたまはれ。さまでおやまたずおはしけるにや。宰相は憂きめ見たりとて、かしらおろされにけり。それも歸りのぼりておはするとかや。鳥羽の院うせさせ給ひしほどに、世の亂れいできてより、かたがた流され給ひし人、たびたびに其の數おはしき。初めのたび、讃岐の院の御ゆかり、おはいどのがたなど、廿四五人ばかりやおはしけむ。四年ばかりありて、かの衛門督とかや聞こえし人の亂れに、少納言の大とこの子ども八九人ばかり浦々へときこえ侍りき。事なほりしかば、その人々は召し返して、又の年の春、師仲の源中納言とかや、衛門の督に同じ心なるとて、あづまの方へおはすと聞き侍りき。去か有りし程に、その頃かの大納言、宰相とふたり阿波の國鳴門の方などにおはしき。その年の六月にやありけむ。出雲守光保その子光宗などいひし源氏の武者なりし人、筑紫へつかはして、はてはいかになりにけるとかや。その人の女とかや、いも

うと〳〵かやなる人の、鳥羽の院にときめく人にて、いとほしみの餘りにや。二條の院、東宮とておはしまし〳〵御めのとにて、位につかせたまひにしかば、内侍のすけなど聞こえき。そのゆかりにて、時にあへりしに、内の御方人どもの、かく事にあへりしかばにや、又源氏どもの然るべく失せむとてにやありけむ。又さばかりの少納言埋まれたる、索めいでたるにやよりけむ、かくぞなりにし。かやうにて今は何事かはとおぼえしに、かくおはしますべかりけるを、その折も又いかゞうたがはせ給ひけむ、皇子の御方人とおぼしき人、つかさのきなどして、又流させ給へりき。大かた六七年のほどに、三十餘人ちりぢりにおはせし、おさまりく侍りき。輕きにあたがひて、やうやう召しかへされしに、惟方いつとなくおはせしかば、かしこより都へ、女房につけてときこえし、

「このせにも沈むときけば涙がは流れしよりもぬるゝ袖かな」

とぞよまれ侍りける。此の兄に、大納言光頼ときこえ給こし、四十餘りにてかしらおろして、桂の里にこそ籠もりゐ給ふなれ。それはかやうの事に、かゝり給ふ事なく、何事もよき人ときゝたてまつりし、いとあはれにありがたき御心なるべし。又右兵衛の督成範ときこえし、紀の二位のはらにて、その折は、播磨の中將、弟の美濃の少將などきこえし、衛門の督のみだれに、ちりぢりにおはせし時、中將下野へおはして、かしこにてよみ給ひける、

「わがために有りけるものを下野や室の八島にたえぬ思ひは」

とかや。ひが事どもや侍らむ。

花園のにはひ

そのみかどの御母、生みおき奉り給ひて、うせ給ひにしより、鳥羽の女院養ひたてまつり給ひて、幼くおはしまし、時は、仁和寺におはしまして、五の宮の御弟子にて、倶舎頌など、さとく讀ませ給ひて、ぢくぢく讀みつくさせ給ひて、そのこゝろ説きあらはせるふみどもをさへ、傳へうけさせたまひて、智恵深くおはしましけり。院位に即かせ給ひしかば、當今の一の宮にておはしますうへに、美福門院の御養ひ子にて、近衛のみかどの御代りともおぼしめして、この宮に位をも讓らせ給へらむと計らはせ給ひければ、都へかへり出でさせ給ひて、みこの宮、たからのくらゐなど、傳へさせ給へりき。すべの世の賢王におはしますとこそ、承はりしか。御心ばへも深くおはしまし動かしがたくなむおはしましける。廿三におはしまし、御年、御病重くて、若宮にゆづり申させ給ひて、幾ばくもおはしまさゞりき。よき人は、時世にもあはせ給はで、久しくもおはしまさゞりけるにや、末の世、いとくちをしく、みかどの御位は限りある事なれど、あまり世を疾く受け取りておはしましけるにや、又太上天皇朝にのぞませ給ふ常の事なるに、御心にもかなはせ給はず、世のみだれ直させ給ふ程といひながら、あまりに侍りけるにや、よくおはしまし、みかどゝて、世も惜み奉るときこえ侍り。二條の院とぞ申すなる。古き后の御名なれど、をとこ女かはらせ給へればまがはせ給ふまじきなるべし。されど同じ御名は古くも侍らぬにや。此のみかどの御母は大納言經實の御むすめ、その御母、東宮大夫公實の御むすめなり。その大納言の中の君は、花園の右のおとゞの北の

かたなれば、おねの姫君を子にして、院の今宮とておはしましゝに、たてまつられたりしなり。このみかど、生みおき奉りてうせ給ひにき。后の位贈られ給ひて、贈皇太后宮懿子と申すなるべし。御おやの按察大納言も、おほきおとゞおほき一つの位おくられ給へるとなむうけ給はる。さる事やあらむとも知らで、うせ給ひにしかども、やんごとなき位そへられ給へり。御末の盛りなるべし。はかなくて、消えさせ給ひにし露の御命も、后贈られ給へば、いきて成り給へるも昔がたりになりぬれば、殘り給ふ御名は同じ事なるべし。彼の讓られておはしましゝみかどは、新院と申してまだ幼くて太上天皇とておはしますなり。二條の院の御子ふたりおはしますなる御中に、第二のみこにおはしますなるべし。御母ことごとに聞こえさせ給ひき。この帝の御母、德大寺の左大臣の御むすめと申すめりしも、うるはしき女御などに、參り給へるにはあらで、忍びて僅に參り給へるなるべし。さればたしかにもえ承り侍らず。帝尋ねいで奉りて後、中宮養ひ奉り給ひて、母后におはしますなり。永萬元年六月二十五日、位に即かせ給ふ。御とし二つ。世をたもたせ給ふ事三年にやおはしますらむ。一院おぼしめしおきつる事にて、東宮に位を讓り奉り給ひて、まだ幼くおはしますに、太上天皇と申すも、いとやんごとなし。御年二つにて、位につかせ給ふ事、これや初めにておはしますらむ。近衛の帝は、三つにて初めて即かせ給ふと申しゝも、はじめたる事とこそうけたまはりしか。多くは五つなどにてぞ即かせ給ふ。から國には一つなる例も、おはしましけりとか聞こえき。このみかどの御母、いまの中宮育子と申して、法性寺の入道前のおほきおとゞの御むすめに、

おはします。前の上野のかみ源の顯俊のむすめの御腹となむ。みかどの誠の御母の事は、さきに申し侍りぬ。この中宮、二條のみかどおはしまさねども、今のこくもとて、猶内におはしませば、昔にかはれる事なくなむおはしましける。臨時の祭の四位の陪從に、清輔ときこゆる人、催しいだされて、參られたりけるに、先帝の御時は雲の上人なりけれど、この世にはまだ殿上もせねば、たちやすらひて、北の陣の方にめぐりて、后の宮のおはします、御たちの局町など見るに、また殿上のかたざまへ參りて、遙かに見わたしなどしけるにも、昔にかはりたる事もなく、なれならひたりし人どもの見えければ、后の御方の人に物など申しけるついでに、檜扇の片つまを折りてかきつけて、ごたちの中に申しいれさせける、

「むかし見し雲のかけはしかはらねど我が身一つのとだえなりけり」。

いとやさしく侍る事ときこえ侍りき。

二葉の松

さて、後一條の院の御時より近きやうに侍れど、十代に御世餘らせ給ひけり。今は當今の御事申すもはゞかり多く侍れど、事つゞきにおはしませば、事新しく侍れど申すになむ。當帝は一院の御子、御母は皇后宮滋子ときこえさせ給ふ。贈左大臣平時信のおとゞの御女なり。みかど應保元年かのとの巳の年生まれさせ給ひて、仁安元年十月十日東宮にたゝせ給ふ。御とし五つ。みかどよりも、二年兄にておはします。あに東宮は三條の院の例なるべし。同三年二月十九日、位に即かせ給ふ。御年八つにおはします。同じみかどゝ申せども、世の中隔てあ

る事もなく、一院あめの下知ろしめし、御母ぎさき、盛りにおはしませば、いとめでたき御栄えなるべし。然あれば、ふたばの松の千代の初め、いとめでたく傳へうけたまはり侍りき。御母ぎさき此のみかど生み奉り給ひて、五六年ばかりにや、女御ときこえさせ給ひて、仁安三年と申しゝやよひの頃、皇太后宮に立たせ給へり。今は女院と申すとぞ。いとめでたき御栄えにおはします。多くの女御きさきおはしますに、みかど生み奉り給へりける御すくせ、申すもおろかなり。先のみかどの御時も、この御世にも、御産の御祈りとのみ聞こえて、誠にはあらぬ事のみ聞こえ給ひしに、いとありがたく聞こえさせ給ふ。代々のみかどの御母、ふぢなみの御流におはしますに、堀河の帝の御母ぎさきも、關白の御むすめになりて、女御に參り給へれども、誠には源氏におはしませば、ひきかへたるやうに聞こえさせ給ひしに、いま又平の氏の國母、かく榮えさせ給ふうへに、同じ氏の、上達部、殿上人、近衛づかなど、多くきこえ給ふ。此の氏の然るべく榮え給ふ時のいたれるなるべし。平の氏のはじめは、一つにおはしましけれど、にきの家と、世の固めにおはする筋とは、久しくかはりて、かたがた聞こえ給ふを、いづ方も同じ御世に、みかど后おなじ氏に榮えさせ給ふめる。平野は、あまたの家の氏神にておはすなれど、御名もとりわきて、此の神垣の榮え給ふ時なるべし。このきさきの御母、顯頼の民部卿の御むすめにおはしますなるべし。醍醐の帝の御母方の家にておはしますのみにあらず、君に仕へ奉り給ふ家、かたがた然るべく、かさなり給へるなるべし。今の世の事はゆかしく侍るを、えうけたまはらで、おぼつかなき事多くはべり。

今鏡第四

ふぢなみの上

ふぢなみ

世繼は、入道おほきおとゞの御榮え申さむとて、その御事こまかに申したれば、その後より申すべけれど、水上おらはれぬは流れのおぼつかなければ、まづ入道おとゞの御ありさまおろおろ申し侍るべきなり。入道前の太政大臣道長のおとゞは、大入道殿の五郎、九條の右のおとゞの御孫なり。一條の院、三條の院、後一條の院、三代の關白に坐します。五十四の御年御ぐしおろさせ給ひて、萬壽四年十二月四日、六十二にてかくれさせ給ふ。をのこ君、女君、あまたおはしましき。女君、第一のは、上東門院と申して、後一條の院、後朱雀の院、二代のみかどの御母なり。次に第二の御むすめは、三條の院の中宮妍子と申しき。陽明門院の御母なり。第四は後一條の院の中宮威子と申す。二條の院と、後三條の院の皇后宮との御母なり。第六の君は後冷泉の院の御母内侍のかみ嬉子と申しき。これ皆鷹つかさ殿の御はらなり。男君だち、太郎は宇治のおほきおとゞ、次は二條殿、またおなじ御はらからなり。堀川の右のおとゞ、閑院の東宮大夫、無動寺のうまのかみ、三條の民部卿、この四ところは、高松の御はらの君だちなり。この御はらに、女君二所おはしき。ひとりは小一條の院とて、東宮より院にならせ給へりし、女御に參り給へりき。今ひとりは、土御門の右のおとゞの北の方なり。昔も今

もかゝる御榮えはありがたきなるべし。

上東門院は、一條の院のきさき、二代のみかどの御母なり。御有樣さきにてまかに申し侍りぬ。次に妍子と申すは、女院とおなじ御はらからにおはします。寛弘元年十一月、内侍のかみになり給ひてやがて正四位の下せさせ給ふ。十二月に三位にあがらせ給ふ。七年正月に二位にのぼり給ひて、同年二月に、三條の院の東宮と申しゝ女御に參り給ふ。位に即かせ給ひて、寛弘八年八月に、女御の宣旨かうぶり給ふ。長和元年二月十四日、中宮にたち給ふ。みかど位さらせ給ひて、寛仁二年十月十六日、皇后宮にあがり給ふ。萬壽四年九月十四日、三十四にて御ぐしおろして、やがてその日かくれさせ給ひにき。枇杷殿の皇太后宮と申す。隆家の帥くだり給ひけるに、この宮より扇たまはすとて、

「すゞしさはいきの松原まさるともそふる扇の風な忘れそ」。

この宮の御はらに、三條の院の姫宮おはします。その宮禎子の内親王と申して、治安三年一品の宮と申す。萬壽四年三月廿三日、後朱雀院の東宮と申しゝ時、參らせ給ひき。御年十五にぞおはしましゝ。みかど位につかせ給ひて、皇后宮にたゝせ給ふ。後におらためて中宮と申しき。みかどの御ついでに且は申し侍りぬ。後三條の院の御母、陽明門院と申す、この御事なり。この女院の御はらに、女宮たちおはしましき。良子内親王とて、長元九年十一月二十八日、伊勢のいつきと聞こえさせ給へりし、一品にのぼらせ給へりき。次の姫宮は、娟子の内親王と申しき、長元九年霜月の頃、賀茂のいつきと聞こえしほどに、まかり出で給ひける後、天

喜五年などにやありけむ、なが月の比いづこともなく失せ給ひにければ、宮の内の人いかにすべしともなくて明かし暮らしける程に、三條わたりなる所に住み給ふなりけり。はじめは人の扇にひと文字を男の書きたまへりけるを、女の書き添へさせ給へりければ、をとこ又見て、ひとつ添へ給ふに、たがひに添へたまひけるほどに、歌ひとつに、かきはてたまひけるより心通ひて夢かうゝつかなることもいできて心や合せ給へりけむ、負ひ出だしたてまつりて、やがてさて住み給ひけり。をとこ咎あるべしなどきこえけれど、人がらの品も、身の才などもおはして、世もゆるし聞こゆるばかりなりけるにや、もろともに心を合せ給へればにやありけむ、さてこそ住み給ひけれ。男その程は、宰相中將など申しけるとかや。後には右のおとゞまでなり給へりき。入道おとゞの第四の御むすめ、後一條の院の中宮威子と申しき。これも同じ御はら、贈司殿の御むすめなり。寛弘九年に、内侍のかみになりたまひて、後一條の院くらゐの御時、女御に參り給ふ。寛仁二年十月に、きさきにたち給ふ。長元九年に、御ぐしおろさせ給ふ。同九月にかくれさせ給ひにき。みかどは四月にうせさせ給ひ、きさきは九月にかくれさせ給ひし、いと悲しかりし御事ぞかし。その御はてに、さはる事有りて、江侍從參らざりけるを、人の、「などまゐらざりしぞ」と申したりければ、

「わが身には悲しき事のつきせねば昨日をはてと思はざりけり」

とぞ聞こえける。此の后の生みたてまつり給へる姫宮、章子内親王と申し、二條の院と申す。この御事なり。後冷泉の院東宮におはしましゝ時、まゐらせ給ひて、永承元年七月に、中宮に

たゝせ給ふ。治暦四年四月に皇太后宮にあがらせ給ひき。内にまゐらせ給ひて、藤壺におはしましけるに、故中宮の、これにおはしましゝ事など、思ひいだして、出羽の辨が涙つゝみあへざりければ、大貳の三位、

「玄のびねの涙なかけそかくばかりせばしと思ふころのたもとに」

とよまれ侍りければ、出羽の辨、

「春の日にかへらざりせばいにしへの袂ながらや朽ちはてなまし」

とぞかへし侍りける。

聖子の内親王と申すも、又同じ御はらにおはします。長元四年に賀茂のいつきにて、同九年に出でさせたまひて、永承六年十一月、後三條の院東宮におはしましゝ、女御に參らせたまひき。御とし廿三。承保二年六月廿二日、皇后宮にたち給ふ。延久五年四月廿一日、御ぐしおろさせ給ひき。院の御ぐしおろさせ給ひし同じ日、やがて同じやうにならせ給ひし、いとおはれに、契り申させ給ひける御すぐせなり。后の位はもとにかはらせ給はず。入道殿の第六の君は、後冷泉の院の御母におはします。みかどの御ついでに申し侍りぬ。

梅のにほひ

關白前の太政大臣頼通のおとゞは、法成寺入道おほきおとゞの太郎におはします。御母、宮たちに同じ。從一位源の倫子と申す。一條の右大臣雅信のおとゞの御むすめなり。攝政殿と申す。この宇治のおほきおとゞ、大臣の位にて五十六年までおはしましき。後一條の院の御を

ぢにて御年廿六にて、寛仁元年三月十六日攝政にならせたまふ。其の十九日牛車の宣旨かうぶらせ給ひて、やがてその廿二日、大臣三人のかみにつかせ給ふ宣旨かうぶり給ふ。帝おとなにならせ給ひぬれば、關白と申しき。後朱雀の院位につかせ給ふにも、猶御をぢにて長元九年四月廿九日、さらに關白せさせ給ふ。その後、太政大臣にならせ給ふ。御とし七十一とぞきこえ給ひし。治暦三年七月七日宇治院の平等に行幸ありて准三后の宣旨かうぶり給ふ。むかしの白河のおとゞの如くに、内舍人なども御隨身にたまはらせ給ひき。關白は讓り給ひて、のかせ給へれど、内覽の職事まゐり、物申すこと同じことなりき。後三條の院くらゐにつかせ給ひてぞ、年ごろの御心よからぬ事どもにて、宇治にこもりゐさせ給ひて延久四年正月二十九日御ぐしおろさせ給ひて、同六年二月二日八十三にてうせ給ひにき。この大臣、歌などもよくよませ給ひしにこそ侍るめれ。その中に堀川の右のおとゞに、梅の花をりて奉り給ふとて、

「折られけりくれなゐ匂ふ梅の花けさ白妙に雪はふれゝど」

とよませたまひたる、いとやさしく末の世まで、とゞまり侍るめり。この大臣の御子、太郎にて右大將通房と申し、十八にてうせ給ひにき。御母右兵衛督憲定の女なり。まうけの關白、一の人の太郎君にて、おへなくなり給ひにしかば、世もくれふたがりたるけしきなりしぞかし。としもまだ二十にだになら給はぬに、和歌などをかしくよませ給ひけるさへ、いとあはれに思ひ出でられさせ給ふ。「一夜ばかりを七夕の」などよませ給ひたる、後拾遺にいりては

侍るめり。

伏見の雪のあした

大將殿の外の君たちは、おほとの〳〵ひとつ御はらにおはしましき。おほ殿の御末こそは、一の人つがせ給ふめれ。その御報に押されて、大將殿もとくかくれ給ひけるにこそ。女君は後朱雀の院の中宮に、奉り給へりしは、誠の御子にはおはしまさで、式部卿の宮の御子なりしきこえし人も、ひとつ御はらにおはしき。大將殿のひとつ御腹なり。伏見の修理のかみ、俊綱とければ、俊綱の君、御子にておはしけれど、けざやかならぬ程なりければにや、猶俊遠のぬしの子の定にて、橘の俊綱とてぞおはせし。後になほ殿の御子とて、藤原になり給ひき。直衣など着られけるをも橘直衣とぞ人は申しける。まめやかになりて後、大殿、宇治の大僧正、四條の宮などは、おなじ御はらなれど、修理のかみは、下臈にてやみ給ひにしぞかし。上達部にだにえなられざりける、猶世のあがりたるにや。からくやおぼしけむとぞおぼえはべりし。されども近江守有佐といひし人は、後三條の院の誠には御子と聞こえしかど、讃岐守顯綱の子侍に賜へりける。堀河の右のおとゞは中務の少輔有佐が道にあひておりて居たりつるこそ、いとはしく覺えつれ。院にたがはず似奉りたるさまなど有りけりと聞こえしかど、それはさてこそやまれにしか。此のすりのかみは、橘をかへられしかば、なほ關白の御子なるべし。

この修理のかみの、昔尾張の國に俊綱といひけるひじりにておはしけるを、熱田の社のつかさの、ないがしろなることの有りければ、生まれかはりて、その國の守になりて、かの國に下るまゝに、熱田にまうでゝ、その大宮司とかを、かなしく、せためられなど云ければ、「過ちなき者をかくつかまつるよ」と神に申しける夢に、昔すんがうといひて有りしひじりの法施を年ごろえさせざりしかば、いかにもえ咎むまじきとぞ見たりける。然ならむために、國の司の云なに生まれたまひけるにこそ。さすが昔の行ひの力に關白の御子にてもおはするあるべし。「われも昔その物をさめたりき」などいひて、鏡とりいださせなどせられける、たゞ人にはおはせざるべし。大殿の伏見へおはしましたりけるも、すゞろなる所へはおはしますまじきに、雪のふりたりけるつとめて、俊綱がいたく伏見ふけらかすに、俄に行きて見むとて、播磨守師信といふ人ばかり御供にて、俄にわたらせ給ひたりければ、思ひもよらぬことにて、門を叩きけれど、むでにあけざりければ、人々いかにと思ひけり。かばかりの雪のあしたに、さらぬ人の家ならむにてだに、かやうの折節などは、その用意あるべきに、いはむや殿の渡り給へるに、かたがた思はずに思へるに、あけたる者に、おそくあけたるよし、かうづかぶりければ「雪を踏み侍らじとて山をめぐりはべる」と申しければ、元よりあけ設け、又とりあへず急ぎあけたらむよりも、ねんに興あるよし人々いひけるとか。修理のかみさわぎいで雪御覽じて、御物語などせさせ給ふほどに、師信「かくわたらせ給ひたるに、いで然るべきあるじなどつかまつれ」と催しければ、俊綱「今贄殿參り侍りなむ」と申しければ「人にも知られ

でわたらせ給ひたれば、贄殿まゐることあるまじ。日もやうやうたけて、いかでか、御設けなくてあらむ」といひければ、殿笑はせ給ひて、たゞ「せめよ」など仰せられける程に、家の司なるおきまさといひて、光俊有重などいふ學生の親なりしをのこ、けしき聞えければ、修理のかみたちいでゝかへり參りて、あるじ云て、きこしめさすべきやう侍らざるなり。御臺などの新しきも、かく御覽ずる山のおなたの庫におきこめて侍れば、便なくとりいづべきやう侍らず。あらはに侍るは皆人の用ひたるよし申しければ、「何の憚りかあらむ。たゞ取り出だせ」と仰せられければ「さば」とて立ち出でゝ、取り出だされけるに、色々の狩裝束したる、伏見さぶらひ十人、いろいろのおこめに、いひしらぬ染めませしたるかたびら、くゝりかけ、とぢなどしたる雜仕十人ひきつれて、倉のかぎ持ちたるをのこ、先にたちてわたる程に、雪には えて、わざとかねて云たるやうなりけり。さきに跡ふみつけたるを、云りにつゞきたる男女同じあとをふみてゆきけり。かへさには、御臺高坏云ろがねの銚子など、一つづゝさげて持ちたるは、このたびは云りにたちてかへりぬ。かゝる程に上達部殿上人、藏人所の家司、職事御隨身など、さまざまに參りこみたりけるに、この里かの里所々にいひ云らぬ供へども目もわやなりけり。師信「いかにかくは俄にせられ侍るぞ。かねて夢など見侍りけるか」など戲ぶれ申しければ、俊綱の君は「いかでかゝる山里にかやうの事侍らむ。用意なくては侍るべき」などぞ申されける。伏見にては、時の歌よみどもつどへて、和歌の會たゆるよなかりけり。伏見の會とて、幾らともなく積もりてなむおなる。「音羽の山のけさはかすめる」などよまれた

る、いとうに侍るかし。かやうに、もてけうぜらるゝおまりにふけらかし參らせられけるにこそ。四條の宮の女房、あまたあそびて、暮れぬさきにかへり給ひければ、修理のかみ、

「都人くるればかへる今よりはふしみの里の名をもたのまじ」

となむよみ給ひける。白河の院、「一におもしろき所は、いづこかある」と問はせ給ひければ「一には石田こそ侍れ」、「次には」と仰せられければ「高陽の院ぞ候ふらむ」と申すに「第三に鳥羽ありなむや」と仰せられければ、「鳥羽殿は君のかく玄なさせ給ひたればこそ侍れ。地形眺望など、いとなき所なり。第三には、俊綱が伏見候ふらむ」とぞ申されける。こと人ならばいと申しにくきことなりかし。高陽の院にはあらで、平等院と申す人もあり。伏見には、山みちをつくりて、然るべき折ふしには、たび人を玄たてゝ、とはされければ、さる面白きことなかりけり。大僧正まだ若くおはしける時、御母贈二位の、宇治殿に、「僧都の、御房のまだ我が房も持たせ給はで、あひずみにておはしますなるに、房をさたして、たてまつらせ給へかし」と申されければ、泰憲の民部卿、近江守なりけるが、參りたりけるに、「こゝなる小僧の、房を持たざるに、草庵ひとつむすびて、とらせられなむや」と仰せられければ「作り侍らむ、いとやすきことに侍り。泰憲がたちに仕うまつる、石田と申す家こそ、寺も近くて、おはしまさむにも、つれづれなぐさみぬべき所はさぶらへ。堂なども侍りて見よき所なり」と申しければ、殿は「ゆゝしき報ありける小僧かな。それはこよなきことにこそあらめ」とて、すゑたてまつり給へりけるとぞ。泰憲の民部卿は、おほとのゝ中將など申して、いはけなくおは

しけるに、大將殿などまだ世におはしける程は、殿も人もおもりかに思ひたてまつらるゝともなかりける折、名簿をとりいだして、手うつしにたてまつりて、「泰憲が名簿えさせ給へらむは、ざりともよしあるべき事なり。思ふやうありて、たてまつるなり」と申しければ、宇治にまゐらせ給ひて、かくこそ仕うまつりたれ」と申させ給ひけるにこそ、おぼえはつかせ給ひけれとぞきゝ侍りし。誠にやはべりけむ。

雲のかへし

宇治のおほきおとゞの御むすめは、大殿の一つ御はらにて、四條の宮になむおはしましける。そのさきに、式部卿のみこの女君を子にゑたてまつりて、後朱雀の院の御時たてまつらせ給へりしは、弘徽殿の中宮嫄子と申しき。その御事はさきに申し侍りぬ。いつしか、みやみや生みたてまつりて、おへなくかくれさせ給ひにし、いと悲しく侍りしことぞかし。誠の御むすめならねども、いかにくちをしくおぼしめされけむ。秋のおはれいかばかりかはかなしく侍りし。この中宮の生みたてまつり給へる姫宮は、祐子の内親王と申しき。長暦二年四月二十一日生まれたまふ。長久元年裳着し給ひき。延久四年御ぐしおろし給ふ。後に二品の宮と申しき。この宮の歌合に、宇治のおほきおとゞの御うた、

「有明の月だにあれやほと、ぎすたゞひと聲のゆくかたも見む」

とよみたまへるなり。大貳三位、

「秋ぎりの晴れせぬみねにたつ鹿は聲ばかりこそ人に知らるれ」

とぞよめりける。又禖子の内親王と申すこそは、この中宮生みおき給へる宮におはしませ。寛徳三年三月、賀茂のいつきと申しき。天喜六年御なやみによりて、いで給ふ。美作の御が「ありし昔の同じ聲かと」とよめるは、この宮のいつきのころ侍りて、思ひいだして侍りけるになむ。この宮いつきと聞こえける比、本院の朝顔を見給ひて、

「神がきにかゝるとならばあさがほのゆふかくるまで匂はざらめや」

と侍るもいとやさしく、宇治殿の誠の御むすめ、四條のみやにおはします。後冷泉の院の中宮寛子と申す。永承元年内へまゐり給ひて、同六年皇后宮に立ち給ふ。御年十六。治暦四年四月に中宮と申す。同十二月に御ぐしおろさせ給ふ。御とし三十二。天喜四年皇后宮にて歌合させ給ふに、堀川の右のおと〻「雲のかへしの嵐もぞ吹く」などよみ給ふ此のたびなり。また御身にも得させ給へりける道にこそ侍るめれ。女房の參らむと申しけるほどに、身まかりけるを聞かせ給ひて、

「くやしくぞ聞きならしけるなべて世の哀とばかりいはましものを」

とよませたまひけむ、いとなさけ多くなむ。宇治殿のかぎりにおはしましけるに、おほ殿の「おぼしめさむ事、仰せられおかせ給へ」と申させ給ひければ「宇治と宮と」とぞ、仰せられける。宇治とは平等院の御堂の事、宮とは四條の宮の御事なり。「かくて候はむずれば御堂の事、宮の御事は、おぼつかなく思しめすこと、つゆ侍るまじきなり」とぞよく申させ給ひけるとなむ。

白川のわたり

鷹司殿の御はらの、第二の御子にては、大二條殿とておはしましゝ、關白太政大臣敎通のおとゞと申しき。御堂の君たちの御中には、第三郎にやおはしけむかし。さはあれども、宇治殿のつぎに、關白もせさせ給ふ。第二の御子にてぞおはしましゝ。大臣の位にて五十五年おはしましき。治暦四年四月十七日、後冷泉の院の御時、兄の宇治殿の御ゆづりによりて、關白にならせ給ひき。七十三の御年にやありけむ。みかど程なくかはりゐさせ給ひて、後三條の院の代のはじめの關白、やがて同月の十九日に、更にならせ給ひき。延久二年三月に、太政大臣にのぼらせ給ふ。承保二年九月廿五日にぞ、うせさせ給ひにし。御年八十。兄の宇治殿は申すべきならず。このおとゞも、世おぼえなど、とりどりになむおはしましゝ。女御きさきなど、たびたびたてまつらせ給ふ。家の賞かぶり給ふ事もたびたびにて、御ひきいで物、御馬などたてまつり給ふ。公達など加階せさせたまひて、もとより一の人にも劣らずなむおはしましゝ。御後見にて但馬守能通といふが、はかばかしきにてうしろ見たてまつりければ、御家のうちも、いと心にくきことおぼかりけり。いつの事に侍りけるにかや。おほみあそびに、冬の束帶に半臂をきさせ給へりけるを、肩ぬがせ給ふとき、宇治殿よりはじめて、下がさねのみ白く見えけるに、この大臣ひとりは半臂を著給へりければ、御日記に侍るなるは、「予ひとり半臂の衣をきたり。衆人耻ぢたる色あり」とぞ侍るなる。かやうなることもぞ多く侍りける。能通のぬし、宇治殿にまゐりて、御前に召されて、參るとて、ふやく持ちて參らむとて、藏人

所の御厨子さぐりて、「いやくも置かれぬみづしかな。衣冠にておまへに参るものは、とりてこそ参ることにてあるに」とつぶやきければ、殿きかせ給ひて「かく常に恥ぢしめらるゝ」などぞ仰せられける。いやくは、束帯にてぞ持つ事にて侍るを、殿居装束にも、事にいたがひ、人によるべきにや。検非違使などは、常に持ち侍るめり。又高光とかきこえし人、誰れにかありけるとかや、車よりおりて、懐紙をたかくたゝみなして、笏になしてなむとれりけるとぞ、聞き侍りし。束帯にも、上達部はなちては、殿上には持ちてのぼり給はぬとかや。大宮の右のおとゞ、経輔の大納言、蔵人の頭にていさかひ給ひける時、笏してうち給ひたりけるより、とゞめられ侍りとぞきゝ侍りし。御座のおはし掛くなる棹は、とりはなちに侍りけるを、鳥羽の院の位の御時にや、殿上人のいさかひ給ひて、其の棹をぬきて打たむとし給ひけるより、うちつけられたるとなむ聞こえ侍る。もとなき事も、かゝるためしに始まれるなるべし。その御座と申すは御倚子とて、殿上のおくの座のかみに、たてられ侍るなり。紫檀にて作られて侍るなるを、むかし宇多の帝、まだ殿上人におはしまして、業平の中将とすまひとらせ給ひて、勾欄うち折らせ給ひけるを、代々さてのみ折れながらこそ侍るなるに、近き御世に筑紫の肥後守になれりける、何某とかやいふ人、蔵人なりける時、紫檀のきれ、とのに申して、そのかうらんの折れたる、つくろはむなどせられけるこそ、をこの事に侍りけれ。かの能通のぬしの、いかゞありける末なればにや、通憲といひし少納言の大とこも、近くはいみじくこそ、世の中いたゝめりしか。このおとゞ右衛門の督など申しけるほどにや、白川に、

花見にわたり給ふとて、小式部の内侍に、かくと仰せられければ、

「春のこぬところはなきを白川のわたりにのみやはなは咲くらむ」

と申したりけるこそ、いとやさしくとゞまりて見え侍れ。和泉式部とかきたるも侍れば、母のよみて侍るにや。

はちすの露

四條の大納言のむすめの御はらに、御子ども多くおはしましき。太郎にては、山の井の大納言信家の君おはしましき。いとよき人におはしましき。宇治殿は「山の井ばかりの子をえもたぬ」とぞ仰せられける。いかばかりおはしましけるにか。何ごとにか侍りけむ、宇治殿の御許におはしけるに、わさとするまさむとおぼして、見かへりて、久しくものし給ひけるにも、遂に居給はざりけるとかやぞ聞こえ侍りし。いと末おはせぬに、土御門の右のおとゞのひめぎみをぞ養ひ子にて、大殿の北のまんどころと申し、二條殿の次の御子は、三位侍従信基とておはしましき。又九條の太政のおとゞ、信長とておはせし、それもはかばかしき末もおはせぬなるべし。木幡の僧正、なが谷の法印などいふ僧きんだちおはしましき。僧正は小式部の内侍のはらなればにや、歌よみにてこそおはすめりしか。「粟津野のすぐろのすゝきつのぐめば」などいふ歌、撰集にも見え侍るめり。うせ給ひて後も、上東門院の御夢に御覧じける、僧正の御うた、

「あだにして消えぬる身とや思ふらむはちすの上の露ぞわが身は」

とはべりける、淨土に往生し給ふにや。いとたふとき御歌なるべし。法印は兄たちの、同じはちにおはすべし。

小野のみゆき

大二條殿の女君は、後朱雀の院の女御におはせし。院うせさせ給ひて、七八年ばかりやありけむ、御ぐしおろし給ひて、十餘年ばかりすぎて、うせ給ひにき。長久二年に歌合せさせ給へりしに、良遲法師の人にかはりて、

「みがくれてすだくかはづのもろ聲にさわぎぞ渡るねでのうき草」

とよめる、この歌合のうたなり。兼長の君は、「おのが影をや友と見るらむ」とよみ、永成法師は、「いのちはとの數ならず」とよめる、かやうのよき歌ども多く侍り。天喜元年御ぐしおろし給ひて、治曆四年にぞ失せさせ給ひにし。弘徽殿の女御と申しき。おなじ御時、內侍のかみ眞子と申しゝも世に久しくおはしき。第二の御むすめにやおはしけむ。三の君は後冷泉の院の女御に參りて、きさきに立ち給ひて、皇后宮と申しき。のちに皇太后宮にあがりて、承保元年の秋、御ぐしおろし給ひてき。猶きさきの位にて、比叡の山のふもと、小野といふ里に籠もりゐさせ給ひて、都の外に行ひすまし給へりき。雪おもしろく積もりたるあしたに、白河の院にみゆきなどもやあらむと思ひて、ある殿上人、馬ひかせて參り給へりけるに、院いと面白き雪かなと仰せられて、雪御覽ぜむとおぼしめしたりけるに、馬ぐして參りたる、いみじく感ぜさせ給ひて、御隨身のまゐりたりける、獨り御供にて、俄に御幸有りけるに、北山のか

たざまに、わたらせ給ひければ、その御隨身、ふと思ひよりて、もし小野のささきの、山ずみし給ふなどへや、わたらせ給はむずらむと思ひて、かの宮にまうで仕うまつるものにや侍りけむ、俄に去のびて「みゆきのけさ侍る。そなたざまに渡らせ給ふ。もしその御わたりなどへや、侍らむずらむ」と告げきこえければ、かの入道の宮、その御用意ありて、法花堂に三昧經去づやかに讀ませさせ給ひて、庭の上いさゝか人のあとふみなどもせず。うちいで十具ばかり有りけるを、中よりきりて、袖口出ださむ用意ありけるを、「もし入りて御覽ずることも侍らむ。いと見苦しくや」と女房申しけれど、きりて出だし給ひけるに、既にわたらせたまひて、階かくしの間に、御車たてさせ給ひて、かくとや侍りけむ。さやうに侍りける程に、かざみ着たるわらは二人、ひとりは去ろがねの銚子に、みき入れてもて參り、いま一人は去ろがねの折敷に、こがねの盃すゑて、大柑子御さかなにて、出だし給へりければ、御ともの殿上人、とりて參りて、いとめづらしき御用意に侍りけり。かへらせ給ひてのち、「かしこく内を御覽せで、かへらせ給ひぬ」など、御たち申しければ「雪見に渡り給ひて、いり給ふ人やはある」とぞのたまはせける。月を雪ともきこえ侍り。さて院より御使ありて、「いと心ぐるしく、おもひやりたてまつるに、うちいでなどこそ用意して、有りがたく持たせ給へりけれ」とて、美の〻國とかや、御庄の分奉らせ給へりければ、まゐりつかうまつるをとこ女これかれ望みけれど、御幸告げきこえける隨身に、預けたまひけるとぞ聞き侍りし。その舍人の名は、信定とかや。殿上人は何某の辨とかや。たしかにも聞き侍らざりき。その小野の寺などは、猶殘り

て三昧行ふ僧も、まだかすかに侍るなり。后もまだおはしましける折、夕立のそら物おそろしく、鳴る神おどろおどろしかりけるに、御經よみてゐさせ給へりけるを、神落ちて御經なども紙の所ばかり焼けて、文字はのこり、御身には露の事もおはしまさゞりける、いとたふとく、あさましき事とぞ聞き侍りし。うせ給ひけるときも、いとたふとくて、淨土にまゐり給ふとぞ申し侍りし。大二條殿の君たちかくなり。

うすはなざくら

昔は世もあがりて、うちつゞきすぐれ給へるは申すべきならず。又とりおきたる御能などは次のことにて、近き世の關白には、大殿とてをぢの大二條殿のつぎに、一の人におはしましゝこそ、御みめも善く、御心ばへも末榮えさせ給ふ事も、優れておはしましゝか。その御名は、師實とぞ聞こえさせ給ひし。宇治のおほきおとゞの、第二の御子におはしましき。御母贈從二位藤原の祇子と申しき。四條の宮と一つ御はらなり。大臣の位にて四十二年おはしましき。承保二年九月、內覽の宣旨かうぶり給ひて、十月三日氏の長者にならせ給ふ。十五日に關白にならせ給ひき。御とし三十四。白河の院の御時なり。大將はのかせたまひて、御隨身なほ賜はらせたまひて、牛車の宣旨かうぶらせ給ふ。承曆四年十月に、太政大臣の上につらなり給ふべき宣旨ありき。堀河の院くらゐに即かせ給ひし日、攝政にならせ給ふ。同四年內舍人隨身たまはり給ふ。寬治二年十二月に、太政大臣になり給ふ。同四年攝政の御名はかはりて、關白と申しゝかども、猶司召などのことは、同じことなりき。嘉保元年三月關白のかせ給ひ

て も、御隨身はもとのやうにつがはせ給ひき。同三年正月なかのへの手車の宣旨ありき。康和三年正月廿九日、御ぐしおろさせ給ふ。二月十三日、宇治にて、うせさせ給ふ。御年六十におはしましき。大殿と申し、又後の宇治の入道殿とも、又京極殿とも申すなるべし。寛治八年高陽院にて歌合せさせ給ひし時の歌よみども、昔にも恥ぢぬ御あそびなるべし。筑前の御の、うすはなざくらの歌、匡房の中納言の、「白雲とみゆるにゐるし」といふ歌にまけ侍りしを、殿より、

「ゐら雲はたちかくせどもへだてくれなゐのうす花櫻心にぞしむ」

と仰せられたりしかば、筑前の御の御返したてまつるに、

「ゐら雲はさもたゝばたてくれなゐの今一しほを君しそむれば」

と申したりし、いとやさしくこそ侍りしか。御心ばへなどのなつかしく、おはしましけるにこそ。御鞠御覽せさせ給ひけるに、盛長淡路守といひしを、殊の外にはめさせ給ひけるほどに、信濃守行綱も、心には劣らず思ひて、羨ましく、ねたく思ひけるに、御足すまさせ給ひけるに、つみ奉るやうにたびたびしければ、「いかにかくは」と仰せられければ「鞠も見しらぬはぎの」といひつゝ、洗ひ參らするを、「行綱もよし」とぞ仰せられける。御かへりごとに、こそこそと撫で奉りける、もとのさるがうなれども、ものこちなきゐうには、さもえまさじかしと覺えて。また盛長のぬし、花ざかりに、鞠もたせて、かゝりへまかりけるに、行綱さそひにやりたりければ、「御物忌にこもりて、人もなければ、けふはえ參らじ」と返事しけるをき

ゝつけさせ給ひて、「たゞいけ」とて薄色の指貫のはりたる、香のそめ布など納殿よりとり出ださせて、俄に縫はせて、御鞠、花の枝につけて、みまやの御馬にうつし置きて、出だしたてゝつかはしければ、けふこそ此のついでに、女に見えめとおもひて、日ごろはおはぬ女の家のさじきに馬うちよせて、かたらふほどに、御馬にはかにはねおとして、まへのはりけにうちいれてけり。かしらくだりのころ所なく、土かたに浴みたりけるを、女、家にいれておらひあげて、いとほしさにこそおひにけれ。御馬走りてみまやに立ちにけり。おやしく聞こしめしけるほどに、ねかひ追ひつきて、かくと申しければ、いかにおさましく、をかしくおぼしめしけむ。さてえばしはえさし出でもせざりけるとぞ聞こえ侍りし。

波の上のさかづき

この大殿の末、廣くおはしますさまは、をのこ公だち、よに知らず多くおはしまして、をとこ僧も、おまたおはしますに、御むすめぞおはしまさぬ。六條の右のおとゞの御むすめを、殿の御子とて、白河の院の東宮と申しゝ時より、御息所にたてまつり給へりし、賢子の中宮とて、堀河の院の御母なり。宮々おほく生み奉り給へりき。その御事はみかどの御ついでに申し侍りぬ。さて一の人つがせ給ふ。太郎におはしましゝ、後の二條の關白おとゞの御流れこそ、いまもつがせ給ふめれ。その御名は關白内大臣師通と申しき。御母は土御門の右のおとゞ師房と申しゝ御むすめを、山の井の大納言信家と申しゝが子にぞたてまつりたまへりし御腹なり。永保三年正月廿六日、内大臣になりたまふ。御年廿一。嘉保元年三月九日關白にならせ給

ふ。御年卅三。その三年正月、従一位にのぼらせ給ふ。右大臣の上につらなるべき宣旨かうぶり給ふ。承徳三年六月廿八日、御年三十八にて、うせさせ給ひにき。大臣の位にて十七年おはしましき。このおとゞ、御心ばへたけく、すがたも御能も、すぐれてなむおはしましける。御即位などにや侍りけむ、匡房の中納言、この殿の御有様を、ほめたてまつりて、「おはれこれを、もろこしの人に見せはべらばや。一の人とてさし出だし奉りたらむに、いかにほめ聞こえむ」などぞ、まのあたり申しける。玄上といふ琵琶をひき給ひければ、おほきなる琵琶の、ちりばかりにぞ見え侍りける。手などもよくかゝせ給ひけり。うまごの殿などばかりは、おはしまさずやあらむ。手かきにおはしましきとぞ、定信の君は人に語られける。三月三日曲水の宴といふ事、六條殿にて、この殿せさせ給ふと聞こえ侍りき。から人のみぎはになみ居て、鸚鵡の盃うかべて、桃の花の宴とてするとを、東三條にて、御堂のおとゞせさせ給ひき。その古き跡を尋ねさせ給ふなるべし。このたびの詩の序は孝言といひしぞかきけるときゝ侍りし。四十にだに足らせたまはぬを、然るべき御よはひなり。かぎりある御いのちと申しながら、御にきみのほど人の申し侍りしは、「常の事と申しながら、山の大衆の、おどろおどろしく申しけるもむづかしく、世の中心よからぬつもりにやありけむ」とも申し侍りき。

宇治の川瀬

後の二條殿の御つぎには、近く富家殿とておはしましゝ、入道おとゞおほぢの大殿、御子にし参らせ給ふと聞こえ給ひき。御母は大宮の右のおとゞの御むすめなり。此のおとゞの御名

は忠實とぞきこえ給ひし。康和元年閏九月廿八日、内覧の宣旨かうぶり給ひき。御とし廿二。同二年七月十七日、右大臣にならせたまひき。大將も猶かけさせ給へりき。天永三年十二月十四日、太政大臣になり給ひき。はじめは宇治の川瀬波ぢかにて、白河の水へだてなくおはしまし、かば、富家殿つくり給ひて、院わたらせ給ひけるに、宇治川におそびの船、歌うたひて、波に浮かびなどして、いと面白くおそばせ給ひける。盛定といひしをとこ、歌うたひ、その時こうたうなどいひし、船に乗り具して、うたつかうまつりけるとかや。其のたび人々に、歌よませさせ給はざりけるをぞ、くちをしくなど申す人もありける。かやうの所にわたらせ給ひて、何となき御あそびも、古き跡にも似ぬ御心なるべし。かやうにて過ぎさせ給ひしに、保安元年十一月十二日にやありけむ、夜をこめて院よりとて「堀川のおとゞ俄に参り給へ」と御使ありて、おとゞ内覧とゞむべきよしを、仰せ下し給ひけり。白河の院うせさせ給ひて、鳥羽の院世をらせ給ひし時にぞ、富家より出でさせ給ひし。待賢門院をさなくおはしましゝを、白河の院養ひ奉り給ひて、鳥羽の院くらゐにおはしましゝ、女御にたてまつり給ふほどに、入道おほきおとゞの御むすめ、女御に奉らむとせさせ給ふと聞こゆるによりて、關白うちとめ申させ給ふとぞ聞こえ侍りし。白河の院の御世に、ささき御息所などかくれさせ給ひて、さるかたがたもおはせざりしに、白川殿ときこえ給ふ人おはしましき。その人待賢門院をば養ひ奉り給ひて、院も御むすめとてもてなしきこえさせ給ひしなり。その白川殿あさましき御すぐせおはしける人なるべし。宣旨などは下されざりけれども、世の人は祇園

の女御とぞ申すめりし。もとよりかの院の、うちの局わたりにおはしけるを、はつかに御覧じつけさせ給ひて三千の寵愛ひとりのみなりけり。たゞ人にはおはせざるべし。賀茂の女御と世にはいひて、うれしき、いはひをとて、姉弟後につゞきて、聞こえしが、それは彼のやしろのつかさ、重助がむすめどもにて、女房に参りたりしかば、御目近かりしを、これは、はつかに御覧じつけられて、それがやうにはなくて、これは殊の外に、おもきさまに聞こえ給ひき。かの御さたにて、その女院もならびなくおはしましき。代々の國母にておはしましければ、ことわりとは申しながらいかばかりかは築えさせ給ひし。をさなくては白河の院の御ふところに御足さしいれて、ひるも御殿ごもりたれば、殿など参らせ給ひたるにも「こゝにすゑなきとの侍りて、えみづから申さず」などいらへてぞおはしましける。おとなにならせ給ひても、類ひなく聞こえ侍りき。白河の院かくれさせ給ひてこそはいの如く、殿の姫君たてまつり給ひて、女御の宣旨かうぶり給ふ。皇后宮にたち給ひてのちは、院號聞こえさせ給ひて、高陽の院と申しき。院の後まゐり給へるが、女御の宣旨は、これや始めて侍りけむ。后の宮のはじめつ方も、宇治の御幸ありて、皇后宮ひきつゞきていらせ給ひし、うるはしき行啓のやうには侍らで、皆狩衣にふりうなどして、女房の車いろいろに、もみぢの匂ひいだして、雑仕などもみな車にのりてなむ侍りし。さゝざき白河の院の御時は、雑仕は皆馬にのりて、透笠たゞの笠などきて、いくらともなくこそつゞきて侍りしか。これ女車にて、これぞはじめて侍りし。后の宮には、冠にてこそ、常は人々侍ふを、これはほういになされてなむ侍り

し。此の富家のおとゞは、御みめもふとり、清らかに、御聲いとうつくしくて、年老いさせ給ふまで細く清らかに坐しましき。朗詠などえならずせさせ給ふ。又箏の琴はすべて並びなく坐しましき。歌はさまでも聞こえさせ給はざりしに、宇治に籠りゐさせ給へりしときぞ、

「さは川の流れたえせぬひさぎ身なれどもうき瀬にあひて沈みぬるかな」

とよませ給ひけるとかや。ふみのさたなどは、常にせさせ給ふとも聞こえざりしかども、天台止觀とかいふふみをぞ、皇覺とかいひて、杉生の法橋といひしに、本書ばかりは傳へさせ給ひてけり。日毎に參りて侍ひければ、まぎらはしき日も、よふけてなど思ひ出だされ給ひつゝ、年をわたりてぞ、よみはてさせ給ひける。眞言も好みさたせさせ給ひけると聞こえき。年よらせ給ひては、御足のかなはせ給はざりしかば、わらふだに乘りて、ひかれ給ひ、又御輿などにてぞ院にも參り給ひける。御ぐしおろさせ給ひて、奈良にても、山にても、御受戒せさせ給ひき。御名は圓理とぞ聞えさせ給ひし。いづれのたびも、院の御ともにぞ、御受戒せさせ給ひける。御子の左のおとゞのことおはせしゆかりに、奈良におはしましゝが、宇治殿へは入らせ給はで、おはしましゝを、法性寺殿に、御消息ありければ、とく京の方へいらせ給へと、御かへりごと申させ給ひければ、よろこび給ひて、年頃の御中もなほらせ給ひて、播磨とてときめかせ給ひし人の、都の北に、雲林院か、知足院かに侍るなる堂にぞおはして、うせさせ給ひにし。その播磨とか聞こえし人は、世にたぐひなき、さいはひ人になむおはすめる。白川殿に、唯同じさまなるはじめにやおはしけむ、後には女院の、はしたものなどいふとにな

り、つぎに女房になりなどしておはすとぞ聞こえられし。今にかしこき人にて、法性寺殿の、三井寺の僧都の君、養ひまして、昔に變らぬ有樣にてなむ聞こえ侍るなる。かの白川殿とて、祇園におはせしはゆかりまでさりがたく、院におぼしめされておはせしに、始めつかた、平氏の正盛といひしまゐり仕うまつりければ、隱岐守などいひけるも、後には然るべき國々のつかさなど、なりたりけれど、なほ下北面の人にてありけれど、その子よりぞ院の殿上人にて、四位五位のまひ人などしけれども、内の殿上はえせざりけるに、五節たてまつりける年、受領いまひとり、爲盛爲業などいひしが父なりし、殿上ゆるされたりしかば、忠盛、

「おもひきや雲居の月をよそに見て、心のやみに迷ふべしとは」

とぞきこえし。其の殿上ゆるされたりしは、院の御めのとご知綱といひしがうまごなれば、いとほしみあるべき上に、近くつかはせ給ふ女房の、心ばへなどおぼしめしゆるされたる者にてありしが、子などあまた生みたりければ、殿上せさせむとおぼしめしながら、辨近衛のすけなどにもあらで、忽に殿上せむも、いかゞとおぼしめして、宇佐の使につかはしけるを、鳥羽の院の新院と申しておはしまし、程に、長輔ときこえし兵衛の佐をつかはさむと、申させ給ひければ、かの御方に申させ給ふとさりがたくて、さらば爲忠は、今年の五節をたてまつれとてぞ殿上はゆるされける。除りふとれりしかばにや、口かわく病ひして、十年ばかりこもりゐながら、四位の正下までのぼりしも、三條烏丸殿作りたりしたびは、をとこゝそこもりたれども、女の宮仕へをすれば、加階はゆるしたぶと仰せらるとて、顯賴の中納言は、

大原うとくおぼゆとぞよろこびいふとて、戯ぶれられける。左京のかみ顯輔のいはれけるは「大夫の大工なるべし二條の大宮つくりても加階し、その御堂造りても、また院の御所つくりても加階す」といはれけると聞こえしにおはせて、木工の權頭をぞ、かけづかさに去たりし。貫之がつかさなればとて、なりたりけるとかや。その人まだ幼きほどなりけるに、白河の法皇の、六位の殿上去たりけるに、それがしと召しけるを、人の召し次ぎければ、「藤原の、異姓になるは、おしき事なり」とてもとの姓になるべきよし仰せられけるも、猶むかしの御いとほしみの、殘りけるとぞ聞こえし。爲章といひし人も、本はためのりといひけるを、白河の院のためのきらと召したりけるより、かはりたるとかや。おほぢの高大武は、なりのりといひしかども、此のころその末は、むねのきらなどいへるは、召しけるより改まりたるとかや。白河の院は、はかなきことも仰せらるゝとの、かくぞとゞまりける。又御心の敏くおはしまして、時の程に、おもほし定めけるは、信濃守惟明といひしが、式部の丞の藏人なりし時、女房の局の前にゐて、ものなど申しけるに、殿まゐらせ給ふとて、庭におりて居ければ、女房參りて「關白の參り候ふ」など申しければ「關白ならばさきこそ逐はめ。をこのものは、兄の知綱が參るをいふにこそあらめ」と仰せられけるに、「伯耆守の參られたりける」とぞ女房語られける。かの雲居の月よめりし忠盛は、なかなかに院かくれさせ給ひて後にぞいつしか殿上ゆるされたりし。その時、殿上の硯のはこに、かきつけられたりける歌ありけりと聞こえしは、みなみとなのる雲の上はなにさへのぼるなりけりとかや。忘れておぼえ侍らず。山城と伊勢

と、源と平とを、たいしたるやうにぞ聞こえし。同じ折に殿上したりける人のとなるべし。その平氏の子ども、二人ならびて藏人になりなどせしも、平氏のおほきおとゞは、白河院の御時は、非藏人などいひて、院の六位の殿上したりしかども、うるはしくはなさせ給はで、かうぶり給はりて、兵衛の佐になりたりしも、藏人は、なほかたきことと聞こえ侍りき。さて又かの宇佐の使に下られし兵衛の佐は在方と聞えし人の聟なりしが、心ざしやなかりけむ離れにしかば、いとくちをしくて、なほ御きそくにて、ふたゝびまで、とりよせたりしかども、え住み果てざりしかば、世に歌にさへうたひてありしを、院の御めのと子の、帥の子なれども、ふたゝびまで、床さりたるあやまりにや、國の司なりしをもとらせ給ひて、ふる里のせうとに、天の橋立もわたりにしは、かの宮内卿平氏の、むこになれりしいとはしみの、殘れるなるべし。そのふる里に、住みわたる人ときこえしも、世の中によめる歌など、きこえ侍りき。歌は忘れておぼえ侍らず。

今鏡第五

ふぢなみの中

みかさの松

近くおはしましゝ法性寺のおとゞは、富家の入道おとゞの御子におはします。御母六條の右

のおとゞの御むすめ、仁和寺の御室と申し、一つ御はらからにおはしましゝかば、其の北のまんどころ、昔は白河の院にも参り給ひけるにこそ。仁和寺の法親王をば、師子王の宮とぞ世には申し、。御母の童名にやおはしけむ。さて此のおとゞ仁和寺の宮と親しく申しかはしたまひき。富家のおとゞの北の方にては、堀川の左のおとゞの御むすめおはせしかども、それは御子おはしまさで、くちをしきことどもおりけるにやよりけむ。後には疎くなり給ひき。其の六條のおとゞの御むすめの、京極の北のまんどころにさぶらひ給ひけるを、始めは院にめして宮生み奉り給へりける程に、富家のおとゞ若くおはしける時に、はつかに覗きて見給へることおりけるより、御病ひになりて、惱みたまひけるを、命も絶えぬべくおぼゆることの侍れど、心に叶ふべきならねば「世に永らへ侍らむ事もえ侍るまじ。又心のまゝに侍らば、いかなる重き罪も、かうぶる身にもなり侍りぬべし。いづれにてか、よく侍らむ」など、京極の北の方に申し給ひけるにや、「いかにも御命おはしまさむ事に、まさることはあるまじければ」とて、院に申させ給ひたりければ、許したまはらせ給ひけるとかや。ひがごとにや侍らむ。人の傳へ語り侍りしなり。さて住みたまひけるほどに、まづは姫君うみ給ひ、又此のおとゞをも、生み奉り給ひてのち、さてうるはしく住み給ひけるとぞうけ給はりし。此のおとゞ保安二年のとし、關白にならせ給ふ。御とし廿五にぞおはしまし、。同四年正月に、讃岐の帝くらゐに即かせ給ひしかば、攝政と申しき。みかどおとなに成らせ給ひて、關白と申ししほどに、近衛のみかど位につかせ給ひしかば、又攝政にならせ給ひき。八壽二年七月、近衛

のみかど、かくれさせ給ひて、この一院位につかせ給ひしにも、又關白にならせ給ひしかば、四代のみかどの關白にて、ふたゝび攝政と申しき。昔もいと類ひなき事にこそ侍りけめ。おはさおとゝにも、ふたゝびなり給へりし。いとありがたく侍りき。藤氏の長者さまたげられ給ひしも、左のおとゞの、事にあひ給ひしかば、保元元年七月に、更にかへりならせ給ひにき。同三年八月十六日、二條のみかど位につかせたまひし時、いまのとのゝ御兄におはしましゝ、右のおほいまうちぎみに、關白ゆづり聞こえさせ給ひて、大殿とておはしましゝに、應保二年に御ぐしおろさせ給ひてき。御年六十六とぞうけ給はりし。長寛二年二月十九日、六十八と聞えさせ給ひし年かくれさせ給ひにき。昔まだ幼くおはしましゝ時、春日のまつりのつかひせさせたまひしに、ないし周防のごまねりて、行事のべんのためたかに申しおくりける、

「いかばかり神もうれしとみかさ山二葉の松の千代のけしきを」。

その返しは、劣りたりけるにや。きこえはべらざりき。祈り奉りたるしるしありて、めでたく久しくせさせ給ひき。法性寺の御堂の御所などつくりて、眞信公の御堂のかたはらに住ませたまひしかば、法性寺殿とぞ申すめる。昔より攝政關白つゞきておはしませど、身の御才は類ひなくおはしましき。才學もすぐれておはしましける上に、詩など作らせ給ふことは、いにしへの宮師殿などにも劣らせたまはずやおはしけむ。歌よませ給ふ事も、心たかく昔の跡をねがひ給ひたるさまなりけり。管絃のかた心に志めさせ給ひて、筝のことを、むねと御遊

などにも、ひかせ給ふとぞ聞き侍りし。父おとゞばかりは、おはしまさずやありけむ、手かゝせ給ふ事は、昔の上手にも恥ぢずおはしましけり。まなも假名も、このもしく今めかしき方さへそひて、すぐれておはしましき。内裏の額ども、古きをばうつし、失せたるをば、更にかゝせ給ふとぞ、うけたまはりし。院宮の御堂御所などの色紙形は、いかばかりかは多くかゝせ給ひし。御願よりはじめて、寺々の額など數知らずかゝせ給ひき。「横河の花臺院などは、古き所の額も、むかへ講ずゝめけるひじりの申したるとてかゝせ給へり」とぞ山の僧は申しゝ。又人の仁和寺とかより、額申したりければ、かゝせ給ひける程に、奥のえびす基衡とか云ふが寺なりと聞かせ給ひて、みちの奥へ、取り返しに遣はしたりけるを、返し奉らじと云けるを、女の心かしこくやありけむ、「かへし奉らざらむは、いかゞとなり」と諫めければ、返し奉りけるに、御厩舎人とか、つかはしたりける御使の、心やたけかりけむ、三つにうちわりてぞもてのぼりける。柱をにらみけむにも、劣らぬ使なるべし。えびすまでもなびき奉りけるにこそ。又いづれの御願とかの繪に、飯室の僧正たふとくおはすることかくとて、冷泉院の御太刀ぬかせ給へるに、僧正にげ給へるあとに、とゞまれる三衣筥のもとにて、みかどの物のはうたせ給ひたる所の色紙形、これはえかゝじとて、もじもかゝれでいまだ侍るなり。御手並びなくかゝせ給へども、さやうの御用意は、ありがたき事ぞかし。まだ幼くおはしましゝ時より、歌合など朝夕の御あそびにて、基俊俊頼などいふ、時の歌よみどもに、人の名かくして、判せさせなどせさせ給ふこと絶えざりけり。御うたなど多くきゝ侍りし中に、

「わたの原こぎいで〻見ればひさかたの雲ゐにまがふおきつ白浪」などよませ給へる御歌は、人丸が「島かくれゆく舟をしぞ思ふ」などよめるにも恥ぢずやおらむとぞ人は申し侍りし。

「よし野山みねのさくらや咲きぬらむふもとの里に匂ふはるかぜ」などよませ給へるも、心も詞もたへにして、金玉集などに、選びのせられたる歌のつらになむ聞こえ侍るなる。からのふみ作らせ給ふこともかくぞおはしける。さればふみの心ばへなどもせ給ふこと深くなむおはしける。白河の院にも三卷の詩えらびて奉り給ひ、基俊の君にも、からやまとのをかしきことの葉どもをぞえらびつかはさせ給ひける。かやうの事ども多くなむ侍るなる。又つくらせ給へるからの詞ども、御集とて、唐の白氏の文集などの如くに、事好む人、もてあそぶとぞうけ給はる。かくざえもおはしまして、日記なども鏡をかけておはしませば、右大辨爲隆といひし宰相は「日本はゆ〻しくてつゞなる國かな。さきの關白を一の人にて、このおとゞ、花園のおとゞふたり、若き大臣よくつかへぬべきを、うちはへつ〻公事もつとめさせで、この殿一の人なれば、いたづらに足ひき入れてゐたまへるこそ惜しけれ」とぞいはれけるとなむ、きこえ侍りし。

菊のつゆ

法門のかたは、底を極めさせ給ひて、山、三井寺、東大寺、山科寺など智恵ある僧綱、大とこどもも、内裏に御讀經など勤むる折に、御籠のうちにて、深き心たづね問はせ給ひ、わが殿にて、

八講など行はせ給ふ折ふしのことにつけて、經論の深きこと、ひろき心、汲み盡くさせ給はぬことなくなむおはしましける。御佛供養せさせたまひける御導師に、菊の枝にさして給はせける、

「たぐひなき御法を菊の花なればつもれる罪は露も殘らじ」

などぞきこえ侍りし。御心ばへもすきずきしくのみおはしましながら、わづらはしくとりがたき御心にて、ひがひがしきことはおはしまさで、何事もおどろかぬやうにぞおはしましける。されば世にも似させ給はで、いづ方にも、疎きやうに、聞こえさせ給ひて、公達など心もとなく、聞こえさせ給ひしかども、世の中みだれ出できて後、元のやうに、氏の長者にも、かへりならせ給ひき。男公達も、位高くならせ給ひて、法師におはしますも、俗正ともならせ給ひ、ところどころの長吏もせさせ給へり。女御きさき、かたがたおはして、よろづあるべきこと、皆おはしましき。昔、時にあはせ給ひたる、一の人に劣らせ給ふ事なかりき。馬を失ひて、なげかざりけむ翁などのやうにておはしましけにや、苦しき世をすぐさせたまひてのちは、かく榮えさせ給へり。作らせ給ひたる御詩とて、人の申しゝは、

「官祿身ニアマリテ世ヲテラストイヘドモ、素閑性ニウケテ權ヲアラソハズ」

とかや作らせ給へるも、その心なるべし。さやうの御心にや、又近衞のみかどの悲しびのあまりにや、關白にこのたびならせ給ひし始めに、彼のみかど、船岡にをさめたてまつりし御供せさせ給へり。かちよりおはしますさまにて、御輿の綱を長くなされたりしにや、日記に

云なしてかゝれてぞすゑざまはおはしましける。ひとあはれに、悲しくなむ侍りける。二條の院くらゐに即かせ給ひし時、關白をば御子に譲りまさせ給ひて、大殿とておはしましゝほどに、御ぐしおろさせ給ひて、御名は圓觀とぞつかせ給ひける。このおとゞ失せさせ給ふほど近くなりて、法性寺殿かつら殿など、御覽じめぐらせ給ひて、ところどころの有樣を、さまざまの文ども作らせ給ひて、盛光惟としなどいふ學生どもに給ひて、和してたてまつり、判せさせなどせさせ給へり。後の世に、佛道ならせ給へるにや、こゝの品のはちすの上に、おはしますなど、夢にも人の見たてまつりたるとかや。式部の大輔永範、夢に見たてまつりたるとて、詩三首作りて給はせける中に、

「漢月天ニウルハシクシテコトゴトクナリトイヘドモ、忘ルゝコトナカレ　昔ノ尼文ヲモテアソブコトヲ」

と作らせ給へりけるとて、和して奉らむと云ける程に、おどろきにけり。夢のうちには都率の內院におはしますとおぼしかりきとぞ、和してたてまつれる文にはかゝれ侍るなる。

藤の初花

攝政前の右大臣とて、近くおはしましゝは、法性寺のおとゞの太郎にぞおはしましゝ。御母從二位源の信子と申しき。國信と申しゝ、中納言のむすめにぞおはしますなる。このおとゞの御名は、基實とぞ申すとうけ給はりし。いづれの御時の例とか、左衞門の督など聞こえさせ給ひしに、其の後大納言右大臣などにならせ給へりき。折ふしあきあはざりけるにや、大

將にはならせ給はざりしかとよ。二條のみかど、位につかせ給ひしに、父おとゞの讓りにて、保元三年八月十六日、關白になり給ふ。御とし十六とぞきこえ侍りし。昔よりかくきびはにてなり給へる一の人、これや始めにておはしますらむ。から國に甘羅といひける人は、十二にてぞ大臣になり給ひける。世の人をさなしとも申さゞりけり。人がらによるべきことにこそ侍るめれ。永暦元年八月十一日右大臣にのぼり給ふ。永萬元年六月みかどの御位みこに讓り奉らせ給ひし日、攝政にならせ給ふ。同二年七月廿六日御とし二十四にて、かくれさせ給ひにき。大臣のくらゐにて十年おはしましき。このおとゞ御みめもこえきよらにおはしましき。又手なども、昔の跡つぎまさせ給へりけり。いとめでたく聞きたてまつりしほどに、夢のやうにてかくれさせ給ひにし、いと悲しくこそ。去年は二條のみかど、ことしはこの殿の御事、折ふし心あらむ人は、おもひ知りぬべき世なるべし。贈太政大臣正一位など、後に添へ奉られはべりとぞ聞こえ給ふ。きのふ今日のちごに、おはしますを、昔語りにうけ給はるやうに覺えて、いとあはれにかなしく侍り。六條の攝政と申すなるべし。又中の攝政殿と申す人も侍り。太郎におはせしかども、中の關白と申し、樣なるべし。この次の一の人は、今の攝政のおとゞにおはします。御母はこれも國信の中納言の三の君にぞおはする。御名は國子と聞こえ給ふ。三位ぞ給へるとぞ、一の人藤氏の御はら、多くは源氏におはします。然るべきことにぞ侍る。宇治殿二條殿の御母は、一條の左大臣の御むすめ、後の二條の關白殿は、土御門の右のおとゞの御むすめ、法性寺殿は六條の右大臣、此の殿ふたところは、源中納言の姫君ふ

たところにおはしませば、藤氏は一の人にて、源氏は御母方やんごとなし。御流れかたがたあらまほしくも侍るかな。今の世の事、新しく申さでも侍るべけれど、ことのつゞきなれば、申し侍るになむ。このおとゞ永暦元年八月十一日、内大臣にならせ給ひて、同月左大将かけさせ給ひき。同二年九月十三日、左大臣にのぼらせ給ひて、永萬二年七月二十七日、攝政にならせ給ふ。御とし廿二におはしましき。やがて藤氏の長者にならせ給ひき。仁安三年二月、當今位に即かせ給ひしに、又攝政にならせ給ふ。いとやんごとなくおはしましける御さかえなり。御兄の攝政殿も、宇治の左のおとゞも、其の御子の大將殿も、長者つぎ給ひて久しく坐しまさば、一の人の御子なりとも、大臣にこそならせ給ふとも、かならずしも、家のおとつがせ給ふ事かたきを、この御報にや、押されさせ給ひけむ。皆夢になりて、かく忽に攝政にならせ給ひ、藤氏の長者におはします。三笠の山の朝日は、かねて照らさせ給ひけむ、御身のざえをさなくよりすぐれておはします。とて内宴の詩なども、兄をさしおき奉りてその席にさしいらせたまひき。御心ばへあるべかしく、まだ若くおはしますに、公事をもよく行はせたまふ。おとなしくおはしますなり。閑院はどなく作りいださせ給ひて、上達部殿上人など、詩つくり、歌たてまつりなどして、昔の一の人の御有樣には、いつしかおはします。心ある人、いかばかりかは、ほめたてまつるらむ。みかどに貸し奉らせ給ひて、内裏になりなどし侍らむも、世の爲も、いとはえばえしきことにこそ侍るなれ。ゆく末思ひやられさせ給ひて、然るべきことゝ、世の爲も、たのもしくこそうけたまはれ。此の二人の攝政殿たち、皆御子おはします

なれば、藤なみのあと絶えず、佐保川の流れ、久しかるべき御有様なるべし。

濱千鳥

此の近くおはしまし〳〵入道おほきおとゞ、御心の色めきておはしまし〳〵かば、ときめき給ふかたがた多くて、北の方は、きびしくものし給ひしかども、はらばらに公達おほくおはしまし。奈良の僧正、三井寺の大僧正、このふたりは、をとこにおはしまさば、今は老い給へる上達部におはすべきを、北の方の御はらに、をのこ君たちもおはしまさで、女院ばかりもちたてまつり給ひつるにつけても、大方も姝ましき御心の深くおはしましけるにや。御房たちの、幼くおはしまし〳〵より、おとなまで、近くもよせ申させたまはず。いなごなどいふ虫の心を、すこし持たせ給はゞよく侍らまし。后などは、かの虫のやうに、妬む心なければ、御子もうまでも多くいでき給ふとこそ申すなれ。關白攝政の北の方も、同じ事にこそおはすべかめれ。されど年よりてはおもはしなほしたりけるにや、君だち外ばらなれど殿の内にも多くおはしましき。源中納言の姫君たちふたりに、ひとりのは故攝政殿今ひとりのには當時の殿、又山に法印御房とておはしましき。又奈良に僧都とておはしますなり。又女房の御はらに、右のおほい殿、三井寺のあや僧都のきみ、又三位中將殿など申しておはしますなり。又山の法印などきこえたまふ。又末つかたに時めかせ給ひしはらにおはする、山の法眼など申してきこえ給ふ。女きんだちは、女院、中宮などおはします。讃岐のみかどの御時の中宮聖子と申すは、北の政所ひとり生み奉らせたまへるぞかし。その御母は、宗通の大納言の御むすめ、

顯季の修理のかみの御むすめの腹なるを、法性寺殿に奉り給へりき。かの女院、讃岐の帝位におはしまし、父のおとゞも時の關白におはしましゝかば、宮の御方御あそび常にせさせ給ふ。をりをりにつけつゝ、昔おぼし出づることも、いかにおほく侍らむ。卯月のころ、みかど宮の御方に小弓の御あそびに、殿上人かたわかちて、賭物など出だされ侍りけるに、扇紙を冊子のかたに作りて、歌かきつけられたりけり。その歌は、

「これを見て思ひも出でよ濱千鳥あとなき跡をたづねけりとは」

と侍りける返し、公行の宰相、右中辨とておはせしぞ云々。

「はま千鳥跡なき跡を思ひ出でゝ尋ねけりともけふこそは知れ」

とぞうけ給はりし。歌は殿のよませ給へるにや侍りけむ。拾遺抄にはべる、小野宮のおとゞの故事、思ひいでられて、いとやさしくこそきこえ侍りしか。

使ありはせ

彼のみかど位おりさせ給ひしかば、皇太后宮に登らせ給へりき。近衛のみかどの御時も、母后にて、内に猶おはしましき。中宮と申しゝ時、近衛のみかどの東宮におはしましゝに、ふた宮の女房たち、常にきこえかはして、をかしき事ども侍りけるに、文の使ひ、いかなるものに侍りけるにか、わろしとて、始めは藏人を、東宮よりやられたりければ、返事又少將爲通して送りたりけり。其の返りごと、東宮より公通の少將もちておはしたりけり。かやうにする程に、左のおとゞ、中宮の女房の文もちて、わたり給ひたるに東宮の女房なげきになりて、宮司

など、いかゞせむずると、さまざま、もの歎きにしあへるに、傅の殿のおはしましたるは、「この宮人におはしませば、ことつけにてこそあれ」などいへども、からく云まけてわぶる程に、關白殿「われ使せむ」とてふみかゝせて、中宮の御方にわたらせ給へるに、女房皆かくれて心得てさしいでねば、とかくして、うちかけて歸らせ給ひぬ。中宮には「又これにまさる使は、院こそおはしまさめ」とて、「かゝる事こそさぶらへ」とて、内の御使にやありけむ。頭の中將とて、敎長のきみ、鳥羽の院の六條におはしましゝに、申されければ「いかにも侍るべきに、女房の取り次ぎてせため侍れば、えなむ云侍るまじき」と申させ給ひなどしてありとき、侍りし、後にはいかゞなり侍りけむ。この女院始めつ方は、うへ常におはしまして、よる晝あそびせさせたまひけるに、末つ方には、兵衛のすけなどいふ人いできて、珍らしき折も、多くおはしましけるに、上ふと渡らせ給ひけるに、云ばし短き御屏風のうへより、御覽じければ、きさき十五重なりたる、白き御ぞたてまつりたる御そで口の、白浪たちたるやうに、匂ひたりけるを、「浪の寄りたるを見るやうなる御そでかな」と仰せられければ、「うらみぬ袖にもや」といらへ申させ給ひけると聞こえ侍りし。「うらみぬ袖も浪は立ちけり」といふ、ふるきことなにゝ侍るとかや。折ふしいとやさしく侍りけることなどこそ、傅へうけ給はりしか。ひがごとにや侍りけむ。人の傳へ侍ることは知りがたくぞ。新院遠くおはしましてのち、この女院は御ぐしおろさせ給ひてけりとなむ聞こえさせたまふ。をなじ事と申しながらも、いとあはれに悲し。近衛の帝の御時の中宮、呈子と申しゝも、太政大臣伊通のおとゞの御むすめ

を、この法性寺殿の御子とてぞたてまつり給へる。此の頃九條の院と申すなるべし。誠の御子ならねど、院號も關白の御子とてはべるとかや。この法性寺殿は、二條のみかどの御時も、女御たてまつらせ給ひて、中宮にたちたまひき。みかどかくれさせ給ひても、いまの新院くらゐの御時國母とて、猶うちにおはしましき。みかど位さらせ給ひしかば、里におはしませども、猶中宮と申すなるべし。御ぐしおろさせ給へるとかや。まだ御年廿三四などにやおはしますらむ。此の頃ばかり、上臈の入道の宮、院たち、多くおはしますをりはありがたくや侍らむ。女院いつところおはします。おほみや中宮、二所のささきの宮、齋宮さい院などかたがたきこえさせ給ふ。且はよのはかなきによらせ給ふ。佛の道のひろまり給へるなるべし。

かざり太刀

富家の入道おとゞの御子は法性寺のおほきおとゞ、次には、宇治の左のおとゞ頼長ときこえ給へりし。女君は高陽の院と申す。泰子皇后宮と聞こえたまひき。法性寺殿の一つ御はらの姉にておはしましき。長承三年三月のころ、后に立ち給ふ。御年四十と聞こえき。保延五年院號得させ給ひき。左のおとゞ、御はゝは土佐守盛實といひしが女にやおはしけむ。其の左のおとゞは、御みめもよくおはし、御身の才も廣き人になむ聞こえ給ひし。堀川の大納言に、前書とか聞こゆる書受け傳へさせ給へりけり。そのふみは、匡房の中納言より傳はりて謂み傳へたる人、かたく侍るなるを、この殿ぞ傳へさせ給へりける。今は師の傳へも絶えたるにこそ侍るなれ。かやうにして、さまざまのふみども讀ませたまひ、餘の讀むふみも、因明などい

ふふみ、奈良の僧どもに、尋ねさせ給ふとかや聞こえき。笙の笛をぞ、御遊びには吹かせ給ふときこえ給ひし。御手かゝせ給ふ事をぞ、わざと書きやつさせ給ひけるにや、兄の殿に、いかにも劣らむずれば、などおぼしたりけるを、法性寺殿は、「われは詩も作るやうに、覺ゆるものを、さては詩をぞ作らるまじき」などぞ仰せられけるとかや聞こえ侍りし。法成寺修理せさせ給ふ。塔の燒けたる作らせ給ひて、すがやかに、いとめでたく侍りき。日記など博くたづねさせ給ひ行はせ給ふことも、古き事をおこし、上達部の着座とか玄給はぬをも、皆催しつけなどして、おほやけわたくしにつけて、何事もいみじく、嚴しき人にぞおはせし。道にわふ人、きびしく耻ぢがましきこと多く聞こえき。公事おこなひ給ふに付けて、遲く參る人、さはり申す人などをば、家燒き毀ちなどせられけり。奈良に濟圓僧都と聞こえし名僧の公請に障り申しければ、京の宿房毀ちけるに、山に忠胤僧都と聞こえしと、たはぶれがたきにて、みめ論じて、もろともに、「われこそ鬼」などいひつゝ、歌よみかはしけるに、忠胤これをきゝて、濟圓がりいひつかはしける、

「誠にや君がつかやを毀つなる世にはまされるこゝめ有りけり」。

返し

「やぶられてたち玄のぶべき方ぞなき君をぞ頼むかくれ簑かせ」

とぞきこえ侍りける。又女怨せさせ給ふこともあらあらしくぞ聞こえはべりける。いはひをなどいふ、深き色ごのみとかや思はせ給ひけるに、よる俄におはしたりければ隱れて、思ひ

かけぬものゝうしろなどに有りけるを、もりのり、つねのりなどいふ人どもして、求めなどして、かくれのおやしの方まで見けれど、え求め得でかへり給ひて、又ひるあらぬさまにて、かくわたらせ給へると侍りければ、このたびはいでおひ奉り、たいめしけるにも、昔今の物語などして、ことうるはしく、かへり出でさせ給ひにけり。ふたゝびながら、世つかざりしなとぞいひけると、人はかたり侍りし、この御童名はあやぎみと申しけるに、富家殿法性寺殿、親子の御中、後にこそたがはせ給へりしか。はじめは左のおとゞ、御子にせさせ奉り給ひけるころ、餝り太刀もたせたてまつらせ給ひけるに、

「代々をへて傳へてもたるかざり太刀のいしつきもせずあやおぼしめせ」

とよませ給へりける程に、末には御心どもたがひて、この弟の左のおとゞを、院と共にひき給ひて、藤氏の長者をもとりて、これになしたてまつり給ふ。賀茂まうでなどは、一の人こそ多くし給ふを、兄の殿をおきて、この左のおほいどのゝ、賀茂まうでとて、世の營みなるに、東三條などをも取り返して、かぎなどのなかりけるにや御倉の戸わりなどぞし給ふと聞え侍りし。ふたり並びて、内覽の宣旨などかうぶり給ひ、隨身給はりなど云給ひき。かゝる程に、鳥羽の院うせさせ給ひて、讃岐い院と左のおとゞと御心合せて、この院のくらゐにおはしましゝ時、白河の大炊の御門殿にて、いくさし給ひしに、みかどの御守りつよくて、左のおとゞも、馬に乘りて出で給ひける程に、誰れが射奉りたりけるにか、矢にあたり給ひたりけるが、奈良に逃げておはして、程なくうせ給ひにき。その公だち、右大將兼長と聞こえたまひ

し、御母は、師俊の中納言の御むすめなり。その大將殿は、御みめこそいと清らに餘りぞふとり給ひてやおはしましけむ。御心ばへもいとうつくしくおはしけり。つぎに中納言中將師長と申し、は、みちのくの守信雅ときこえし、御うまごにやおはすらむ。その御弟は中將隆長と申しける。それも入道中納言の御はらなるべし。皆流され給ひて、うらうらにおはせしに、中納言中將殿は、歸りのぼり給ひて、大納言になり、大將などにおはすめり。身の御ざえなども幼くよりよき人にておはしますと、聞こえ給ひき。琵琶はすべて上手にておはしますとぞ聞こえ給ふ。都わかれて、土佐の國へおはしけるに、これもりとかやいふ陪從、御送りに參りける道にて、箏のことのえならぬ、調べ傳へ給ふとて、そのふみの奥に、歌よみ給へりけるこそおほかれに悲しくうけ給はりしか。

「をしへ置くかたみを深くゑのばなむ身は青海の波にながれぬ」

とかやぞきゝ侍りし。青海はかの調べの心なるべし。いと悲しく、やさしく侍りけることかな。もろこしに、むかし稽叔夜といひける人の、琴のすぐれたる調べを、この世ならぬ人に傳へ習ひて、ひとり知れりけるを、袁孝尼とかやいひけることひきの、あながちに習はむといひけれども、ないがしろに思ひて、ゆるさゞりける程に、罪をかうぶりける時、この調べの長く絶えぬることをこそ悲しみいたみけれ。此のことの調べを傳へ給ひけむことこそ、かしこく頼もしくも、うけ給はりしか。琵琶こそすぐれ給へりと聞こえ給へりしか。箏のことをも、かく極めさせ給ひて、御おほぢの跡をつがせ給ふ、いとやさしくこそうけ給はり侍れ。かく

て年へて後、歸りのぼり給へるに、二條のみかど、琵琶を好ませ給ひて召しければ、參らせ給ひて、賀王恩といふ樂をぞひき給ひけると傳へうけたまはる。さてもとのかずの外の大納言に加はり給ひて、うちつゞき大將かけ給へるなるべし。其の外の公だちは、皆うゝらうらにてかくれ給ひにけり。いと悲しく、いかにおはれに、主も人もおぼしけむ。この奈良におはせし禪師の君も、還りのぼり給ひて後、うせ給ひにけり。唯ごとゝも覺え給はぬ御有樣なり。この左のおとゞは、近衞の帝の御時、女御たてまつり給へりき。大炊の御門の右大臣、公能のおとゞの三の君を、御子にし給ひて、たてまつり給ひて、皇后宮多子とぞ申しゝ。その左のおとゞの北の方は、大炊の御門のおとゞの御妹なれば、そのゆかりに、御子にし給へるなるべし。此のころは、大宮とぞきこえさせ給ひける。

苔のころも

後の二條殿の御子には、富家の入道おはきおとゞ、その御弟にて、宰相中將家政、少納言家隆とておはしき。但馬守良綱といひしが女のはらにおはす。その宰相の御心ばへの、きはだかにおはしけるにや、三條のわく宰相とぞ人は申し侍りし。その御子には、顯隆の中納言のむすめのはらにおはせし、雅敎の中納言と申しゝ、身の御ざえ廣くおはしける。つかさをも返したてまつり給ひて、かしらおろして、高野におはすと聞き侍りし。その御子にて、少將ふたりおはする。前の美作守顯能と聞こえしが女のはらにやおはすらむ。弟の少將公房ときこえ給ふ。二條のみかどかくれさせ給ひて、世をはかなくおもほしとりて、高野山にのぼりて、

かしらおろして住み給ふなれば、御親の中納言も、それに引かれて、深き山にも、住みたまへるなるべし。昔こそ若き近衛のすけなど、世をのがれて山に住み給ふとは、古き物語にも聞こえ侍れ。まさにこれこそあはれに悲しく、花山僧正の、深草の御時、藏人頭にておはしけるが、夜晝仕うまつりて、諒闇になりにければ、悲しびに堪へず、御ぐしおろし給ひて、苔の衣かわきがたく、入道中納言、後一條の院の御忌にみかどを懇ひ奉りて、世を背きて、深き山に住み給ひけむにも、おくれぬあはれさにこそ聞え給ふめれ。昔はいかばかりかは、かやうの人聞え給ひし。九條殿の御子、高光少將、始めは横河にすみ給ひて「たゞかばかりぞ枝にのこれる」などいふ御歌きこえ侍りき。後には多武の峯におはしき。又少將時叙と聞こえ給ひし源氏の、一條のおとゞの御子、大原の御室などきこえて、やんごとなき眞言師おはしき。又村上の兵部卿致平のみこの、成信の中將、又堀河關白のうまごにやおはしけむ、重家の少將とて、左大臣のひとり子におはせし、もろともに佛道に一つ御心に、契り申し給ひて、三井寺の慶祚あざりの堂におはして、「世をそむきなむ」とのたまひければ、「名高くおはする君たちにおはするに、びんなく侍りなむ」といなび申しけれど、かねて御ぐしをきりておはしければ、慶祚阿闍梨、ゆるし聞こえてけり。照る中將、光る少將など申しけるとかや。中將は廿三、今ひとりは廿五におはしけるとかや。行成大納言の御夢に、重家の消息とて、世をそむきなむといふこと、のたまへりけるを、御堂のおとゞの御許におはしあひて、「かゝる夢こそ見侍りつれ」と語り聞え給ひければ、少將うち笑ひて、「まさしき御夢に侍り。去か思ふ」などのた

まはせける。次の夜、寺の大阿闍梨房へおはしたるとなむ。年ごろの御心ざしの上に、時の一の人の、わづらひたまふだに、人もたゆむこと多く、世のたのみなきやうに、覚えたまふことの、心ぼそくおぼえ給へて、さばかりの惜しかるべきさんだちの、その御年のほどに、おもはしとり、行ひすまし給へりし。おはれなどいふも、こともよろしかりしことぞかし。此のことを、又人の申し侍りしは、斉信公任俊賢行成ときこえ給ひし大納言たち、陣の座にて、世の定めなどしたまひけるを、立ち聞き給ひて、位高くのぼらむと思ふは、身の恥を知らぬにこそありけれ。かやうに、後の世をぞ思ひとるべかりけるなどおもひて、出でたまひける夜、重家の少将、御親の大臣殿に、いとま申し給ひけるを、大方といめりるべきけしきも、なかりければ、えといめ給はざりけるとも聞え侍りき。行成大納言の御日記には、さきに申しつるやうにぞ侍るなる。これはこと人の語りはべりしなり。四條大納言公任の御歌など侍りしかとよ。御集などには見え侍らむ。又飯室の入道中納言の御子、成房の中将の君も、おやの中納言の同じふかき谷に入り居つゝ、室ならべて行ひ給ひしぞかし。義懐の中納言、惟成の弁、このふたりは、花山の院の折、かしらおろし給へりき。四條の大納言の御歌、弁のだいとこのもとに、

「さゞ浪や志がの浦風いかばかり心の内のすゞしかるらむ」

と聞こえ侍りし。昔こそさかりなる人の、かやうなるは聞こえ給ひしか。近き世にはかゝる人も聞こえたまはぬを、この公房の少将こそ、おはれに悲しく聞こえたまへ。

大殿のをのこ公だちは、後の二條殿の次に、花山の院の左のおとゞ家忠とて、大臣の大将にて、久しく一の上にておはしき。其の御母は、美濃守頼國と聞こえし源氏のむすめの腹におはす。此のおとゞ、關白にもなり給ふべき人におはすれど、御兄の二條殿の御子、富家の入道おとゞの、大殿のうまごにおはする上に、御子に去たてまつり給ひて、關白つぎ給へれば、大殿のおはしまし〳〵代より、「ふけ殿をたのみに去てあれ」と仰せられ掟てさせ給ひければ、何事も申し合せつ〳〵過ぎ給へりけるに、富家殿關白になり給ひて、大将のき給へりけるを、白河の院の御おぼえにて、「宗通大納言なるべし」と聞こえければ、このおとゞ、富家殿に、「いかゞし侍るべき」と申しあはせ給ひければ、「いかにも力及ばぬ事にこそあめれ。さるにても、もし少しのつまともやなると中宮に心ざしを見え申し給へ。この家にいとなきことなれど」など侍りければ「誠に去か侍る事」とて申しいれ給へりければ、「思ひがけぬ御心ざし」など聞え給ひけるほどに、白河の院、宗忠のおとゞ頭の辨におはしける時、「きとまねれ」と侍りければ、おそくやおぼしめすらむと、恐れおぼしけれど、いと心よき御けしきにて、堀河の みかど、位おはしまし〳〵時、「内へ参りて申せ」とて、「大将おきて侍るに宗通をなし侍らむと思ひ給ふなり。幼くよりおぼしたて侍りて、さりがたく思ふ餘りになむなど奏せよ」と侍りければ、わづらはしきことにかゝりぬと思ひながら、参り給へりけるに、内は御笛吹かせ給ひて、聞こしめしも入れざりけるを、ひま伺ひて、かく奏し給ひければ、御返事もなくて、な

は笛吹かせたまひて、いらせ給ひにけるを、いそぎて御返事申せと侍りつる物をと思ひて、おどろかし申されければ、出でさせ給ひて、「いかさまにも、御計らひにこそ侍らめ。かく仰せつかはすべしとも思うたまへ侍らず。かゝる仰せ侍れば、恐れながら申し侍るになむ。昔うけたまはり侍りし仰せに、世のまつりごとは、司召にあるべきなり。然あれば大臣大将などより始めて、靱負のまつりごとまで、人の耳おどろくばかりのつかさをば、よくためらひて、世の人いはむ所いことを聞くべきなりとうけたまはり侍りしより、いとかしこき仰せなりと、心の底に思ひ給へてなむ、まかりすぎ侍る。この大将のことは、然るべきにとりて、家忠こそ、關白の子にて侍る上に、位も上臈に侍るを、こえ侍らむや、いかゞと思うたまふるに、下臈なりとも、身のざえなどすぐれ侍らば其のかたともおぼえ侍るべきに、それもまさりたることも侍らず。いかにも御計らひに侍るべしと申せ」との給はせければ、歸り參られ侍りけるに、いそぎ問はせ給ひけるに、かくと申しければ、院きかせ給ひて「暫し侍へ」とて重ねて召して「えもいはずのたまはするものかな。誠にことわりなり」とて家忠仰せ下すべきよし侍りてぞこのおとゞ大将にはなり給ひける。此のおとゞの御子は中納言忠宗と申しき。その中納言は、播磨守定綱と聞こえしむすめのはらにおはしき。中納言いとよき人にぞおはせし。雅兼の中納言となら び給ひて、五位の藏人十年ばかり、藏人の頭にても十年などやおはしけむ。二十年の職事にて、ふたりながら、同じやうに仕へ給ひしに、昔にもはぢず、末の世にはありがたき職事とて、惜まれ給ふほどに、なかなかおそく昇りたまふとぞいたみたまひ

ける。宰相中納言まで、同じやうにならびてのぼり給ひき。忠宗の中納言は、中宮權大夫と聞こえ給ひき。その中納言の御子は、修理のかみ家保と聞こえしはらにおはする公だち、花山の院のおほきおとゞ忠雅、又中納言忠親など申して、おやの御子なれば、よきかんだちめたちにぞおはするときこえたまふ。忠親の中納言、これも親たちのおはせしやうに、雅兼の子の、雅頼の中納言と、藏人の頭にならびて、宰相中納言にも、同じやうにうちつゞきのぼり給ふなるも、いとかひがひしく忠雅のおとゞは、三位中將大臣大將など歷たまひて、おほきおとゞまで至り給へり。その御子におはするなる、兼雅の中納言は、家成の中納言の、むすめのけ忠兼といふ人もおはしけり。弟の中納言の、上達部になり給ひてのち、親のおほいとの大將をたてまつりて、少將にはじめてなし申したまひけるとかや。その少將の子に、光家とかいふ聞こえ給ひけるを、大臣殿の御子に去給ひて、殿上せたまへけり。侍從におはしけるをば、かのこ侍從とぞ人は申しける。親はかくれて、子のあらはれたるとかなるべし。そのおやの少將は子より後に、殿上もし給ひけるとかや。おほいどの丶三郎にては、按察の大納言經實と申しておはしき。二位の大納言とぞ申し丶。二位の宰相など申しつけたりけるとぞ。その御母は美濃守基貞のむすめなり。その大納言の御むすめ、公實の春宮大夫のおほいぎみのはらにおはせしを、院の宮とておはしまし丶に、參り給ひて、二條のみかどを生み奉りてかくれ給ひにき。后を贈られ給ひき。ち丶の大納言殿は、おほきおとゞおくられ給へるとぞ。その贈

后のひとつ御はらにおはすなり。此の頃は、經宗の左のおとゞときこえ給ふ。二條院の御をぢにておはせし上に、人からもはかばかしくおはするにや。よき上達部とぞきこえたまふめる。おやの大納言殿も、兄の中納言殿も、物などかき給ふことおはせずと聞こえしに、是れは、ふみにもたづさはり給へるとぞ聞こえ給ふ。御子に中將のきみおはするなる。清隆の中納言のむすめのはらにやおはすらむ。この大臣殿の御兄ども、多くおはするなるべし。經定の中納言は、治部卿通俊のむすめの腹におはしけるとぞ聞こえし。その次に、光忠の中納言と聞こえ給ふも、左のおとゞの御兄におはするあるべし。二條のおほぎさいの宮の女房の御子におはせしを、彼の宮の養はせ給ひて、はるか君と聞こえし、此の頃は前の中納言民部卿になり給ふとかや。按察の大納言の御子は、多くおはしけるとぞ聞こえし。大侍從などいひてもおはしき。仁和寺に靜經僧都と聞こえたまひしは、よき眞言師にて、去るしある人とぞ聞こえ給ひし。おほとのゝ四郎にやわたり給ひけむ。按察のひとつはらに能實の大納言と申しゝ、小野の宮とぞきこえ給ひし。兄の殿よりも、文字などかきたまひしにや。檢非違使の別當などし給ひき。大殿の五郎にやおはしけむ。忠敎の大納言、四條の民部卿とぞきこえ給ひし。その御母遠江守永信が子に、藏人おりて、つかさもなかりしにや、永業と聞こえし人のむすめのはらにおはす。その民部卿の御子どもあまたおはしき。忠基の中納言と申しゝ、筑紫の帥になり給へりしかとよ。神樂の笛をぞよく吹きたまひけるとうけたまはりし。その御子に、六角の宰相家通と申すなるは、重通のあぜちの大納言の養ひ申し給ひけるとぞ聞こえ給

ふ。

みづぐき

四條の民部卿の御子は、又俊明の大納言のむすめのはらに宰相中將敎長ときこえ給ひし、後には左京のかみになりて、讃岐の院のことゞもおはしましゝに、かしらおろし給ひて、常陸の浮島とかやに、流され給へりし、歸りのぼり給ひて、高野にすみ給ふときこえ給ふ。和歌の道にすぐれておはするなるべし。手かきにもおはすとぞ。ところどころの額などもかき給ふなり。御堂の色紙がたなどもかき給ふとぞ聞こゆる。佐理の兵部卿、ゑんのやうをぞ好みて、かゝ給ふと聞ゆる、かつは法性寺のおとゞの御すぢなるべし。花園のおとゞのも、さやうのすぢにかゝせ給ふとぞ聞えさせ給ひし。宇治の左のおとゞの「朝隆、敎長、いづれかまさりたる」とときたゞと聞こえし人に問ひ給はせければ、定め聞えむもよしなくて、「とりどりによや、申しさられにけりとも聞え侍り。」はだへと、骨とに喩へたる」とかや、その入道は人にたられける。朝隆の中納言は、行成の大納言の消息、ゆゝしくうつしにせられたるとぞ聞こえ侍るめる。その消息もたぬ人なし。世に多く侍るなり。敎長の御手も、さまざま京なか傳はり侍るなり。宮内大輔も、ひとりの進むるふみ、何かとすぐさずかきひろめ侍りけり。いかに本多く侍らむ。道風のぬしの、いますかりける世にこそ、ひとくだりもたぬ人は、耻に思ひ侍りけれ。宮内の大輔は、大納言のすゑなれば、よく似らるべきにて侍れど、一つの樣を傳へ

られたるにや、常に見ゆるやうにはかはりてぞ侍りける。おほぢの、すざかの治部卿の御手にぞよく似て侍るなる。その定信の君は、一切經を一筆にかき給へる、たゞ人ともおぼえ給はず。世になきことにこそ侍るめれ。五部の大乘經などだに、ありがたく侍るに、いと尊き契りむすび給へる人なるべし。敎長の御わらは名は、文珠君と聞こえき。殿上人におはせしにも、道心おはして、をとこながら、ひじりにおはすときこえ給ひしかば、いかばかり尊くおはすらむ。その御弟にて、賀茂ばらの公だち、あまたおはすと聞こえたまふ。その御母こそ、歌よみにおはせしか。おほぢの、名高き歌よみなりしかばなるべし。いとやさしくこそ。「月やむかしのかたみなるらむ」とよみ給へるぞかし。撰集には有敎が母とていり給へり。奈良、仁和寺、山などに、僧さんだちも多くおはすとぞ聞こえ給ふ。民部卿の次に、宮内卿と聞こえ給ひし、上達部にもならでやみ給ひにき。

ふるさとの花の色

おほとの〳〵僧公達には、山には理智房の座主と申して、男公達より、兄におはしけるなるべし。奈良には覺信大僧正、三井寺には、白河の僧正增智とて、讃岐のみかどの護持僧におはしき。忠敎の大納言の、ひとつ腹とぞきこえ給ふ。德大寺の法眼と申し〳〵は、花山の院の左のおとゞの、一つ腹におはす。心のき〳〵給へるにや、法金剛院の、石立てなどにめされて、參り給ひけるとかや。梵字などもよくかき給ふとぞきこえ給ひし。奈良に玄覺僧正と申し〳〵もおはしき。うせ給ひしほどに、仁和寺の寬運とかいひし人、御修法の賞に、僧都になりし、いかな

りしことにか。たれが御使ひとかやとて、日毎に、みてぐら奉らるゝことありと聞こしめしたりけるとかや。二條殿の御時にも、範俊とかやきこえし、鳥羽の僧正、林の中に、去のびてたてられたる丈六の明王の御堂にて、みずほふ行はせ給ふなど聞こえはべりし。これらよしなきことに侍り。山の座主行玄大僧正ときこえ給ひしは、やんごとなき真言師にて、鳥羽の院、佛の如くにおもほし給ふと聞えき。三昧のわざり良祐といひしやんごとなき真言の師にこまかに傳へ習ひ給ひて、心ばへ振舞ひありがたく、僧のわらまはしきさまにて、さる人まだ出できがたくなむおはしける。尊勝陀羅尼の御導師におはしけるに、日ぐらしあることなれば、僧膳などいふこともあり。又おのづから立ち給ふことなどありけるに、御扇のうへに、五鈷置きて、わが御代りにとゞめ給ひけるなどをも、いと心にくゝよしありて、めもあやにぞ思ひあへりける。鳥羽の院御ぐしおろさせ給ひし年にや侍りけむ、七月ばかりより御わらはやみ、大事におはしまして、月比わづらはせ給ひしに、さまざまの御祈りせさせ給はぬ事なく、かたがたより御祈りしつゝ奉りたまふ。げんざとて、三井寺の覺宗などいふ僧たち、うちかはりつゝ參りても、怠らせ給はで、あさましくきこえ侍りしに、げんざなどし給ふさまにはおはせねど、この座主ぞ參り給ひて、祈り奉り給ひけるにこそ、かひがひしく怠らせ給ひにければ、又後にも、程へておこらせ給へりけるにも、たびたびやめたてまつり給ひけるとこそ聞こえ侍りしか。かやうの驗者には、山伏をのみ頼もしきものには思ひあへるに、誠しきことは、この度ぞ見え侍りける。山科寺の尋範僧正と申すぞ、ひとり殘り給ひて、此の比

おはする。それは諸方の辨のむすめの腹にや。奈良には清き僧もかたきを、いと尊き人にぞおはしますめる。和歌こそよくよみ給ふめれときこえ侍りしか。

「やどもやど花ももむかしに匂へどもぬしなき色はさびしかりけり」

とよみ給ふ。詞もいひなれ、すがたもよみすまされ侍る。近院の大臣の、河原院にてよみたまへるうた、

「うちつけに寂しくもあるかもみぢばの主なき宿は色なかりけり」

といふ御うたの心なるものから、よみかへられて、いとやさしくきこえ侍る。又範永が、「月のひかりもさびしかりけり」といふ歌の心なれども、それにかはりて侍り。おなじ御はらの兄にて、寺の仁證法印とてもおはしき。猶僧公だちは、あら法眼など申すもおはしき。又てらに法印など申すも、大方をとこぎみ、十五六人ばかりやおはしましけむ。

今鏡第六

ふぢなみの下

繪合の歌

鷹司殿の御はらの公だちの御流れ皆申し侍りぬ。高松の御はらの、堀河の右大臣頼宗のおとゞこそ、關白にはなり給はざりしかども、女御たてまつりなどし給ひ、末のきみたちも、近く

まで位高くおはする、おまた聞こえたまひしか。このおとゞ、御堂の第二の御子におはす。御母は、西の宮の左大臣高明のおとゞの御むすめなり。永承二年八月一日、内大臣になり給ふ。御年五十四、大将もとのまゝにかけ給ひき。康平三年に右大臣になり給ひき。御年七十三と聞えき。和歌の道むかしに恥ぢずおはしき。歌よみは、貫之、兼盛、堀河のおほい殿、千載の一遇とかや、ある人申し侍りけると申し出だしたる、人はえ聞き侍らず。御集にもすぐれたる歌おほく聞こえ、撰集にもあまた入り給へり。いたく人の口ならし侍る御歌は、花紅葉七夕千鳥など、數知らず聞こえ侍るめり。中にも戀の歌は、いたく人の口ずさびにも云侍る、多くよみ給へりき。「戀はうらなき」などよみ給へるぞかし。この御歌のさまは、めづらしき心を先にし給へるなるべし。帥のうちのおとゞの御むすめの腹に、君たちあまたおはしき。後朱雀の院の御時、女御に奉り給へりし。麗景殿の女御と申すなるべし。帝かくれさせ給ひて後、里にまかりいで給へりけるに、植ゑおき給へりける萩を、またの年の秋、人のをりて侍りけるを見給ひて、よみ給ひける、

「こぞよりも色こそ濃けれ萩の花涙の雨のかゝる秋には」

その女御の生み奉りたまへりける姫宮、賀茂のいつきと聞こえ給ひき。この宮絵合ゑ給ひしに、「卯の花さける玉川の里」と相模がよめるは名高き歌にはべるなり。三の君は後三條の院の東宮と申しゝ時、御息所にまゐり給へりき。このおとゞの太郎にては、兼頼中納言おはしき。御はゝは、女御のひとつ御はらなり。いと末のはかばかしきも、おはせぬなるべし。次に

は右大臣俊家のおとゞ、大宮の右のおとゞときこえ給ひき。この御末おほく榮えさせ給ふめり。その御子は宗俊の大納言、御母は宇治大納言隆國の女なり。管絃の道すぐれておはしける。時光といふ笙の笛ふきに習ひ給ひけるに、大食調の入調を、いまいまとて、年歴て教へ申さゝりける程に雨かぎりなくふりて、くらやみ云ばかりける夜いできて「今宵かのもの教へたてまつらむ」と申しければ、歡びて「とく」とのたまひけるを、「殿のうちにてはおのづから聞く人もはべらむ。大極殿へわたらせ給へ」といひければ、さらにうしなど取り寄せておはしけるに、「御供には人侍らでありなむ。時光ひとり」とて、簑笠きてなむ有りける。大極殿におはしたるに、「猶おぼつかなく侍り」とてつい松とりて更に火ともして見ければ、柱に簑きたる者の立ちそひたる有りけり。「かれは誰れぞ」と問ひければ「武能」となのりければ、「されば こそ」とてその夜は教へ申さで歸りにけりと申す人もありき。又かばかり心ざし有りとて、教へけりともきこえ侍りき。それはひがことにや侍りけむ。かの武能も其の道の上手なりけるに、誰れにかおはしけむ、一の人の「誰れに習ひたるぞ」と問はせ給ひければ、「道のものにもあらぬ法師とか、よく習ひたるものありけるになむ、傳へてはべる」など申しければ、「なほ時光が弟子になるべきなり」と仰せうけ給はりて、名簿かきてかれが家にいたりて、「それがし參りたり」といはせければ、挑みて、「年頃かやうにも見えぬもの」とて驚きて呼びいれければ、時光ははなちでに、笛つくろひて居たりけるに、武能庭にゐてのぼらざりければ、袖のはたをひきて、のぼせて「いかに」と問ひければ、「殿のおほせにて、御弟子に參りたるな

り」といへば、いと心ゆきて「何をか習ひ給ふべき」といふに「大食調の入調なむまだ知らぬものにて、うけたまはらむと思ひたまふる」といふに、けしきかはりて、太郎子に侍りける公里が前なりけるを、「此のわらはに教へ侍りてのちにこそこと人には授けたてまつらめ。これは忽におぼしよるまじき事」と云ひければ、「この君傳へられむこと、忽の事にあらじ」とて、名簿とりかへして、歸り出でゝ、年經ける後、心ふかくうかゞひて、聞かむとするなりけり。昔の物の師は、かくなむ心ふかくて、たはやすくも授けざりける。その大納言は、さやうに道をたしなみて、やんごとなくなむおはしける。

から人の遊び

按察の御子にて、備中守實綱といひし博士のむすめの腹に、右大臣宗忠のおとゞ、また堀河の左のおとゞの御むすめのはらに、太政のおとゞ宗輔など、近くまでおはしき。右のおとゞは中の御門のおとゞとて、催馬樂の上手におはして、御遊びなどには、つねに拍子とり給ひけり。才學おはして、尚齒會とて、年老いたる時の詩作りのなゝたり集まりて、文作ることおこなひ給ひき。から國にては、白樂天ぞ序かきたまひて、行ひ給ひけり。この國には、これ加へて、三たびになりにけり。からぐにゝは、ふたゝびまでまさりたることに聞こえ侍りしに、近くわたりたるから人のまた後に行ひたる、もてわたりたりけるとぞ聞き侍りし。年の老いたるを、上臈にて、庭に居並びて詩作りなど遊ぶ事にぞ侍るなる。此のたびは、諸陵の頭爲康といふ翁、一の座にて、その次にこのおとゞ、大納言とておはしけむ。いとやさしく侍りし、

藏人の頭より始めて、殿上人垣下してから人の遊びの如く、此の世の事とも見えざりけり。弟の宗輔のおほきおとゞは笛をぞきはめ給ひける。おまり心ばへふるめきて、この世の人にはたがひ給へりけり。菊や牡丹など、めでたく大きに作り立てゝ好みもち、院にも奉りなどして、こととの世の用事など、いと申し給ふことなかりけり。餘り足ざはやくおはすとて、御供の人も追ひつき申さゞりけり。思ひかけぬことには、蜂といひて、人さす蟲をなむ好み飼ひ給ひける。かうなる紙などに蜜ぬりて、さゝげてありき給へば、幾らともなく飛びきて、遊びけれど、大方つゆさし奉ることせざりけり。足高、角みじか、はねまだらなどいふ名つけて、呼ばれければ、召しに從ひて聞き去りてなむ來つゝむれゐける。うへなどいふ人も、いと定め給はざりけるにや、幼きめのわらはべをぞあまた御ふところにはふせておはしける。知り給ふ所より、何もてくらむとも知り給はで、預かりたるものなど、取りいづることあれば、「こはいづくなりつるぞ」などいひて、世に喜びたまひけりとぞ。おやは大臣にもなり給はざりしかども、此の二人は、高く至り給へりき。中御門の右のおとゞ宗忠の御子は、宗能の内大臣と聞こえ給ふ。美濃守行房の女の腹にやおはすらむ。大臣も辭し給ひて御ぐしおろして、まだおはすとぞうけたまはる。おとなしき人だに此の世にはおはせず。いかなるにか、わかき人のみ、上達部にもおはする世に、やとせにやあまり給ひぬらむ。ひとり殘りたまへるとぞ。宰相の中將など申しゝ程直衣ゆるされておはしけるとかや。讃岐の帝の御時、御身ざたしき上達部にもおはせぬに、思ひかけずなどきこえき。わきの關白かなと、あざける人など

もおはしけるとかや。大方は事に明らかに、はかばかしくおはして、御さかしらなども、去たまへばなるべし、易きことなれども、幼くおはします帝など、常には、「五節の帳臺の試みなどに、いでさせ給ふことまれなるに、讃岐のみかど、おとなにならせ給ひて、はじめて出でさせ給ひしに、御指貫は何の紋といふことも納殿の藏人おぼつかなく思へるに「假地にくわんの紋ぞかし」など、藏人の頭におはせし時のたまひなどして、さやうのと明らかにおはしき。みかどの御指貫たてまつるとは、ひとゝせに唯ひと度ぞおはしませばおぼつかなく思へるも、ことわりなるべし。このおとども催馬樂の上手におはして、御聲めでたくおはすとぞ。その御子は、贈左大臣長實の御むすめのはらに、中納言とておはすとぞ。右のおとゞの御子は宗成の左大辨の宰相とておはしき。又刑部少輔宗重とて、琵琶ひき給ふ人ぞおはしける。何事の侍りけるにか。夜、河原にて、はかなくなり給ひにけり。いかなるかたきをもち給へりけるにか。また山科寺に覺靜僧都と申しゝも、皆同じ御はらなるべし。その僧都こそ、すぐれたる智者におはすとうけ給はりしか。法も能く説き給ふとて、鳥羽の院などにても、御講つとめ給ひき。宗輔のおほきおとゞの御子は、前の大納言兵部卿と申すとかや。笛もおやの殿ばかりはおはせずやあらむ。吹きたまふとぞ申すめる。大宮の右のおとゞの公達おまたおはしき。宰相中將師衆と申しゝ、その御子に、少將おはしき。宰相の弟に、基俊の前の左衛門の佐と申しゝは、下野守順業とききこえしむすめの腹にやおはしけむ。その左衛門の佐は、歌よみ詩つくりにておはすと聞こえ侍りしが、さばかりの人の、五位にてやみ給ひにしこそくちを

しく、餘りすぐれて、人に似ぬ事などのけにや有りけむ。「いはも る清水いくむすびしつ」などよみ給へるぞかし。九十ばかりまでおはしき。七の翁にも入り給へりけるとぞきこえ侍りし。山の座主覚慶ときこえしも、大宮のおとゞの御子とぞきこえし。大乗坊とかや申しけむ。

旅寐のとこ

末の子にやおはしけむ。大納言宗通の民部卿と申しゝこそ、大宮どのゝ御子には、むねと時めき給ひしか。末も廣く榮え給へり。白河の院の御おぼえの人におはしき。おこまろの大納言とぞ聞こえ侍りし。歌をもをかしくよみ給ひけるにこそ。行尊僧正のよゐして、とこわすれ侍りけるを、つかはすとて、よみ給ふこそ、いとむかしの心ちして、

「草枕さこそかりねのとこならめけさしもおきて歸るべしやは」。

返しは劣りたりけるにや。え聞き侍らざりき。その公達は、顯季の三位のむすめの腹に多くおはしき。信通宰相中將と申しゝ、笛の上手にておはしけり。是れは世の覺えおはすと聞こえ給ひき。白河の院の殿上人に武者の裝束せさせて御覽じけるに、滋目ゆひの水干きてやなぐひ負ひ給へりけるこそ玄なすぐれておはしけるにや。こと人はとも人の樣にて、此の君こそあるじなどいはむやうに、おはしけるとゝの申しゝ、ひがことにや。わらはやみして失せ給ひにけりとぞ聞き侍りし。いと人の死なぬやまひにこそ、つねはきゝ侍るに。大方は此の末の、御ものゝけこはくおはするにや。民部卿のうせ給ひけるほどにも「家正がありつるは、まだあるか」などのたまはせければ「さも侍らず。はかなくなりて年歴侍りにしものゝ、い

かでか侍らむ」など人申しければ、「うやかきて、まさしくありつるものを」とのたまひけるは、その家正といふが親の譲りたる所を、とり給ひけるを、からく思ひける程に「よせ文を奉れ。預けむ」など侍りければ、喜びて奉りけれど、預からざりけるとぞ聞き侍りし。家正とは、さねしげとて、式部の大夫とか聞こゆるが、をぢになむきこえし。故宰相うせ給ひけるにも、「卿殿おはしまさねば、侍はむとてなむ」といひて出できたりけるとかや。さてその所は、むすめ尋ね出だしてかへさるるなどきこえ侍りし。後いかゞ侍りけむ。これならず大宮のおほいどのゝ、ものゝけなどいふ者も侍るが、年老いたりける僧のしる所侍りけるを、それも妨げ給ひければ、参りて中門の廊に、つとめてより、日たくるまで居たりけれど、家人も御けしきにやよりけむ、申しもつがざりけるを、民部卿幼くて、うつくしきわか君の、遊びありき給ふに、この僧のいとはしくつくづくと居りければ、訪らひて、「われ申さむ」とて、殿に申し給ひければ、入出だして問はせ給ひけるに、「去かじかの所のこと、うたへ申し侍る」など申しければ、その由あることなど、こまかに云ひ出だし給へりけるを、「ことわりの侍らむは、とかく申すべくも侍らず。年ごろも去るべくてこそ、久しくも去り侍らめ。何かは申すべからず。命の絶え侍りなむずるこのかなしくて」と申しければ「いはれのあれば」とて、かなひ侍らざりければ、「いかにも命絶え侍りなむとす。たゞし若君をばなさけおはしませば、守り奉らむ」と申しけれど、それも、ものゝけに出でけるを、守らむといひしはなどありければ、「さ申し契り思うたまふれば、守り奉るに、その御ゆかりと思ふによりて、おのづから参りよる

なり」とぞ云ひける。宰相中將の公だちは基隆三位のむすめの腹に、行通中將と聞こえ給ひし、つかさも辭し給へりし、法師になりておはするとぞ。ことはらの今一人おはするとかや。二人ながら、いよの入道とぞきこえ給ひし。思ひかけぬやうなる御名なるべし。

弓のね

その宗通の大納言の次郎におはせし、太政大臣伊通のおとゞおはしき。詩など作りたまふかた、いとよくおはしけり。手もよくかき給ひけり。よき上達部とておはしけるに、あまりいちはやくて、世のものいひにてぞおはしける。こもりゐ給へりし折も、御幸など見給ひては「百大夫變じて、百殿上人になりにけり」などのたまひ、又「籠もりゐたるは苦しからねど、世に交ろはまはしきことは、人のいたく烏帽子のえり高くあげたるに、うなじのくぼにゆひて、出でむとおもふなり」など世に似ぬやうにのたまひけり。また信頼の右衛門の督武者おこしてのち、除目を行へりし、見たまひては、「など、井は司もならぬにかあらむ。非こそ人は多く殺したれ」など、かやうのことをのみのたまふ人になむおはしける。籠もりゐ給ひしことは、宰相におはせしに、われより上臈四人中納言になれるに、われひとり殘りたり。たとひ上臈なりとも、後に宰相になりたる人もあり。われこそなるべきに、ひとりならずとて、宰相をも兵衛の督をも中宮の權大夫をも、皆たてまつりて、久しく籠もり給へりき。人に越えられたることもなし。こと人ならばさてもおはすべけれども、腹立ちて籠もり給へりしに、爲通宰相の太郎子におはせし、讃岐のみかどの、御おぼえにおはせし程に、おほきおとゞ前の宰相

にて、なりもかへらで中納言になり給ひき。陣の座の除目に、かんだちめになる例は、これや始めにて侍りけむとぞ聞き侍りし。內より院に申させ給ひ、はからはせたまへと、關白にはせられよなど申させたまひけるにや。さまで御けしきもおしくもなかりければ、なさむとせさせ給ふを、法性寺のおとゞ關白にて、あるまじきことゝたびたび申させ給ひければ、いつとなく玄ぶらせ給ひけれど、院にたびたび御使などありて、陣の座にて中納言になり給ひにき。御前にて行はるゝ除目にこそ、上達部はなさるなるに、これよりはじまりて、此の頃はさてなさるゝとぞ聞こえ侍る。うへの御せうとなれば、殿にはさりがたくおはすべけれど、例なき事と申させ給ひけるにこそ。つかさをも返したてまつりて、入りこもり給ひける時、檳榔毛の車やぶりて、家の前の大宮おもての大路にて、取いだして燒き失ひたまひけるは、節會の日にて侍りけるとかや。さて紺の水干に、くれなゐの衣とか着て、馬にて川尻へ、かねとかいふあそびがりおはしける道に、鳥羽の櫻をなむ好き給ひける。かくて月日をわたりてありかむと思ふと院の御おぼえなりし中納言に消息し給ひければ、さもとおぼしめしけれど、うち任せてもえなくて、みかどのせさせ給ふおかざりけるなるべし。ささの宰相にて中納言になる例なき事なれど、隆國の宇治に籠もりゐて、前の中納言より大納言になりたる事の准らへつべきによりてぞ成り給ひける。宰相にまづかへしなさむと御氣色ありけるを、さてはありかむともなかりければ、かたきことなりと侍りけるなるべし。さていりこもり給ひし時、中の院大將まだ中納言など申しゝ折にや。その弓をかり給へりけるが、つかさたてまつ

りて、返したまふとて、

「とゝせあまり手ならしたりし梓弓かへすにつけてねぞなかれける」

とはべりけるかへしに、中の院、

「さりとても思ひな捨てそあづさ弓ひきかへす世も有りもこそすれ」

と侍りけるかひありて、右衛門の督になり給へりき。御むすめ近衛のみかどの御時、女御にまゐり給へりし、后にたち給ひて、みかどかくれさせ給ひしにかば、御ぐしおろし給ひてけり。九條の院と申すなるべし。法性寺殿の御子とて参り給へれど、誠にはこの御子なれば、いとめでたき御名なり。ささきには立ち給へれど、院の御女、一の人のなどならぬは、かたき事にぞ侍るなる。御みめも御けはひも、いとらうある人になむおはすとて、鳥羽の院もいと有り難くとぞほめさせ給ひける。近衛のみかどのかくれさせ給ひて、御ぐしおろしたまひてまたの年、五月のいつかの日、皇嘉門院にたてまつらせ給ひける、

「あやめぐさひきたがへたるたもとには昔をこふるねぞかゝりける」。

御かへし、

「さもこそは同じたもとの色ならめかはらぬねをもかけてけるかな」

と侍りけるとぞ聞こえ侍りし。太政のおとゞの太郎にておはせし、宰相とて、うせ給ひにき。その宰相は二郎か太郎かにおはすとて、おほぢの大納言殿、したぎみとわらは名をつけ申し給ひけり。その宰相の御子は、此の頃泰通の少将と申すなる。侍従大納言の子に玄給ひてお

はしけり。また御子はおはすとぞ。伊實中納言と申しゝは、顯隆の中納言のむすめの腹にて、むかひばらとて、むねとし給ひしかば、兄の宰相よりも、ときめき給ひき。あにおとゝ皆笛をぞ吹き給ひし。ふたりながらおほい殿よりさきに、かくれ給ひにき。伊實の中納言の子に、少將侍從など申しておはすなり。宗通の大納言の三郎にて、季通前の備後守とておはしき。文のかたも玄り給ひき。箏のこと琵琶など、ならびなくすぐれておはしけるを、兵衛の佐より四位し給ひて、この御中に上達部にもなり給はざりしぞくちをしき。さやうの道のすぐれ給へるにつけても、色めきすぐし給へりけるにや。

かりがね

かの九條の民部卿の四郎にやおはしけむ。侍從大納言成通と申すこそ、よろづの事、能多く聞えしか。笛歌詩など、其のきこえおはして、今樣うたひ給ふ事、類ひなき人におはしき。又鞠わしにおはすることも、昔もありがたきことになむ侍りける。大方ことに力いれ給へるさま、ゆゝしくおはしけり。鞠も千日かゝずならし給ひけり。今樣も、非盤に碁石を百かぞへおきて、うるはしく裝束し給ひて、帶などもとかで、「釋迦のみのりは玄なじなに」といふ同じ歌を、一夜にもゝかへり數へて、百夜謠ひ給ひなどしけり。馬に乘り給ふ事も、すぐれておはしけり。白河の御幸に、馬の川に伏したりけるに、鞍の上にすぐにたち給ひて、つゆぬれ給ふ所おはせざりけるも、こと人ならば水にこそうち入れられましか。大かた早業をさへ並びなくし給ひければ、そりかへりたる沓はきて、勾欄のほこぎの上あゆみ給ひ、車のまへうしろ、

つゐぢのうらうへ、とゞこほる所おはせざりける、餘りに到らぬ隈もおはせざりければ、宮内卿有賢と聞こえられし人の許なりける女房に、玄のびてよるよる様をやつして、通ひ給ひけるを、さぶらひどもいかなるものゝふの、局へいるにかとおもひて、窺ひてあしたに出でむを討ち伏せむといひ、支度しあへりければ、女房いみじく思ひなげきて、例の日暮れにければ、おはしたりけるに、泣く泣くこの次第をかたりければ、「いといと苦しかるまじきことなり。きとかへりこむ」とていで給ひにけり。女房のいへる如くに門どもさしまはして、さきざきにも似ずきびしげなりければ、人あかりける方のつゐぢを、やすやすと越えておはしにけり。女房は、かく聞きておはしぬれば、又はよもかへり給はじと思ひけるほどに、とばかりありて袋をてづからもちて、又つゐぢを越えてかへりいり給ひにけり。あしたには此のさぶらひども、いづらいづらとそゝめきあひたるに、日さし出づるまで出で給はざりければ、さぶらひども杖などもちて打ち伏せむずる設けをして、目をつけあへりけるに、ことの外に日高くなりて、まづ折烏帽子のさきを、さし出だし給ひけり。次に柿の水干の袖のはしをさし出だされければ、「あは、すでに」とて、おのおのすみやきあへりけるほどに、その後新しき沓をさし出だして、縁におき給ひけり。こはいかにと見る程に、いと清らかなる直衣に、織物の指貫着て歩み出で給ひければ、このさぶらひども逃げまどひ、土をほりてひざまづきけり。沓をはきて庭におりて、北の對のうしろをあゆみ参りければ、つぼねつぼねたてさわぎけり。中門の廊にのぼり給ひけるに宮内卿もたゝずみありかれけるが、いそぎ入りて裝束し

て、出で會ひ申されて、「こはいかなることにか」とさわぎければ、「べちの事には侍らず。日ごろ女房のもとへ、ときどき忍びて通ひ侍りつるを、さぶらひの打ちふせむと申すよしうけたまはりて、その怠り申さむとてなむ參りつる」と侍りければ、宮内卿おほきにさわぎて、「この科はいかゞあがひ侍るべき」と申されければ、「べちの御あがひ侍るまじ。彼の女房を賜はりて、出ではべらむ」とありければ、さうなきことにて御車どもの人あどは、かちにて門のとに設けたりければ、具して出で給ひけり。女房さぶらひ、すべて家のうちこぞりて、めづらかなるとにてぞ侍りける。から國に江都王など申しけむ人も、かくやおはしけむ。大方は心わかくなどおはして、始めて人のむこにおはせしをりも、調度の厨子かきいだして呪師のわらはの、御おぼえなるに給ひなど云給ひけり。上達部になり給ひても、賀茂詣に、檳榔にあをすだれかけなど云給ひし、始めたる事にはあらねども、さやうに好み給ひけるなるべし。わかざかりは左中將とて、すきものやさしき殿上人、名高きにておはしき。五節などには、雲のうへ、皆その御まゝなるやうにぞ侍りける。何れの年にか、五節に藏人の頭たちの舞ひ給はざりければ、殿上人たちはやみていかにぞや歌うたひ給ひけるに、右兵衛の督公行の、まだ別當の兵衛の佐など申しけむ、その人を表におし立てゝ、成通の中將かくれてうたひ給ひけるを、頭の辨られへ申されたりければ、その折にぞ、御かしこまりにて、云ばし籠もりゐ給へりし。白河の院には御いとほしみの人にておはしき。殿上人のうちには、たゞひとり色ゆるされておはすとぞ聞こえし。雪ふりの御幸に、ひきわたのかりごろも（三衣ぎぬ）を着給へりとて、

こゝろえぬことに仰せらるゝときゝて、資遠とて侍りし検非違使の、まだわらはにて、御前にも近くつかはせ給ひしに、「わび申すよしきかせ参らせよ」との給ひければ、はかなくうちいだして、「成通こそひきわたの事、かしこまりて申し候へ」と申したりければ、おしよしの御けしきなくて、「誠に奇怪なり」とぞ仰せられける。近衛のすけなどは、かとりうすものなど、花の色、紅葉のかたなど、染めつけらるべかりけるを、ひきわたのわらわらしく、おもはしめしけるにや、讃岐の院のくらゐの御時、十五百の歌、人々によませ給ひけるに、述懐といふ題をよみ給ふとて、

「白河の流れをたのむ心をばたれかは汲みてそらに知るべき」

と講せられける時、むしろこぞりて、あはれと思ひあへりけり。涙ぐむ人もありけるとかや。おほかた、歌なども、をかしくよみ給ひき。かへる雁のうたに、

「こゑせずばいかでかゝらまし春霞へだつるそらに歸る雁がね」

とよみ給へるも、清らかにきこえ侍り。戀の歌どもゝ、「こひせよとても生まれざりけり」また「ふる白雪のかたもなく」など、わが心より思ひいだし給へるなるべしと聞こえてびとをかし。詩などもよく心得給へりけるなるべし。左大辨宰相顯業といふ博士の語られけるは、「詩のことなどいはるゝきけば、なにがし千里などもつくりたる優にきこえて心すむわざになむある。萬里といふになりぬれば、またいふにもおよばずなどあるはと、けふあり」などぞはべりける。餘りね泣きやすきやうにぞおはしける。鳥羽にて、白河院のやぶさめといふこ

と御覽じけるに、瀧口なにがしとかいふ者、射むと云けるに、兄に似てつはものゝおぼえある家の者にて侍るなるが、的たてはべりけるを見て、「弟のいかに、兄の的たてによるか。いとやさしきことなり」とて、なき給ひければ、二條の帥は、「行兼衛がやぶさめ射むに、公兼が的たてむ、おはれなるべきことかは」とぞ侍りける。またある源氏のむさのやさしく歌よみあそびなどしけるに、指貫のくゝりのせばく見えければ、「おのづからの事もあらば、さは、きとあげむずるか」などいひても涙ぐみ給ひけり。また三井寺に侍りける山伏の、法橋になれりけると語らひたまひても、「山伏ゆかしくは、それがし見よなどいふらむこそ、大峯のすがたゆかしけれ」などいひても、うち云ぐれたまひけりと聞こえ給ひき。やすき事も物をはむる心にて、かくなむおはしける。弟の按察の大納言重通と聞こえ給ひしは、みめなどは似通ひ給へりけるが、いますこしにはひおりて、おいつかはしきやうにぞおはしける。いと能などはおはせねども、笙の笛吹き、琵琶ひき給ひき。法性寺殿にぞ、常はえたしくさぶらはせ給ひけるに、殿も此の大納言も過ぎておはするのちなども、なつかしく、さと薫る香ぞおはしける。にほふ兵部卿かをる大將などおぼえ給ひけるなるべし。このふたりの大納言たち、御子もおはせで、みな人の子をぞ養ひ給ひける。

ますみの影

閑院の春宮大夫と申すも高松の御はらなり。贈太政大臣能信と申す。白河の院の御おほぢ贈皇后宮の御おやにて、誠の御むすめにこそおはしまさねども、いとやんごとなし。この殿は

詩など作らせ給ひけるとて、人の語り侍りしは、「はるにとめる山の月は、かうべにわたりてまろし」とぞきこえ侍りし。また忘れ侍らぬ、これはふみを題にて作り給へるに、呉漢とかいふ人とぞいひし。所の名などをも、さすがに、たどたどしくなむ申し〳〵。また御歌もうけ給りき。

「くもりなき鏡の光ますますに照らさむ影にかくれざらめや」

と白河院の御事を、伊勢の大輔よみ侍りける、その御返しとぞきこえ侍りし。白河の院一つ御はらの御いもうとは、仁和寺の一品の宮とて近くまでおはしましき。聰子内親王と申すなるべし。後三條の院うせさせ給ひし時、その日御ぐしおろさせ給ひて、仁和寺に住ませ給ひき。さておはしまし〳〵かども、年ごとに、つかさくらゐなど賜はらせ給ひき。その御おとうとに、伊勢のいつきにておはせし、三品ぞたまへり。俊子内親王ときこえき。樋の口の齋宮と申すなるべし。次に賀茂のいつき、佳子の内親王ときこえ給ひし、御惱みによりて、延久四年七月に罷りいで給ひき。富の小路の齋院とぞ申すめりし。齋宮はぞはすに出で給ひき。そのおとうとにて篤子の内親王と申し〳〵も、皆同じ御はらからなり。始め延久元年賀茂のいつきに立ち給ひて、同五年に院うせさせ給ひしかば、前の齋院にておはしまし〳〵に、をばの女院の御譲にて准三后御封など賜はらせたまへりし程に、堀河の帝の御時、后にたち給ひき。みかどよりは、御とし殊の外におとなにおはしければ、世にうたふ歌なむはべりけるとかや。春宮大夫殿は誠の御子もおはせねば、三條の内大臣能長のおとゝの甥におはするをぞ、子にし

たてまつり給ひける。誠には堀河殿の御子におはす。これも帥殿の御女のはらなり。この内のおとゝの御子は、中納言基長と申しゝは、贈三位濟政の女のはらなり。彈正の尹になりたまへりしかば、尹の中納言とぞ申しゝ。三井でらに僧都とて、御子おはすとぞ。尹の中納言の弟、大藏卿長忠とておはしき。母は昭登親王の女なり。大辨の宰相より、中納言になりておはせし程に、中納言を奉りて、われ大藏卿になり、子を辨になされ侍りき。石山の辨とぞ申すめりし。賀茂にぞ限りなく仕うまつられし。中納言までなど夢に見られたりけるとかや。其の子は左少辨能忠と申しゝ。詩などよく作り給ひつ。心さとき人になむ坐しける。若くて疾くうせ給ひにき。少將入道有家と聞えし人の子にこの辨の同じ名つきたるが、わづらひける程に、公伊法印といふ人に、祈りをつけたりけるが同じ名にてとりかへられたるとぞ、世にはいひあへりし。其のとりかへ人は、まだおはすとかや。大藏卿の弟に、山の座主仁豪と申すもおはしき。南勝房とぞ申し侍りし。又律師などいひて、二人ばかりおはしき。又四位の侍從宗信と申すもおはしき。其の子は仁和寺に禎喜僧正とて東寺の長者にて此の頃おはすとぞ。尹の中納言の同じはらにおはせし、三條のおとゝの御むすめは、白河の院東宮におはしましゝ時、御息所と聞こえ給ひし。みかど位につかせ給ひて延久五年女御の宣旨かうぶり給ひき。道子の女御とぞきこえき。姫宮生み奉つりて後、内へも參り給はずなりにき。承香殿の女御とや申しけむ。御むすめの善子の内親王に伊勢にいつきにて下らせ給ひしに、具し奉りてぞおはしける。七十に餘りて失せたまひにき。この女御は、また何とかや申す女おはしき。春宮の

大夫の御弟に同じ高松の御腹の、無動寺の右馬の頭入道顯信の君ときこえ給ひし。その御名は長禪とぞ申すなる。十八にてこの世をおぼし捨てゝ、比叡の山にこもらせ給ひし、たふとくおはれになど申すもおろかなり。昔の物語どもに、こまかに侍れば、さのみやは繰りかへし申し侍らむ。長家の民部卿と申すも、やがて高松の御はらなり。御歌どもこそうけ給はりしか。「庭ぢろたへの霜と見えつゝ」などよみ給へるも、この御歌とこそきゝ侍りしか。この大納言、御子忠家大納言、祐家中納言など申しておはしき。母はみな美濃守基貞のむすめとぞ。大納言の御子にて、もとたゞ俊忠二人の中納言おはしき。それは經輔の大納言のむすめの御腹なり。俊忠の中納言は、それも歌よみ給ふと聞え給ひき。堀河の院の御時、をとこ女のふみかはしにも、よみ給へるとこそきゝ侍りしか。その中納言の公達は、民部大輔忠成と聞こえ給ひし、又俊成三位とておはすなり。伊豫守敦家のむすめのはらとぞ。その三位の御歌も、此の頃の上手におはすとかや。歌の判など云給ふとこそ聞き侍れ。この三位、讃岐のみかどの御時、殿上人におはしけるが、みかど位おり給ひてのち、院の殿上を云給はざりければ、

「雲居よりなれし山路を今更にかすみへだてゝなげく春かな」

とよみて、敦長の卿につけて、奉られ侍りければ、御返事はなくて、やがて殿上仰せ下されけるとぞ。撰集には、「あやしや何の暮を待つらむ」とかやいふ歌ぞ、ひりて侍るなる。その兄に山の大僧正とて、經たふとくよみ給ふおはすなりときこえ給ふ。

たけのよ

みかど關白に次ぎ奉りては、御母方の君たちこそ、皆世に去かるべき人にてはおはすめれ。九條殿の御子の中に三郎にはおはしまし〳〵、關白たえずせさせ給ふ。十郎にあまり給へりし、閑院のおほきおとゞの末こそ、關白は去給はねども、打ちつゞきみかどのおほんをぢにて、さるべき人々おはすめれば、その御有樣申さむとてまづ御門の御母方を申しつゞけ侍るなり。朱雀院村上の御おほぢは、堀河殿、冷泉院圓融院の御おほぢは九條殿、花山の院のは一條殿、一條の院三條の院のは東三條殿、後一條の院後朱雀の院後冷泉の院この三代の御おほぢは御堂の入道殿この十代のみかどは昭宣公と申す。堀河殿のひとつ御末なり。後三條の院こそ母方もみかどの御孫にておはしませど、御母陽明門院は御堂の御孫にておはしませば、ひとつ御流れなり。白河の院の御おほぢ、閑院の春宮大夫の同じ流れにおはしますを、まことの御おやは閑院の左兵衞の督公成、この同じ御流れなれど、東三條殿の御末にはおはせで、その御おとうとの閑院のおとゞの御末なり。この閑院のおほきおとゞの御うまごにおはせし、左兵衞のかみの御すゑうちつゞきみかどの御おほぢにおはす。この公成の左兵衞の督の御子按察の大納言實季は鳥羽の院の御おほぢなり。この大納言の太郎には、春宮大夫公實と申しき。經平の大貳のむすめの腹におはす。みめも清らかに、和歌などもよくよみ給ふときこえ給ひき。笛吹きことひきなど去給はざりけれど、紅梅のみちのくに紙にまきたるふえ腰にさして、こと爪おはしてぞおはしける。こと人のさやうにおはせば、人もおざけるべきに、よくなり給ひぬれば、科なくいうにぞ見え侍りし。若くおはしけるほどにや、右近の馬場に郭

公尋ねに夜をこめておはしたりければ、女房ぐるまの雑色一人具したる、さきに立てりけるに、ほと〳〵ぎすは啼かでやうやう明けゆく程に、水雞のたゝきければ女の車より、

「いかにせむ待たぬ水雞はたゝくなり」

といひおくり侍りければ、

「山ほと〳〵ぎすかゝらましかば」

とつけて返したまひにけり。女は誰にかありけむ。ゆりばなにやとぞうけ給りし。いかにやさしく侍りけることかな。此の世には、さやうのことあり難くぞあるべき。よみ給へる歌おほかる中に、いとやさしくきこえ侍りし、

「思ひ出づやありし其のよの呉竹のあさましかりしふし所かな」

とよみ給へるこそ、いづくにかいばみ給ひけるにか侍りけむ。からうすの音して當來の導師などや拜みけむとさへ思ひやられ侍る。そのおほい君は經實の大納言のうへ、そのつぎは花園の左のおとゞの北の方、三の君は、待賢門院におはします。つぎざまにまさり給へることを「まろが姉わらましかば、それなどいひて、たきゝおへる賤のをに具する人にやわらまし」などのたまはせけると聞えし。さしものたまはぬことを、人のいはせ侍るにも有りけむ。またさやうのことは憚れたまはむ、さも侍りけむ。皆此の御母光子の二位の御はらなり。春宮大夫の太郎にては侍從中納言實隆と申しておはしき。その御はゝ美濃守基貞の御女なり。この中納言人がらはよくおはしけるにや。院に和歌の會せさせ給ひけるに、歌人にまじりて歌

かきたる、むねにも入れ、ひきそばめなどは去給はで、いつとなくさゝげておはしければ、御弟の太政のおとゞ、其折まだ中納言などにやおはしけむ、見給ひて、この人は歌などもよみ給はぬにとおぼつかなくて、「御歌見給へ侍らばや」と申し給ひければ、「何ごとのたまふぞ。前の左衛門の佐ひがことせられむやは」とのたまひける、をかしかりしとぞ侍りける。基俊の君、「すぐれたる歌よみなむ、よき歌なるべし」とのたまふにこそとはきこゆれど、歌の道は善きにつけ、悪しきにつけて、去ゝおひて、われもたびたびに、人にも見せおはせなどすることを、我がえ得ぬことは、かくおはする事なり。其の子にて、冷泉の宰相公隆とておはせし、わかくて後少将ときこえし、若殿上人のいうなるにておはしき。其の弟に、兵衛の佐成隆とておはしける。まだをさなくてかくれたまひにき。こと御腹にや、奈良に覚珍法印と申しゝは當時おはすざえある人と聞こえ給ひき。春宮大夫の二郎におはせしにや、大宮のすけ實兼とか聞こえて、後には刑部卿など申すおはしき。この御中に上達部などにえ成りたまはざりき。その御女の、おはのかみ朝綱と聞こえし、むすめの腹におはしける、女院に參り給へりけるが、鳥羽の院去のびて物など仰せらるゝ事ありとて、法皇の出ださせ給ひけるとぞ聞こえ侍りし。

梅のこのもと

春宮大夫の三郎にやあたり給ふらむ。これも美濃守のむすめの腹におはせし、太政大臣實行のおとゞは、學問も去給ひたる人にておはせし上に、たちゐの振舞ひなどめでたく、よき上

達部にてぞおはしける。四位ゐ給ひて、前の少納言にて、いつとなくおはしければ、おやの寿宮の大夫殿は「身のざえなどもあり。よき者にてあるに、口をしく」とのみ歎き給ひけるに、うせ給ひて後、中辨にも藏人の頭にもなり給ひければ、「身の時なかりしをのみ見え奉りて」とぞ、思ひ出でつゝのたまはせける。おやの御病ひのほどなども、まろぶしにて、常はおつかひきこえ給ひけるに、うせ給ひてのち、基俊の君とぶらひにおはして梅の枝にむすびつけられける、

「むかし見しあるじがほにて梅がえの花だにわれに物語せよ」

と侍りければ、このおとゞの御かへし、

「ねにかへる花の姿のゆかしくは唯このもとを形見とは見よ」

とぞ侍りける。弟の左衛門の督より下臈にて頭にてならび給へるに、頭の中將は上臈にておはしけれど、この兄はざえもおはし、命も長くて、おほきおとゞまでいたり給へる、いとめでたし。院くらゐにおはしまし、時、内宴行はせ給ふに、詩作りて參らむとゐ給ふを、御子の内のおとゞは、「さらで侍りなむ。年もあまり積もり給ひ、御ありきも叶ひ給はぬに、見苦し」と諫め申し給ひければ、中の院入道おとゞに「内大臣かく申し侍るは、いかゞ」と申し合せ給ひければ、「かならず參らせ給ふべきことなり。おぼろげに侍らぬことなるに、みかどの御をぢにおはしまして、おほきおとゞのまゐらせ給はざらむ、くちをしく侍り」など侍りければ、うまごの實長の大納言の、宰相の中將と申しゝに、かゝりてこそ參り給ひけれ。御ぐしおろし

給ひしも、中の院かくと申し給ひければ、「玄か侍るまじきことにやとこそ、思ひ給へて過ぎ侍れ。おぼしめし立つならば、いとめでたきことに侍り。同じくは障りなき程にとく侍らむ、めでたきこと」とのたまはせければ、入道し給ひてだうせ給ひにし。弟の左衛門の督は御こゑめでたく、うたをよく詠ひ給ひて、成通の大納言にも、とりどりにぞ申しける。その左衛門の督通季と申しゝは、春宮大夫の四郎にておはせしなるべし。みめも清らに、おほきにふとりたる人にておはしき。母は二位の光子にてむかひばらにておはせしかば、兄をもこえて頭の中将頭の辨にて、ならびておはしき。殊の外に世にあひたる人にて、通季信通とてひとてにておはせしに立ち並び給ひけるに、信通の君はちひさく、これは大きにおはすれば、母の二位殿、「これはいづれかかたは」と申し給ひければ、白河の院は男の大きなるは、おしきことかは」とぞ仰せられける。實行の太政のおとゞの御子は、内大臣公教と申しき。修理のかみ顯季と申しゝ女のはらにおはす。その御母は歌よみにおはしき。少將公教の母とて、集などに多くおはすめり。「常磐の山は春を知るらむ」などこそいうに聞こえ侍れ。内のおとゞは、若くよりみめ心ばへも、思ひあがりたるけしきにぞおはしける。藏人の少將、四位の少將など申しゝ程、左右の御手のうらに香になるまでたき物をめて、月出だしたる扇に、なつかしき程にたきめたる狩衣など着給ひて、さき華やかにおはせて、夕つ方などに、常に三條室町殿に院女院などおはしますかたがたにまゐり給へば、女房などは「四位の少將の時になりにたり」などぞいはれけるとぞ聞えし。ざえなどもおはし、笛もよく吹き給ひき。心ばへなどお

となしくて、公事などもよく勤め給ふ。世のさたなどもよくおはせしを、世の人の様に、あながちなる追從も云給はずなどおはしければにや、家などは叶ひ給はでぞ有りける。藏人の頭檢非違使の別當など云給ひしも、いとよくおはしけり。左大將など申すほど、鳥羽院の御うしろみ、院の内とりさたし給ひしかども、われと國ひとつも知り給はず、賢人にぞおはすめりし。てゝの太政のおとゞよりも、さきにうせ給ひにし、大方おとなしきやうにふるまひて、藏人の頭になり給へりしに、弟におはせし公行の、辨にはじめてなりて、厚額のかぶりになし給ひければ、われも今は厚額にせむとて、同じやうにして、内に參り給へるに、成通宰相の中將にはじめてなりて、云ばしは透額の冠にてとやおぼしけむ、内に參り給ひて、頭の中將のかぶりを見給ひて、額に扇さしかくしてまかりいで給ひて、やがて厚額になりておはしけり。成通の御心ばへは、世のさたをばいたくも好み給はで、公事などは識者におはせしかど、世のまめなることは取りいられぬ御心にや。藏人の頭も、檢非違使の別當も歷給はず、侍從大納言などいひて過ぎ給ひにき。公敎のおほい殿は、三條の内大臣とも高倉のおとゞとも申すなるべし。三條のおとゞは能長のおとゞを申しゝかば、いひかふるなるべし。高倉のおとゞの姫君、清隆の中納言のむすめのはらにおはする、院の女御にたてまつり給へり。今梅壺の女御と申すなるべし。御名こそいとやさしく聞こえ侍れ。その弟の姫君は、父おとゞうせ給ひてのち、おほぢのおほきおとゞ、さたし給ひて、今の攝政殿、右のおとゞなど聞こえさせ給ひし時まゐりたまひて、北の政所とぞきこえ給ふ。男公達は、同じ御はらにおはする、大納言

實房と申すこそ、内のおとゞうせ給ひて後、三位の中將になり給ふ。殊の外の御榮えなるべし。末の子におはすれど、むかひばらなれば、兄二人にまさり給へるなるべし。左衛門の督實國と申すは中納言におはすなり。此の頃みめよき上達部ときこえ給ふ。また笛も吹き給ひて、御おやのおとつぎ給ふとぞ。みかどの御師にもおはすと聞こえ給ふ。神樂などもうたひ給ひて、清暑堂の御神樂にも、拍子とり給ふときこえ給ふ。その御兄にて左大辨の宰相實綱と申すなる、ふみなどにたづさはり給ひて辨にもなり給ふなるべし。僧公達も法眼など申して、山におはすなり。又石山の座主などもきこえ給ふ。内のおとゞの御次に、右兵衛の督公行と申し、御弟のおはせし、宰相までなり給ひて若くてかくれ給ひにき。ざえなどもおはしけるにや。辨などにても仕へたまひき。歌こそよくよみ給ひけれ。その御子に顯親の播磨守のむすめの腹に前の大納言實長と申すおはすなり。みめよき上達部にぞおはする。いりこもり給へる、若き人たちのいかに侍るよにか。實慶法眼とて山におはしけるも、うせ給ひにけり。右兵衛の督の御弟に民部大輔公宗と聞こえ給ふおはしき。うつしごゝろもなくて、常にはものゝけにてうせ給ひにき。みめなどもよくおしはかるると聞こえ給ひき。皆同じ御はらからにぞおはしける。顯季の三位のむすめの御腹におはしけり。左衛門の督通季と申しゝ中納言の御子に、按察の大納言公通と申すおはすなり。詩などもつくり給ふなり。くびの御病重くおはすればにや、たびたびつかさも辭し給ひて前の大納言にておはすとぞ。其御子に中將侍從などおはすなり。通基大藏卿のむすめの腹におはすとぞ。前の少將公重と申すも、左

衛門の督の御子なり。歌よみ給ふとぞ。又山に法印など申しておはすなり。此人々の御いもうとに、廊の御方と申して、白河院の御おぼえ玄給ふ人におはせし。後には徳大寺の左のおとゞの御子二人うみ給へりき。今の公保の大納言におはすなり。いまひとりは山に僧都と申すとぞ。左衛門の督の次には山の座主仁寛と申し、おなじ御はらにおはせしかば、山僧などは二位の僧正などぞ申すなる。いと能はすぐれたるもおはせざりけれども、心ばへかしこくおはせしかばにや、世の覚えなどもすぐれ給へりけるにや。世の末に、さばかりの天台座主は、かたくなむ侍る。山のやんごとなき堂どもの破れたるも、多くつくりたて、大衆などの中にすこしもふようなるをば、よく玄たゝめなどせられければ、世のためかの山のため、その時はおだやかになむ聞こえ侍りし。傳教大師の二度生れ給ふといふ事も侍りけるとかや。白河の院のかくれさせ給ひけるに、七月七日俄に御心ちそこなひて、つとめてより御霍乱などきこえて、定かにものなど仰せられざりけるに、今はかくと見えさせ給ひける時、かねてより忠盛のぬしに「念佛かならずすゝめよ」と仰せられおきたりければかくなむうけ給はりしと、為業といふが母して、たびたび申しけれど、仁和寺の宮など、「佛頂尊勝陀羅尼」とのみ仰せられて、「これおなじことなり」とのたまはせけれど、かねてうけ給はりたるに、違ひておぼえけるに、この僧正の「南無阿彌陀佛」と高く申したまへけるなむ、うれしかりしとこそのちに聞こえけれ。その僧正は座主などを辞し給ひて、坂本に梶井といふ所にこもりゐて、四十にあまりてうせ給ひにけり。

花ちる庭の面

春宮大夫の六郎にやおはすらむ、左大臣實能のおとゞ、これも左衞門の督山の座主女院などの一つ御はらからにて、二位の御子におはす。大炊のみかどのおとゞとも徳大寺のおとゞとも申すなるべし。御みめも心ばへもたをやかに、いとよき人におはしき。兄よりもなつかしく、いうなる人におはせしを、ふみなど作り給ふことはおはせねど、歌などよくよみ給ひき。戀の歌の中にも、いうに聞こえ侍りしは、「うつゝにつらき心なりとも」また「命だにはかなからずば」なども聞こえ侍りき。また「思ふばかりの色にいでば」などよき歌とこそきゝはべれ。又「あひみし夜はの嬉しさに」なども聞こえ侍りき。聲もよくおはしけるにや、御遊びに拍子とり給ふなどぞうけたまはりし。「庭こそ花の」などいふも、この御歌とこそおぼえはべれ。世のおぼえも殊の外におはしき。むかひばらにておはするうへに、人がらよくおはすればにや、三位の中將歷給へるも殊の外の御おぼえなり。此の頃こそ多くきこえたまへ。關白つぎ給ふべき人おど放ちては、さることも侍らぬに、いとめづらしく侍りき。大納言の大將になり給へりしも、近くたゞびとのなり給ふこともなきに、いと珍らかになむ侍りし。左大臣までなり給へる、閑院のおとゞの後は四代なり絶え給へるに、この殿の大將になりはじめたまひて、兄の太政のおとゞ、この左のおとゞ、右大臣內大臣になりはじめ給ひて、公達もおのおのなり給へり。兄の太政のおとゞ、按察の大納言とておはせし、大將弟になられて、こもり給ひしに、一の大納言忠教、二の大納言實行、三にて雅定、第四實能の大納言おはせし、上

藺三人をおきて、大將になり給ひしかば、實行、雅定二人は、いりこもりておはせしを、中の院の源大納言雅定左大將になり給ひて後こそ實行、雅定、右大臣、内大臣になり給ひしか。いづれの中納言とかの、まづ右のおとゞの御慶びにおはしたりければ、其の家の門に、うま車おほくたちなみて、俄に四足たつとて異門より入りたるに、見やりたれば、かくれの方までひきつくろひて、をとこ女いろいろにとりさうずきて掃きのごひなどしてゆゝしく花やかに見えけるに、かくとまうし入れたれば、久しうありて、烏帽子直衣にて、物語まめやかに聞こえて、院の御こゝろざしかたじけなくなどいひて、はなうちかみてよろこびの涙おしのごひつゝ忍びあへぬ御氣色なるに、ほども歷ぬればやうやうまぎれ出でゝ、つぎに中の院に渡りて、内のおとゞの御よろこび申し給ひければ、中門の廊に犬の足がた入つ九つありて、さりげなる氣色もせず、さぶらひ呼び出だして申しいれたれば、使にとりつゞきて、半尻なる狩衣にて出で給ひて、「慶びに渡り給へるか。大臣は大饗など申して大事おはかり。何かさとぶらひ給ふ」など云ひちらしてやみ給ひにけり。ふたりの人の變られたりし樣こそと語られけるとなむ。德大寺のおとゞの御子は、右大臣公能のおとゞ、その御はゝ按察中納言顯隆と聞こえしむすめにおはす。此のおとゞ管絃も身のざえもかたがたおはすと聞こえき。親おほぢなどは、ざえおはせぬに詩など作り給ひ、みめも心ばへもいとうるはしき人にぞおはしける。中納言の大將になりて、右大臣までなり給へりき。このおとゞは、若くより盤もうつくしくおはしまして、藏人の少將などいひて、五節の淵酔の今樣などに、權現うたひ給ひける。内

侍所の御神樂の拍子とりなど云給ひけるも、ほそき御聲いとをかしくぞ侍りける。むねとは詩作り給ふ事を好みて、中將など聞こえ給ひし時、北野の、人の夢に「久しくこそ詩など講ずる人なけれ」とのたまはすとて「野徑只青草」とかいふ詩、博士學生などあまた詣でゝ講じけるに、年二十にすこし餘り給へる、わかき殿上人のみめかたちいとをかしくて、上の御ぞなどなよらかに着なし給へるに、細太刀平緒など云なやかにてまじり給へる、神もいかゞ御覽ずらむとぞおぼえける。次第に朗詠し給へりける中に、花やかなる御聲して、「羅綺の重衣たる」とうち出でたまへりける。年老いたる人など涙をさへながして、むしろこぞりてめで思へり。また讃岐のみかど位におはしましける時、ささいの宮の御方にて管絃する殿上人ども召してよもすがら遊ばせ給ひけるに大殿もおはしまして「朗詠つかまつれ」と仰せられけるに、このおとゞの中將など申しける時に、「大公望か周文におへる」と出だし給へりけるこそ御聲もうつくしう、みかど一の人の事にて、其のよしあることの、いうに聞こえ侍りける。藏人の頭より宰相になり給ひしに、中將をぞ、もとのことなればかけ給ふべかりしに、道を歷むとにや、右大辨になり給へりき。いと身にもおひ給はずなど思ふ人もありけるに、侍從になりそへ給ひて、太刀はきたまへるなど、心のまゝにおはせしさま、事につけてあらまほしくおはしき。藏人の頭におはせし時も、殿上の一寸物し日記の辛櫃に、日毎に日記かきていれなどして、ふるきことを興さむと云給ふとぞきこえ給ひし。

宮城野

此のおとゞの御むすめ、後忠中納言のむすめの腹に、四人おはすときこえ給ふ。おほい君はいまの皇后宮におはしますとぞ。この院の位の御時に、きさきにたち給ひし御名は忻子と申すなるべし。その次に姫君おはしき。「きさきふたりの中にておぼろげの御ふるまひあるまじ。佛の道にこそは入らせ給はめ」と故おほい殿のたまはせければ、それにたがはず、若くおはすなるに御ぐしおろし給ひたると聞き侍る、いとあはれに、この御事をたれがよみ給へるとかや。

「宮城野の秋の野中のをみなへしなべての花にまじるべきかは」

とぞ聞き侍りし。誠にいとありがたく契りおき給ふとも、そのまゝにおぼしなり給ふ、いとありがたく物し給ふ御心なるべし。三の君は宇治の左のおとゞの北の方の、父おとゞのいもうとにおはすれば御子にぞたてまつり給ひて、近衛のみかどの御時、姉宮よりさき御いもうとにおはすれば御子にぞたてまつり給ひて、近衛のみかどの御時、姉宮よりさき程に、九に、十一にて后に立ち給へり。近衛のみかども此の宮も、そのかみまだ幼くおはし、程に、九條のおほきおとゞの御むすめを鳥羽の院、女院などの御さたにて、女御にたてまつりたまへり。法性寺のおとゞの北の方は、九條のおほきおとゞの御いもうとにおはすれば、御子とてうらうへより心ひとつにてたてまつり給へりしに、宇治の左のおとゞ年ごろは兄の法性寺のおとゞよりも、世にあひ給へりしに、あまりにおはせしけにや、さすがにひとつにもおしはゞり給はざりしに、今參り給ひたる中宮のみひとつにおはしますことにて、父の伊通のおとゞも大納言などまうして常に侍ひ給ふ。關白殿も宇治のおとゞも、心よからぬさまにて隔

ておはかりけるほどに、みかどもまたかくれさせ給ひ、ひだりのおとゞもうせ給ひてとしふるほどに、二條のみかどの御とき、あながちに御せうそこ有りければ、ちゝおとゞにもかたがたまうしかへさせたまひけれども、去のびたるさまにてまゐらせたてまつりたまへりけるにむかしの御すまひもおなじさまにて、くもゐの月も、ひかりかはらずおぼえさせたまひければ、

「思ひきやうきみながらにめぐりきて同じ雲ゐの月を見むとは」

とぞ、思ひかけず傳へうけ給はりし。かやうに聞こえさせ給ひしほどに、みかども亦かくれさせ給ひて、よも心細くおぼえさせ給ひけるに、例ならずおはしませばなどきこえて、御ぐしおろさせ給ひける。御とし廿五六ばかりの御ほどに、おはしけるにやとぞ聞こえさせ給ひし。この宮何事もえんなるかたなさけ多くおはしまして、御手うつくしうかゝせたまふ。繪をさへなべての筆だちにもあらずなむおはしますなる。またほに出でゝ、こと琵琶などひかせ給ふことは聞こえさせ給はねど、優れたる人に劣らせ給はず、物のねも能くきゝ去らせ給ひたるとかや。御せうとたち參り給ひたるにも、御帳おましなどこそあらめ、さぶらふ人々まで、よろづめやすく、もてつけたる樣にて、人參るとて今更に臺盤所とかくひきつくろひ、御几帳おしいでなどせで、かねて用意やあらむ、心にくゝぞおはしますなる。故左のおとゞも、中にとりわきて御心につかせ給ふとてぞ、御子に養ひ申させたまひける。かやうにあさけ多く、おはしますことをや聞かせ給ひけむ。二條の院の御時もあながちに御けしき侍りけ

るなるべし。この宮たちおやの御子におはしませば、ことわりとは申しながらなべてならぬ御姿なむおはしますなる。たれもと申しながら、院の御姉におはしますなる女院こそすぐれて、おはしますさまれは並ぶ御かたがたかたくおはしますなるに、今の皇后宮にや、いづれにかおはしますらむ、参らせ給へりけるに、人の見くらべまゐらせけるこそ、とりどりにいとをかしく見えさせ給ひけれ。女院は玄ろき御ぞ十にあまりて重なりたるに、菊のうつろひたる小袿白き二重おり物のうはぎたてまつりて、三尺の御几帳のうちにゐさせ給へりけるに、皇后宮は、うへ赤いろにて玄たざま黄なるはじもみぢの、十ばかり重なりたるに、うはぎにおなじ色に、やがて濃きえび染めの小袿の色々なる紅葉うち散りたる、ふたへ織物たてまつりたりけるを、見参らせたる人の語りけるとなむ。さて此の大炊の御門の右のおとゞのをのこ君は、太郎にては、三位の中将とまうし、宮たちの同じ御はらにおはする、大納言實定と申すなり。つかさも辞し給ひてこもり給へるとかや。さばかりの英雄におはするに、人をこそ超え給ふべきを、人に超えられ給ひければ、位にかへて超えかへし給へる、いとことわりと聞こえ侍り。詩なども作り給ひ歌もよくよみ給ふとぞ。御聲などもうつくしうておやの御あとつぎ給ひて、御神樂の拍子などもとり給ひ、今様なども能く謡ひ給ふなるべし。こもり給へるもあたらしくはべることかな。次に三位の中将實家と申すなるは、藏人の頭より宰相になり給ひたらむにも、なかなかまさりてなべてならず聞こえはべり。大和ごとなどよくひきたまひ、御聲もすぐれて、これも今様神樂うたひたまふときこえ給ふ。この御弟に頭の中

將實守と聞こえ給ふも、やまとごとなど習ひ傳へたまへり。この君たちみな才などもおはして、からやまとの文など作りたまふ。御みめも昔の匂ひ殘りて此の頃すぐれ給へる御有樣どもにおはすと聞こえ給ひ、又いづれの御はらにかおはすらむ、山に法眼とておはすと聞こえ給ふ。また院の姫宮生み奉り給へる姫君もおはすとぞ。まことや北の方の御はらにや、侍從とておはすなるは、頭の中將御子に玄給ふとぞ。德大寺のおとゞの二郎には、中の御門の右のおとゞの御むすめのはらに公親の宰相中將とておはしき。疾くうせ給ひにき。次に一條の大納言公保と申すなる左衞門の督の姫君、廊の御方と申す御はらなり。當時大納言におはすなり。父おとゞに御みめはすこし似給へるとかや。同じ御はらに公雲僧都とて山におはすなり。異はらの御子僧にて三井寺などにおはすとぞ。春宮大夫の末の御子は民部卿季成と申しておはしき。東琴にてぞ御遊びにはまじり給ひけると聞き侍りし。右京のかみ道家のむすめのはらにおはす。文の方も習ひ給へりけり。その御子に、左衞門の督公光と申すなるこそ、ざえなどもおはして詩つくり給ひ、歌もよみてよき人と聞き奉るに、これも前の中納言などうけたまはるこそいかに侍る世の中にか。この御母顯賴の民部卿のむすめとぞ。みめも殊によき上達部にて、ちゝの大納言にはまさり給へりとぞ。聲よく神樂なども、うたひ給ふとか。これもゆゝしく大きなる人にて、御をぢの通季左衞門の督の御たけに、いと劣り給はずとぞうけ給はる。すべてよき人にこそ、若くても。てゝの世おぼえよりは殊の外に殿上にゆるされたる、近衞つかさにてぞおはしける。

志賀のみそぎ

春宮大夫の御するのかく榮え給ふことも、みかどの御ゆかりなれば、女院の御ことこそ申し侍るべけれど、その御有樣はさきに申し侍りぬ。その生み奉りたまへる宮々は一の御子は讃岐の院におはします。二の御子は御目くらくなり給ひて、幼くてかくれ給ひにき。三の御子は若宮と申しておはしまし、幼くよりなえさせ給ひて、起きふしも人のまゝにて、ものも仰せられでおはしまし、。十六にて御ぐしおろさせ給ひて、うせさせ給ひにき。御みめもうつくしう、御ぐしも長くおはしましけり。むかし朝綱の宰相の日本紀の歌に、

「たらちねはいかにおはれと思ふらむ三とせに成りぬ足たゝずして」

とよまれたるも、蛭子におはしましける。宮の如くこそは聞こえさせたまへ。昔もかゝる類ひおはせぬにはあらぬにや。嵯峨の帝の御子に、隱君子と申しける御子は御身にいかなることのおはしけるとかや。さて嵯峨にこもりゐ給ひて、ひきものゝうちにたれこめて人にも見え給はでわらはにてぞおはしける。此の頃ならば法師にぞなり給はまし。昔はかくぞおはしける。心もさとくいとまもおはするまゝによろづの文を披き見給ひければ、身の御ざえ人にすぐれ給ひておはしましけるに、やんごとなき博士のみちを遂げ給ひける時、廣相の宰相と聞こえける人の、かの博士になり給ひけるに、小屋とかいふ所たちよりとぶらひ奉られけるに、難きこと侍りけるをば、駒をはやめてかの嵯峨に詣でゝぞ問ひ奉りける。みかどの御子にも、かやうなるさまざまおはしけり。これは、佛の道に入らせたまひたれば、後の世の契は

むすばせ給ふらむ。この宮わかごにおはしましける時、絶えいり給へりければ、行尊僧正祈り奉られけるに、「白河の院位につき給ふべくは、いきかへり給へ」と仰せられけるほどになほらせ給ひければ、たのもしく人も思ひあへりけるに、そのかひなくおはしましける。いかに侍るにか。なえさせ給ひたりとも、御命は十にあまりておはしますべく、又ひとのきるしもたふとくおはすれば、なほらせ給へども位はべちのことなるべし。第四の御子は今の一院におはします。第五のみこは本仁の親王と申し、わらはより出家し給ひて、仁和寺の法親王と申すなるべし。ささばらの宮、法師にならせ給ふことありがたきことゝ申せども、佛の道を重くせさせ給ふ。いとめでたきことなるべし。この宮いとよき人におはして、眞言よく習ひ給ひ、御手もかゝせたまひ、詩つくり歌よみなどもよく去たまひき。その御歌多く侍る中に、みのをにこもりて出で給ひけるに、有明の月おもしろかりけるに、

「このまもる有明の月のおくらずばひとりや秋のみねを越えまし」

とよみ給へるとかや。又、

「夏のよはたゞときのまもながむればやがて有明の月をこそ見れ」

などよませ給へり。また若くおはせしに、この一二年がさきに、うせさせ給ひにき。四十一二にやおはしけむ。惜しくもおはします御齢に、定めなき世のうらめしきなるべし。又何事も、世におはぬほどの人と聞き奉りしけにや、うせ給はむとてのころ、金泥の一切經かきいだして、高野にて供養し給ひけるに、ひえの山の澄憲僧都を院に申しうけさせ給ひて、導師にて

供養せさせ給ひけり。その時院に御ものまうでに具せさせ給ふべかりけるとかや。殊にえらびたまひて、おらぬ方の僧なりともよく説きつべきをと、おぼしけむもいとたふとし。こがねの文字をも院女院などはなちたてまつりては、ありがたきことを、おぼろげの御心ざしにはあらざるべし。女宮は一品の宮とておはしましゝは、禧子の内親王とて、賀茂のいつきに立ち給へりし、御なやみにて程なく出で給ひにき。長承二年十月十一日、御とし十二にてかくれさせ給ひにき。いつきの程なくおりさせ給ふためしありとも、まだ本院にもつがせ給はで、かくいでさせ給ふことはいとあさましき事とぞきこえ侍りし。廿七日薨奏とて、このよし内裏に奏すれば、三日は廢朝とて、御殿のみすもおろされ、何事も聲たてゝ奏することなど侍らざりけり。みかどは御いもうとにおはしませば、御服たてまつりなどしけり。紋もなき御冠、繩纓など聞こえて、年中行事の障子のもとにてぞ奉りける。みかどは日の數を月なみのかはりにせさせ給ふなれば、三日御ぶくとぞ聞こえける。次の姫君は、又さきの齋院とて、恂子の内親王と申しゝ、後には綩子とあらためさせ給ひたるとぞきこえさせ給ひしは、大治元年七月二十三日にうまれさせ給ひて、八月に親王の宣旨かぶりたまひき。長承元年六月卅日、いつき出でさせ給ひて、保元三年二月、皇后宮にたゝせ給ふ。上西門院と申すなるべし。永暦二年二月十七日、御ぐしおろさせ給ふと聞こえき。后にたゝせ給ふと聞こえしは、みかどの御母になぞらへ申させ給ふとぞきこえさせ給ふ。六條院の例にやはべらむ。この女院のさきの齋院とてかゝらさきの御はらへせさせ給ひし時、御をぢの太政のおとゞのよみ給へ

る。

「昨日までみたらし川にせしみそぎ丈が浦波たちぞかへたる」

と侍りけるとなむ。秋の事なりけるに、かりごろもおのおの萩、龍たんなどいと珍らしきに、逢坂のせきうち越えて、山のけしきみづうみなどいとおもしろくて、御祓のところには、かたのやうなるかりやに、いがきのあけの色水のみどり見えわきて、心あらむ人はいかなる言のはも、いひとゞめまほしきに、おとゞの御歌たけたかくいとやさしくこそ聞こえはべりしか。

今鏡第七

村上の源氏

うたゝね

藤波の御流れの栄え給ふのみにあらず、みかど一の人の御母方には、近くは源氏の君だちこそよき上達部どもはおはすなれ。堀河のみかどの御母賢子の中宮は、おほとのゝ御子とて参り給へれど、誠は六條の右のおとゞの御女なり。ささきの御事はみかどのついでに申し侍りぬ。そのゆかりのありさま源をたづぬればいとやんごとなくなむ侍る。村上のみかどの御子に中務のみこと申しゝは、六條の宮とも後の中書王とも申す、この御事なり。ふみ作らせ給

ふこと世にすぐれ給へりき。御歌も世々の集どもに見え侍るらむ。その御子に土御門の右のおとゞと申しゝは、始めて源の姓得させ給ひて師房のおとゞと聞こえさせ給ひき。御身のざえも高く、文作らせたまふ方もすぐれ給ひて、野のみかりの歌の序など人の口に侍るなり。又月の歌こそ、心にしみて聞こえ侍りしか。

「有明の月まつ程のうたゝねは山のはのみぞ夢に見えける」。

すきずきしき方のみにあらず、土御門の御日記とて、世の中の鑑となむうけ給はる。みかど一の人の御よそひども、その中にぞ多く侍るなる。御堂の御女は、おほくさゝさ國母にてのみおはしますに、此の殿の北のかたのみこそ、たゞ人はおはしませば、いといとやんごとなし。その御はらに、堀河の左のおとゞ俊房、六條の右のおとゞ顯房と申して、兄おとうと並びたまへりき。堀河殿は、才學高くおはして、文作りたまふことすぐれて聞こえ給ひき。六條殿は、歌よみにぞおはして判など云給ひき。世のおぼえ兄よりもまさり給ひて、大納言の大將、中宮のおほんおやにておはせしに、大臣おきて侍りけるを、白河のみかど、おぼしわづらはせ給ひて、日ごろ過ぎけるに、匡房の中納言に仰せられおはせければ、「堀河の大納言をなさせ給へ」とうちいだして申しければ、みかど仰せられけるは「弟なれども、左大將中宮の御おやにて、此のたびならずは法師にならむといふなり。また上臈ども有りて、われこそなるべけれなどいへば、それも捨てがたきなり」と仰せられければ、「大納言大臣になりはべることはかならずしも一二といふこと侍らず。なるべき人をえりてなされ侍るなり。又國の司歷た

る人いかゞ」など申し侍りければ「菅原のおとゞも讃岐守ぞかし」と仰せられければ、江の帥申しけるは、「博士はべちのことに侍り。又才學高く侍らむ兄を大臣になさせ給はむに、出家するおとうとはよに侍らじ」と申しければ、堀河殿はなり給へりけるとぞ。六條のおとゞは、その後にぞなり給ひし。中宮の御おや、堀河のみかどの御おほぢにて、いとめでたくおはしき。後には大將をば、太政のおとゞの大納言におはせしに譲り申し給ひて、行幸に仕うまつり給へりしこそ、いとめづらかに侍りしか。遲く參り給ひて、道にて車よりおりて、馬にのり給ひしかば、大將殿よりはじめて皆おり給へりしに、盛重といひしが、左衞門の尉なりしと、行利といふ隨身の陣につかうまつりしを、あがり馬にのせて、さきに具せさせたまへりければ、なほ大將にてわたり給ふとぞ見えける。このおとうとのおはいとの、少將におはしける時、隆俊の治部卿御むこにとり申さむとおもひてその時目しひたる相人ありけるに「彼の二人いかゞ相したてまつりたる」と問はれければ、「ともによくおはします。皆大臣にいたり給ふべき人なり」といひけるを、「いづれか世にはおひ給ふべき」と問はれけるに、「おとうとは未廣く、みかど一の人も、出でき給ふべき相おはす」と申しければ、六條殿をとり申したるとぞ。侍りし。其のかひありて、みかど關白もその御末より出でき給へり。雪ふりのみゆきにおそく參り給ひて、「雪見むとしもいそがれぬかな」とよみたまへるこそ、いとやさしく昔の心ち去侍れ。よる女の許にわたり給へりけるに、かねてもなくて、門に車の絕えずたちければ、それを召して出でたまひければ、盛重といひしが、出でさせたまふ道に常はふし

たりければ、かならずおくれ奉ることなかりけるに、ねなかさぶらひと盛重とふたりともに具して、出でたまひけるに、馬に乗れりけるものゝおりざりければ、ねなか人、ともしたるついで松して、うちおとさむと去けるを、猛きものゝふども多く具したりけるが、御車によらむとしけるを、盛重御車のもとにて、「皇后宮の大夫殿のおはしますぞ。過ち仕うまつるな」といひければ、まどひおりて、「皆々まかりのきね」といひければ、過ぎ給ひにけり。次の日の夕暮に、頼治といひし武者のおほいとのへ参りて御門の方にて盛重たづね出だして「よべかしこく御恩かぶりて、過を仕うまつるらむに」とて、かしこまり申しに参りたるなり。「かくとはな申したまひそ」といひけれど、おほい殿に申したりければ、召してみきすゝめなどしたまひけるとぞ。盛重が子盛道といひしは語りける。

堀河の流

堀河の左のおとゞの御子は、太郎にては師頼大納言とておはせし、御母中将実基の君の御むすめなり。文など博く習ひ給ひて、才おはする人にて坐しき。中辨より宰相になり給ひて、ひら宰相にて前の右兵衛の督とて年久しくおはしき。年よりてぞ、中納言大納言などに引籠きて、程なくなり給ひし。近衛のみかど、東宮にたゝせ給ひしかば、母きさきの御ゆかりにて、太夫になり給へりき。歌をぞ口疾くよみ給ひける。早くけさうし給ふ女の百首よみ給ひたらば逢はむといふわりけるに、題をうちより出だしたりけるに従ひて、よひより暁になるほどによみはてたまひたりけるに、女かくれにけるぞいとくちをしかりける。周防の内侍がゆ

かりなりければ、内侍のとがにぞ聞く人申しける。大納言の御子は師能の辨とて、若狹守通宗のむすめのはらにおはしき。その兄弟に師教師光などきこえたまふ、三井寺に證禪已講とて、よき智者おはしける、うせ給ひにけり。師光は小野の宮の大納言能實のうまごにて、小野の宮の侍從など申すにや。大納言の次の御弟も、師時の中納言と申し、その母侍從宰相基平のむすめなり。それも詩などよく作り給ふなるべし。大藏卿匡房と申し、博士の申されけるは、兄には劣り給へりけれど、日記など量りなくかきつめ給ひて、此の世にさばかり多く記せる人なくぞ侍るなる。その文どもはうせ給ひてのち鳥羽の院めして、鳥羽の北殿におかせ給へりけるに、權大夫とかきつけられたる櫃ども、數しらずぞ侍りける。宗茂菅軒などいひしがくさうの上官なりし時は、此の君弟子におはして、車など貸し給へりければ、外記の車は上臈次第にこそたつなるを、中將殿の車とて、牛飼一つに立てゝ、爭ひなどしける。歌よみにもおはして、兄の大納言も、この君も、堀河院の百首などよみ給へり。爲隆宰相は、大辨にて中納言にならむとしけるにも、宰相中將なれども大辨に劣らず、何事もつかへ除目の執筆などもすれば、うれへとゞめなど云給ひける。大方の物の上手にて、鳥羽の御堂の池堀り山造りなど、とりもちてさたし給ふとぞ聞こえ侍りし。ゆゝしくうへをぞ多くもち給へるとうけたまはりし。六七人と持ち給へりけるを、夜毎に皆おはしわたしけるとかや。冬は炭などをもたせて火おこしたる、消えがたには出でつゝ、よもすがらありきたまひて朝いを午時な

どまでせられけるとぞ。さて其のうへども皆申よくて、いひかはしつゝぞおはしける。この中納言の御子は、中宮の大夫師忠のむすめのはらに、師仲中納言とておはする、右衛門の督のいくさおこしたりし折、あづまに流され給ひて歸りのぼりておはすとぞ。この兄ども、少納言大藏卿などきこゆるあまたおはしき。おほいとのゝ御子は、入道中納言師俊とておはしき。大辨の宰相より中納言になりて、治部卿など申しゝ程に、御病によりて、かしらおろし給ひて、たうのもとの入道中納言とぞきこえ給ひし。それも物よく習ひ給ひて、詩など作り給ふ。歌よみにもおはしき。この兄おとうとたち、かやうにおはする、ことわりと申しながらいとありがたくなむ。延喜天暦二代のみかど、かしこき御世におはしますに、ふみ作らせ給ふ方もたへにおはしますに、中務の宮又すぐれ給へりけり。土御門殿、堀河殿あひつぎて、御身のざえ、文つくらせ給ふ方もすぐれ給へるに、土御門殿はすすぐれ、堀河殿は、ふみ作り給ふこと、すぐれておはすとぞきこえ給ひける。この大納言中納言たち、かく仕へ給ひて、六代かくおはする、いと有りがたくやんごとなし。この大納言中納言殿たちの詩も歌も、集どもに多く侍らむ。中納言の御子は、少納言になり給へりし、後は大宮亮とぞきこえける。そのおとうとは寛勝僧都とて、山におはしけるこそ、あめつちといふ女房の、みめよきが生みきこえたりければにや。みめもいとよきやうに、心ばへもいとつきづきしき學生にて、山の探題などいふことも云たまひけるに、あるべかしくいはまほしきさまに、いとめでたくこそおはしけれ。說法よくし給ひけるに、人にすぐれても聞こえ給はざりしかど、ある所にて、阿彌陀佛

釋し給ひしこそ、法文のかぎり玄給へば、聞き玄らぬ人は何とも思ふまじきを、男も女も、身に玄みてたふとがり申して、聞き玄りたるは、かばかりのことなしと思ひあへり。天台大師の經を釋し給ふに、四の法文にて、はじめ如是より經のするまで、句ごとに釋し給へば、その流れを汲まむ人、法をとかむ其のあとを思ふべければとて、はじめには因緣などいひて、さまざまの阿彌陀佛をときて、むかし物がたり說き具しつゝ「何事も我が心より外のこともの やはある。事の心を玄らぬはいとかひなし。朝夕によその寶をかぞふるになむあるべき」など說き給ひし。思ひかけず承りしこそ、世々の罪も滅びぬらむかしとおぼえ侍りしか。

夢のかよひぢ

堀河殿の公達、大臣に成り給はぬぞくちをしき。春宮大夫は一の大納言にて時にあひ給へりしに、成り給ふべかりしに、折ふしあきあふ事なく、えならでうせ給ひにき。若くおはしける時に、御夢に採桑老といふ舞を玄給ふとみて語り給へりけるを、物に心得ぬ人の宰相にて久しくやおはしまさむずらむと合はせたりける、いとあさまし。さいさうといふことは有りとても、さい相とやは心得べき。桑といふ木をとるおきなといふ心とも、其の木をとりて老いたりとゝ云ふにつきてぞ心うべきを、かゝるひがことのあるなり。されば大納言はらだちて のたまひければにやありけむ。さいひける人もとくうせにけり。又大納言殿も誠に宰相にて久しくおはしき。昔九條の右のおとゞの御夢を、あしく合はせたりけむやうなることなり。宰相にて久しくおはせざらましかば大臣にはなり給ひなまし。またおほい殿のいつきを取

り据ゑ給へりしかばにや、「御末のつかさ昇りがたくおはする」と申す人もあるとかや。九條殿の北の方の宮もびんなきことなれど、それはたゞ宮ばかりにおはしき。これはいつきに居たまへる人を、籠めすゑ申したまへりし、たぐひなくや。業平の中將も、夢かうつゝかの事にてやみにけり。道雅の三位も、「ゆふしでかけしいにしへに」などいひて、去のびたることにこそ侍りけれ。これはぬすみ出だして、とりすゑ給へれど、業平の中將にはかはりて、前のなければ、さまでおやまりならずやあらむ。齋宮の女御なども、又いつきのおり給ひてささきになり給へるもおはせずやはある。又大臣までぬしのぼり給ひしかば、末のかたるべきにあらず。おのづからの事なるべし。堀河殿は、僧子も多くおはしき。小野法印、山の座主など聞こえ給ひき。姫君は、富家の入道おとゞの北の方にておはせし、後には御堂の御前などきこえて、御ぐしおろし給へりき。おとうとの姫君は子に去給ひて、御堂をも譲り給へるは、堀河の大納言の子の辨に具し給へりけるとかや。それもさまかへておはするとぞ。又近衛のみかどの御はゝ女院も、左のおとゞの御むすめの生みたてまつり給へると聞こえ給ひき。この堀河殿は、七十になり給ふ御年、御子の堀河の大納言殿の右兵衛の督と申しゝ、父のおとゞの御賀せさせ給ふとて、長治元年去はすの廿日あまり、堀河殿にて、御賀したてまつり給ふときゝ侍りしこそ、むかしのこと聞き侍るやうにおぼえ侍りしか。その殿にまゐりし僧のかたり侍りしは、瑠璃のみくにの佛の、人のたけにおはしますかき奉りてこそ、彼の岸のみのりに、かねの文字に七巻、たゞの文字の御經なゝそぢ、寫したてまつりて、僧綱有職など七人請せ

させ給ひて、供養したてまつらせ給ふ。一家の上達部殿上人、太政のおほいどの、内大臣と申しゝより始めてわたり給ひて、御佛供養の後、舞人樂人など左右の舞ひなどして、後には御あそびせさせ給ふ。御みき聞こえかはしなどして、いひ忘らずめでたく聞きたまへりしが、中の院の大將若君におはしける、十八ばかりにて、笙の笛吹き給ひけるこそ、その日のめづらしく涙もおとしつべきことに侍りけれ。このおとゞよりは、六條大臣殿は、さきにうせ給ひにしかば、その御子の太政のおとゞは、堀河のおとゞに何事も尋ね習ひ給ひて、親子の如くなむおはしける。それにひかれて、ことさんだち皆靡き申し給ひけりとぞきゝ侍りし。

根あはせ

六條の右のおとゞの公達は、まづ堀河のみかどの御母中宮、その御はらに前坊と堀河のみかどゝをのこ宮生みたてまつり給へり。女宮は媞子の内親王と申すは、白河の院の第一の御むすめ、伊勢のいつきにおはしましゝ、中宮うせさせたまひにしかば、出でさせ給ひて、堀河のみかどの姉にて、御母きさきになぞらへて、皇后宮に立たせ給ふ。院號ありて郁芳門院と申しき。寛治七年五月五日、あやめの根合せさせ給ひて、歌合の題、菖蒲、郭公、五月雨、祝、戀ある周防の内侍、戀の歌、

「こひわびてながむるそらのうき雲や我が下もえの煙なるらむ」

とよめりけるを、判者「あはれ仕うまつりたる歌かな」と侍りければ、右歌人かちぬとて、こ

のうた詠じてたちにけるとなむ。二位大納言の宰相におはせしにかはりて、孝善が、「ひくてもたゆくながき根の」とよみとゞめ侍るぞかし。永長元年八月七日、かくれさせ給ひにき。その年おは田樂とて、都にも道もさりあへず、神の社々、この事ひまなかりける、御事あるべくてなど世に申しける。この御ことを、白河の院なげかせ給ふこともおろかなり。これによりて御ぐしおろさせたまへり。あさましなど申すもおろかなり。御めのと子の、まだ若くて廿一とか聞こえしも、法師になり侍りし。かなしさはことわりと申しながらも、わかきそらにいとおはれに、ありがたき心なるべし。日野といふところにすむとぞき、侍りし。次のとしの秋、むかしの御事思ひ出でゝ、そのとものぶの大とこ、

「かなしさに秋はつきぬと思ひしをことしも虫のねこそなかるれ」

とよみて、筑前の御とて、伯の母ときこえしがもとに、つかはしたりければ、筑前かへし、

「虫のねはこの秋しもぞなきまさるわかれのとほくなる心ちして」

と侍りしを、金葉集にはきゝあやまりたるにや、かきたがへられてぞ侍るなる。六條の院に御堂たてさせ給ひて、普おはしましゝやうに、女房さぶらひなど、かはらぬさまに、いまだおかれ侍るめり。御かなしみ、むかしもたぐひあれど、かゝることゝ侍らず。御庄御封などよにおはします樣に、宣おかせ給へれば、すゑずゑのみかどの御時にも、改めさせ給ふことなくて、この比も、さきの齋宮傳へておはしますとぞきこえさせ給ふめる。

ありす川

この中宮の姫宮、二條の大宮とて女院の御おとうとおはしまし、令子内親王とて、齋院になり給ひて、後には鳥羽の院の御母とて皇后宮になり給ひて、大宮にわがらせ給ひにき。いと心にくき宮のうちと聞き侍りしは、侍從大納言三條のおとゞなど、まだ下臈におはせし時、月のあかゝりける夜、さまやつして、宮ばらを云のびて立ち聞きたまひければ、おはせしいりなどしたるも有りけり。この宮にいりたまひければ、西の對の方、云づまりたるけしきにて、八々皆ねたるにやとおぼしかりけるに、奥の方にわざとはなくて、箏のことのつまならし云て、たえだえきこえけり。いとやさしく聞こえけるに、北の方のつまなる局、妻戸たてたりければ、月も見ぬにやとおぼしけるに、うちに源氏よみて「橋こそいみじけれ。葵は云かあり」など聞えけり。臺盤所の方にはさゞれ石まきて、らんごひろふ音など聞えけるをぞ、昔の宮ばらもかくやありけむと侍りける。また古き歌よみ、攝津のごといふ、又六條とて若き女房などありて、折ふしにつけて心にくきごたち多く侍りけり。爲忠といひしが子の、爲業といひしにや、いづれにかありけむ、かの宮による參りて、ごたちとあそびけるに、爲忠國にまかりける程なりけるに、年老いたる聲にて、「八橋と天の橋立といづれまさりて覺えさせ給ひしとたよりに傳へ給へ」などいひけるを、後に、又あるごたち、「かくことづて云給ふ人をば、たれとか云りたまひたる」といひければ、「やつはし、あまのはしだてなど侍りけるに、心え侍りぬ」といひけるを、次の日、「よべ心えたりといはれしこそ、猶そのひとの如くおぼゆる」などいひけるをきゝて、津のごとりもわへず「心えずのことや。八橋などいはむか

らに、われとや心うべき。ながらの橋といはゝこそ、われとはえらめ」といひけるもをかしく。又土御門の齋院と申して積子内親王と申しておはしき。その齋院は常に法の筵などひらかせ給ひて、法文のことなど僧參りあひてたふとき事ども侍りけり。雅兼入道中納言などまゐりつゝ、もてなしきこえ給ひけるとかや。歌なども人々まゐりてよむ折も侍りけり。水のうへの花といふ題を、時の歌よみども參りてよみけるに、女房の歌、とりどりにをかしかりければ、木工頭俊頼も、むしろにつらなりて、「このうたは、園基ならばかたみせんにてぞよく侍らむ」など、とりどりに褒められけるとぞ。其のひとりは、堀河の君とて、顯仲伯のむすめのおはせしうた、

「雪とちる花のえたゆく山水のさえぬや春のえるしなるらむ」。

また、

「春風にきしの櫻の散るまゝにいとゞ咲きそふなみの花かな」。

この外もきゝ侍りしかど忘れにけり。入道治部卿の、「嵐や峰をわたるらむ」とよみ給ふ、そのたびの歌なり。白河の院歌どもめしよせて、御覽じなどせさせ給ひけり。一の院の御むすめなればにや、殊の外にあるべかしくぞ、宮のうち侍りける。女房中腊になりぬれば、みづからさぶらひに物いひなどはせざりけりとぞきこえ侍りし。この齋院かくれさせ給ひてのち、そのあとに堀河の齋院つぎてすみ給ひけるこそ、むかしおぼしいでゝ中の院の入道おとゞよみ給ひける。

「ありすがは同じ流れと思へども昔のかげの見えばこそあらめ」。

紫のゆかり

中宮の御せうとたち、男も僧もさまざまおほくおはしましき。太政大臣雅實のおとゞと申しは、中宮の一つ御はらからにて、六條の右のおとゞの太郎におはしき。その御母治部卿隆俊の中納言のむすめなり。久我のおほきおとゞと申しき。いと御身のざえなどはおはせざりしかど、世に重く思はれたる人にぞおはせし。父おとゞわかまゝなる御心にて、ひがひがしきことも云たまひけるにも、このおとゞ參り給ひければとゞまりたまひけり。白河の院も耻ぢさせ給へりけるとこそ聞え侍りしか。醍醐より僧正の申さるゝことなど侍りけるを、此のおとゞに仰せられ合はせければ、「知る所など幾ばくも侍らねば、さぶらふ者どもに申しつけて、云もづかさなどいふことは、え知り給はぬことになむ」など侍りければ「いと耻かしくあるかな」と仰せられけり。堀河のみかどの御時、子の少將とて、入道右のおとゞ、石清水の舞人云給ふべかりけるに、中のみかどの內のおとゞ少將とておはするは上臈なりけれど、一の舞は中の院ぞ仰せられむずらむとおぼしけるに、知足院の大殿の關白におはするに、みかども憚りて宗能の一の舞云給へりければ、久我のおとゞ聞きつけ給ひて、この少將をば呼びとゞめて腹だちてこもり給ひければ、みかどもいたませ給ひて、心ゆるさむとて加階を給はせたりければ、然あらば、出でありかざらむも便なしとて、喜び申しなどせられけるに、關白どの對面云たまひて、「事のついでなれば申すぞ。大納には、おとゞ尊者に申さむずるなり。

其の由きこえ去るべきなり」などありて、頼みておはしける程に、その日になりて、見せに遣はしたりければ、御物忌にて、門さしておはしければ、俊明の大納言をぞ、尊者には呼び給ひける。四條の宮は、「むげに下りたる世かな」とて、泣かせ給ひけるとかや。臨時の祭の一の舞、少將の去給はぬ、やすからぬ心にて、かくたがへ給ふなりけり。その入道右のおとゞ、宰相の中將と申しゝ時、實能のおとゞの、三位の中將とておはせし、こえて中納言になり給ひけるにも、太政のおとゞ、院をうらみ申し給ふと聞かせ給ひて、「中宮のせうとにて、うちのせさせ給ふ、すぢなきことかな」と仰せられながら、長忠の宰相、左大辨にて中納言になりたりけるを、「子を辨になさむと申しけるものを」とて、中納言にて七八日ばかりやありけむ、長忠をば大藏卿になして、子の能忠をば辨になしてぞ、中の院の宰相中將は、中納言になりたまふと承はりし。待賢門院中宮にたゝせ給ひけるにや、白河の院、盛重とてありしを御使にて、太政のおとゞに、「何事も、思ふ事のかなはぬはなきに、上臈女房なむ心にかなはぬことはゐるを、思ひかけず、上臈女房をまうけたることなむ侍る」と仰せられたりければ、いかなる人の事にかと問ひ給ふに、ほか腹の姫君のおはしける御事なりけり。それを聞き給ひて、御後見呼びて、「その姫君のもとへ、さたしやる事どもは怠らぬか」と問ひ給へば、「更に怠り侍らず」と申すに、「今はそのさたあるまじ」とありければ、御使も後見も、いと思はずに思へりけり。「御かへりいかゞ」と申しければ、「うけ給はりぬ」とばかり申し給ひけり。院はともかくものたまはざりけりとなむ。かやうに院にも關白にも憚り給はぬ人におはしけり。御

心のあてなるあまりに、物の數もこまかに知り給はざりけるにや、をさめ殿する侍ひ人のもとに「きぬせさせにやれ」とありければ、「二つが料にはふた匹なむ遣しつる」と申しければ、「一つをこそ二匹にてはすれ」とのたまひて、驚き給ひけるに、内匠のすけなにがしといふに問ひ給ひければ、同じさまに申しけるにこそ、「さはえ知らざりけるにこそ」と折れ給ひけれ。これをいへ人、語りあひけるをきゝて、雅延といふ近衛舍人は、「いづれの國の絹とかを、こまかにきりなどせさせ給ふ所もおはしますものを」などいひける、いと耻かしくこそ。このおほいまうちぎみ、おこりでゝちわづらひ給ひけるに、白河の院より平等院の僧正をつかはして、祈らせ給ひけるに、をこたりたる布施に馬をひき給ひける、大方いひしらぬ悪馬になむ侍りければ、院きこしめして、「われこそ布施も得べけれ」と盛重といひしを遣はしてゆづかの、去もひとひねりしたるを取りいでゝ、漆のきらめきたるさして、すりまはして、錦のゆづかとりすてゝ、みちのくに紙してひき巻きて、錦の袋にも入れず、唯みちのくに紙につゝみて、たてまつられたりければ、「いと珍らしきものなり」とたちかへり仰せられけるとぞきゝ侍りし。

にひまくら

このおとゞの御子は、大納言顯通と申して、父おとゞよりもさきにうせ給ひにき。其の御子は今の内大臣雅通の大將と申すなるべし。此の大將の御母は、よしとしの治部卿のむすめに

やおはすらむ。又此の御兄に、つのかみ廣綱のむすめのはらに、山の座主明雲權僧正とて、いまにおはすなるこそ、世の末には、かやうなる天台座主はおはしがたく承れ。我が道の法文をも深く學び給ふ。かたがた世にたふとくて、御心ばへも重くおはするにや、山のうへこぞりてもち奉りたるとかや。うちつゞきたもつ人、ありがたくきこえ給ふに、大衆など鐘ならして、起る事だに侍らぬとかや。又太政のおとゞの御子にては、右大臣雅定と申して、さきにも舞人のこと申し侍る、中の院のおとゞとておはしき。御母は加賀の兵衛とかいひしがいもうとにて、下らう女房におはせしかど、兄の大納言よりもおぼえもおはしもてなし申し給ひき。此のおとゞは、ざえもおはして、公事などもよくつかへ給ひけり。笙の笛などすぐれ給へりける、時元とて侍りしを、少しもたかへずうつし給へるとぞ。まじりまろといふ笛をも傳へ給へり。まじりまろとはからの竹、やまとの竹の中に、すぐれたるねなるを、選び作りたるとなむ。まじりまろといふ笙の笛は二つぞ侍るなる。時元が兄にて時忠といひしも作り傳へ侍るなり。むらといひて、稻荷祭などいふ祭わたるもの〳〵、吹きてわたりける笛の、響き殊なる竹のまじりてきこえ侍りければ、棧敷にて、時忠よびよせ、「かゝるはれには、同じくはかやうの笛をこそ吹かめ」とて我が笛にとりかへて、「我をば見知りたるらむ。後にとりかへむ」といひければ、むらのをのこ喜びて、「皆見知り奉れり」とて、とりかへたりけるを、すぐれたる響きありける竹をぬきかへて、えならず調べたてゝたびたりければ、喜びてかへしえてなむ侍りける。そのまじりまろは、時忠が子の時秀といひしが傳へ侍りしを、子も侍らざ

りしかば、此の比はたれか傳へ侍らむ。時忠は刑部の丞義光といひし源氏のむさの、好み侍りしにをしへて、その笛を元よりとりこめて侍りけるほどに、義光わづまの方へまかりけるに、時忠もいかでか、年ごろのほいにおくり申さゞらむとて、はるばると行きけるを、この笛のことを思ふにやとや心得けむ。我が身はいかでも有りなむ。道の人にて、この笛をいかで傳へざらむとて、返したびたりければ、それよりこそ、暇請ひてかへりのぼりにけれ。其の笛をかくたしなみたれども、時元若かりける時、武能といひてえならず笛調ぶる道のものありけるが、年たけてよる道たどたどしきに、時元手をひきつゝまかりければ、いとうれしく思ひて、えならず調ぶるやうどもを傳へて侍りければにや、いと殊なるねある笛になむ侍るなる。この右のおとゞ、かゝる傳へおはするのみにもあらず、家の事にて胡飲酒まひ給ふと、いみじく其の道得給ひて、心殊におはしける。其の舞も、資忠とてありし舞人の、政連といひしと挑みて、祇園の會にはやしの日とか、殺されにければ、忠方近方などいひしもまだいといはけなくて、習ひも傳へねば、太政のおとゞの、忠方には教へ給へるぞかし。然あれども、このおほいどのばかりはえ傳へざるべし。政連は出雲に流されて、彼の國の司のくだりたるにも教へ、又子の友貞とかいふも、京へのぼりて顯仲とかいひし中納言にも、教へなどすと聞きしかども、此のおほいどのゝ傳へ給へるばかりは、いかでか侍らむ。兄の忠方は胡飲酒を傳へて、弟の近方は採桑老を天王寺の公貞といひしに傳へて、此の比はその子どもの兄弟筋別れて舞ひ侍るとなむ。忠方近忠、落蹲といふ舞ぎ侍りしは、おとうとは兄のかたを踏まぬ

さまに舞ひ侍りしは、めづらしきことに侍りしを、子どもはいかゞ侍るらむとゆかしくこの右のおとゞは御心ばへなどすなほにて、いとらうある人にておはしける上に、後の世の事などおぼしとりたる心にや、わづらはしきこともおはせで、いとをかしき人にぞおはせし。まだ若くおはせし比にや、伊豫の御といふ女をかたらひ給ひけるに、物のたまひ絶えてほど經ぬほどに、山城の前の司なる人になれぬときゝて、やり給へりける御歌こそ、いとらうありて、をかしくきゝ侍りしか。

「誠にやみとせもまたで山城の伏見の里にこひ枕する」

と侍りける。むかし物語見る心ちして、いとやさしくこそうけ給はりしか。おほかた歌よみにおはしき。殿上人におはせし時、石清水の臨時の祭の使ゐたまへりけるに、その宮にて御神樂など果てゝ、まかりいで給ひける程に、松のこずゑに郭公のなきけるを聞きたまひて、後頼の君の、陪從におはしけるに、「むくのかうの殿、これはきゝたまふや」と侍りければ、「思ひかけぬ春なけばこそはべめれ」と心とくこたへたまひけるこそ、いとしもなき歌よみ給ひたらむには遙に優りて聞こえける。四條中納言、この料によみおき給ひけるにやとさへおぼえて、又きゝ給ひておどろかし給ふもいうにこそ侍りけれ。かやうにおはせむ人、いとありがたく侍り。出家など云給ひしこそ、いと清げにめでたくうけ給はりしか。べちの御やまひなどもなくて、たゞこの世はかくて、後の世の御ためとて、右大臣左大將かへしたてまつりて、かはり奉らむなどいふ御設けもなくて、中の院にてかしらおろして、こもりゐたま

べりしこそ、いと心にくゝ侍りしか。御子もおはせねば、兄の御子、今の内のおとゞ、又雅衆の入道中納言の御子、定房の大納言、養ひ給へるかひありて、位高くおのおのなり給へり。御能どもをつぎ給はぬぞくちをしく侍る。内のおとゞの御子も少将とてふたりおはすなり。

武藏野の草

六條の右のおとゞは、大方きんだちあまたおはしき。太政のおとゞにつぎ奉りては、大納言雅俊とておはしき。御母は美濃守良任ときこえしむすめの腹なり。京極に九體の丈六つくり給へり。その御子は腹々にをとこ女あまたおはしき。伊豫守爲家のぬしのむすめのはらに、神祇の伯顯重と申しき。もとはさきの少將肥前のすけにてぞ久しくおはせし。そのおなじはらに四位の侍從顯親と申して、後は右京の權大夫、播磨守などきこえき。同じ御はらに上野守顯俊とておはしき。中宮の御おほぢにやおはすらむ。憲俊の中將ときこえし。のちには大貳になりたまへりき。百良と御わらは名きこえ給ひき。又摩尼ぎみときこえ給ひし、左馬權頭など申しき。此の外にも、上野、越中などになり給へる聞こえき。又僧子も多くおはするべし。大納言の同じ御はらに、中納言國信と申しておはしき。堀河の院の御をぢの中に殊に親しくさぶらひ給ひけるとぞきこえ侍りし。歌よみにおはして、百首の歌人にもおはすめり。この中納言の姫君、おほい君は近くおはしまし、攝政殿の御母、二位と申すなるべし。次には入道どのにさぶらひ給ひて、さりがたき人におはすなり。第三の君は、今の殿の御母におはします。三位のくらゐ得給へるなるべし。うちつゞき二人の一の人の御おほぢにていと

めでたき御末なり。この中納言の御子に、四位の少將顯國とておはしき。其の母はさきの伊豫守泰仲のむすめと聞こえき。その少將、いとよき人にて歌などよくよみたまひき。とくうせたまひにき。少將の一つはらの弟にやおはしけむ。備前前司、修理の權大夫、越後守などきこえ給ひき。又六條殿の御子に、顯仲の伯と聞こえたまふ、大納言中納言などの兄にやおはしけむ。其の母は肥前守定成のむすめの腹にやおはすらむ。歌よみ、笙の笛の上手におはしけり。公里といひしが、調子すぐれて傳へたりけるを、うつし習ひ給へりけるとぞ。その御子、淡路守宮内大輔など聞こえき。覺豪法印とて、法性寺殿の佛の如くにたのませ給へるおはしき。僧子もあまたおはするなるべし。女子は堀河の君、兵衛の君などきこえ給ひて、皆歌よみにおはすと聞こえ給ひし。姉君はもとは前の齋院の六條と申しけるにや。金葉集に、

「露玄げき野べにならびてきりぎりす我が手枕の下に鳴くなり」

とよみたまへるなるべし。堀河とは後に申しけるなるべし。かやうなる女歌よみは、世にいでき給はむと難く侍るべし。またやまもゝの大納言顯雅とて、六條のおほい殿の御子おはしき。その末いとおはせぬなるべし。御むすめぞ、鳥羽の女院の皇后宮の時、みくしげどのとておはせし。女院の御せうとの肥後の前司ときこえしは、大納言のむこにおはせしかばなるべし。その大納言の御車の紋こそ、きらゝかに遠玄ろく侍りけれ。大かたばみの古き繪に弘高金岡などかきたりけるにや、それを見てせられけるとぞ。今は乘り給ふ人もおはせずやあらむ。物などかき給ふこともおはせざりけるにや、行尊僧正の許にやり給へりけるふみの上書

には「きんざうはうとうゐんの僧正の御坊に」とぞありける。かんななら ば、きんざうなくてもあるべけれど、えかき給はぬ徐りにやありけむ、言のはもえ聞え給はざりけり。唯車をぞなべてよりよく玄たてゝ、牛雑色清げにてありき給ひける。車などよくするは、まさなきことゝて、はげあやしくなれども、俄にかきするたるこそ、然るべき人はさもすると申すこともあるべし。これも亦一つのやうにて、つやゝかに玄給ひけるにこそ。風などの重くおはしけるにや、ひがことぞ常に玄たまひける。雨のふるに「車ひき入れよ」といはむとては「車ふる、時雨さしいれよ」と侍りければ、車のさまざまそらより降らむ、いと恐ろしかるべしなど思ひわへりける。かやうのことを堀河の院きこしめして「ひがことこそふびんなれ。祈りはせぬか」と仰せられければ、御返事申されけるほどに、鼠の走りわたりければ、「されば等身の鼠作らせて候ふ」と申されければ、「おほ方いふにも足らず」となむ仰せられける。これは信濃守伊綱の女のはらにおはするなるべし。同じはらに信雅のみちのくの守とておはしき。加賀守家定とて、ひさしくおはせしが、後にみちのくにはなり給へりしなり。その子は成雅の君とて、知足院の入道おとゞ、寵し給ふ人におはすと聞こえき。後には近江の中将ときこえし程に、都の亂れ侍りしをり、左大臣殿のゆかりに法師になりて、越の方に流され給ふと聞こえし、歸りのぼり給へるなるべし。その成雅の中将の兄にか弟かにて、房覺僧正とて三井寺に驗者おはすとぞきこえ給ふ。又六條殿の御子に、因幡守惟綱のむすめの内侍のはらに、雅兼の治部卿と申す中納言おはしき。才學すぐれ給ひ、公事につかへ給ふことも、昔もあ

り難き人になむおはしける。詩つくり、歌よみにおはしき。高くもいたりたまふべかりしを、御やまひにより出家し給ひて久しくおはしき。鳥羽の院大事仰せられ合はせむとて、常は召しいで、對面せさせ給ふ折ども侍りけり。この入道中納言のきんだちぞ、この御流れには、上達部などにてもおはまた聞こえ給ふ。右中辨雅綱と聞こえ給ひし、よく仕へ給ふとて、四位の少將などに珍らしくなりなど云給へりし。とくうせ給ひにき。その御おとうとに、能俊大納言の女の御はらに、當時中納言雅頼と聞こえ給ふこそ、入道治部卿の御子にはふみなど傳へ給ふらめ。家をつぎ給へる人にこそ。同じ御はらに、その次に、大納言と申すは、入道右大臣の御子にし給ひて、高く昇り給へるなるべし。その御弟、四位の少將通能と申すなるは琴ひき給ふとぞきこえ給ふ。清暑堂の御神樂にも、ひき給ひけるとなむ。師能の辨とておはせし、養ひ申し給へると聞き侍りし、これにやおはすらむ。六條のおはいどのゝきんだちなどの僧も多くおはすれど、さのみ申しつくしがたし。山に相覺僧都とて大原に住みたまふおはしき、醍醐には大僧正定海とて、讃岐のみかどの護持僧におはしき。ならには山科でらの隆覺僧正、東大寺の覺樹僧都と申しゝは、東南院ときこえ給ひにき。皆やんごとなき學生におはしき。又覺雅僧都とてもおはしき。歌よみにぞおはせし。末の世の僧などさやうによまむはありがたくや侍らむ。白河の院のいとしもなくおぼしめしたる人にておはしけるに、俊頼のきみ金葉集えらびて奉りたりける始めに貫之、「春立つことをかすがのゝ」といふ歌、そのつきに覺雅法師とて入り給へりけるを、「貫之もめでたしといひながら、三代集にも漏れきて

おもりふりたり。覚雅法師も、げにもとものゝきおぼえず」など仰せられければ、ふるき上手のみとりいれて、次のたび奉りければ、「これもげにともおぼえず」と仰せられければ、又作りなはして、源重之を始めに入れたるをぞとゞめさせ給ひけるは、かくれて世にもひろまらん、その内供の一つ腹にや、はたの御はらにや、治部大輔雅光と聞こえ給ひし歌よみおはしき。人に知られたる歌多くよみ給へりし人ぞかし。「あふまでは思ひもよらず」、又「身をうぢ川の橋柱」などこそ侍るめり。その御子には、寛寛法印とて山におはす。六條殿の御子は、又をとこも丹波の前司、和泉の前司など申しておはしき、はかばかしきすぢもおはせぬなるべし。

もしほの烟

二條のみかどの御時近くさぶらひ給ひて、かうの君とかきこえ給ひしは、殊の外にときめきなど申すにや、よくもえうけ給はり定めざりき。それこそは、六條殿の御子の季房の丹波守のきさき、かたがたうちつゞき多くきこえ給ひしに、御心のはなにて一時のみ盛りすくなく聞こえしに、これぞときはに聞こえ給ひて、家をさへに作りて賜はり、世にもてあつかふ程

にきこえ給ひて、みかどの御なやみにさへ科おひ給ひしぞかし。御めのとの大納言の三位などもも「いたくな參り給ひそ」など侍りけるにや、ある折は常にも侍ひたまはずなどありけるとかや。かつは御覺えの事など祈りすぐし給へる方も聞こえけるにや、かつは聞きにくゝも聞こえけるとぞ。重らせたまひける程に「年若き人なればおはしまさゞらむにはいかにもあらむずらむ。御消息どもも返し參らせよ」とありければ、なくなくとりつかねて參らせければ、信保などいふ人うけ給はりて、かきあつめさせたまへる、もしほのけぶりとなりけむもいかに悲しくおぼしけむ。御ぐしのたけにあまり給へりけるも、そぎおろさばやとぞ聞こえけれど、心づよき事かたくて月日へけるほどに、御心ならずもやありけむ、昔にはあらぬことゞもいできて、若き上達部の時にあひたる所にこそ、むかへられ給ひてときこえ侍るめれ。めしかへさせ給ひけむ。やんごとなきみづくきのあとも、今やおぼしわはすらむ。いとかしこそ。

六條のおとゞ、いとあさましく、末廣くおはします。昔よりふぢなみの流れこそ、みかどの御おほぢにてはうちつゞき給へるに、堀河の院の御おほぢに、珍らしくかく末さへ廣ごらせ給へる一の人の御おほぢにうちつゞきておはしますめり。六條殿の御むすめは、堀河の院の御時、承香殿と申しけるは女御の宣旨などはなかりけるにや、醍醐におはすと聞こえし、近くうせ給ひにき。堀河殿、六條どの丶御おとうとに、中宮大夫師忠の大納言おはしき。その御母は、堀河の頼宗の右のおとゞの御女なり。この大納言の御子は左馬の頭師澄とて、千日の講

久しく行ひ給ひて、後は大藏卿と申しき。その御おとうとは師親の四位の侍從など申しておはしき。又大納言の御子には、仁和寺の大僧正寛遍と申すおはしき。備中守まさなかの女の腹にやおはしけむ。高松の院の中宮とて、御ぐしおろさせ給ひし、戒の師におはしけり。東寺の長者にて近くうせ給ひにけり。中宮の大夫の御弟廣綱とて坐しき。四位までやのぼり給ひけむ、攝津守など申しゝにや。また堀河殿などの同じはらにやおはしけむ、仁覺大僧正と申しゝ山の座主おはしき。それは中宮の大夫の兄にやおはしけむ。又ことはらにやましなでらの寶覺僧都など申しておはしき。莊嚴院の僧都と申しゝなるべし。

今鏡第八

みこたち

源氏のみやすどころ

みかどの御おほぢにはおはせねど、東宮や宮たちの御母におはせしは、後三條の院の女御にて、侍從の宰相基平の御女こそおはせしか。その宰相は小一條の院の御子におはしき。その源氏の御息所、御名は基子女御とぞ申しゝ。その御せうとにては春宮の大夫季宗、大藏卿行宗など申しておはしき。みな三位のくらゐにぞおはせし。大藏卿は八十ばかりまでおはせしかば、近くまで聞え給ひき。歌よみにおはしき。ふたりながらからの文なども作り給ふとぞ

き、侍りし。良頼の中納言のむすめの腹のきんだちなり。女御も同じ御はらからにおはす。又そのはらに平等院の僧正行尊とて、三井寺におはせしこそ、名高き驗者にておはせしか。少阿闍梨など申しける折より大峯葛城はさることにて、遠き國々山々など久しく行ひたまひて、白河の院鳥羽の院うちつゞき護持僧におはしき。仁和寺の女院の女御まゐりにや侍りけむ、御ものゝけ其の夜になりておそらせ給ひて、俄に大事におはしましけるに、この僧正祈り申し給ひければ、程なくをこたらせ給ひて、御車にたてまつりて、出でさせ給ひにけるあとに、ものつきにものうたせてゐさせ給へりけるこそ、いとめでたく侍りけれと傳へうけ給はりしか。僧正歌よみにおはして、代々の集どもにも多くいりたまへるとこそきゝ侍れ。筆のいはやにて、

「草のいほを何露けしと思ひけむもらぬいはやも袖はぬれけり」

などよみ給へり。傳へきく人の袖さへ去ぼりつべくなむきこえ侍る。大峯にて後冷泉の院うせさせ給ひて、世のうきことなど思ひみだれてこもりゐて侍りけるに、後三條の院くらゐに即かせ給ひてのち、七月七日まゐるべきよし仰せられければ、よめる、

「もろともにおはれと思へ山ざくら花よりほかに去る人もなし」

などよみ給へり。歌よまざらむはほいなかるべき事なるべし。いとゞ御心もすみまさり給ひけむかし。手かきにもおはして、かなの手本など世にとゞめ侍るなり。ことはらばらにも、勘修寺僧正、光明山の僧都など申しておはしき。その女御の御はらに、御子あまたおはしき。

東宮と申して、延久三年二月に生まれ給ひて、同四年十二月に御年ふたつと申しゝ、東宮にたち給ひき。永保元年八月に御元服せさせ給ふ。應徳二年十一月八日、十五におはしましゝに、かくれさせ給ひにき。平等院の僧正は女御の御せうとなれば、東宮の御忌にこもり給ひて、御はてすぎて、八々ちりけるに、常陸のめのとおくり給ふときこえ侍りし、

「おもひきや春のみやびとなのみして花よりさきに散らむものとは」

とよみ給ひたりける。返し御めのと、

「花よりもちりぢりになる身を去らでちとせの春とたのみつるかな」

とぞきゝ侍りし。これは白河の院の異はらの御おとうと、後三條の院の第二の御子なり。東宮とおなじはらに第三の御子おはしき。輔仁親王と申しき。延久五年正月に生まれ給へり。承保二年十二月に親王の宣旨かぶり給ふ。この御子はざえおはして詩などつくり給ふこと、むかしの中務の宮などのやうにおはしき。歌よみたまふこともすぐれ給へりき。圓宗寺の花を見たまひて、

「植ゑおきし君もなき世にとしへたる花や我が身のたぐひなるらむ」

とよみ給へるこそいとあはれにきこえ侍りしか。かやうの御歌ども、むくのかみの選びてたてまつれる金葉集に、輔仁のみことかきたりければ、白河の院は、「いかにこゝに見むほど、かくはかきたるぞ」と仰せられければ、三の宮とぞかきたてまつれる。御中らひはよくもおはしまさゞりしかども、御おとうとなればなるべし。詩などは數去らずめでたく侍るなり。

「よろこびもなくうれへもなし世上の心」とかや作り給へりけるを、中御堂と申しておはせしがのたまひけるは、「うれへこそあれ」とのたまはせけれど、位には必しもみかどの御子なれどつぎ給ふことならねば、もの乞り給へる人はなげきとおぼすべからず。かの仁和寺のみやの、利口にこそあれ。何事かは御のぞみもあらむな。

花のあるじ

三の宮の御子は、中宮の大夫師忠の大納言の御女のはらに、花園の左のおとゞとておはせしこそ、光る源氏などもかゝる人をこそ申さまほしくおぼえ給へしか。まだ幼くおはせし程は若宮と申しゝに、御能も御みめも然るべき事と見えて、人にもすぐれ給ひて、常にひきもの、ふき物などせさせ給ひ、又詩つくり歌などよませ給ひけるに、庭の櫻盛りなりける頃、濃き紫の御指貫に直衣すがたいとをかしげにて、われもよませ給ひ人にもよませさせ給ふとて、

「をしと思ふ花のあるじを置きながら我がもの顔にちらす風かな」

とよみ給ひたりければ、父の宮見たまひて、「まろを置きながら、花のあるじとは、わか宮はよみ給ふか」などあいし申し給ひけるとぞ人のかたり侍りし。御とし十三になり給ひし時、うひかぶりせさせ給ひしは、白河の院の御子に玄申させ給ひて、院にて基隆の三位の、播磨守なりし、初元結ゑたてまつり、右のおとゞとて久我のおとゞおはせし、御かうぶりせさせたてまつり給ひけり。御みめの清らかさ、おとなのやうにいつしかおはして、見たてまつる人、よろこびの涙もこぼしつべくなむありける。元永二年にや侍りけむ、仲の秋のころ、御と

し十七とや申しけむ、始めて源氏の御姓たまはりて御名は有仁と聞こえき。やがてその日、三位の中將になり給ひて、そのとしの十二月のころ、中納言になり給ひて、やがて中納言の中將と聞こえき。むかしのみかどの御子、一の人の公達などおはすれど、かく四位五位なども聞こえ給はで、はじめて三位の中將になり給ふ、年のうちに中納言の中將などはいとありがたくや侍らむ。又その次の年、保安元年にや侍りけむ、大納言になり給ひて、年をならべて右近の大將かけたまひき。世の人、宮の大將など申して、みゆき見る人はこれをなむ見ものにしあへることに侍りし。白河の花見の御幸とて侍りし和歌の序は、この大將殿かきたまへりけるをば、世こぞりてほめきこえ侍りき。

「低枝折リテサヽゲモタレバ、紅蠟ノ色手ニミテリ。落花ヲフミテ佇立スレバ、紫麝ノ氣衣ニ薫ズ」

などかき給へりける。その人のをたまへることゝおぼえて、なつかしう優に侍りけるとぞ。御歌もおぼえ侍る。

「かげきよき花のかゞみと見ゆるかなのどかにすめる白川の水」

とぞきゝ侍りし。管絃はいづれも玄給ひけるに、御びは笙のふえぞ御あそびにはきこえ給ひし。すぐれておはしけるなるべし。御手もよくかき給ひて、色紙形、てらでらの額などかきたまへりき。中納言になり給ひし折にや、三の御子かくれ給ひしに、法皇の御子とて御服なども玄給はざりけるとかや。又うすくてやおはしけむ。院うせさせ給ひしにぞ色こく染め給へ

りける。まだつかさなども聞こえ給はざりし程は、常に法皇の御車の左りにぞのり給ひて、みゆきなどにもおはしける。さやうの御つゞきをおぼし出だしけるにや、院の御忌のほど參り給ひて有りける時、南おもての方にひとりおはして、さめざめと泣き給ひて、御手左て涙をふりすてつゝおはしける、ものゝはざまよりのぞきてあはれなりしと人の語り侍りし。實能のおとゞは北の方のせうとにおはして、朝夕なれあそびきこえ給ひければ、左兵衛の督など申しけるほどにや、五月五日大將殿、

「あやめ草ねたくも君がとはぬかなけふは心にかゝれと思ふに」

など心やりたまへるも、いとなつかしく。この大將殿は、殊の外に衣紋をぞ好み給ひて、上のきぬなどのながさ短さなどの程など、こまかにしたゝめ給ひて、その道にすぐれたまへりける。大方むかしはかやうのことも左らで、指貫もなかふみて、烏帽子もこはく塗ることもなかりけるなるべし。此の頃こそ、さびえぼうし、きらめき烏帽子など、をりをりかはりて侍るめれ。白河の院は、御裝束まゐる人などおのづから引きつくろひなど左參らせければ、さいなみ給ひけるときこえ侍りし。いかに變はりたる世にかあらむ。鳥羽の院、この花園のおとゞ、おほかたも御みめとりどりに、姿もえもいはずおはします上に、こまかにさせさせて、世のさがになりて、肩あて腰あて、烏帽子とゞめ、かぶりとゞめなどせぬ人なし。又せでも叶ふべき樣もなし。かうぶり烏帽子の左りは雲を穿ちたればさらずは落ちぬべきなるべし。時に從へばにや此の世に見るには、袖のかゝり袴のきはなどつくろひたてたるはつきづきし

く、うちとけたるはかひなくなむ見ゆる。衣紋の雑色などいひて、蔵人になれりしもこの御家の人なり。上の御せうとの君だち、若殿上人ども絶えず参りつゝ、遊びあはれたるはさることにて、百大夫と世にはつけて、かげぼしなどの如くあさ夕馴れ仕うまつる。吹きもの、引きものせぬは少くて、外より参らねどうちの人にて御遊び絶ゆることなく、伊賀の大夫、六條の大夫などいふすぐれたる人どもあり。歌よみ、詩つくりも、かやうの人ども数知らず。越後のめのと、小大進などいひて、名高き女歌よみ、家の女房にてあるに、公達まゐりては、くさり連歌などいふことつねにせらるゝに、三條の内のおとゞの、まだ四位の少将などの程にや、

「ふきぞわづらふ志づのさゝやを」

と云給ひたりけるに、中務の少輔實重といふもの、常にかやうのことにめし出ださるゝ者にて、

「月はもれ時雨は止れと思ふには」

とつけたりければ「いとよくつけたり」などかんじあひ給ひける。又ある時、

「奈良のみやこをおもひこそやれ」

とはべりけるに、大将殿、

「やへ櫻秋のもみぢやいかならむ」

とつけさせ給ひけるに、越後のめのと、

「ゑぐるゝたびに色やかさなる」

とつけたりけるも、後までほめあはれ侍りけり。かやうなること多く侍りけり。その越後は、「さこそはかりの人はつらけれ」といふうたなどこそ、やさしくよみて侍りけれ。かやうなること數ゑらずこそきこえ侍りしか。

ふしゑば

大將殿年若くおはして、何事もすぐれたる人にて、御心ばへもあてにおはしき。昔はかゝる人もやおはしけむ。この世にはいとめづらかに、かくわざと物語などに作りいだしたらむやうにおはすれば、やさしくすきずきしき事多くて、これかれ袖よりいろいろのうすやうにかきたる文のひき結びたるが、なつかしき香したる、二つ三つばかりづゝ取り出だして、常にたてまつりなどすれば、これかれ見給ひて、あるは歌よみ、色好む君だちなどに見せあはせ給ひて、この手はまさりたり、歌などもとりどりにいひわたれり。あるは見せ給はぬもあるべし。また兵衛のかみや少將たちなど參り給へば、かたみに女のことなどいひあはせつゝ、雨夜の ゑづかなるにも語らひ給ふ折もあるべし。月あかき夜などは、車にて御隨身ひとりふたりばかり、何大夫などいふ人ともにかはるがはるかちよりあゆみ、御車に參りかはりつゝ、ふるき宮ばら、あるは色好む所々にわたり給ひつゝ、人にうちまぎれて遊びたまふに、びは笙のふえなどは人もきゝゑりなむとて、ことひき、笛などぞゑ給ひける。ある折は歌よむ御だちまうでかよひける中に、ほいなかりけるにや、女、

「かねてより思ひしものをふし去ばのこるばかりなる歎きせむとは」

とて奉りたりければ、やがてふし去ばとつけ給ひて、折ふしには音づれ奉りければ、今宵はふし去ば音すらむものをなどあるに、すぐさず歌よみて奉りなどして、いたきものとて常に申しかはす女ありけり。土御門のさきのいつきの御もとに中將の御とかいひけるものとかや。北の方は手かき歌よみにおはして、いとゝいうなる御中らひになむありける。あまりほかにやおはしけむと聞こえしは、鳥羽の院くらゐの御時に、大將殿菊をほりにやりて奉り給ひけるに、うすやうにかきたる文のむすびつけて見えければ、みかど御覽じつけて、「かれは何ぞ。取りて參れ」と藏人に仰せられけるに、おほい殿はふと心えて色もかはりて、うつぶしめになり給へりけるほどに、みかどひろげて御覽じければ、

「こゝのへにうつろひぬとも菊の花もとのまがきをわすれざらなむ」

とぞありける。さきいの御姉におはすれば、ときどき參りかよひ給ふにつけつゝ、去のびてきこえ給ふことなどもおはしけるなるべし。昔のみかどの御世にもかやうなる御ことは聞こえて、なはなはなど仰せられければ、餘りなることも侍りけるやうに、これもおはしけるにや。殿の色好み給ふなど、大方うへはのたまはせず、へだてもなくて文ども取り入れて歌よむ女房にかへしせさせなどし、上のめのとの車にてぞ女おくり迎へなど去たまひける。殿もこゝかしこにおりき給ひける、家の女房どもゝをとこの許よりえたる文をも、その北の方に申しあはせて、歌の返しなど去給ひける。小大進などいふ色好みの、をとこいもとより得

たる歌とて申しおはせける、あまた聞こえしかど、忘れておぼえ侍らず。按察の中納言とかいふ人のおはやうなるも、歌などつかはしけるかへりごとに、小大進、

「夏山のしげみが下の思ひ草露をらざりつこゝろかくとは」

などきゝはべりし。口とく歌などをかしくよみて、和泉式部などいひしものゝやうにぞ侍りし。伊豫の御とて侍りしも、中の院の大將の若くおはせしほどに、ものなどのたまひて、後に山城とかいふ人に物いふときゝ給ひて、さきにも申し侍りつる、「みとせもまねで」といふ歌よみ給へりしぞかし。かやうに色好みたまへるごたち多くこそきこえ侍りしか。

月のかくるゝ山の端

このおとゞの御子のおはせぬぞくちをしけれど、かへりてはおはれなる方もありて、なごりをしく侍りて、我ものたまはせけるは、「いとしもなき子などのあらむはいとはいなかるべし。村上のみかどの末、中務の宮のうまごといふ人々見るに、せさることなき人々どもこそ多く見ゆめれ。我が子などありともかゝるべし」などぞ有りける。姫君こそおはすなれ。北の方の御はらにはあらで、うちにつかひたまへりけるわらは、おほくの人のなかに、いかなるすくせにか生みきこえたるとなむ。上西門院にぞおはすと聞こえ給ふ。琴琵琶などもひき給ふとも云られでおはしけるに、月あかき夜、云のびてかきならし給ひけるより、わらはれ給ひけるとかや。又ことばらに、女君きこえ給ふは、高松の院に參りかよひ給ひて、殿上人の車などつかはして、迎へなどせさせ給ふとかやぞきこえ給ふ。大將殿、いづれの程にか侍

りけむ。年頃すみたまひし、れんせい東の洞院よりにや侍りけむ。なゝ夜かちより御束帯にて、石清水の宮に参り給ひけるに、光清ときこえし別當、御設けなど房とかいふにして御き入るまじき」とてより給はざりけるに、七夜参り果て給ひける夜、みつといふところにおいてたてまつりける。

「さいはいとさんぞのおまへ伏しをがみ七夜のねがひとをながらみて」

とまめりけるを、御神のみことゝたのまむとて、御ふところに納めさせたまひて、かへさにしにて、かくかちの御物まうで夜をかさねさせ給ふらむ、あら人神、昔の帝におはしませば、ひき唱へさせ給ひける御ねぎごとにてぞ、あはれにかなしくうけ給はりしときこえ侍りけるぞ。おほいどの後には大將も辭し給ひて、たゞ左のおとゞとておはしき。仁和寺に花園といふ所に、山里作りいだして通ひ給ひき。四十にあまりてやうせ給ひにけむ。近くなりては御ぐしおろし給ひけるに、すがたは猶昔にかはらず清らにて、少しおもやせてぞ見えたまひける。岩倉なるひじり呼びて、ゑぼうし直衣にて出でゝ御ぐしおろし給ひける。いと悲しく見奉る人も、涙おさへがたくなむありける。ゑちごのめのと、風いたみける頃、花にさして、

「われはたゞ君をぞをしむ風をいたみ散りなむ花は又も咲きなむ」

とよみたまひけるを、めのとは常に語りつゝこひかなしみける。この大將殿、帝のうまご、宮の御子にてたゞ人になり給へる、此の世には、めづらしく聞きたてまつるに、なさけ多くさへおはしける。いとありがたくきこえたてまつりしに、まださかりにて雲がくれたまひにけむ、いと悲しくこそ侍れ。かの花園も雲けぶりとのぼりて、あとさへ殘らぬと聞き侍るこそあはれに心うけれ。そのわたりに詣で通ひける人、

「いづくをか形見ともみむ夜をこめてひかり消えにし山のはの月」

三のみこの御子には、また信證僧正とて仁和寺におはしき。鳥羽の院御ぐしおろさせ給ひし時、御戒師におはしき。また山にも僧都の君などいひて聞こえ給ひき。一定位にもなかりしにや、院よりおほい殿に尋ね申させ給ひけるとかや。御むすめはおほい殿の一つ腹に、伊勢のいつきにて下り給へりき。後は伏見の齋宮と申しゝこれにやおはすらむ。又行宗の大藏卿の女のはらに、齋院もおはするなるべし。此の比むそぢなどにや餘り給ふらむ。そのいつきにおはせし比、おほい殿、本院に有栖川のもとの櫻のさかりなりけるにおはして、歌などよみ給ひけるに、女房の歌とて、

「散る花を君ふみわけてこざりせば庭のおもてもなくやあらまし」

とぞきこえし。

ならばらの御子

きさいの宮、女御更衣におはせねど、御子うみたてまつり給へるところどころ、近き御代に

あまた聞こえ給ひき。后ばらの宮たちは皆申し侍りぬ。ちりぢりにうち續きおはします多くきこえ給ふ。白河の院のささきばらの女宮みところの外に、承香殿の女御の生みたてまつり給ひしは、伊勢のいつきにおはしき。それは女四宮なるべし。女五宮も天仁元年霜月のころ、みうらにおひたまひて齋宮ときこえ給ひき。御はらはいづれにかおはしけむ、ひがことにや侍らむ。季實とか聞えしむすめにやおはしけむ。せがゐの齋宮と申しゝも、同じ比立ち給ふと聞こえき。それは賴綱ときこえし、源氏の三河守なりしが女のはらにおはすと聞こえき。七十にあまり給ひてまだおはすと聞こえ給ひき。唐崎のみそぎ、上西門院せさせ給ひし比、そのつぎに、院の御さたにて殿上人など奉らせ給ひけり。とのもりのかみ何大夫とか名ありし人、御後見にて御車のしりに、綾の指貫、院のおろして着てわたるなど聞こえき。男は此の世には多く佛の道に入りたまひて、御元服もかたくて、うへの御ぞの色などもたづねえ侍らぬ折々もはべるとかや。位おはしまさぬほどは、淺黄と日記に侍るなるをば、青き色か黄なるか、なほおぼつかなくて、花園のおほいどのにたづね奉られけるも、をさなくておぼえ給はぬよし申したまふなど聞こえし。一の宮の御元服のは黄なるを奉りけるなるべし。位まだえさせ給はねば 黄なる衣ぞ誠にもおはしますらむ。無位の人は黄袍なるべければ、小野の篁が隱岐より歸りて、作りたる詩にも、「請ふ君須く愛せばわれをみるべし。白きことはかうべにあり。黄なることは衣にあり」などぞきこえ侍りし。神の社の黄狩衣なども、位なきうへのきぬの心なるべし。かやうのついでにある人の申されけるは、つるばみのころもは王

の四位の色にて、たゞ人の四位と王五位とはくろあけを着、たゞ人の五位あけの衣にてうるはしくあるべきを、今の人心およすげて、四位は王の衣になり五位は四位のころもを着るなるべし。検非違使上官などはうるはしくてなはあけをあらためざるべしとぞ侍りける。佛の道に入りたまへるは此の頃うちつゞかせ給へり。仁和寺に覺行法親王と聞えたまひしは、白河の院のみこにおはす。御ぐしおろさせ給ひて、やうやうおとなに成らせ給ふ程に、いとかしがひしくおはしければ、さらに親王の宣旨かぶり給ふとぞ聞え侍りし。おは御室とておはしまし、は、三條の院の御子師明親王ときこえ給ひし、まだちごにおはしまして、御子の御名えたまひければ、法師の後は親王の宣旨かぶり給はず。その宮につけ奉りたまひしに、御弟子の宮はわらはにて親王の御名をえかまはねば親王の宣旨かぶり給へり。後二條のおとゞ出家ののちは例なきよし侍りけれども、白河の院、「内親王といふこともあれば、法親王もなどかなからむ」とて、はじめて法師の後親王ときこえ給ひしなり。かくて後ぞ、うちつゞきおほくにも出家の後の親王ときこえ給ふめる。そのおとうとにて覺法々親王ときこえたまひしは、六條の右のおとゞの御むすめの生み奉り給へりし、法性寺のおとゞのひとつ御はらからにおはす。さきに申し侍りぬ。みかどの御子關白おとゞ、一つはらにおはします。いとかたきことなるべし。この御室は、おほきに聲清らかなる人にぞおはしける。眞言の道よくならひ給ひ、又手かきにてもおはしけり。御堂の色紙形などかき給ふときこえ給ひき。高野の大師の手かきにおはしければにや、御室たちもうちつゞき手かきにぞおはする。高野へまう

でたまひける道にて、

「定めなきうき世の中と去りぬればいづくも旅の心ちこそすれ」

とよみたまへりけるとぞ。横河の覺超僧都の、「よろづのことを夢とみるかな」といふ歌思ひ出でられて、あはれにきこえ侍る御歌なり。又仁和寺に花藏院の宮とてもおはしましき。それは異御はらなるべし。御母は大宮の右のおとゞの御子に、なでしこの宰相とかきこえ給ひしむすめとぞ。六條殿とかきこえ給ひて、のちには九條の民部卿におはしけるとかや。此の宮はいみじくたふとき人ときこえ給ひき。長尾の宮とも申しき。又三井寺の大僧正行慶と聞こえたまひしもおはしき。備中守政長と聞こえし人のむすめのはらにおはす。これも眞言よく習ひ給へるなるべし。この院もこの僧正にぞ行ひのこと受けさせ給ふときこえし、法性寺のおとゞ御ぐしおろしたまひて、御戒の師に去給ふときこえき。こまの僧正とも申すなるべし。天王寺へ詣でたまひけるに難波をすぎ給ふとて、

「夕ぐれに浪花わたりを見渡せばたゞうす墨のあしでなりけり」

となむきこえし。こと所のゆふべの望みよりもなにはのあしでと見えむ、げにときこえはべり。歸る雁のうすゞみ夕暮のあしでになりたるもやさしくきこえ侍り。又青御前法眼ときこえ給へりしも、白河の院の御子にやおはしけむ。みちのおくのかみ有宗といひしがむすめの腹におはすとぞ。堀河のみかどの宮たちは、山に法印など聞えたまひし、後には座主になりて、親王の宣旨かぶり給ひて、座主の宮ときこえき。伊勢の守時經とて傅の大納言の末と聞

こえし、むすめの生みたてまつれるとぞ。又仁和寺の花藏院の大僧正と申しゝは、近江守隆宗と聞えしがむすめのはらとぞ聞え給ひし。僧正御身の沈み給へることをおもはしける時、よみたまへりける、

「さみだれのひまなき比の雲づくには宿もあるじも朽ちにけるかな」

とぞ聞え侍りし。身を去るあめ、時にもあらぬ去ぐれなどや、御袖にふりそひたまひけむといとおはれに聞こえ侍り。女宮は大宮の齋院ときこえ給ふおはしき。やがて彼の大宮の女房の生みたてまつれりけるとなむ。又さきの齋宮も堀河の院の御むすめときこえ給ふ。まだ此の比もおはするなるべし。鳥羽の院の宮は女院ふたところの御腹の外に、三井寺の六宮、山の七宮とておはします。御はゝ石清水の流れとなむ聞きたてまつりし。俊賴の撰集に鹿の歌など入りて侍り。光清法印とかいひける別當のむすめとなむ。小侍從などきこゆるは小大進が腹にて、これはさきのはらからなるべし。白河の院の御時より近く侍ひて、鳥羽の院には御子あまたおはしますなるべし。又その同じはらにあや御前ときこえさせたまふ、御ぐしおろして雙林寺といふ所にぞおはしますなる。寺の宮はひととせうせ給ひにき。やまのは法印など申しゝ、親王になり給ふとぞ。又宰相の中將家政ときこえし御むすめ、待賢門院におはしけるも鳥羽の院の御子生み奉りたまへりし、吉田の齋宮と申しき。それもうせ給ひて八九年にもやなり侍りぬらむ。あまにならせ給ひて、智惠深く尊くきこえさせ給ひき。その御母こそはあさましくてうせ給ひにしか。河内守なにがしとかいひしが子なる男の、いかなる事

のありけるにか失ひ奉りたるとて、おやも罪かぶりて都にもすまざりき。又徳大寺の左のおとゞの御むすめとて、鳥羽の女院に侍ひ給ひけるも、女三のみこ生み給ひてかすがの姫宮ときこえ給ふ。冷泉の姫宮と申すにや、其の母を春日殿と申すなるべし。又勢賀院の姫宮、齋院のひめ宮、高松の宮など聞こえさせ給ふも、おはしますなるべし。鳥羽の院の宮たちは、をとこ女、さまざまにたゞのなど取り加へ奉りて、男宮八人、女宮八九人ばかりおはしますなるべし。讃岐の院の一の御子ときこえ給ひしは重仁親王と申しけるなるべし。その御母院に具し奉りて、遠くおはしたりけるが歸りのぼり給へるとぞきこえ給ふ。みかど位におはしましゝ時、さきの宮、一の人の御むすめにておはしますに、うちの女房にて、かの御母、宮仕へ人にてさぶらひ給ひしが、殊の外にときめき給ひしかば、さまざまの御方の人はめざましく思ひあひて、人の心をのみはたらかし、世の人もあまりまでおもへるなるべし。さりとて御後見のつよきもおはせず。たゞ大藏卿行宗とてとし七十ばかりなるが歌よみによりて、親しく仕うまつりなれたるを、おやなどいひて、兵衛の佐などつけ申したるばかりなればさるべき方人もなし。誠の親はをとこにはあらで、紫の袈裟など賜はりて、白河の御寺のつかさなりけり。それもうせて年へにけり。然るべき人の子なりけれど、をとこならねばかひなかるべし。常にさぶらふ何の中將などいふ人のかたゞゝろあるなども、目をそばめらるゝ樣にてはしたなくなむありける。されど類ひなき御心ざしをさりがたきことにて過ぐし給ふ程にをのこ君生みいだし給へれば、中宮にはまだかゝることもなきにいと珍らしく、いとゞ安か

らぬつまなるべし。御おほぢの一院も聞かせ給ひて迎へとり給ひて、女院の御方に養ひ申させ給ふ。やうやううちの御めのとごの、播磨守伯耆守などいふ人ども、彼のさとや、局などの女房などかみ下のとども、取りさたすべきよしうけ給はりて仕うまつり、若宮の御めのと刑部卿などいひて、大武の御めのとのをとこと聞ゆ。みこも親王の宣旨などかぶり給ひて御元服などせさせ給ひぬ。かくて年月すぐさせ給ふ程に位さらせ給ひて、新院とておはしますにも、世に類ひなくて過ぐさせ給へば、きさいの宮、殿の御わたりには心よからず、疎きことにてのみおはします。本院の御まゝなれば世を心にまかせさせ給はず。うち、中宮、殿などに、ひとつにて、世の中すさまじき事多くておはしますべし。かやうなるにつけてもわたくしものにおもはしつゝ過ぐさせ給ふに、法皇かくれさせ給ひぬる後、世の中に事ども出できて讃岐へ遷くおはしましにしかば、やがて御船に具し奉りてかの國に年歴給ひき。一の御子も御ぐしおろし給ひて、仁和寺大僧正寛暁と申しゝにつかせ給ひて、真言などならはせ給ひけるに、敏くめでたくおはしましければ、昔の真如親王もかくやと見えさせたまひけるに、御足のやまひおもくならせ給ひて、ひとゝせうせさせ給ひにけり。御とし廿二三ばかりにやなり給ひけむ。讃岐にも御なげきのあまりにや、御惱みつもりてかしこにてかくれさせ給ひにしかば、宮の御はゝものぼり給ひて、かしらおろして、醍醐のみかどの御母方の御寺のわたりにぞ住み給ふなる。かの院の御にほひなればことわりと申しながら、歌などこそいとうおもりてよみ給ふなれ。のぼり給ひたりけるに、ある人のとぶらひ申したりければ、

「君なくて歸る波路に玄をれこし袂を人の思ひやらなむ」

と侍りけるなむ、さこそはといと悲しく推し量られ侍りし。院のおとうとの仁和寺の宮おはしまし、程は、とぶらはせ給ふと聞こえしに、宮もかくれ給ひて、心ぐるしく思ひやり奉るあたりなるべし。その遠くおはしましたりける人のまだ京におはしけるに、白河に池殿といふ所を人の造りて、「御覽せよ」など申しければ、わたりて見られけるにいとをかしく見えければ、かきつけさせ給ひけるとなむ。

「音羽川せき入れぬ宿の池水も人の心は見えけるものを」

とぞき、侍りし。讃岐の院の皇子は、それも仁和寺の宮におはしますなる、法印にならせ給へるとぞ聞こえさせたまふ。それも眞言よく習はせ給ひて勤め行はせ給へりとぞ。上西門院御子に玄申させ給へるとぞ。其の御母は師隆の大藏卿の子に、參河の權の守と申す人坐しけるむすめの、讃岐のみかどの御時、內侍のすけにて侍はれしが生みたてまつり給へるとぞ聞えさせ給ふ。讃岐の法皇かくれさせ給へりける頃、「御服はいつか奉る」と御室より尋ね申させ給へりければ、

「うきながらその松山の形見には今宵ぞ藤の衣をばきる」

とよませ給へりける。いとあはれに悲しく。又御行ひはてゝやすませ給ひけるに、嵐はげしく瀧の音むせびあひていと心ぼそく聞こえけるに、

「夜もすがら枕におつる音きけば心をあらふ谷川のみづ」

とよませたまへりけるとぞ聞こえ侍りし。昔の風ふき傳へさせ給ふいとやさしく。女宮は聞こえさせ給はず。今の一院の宮たちはあまたおはしますとぞ。さささばらの外には高倉の三位と申すなる御はらに仁和寺の宮の御宝傳へておはしますなり。また若くおはしますに、御行ひの方も梵字などもよくかゝせ給ふと聞こえさせ給ふ。つぎに御元服せさせたまへる、おはしますなるも、御ふみにもたづさはらせ給ひ、御手などかゝせ給ふと聞こえさせ給ふ。その宮も、宮たち設けさせ給へるとぞ。おなじ三位の御はらに女宮もあまたおはしますなるべし。伊勢のいつきにてゐねおとうとおはしますと聞こえさせたまひし、おとうとの宮は、六條の院の宣旨養ひ奉りて、かの院つたへておはしますとぞ聞こえさせ給ふ。又賀茂のいつき妹のはらにも、宮たちあまたおはしますなるべし。三井寺に法印僧都など聞こえさせ給ふ。また女宮もおはしますとぞ。大炊の御門の右のおとゞの御むすめも姫宮生み奉り給へる、おはしますと聞こえ給ふ。又ことはらの宮々もあまたおはしますなるべし。二條のみかど宮たちも、をとこ宮女宮きこえさせ給ふ。その女宮は内の女房うみたてまつりたまへるとぞ。中原の氏の博士のむすめにぞおはする、男宮は源氏のうまのすけとかいふむすめの腹におはしますとか聞こえたまふ。また徳大寺のおとゞの御女のはらとか聞こえたまふは位につかせたまへりし、さきに申し侍りぬ。またかんのきみの御おとうとにおはしけるが生みたてまつり給へる、おはしますと聞こえさせたまふ。かく今の世の事を申しつゞけ侍る、いとか

しこくかたはらいたくも侍るべきかな」。

今鏡第九

むかしがたり

あしたづ

「今の世のことは人にぞ問ひ奉るべきを、よしなきこと申しつゞけ侍るになむ」などいへば、「さらば昔語りも猶いかなる事か聞き給ひし。語り給へ」といふに、「おのづから見きゝ侍りし事も、ことのつゞきにこそ思ひいで侍れ。且はきゝ給へりし事もたしかにも覚え侍らず。傳へうけ給はりしことも思ひ出づるにまたがひて申し侍りなむ。かたちこそ人の御覧じ所なくとも、いにしへの鏡とはなどかなり侍らざらむ」とて、むかし清和のみかどの御時、かたがた多くおはしける中に、ひとりの御息所の太上法皇かくれさせ給へりける時、御經供養して佛の道とぶらひ奉られけるに、御法かきたまへりける色紙の色の、ゆふべのそらのうす雲などのやうに、墨染なりければ、人々怪しく思ひけるに、むかし賜はりたまへりける御ふみどもを色紙にすきて、御法の料紙になされたりけるなりけり。それよりぞ多く色紙の經は、世に傳はれりけるとなむ。かきとゞめられたるふみなども侍らむものを、橘の氏贈中納言ときこえ給ひし宰相の日記にぞこの事はかゝれたると聞こえ侍りし。

村上の御時、枇杷の大納言延光、藏人の頭にて御おぼえおはしけるに、少し御けしきたがひたることもおはせで過ぎ給ひけるに、心よからぬ御けしきの見えければ、あやしく恐れおぼしてこもりゐ給へりける程に、めしありければいそぎ參りておはしけるに「年ごろはおろかとはしみあるべかりけるをば、など藏人になるべきよしをば奏せざりけるぞ。いと頼むかひなく」と仰せられければ、ことわり申す限なくて、やがて仰せ下されけるに、みくらの小舍人家を尋ねてかねて通ふ所ありときゝて、その所に至りて藏人になりたるよし告げゝれば、その家あるじのむすめの男、所の雜色なりけるが、藏人にのぞみかけゝるをりふしにて、我がなりぬると喜びて祿など纔應せむ料に、俄に親しきゆかりども呼びて營みけるほどに、小舍人、「雜色どのにはおはせず。秀才殿のならせたまへるなり」と云ひければ、あやしくなりて、家あるじ「いかなる事ぞ」とたづねけるに、雜色がめの姉かおとうとかなる女房のまかなひなどしけるを、この秀才ぢのぴて通ひつゝ、局に住みわたりけるを、「かゝる人こそおはすれ」と家の女どもいひければ、「よもそれは藏人になるべきものにはあらじ。ひがとならむ」と謂ひければ、小舍人「その人なり」といひければ、雜色も家あるじも恥ぢがましくなりて、「かゝる者かよふによより、かゝることは出でくるぞ」とて、夜のうちにその局のぢのぴづまを追ひ出だしてけり。その事をいかでか雲の上まできこしめしつけゝむ、「いとはしきことかな。さては出で仕うまつらむに、裝ひの然るべきも叶ひがたくやあらむ」とて、くらつかさに

仰せられて、くらのかみ調へて、さまざまの天の羽衣たまはりてぞまゐりつかへける。その作りたる詩は、釋奠とかに、鶴九つのさはになくといふ題の序をかきたりけるとぞ。詞をば覺えず。その心はめぐりかけらむことを遂が島にのぞめば霞の袖いまだわはず。ひく人やあると淺茅が山に思へば、霜のうはげ、いたづらに老いにたりといふ心なり。又村上のみかど、かの大納言に、「われなからむ世に、忘れず思ひ出ださむずらむや」などのたまはせければ、「いかでかつゆわすれ參らせはべらむ」と答へ申されけるを、「折節には思ひ出だすとも、いかでか常にはわすれざらむ」と仰せられければ、「御ぶくをぬぎ侍らで、この世をおくり侍らむずれば、かはらぬ袂の色に侍らば忘れ參らすまじきつまには侍るべき」と奏し給ふ。誠にその契りにたがはずおはしければ、後のみかどの御時も、色ながら事に從ひ給ひけるを御らんじて、御涙も押へあへず悲しませ給ひけるとぞ。かの大納言の夢に先帝を見たてまつりて、作り給へる詩きこえ侍りき。「夢のうちにもし夢のうちのことを忘らましかば、たとひこの生を送るとも早くはさめざらまし」とぞおぼえ侍る。「夢と忘りせばさめざらましを」といふ歌の同じ心なるべし。

祈る忘るし

圓融院の御時にや、横川の慈惠大僧正參り給へりけるに、眞言の行ひの時、「行者の本尊になることは、あるべきさまをすることにや、又誠に佛になることにてあるか」と問はせ給ひければ、「その印をむすびて眞言を唱へ侍らむには、いかでかならぬやうは侍らむ」と答へ申し

給ひければ、五壇の御修法にみかどおはせ給ひて、御覧じけるに、「阿闍梨の印をむすびて定に入りたるとは見ゆれどももとの姿にてこそはおれ」と仰せられければ「誠に本尊になりて侍るを、御さはりものぞこらせたまひ、御功徳も重ならせおはしましなば、御覧せさせ給ふこともおはしましなむ」と申し給ひけるに、たびたび重なりて御覧じければ、大僧正不動尊のかたち、本尊と同じやうになりてけしやきして居給ひたりけるに、廣澤の僧正も又降三世になりたまひたりけるが、程なく例の人になり又佛になりなど云給ひけり。いま二人は、元のさまにて佛にもならず。かく御覧じて後に大師まゐり給へりけるに、「誠にたふとき事を拝みつることのよに有り難き」と仰せられて、「寛朝こそいとはしかりつれ。心の亂れつるにや、ほどなく姿のもとの様になりかへりつる」と仰せられければ、大師の申したまひけるは、「寛朝なればまかりなるにこそ侍れ」とぞ奏し給ひける。

禪林寺の僧正ときこえ給ひけるが、宇治のおほさおとゞにやおはしけむ。時の關白殿のもとに消息たてまつりて、「法藏のやぶれて侍る、修理して給はらむ」と侍りければ、家の司何のかみなどいふうけ給はりて、「下家司などいふ者つぎがみ具して、僧正の坊にまうでゝ、「殿より法藏修理つかまつらむとて、破れたる所々記しになむ參りたる」と申しければ、僧正呼びよせ給ひて、「いかにかく不覺にはおはするぞ。おほやけの御後見もかくてはいかゞ云給ふと申せ」とはべりければ、還り參りて、「云ふしに詣で侍りつれどもいづくなる法藏とも侍らず。いかに心得ぬやうには侍るぞ。おほやけの御後見も、いかやうにか御さた候ふらむなど

思ひかけず心得ぬ御返事なむのたまはせつる」と申しければ「こはいかに、さはいかにすべきぞ」など仰せられければ、年老いたる女房の、「あれは御はらのそこなはせ給へるを、みのりのくらとは侍るものを」と申しければ、「さもいはれたることさもあらむ」とてまなの御あはせども調へて奉り給へりければ、「材木給はりて、やぶれたる法藏つくろひ侍りぬ」とぞきこえたまひける。此の頃の人ならば關白殿に申さずとも、隱して給ふと、僧井ゐしなどいふものに心おはせて、調へさせらるべけれども、かく申され侍りとかや。かの僧正大二條殿の限りにおはしましけるに參り給ひて、「圍碁うたせ給へ」と申し給ひければ、いかにあさましき事など侍りけれど、おながちに侍りければ、やうぞあらむとて碁盤とりよせかきおこされたまひてうたせ給ひけるほどに、御はらのふくれへらせ給ひて、一番がほどに例ざまにならせ給へりける、いとありがたき驗者に侍りけり。經などよみ、祈り申しなどせさせ給はむだに、かた時の程にめでたく侍るべきに、碁うちてやめ申させ給ひけむもたゞ人にはおはせざるべし。

むかし勘解由長官なりける宰相の、まだ下臈におはしける時、親の豐前守にて筑紫に下りける供にまかりたりけるに、その父國にてわづらひて失せにけるを、その子の父の爲に、泰山府君の祭といふ事を法の如くに祭のそなへどもとゝのへて祈りこひたりければ、その親生きかへりて語られ侍りけるは、炎魔の廳に參りたりつるに、云ひ出らぬ備へを奉りけるによりて、返し遣はすべき定めありつるに、その中に、「親の輔通をば返しつかはして、そのかは

りに子の有國をば召すべきなり。その故は道の者にもあらで、たはやすく此の祭を行ふ科あるべし」と定めありつるを、ある人の申されつるは、「孝養の志ある上に、遠き國に道の人の然るべきもなければ重き罪にもあらず。有國めさるまじとなむ覺ゆる」と申さるゝ人ありつるに因りて、皆人いはれありとて、おや子ともにゆるされぬるとなむ侍りけるとぞ、その流れの人の、才も位も高くおはせし人の語られ侍りける。

一條の院の御時などにや侍りけむ、六位の史を經てからぶり賜はれるが、縣召に、心高く播磨の國の司望みければ、こと人をなされけるに、たびたび墨をすりてかきつけらるれども、おほかた文字のかゝれざりければ、いかゞすべきと定められけるに、播磨の國望む申しぶみを、皆とりわつめて、かゝるべき定めありて、選びすてたる申しぶみどもをも、おほつかの中よりもとめ出でゝ、皆かゝれけるに、かの史の大夫相尹とかいふが名の、あざやかに書かれたりけるとなむ。齊信民部卿の宰相におはしけるとかや、その座にて見給ひければ、ちひさき手して筆のさきをうけてかゝせぬと見給ひける。聖天供をして祈りける云るしになむありける。その供は觀修僧正とかのせられけるとかや、たしかにも覺え侍らず。かく聞き侍りしを又人の申しゝは、一條の院の御時、長德四年八月廿五日、外記の巡にて、佐伯公行といふ者こそ播磨守にはなりたれ。かの國の史生とかにてありけるとかや。相尹といふものは、なりたることも見えずと申す人もありきとなむ。

からうた

一條の院の御心ばへも能もすぐれておはしましける上に、をかるべきにや侍りけむ。上達部殿上人、みちみちの博士、たけきもの、ふまで、世にありがたき人のみ多く侍りける頃になむおはしましける。常は春風秋月の折ふしにつけつゝ、花のこずゑをわたり、池の水にうかぶをすぐさずもてあそばせ給ひけるに、御をぢの中務宮、はじめて其の筵に參り給へりけるに、ならはせたまはぬ御有樣に、御かうぶりの額もつむる心ちせさせ給ふ。御帶も御をたうづもいぶせくのみ覺えさせ給ひけるに、御あそびはじまりて、藤民部卿、四條大納言、源大納言、侍從大納言などいふ人たち、「周の文王の車の右にのせたる」などいふ詩の序、以言と聞こえし博士のつくりたる詠じ給ひけるにぞ、御子の御かうぶりも御よそひもくつろぐやうに覺えさせ給ひて、面白くすゞしく覺えさせたまひける。かの村上の中務宮、ふみつくらせ給ふ道などすぐれておはしましければ、齊名以言などいふ博士常に參りて、ふみ作らせ給ふ御ともになむありける。大内記保胤とて、中にすぐれたる博士、御師にて文は習はせ給ひける。その保胤にはこれらが文、作り得たるところ得ぬ所の有樣問はせ給ひければ、答へ申しける事こそ、からの言の葉は知らぬことなれど面白く聞こえ侍りしか。「いづれもいづれもとりどりに侍るを譬ひにて申し侍らむ」とて、「齊名が文作り侍るさまは月のさえたるに、なかばふりたる檜皮葺の家の御簾ところどころはづれたるうちに、女の箏のことひきすましたる樣になむ侍る。以言詩は、砂子白くちらしたる庭の上に、櫻の花散りをきたるに、陵王舞ひたるになむ似てぞはべる。匡衡がやうはものゝふのあけの革して、緋威のかゞやきたるき

て、えならぬ駒の足ときに乗りて、逢坂のせきをこゆる景色なり」とぞ申しける。さて宮、「そこはいかゞ」とおはせられければ、「既に槐樹毛にのり侍りにたり」とぞ申しはべりけるとなむ。

彼の齊信の藤民部卿、鷹司殿の屏風の詩選びたてまつられけるに、日野の三位の詩多くいりたりけるを、義忠といひし贈宰相の難じて「色の糸ことばつゞりて、春風に任せたり」といへる、糸といふ文字平聲におらず。ひがごとなりと申すときゝて、民部卿、文集の詩の句の、「うるはしきことばゝ、色の糸をつゞれり」と云へるを考へて奉られたりければ、宇治のおほきおとゞ、むづからせ給ひて、「いかにかゝるひが難をば申しけるぞ」とて勘當せさせ給ひて、あくる年まで免させ給はざりければ、義忠の三位、女房につけて奉りける、

「青柳の色のいとにや結びてしうれへはとけで春ぞくれぬる」

とぞきゝ侍りし。よればほどけでとかけるもあり。いづれか誠にて侍らむ。

むかしの御つぼねの親にておはせし越後守の縣召に淡路になりていとからくおぼして、女房につけて奏し給ひけるふみに、「苦學の寒夜に紅涙襟をうるほし、除目の春朝蒼天まなこて臥させ給ひけるを、御堂殿參らせ給ひて「いかにかくは」と問はせ給ひければ、女房の、「為る時が奉りて侍りつる文を御覽じて御とのごもらせ給へるよし申されければ、「いとふびんなる事かな」とて、國盛といひしを召して、「越前になしたびたるを返し奉るよしの文かきてた

てまつれ」とて爲時を越前になさせ給へりしにぞみかどの御心ゆかせ給ひて、こまうどゝふみ作りかはさせむとおぼしめしつる御けしきありけるに合はせて、こしに下りて、から人とふみつくりかはされける。

去國三年孤館月　歸程萬里片帆風
書鼓雷奔天不雨　綵旗雲聳地生風

などぞきこえ侍りし。

まことの道

大内記のひじりはやんごとなき博士にて、文作る道類ひ少くてよにつたへけれど、心はひとへに佛の道に深くそみて、おはれびの心のみありければ、大内記にて記すべきことありて、催されて内に參れりけるに、左衛門の陣などの方にや、女の泣きて立てるがありけるを、「何事のあれば、かくは泣くぞ」と問ひければ、「あるじの使にて、石の帶を人に借りてもてまかりつるが、道におとして侍れば、あるじにも重く戒められむずらむ、さばかりのものを失ひつる、淺ましく悲しくて歸る空もなければ、思ひやる方もなくてそれを泣き侍るなり」と申しければ、心のうち推し量るに誠にさぞ悲しからむとて、わがさしたる帶をときて取らせたりければ「元の帶にはあらねども空しく失ひて申すかたなからむよりも、おのづから罪もよろしくや侍る」とて「これをもてまからむずる嬉しさ」と手をすりてとりてまかりにけり。さて片隅に帶もなくて隱れゐたりける程に、事始まりければ、おそしおそしと催されて、みく

らの小舎人とかに帯を借りてぞ、公事は勤められ侍りける。池亭の記とてかゝれたるふみにも「身は朝にありて心は隠にあり」とぞ侍るなる。中務の宮のもの習ひ給ひけるにも、ふみすこし教へたてまつりては、目を閉ぢて佛をねんじ奉りてぞ怠らず勤め給ひける。かくて年をわたりける程に、年たけてぞかしらおろして、横河にのぼりて法文ならひ給ひけるに、増賀ひじりのまだよがはに住み給ひけるほどにて、止観の明静なること前代にいまだ聞かずとよみ給ひける。この入道たゞ泣きになきければ、ひじり「かくやはいつしか泣くべき」とて、こぶしを握りて打ち給ひければ、おれも人も事にがりて立ちにけり。又程經て、「さてもやは侍るべき。かのふみ受け奉り侍らむ」と申しければ、又さきの如くに泣きければ、またはしたなくさいなみければ、後のことばもえ聞かで過ぐるほどに、又懲りずまに御けしきとり給ひければ、又さらによみ給ふにも、同じやうにいとゞ泣きをりければこそ、ひじりも涙こぼして、「誠に深き御法の尊くおぼゆるにこそ」とておはれがりてそのふみ静に授けたまひけり。さてやんごとなく侍りければ、御堂の入道殿も御戒など受けさせ給ひて、ひじりみまかりにける時は、御諷誦などせさせ給ひてさらし布もゝむら給ひける、うけぶみは、三河のひじりにたてまつりて、秀句などかきとゞめ給ひけり。

「昔隋煬帝ノ智者ニ報ゼシ、千僧ヒトツヲアマシ、今左丞相ノ寂公トブラフ、サラシ布モ、チニミテリ」

とぞかゝれはべりける。その三河のひじりも博士におはして、大江の氏のかんだちめの子に

おはしけるが、三河のかみになりて國へ下り給ひけるに、頻ひなくおぼえける女を具しておはしける程に、女みまかりにければ、悲しびのあまりにとりすつるともせでなりまかるさまを見て心をおこして、やがてかしらおろして、都にのぼりて物など乞ひありきけるに、もとの妻にてありける女「われを捨てたりしむくいに、かゝれとこそ思ひしにかく見なしたること」など申しければ、「御とくに佛になりなむ事」とて、手をすりて喜びけると傳へ語り侍る。さて内記のひじりを師に去給ひて、ひんがし山の如意寺におはし、横河にのぼりても、源信僧都などに深き御法の心汲み去り給ひて、惟仲の平中納言の北白川にて六十巻講じ給ひけるには、覺運僧都まだ内供におはしける時講師せさせ給へり。この三河の入道は讀師とかやにてこそは、法華經の心説きあらはせるふみも、點じ去たゝめて、そこばくの聽衆ども居なみて、おのおのよみ去たゝめられ侍りけり。かくて後にぞ、山三井寺の僧たちもやすらかによみ傳へたまふなる。遂にから國におはしてもいひ去らぬことゞもおはしければ、大師の御名得給ひて、圓通大師とこそきこえ給ふめれ。かくれ給ひけるに佛むかへ給ひ、樂のおと聞こえければ、それにも詩つくり歌よみなど去給ひけるも、もろこしより送り侍りける。

「笙謌ハルカニ聞コユ孤雲ノウヘ、聖衆來迎ス落日ノマヘ」

とつくり給へり。歌は、

「雲の上に遥に樂の音すなり人やきくらむひが聞耳かもし」

とよみたまへりけると聞こえ侍りし。

文少納言統理と聞えし人、年ごろも世をそむく心やありけむ。月の隈なく侍りけるに、心をすまして山深くたづね入らむ心ざしのせちに催しければ、まづ家に「ゆする設けよ。出でむ」といひて、かしら洗ひて梳りはしなど去けるを、めなりける女も心得てさめざめと泣きをりけれど、かたみにとかくいふとはなくて、あくる日うるはしき装ひして、一の人の御もとに詣でゝ、山里にまかり籠るべきよしのいとま申しけれど、人も申しつがざりけるを去ひ申しければ聞き給ひて、「少納言こなたへ」とて出であひ給ひて、御数珠たびて、「後の世は頼むぞ」など侍りければ、数珠をばをさめて拝したてまつりて、増賀ひじりの室にいたりて、かしらおろしたりけれど、勤め行ふ事もなくてもの思ひたる姿なりければ、ひじりさる心にてはしたなく侍りければ、「生み侍るべき月にあたりたる女の侍るとの思ひ捨て侍れど、いぶせく思ひたまへて」などいふを、ひじり都にいそぎ出でゝ、その家におはしたりければ、え生みやらでなやみけるを、ひじり祈り給ひて生ませなどして、人にまめなるものなどこひたまひて、車につみてうぶやしなひまで去給ひけり。その統理に三條の院より歌の御かへし給はりける。

「忘られず思ひ出でつゝやま人を去か戀しくぞわれもながむる」

と侍りけるに、涙のこぼれければ、「東宮より歌たまはりたらむは、佛にやはなるべき」とひじり耻ぢしめ給ひけるとかや。たてまつりたる歌もあはれにきこえ侍りき。

「きみに人なれなならひそ奥山にいりての後もわびしかりける」

とぞよみてたてまつりける。

公經とか聞こえし手かき、ことよろしき國の司になりたらば、寺などゝも作らむと思ひしを、河内といふおやしき國になりたればかひなし。ふる寺などをこそは修理せめと思ひて、見ありきけるに、あるふるてらの佛の座の下にふみの見えけるを披きて見ければ、沙門公經と書きたるふみに、こむ世にこの國の司になりて、この寺修理せむといふ願たてたるふみ見てぞ然るべき契りなりけるといひける。かきたる文字のさまなども似たる手になむありける。ふしみの修理のかみのやうにおなじ昔の名をつけるなるべし。

大外記定俊といひしが越中守になりて侍りけるに、國のものは思ふさまに侍りけれども、國の人のないが玄ろに思へるをおやしみ思ひて、寐たりける夜のゆめに、むかし此の國にめくらきひじりの持經者にて有りけるが、生まれてかくはなりたるぞ。人のおなづらはしく思へるは昔のなごりなるべし。そのひじり、さきの世に彼の國の牛なりける時、法華經一部を負ひて山寺にのぼりたりしゆゑに、持經者になれりしが、此の度は國のかみとなりて、色の黒きもそのなごりとぞ見たりける。昔のなごりにや、末には法師になりて、江文のかたにこもりゐて行ひけるとぞ聞こえ侍りし。その子にて信俊ときこえしも、身は世に仕へながら佛の道をのみ營みて、おいの後にはかしらおろしなどして、限りの時にのぞみては、みづから肥後の入道往生したりと云ひあはむずらむなど申して尊くてうせにけるに、からばしき匂ひありけるなどきこえ侍りき。

かしこきみちみち

常陸介實宗と聞こえし人くすしに尋ぬべきことありて、雅忠が許にゆけりけるに、去ばしとて障子のつらに据ゑたりけるにまらうど纔ようしけるあひだに、門より入りくる病ひ人を、かねて顔けしきを見て、「これはその病を問ひに來る者なり」といひて、たづぬれは誠に去かありけり。其のなかに見苦しきこともあり、をかしきこともありてえいひやらねば、皆心えたりなどいひて、つくろふべきやうなどいひつゝあへ去らへやりけるに、まらうどは有行なりけり。家あるじ盃とりたるを、「とく其のみきめせ。唯今ゆゝしきなるの振らむずればうちこぼしてむず」といふに、さしもやはとや思ひけむ、いそがぬ程になるおびたゞしく振りて、はたとひとしき酒をうちこぼしてけり。あさましき事ども聞きたりとぞ語りける。

中頃笙の笛の師にて、市佑時光と聞こえしが、いづれの御時にか、內より召しけるにおなじやうに老いたる者とふたり手うちて、歌うたふ樣によりあはせておはかた聞きもいれず、御返りを申さゞりければ、御使あざけりて歸りまゐりてかくなむ侍るとうれへ申しければ、いましめはなくて仰せられけるは、「いとあはれなる事かな。唱歌去ずまして、よろづ忘れたるにこそあなれ。みかどの位こそくちをしけれ。さるめでたきことを往きてもえ聞かぬ」とぞのたまはせける。用光といひし篳篥の師と、ふたり裏頭樂をさう歌に去けるとぞ後にきこえける。その用光が相撲の使に西の國へ下りけるに、きびの國のほどにてや、沖つ白波たちきて、こゝにて命も絶えぬべく見えければ、かりぎぬ、かぶり、うるはしくして、屋形のうへに出で

ゝをりけるに、白波の舟こぎよせければ、その時用光籠嶌とり出だして、うらみたる聲にえならず吹きすまし給ひければ、白波どもおのおの悲しびの心おこりて、かづけものをさへ去て漕ぎはなれて去りにけりとなむ。さほどのことわりもなきものゝふさへ、なさけかくばかり吹き聞かせけむもあり難く、又昔の白波は、なほかゝるなさけなむありける。

いとやさしく聞え侍りしことは、いづれの御時にか侍りけむ、中頃のきさき上東門院、陽明門院などにやおはしけむ。近き世の帝の御時、珍らしく内にいらせ給へりける時、月のあかく侍りける夜、「むかしはかやうに侍る夜は、殿上人あそびなどこそ内わたりは去はべりしか。さやうなることも侍らぬこそくちをしく」など申させ給ひければ、いとはづかしくおぼしめしける程に、月の夜めでたきに、「凉々として氷しき」といふうた、いと華やかなる聲して謠ひけるが、なべてなく聞こえけるに、又いといたく去みたる聲のたふときにて、無量義經の「微滴まづおちて」などいふところをうちいでゝ讀まれ侍りけるがいづれもいづれもとりどりにめでたく聞こえければ「昔もかばかりのとこそえき、侍らざりしか。いと優なるものどもこそ侍りけれ」と申させ給ひけるにこそ、御汗もかゝせ給ひて御心もひろごらせたまひにけれとき、侍りし。後冷泉の院の御時、上東門院などいらせ給へりけるにや、又その人々は伊家の辨、敦家の中將などにやおはしけむとぞ人は申し侍りし。ひがことにや。

又能因法師「月あかく侍りける夜、いたうにむかひて、庇のふき板、所々とりのけさせて、月やどして見侍りけるに、門たゝく音し侍りければ、女ごゑにてとひ侍りけるに、うちより勅

使のわたらせ給へるなりと馬部といふ者の申しければ、門開きていづみのもとに、御使の藏人入れ侍りけるに、「仰せごとになむ。月のうたのすぐれたるはいづれかあると仰せはべりつれば、俄に馬つかさの御馬めして、急き對面する」よしなどたれにか有りけむ、その時の藏人の申し侍りければ、

「月よゝしよゝしと人につげやらばこてふに似たりまたずしもあらず」

といふうたをなむ申しけるが、同じ御ときの事にや侍りけむ、たしかにもきゝ侍らざりき。

今鏡第十

うちぎゝ

敷島のうちぎゝ

中頃男ありけり。女を思ひてときどき通ひけるに、をとこある所にて、ともし火のほのかに飲ますなれとて紙につゝみてもたりける程に、事繁くしてまぎるゝことありければ、わすれて、一日二日過ぎて思ひ出でけるまゝにゆけりければ、「惱みて程なく女隱れぬ」といひければ、いつしか往きて、かのともしびのかきおとしたりし物を見せでと、わが過ちに悲しくおぼえて、つねなき鬼に一口にくはれけむ心うさ、足ずりをしつゝ歎き泣きけるほどに、

「御覽せさせよとにや、この御ふみを見つけて侍る」とて、とり出だしたるを見れば、

「鳥部山たにゝけぶりの見えたらばはかなく消えしわれと忘らなむ」

とぞかきたりける。歌さへともし火のけぶりとおぼえて、いと悲しく思ひける、ことわりになむ。

又ある女有りけり。ときどき通ひける男のいつしか絶えにければ、心うくて、心のうちに思ひ悩みける程に、その人門を過ぐることのありけるを、家の人の、「今こそ過ぎさせ給へ」といひければ、思ひあまりて、「きと立ちながらいらせ給へ」と逐ひつきて云はせければ、やりかへして入りたるに、もと見しよりもなつかしきさまにて、殊の外に見えければ悔しくなりて、とかくいひけれど、女たゞ經をのみよみてかへりごともせざりける程に、七のまきの、即住安樂世界といふ所を、くりかへしよむと見ける程に、やがて絶えいりてうせにければ、われもよりておさへ、人もよりてとかくしけれども、やがてうせにけり。かくてこもりもし、又かしらをもおろしてむと思ひけれど、當時辨なりける人なれば、さすがえ籠らで土におりて、とかくの事までさたして、去ばしは山ざとにかくれたりければ、世をそむきぬると聞こえけれど、さすがかくれもはてゞ出でつかへければ、かへる辨となむいひける。

左衞門の尉賴實といふ藏人、歌の道すぐれても、又好みにも好み侍りけるに、七條なる所にて、夕に郭公をきくといふ題をよみ侍りけるに、醉ひて、その家の車宿りにたてたる車にて、歌案せむとて寐過ぐして侍りけるをもとめけれど、思ひよらで既に講せむとて、人皆かきた

る後にて、此のわたりは稲荷の明神こそとてねんじければ、きとおぼえけるをかきて侍りける。

「いなり山こえてやきつるほとゝぎすゆふかけてしも聲のきこゆる」。

同じ人の、「人にえらるばかりの歌よませさせ給へ。五年が命にかへむ」と住吉に申したりければ、落葉雨の如しと云ふ題に、

「木の葉ちる宿は聞きわくことぞなき時雨する夜もえぐれせぬよも」

とよみて侍りけるを、かならずこれとも思ひよらざりけるにや、病ひのつきて、生かむと祈りなどえければ、家に侍りける女に、住吉のつきて、「さる歌よませしはされば生くまじ」とのたまひけるにぞ、ひとへに後の世の祈りになりにけるとなむ。

又同じゆかりに、三河守頼綱といひしは、まだ若くて、親のともに三河の國に下りけるに、かのくにの女をよばひて、又も音づれざりければ女、

「おさましや見しは夢かと問ふ程におどろかずにもなりにけるかな」

と申しければ更におぼえづきてなむ思ひ侍りける。かくよむともみめかたちやは變るべきとおぼえ侍れど、むかしの人、中ごろまでは、人のこゝろかくぞ侍りける。此の事は、その人の子の、仲正といひしが語り侍るとなむ。

三河守頼綱は歌のみちにとりて人もゆるせりけり。わが身にも、殊の外に思ひおがりたるけしきなりけり。俊頼といふ人の少將なりける時、頼綱が云ひけるは、「少將殿少將殿歌よまむ

とおぼしめさば、頼綱を供せさせ給へ。べちの者もまかりいるまじ。あらひたる佛供なむ、ふたかはらけそなへさせ給へ」などぞいひける。其の歌おぼく侍れども、

「なつ山のならのはそよぐゆふぐれはことしも秋のこゝちこそすれ」

といふ歌ぞ、人のくちすさびに云侍るめる。

近き世に女おりけるを、八幡なる所に宮寺のつかさなる、僧都ときこえし小侍従とかいふ親にやおらむ。その坊にこめすゑて程經けるほどに、都より然るべき人のむすめをわたさむといひければ、「かゝることのあるに、人の聞く所も憚らはしければ、云ばし都へかへりて、むかへむ折こ」とて云たてゝ出だしけるが、あまりこちたく、贈り物などしてぐしければ、今はかくてやみぬべきわざなめりと思ひけるにつけても、いと心ぼそくて視がめの云たに歌をかきておくりけるを、とりいでゝ見ければ、

「行く方も云らぬうき木の身なれどもよにしめぐらは流れあへかめ」

となむよめりける。を見て、むすめなりける人は、院のみやみやなどうみ奉りたるが、まだ若くおはしけるに京へ迎りつる人「此の歌をよみおきたる返事をやすべき。又迎へやすべき」と申しあはせければ、「かへしはよのつねのことなり。迎へ給へらむこそ歌のほいも侍らめ」と聞こえければ、心にやかなひけむ、その日のうちに迎へに更にやりて、「けふかならずかへらせ給へ」とて、あけゆく程にかへりにけり。またその然るべき人のむすめを、いひ云らず、ねどころなど云つらひ、はしたもの雑仕などいふもの數あまた云たてゝするたりけれど、一

夜ばかりにて、硯がめの人にのみ離るゝこともなくぞありける。その女も大臣家の宮仕へ人なりけるが、母の筑紫に下りて菅原の氏寺の別當に具したりけるが、法師みまかりにければ、都へのぼるべきよすがもなくてをりけるを、そのむすめは、朝夕にこれを歎きけるほどに、大臣殿五節たてまつり給ひけるにや、わらはにいだすべき女、外のかたがた見給ひけれど、これればかりなる見えざりければ「思ふやう有りていふぞ。いはむこと聞きてむや」とありければ、「いかでか仰せごとに去たがはず侍らむ」と申しけるに、「五節のわらはに出ださむと思ふ」とのたまひければ、「いかなることもうけ給はり候ふべきを、それはえなむ侍るまじき」と申しければ、「あながちに思ふことにてあるに、構へて聞きたらばいかなる大事をも叶へむ」とありければ、かくまでのたまはせむことさのみもえいなび申さで出でたりけるに、かの大臣殿のわらはいかばかりなるらむとて、殿上人われもわれもとゆかしがりあへりける中に、さかりに物などいひける何の少將などいひける人も見むなど去けるを、ある殿上人の、「珍しげなし。いつも御覽せよ」と云ひければ、怪しと思ひて見るに、わがえさらず物いふ人なりければ、恨み耻ぢしめけれど、さほど思ひたちて出でにけり。のちに大臣殿、「此の喜びにいかなる大事かある」と問ひ給ひければ、「熊野にまうでむの志ぞ深く侍る」と申すに、やすき事とて夫さを（如元）などあまた召して、清きころも何かと出だしたてさせ給ひて、參りて筑紫の母迎へよせむことを心ざし申してかへるに、淀のわたりにや、みゆきなどのよそひのやうに道もえさりあへぬことのありけるが、けふ政所の京に出でたまふといひて、よそに

はものとも思はぬことのいひ忘らず見えける程に、むしたれたるはゞまよりや見えけむ。ふみをかきて、京より御ふみとてあるを見れば、大臣殿の御使にはあらで、思ひがけぬ筋の文なりけり。ありつる石清水の僧の舟の人など見忘りたるとも人といひければゆき〳〵も入れぬほどにかたがた思ひかけずいはせければ、いなびもはてゞ下りて、かの筑紫の母むかへとりて、都に忘すなどしたりけるとなむきこえしは、小大進とかいふ人の事にやあらむ。

陸奥守橘爲仲と申す、かの國にまかり下りて、五月四日舘に廳官とかいふ者年老いたる出できて、あやめふかするを見ければ、例の菖蒲にはあらぬ草を葺きけるを見て、「けふはあやめをこそ葺く日にてあるに、是れはいかなるものを葺くぞ」と問はせければ、「傳へうけたまはるは、この國には、むかし五月とてあやめふく事も知り侍らざりけるに、中將のみたちの御時、けふは菖蒲ふくものをいかにさることもなきにかとのたまはせければ、國の例にさることと侍らずと申しけるを、さみだれのころなど軒の忘づくも、あやめによりてこそ、今少し見るにも聞くにも心すむことなれば、はや葺けとのたまひけれど、この國にはおひ侍らぬなりとまうしければ、さりとてもいかゞ日なくてはあらむ。おさかの沼のはなかつみといふもの有り。それを葺けとのたまひけるより、こもと申すものをなむふき侍るとぞ、むさしの入道隆資と申すは語り侍りける」もし然らばひく手もたゆく長きねといふ歌おぼつかなく侍り。實方中將の御墓はみちのおくにぞ侍るなると傳へきゝ侍りし。誠にや、藏人の頭にも成り給はで、みちのおくの守に成り給ひてかくれたまひにしかば、この世までも、殿上のつきめ

の臺盤するゐたるをば、雀ののぼりてくふをりなどぞ侍るなる。實方の中將の、頭になり給はぬ、おもひの遺りておはするなど申すも、誠にはべらば、あはれに耻づかしくも、末の世の人は侍る事かな。

いづれの年にか侍りけむ。右近の馬塲のひをりの日にやありけむ。女車、物見にやりもてゆきけるに、重通の大納言、宰相中將におはしける時にや、車やりつゞけて、見知りたる車なれば、見よき所にたてさせなどして後にぞ、わが隨身を、女の車にやりて、

「たれたれぞ（二字缺脫やまの郭公」

とかや聞こえければ、女の車より、

「うはのそらにはいかゞなのらむ」

とぞいひ返しける。いとすぐれてきこゆることもなく、かなはずもやあらむ。されども事がらのやさしく聞こえしなり。時の程に覺えむこともかたくて、さてやまむよりも、かやうに云ひたるもさる事ときこゆ。又連歌のいつ文字も、げにと聞こえねども、さやうに問ふべきことに侍りけるなるべし。又確にもえうけ給はらざりき。ひをりといふことはおぼつかなきことに侍るとかや。兼方は眞手つがひと申し侍りけるとかや。匡房中納言の、江次第とかやにもこのことは見え侍るとぞき、侍りし。

又いづれの年にか。眞弓の的かくることを、舍人の爭ひて、日くれ夜ふくるまで侍りければ、物見車ども、おひおひに歸りけるに、かきつけて、大將の隨身にとらせたりけるとかや。

「梓弓ためらふほどに月かげのいるをのみ見てかへりぬるかな」。
ひがことにや侍りけむ。いづもの國にてうせ給ひにし大將殿のつき給へりしとかや。
堀河のみかどの内侍にて周防とかいひし人の、家をはなちて外にわたるとて、はしにかきつけたりける、
「すみわびてわれさへのきの忍草玄のぶかたがた玄げき宿かな」
とかきたる、まだその家はのこりて、その歌も侍るなり。見たる人の語り侍りしは、いとあはれにゆかしく、その家はかみわたりにいづことかや、冷泉堀河の西と北とのすみなるところとぞ人は申しゝ。おはしましし御覽ずべきぞかし。まだうせぬ折に、又堀川のみかどのうせたまひて、今のみかどの内侍にわたるべきよし侍りけるに、
「おまのがは同じ流れといひながらわたらむことは猶ぞ悲しき」
とよまれて侍りけむ。いとなさけ多くこそきこえ侍りしか。
ちかくおはせし横河の座主の坊に、琳賢といひて、心たくみにて、石たてかざり車の風流などするものはべりき。うたへ申すことありて、藏人の頭にて雅兼中納言のおはしける時かの家にいたり侍りけるに、「大原のたきの歌こそいとをかしく聞えしか」と侍りけるに「うれへ申すことはいかでも侍りなむ。この仰せこそ身に玄みて嬉しく侍れ」とてなむ限りなくよろこびて出でにける。その歌は、花園のおとゞの、大原の房の瀧見にいりたまへりけるに、
「今よりはかけておろかにいはしみづ御らんをへつる瀧の白糸」

とよめりけるとぞ。たはぶれごとのやうなれども、ことざまのをかしく聞こえ侍れば、申し侍るになむ。つのかみ範永といひし人は、何れの山里にか、夕ぐれに庭におりて、とゆきかうゆき去あるきて、「おはれなるかなおはれなるかな」とたびたびながめければ、帯刀節信といひしが、「日くるれば、ところどころの鐘の聲」とつけたりければ、「あなふわい」となむいひけるとかや。

いづれの齋の宮とか。人の參りて、今様歌ひなどせられけるに、末つ方に四句の神歌うたふとて、「うゑきをせしやうは、從ずませむとにもあらず」と歌はれければ、心とき人など聞き染紙よませむとなりけり」とぞうたはれたりけるが、いとその人うたよみなどには聞こえざりけれども、えつるみちになりぬればかくぞ侍りける。この事刑部卿とか語られ侍りしに、菩提樹院といふ寺に、ある僧房の池のはちすに、鳥の子をうみたりけるをとりて、籠にいれて飼ひけるほどに、うぐひすの籠より入りてものくゝめなど去ければ、うぐひすの子なりけりと知りにけれど、子はおはきにて親にも似ざりければ、怪しく思ひけるほどに、子のやうやうおとなしくなりて、ほとゝぎすと鳴きければ、むかしより云ひ傳へたるふるきこと誠なりと思ひて、ある人よめる、

「親のおやぞいまはゆかしき郭公はや鶯のこは子なりけり」

とよめりける。萬葉集の長歌に鶯のかひこの中のほとゝぎすなどいひて、このことに侍るなるを、いと興あることにも侍るなるかな。藏人實兼ときこえし人の、匡房の中納言の物語にかける文にも、中ごろの人この事見あらはしたることなどかきて侍るとかや。かやうにこそ傳へ聞くことにて侍るを、まぢかく、かゝる事にて侍らむこそいとやさしく侍るなれ。右京權の大夫賴政といひて歌よめる人の、さることありと聞きて、わざとたづねきて、その鳥の籠に結びつけられ侍りけるうた、

「鶯の子になりにける時鳥いづれのねにかなかむとすらむ」。

萬葉集には父に似てもなかず母にゝてもなかずと侍るなれば、うぐひすとはなかずや有りけむなど、いとやさしくこそ申すめかりしか。

奈良の御代

此の中の人の、おぼつかなき事ついでに申さむ」とて、「萬葉集は、いづれの御時つくられ侍りけるぞ」と問ひしかば、「古今に、

神無月玄ぐれふりおけるならの葉のなにおふ宮のふることぞこれ」

といふ歌侍り」といひし。「古今序に「かのおほん時おほきみつの位、柿の本の人丸なむ歌のひじりなりける」とあるに、かの人丸はかの御時よりも昔の歌よみと見ゆるを、萬葉集つくれる時より古今えらばれたる時まで、年はもゝとせあまり世は十つぎとあれば、とつぎとい

はゞ大同の御代と聞こえたるに、百とせ餘りといふはさきの事ときこゆる上に、人丸はありたる世の人と見えたれば、えなむあるまじき。いかゞ」と問へば、「誠におぼつかなきことを、かくこまかに尋ねさせ給ふこそいと心にくゝ」とて、「ならのみかどゝ申さむこと大同の御世のみにもあらずや侍らむ。元明天皇奈良の都に、和銅三年の春のころ、始めて遷らせ給ひけるに、長屋の原に御こしとゞめて、藤原のふるさとを願み給ひて、

「とぶ鳥のあすかの里をおきていなば君があたりは見えずかもあらむ」

とよませ給へり。はしの目錄にも、寧樂の御歌とてかきつらねて侍るめり。寧樂はならのといひ名づくるなるべし。かくて後七八代は、奈良の都にぞおはしましける。その御世どもにも侍らむ。ならのみかどゝ申す御名は、三代おはしますかと申す人もありとぞ聞き侍りし。柏原の御門の御時長岡の京に渡り給ひて、十年ばかりありてこの平の京には遷らせ給ひて、その御子の大同のみかどもこの京の後なれども、平城とはおりたまひてのちべちの御名なるべし。萬葉集に、人丸が歌どもの入りたると聞き侍りしにも、柿の本人丸集にいでたりなどいひて、其の世の人とはきこえずなむ侍るうちに、奈良の京のさきよりも、人丸が歌は多く見え侍るめり。淨見原のみかどの、吉野の宮にみゆきせたまひけるにもよめるうた侍るめり。輕の皇太子、安騎野に宿り給ふ時の歌とても侍るめり。文武の御事なるべし。又人丸が讃とて、いづれの博士が作られたるには、「持統文武の聖朝につかへ、新田高市の皇子におへりとなむ侍るめる。かくて奈良の御世までありて、聖武の御時などにもあひ奉りけるにやあら

むと申す人あるべし。誠に奈良の都の時にはありけむとおぼえ侍ることは、そのかみ人丸といふ集所々きゝ侍りしに、天平勝寶五年の春三月、左大臣橘卿の家に、諸卿大夫たち宴を給ひけるに、あるじのおとゞ問ひてのたまはく、古歌にも、

「あさもよひきの關守がたづか弓ゆるす時なくまづ鳴るきみ」

といふ歌のはじめ、いかゞと侍りければ、式部卿石川卿こたへ給へることなど侍るは、高野姫のみかどの御時にこそ侍るなれ。そのほどまでとしたけて侍れども、大同の御時まではいかゞはさのみも侍らむ」といふに、「古今序に、「いにしへよりかく傳はるうちに、ならの御時よりぞひろまりける。かの御世や、歌の心を知ろしめしたりけむ。かの御時人丸なむひじりなりける。かゝりけるさきの歌をおはせてなむ、萬葉集となづけられたりける」とかけるは、人丸が世にえらばれたるやうにこそ聞こゆれ」といへば、「誠に心え難きことに侍る。そのおひだに、詞多く侍る上におしはかり思ひたまふるに、貫之ひがことをかくべきにもあらず。たとひあやまちたりとも、みかどの御覽じとがめずやは侍らむ。左かあれば古今の詞につきてなずらへ試みるに、ならの御時よりひろまりたると侍る、赤人人丸がおひ奉れる御世と聞こえたり。この人々をおきて又すぐれたる人々も吳竹のよゝに聞こえかた糸のよりよりに絶えずなむありける。さきの歌をおはせてなむ、萬葉集となづけられたりける」といふは赤人、人丸が、のちの世々に、よめる歌どもをおはせて、大同の御代には作られたりともや心得べからむ。ならの帝といふは、同名におはしませばひとつことなるやうなれども、萬葉集の

時には、人丸がよのおはねばひとつ世にはあらざるべし。

「たつ田川紅葉みだれて流るめりわたらばにしき中や絶えなむ」

とよませ給へるは、人丸がおひ奉れる御代の御歌なるべきにやあらむ。古今序に、「たつた川にながるゝ紅葉は、帝の御目には錦と見え、吉野山の櫻は、人丸が目には雲かとぞおぼえける」とあれば、後のみかどの御製とは、聞こえざるべし。

「ふるさとゝ成りにしならの都にも色はかはらず花ぞ咲きける」

とよませ侍りけるは、大同の御製なるべし。昔の奈良のみかどならば、ふるさとゝよませ給ふべからず。この御歌は、ならのみかどの御歌とて、古今の春の下に入れ奉れり。もみぢの錦の御歌は、秋の下に、「よみ人志らず、ある人ならのみかどの御歌なり」となむ侍るも、少しのかはる志るしなきにもあらず。志かあるのみにあらず、もし同じみかどゝ申すはおぼつかなき所多く、もしあらぬ御時ならば、同じ御名にてまがはせ給ひぬべき上に、目録どもにも、

「はぎの露玉にぬかむととれはけぬよし見む人は枝ながら見よ」

といふ御歌も、よみ人志らず。ある人ならのみかどの御歌なりといふを加へて、三首おなじ御時なるやうに見ゆるは、目録のあやまれるにやあらむ。おぼつかなき事、よく思ひ定めつべからむ人に尋ね申させ給ふべき事なるべし」といふに、「それは忽に定めえがたく侍るなり。又このついでに尋ね申さむ」とて「萬葉集は憶良が撰べるといふ人あるは、志か侍りけるにや」と問へば、「いかでか。さやうのことは、その時の人にも侍らず、その道にもあらぬ身

は、こまかにきゝとゞむべきにも侍らず。志かは侍れど、憶良が類聚歌林などには、遙かなる人とみえてこそ、萬葉にはひきのせ侍るなれ。天平五年歌にも、筑前守憶良などいひて侍るあるは、遙かに先の人にこそ侍るなれ。大同にはあらずや侍りけむ」などぞ元申すめりしか。

作物語のゆくへ

又ありし人の、「誠にや、むかしの人の作り給へる源氏の物語に、さのみかたもなきことのなよび艶なるを、もしは草かきあつめ給へるによりて、後の世のけぶりとのみ消え給ふこそ、えんにえならぬつまなれども、わぢきなくとぶらひ聞こえまほしく」などいへば、返事には、「誠に世の中にはかくのみ申し侍れど、ことわり知りたる人の侍りしは、やまとにもろこしにもふみつくり、人の心をゆかし、暗き心を導くは常のことなり。妄語などいふべきにはあらず。わが身になきことをあり顔に、げにげにといひて、人にわろきみを思はせなどすることそ、そらごとなどはいひて、罪うることにてはあれ。これはあらましことなどやいふべからむ。綺語とも雑穢語などはいふとも、さまで深き罪にはあらずやあらむ。生きとしいける者の命を失ひ、あるとしある人の寶を奪ひとりなどする、深き罪あるも、奈落の底に沈むらめども、いかなる報いありなど聞こゆることもなきに、これは却りて怪しくもおぼゆべき事なるべし。人の心つけむことは功徳とこそなるべけれ。なさけをかけ、艶ならむによりては、輪廻のごふとはなるとも、奈落に沈む程のことやは侍らむ。此の世のことだに知りがたくはべれど、もろこしに白樂天と申したる人は、なゝそぢの巻き物をつくりて、詞をいろへたと

へをとりて、人の心を進め給ふなどきこえ給ふも、文珠の化身とこそは申すめれ。佛も譬喩經などいひてなき事を作り出だし給ひて説きおき給へるは、虚妄ならずとこそは侍るなれ。女の御身にて、さばかりのことは作り給へるは、たゞ人にはおはせぬやうもや侍らむ。妙音觀音など申すやんごとなきひじりたちの、女になり給ひて、法を説きてこそ人を導き給ふなれ」といへば、供に具したるわらはの聞きていふやう、「女になりて導きたまふことは、淨徳夫人のみかどを導きて、佛のみもとにすゝめなど云給ひ、勝鬘夫人の親にふみかはして、佛をほめ奉りて、世の末までも傳へなどし給ふこそ、普門の示現などもおぼえめ。これはをとこ女のえんなることをげにげにとかきあつめて、人の心に云めさせむ、なさけをのみ盡さむことは、いかゞは、たふときみのりとも思ふべき」といへば、「誠に然はあれども、事ざまのなべてならぬ、めでたさの餘りに思ひつゞけ侍れば、物語などいひて、ひと巻ふた巻のふみにもあらず、六十帖などまで作り給へるふみの、少しあだにかたほなることもなくて、今も昔もめでもてあそび、みかどきさきよりはじめて、えならずかきもち給ひて、御寶物とし給ひなどするも世にたぐひなく、また罪ふかくおはすると世に申しおへるにつけても、なかなかあやしくおぼえてこそ申し侍れ。罪ふかきさまをも云めして、人に佛のみなをも唱へさせ、とぶらひ聞こえむ人の爲に、導き給ふはしとなりぬべく、なさけある心ばへを云らせて、うき世に沈づまむをも、よき道に引きいれて、世のはかなき事を見せて、おしき道を出だして佛の道にすゝむ方もなかるべきにあらず。其の有樣、思ひつゞけ侍るに、あるは別れをい

たみて優婆塞の戒をたもち、あるは女のいさぎよき道を守りていさめごとに違はず、この世を過ぐしなど玄給へるも、人の見ならふ心もあるべし。又みかどの覚えかぎりなくてえならぬ宿世おはすれども、夢まぼろしの如くにてかくれ給へるなど、世のはかなきことを見む人思ひ去りぬべし。又みかどの位をすてゝ、おとうとに譲り給ひて、西山の麓に住み給ふなども、佛の道に入りたまふ、深きみのりにもかよふ御有様なり。提婆品に説かれ給へる、昔のみかどの御有様も思ひ出でられさせ給ふ。ひとへに、をとこ女のことのみやは侍る。おほかたは智恵をはなれては、開にまどへる心をひるがへす道なし。惑ひの深きによりて、うき世の海のそこひなきにはたゞよふわざなりとぞ、世親菩薩のつくり給へる文のはじめつ方にものたまはすなれば、ものゝ心を辨へ、悟りの道にむかひて、佛のみのりを廣むる種として、あらきことばもなよびたる詞も、第一義とかにもかへしいれむは佛の御志なるべし。かくは申せども、濁りに玄まぬ法のみことならねば、露霜とむすびおき給へることの葉もおほく侍らむ。のりのおさ日によせて、たれもたれもなさけ多く、おはしまさむ人は、もてあそばせ給はむにつけても、心に玄めておぼさむによりても、とぶらひ聞こえたまはむぞいとゞ深きちぎりなるべき」などいひつゞけ侍るに、行く末も忘れてなほきかまほしく、なごり多く侍りしかども、日くれにしかばたち別れ侍りにき。いかでか又あひ奉らむずる。「來む世にうゑきのもとに佛となりて、これがやうにのり説きて、人々に聞かせ奉らばや」など申しゝこそ唯人とも覚え侍らざりしか。その程と申しゝ所尋ねさせ侍りしかども、え又もあはでなむ。人を

つけてたしかに見おかせでと、悔しくのみおぼえてこそすぎて侍れ。

今鏡　終

増鏡

さゝらぎの中の五日は鶴の林にたきゞつきにし日なれば、かの如來三傳の御かたみのむつましさに、嵯峨の清涼寺にまうで丶、常在靈鷲山など心のうちに唱へて拜み奉る。傍にやそぢにもや餘りぬらむと見ゆる尼ひとり、鳩の杖にかゝりてまゐれり。とばかりありて『たけく思ひたちつれど、いと腰いたくて堪へがたし。今宵はこの局にうちやすみなむ。坊へ行きてみおかしの事などいへ』とて、具したる若き女房のつきづきしきほどなるをばかへしぬめり『釋迦牟尼佛』とたびたび申して、夕日のはなやかにさし入りたるをうち見やりて『哀にも山の端近く傾ぶきぬめる日影かな。我が身のうへの心ちこそすれ』とてよりゐたるけしき何となくなまめかしく、心あらむかしと見ゆれば、近くよりて『いづくよりまうで給へるぞ。ありつる人のかへりこむほど御伽せむはいかゞ』などいへば『このわたり近く侍れど、年のつもりにや、いとはるけき心ちし侍る。おはれになむ』といふ。『さてもいくつにかなり給ふらむ』と問へば『いさよくも我ながら思ひ給へわかれぬほどになむ。百とせにもこよなく餘り侍りぬらむ。來し方ゆく先ためしもありがたかりし世のさわぎにも、この御寺ばかりはつゝがなくおはします。なほやんごとなき如來の御光なりかし』などいふも古代にみやびかなり。年のほどなど聞くもめづらしきこゝちして、かゝる人こそ昔ものがたりもすなれと思ひ

つけてたしかに見おかせでと、悔しくのみおぼえてこそすぎて侍れ。

今鏡　終

增鏡

さゝらぎの中の五日は鶴の林にたきゞつきにし日なれば、かの如來三傳の御かたみのむつましさに、嵯峨の清涼寺にまうで丶、常在靈鷲山など心のうちに唱へて拜み奉る。傍にやそぢにもや餘りぬらむと見ゆる尼ひとり、鳩の杖にかゝりてまゐれり。とばかりありて『たけく思ひたちつれど、いと腰いたくて堪へがたし。今宵はこの局にうちやすみなむ。坊へ行きてみおかしの事などいへ』とて、具したる若き女房のつきづきしきほどなるをばかへしぬめり。『釋迦牟尼佛』とたびたび申して、夕日のはなやかにさし入りたるをうち見やりて『哀にも山の端近く傾ぶきぬめる日影かな。我が身のうへの心ちこそすれ』とてよりゐたるけしき何となくなまめかしく、心あらむかしと見ゆれば、近くよりて『いづくよりまうで給へるぞ。ありつる人のかへりこむほど御伽せむはいかゞ』などいへば『このわたり近く侍れど、年のつもりにや、いとはるけき心ちし侍る。おはれになむ』といふ。『さてもいくつにかなり給ふらむ』と問へば、『いさよくも我ながら思ひ給へわかれぬほどになむ。百とせにもこよなく餘り侍りぬらむ。來し方ゆく先たのしもありがたかりし世のさわぎにも、この御寺ばかりはつゆがなくおはします。なほやんごとなき如來の御光なりかし』などいふも古代にみやびかなり。年のほどなど聞くもめづらしきこゝちして、かゝる人こそ昔ものがたりもすなれと思ひ

いでられてまめやかにかたらひつゝ、「昔の事の聞かまほしきまゝに、年のつもりたらむ人もがなとおもひ給ふるに、うれしきわざかな。少しのたまはせよ。おのづからふるき歌など書きおきたるものゝ片はし見るだに、その世にあへる心ちするぞかし」といへば、すげみたる口うちほゝゑみて「いかでか聞えむ。若かりし世に見聞き侍りしことは、こゝらの年頃にむば玉の夢ばかりだになくおぼゝれて何のわきまへか侍らむ」とはいひながらけしうはあらず、あへなむと思へるけしきなれば、いよいよいひはやして「かの雲林院の菩提講に参りあへりし翁の言の葉をこそ假名の日本紀にはすめれ。又かの世繼がうまごとかいひしつくもがみの物語も人のもてあつかひぐさになれるは、御ありさまのやうなる人にこそ侍りけめ。なほのたまへ」などすかせば、さは心うべかめれど、いよいよ口すげみがちにて「そのかみは、げに人の齢もたかく、きもつよかりければ、それに隨ひてたましひもわきらかにてや、古か聞えつくしけむ。わさましき身はいたづらなる年のみつもれるばかりにて、昨日今日といふばかりの事をだに、目も耳もおぼろになりにて侍れば、ましていと怪しきひが事どもにこそは侍らめ。そもさやうに御覽じ集めけるふる事どもはいかにぞ」といふ。「いさたゞおろおろ見及びしものどもは水鏡といふにや。神武天皇の御代よりいと荒らかに云るせり。その次には大鏡、文徳のいにしへより後一條の御門まで侍りしにや。又世繼とか四十條のさうしには延喜より堀川の先帝まではすこしこまやかなる。又なにがしのおとゞの書き給へると聞き侍りし今鏡には後一條より高倉院までありしなめり。まことやいや世繼は隆信朝臣の、後

鳥羽院の御位の御程までを云るしたりとぞ見え侍りし。その後のことなむいとおぼつかなくなりにけり。おぼえ給へらむ所々にてものたまへ。こよひ誰も御伽せむ。かゝる人にあひ奉れるも云かるべき御契おらむものぞ」などかたらへば「そのかみの事はいみじうたどたどしけれど、まことに事のつゞきを聞えざらむもおぼつかなかるべければ、たえだえに少しなむ。ひが事ども多からむかし。そはさしなほしたまへ。いとかたはらいたきわざにも侍るべきかな。かのふるき事どもにはなぞらへ給ふまじうなむ」とて、

「おろかなる心や見えむます鏡ふるきすがたにたちはおよばで」

とめなゝかしいでたるもにくからず、いとこだいなり。「さらば今のたまはむ事をも又書き云るして、かのむかしの面影にひとしからむとこそはおぼすめれ」といらへて、

「今もまたむかしをかけばます鏡ふりぬる代々の跡にかさねむ」。

第一　おどろのした

御門はじまり給ひてより八十二代にあたりて後鳥羽院と申すおはしましき。御いみなは尊成、これは高倉院第四の御子。御母は七條院と申しき。修理大夫信隆のぬしのむすめなり。高倉の院御位の御時、后の宮の御方に兵衛督の君とて仕うまつられしほどに、忍びて御覧じはなたずやおはりけむ、治承四年七月十五日に生れさせ給ふ。その年の春の頃、建禮門院后宮と聞えし御腹の第一の御子安徳天皇三つになり給ふに位を譲りて、御門はおり給ひにしかば、平家の一ぞうのみいよいよ時の花をかざしそへて、華やかなりし世なればけちえんにもてな

され給はず。又の年養和元年正月十四日に院さへかくれさせ給ひにしかば、いよいよ位などの御のぞみあるべくもおはしまさゞりしを、かの新帝平家の人々にひかされて、遥なる西の海にさすらへ給ひにし後、後白川の法皇、御うまごの宮たちわたし聞えて見奉り給ふ時、三の宮を次第のまゝにおぼされけるに、法皇をいといたう嫌ひ奉りて泣き給ひければ、「あなむづかし」とてゐてはなち給ひて、「四の宮こゝにいませ」とのたまふに、やがて御膝のうへに抱かれ奉りて、いとむつましげなる御けしきなれば、「これこそまことのうまごにおましけれ。故院の兒おいにもふぜいみなど覺え給へり。いとらうたし」とて、壽永二年八月二十日、御年四つにて位に即かせ給ひけり。内侍所神璽寶劒は讓位の時必ずわたる事なれど、先帝筑紫へゐてゐおはしにければ、こたみ始めて三種の神器なくて、めづらしきためしになりぬべし。後にぞ内侍所ざるしの御箱ばかりかへりのぼりにけれど、寶劒はつひに先帝の海に入り給ふ時、御身にそへて沈み給ひけるこそいとくちをしけれ。かくてこの御門、元暦元年七月廿八日御即位、そのほどの事常のまゝなるべし。平家の人々いまだ筑紫にたゞよひて、先帝とやられていとかたじけなし。同じ年の十月廿五日にごけい。十一月十八日大嘗會なり。しゆきがたの御扉風のうた、兼光の中納言といふ人、丹波の國長田村とかやを、

「神代よりけふのためとや八束穂にながたのいねのしなひそめけむ」。

御門いとおよすげてかしこくおはしませば、法皇もいみじううつくしとおぼさる。文治二年

十二月一日御ふみはじめせさせ給ふ。御年七つなり。同六年女御まゐりたまふ。月輪關白殿の御むすめなり。さきさきだちわりき。後には宜秋門院と聞え給ひし御事なり。この御腹に春花門院と聞えたまひし姫宮ばかりおはしましき。建久元年正月三日、御年十一にて御元服ありたまふ。おなじき三年三月十三日に、法皇かくれさせ給ひにし後は、御門ひとへに世をおさめしめして四方の海波おさまりかに、ふく風も枝をならさず、世をさまり民やすくして、あまねき御うつくしみの浪秋津島の外までながれ、おげき御惠筑波山のかげよりもふかし。よろづの道々にあきらけくおはしませば、國に才ある人おほく、むかしに恥ぢぬ御代にぞありける。中にもおさき島の道なむすぐれさせたまひける。御歌かず多らず、人の口にある中にも、

「奥山のおどろの下もふみわけてみちある世ぞと人におらせむ」

と侍るこそまつりごと大事とおぼされけるほど多るく聞えて、いといみじくやんごとなくはべれ。建久九年正月、第一の御子（土御門院）四つになり給ふに御くらゐゆづり申させ給ひておりゐ給ふ。位におはします事十五年なりき。今日明日はたちばかりの御齢にていとまたしかるべき御事なれども、よろづ所せき御ありさまよりはなかなかやすらかに、御幸など御心のまゝならむとにや。世を多ろしめす事は今もかはらねばいとめでたし。鳥羽殿白河殿などもしゐりせさせ給ひて常に渡りすませ給へど、猶又水無瀬といふ所に、えもいはずおもしろき院づくりして、多ば多ば通ひおはしましつゝ、春秋の花もみぢにつけても御心ゆくかぎり世をひゞかしてあそびをのみぞ多たまふ。所がらもはるばると川にのぞめる眺望いとおもし

ろくなむ。元久の頃、詩に歌をおはせられしにも、とりわきてこそは、

「見わたせば山もとかすむみなせ川ゆふべは秋となにおもひけむ」。

かやぶきの廊渡殿などはるばると、艶にをかしうせさせ給へり。御まへの山より瀧おとされたる石のたゝずまひ、苔ふかきみ山木に枝さしかはしたる庭の小松も、げにげに千世をこめたるかすみのほらなり。せんざいつくろはせ給へる頃、人々あまた召して御遊などありける後、定家の中納言いまだ下臈なりける時に奉られける。

「ありへけむもとの千年にふりもせでわか君ちぎるみねのわか松。

君が代にせきいるゝ庭を行く水の岩こすかずは千世も見えけり」。

今の御門の御諱は爲仁と申しき。御母は能因法印といふ人のむすめ、宰相の君とて仕うまつられけるほどに、この御門生れさせ給ひて後には内大臣通親の御子になり給ひて、すゑには承明門院ときこえき。かのおとゞの北の方の腹にておはしければ、もとより後のおやなるに、御さいはひさへひき出で給ひしかば、まことの御むすめにかはらず。この御門もやがてかの殿にぞ養ひたてまつらせ給ひける。かくて建久九年三月三日御即位、十月廿七日に御禊、十一月は例の大嘗會なり。元久二年正月三日御かうぶりをたまひて、いとなまめかしくうつくしげにぞおはします。御本性も父御門よりは少しぬるくおはしましけれど、御情ふかう物のおはれなど聞し召しすぐさずぞありける。今の攝政は院の御時の關白基通のおとゞ、その後は後京極殿よしつねときこえ給ひし、いと久しくおはしき。このおとゞはいみじき歌のひじりにて、

院のうへおなじ御心に和歌の道をぞ申し行はせ給ひける。文治の頃千載集ありしかど、院いまだきびはにおはしましゝかばにや御製も見えざめるを、當代位の御程に又集めさせ給ふ。土御門の内のおとゞの二郎君、右衛門督通具といふ人をはじめにて、有家の三位、定家の中納言家隆雅經などにのたまはせて、昔より今までの歌をひろく集められる。おのおの奉れるうたゞを、院の御まへにて自らみがきとゝのへさせ給ふさま、いとめづらしくおもしろし。この時も先に聞えつる攝政殿とりもちて行はせ給ふ。大かたいにしへならの御門の御代に始めて右大臣橘の朝臣勅を承りて、萬葉集を撰びしよりこのかた、延喜のひじりの御時の古今集、友則、貫之、躬恒、忠岑、天暦のかしこかりし御代にも、一條攝政殿謙徳公いまだ藏人の少將など聞えける頃、和歌所の別當とかやにて、梨壺の五人に仰せられて、後撰集は集められけるとぞ。ひがぎゝにや侍らむ。そののち拾遺集は花山の法皇の自ら撰ばせまこへるとぞ。白河院位の御時は、後拾遺集通俊治部卿うけたまはる。崇徳院の詞花集は、顯輔三位えらぶ。又白川の院おりゐさせ給ひてのち、金葉集重ねて俊頼の朝臣におほせて撰ばせ給ひしこそ、はじめ奏したりけるに輔仁の親王の御なのりを書きたる、わろしとてかへされ、又奉れるにも何事とかやありて三度奏して後こそをさまりにけれ。かやうのためしもおのづからの事なり。おしなべては撰者のまゝにて侍るなれど、こたみは院のうへみづから和歌の浦におりたちあさらせ給へば、まことに心ことなるべし。この撰集よりさきに千五百番の歌合せさせ給ひしにもすぐれたるかぎりを撰ばせ給ひて、その道のひじりたち判じけるに、やがて院も

加はらせ給ひながら「猶このなみには立ち及びがたし」とひげせ給ひて、判のことばをば云るされず、御歌にてまさり劣れる志ばかりをあらはし給へる、なかなかいと艶に侍りけり。上のその道をえ給へれば、下もおのづから時を知るならひにや男も女もこの御代にあた りて、よき歌よみ多く聞え侍りしなかに、宮内卿の君といひしは村上の御門の御後に俊房のばかりにうせにし人の子なり。まだいと若きよはひにて、そこひもなく深き心ばへをのみよみしこそいとありがたく侍りけれ。この千五百番の歌合の時、院のうへのたまふやう、「こたみは皆世にゆりたるふるき道のものどもなり。宮内卿はまだ云かるべけれども、けしうはあらずと見ゆめればなむ、かまへてまろがおもておこすばかりよき歌つかうまつれ」とおほせ見えける。さてその御百首の歌いづれもとりどりなる中に、

「うすくこき野邊のみどりの若草にあとまで見ゆる雪のむらぎえ」。

草のみどりのこきうすき色にて、こぞのふる雪の遅く疾く消えけるほどを、推しはかりたる心ばへなど、まだ云からむ人はいと思ひよりがたくや。この人年つもるまであらましかば、しくなむ。かくてこの度撰ばれたるをば、新古今といふなり。元久二年三月廿六日、竟宴といふ事春日殿にて行はせたまふ。いみじき世のひゞきなり。かの延喜のむかしおぼしよそへら

れて、院の御製、

「いそのかみふるきを今にならべこしむかしの跡を又たづねつゝ」。

攝政殿（よしつねのおとゞ）

「去き島ややまとことのは海にしてひろひし玉はみがゝれにけり」。

つぎつぎずんながるめりしかど、さのみはうるさくてなむ。何となくわけくれて承元二年にもなりぬ。十二月廿五日二の宮御かうぶり去給ふ。修明門院の御腹なり。この御子を院かぎりなくかなしきものに思ひ聞えさせ給へれば、になくきよらをつくし、いつくしうもてかしづき奉り給ふ事なのめならず。つひにおなじき四年十一月に御位につけ奉り給ふ。もとの御門、今年こそ十六にならせ給へば、いまだ遙なるべき御さかりに、かゝるをいと飽かずおはれとおぼされたり。永治のむかし鳥羽の法皇、崇徳院の御心もゆかぬにおろし聞えて、近衛院をすゑ奉り給ひし時は御門いみじう去ぶらせ給ひて、その夜になるまで勅使を度々奉らせたまひつゝ、内侍所劔璽などをも渡しかねさせ給へりしぞかし。さてその御憤のするにてこそ保元のみだれもひき出で給へりしを、この御門はいとあてに大どかなる御本性にて、おぼしむすぼゝれぬにはあらねども、けしきにも漏し給はず。世にもいとあへなき事に思ひ申しけり。承明門院などはまいていと胸いたくおぼされけり。その年の去はすに太上天皇のそんがうあり。新院と聞ゆれば、父の御門をば今は本院と申す。猶御まつり事はかはらず。今の御門は十四になり給ふ。御いみな守成と聞えしにや。建暦二年十一月十三日大嘗會なり。新

院の御時も仕うまつられたりし資實の中納言に、この度も悠紀かたの御屏風のうためさるながら山、

「すがのねのながらの山のみねの松吹きくる風もよろづ代のこゑ」。

かやうの事は皆人のゑろしめしたらむ。ことわたらしく聞えなすこそおいのひが事ならめ。この御代にはいとけちえんなる事おほくところどころの行幸ゑげくこのましきさまなり。建保二年春日の社に行幸ありしこそ、ありがたき程いどみつくしおもしろうも侍りけれ。さてそのまたの年、御百首の御(二字抹消)歌よませ給ひけるに、こぞの事おぼしいでゝ、内の御製、

「かすが山こぞのやよひの花の香にそめしこゝろは神ぞゑるらむ」。

御心ばへは新院よりも少しかどめいて、あざやかにぞおはしましける。御ざえもやまとも ろこしかねて、いとやんごとなくものし給ふ。朝夕の御いとなみは、和歌の道にてぞ侍りける。末の世に八雲などいふもの作らせたまへるもこの御門の御事なり。攝政殿の姫君まゐり給ひて、いと華やかにめでたし。この御腹に建保二依年十月十日一の御子生れ給へり。いよいよものあひたる心ちして世の中ゆすりみちたり。十一月廿一日やがてみこになし奉り給ひて、おなじき廿六日坊に居給ふ。いまだ御いかだにきこしめさぬに、いちはやき御もてなしめづらかなり。心もとなくおぼされければなるべし。今一しほ世の中めでたく定りはてぬるさまなめり。新院はいでやとおぼさるらむかし。かくて院のうへは、ともすれば水無瀬殿にのみ渡らせ給ひて、琴笛の音につけ、花もみぢのをりをりにふれて、よろづのあそびわざをのみ

盡しつゝ御心ゆくさまにて過させ給ふ。まことによろづ世もつきすまじき御世のさかえ、次々今よりいとたのもしげにぞ見えさせ給ふ。御碁うたせ給ふついでに若き殿上人どもを召して、これかれ心のひきびきにいどみ爭はせ給へば、あるは小弓雙六などいふ事まで思ひ思ひに勝ちまけをさうどきあへるも、いとをかしう御覽じて、さまざまの興あるのり物どもとうでさせ給ふとて、なにがしの中將を御使にて修明門院の御かたへ「何にてもをのこどもに賜はせぬべからむのりもの」と申させ給ひたるに、とりあへず小さき唐櫃のかなものしたるが、いとおもらかなるを參らせられたる。この御つかひのうへ人、何ならむといとゞいぶかしくて、片端はのあけて見るに錢なり。いと心えずなりて、さとおもてうちあかみて、あさましと思へるけしきを院御らんじおこせて「朝臣こそむげに口惜しくはありけれ。かばかりの事知らぬやうやはある。いにしへより殿上ののり弓といふ事にはこれをこそかけものにはせしか。されば今かけものと聞えたるに、これをしもいだされたるなむ、いにしへの事知り給へるこそいたきわざなれ」とはゝゑみてのたまふに、さは惡しく思ひけりとこゝちさわぎておぼゆべし。大かたこの院のうへはよろづの事にいたりふかく、御心もはなやかに、物に委しうなどぞおはしましける。夏の頃水無瀨殿の釣殿にいでさせ給ひて、ひ水めして水飯やうのものなど若き上達部殿上人どもにたまはせて、おほみきまゐるついでにも、「あはれいにしへの紫式部こそはいみじくはありけれ、かの源氏物語にも近き川のあゆ、西川より奉れるいしぶしやうのもの、御まへにて調じてとかけるなむすぐれてめでたきぞとよ。唯今さ

やうの料理つかまつりてむや」などのたまふを、秦のなにがしとかいふ御随身、高欄のもと近く侍ひけるが承はりて、池の汀なるさゝ〳〵を少しえさせて、白きよねを水に洗ひて奉れり。「ひろはゞ消えなむとにや、これもけしかるわざかな」とて御ぞぬぎてかづけさせ給ふ。御かはらけたびたびきこしめす。その道にもいとはしたなうものし給ふ。何事もわいぎやうづきめでたく見えさせ給ふ御有さまなど、千とせを經とも飽く世あるまじかめり。また清撰の御歌合とてかぎりなくみがゝせ給ひしも、水無瀬殿にての事なりしにや。當座の衆儀判なれば、人々の心ちいとゞおき所なかりけむかし。建保二年九月のころ、すぐれたるかぎりぬきいで給ふめりしかば、いづれかおろかならむ。中にもいみじかりし事は第七番に左、院の御歌、

「おかしがた浦路はれゆくあさなぎに霧にこぎいるあまの釣舟」

とありしに、きたおもての中に藤原の秀能とて年ごろもこの道にゆりたるすきものなれば、召し加へらるゝ事常のことなれど、やんごとなき人々の歌だにも、あるは一首二首三首にはすぎざりしに、この秀能九首までめされて、さかも院の御かたてにまゐれり。さておりつるあまのつり舟の御歌の右に、

「契りおきし山の木の葉の下もみぢそめしころもに秋風ぞふく」

とよめりしは、その身のうへにとりてながき世のめいぼく何にかはあらむとぞきゝ侍りし。むかしの躬恒が御はしのもとに召されて、「ゆみはりとしもいふ事は」と奏して、御ぞたまはりしをこそいみじきことにはいひ傳ふめれ。又貫之が家に枇杷のおとゞ、魚袋の歌のかへし

とぶらひにおはしたりしをも、みちのかうみやうとこそ世繼には書きて侍れ。近き頃は西行法師ぞ北面のものにて、世にいみじき歌のひじりなめりしか。今の代の秀能は、ほとほとふるきにも立ちまさりてや侍らむ。この度の御歌合、大方いづれとなくうち見わたして、すぐれたるかぎりをえり出でさせ給ひしかば、おのおのむらむらにぞ侍りたりける。吉水の僧正四悉ときこえし、又たぐひなき歌のひじりにていましき。それだに四首ぞ入りたまひにける。さのみは事長ければもらしぬ。この僧正、世にもひとおもく、山の座主にてものし給ふ事も年久しかりし。その程にやんごとなきかうみやう數知らずおはせしかば、崇められ給ふさまも二なくものし給ひしかど、猶飽かずおぼす事やありけむ、院に奉られける長歌、

「さてもいかに　わしのみ山の　つきのかげ　鶴のはやしに
いりしより　へにける年を　かぞふれば　二千とせをも
過ぎはてゝ　のちの五つの　もゝとせに　なりにけること
かなしけれ　おはれ御法の　水のあわの　消えゆく頃に
なりぬれば　其にこゝろを　すましてぞ　わがやま河に
去づみゆく　心あらそふ　のりの師は　我もわれもと
わをやぎの　いと所せく　みだれきて　花ももみぢも
散りゆけば　木ずゑ跡なき　みやまべの　道にまよひて
すぎながら　獨りこゝろを　とぶむるも　かひも渚の

玄がのうら　跡たれまし〳〵　日よしのや　神のめぐみを
たのめども　人のねがひを　みつかはの　ながれも淺く
なりぬべし　峯のひじりの　すみかさへ　こけの下にぞ
うもれ行く　道はらふべき　ひともがな　あなうの花の
世のなかや　はるの夢路は　むなしくて　秋のこずゑを
おもふより　ふゆの雪をも　かれかとふ　かくてや今は
あと絶えむ　と思ふからに　くれはとり　あやしき夜の
わがおもひ　消えぬばかりな　たのみきて　猶さりともと
はなの香に　玄ひて心を　つくばやま　繁きなげきの
ねをたづね　沈むむかしの　たまをとひ　救ふこゝろは
ふかくして　勉めゆくこそ　あはれなれ　みやまの鐘を
つくづくと　わが君が代を　おもふにも　みねの松かぜ
のどかにて　千代に千年を　そふるほど　法のむしろの
はなのいろ　野にも山にも　にほひてぞ　人をわたさむ
はしとして　暫しこゝろを　やすむべき　遂にはいかゞ
あすかがは　あすより後や　我がたちし　柚のたづきの
ひゞきより　みねの朝ぎり　はれのきて　くもらぬ空に

たちかへるべき」。

返歌

「さりともとおもふ心ぞなほふかきたえでたえゆく山川の水」。

定家の中將、折ふし御まへにさぶらひければ「この返しせよ」とてさしたまはするに、いと疾く書きて御覽ぜさせけり。

「ひさかたの　あめつち共に　かぎりなき
ちかひてし　神もろともに　まもれとて
いのりつゝ　むかしの人の　玄めてける
いろかへず　幾としどしを　へだつとも
ながめやる　みやこの春を　となりにて
おとろへず　おとろのしたの　思ひおきし
さだめなき　匂はむものと　みだれつゝ
かやが下葉に　くれたけに
それならぬ　うき節玄げき　あらしつゝ
うぐひすの　ふるすは雪に　玄ひしばの
たにがくれ　こりつむ嘆き　玄ひて昔に
かへされぬ　葛のうら葉は　うらむとも
やまたかみ　雲ゐのそらに　まじりつゝ　天つ日つぎを　我がたつ柚を　照る日を代々に

たすけこし　星のやどりを　ふりすてゝ　獨りいでにし
わしのやま　世にも稀なる　あとゞめて　深きながれに
むすぶてふ　のりの清水の　そこすみて　濁れる世にも
にごりなし　ぬまの葦まに　かげやどす　秋のなかばの
つきなれば　なほ山のはを　ゆきめぐり　そらふく風を
あふぎても　空しくなさぬ　ゆくすゑを　みつの川なみ
たちかへり　心のやみを　はるくべき　日よしの御影
のどかにて　君をいのらむ　よろづ代に　千世を重ねて
まつが枝を　翼にならす　つるの子の　譲るよはひは
わかの浦や　今はたまもを　かきつめて　例しもなみに
みがきおく　わが道までも　たえせずば　ことのは毎の
いろいろに　のちみむ人も　戀ひざらめかも」。

返歌

「君をいのる心ふかくばたのむらむたえてはさらに山川の水」。

新院ものどかにおはしますまゝに、御歌をのみよませたまへど、萬の事もていでぬ御本性にて、人々など集めて、わざとあるさまには好ませ給はず。建保の頃内々百首の御歌詠み給へりしを、家隆の三位又定家の治部卿の許などへ、「いふかひなきちごのよめる」とて遣して見

せられたまひしに、いづれもめでたくさまざまなるなかに、懐舊の御歌に、

「秋の色をおくりむかへて雲のうへになれにし月もものわすれすな」

とある所に、定家の君驚きかしこまりて、うらがきに、あさましくはかられ奉りける事など云るして、

「あかざりし月もさこそは思ふらめふかきなみだもわすられぬよを」

と奏せられたり。院もえんおりて御覽ずべし。げにいかゞ御心動かずしもおはしまさむとその世の事かたじけなくなむ。今もすこし世の中隔たれるさまにてのみおはしますこそ、いといとほしき御ありさまなめれとぞ。

第二　新島もり

猛きものゝふのおこりを尋ぬれば、いにしへ田村などいひける將軍どもの事は、耳遠ければさしおきぬ。そのかみより今まで源平の二つながれは代時により折に隨ひて大やけの御守りとはなりにける。桓武天皇と聞えし御門をば柏原の御門とも申しけり。その御子に式部卿の御子と聞えしより五代の末に、平將軍貞盛といふ人、維衡維時とて二人の子をもたりけり。間近く築えし西八條の清盛のおとゞはかの太郎維衡より六代の末なりき。その一つ門亡びしかば、この頃は僅にあるかなきかにぞさまよふめる。さてかの維時が名殘はひたすらに民となりて、平四郎時政といふもののみぞ伊豆の國北條の郡とかやにあめる。それも維時には六代の末なるべし。又源氏武者といふも清和の御門或は宇多の院などの御後どもなり。二

條の院の御時平治のみだれに、伊豆の國蛭が小島へ流されし兵衛のすけ頼朝は清和の御門より八代のながれに六條の判官爲義といひし者のうまごなり。左馬頭義朝が三男にてなむありける。西八條の入道おとゞ、やうやう榮花衰へむとて後白川院をなやまし奉りしかば、安からずおぼされて、かの頼朝を召しいで、軍を起し給ひしに、去かるべき時やいたりけむ平家の人々は、壽永の秋の木がらしに散りはて、、遂にわたつ海の底のもくづと沈みにし後、頼朝いよいよ權をほどこして更に君の御後見を仕うまつる。相摸の國鎌倉の里といふ所に居りながら、世をばたなごゝろの中に思ひき。皆人去り給へるとなれば、今さらに申すもなかなかなれど、院のうへ位に即かせ給ひしはじめより世のかためとなりて、文治元年四月二のはしをのぼりしも、八島の内のおとゞ宗盛をいけどりの賞と聞ゆ。建久の初めつかた都にのぼる。その勢のいかめしき事いへばさらなり。道すがらおそびものども參る。遠江の國橋本の宿につきたるに、例の遊女おほくえもいはずさうざうきて參れり。頼朝うちほゝゑみて、

「橋本の君になにをか渡すべき」

といへば、梶原平三景時といふ武士とりあへず、

「たゞそま山のくれでおらばや」。

いとおいだてなしや。馬くらこんくゝりものゝおど運び出でゝひけば、喜びさわぐ事かぎりなし。その年の十一月九日權大納言になされて、右近大將をかねたり。去はすの朔日ごろよろこび申して、おなじき四日やがてつかさをば返し奉る。この時ぞ諸國の總追ぶく使といふ事

うけたまはりて地頭職に我が家のつはものどもをなし集めけり。この日本國の衰ふる始めはこれよりなるべし。さてあづまにかへり下るころ、上下いろいろのぬさ多かりしなかに、年ごろもいのりなど云たまひにし吉水僧正、かの長歌の座主のたまひつかはしける、

「あづまぢのかたになこその關の名は君を都にすめとなりけり」。

御かへし、頼朝、

「都には君もゐあふさかちかければなこその關はとはきとを云れ」。

その後もまたのぼりて東大寺の供養にもまうでたりき。かくて新院の御位のはじめつかた、正治元年正月あづまにてかしらおろして、おなじき十三日に年五十三にてかくれにけり。治承四年より天の下にもちゐられて、はたとせばかりや過ぎぬらむ。北の方はさきに聞えつる北條四郎時政がむすめなり。その腹にをのこ二人あり。太郎をば頼家といふ。おとゝをば實朝ときこゆ。大將かくれてのち、兄はやがてたちつぎて、建仁元年六月廿二日從二位、同日將軍の宣旨をたまはる。またの年左衛門督になさる。かゝれども少しおちゐぬ心ばへなどありて、やうやうつはものどもそむきそむきにぞなりにける。時政は遠江守といひて故大將のありし時より私の後見なりしを、まいて今はうまごの世なれば、いよいよ身重くいきほひそふ事かぎりなくて、うけばりたるさまなり。子二人あり。太郎は宗時といふ。次郎は義時といへり。次郎は心も猛くたましひまされるものにて、左衛門督をばふさはしからず思ひて、弟の實朝の君に附きまゐたがひて思ひかゝふる事などもありけり。かうは日にそへて人にもそむ

けられゆくに、いといみじき病をさへして、建仁三年九月十六日とし二十二にてかしらおろす。世の中のこりおほくなに事もあたらしかるべきほどなれば、さこそ口をしかりけめ。をさなき子の一萬といふにぞ世をばゆづりけれどうけひくものなし。入道はかのやまひつくろはむとてかまくらより伊豆の國へいでゆわびに越えたりけるほどに、かしこの修善寺といふ所にてつひにうたれぬ。一萬もやがてうしなはれけり。これは實朝と義時と、ひとつ心にてたばかりけるなるべし。さて今はひとへに實朝故大將の跡をうけつぎて、つかさくらゐくれる賞とぞ聞き侍りし。おなじき六年權大納言になりて大將をかねたり。左馬頭をさへぞつけられける。その年やがて內大臣になりてもなほ大將もとのまゝなり。父にもやゝ立ちまさりていみじかりき。このおとゞは大方心ばへうるはしく、たけくもやさしくもよろづめやすければ、ことわりにも過ぎて、ものゝふのなびき玄たがふさまも代々にもこえたり。いかなる時にかありけむ。

「山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二ごゝろわがあらめやも」

とぞよみける。時政は建保三年にかくれにしかば義時ぞ跡を繼ぎける。故左衞門督の子にて公曉といふ大とこわり。親の討たれにしことをいかでかやすき心あらむ。いかならむ時にかおこなふ。京より尊者をはじめ上達部殿上人おほくとぶらひいましけり。さて鎌倉にうつし

奉れる八幡の御社にじんばいにまうづる。いといかめしきひゞきなれば、國々の武士はさらにもいはず、都の人々も扈從しけり。立ちさわぎのゝしるもの、見る人もおほかるなかに、かの大とこうちまぎれて、女のまねをして白きうす衣ひきをり、おとゞの車よりおるゝほどをさしのぞくやうにぞ見えける。あやまたず首をうちおとしぬ。その程のどよみいみじさ思ひやりぬべし。かくいふは承久元年正月廿七日なり。そこらつどひ集れるものども、たゞあきれたるより外のことなし。京にもきこしめしおどろく。世の中火をけちたるさまなり。扈從に西園寺の宰相中將實氏も下り給ひき。さならぬ人々もなくなく袖をしぼりてぞ上りける。いまだ子もなければ立ちつぐべき人もなし。事去づまりなむほどゝて、故おとゞの母北の方二位殿政子といふ人、二人の子をもうしなひて、涙はすまもなく去をれすぐすをぞ、將軍に用ゐける。かくてもさのみはいかゞにて、「君だち一所下し聞えて將軍になし奉らせ給へ」と公經のおとゞに申しのぼせければ、あへなむとおぼす所に、九條の右佐大臣道家殿のうへは、このおとゞの御むすめなり。その御腹の若君の二つになり給ふを、下しきこえむと九條殿のたまへば、御うまごならむもおなじ事とおぼして定め給ひぬ。その年の六月にあづまにゐて奉る。七月十九日におはしましつきぬ。むつきのなかの御ありさまは唯かた去ろなどを祝ひたらむやうにて、萬の事さながら右京權大夫義時朝臣心のまゝなり。一の人の御子の將軍になり給へるはこれぞ始めなるべき。かの平家の亡ぶべき世の末に、人の夢に、「賴朝が後はその御太刀おづかるべし」と春日大明神仰せられけるはこの今の若君の御事にこそありけめ。か

くて世をなびかし去たゝめ行ふ事もほとほとふるきにはこえたり。まめやかにめざましき事も多くなりゆくに、院のうへ忍びておぼしたつ事などあるべし。近くつかうまつる上達部殿上人、まいて北面の下臈西おもてなどいふも皆この方にはのめきたるは、おけくれ弓矢兵仗のいとなみより外の事なし。劔などを御覧じ知ることさへいかで習はせ給ひたるにか、道のものにもやゝたちまさりてかしこくおはしませば、御前にてよきわしきなど定めさせ給ふ。かやうのまぎれにて承久も三年になりぬ。四月二十日御門おりさせ給ふ。春宮四つにならせ給ふにゆづり申させ給ふ。近臣皆この御齢にて受禅ありつれば、これもめでたき御行く末ならむかし。おなじき廿三日院號のさだめありて今おりさせ給へるを新院ときこゆれば、御兄の院をば中の院と申し、父御門をば本院とぞ聞えさする。この程は家實のおとゞ（普賢寺殿の御子）關白にておはしつれど、御譲位の時左大臣道家のおとゞ（光明峯寺殿。）攝政になりたまふ。かのわづまの若君の御父なり。さても院のおぼし構ふる事忍ぶとすれど、やうやう漏れ聞えてひがしざまにもその心づかひすべかめり。わづまの代官にて伊賀の判官光季といふものあり。かつかつかれを御かうじのよし仰せらるれば、御方に參るつはものどもおしよせたるに、遁るべきやうなくて腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院は思し召しけり。わづまにもいみじうあわてさわぐ。さるべくて身のうすべき時にこそあなれと思ふものから、討手の攻め來りなむときにはかなきさまにてかばねをさらさじ、おほやけと聞ゆとも自ら去給ふ事ならねば、かつは我が身の宿世をも見るばかりと思ひをはりて、弟の時房と泰時といふ一男と二人をか

しらとして雲霞のつはものをたなびかせて都にのぼす。泰時を前にするがていふやう、「おのれをこの度都にまねらする事は思ふ所おはし。本意の如く清き玄にをすべし。人にうしろ見えなむには親の顔また見るべからず。今をかぎりとおもへ。賤しけれども義時君の御ために後めたき心やはある。されば横ざまの死をせむ事はかるべからず。心を猛くおもへ。おのれうちかつものならば、二度この足柄箱根山は越ゆべし」などなくなくいひきかす。まことに玄かなり。又親の顔をがまむ事もいとあやふしと思ひて、泰時も鎧の袖玄ぼる。かたみに今やかぎりとあはれに心ぼそげなり。かくてうちいでぬるまたの日、思ひかけぬほどに泰時唯一人鞭を上げてはせきたり。父むねうちさわぎて「いかに」と問ふに、「軍のあるべきやう大方のおきてなどをば仰の如くその心をえ侍りぬ。若し道のほとりにも、計らざるに添く風聲をさきだて、御旗をあげられ、臨幸のげんぢうなる事も侍らむに参りあへらば、その時の玄んたいいかゞ侍るべからむ。この一ことをたづね申さむとて一人馳せ侍りき」といふ。義時とばかりうち案じて、「かしこくも問へるをのこかな。その事なり。まさに君の御輿に向ひて弓を引くことはいかゞあらむ。さばかりの時は兜をぬぎ弓のつるをきりて偏にかしこまりを申して身をまかせ奉るべし。さはあらで君は都におはしましながら、軍兵をたまはせば命をすてゝ千人が一人になるまでも戦ふべし」といひもはてぬに急ぎたちにけり。都にもおぼしまうけつる事なればものゝふども召し集へ、宇治勢田の橋もひかせてかたきを防ぐべき用意心ことなり。公経の大将一人のみなむ御うまごのこともさる事にて、北の方一條中納言

能保といふ人のむすめなり。その母北の方は故大將のはらからなれば、一方ならずおづまを重くおぼしてさしいらへもせず、院の御心の輕き事とおぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗家、また修明門院の御はらからの甲斐の宰相中將範茂などつぎつぎあまた聞ゆれど、さのみは云ふしがたし。いくさにまじりたんでとなき顯密の高僧もかゝる時こそたのもしきわざならめ。おのおの心をいたして仕うまつる。御自らもいみじう念じさせ給ふ。日吉の社に忍びて詣でさせ給へり。大宮の御まへ更け行づまりて御社すごく、燈ろの光かすかなる程に、をさなきわらはの臥したりけるが、俄におびえわがりて院の御まへにたゞまゐりに走り參りて詫宣せけり。「忝くもかく渡りおはしましてうれへ給へば聞きすごし難く侍れど、一とせのみこしふりの時、なさけなく防がせ給ひしかば、衆徒おのれをうらみて陣のはとりにふりすて侍りしかば、空しく馬牛の蹄にかゝりし事は今にうらめしく思ひ給ふるにより、この度のみかたうどはえつかうまつり侍るまじ。七社の神殿をこがねにみがきなさむと承るも、もはらうけ侍らぬなり」とのゝしりて、息も絶えぬるさまにて臥しぬ。聞し召す御心ち物に似ずおさましうおぼさるゝに、唯御涙のみぞいでくる。すぎにし方悔しうとりかへさまほし。さまざまをこたりかしこまり申させ給ふ。山の御輿防ぎ奉りけむこと必ずしも自らおぼしよるにもあらざりけめど、

責一人にといふらむ事にやとあぢきなし。中院はわかで位をすべしゝ給ひしより、言に出でゝこそものし給はねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御さわぎにもとにまじらひ給はざめり。新院はおなじ御こゝろにて、よろづ軍の事などもおきて仰せられけり。いつの年よりも五月雨はれまなくて、富士川天龍などえもいはずみなぎりさわぎて、いかなる龍馬もうちわたしがたければ攻めのぼる武者どもゝあやしくなやめり。かゝれども遂に都に近づくよしきこゆれば、君の御武者もいでたつ。その勢六萬餘騎とかや。宇治勢多へわかちつかはす。世の中ひゞきのゝしるさま、言の葉も及ばずまねびがたし。あるは深き山へ逃げこもり遠き世界におちくだり、すべて安げなくさわぎみちたり。いかゞあらむと君も御心亂れておぼしまどふ。かねては猛く見えし人々もまことのきはになりぬれば、いと心あわたゞしく色を失ひたるさまどもたのもしげなし。六月二十日あまりにや、いくばくのたゝかひだになくて、遂にみかたのいくさ破れぬ。あらいそにたかしほなどのさしくるやうにて泰時と時房とみだれ入りぬればいはむ方なくおきれて上下たゞものにぞあたりまどふ。あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍はからひおきてつゝ、保元のためしにや「院の上、都のほかにうつし奉るべし」と聞ゆれば、女院宮々ところどころにおぼし惑ふ事さらなり。本院は隱岐の國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日をかぎりの御ありき、あさましう哀なり。ものにもがなやとおぼさるゝもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年よそぢに一つ二つや餘らせ給ふらむ。まだいとほし

かるべき御はどなり。信實朝臣召して御姿うつし書かせらる。七條の院へ奉らせ給はむとなり。かくておなじ十三日に御船にたてまつりて遥なるなみぢを去のぎおはします御心ち、この世のおなじ御身ともおぼされず。いみじういかなりける代々のむくいにかとうらめしく。新院も佐渡國にうつらせ給ふ。まことや七月九日、御門をもおろし奉りき。このうつきかとよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にており給へるためしもこれやはじめなるらむ。もろこしにぞ四十五日とかや位におはする例ありけるとぞ、からのふみよみし人のいひし心ちする。それもかやうのみだれやありけむ。さて上達部殿上人、それよりしもはた殘るなく、この事にふれにしたぐひは重く輕く罪にあたるさまいみじげなり。中院はじめより去ろしめさぬ事なれば、あづまにもとがめ申さねど、父の院遥にうつらせ給ひぬるに、のどかにて都にてあらむ事いとおそれありとおぼされて、御心もてその年閏十月十日土佐の國のはたといふ所に渡らせ給ひぬ。去年のきさらぎばかりにや若宮いできたまへり。承明門院の御せうとに通宗の宰相中將とて、若くてうせ給ひにし人のむすめの御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家にとゞめ奉り給ひて、近くさぶらひける北面の下﨟一人召次などばかりぞ、御供つかうまつりける。いとあやしき御手輿にて下らせ給ふ。道すがら雪かきくらし風吹きあれふゞきして、こゝかたゆくさきも見えず、いと堪へがたきに、御袖もいたくこほりてわりなき事おはかるに、

「うき世にはかゝれとてこそうまれけめことわり去らぬわが涙かな」。

せめて近きほどにとあづまより奏したりければ、後には阿波の國にうつらせ給ひにき。さてもこのたび世のありさま、げにいとうたて口惜しきわざなり。あるは父の王をうしなふためしだに一萬八千人までありけりとこそ佛も說き給ひためれ。まして世くだりてのち、もろこしにも日の本にも國を爭ひてたゝかひをなす事數へ盡すべからず。それも皆一ふし二ふしのよせはありけむ。もしはすぢことなる大臣、さらでもおほやけともなるべきざみの、少しのたがひめに世にへだゝりて、そのうらみのするなどより事起るなりけり。今のやうにむげの民とおらそひて君のほろび給へるためし、この國にはいとおまたも聞えざめり。されば承平の將門、天慶の純友、康和の義親いづれも皆猛かりけれど宣旨にはかたざりき。保元に崇德院の世をみだり給ひしだに、故院（後白河）の御位にてうち勝ち給ひしかば、天てる御神もみもすそ川のおなじ流と申しながら、猶時のみかどをまもり給はする事は強きなめりとぞ、ふるき人々もきこえし。又信賴の衞門督、おほけなく二條の院をおびやかし奉りしも遂に空しきかばねをぞ道のほとりに捨てられける。かゝればふりにし事を思ふにも、なほさりともいかでか上皇今上おまたおはします王城のいたづらに亡ぶるやうやはあらむとたのもしくこそおぼえしに、かくいとおやなきわざの出で來ぬるは、この世ひとつの事にもあらざらめども、迷ひのおろかなるまへにはなほいとおやしかりし。四つにて位に即き給ひて十五年おはしましき。おり給ひてのちも土佐院十二年、佐渡院十一年、猶天の下にはおなじ事なりしかば、すべて三十八年が程この國のあるじとして、萬機のまつり事を御心ひとつにをさめ、も

ゝのつかさを去たがへ給へりしそのほど、吹く風の草木の靡かすよりまされる御あり さまにて、遠きをおはれみ近きをなで給ふ御恵、雨のあしよりも去げゝれば、津の國のこやにひまなきまつり事をきこしめすにも、難波の葦のみだれざらむ事をおぼしき。はこやの山の峯の松もやうやう枝をつらねて千世に八千代をかさね、霞の洞の御すまひ、いく春を經ても空ゆく月日のかぎり去らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、わりわりてよしなき一ふしに、今はかく花のみやこをさへたちわかれ、おのがちりぢりにさすらへ、いそのとまやに軒を並べて、おのづからことゝふものとては浦につりするあま小舟、鹽燒くけぶりのなびく方をも我がふる里の去るべにかとばかりながめ過させ給ふ。御すまひどもはそれまでと月日をかぎりたらむだに、あす去らぬ世の後めたさにいと心ぼそかるべし。まいていつをはてとかめぐり逢ふべきかぎりだになく、雲の浪けぶりの波のいくへとも去らぬさかひに世をつくし給ふべき御さまどもゝ口をしといふもおろかなり。このおはします所は人ばなれ里遠き島の中なり。海づらよりは少しひき入りて山かげにかたそへて、大きやかなるいはほのそばだてるをたよりにて、松の柱に葦ふける廊などけしきばかりことそぎたり。まことに柴のいほりのたゞ去ばしと、かりそめに見えたる御やどりなれど、さる方になまめかしくゆゑづきて去なさせ給へり。水無瀬殿おぼしいづるも夢のやうになむ。はるばると見やらるゝ海の眺望、二千里の外ものこりなき心ちするいまさらめきたり。鹽風のいとこちたく吹きくるを聞しめして、

「我こそはにひ玄まもりよおきの海のあらきなみ風こゝろしてふけ。
おなじ世にまたすみのえの月や見む今日こそよそにおきの島もり」。
年もかへりぬ。ところどころ浦々あはれなる事をのみおぼしなげく。佐渡院おけくれ御行をのみ玄給ひつゝ、なほさりともとおぼさる。隠岐には浦より遠のはるばると霞み渡れる空を眺め入りて、過ぎにし方かきつくしおもほしいづるに、行くへなき御涙のみぞとゞまらぬ。
「うらやましながき日かげの春にあひて鹽くむあまも袖やほすらむ」。
夏になりて、かやぶきの軒端に五月雨の玄づくいと所せきも、御覧じなれぬ御心にさまかはりてめづらしくおぼさる。
「あやめふくかやがのきばに風すぎて玄どろにおつるむら雨のつゆ」。
初秋風のたちて、世の中いとゞものかなしく露げさまさるに、いはむ方なくおぼしみだる。
「故郷をわかれぢにおふるくずの葉の秋はくれどもかへる世もなし」。
たとしへなくながめ玄をれさせ給へる夕暮に、沖の方にいと少さき木の葉の浮べるとみえて漕ぎくるを、あまの釣舟かと御覧ずる程に、都よりの御せうそこなりけり。黒染の御衣夜の御ふすまなど、都の夜さむに思ひやり聞えさせ給ひて、七條院よりまゐれる御文ひきあけせさ給ふより、いといみじく御胸もせきあぐる心ちすれば、やゝためらひて見給ふに、「あさましくもかくて月日へにける事、今日あすとも知らぬ命のうちに、今一たびいかで見奉りてしがな。かくなからば死出の山路も越えやるべうも侍らでなむ」などいと多くみだれかき給

へるを、御顔におしあて丶、

「たらちねの消えやらで待つ露の身を風よりさきにいかでとはまし。

八百よろづ神もあはれめたらちねの我待ちえむとたえぬたまのを」。

初雁のつばさにつけつ丶、こ丶かしこより哀なる御せうそこのみ常は奉るを御覧ずるにつけても、あさましういみじき御涙のもよほしなり。家隆の二位は新古今の撰者に召しくはへられ、大かた歌の道につけてむつまじく召しつかひし人なれば、夜晝戀ひ聞ゆる事かぎりなし。かの伊勢より須磨にまゐりけむもかくやとおぼゆるまで、まきかさねて書きつらねまねらせたる、「和歌所のむかしのおもかげ、かずかずに忘れがたう」など申して、つらき命の今日まで侍ることのうらめしきよしなど、えもいはずあはれおほくて、

「ねざめして聞かぬをきゝてわびしきはあら磯なみのわかつきの聲」

とあるを法皇もいみじとおぼして御袖いたく志ぼらせたまふ。

「浪間なきおきの小島のはまびさしひさしくなりぬみやこへだて丶。

木がらしのおきのそま山ふき志をりわらく志をれてもの思ふころ」。

をりをりよませ給へる御歌どもを書きあつめて修明門院へ奉らせ給ふ。その中に、

「水無瀬山我がふるさとはあれぬらむまがきはのらと人もかよはで。

かざしをる人もわらばやことはむ沖のみ山にすぎは見ゆれど。

限あればさてもたへける身にのうさよ民のわらやに軒をならべて」。

かやうのたぐひすべて多く聞ゆれど、さのみは年のつもりにえなむ。今又思ひいでばついでもとめてとて（十六字○行無）

第三　ふぢ衣

その頃いとかずまへられ給はぬふる宮おはしけり。守貞の親王とぞ聞えける。高倉院第三の御子なり。隠岐の法皇の御このかみなれば、思へばやんごとなけれど、昔後白川の法皇、安徳院の筑紫へおはしまして後に、見奉らせ給ひける御うまごの宮だちえりの時泣き給ひしによりて、位にも即かせ給はざりしかば、世の中ものうらめしきやうにてすぐし給ふ。さびしく人めまれなれば年を經てあれまさりつゝ、草ふかく八重葎のみさしかためたる宮の中にいと心ぼそくながめおはするに、建保の頃宮のうちの女房の夢に、かうぶりしたるもの數多まゐりて、「劔璽を入れ奉るべきに、おのおの用意してさぶらはれよ」といふと見てければ、いとあやしうおぼえて宮に語り聞えければ、いかでかさほどの事あらむとおぼしもよらで、遂に御ぐしをさへおろし給ひて、この世の御望はたちはてぬる心ちして物し給へるに、このみだれ出できて、一院の御ぞうは皆さまざまにさすらへ給ひぬれば、おのづからちひさきなど殘り給へるも世にさし放たれて、さりぬべき君もおはしまさぬにより、あづまよりのおきてにて、かの入道親王の御子（後堀河院の御事）の十になり給ふを、承久三年七月九日俄に御位につけ奉る。父の宮をば太上天皇になし奉りて法皇ときこゆ。いとめでたくよこざまの御さいはひおはしける宮なり。そんわうにて位に即かせ給へるためし、光仁天皇より後は絶えて久しかり

つるにめづらしくめでたし。その玄はすに御即位、明くる年貞應元年正月三日御元服玄たまふ。御いみな茂仁と申す。御かたちもなまめかしくおてにぞおはします。御母基家中納言のむすめ北白川院と申しき。家實のおとゞ又攝政になりかへらせ給ひて、よろづおきてのたまふも、さまざまに引きかへしたる世なりかし。又の年五月の頃法皇かくれさせ給ひぬれば、天下みなくろみわたりぬ。うへも御ぶくたてまつる。きびはなる御程に、いといみじう哀なる御事なめり。前の御門は四つにて廢せられ給ひて、尊號などの沙汰だになし。御母后東一條院も殿後京極よしつねの姫君にてものし給へば、歌の道にもいとかしこう渡らせ給へば、大かた奥ふかうゑめやかに重き御本性にて、はかなき事をもたやすくもらさせ給はず、御琴などもかぎりなき音を彈きとり給へれど、をさをさ掻きたてさせたまふ世もなく、あまりなるまでうもれたる御もてなしを、佐渡の院もかぎりなき御志の中に飽かずなむ思ひ聞えさせ給ひける。かの遠き御わかれの後は、いみじうものをのみおぼしくだけつゝ、いよいよ玄づみふしておはしますに、ふるく仕うまつりける女房の、里にこもり居たりけるもとより、おはれなる御せうそこをきこえて、十月一日の頃、御衣がへの御ぞを奉りたりける御返事に、

「思ひいづるころもはかなしわれも人もみしにはあらずたどらるゝ世に」。

又御手ならひのついでに、からうじてもれけるにや、

「消えかぬるいのちぞつらきおなじ世にあるもたのみはかけぬちぎりを」。

さこそはげにおぼしみだれけめ。おろかなる契だにかゝるすぢのあはれは淺くやは侍る。いかばかりの御心の中にてすぐし給ふらむといとかたじけなし。はかなく明けくれて貞應もうち過ぎ、元仁嘉祿安貞などいふ年もほどなくかはりて、寛喜元年になりぬ。このほどは光明峰寺殿道家また關白にておはす。この御むすめ女御に參り給ふ。世の中めでたく華やかなり。これより先に三條のおほきおとゞ公房の姫君まゐり給ひて后だちあり。いみじう時めき給ひしをおしのけて、前の殿家實の御むすめ、いまだをさなくておはする參り給ひにき。これはいたく御おぼえもなくて、三條后の宮の淨土寺とかやに引き籠りて渡らせ給ふに、御せうそこのみ日に千度といふばかり通ひなどして、世の中すさまじくおぼされながら、さすがに后立はありつるを、父の殿攝錄かはり給ひて、今の峰殿道家東山殿なりかへり給ひぬれば、又この姫君入內ありて、もとの中宮はまかで給ひぬ。めづらしきが參り給へばとて、などかかうしもあながちならむ。もろこしには三千人などもさぶらひ給ひけるとこそ傳へ聞くにも、玄なき玄なしからぬ心ちすれど、いかなるにかあらむ。後にはおのおの院號ありて三條殿の后は安嘉門院、中の度參り給ひし殿の女御は鷹司の院とぞ聞えける。今の女御もやがて后だちあり。藤局わたり今の女御以下十八字流布本無今めかしくすみなし給へり。御はらからの姫君もかたちよくおはするに、ひきこめがたしとて內侍のかみになし奉り給ふ。おなじき三年七月五日、關白をば御太郎敎實のおとゞに讓り聞え給ひて、我が御身は大殿とて后宮の御おやなれば思ひなしもやんごとなきに、御子どもさへいみじう榮え給ふさまためしなき程なり。あづまの將軍、

山の座主、三井寺のちやうり、山階寺の別當、仁和寺の御むろ、皆この殿のきんだちにておはすれば、すべて天下はさながらまじる人すくなう見えたり。いとよそほしくおもおもしげにて、内の御とのゐ所などに常はうちとけさぶらひ給へば、關白殿次々の御子ども、大臣などおとゝの御むすめなれば、まして世の重くなびき奉るさまいとやんごとなし。まことやそのとし十一月十一日阿波の院かくれさせ給ひぬ。いとあはれにはかなき御事かな。例ならずおぼされければ御ぐしおろさせ給ひにけり。こゝら物をのみおぼして今年は三十七にぞならせたまひける。今一度みやこをも御覽ぜずなりぬるいみじうかなしきを、隱岐の小島にもきこしめしなげく。承明門院はさまざまのうき事を見つくして、猶ながらふる命のうとましきに、又かくおなじ世をだに去り給ひぬる御歎のいはむかたなさに、などさきだゝぬと口惜しうおぼしこがるゝさま、ことわりにも過ぎたり。かしこにて召しつかひける御調度、何くれはかなき御手箱やうのものを都へ人のまゐらせたりける中に、たまさかに通ひける隱岐よりの御文、女院の御せうそこなどをひとつにとりしたゝめられたる、いみじうあはれにて御目もきりふたがる心ちしたまふ。家隆の二位のむすめ小宰相と聞えしは、おのづからけぢかく御覽じなれけるにや、人よりことに思ひしづみて御服などくろくそめける。

「うしと見しわりしわかれは藤ごろもやがてきるべきかどでなりけり」。

今年もはかなく暮れて貞永元年になりぬ。定家中納言うけたまはりて撰集の沙汰ありつる

を、この程御門おりさせ給ふべきよし聞ゆればにや、いと疾く十月二日奏せられける。一とせのうちに奏せられたるいとありがたくこそ。新勅撰ときこゆ。「元久に新古今いできてのち、程なく世の中もひきかへぬるに、又新の字うちつゞきたる心よからぬ事」など、さゞめく人も侍りけるとかや。さて同じき四日おり居させ給ふ。御悩み重きによりてなりけり。こぞの二月后の宮の御腹に一の御子いでき給へりしかば、やがて太子にたゝせ給ひしぞかし。例の人の口さがなさは、「かの承久の廢帝の生れさせ給ふとひとしく坊に居給へりしはいと不用なりしを」などいふめり。うへはおりさせ給ひて、その七日やがて尊儀號あり。御悩み猶をこたらず。大かた世も去づかならず、この三年ばかりは天變ときりなるふりなどして、さとし繁く、御つゝしみおもきやうなればいかゞおはしまさむと御心どもさわぐべし。今上は二歳にぞならせ給ふ。あさましき程の御いはけなさにて、いつくしき十善のおるじに定り給ふ事いとゆゝしきまでさきの世ゆかしき御ありさまなり。むかし近衛院三歳、六條院二歳にて位に即き給へりし、いづれもいと心ゆかぬためしなり。閑院殿の清涼殿にてまづ御袴奉る。十二月五日御即位はことなくはてぬれば、めでたくて年かはりぬ。中宮も御ものゝけになやませ給ひて常はおつしうおはしますを院はいとゞはれまなくおぼしなげく。う月の頃年號あらたまる。天福といふなるべし。そのおなじ頃中宮も位去り給ひて藻壁門院とぞきこゆなる。今年も又例ならずなやませ給へば、めでたき御事の數そはせ給ふべきにこそと世の中めでたくきこゆ。祭祓なにくれとおびたゞしくまだきよりのゝしる。ましてその程近くなりて

は天の下やすきそらなく、やまやま、てらでら、社々、御いのりひゞきさわげども御物の怪こはくていみじうわさまし。遂に九月十八日にかくれさせ給ひぬ。その程のいみじさ推し量りぬべし。今年二十五にならせたまふ。若く清らにうつくしげにて、さかりなる花の御すがたばさらなり。院にさぶらふ民部卿典侍ときこゆるは定家中納言のむすめなり。この宮の御方にもけぢかうつかうまつる人なりけり。かぎりなく思ひしづみて頭おろしぬ。いみじうわれなる事なり。人の間へる返事に、

「悲しさはうき世のとがとそむけどもたゞこひしさのなぐさめぞなき」。

當代の御母后にておはしつれば、天下皆ひとつすみぞめにやつれぬ。この御なげきにいよいよ院は去づみまさらせ給ひて、うち絶えて御遊などをだに御覧じいるゝ事なくて月日つもりぬ。みやうし祭祓など天の下騒ぎみちたり。又年號かはりぬ。文暦元年といふ。承久の廢帝十七になり給へるも五月二十日にうせ給ひぬ。いと若き御程に、いといとほしうあたらしき御年なりかし。隠岐にもうち續き哀なる事どもを聞し召し歎くべし。佐渡にはまして心うくわさましとおぼさる。この御さしつぎの宮猶おはしますは、修明門院養ひ奉らせ給ふめり。かくいひ去ろふほどに院の御惱み日々におもくならせ給ひて、八月六日いとわさましうならせ給ひぬ。世のおもしにておはしますべきことの、かくわへなき御ありさま口をしなど聞ゆ

るもなのめなり。大方御本性もなごやかにらうらうしく、御かたちもまほに美くしうとゝのはりて、はたちに三つばかりや餘らせ給ふらむ、若う盛の御程に、御才などもやまともろこしたどたどしからず、何事につけてもいとあたらしう坐しませば、世の人の惜み聞ゆるさま限なし。唯くれ惑へる心ちどもなり。後堀川院とぞ申しける。故宮の御はてだにすぎず、又とりかさねて諒闇の三とせまでにならむことを、いとまがまがしくゆゝしと皆人思ふべし。御契の程のあはれさもいとありがたくなむ。御禊大嘗會などもいとゞのびぬ。唯こゝもかしこもたかきもくだれるも、都も遠きも島々も涙にうき沈みてぞすぐし給ひける。うち續きかくのみ世の中騒がしく、天變も玄きりいとあわたゞしきやうなれば又年號かはりて嘉禎元年といふ。まことや三月の末つかたより攝政殿（のりされどの）重く煩ひ給ふ。故院の御位のほどより大殿の御ゆづりにて關白と聞えしが、御門をさなくおはしませばこの頃は攝政殿と申すなるべし。御かたちも御心ばへもめでたくおはしましつるに、いとおへなくうせ給ひぬれば、大殿の御歎たとへむかたなし。二十六にぞなり給ひける。いと悲しく玄給ふ姫君、若君などものし給ふをも、今は峯殿のみ偏にはぐゝみ聞え給ひけり。攝政にも大殿たちかへりなり給ひぬ。かくて三度まつり事ををさめ給ひぬるにや。北の政所の御父はさんつねのおとゞなれば、かの殿とひとつにて世はいよいよ御心のまゝなるべし。今年ぞ御色ども改りぬれば、冬になりて御禊大嘗會行はる。さまざまめでたくもあはれにも、いろいろなる都の事どもをほのかに傳へ聞し召して、隱岐にはあさましの年のつもりやと御齡にそへても盡せぬ御なげ

さぐさのみ去げりそふ。慰めにはおぼしなれにしことゝて敗島の道にのみぞ御心をのべける。都へもたよりにつけつゝ題をつかはし歌を召せば、おはれに忘れがたく戀ひ聞ゆるむかしの人々、我も我もと奉れるを、つれづれにおぼさるゝあまりに自ら判じて御覽ぜられにけり。家隆の二位も今まで生ける思ひいでに、これをだにと哀にかたじけなくて、こと人々の歌をもこゝよりぞとり集めてまゐらせける。むかしの秀能はありしみだれの後、頭おろして深くこもりゐたり。如願とぞいひける。それもこの度の御歌合にめせば、今更にそのかみの事さこそは思ひいづらめ。例のかずかずはいかでか唯片はしをだに」とて「左御製、

「人ごゝろうつりはてぬるはなのいろに昔ながらの山の名もうし」。

右家隆の二位、

「なぞもかく思ひそめけむさくら花山としたかくなりはつるまで」。

秀能、

「わだのはら八十島かけて去るべせよはるかに通ふおきのつり舟」。

山家といふ題にて、また左御製、

「軒端あれてたれかみなせの宿の月すみこしまでぼの色やさびしき」。

右家隆、

「さびしさやまだ見ぬ島のやま里を思ひやるにもすむこゝちして」。

法皇御有みづから判のことばを書かせ給へるに、「まだ見ぬ島を思ひやる有らむよりは、年久し

くすみて思ひいでむは今すこし志深くや」とて我が御歌をかちとつけさせ給へる、いとあはれにやさしき御事なめり。かやうのはかなしごと、又は阿彌陀佛の御勤などに紛らはしてぞおはします。又御手ならひのついでに、

「われながらうとみはてぬる身のうへに涙ばかりぞおもがはりせぬ。
ふる里は入りぬるいその草よたゞ夕去はみちばけてみらくすくなき」。

この浦にすませ給ひて十九年ばかりにやありけむ、延應元年といふ二月廿二日むそぢにてかくれさせ給ひぬ。今一度都へ歸らむの御志ふかゝりしに、遂に空しくてやみ給ひにし事いと悉く哀になさけなき世も今さら心うし。近き山にて例の作法になし奉るも、むげに人すくなに心ぼそき御ありさまいとあはれになむ。御骨をば能茂といひし北面の入道して御供にさぶらひしぞ頸にかけ奉りて都にのぼりける。さて大原の法華堂とて、今もむかしの御さうのところどころ三昧料に寄せられたるにてつとめ絶えず。かの法華堂には修明門院の御沙汰にて、故院わきて御心とゞめたりし水無瀬殿をわたされけり。今はのきはまでもたせ給ひけるきりの御數珠などもかしこにいまだ侍るこそ哀にかたじけなく拜み奉るついでのありしか。はじめは顯德院と定め申されたりけれど、おはしまし〳〵世の御あらましなりけるとて仁治の頃ぞ後鳥羽院とは更に聞えなほされけるとなむ。

第四　三神山

さても源大納言通方の預り奉られし阿波院の宮はおとなび給ふまゝに御心ばへもいときや

うさくに、御かたちもいとうるはしくけたかくやんごとなき御有様なれば、なべて世の人もいとあたらしき事に思ひ聞えけり。大納言さへ暦仁の頃うせにしかば、いよいよ眞心に仕うまつる人もなく、心ぼそげにて何を待つとしもなくかゝづらひておはしますも、人わろくあぢきなうおぼさるべし。御母は土御門の内大臣通親の御子に、宰相の中将通宗とてわかくてうせにし人の御むすめなり。それさへかくれ給ひにしかば宰相のはらからの姫君ぞ御めのとのやうにて、けうどんみの釋迦佛養ひ奉りけむ心ちしておはしける。二つにて父御門には別れ奉り給ひしかば、御面影だにおぼえ給はねど、猶この世の中におはすとおぼされしまでは、おのづからあひ見奉るやうにやなど人知れずをさなき御心にかゝりておぼしわたりけるに、十二の御年かとよ、かくれさせ給ひぬと傳へきゝ給ひし後はいよいよ世のうさをおぼしくんじつゝ、いとまめだちてのみおはしますを、承明門院は心苦しうかなしと見奉りたまふ。はかなくわけくれて仁治二年にもなりにけり。御門は今年十一にて正月五日御元服玄給ふ。御いみな秀仁と聞ゆ。その年の十二月に洞ゐんの故攝政殿のりざねの姫君九つになり給ふを、おほぢの大殿御をぢの殿ばらなどゐたちて、いとよそほしくあらまほしきさまにひゞきて女御參り給へば、父の殿ひとりこそものし給はねど、大方の儀式よろづ飽かぬとなくめでたし。うへもきびはなる御程に女御もまだかくちひさうおはすれば雛遊のやうにぞ見えさせ給ひける。天の下はさながら大殿の御心のまゝなれば、いとゆゝしくなむ。土御門殿の宮は甘にもわまり給ひぬれど、御かうぶりのさたもなし。城興寺の宮僧正眞性と聞ゆる御弟子に

とかたらひ申し給ひければ、さやうにもとおぼして女院にもほのめかし申させ給ひけるを、「いとあるまじき事」とのみ諫め聞えさせ給ふ。その冬のころ、宮いたう忍びて石清水の社に詣でさせ給ひ、御念誦のどかに去給ひて少しまどろませ給へるに、神殿の内に「椿葉のかげ二たびわらたまる」と、いとわざやかにけだかき聲にてうちずんじ給ふと聞きて御覽じおけたれば、明方の空すみわたれるに星のひかりもけざやかにていと神さびたり。いかに見えつる御夢ならむと怪しくおぼさるれど、人にものたまはず、とまれかくもあれといよいよ御學問をぞせさせ給ふ。年もかへりぬ。春のはじめはおしなべて、ほどほどにつけたる家々の身の祝ひなど心ゆきほこらしげなるに、む月の五日より内の上例ならぬ御事にて、七日の節會にも御帳にもつかせ給はねば、いとさうざうしく人々おぼしわへるに、九日の曉かくれさせ給ひぬとてのゝしりわへるいとおさましともいふばかりなし。皆人おされまどひて中々涙だにいでこず。女御もいまだ童あそびの御さまにて何心なくむつれ聞えさせ給へるに、いとうたていみじければ、うち去めりくんじて居給へるいとをさなげにらうたし。大殿の御心のうち思ひやるべし。御せうと左大臣たの若君も殿上したまへる、唯御門のおなじ御ほどにて、さわがしきまでの御遊のみにて明しくらさせ給ひけるに、かいひそみて群りゐつゝ鼻うちかみうち泣く人より外はなし。かくのみおさましき御事どものうち續きぬるは、いかにもかの遠き浦々にて沈みはてさせ給ひにし御なげきどものつもりにやとぞ世の人もさゞめきける。御惱みの始めもなべてのすぢにはおらず、おまりいはけたる御遊よりそこなはれ給ひに

けるとぞ。いまだ御つぎもおはしまさず、又御はらからの宮なども渡らせ給はねば、世の中いかになりゆかむずるにかとたどりあへるさまなり。さてしもやはにてあづまへぞ告げやりける。将軍は大殿の御子ゝ今は大納言殿ときこゆ。御後見は承久に上りたりし泰時朝臣なり。時房と一所にて小弓射させ酒もりなどして心とけたるほどなりけるに、「京よりのはしり馬」といへば、何事ならむとおどろきながら、使召しよせて聞くにいとあさまし。さりとてあるべきならねば、そのむしろよりやがて神事はじめて、若宮の社にてくじをぞとりける。その程都にはいとうかびたる事ども心のひきひきいひあろふ。佐渡院の宮だちにやなど聞えければ、修明門院にも御心ときめきして内々その御用意などしたまふ。承明門院ももしやなどさまざま御いのり云給ふ。あづまの使都に入るよしきこゆる開けの日は両女院より白川に人を立て、いづかたへか参ると見せられけるぞことわりに、げに今見ゆべき事なれども、物の心もとなきはさおぼゆるわざぞかし」と例の口すげみてほゝゑむ。二日ぐらし待たれて、城介よしかげといふもの三條河原にうちいでゝ、「承明門院のおはしますなる院はいづくぞ」と、かの院より立てられたる青侍のいとあやしげなるにしも問ひければ、聞く心ちうつゝともおぼえず、「云かじか」と申すまゝに土御門殿へまゐりたれど、門は荏つよくかため扉もさびつき、柱根くちてあかざりけるを郎等どもにとかくせさせて内に参りて見まはせば、庭には草深く青き苔のみむして松風より外はこたふるものもなく、人の通へる跡もなし。故通宗宰相中将の御おとゝを子に云給へりし、定通のおとゞばかりぞ、何となくおのづからの事

もやと思ひて、なえばめるゑぼうし直衣にてさぶらひ給ひけるが、中門にいでゝ對面ありたまふ。よしかげはきり戸のわきにかしこまりてぞ侍りける。「阿波の院の御子、御位に」と申してゐでぬ。院の中の人々上下夢のこゝちして物にぞあたりまどひける。仁治三年正月十九日の事なり。世の人の心ちみなおどろきあわてゝ、おしかへしこなたに參りつどふ馬車の響騒ぐ世のおとなひを、四つじ殿にはあさましうなかなか物おぼしまさるべし。またの日やがて御元服せさせ給ふ。ひきいれには左大臣よしざね參り給ふ。理はつは頭辨定嗣仕うまつりけり。御いみな邦仁御年二十三。その夜やがて冷泉萬里小路殿へ移らせ給ひて、閑院殿より劔璽など渡さる。踐祚の儀式いとめづらし。その後こそ閑院殿には追號のさだめ御わざの事などさたありけれ。廿五日に東山の泉涌寺とかやいふほとりにをさめ奉る。四條の院と申すなるべし。やがてかの寺に御庄などよせて今に御菩提を祈り申し侍る。（四字分空白）もさきの世のゆゑありけるにや。この御門いまだ物などはかばかしくのたまはぬ程の御齢なりける時、誰とかや「さきの世はいかなる人にてかおはしましけむ」と唯何となく聞えたりけるに、かの泉涌寺の開山のひじりの名をぞたしかに仰せられたりける。又人の夢にも、この御門かくれさせ給ひて後、かの上人一われ速に成佛すべかりしを、よしなき妄念をおこして今一ど人界の生をうけて、帝王の位にいたりてかへりて我が寺を助けむと思ひしにはたしてかくなむ」とぞ見えける。まことにその餘執の通りけるにや、御庄どもゝよりけむとぞ覺え侍る。さて仁治三年三月十八日御即位、よろづあるべき限りめでたくて過ぎもてゆく。嘉禎三年よりはをか

のやのおとゞ（經攝政にていませしかば、そのまゝに今の御代の始も關白と聞えつれど、三月廿五日左のおとゞ（よしざね。二條殿の御家のはじめなり。にわたりぬ。この殿も光明峯寺殿の御二郎君なり。神無月になりぬれば御祓とて世の中ひしめきたつも思ひよりし事かはとめでたし。大嘗會の悠紀方の御屏風三神山、菅宰相爲長つかうまつられける。

「いにしへに名をのみきゝてもとめけむ三神の山はこれぞその山」。

主基方風俗のうた、經光の中納言にめされたり。

「すゑとはき千世のかげこそ久しけれまだ二葉なるいはさきの松」。

當代かくめでたくおはしませば、通宗宰相も左大臣從一位を贈られたまふ。御むすめも后の位を贈り申されしいとめでたしや。まことやこの頃右大臣と聞ゆるは實氏のおとゞよ。その御むすめ十八になり給ふを女御に立てまつり給ふ。六月三日入内あり。儀式ありさま二なく清らをつくされたり。母北の方は四條大納言隆衡のむすめなり。女御の君いとさゝやかにあいぎやうづきてめでたくものし給へば、御おぼえいとかひがひしく、よろづうちあひ思ふさまなる世のけしき餘かぬ事なし。おなじ年八月九日后に立ちたまふ。そのほどのめでたさいへばさらなり。源大納言の家にむほん親王にてわやしう心ぼそげなりし御程には、たはぶれにも思ひより聞え給はざりけむと、めでたきにつけても人の口やすからず、さはとかくきこゆべし。

今后の御父は先にも聞えつる右大臣實氏のおとゞ、その父殿故公經のおほきおとゞ、そのかみ夢見給へることありて、源氏の中將わらはやみまじなひ給ひし。北山のほとりに世に知らすゆゝしき御堂を建てゝ名をば西園寺といふめり。この所は伯三位すけなかの領なりしを、尾張の國松えだといふ庄にかへ給ひてけり。もとは田はたけなど多くて、ひたぶるに田舍めきたりしを、更にうちかへしくづして艷なる園に作りなし、山のたゝずまひ木ぶかく、池の心ゆたかにわたつ海をたゞへ、峯よりおつる瀧のひゞきもげに涙催しぬべく、心ばせ深き所のさまなり。本堂は西園寺、本尊の如來は誠にたへなる御姿、生身もかくやといつくしう顯され給へり。又せんみやく院は藥師、功德藏院は地藏菩薩にておはす。池のほとりに妙音堂、瀧のもとには不動尊、この不動は津の國より生身の明王、簑笠うち奉りてさし歩みておはしたりき。その簑笠は寶藏にこめて、三十三年に一度出さるとぞうけたまはる。石橋の上には五大堂、成就心院といふは愛染王の座さまざまの秘法とり行はせらる。供僧も紅梅の衣、袈裟數珠の糸までおなじ色にて侍るめる。又はす院けす院無量光院とかやとて來迎のけしき彌陀如來、廿五の菩薩虛空に顯じ給へる御姿も侍るめり。北の寢殿にぞおとゞは住み給ふ。めぐれる山のときは木どもいとふりたるに、なつかしき程の若木の櫻など植ゑ渡すとて、おとゞうそぶき給ひけり。

「山櫻みねにも尾にもうゑおかむ見ぬ世の春を人や去のぶと」。

かの法成寺をのみこそ、いみじきためしに世繼もいひためれど、これは猶山のけしきさへお

五六二

もしろく、都はなれて眺望そひたればいはむかたなくめでたし。峰殿の御舅あづまの將軍の御おぼぢにて、よろづ世の中御心のまゝに、飽かぬ事なくゆゝしくなむおはしける。今の右のおとゞをさをさ劣り給はず、世のおもしにていとやんごとなくおはするに、女御さへ御おぼえめでたく、いつしかたゞならずおはすると聞ゆる、奥ゆかしき御程なるべし。京にはさまざまめでたき事のみ多かるに、かの佐渡の島には御惱み聞えし程なく九月十二日かくれさせ給ひぬ。世の中の改りしさざみおぼしよる事どもありしも、空しうへだゝりのみはてぬる世をいと心細う聞し召しけるに、そこはかとなく御惱みなどおもるやうにて失せ給ひにけるとぞ聞えし。四十六にぞならせ給ひける。いとおはれなる世の中なるべし。かくて年かはりぬれば寛元元年とぞこゆ。五月廿六日より最勝講始めておこなはる。關白をはじめ上達部殿上人殘りなく參り給ふ。左右大將さねもと、の車陣にたつるとて爭ひのゝしりていみじうおそろし。右は上ず左は下臈にておはしければ、御前どもかたみにひしめきてわさましかりけり。されども相向へて立てゝのちぞ去づまりにける。又の日は久我の前内大臣みちつ鳥羽の御家にて八講ぞ給ふとて上達部多くかしこにつどひ給ふ。おとゞは更にもいはず、堀川大納言ともざね、御子の通忠の大納言殿、土御門の大納言あきさだ、通成の三位中將、通行の宰相中將などすべて一門の人々びりやうにておはして、多く高欄につき給ふ。ほとほと内の御八講にも劣らず見えたり。殿上人はまして數知らず。雅通のおとゞの書きおき給へるものに、公務の日なりとも暇を申してこの八講にわふべしとかや侍るなるに、誠にかゝるおほやけ事の折ふ

しも猶さし合せておはしつどふ。いとやんごとなきわざなめり。猶末の代にはいかゞあらむといぶかし。廿八日はうちの最勝講五巻の日にて、又人々かずを盡して參りたまふ。廿九日には法性寺の淨光明院にて普賢寺殿の御忌日の法事あり。この御堂の莊嚴のめでたさかぎりなし。まことの淨土思ひやらるゝさまなり。こゝもかしこもこの程はたふとき事のみおはくて耳ぞおほくほしかりける。まことやこぞより中宮はいつしかたゞならずおはします。六月になりてその程近ければ、十三社の奉幣勅使立てらる。日比の御いのりにうちそへ世の中ゆすりさわぐ。六日より七佛藥師五壇のみ法はなどはじまる。中壇は櫻井の宮御鳥羽院の御子勤めさせ給ふ。今出川のおとゞにおはしませば御家の殿ばら絶えずさぶらひ給ふ。十日のわけぼのよりその御けしきあれば殿の内たちさわぐ。白き御よそひにあらためて母屋にうつらせ給ふ。天下のゝしりたちて馬車走りちがふさまいとこちたし。内よりも御使ひまなし。料の御馬にて雨の脚よりもおとげく走りきほふ。さらでだにいと暑き頃を、汗におしひたしたる人々のけしきいとわりなし。后の宮いと苦しげにし給ひて日たけゆくに、いろいろの御物の怪どもなのりいでゝいみじうかしがまし。おとゞ北の方いかさまにと御心惑ひて、おぼし歎くさまあはれにかなし。かやうのきざみは高きも下れるもおろかなるやはある。なべて皆かくこそはあれど、げにさしあたりたる世のけしきをとりぐしていみじうおぼさるべし。うちの御めのと大納言二位殿おとなおとなしき内侍のすけなどさるべきかぎり參り給へり。今日も猶心もとなくて暮れぬればいとおそろしうおぼす。伊勢のみてくらづかひなど立てらる。諸

社の神馬ところどころの御誦經の使、四位五位數をつくして鞭をあぐるさま、いはずともおしはかるべし。おとゞとりわき春日の社へ拜して御馬宮の御ぞなどたてまつらる。うちには更衣ばらに若宮二所おはしませど、この御事を侍ちきこえ給ふとて坊定り給はぬほどなり。たとひたひらかにおはしますとも、もし女みや（御子）ならばとまがまがしきおらましは、かねておもふだに胸つぶれて口をし。かつは我が御身のしゆくせ見ゆべきはぢかしとおぼして、おとゞもいみじう念じたまふに、ひつじのくだりほどにすでにことなりぬ。宮の御せうと公相の大納言「皇子御誕生ぞや」といとあざやかにのたまふを、聞くひとびとの心ち夜の明けたらむやうなり。父おとゞ「まことか」とのたまふまゝによろこびの御涙ぞ落ちぬる。あはれなる御けしきと見たてまつる人もことわりしあへず。公相、公基、實雄、大納言三人、權大夫實藤、大宮中納言公持皆御ゆかりの殿ばらうへのきぬにてさぶらひ給ふ。みしほどもやがて結願すべしとて僧ども法師ばらまで赤たり顏に汗おしのごひつゝいそがしげにありくさへぞめでたき。月なみの御神事なるうへ、今日ひついて心やましき事とかやにてわざと奏し給はねど。御驗者櫻井の宮の僧正（覺仁法親王）をはじめ奉りて、つぎつぎ皆祿たまふ。はつ親王には宮の御ぞ大夫とりて奉り給ひ、宇治のさきの僧正には公基の大納言、房意法印には權大夫公持かづけ給ふ。御馬はおのおの本坊に送られけり。又の日月なみの祭はて、御はかしまゐる。勅使隆郎（仮）なりき。十二日三夜の儀式大宮の御沙汰にていとめでたし。やがて御湯殿の事あれば、つるうち五位十人六位十人ならびたつ。御文ゐ博士光兼朝臣、右衞門權佐すけさだ、大

外記もろみつなど寝殿の南おもての庭に立ちて孝経の天子の章をぞよむ。その上達部簀子にさぶらひ給ふ。おしたの御湯はてゝ皆まかでゝ後、又夕の御湯殿の儀式さきのまゝにてはてぬる後、寝殿の南東の間に白き袖口どもおしいださる。そろその五尺の屏風たて渡して、上達部よりすゑわたす。公卿の座に人々二行につきあまるほどなり。右大将(さねもと)大夫(きん)、公基、實雄、以上大納言。中納言に左衛門督(あき)、權大夫(ふぢ)、公持、侍従宰相(すけ)、別當(きん)、左大辨宰相(みつ)、新宰相(つね)、右兵衛督(さだすけ)、新宰相中將(つぐみち)などつきたり。その座の末に紫べりのたゝみ(みこ)殿上人中將實直朝臣をはじめて數をしらずまゐれり。御前のものども殿上の四位はこぶ。ちご御子の御ぞの案二脚はしかくしの間にかきたつ。御かはらけ二めぐりの後、大夫(きん)、らうえい「嘉辰令月」とのたまへば、有資聲くはへらるゝ。又「昭王」とおし重ねていださる。御聲々しう徳にあらまほしうめでたし。かやうにて明けぬ。十四日に五夜の儀式さきの如し。今宵は御遊あり、實基の大將殿(徳大寺)拍子とり給ふ。笙宗基、笛二位中納言(よし)、篳篥兼敎朝臣、琵琶大夫(きん)、箏のこと權の大夫(ふぢ)、和琴(けす)あり、末の拍子もおなじ人なりしにや。安名尊、鳥破、席田、伊勢海、萬歳樂、三臺急例の事なり。かずかずめでたし。十六日七夜の御うぶ養、内よりの御沙汰なれば今すこし儀式ことにていかめし。關白殿、右のおとゞ右大將(さねもと)、大納言定雅、公相、公基、實雄。中納言には例の人々、顯親、實藤、公持、資季、公光、經光、定嗣、三位中將(みち)(なり)、殿上人頭中將(もろつぐ)より始めて殘るはすくなし。勅使藏人侍従宗基、目録もちてまゐれり。大夫對面し給ひて白き御をかづけ給ふ。大体宮のものどもにもうち

より錄たまふ。内膳司まゐりて、うるはしき作法にて南殿より御前まゐるさま、日ごろのには似ずけだかうめでたし。その後御あそびはじまる。人々の所作さのみは珍しげなくてとぢめつ。九夜は承明門院よりの御沙汰なれば、それもいかめしき事どもありしかどうるさくてなむ。こゝらの年ごろおぼしむすぼゝれつる女院の御心の中名殘なく胸あきて、めでたくおぼさるゝ事かぎりなし。閑院殿修理せらるゝ程とて十五日に御門承明門院へ行幸なれば、いとゞ玄げうさへ見奉らせたまふに御心ゆく事多く、げにいみじきおいの御さかえなりかし。覺子内親王とて御傍におはしましつる御うまご、これも土御門の院の姫宮さへこの廿六日かとよ、院になし奉らせ給へり。おほぎまちの院とさこゆ。うへのおなじ御腹におはすれば、よろづ定通のおとゞ事行ひ給ふ。院號のさだめ侍るまゝに、陣より上達部皆ひきつれて承明門院へまゐる。おとゞは御簾のうちにて女房の事どもなど忍びやかにおきてのたまひけり。其の後又兵衛内侍の御はらの若宮（宗尊親王の御事なり。）御いかの儀式この院にて沙汰あり。后腹の御子ほどこそおはせねど、これも御門わたくしものにいとほしうおぼすことなれば、御けしきに玄たがひて上達部殿上人いみじうまゐりつどふ。閑白殿まゐりたまひてくゝめ奉りたまふ。陪膳通成三位中將、やくそう家定朝臣つかうまつりける。人々のけんばい雜などはなし。建久に土御門院の御いかきこしめしける例とぞ。かくて中宮の若宮はその廿八日に親王の宣旨あり。さて七月廿八日に中宮も今宮も内にまゐりたまふ。例の事なればかなたこなたの供奉上達部、殿上人かずをつくして、ふるきためしもいと稀なるほどにぞ聞えける。宮は

御輿、御子は青糸毛の御車、近衛大將、檢非違使の別當をはじめてゆゝしき人々仕うまつらる。こよなき見物にてぞ侍りける。閏七月二日、內にてみ子の御いかきこしめす。くら司より事ども調じて參る。御膳の物屯食折櫃のもの、何くれ心ことなり。時なりてうへこなたに渡らせ給ふ。御供に關白殿、堀川大納言ともざれ、大夫きん、左大將たゞまさ、關白殿の御子の三位中將みちよしまゐり給ふ。うへくゝめ奉らせ給ふさまいとめでたし。同じ事のやうなればこまかには書かず。かくて八月十日すかやかに太子にたち給ひぬ。後の深草の院の御事なり。おとゞ御心おちゐてすゞしくめでたう思すことわりなり。「大方のいみじかりし世の響に女み子にておはせましかば、いかに玄ほしほと口惜しからまし。いとさらさらしうてさし出で給へりし嬉しさを思ひ出づれば、見奉るごとに涙ぐまれて添う覺え給ふ」とぞ年たくるまで常はおとゞ人にものたまひける。中比はさのみしもおはせざりし御家の、近くよりはとのほかに世にもおもくやんごとなう物し給ひつるに、この后の宮參り給ひ、非宮生れさせ給ひなどして、いよいよ榮えまさり給ふ行く末推し量られていとめでたし。父の入道殿さへ御命ながくて、かゝる御末ども見給ふもさこそは御心ゆくらめとおし量るも玄るく、其の年の十月七日かとよ、都を立ちて熊野に詣で給ふ。作法のゆゝしさ、昔の古き御代の御幸どもにも稍たちまさる程にぞ侍りし。御子うまごまでひき具し給ふ。大納言に實雄御子、公相御孫、公基。前藤大納言とありしは爲家の事にや。坊門前大納言もつねせふに京出はこせふせられたり。大宮中納言きんもち、左宰相の中將さねたゞ、右兵衛督ありすけ、殿上人は三十餘人侍りけり。いといみじかりし事どもなり。かくて同

じき十月十一日は土御門の院の御十三年とて、大やけより御法事行はるゝもいとめでたし。大原にて御八講あるべければ承明門院も兼てより渡らせ給ひ、上達部殿上人參り集ふさまもこよなし。十二月一日は石清水の社に行幸あり。當代には始めたる度なればよろづ清らをつくさる。文治建久の例をまねばる。關白殿御馬にて仕うまつり給ふ。瀧口十二人馬ぞへに具し給ふ。色々の綾錦目も耀くばかり立ち重ねたり。左右大將（たゞいへ、さねもと）の番長、又心も詞も及ばずいとみつくしたり。左大將のは馬にて前行、右大將のは張綱にてうつしの馬をひかせけるとぞ。左大將は紅梅の二重織物の半び下襲、蒲黄の織物の上の袴、右大將はうら山吹の半び下襲、左衛門の督（かみ）されふぢは梅がさねの浮織物の半び下がさね、浮紋のうへの袴、殿上人は花山院の中將道雅の君ばかりぞ蒲黄のうへの袴、うら山吹の半び下がさね着給へりける。その外はことなるも見えず。御社にてのかた舞は例の上達部もたゝれけり。笛二位中納言（よし、のり）、拍子左衛門の督など勤められけり。數々めでたくて、又の日午の時ばかりにぞ歸らせ給ひける。おなじ五日やがて賀茂の社に行幸し給ふ。關白殿今日も御馬なり。上達部殿上人さきにいたく變らず。別當通成いみじうきらめかれたり。けさうし給へるをぞ「若き人なれども、檢非違使の別當白きものつくる事やある」など、ふるき人うちさゞめきけるとかや。春宮大夫（きんすけ）馬ぞへ八人具し給ひけり。權大納言實雄、土御門大納言顯定、權中納言公親、同顯親、左衛門督實藤などいづれも清らにめでたし。殿上人中將には實久の朝臣、爲氏、實春、經定、顯義、基雅、通雅、通定、定平、實直、諸嗣、雅嗣、輔通、雅家、雅忠、少將にはたかかぬ、きん直、する實、

爲教、忠繼、資時、顯方、維嗣、公爲、資平朝臣、信通など我劣らじと、華族も下臈も心ばかりはいどみつくしたり。申の時にまづ下の宮に行幸、暮れはてゝ上の社にまうでさせ給ふ。賞行はれなどして還御は明方になりにける。霜いと白きにたてあかしけざやかにて、舞人の袖かへる程もいとおもしろくぞ侍りける。この行幸過ぎぬれば天の下のさわぎ少しのどまりぬべきにやと見えつるに、明くる日十二月六日又仁和寺御室准后、觀音寺にて灌頂云給ふとて世の中のゝしるさまいとけしからぬまで響きあひたり。この御室をば代々親王こそ傳へ給ふめれど、峯殿世を御心に任せたりし頃より渡り給ひて、母うへの西園寺入道殿の御むすめに准后をさへ譲り給ふとか聞えて、いとゆゝしき御人がらなれば、受法の儀式までゞ世に珍らかなりける。入道殿ト〻まづ渡り給ひて、佛母院におはす。關白殿よしざれは御このかみなればましておはします。右大臣殿つねざれ左大將たゞいへ心ことにて參り給ふ。時なりて大阿闍梨二品法親王道深興にてわたり給ふ。喜多院の南の門より上達部殿上人歩み續きてそこゝに參りつどふ。吉田中納言爲經二條の中納言たゞたか侍從宰相すけすけ、藤宰相のぶもり左宰相中將さねたふ左大辨つねみつ新宰相定嗣、皆列をひき、受者もみぎりにおりたち給へる、いとわかううつくしうて地藏菩薩に似たまへるを、入道殿いと悲しと見たてまつりたまふ。紫の袈裟に香爐もちてわたり給へば、もとよりならび立てる上達部皆禮をいたすけしきやんごとなく見ゆ。關白左大將殿などの御隨身どもえもいはずきらめきてはしのもとにたてわかしおろくしてなみ居たるけしきめでたくおもしろし。傳法供のさまは人見ぬ事なればえらず。敎授は良惠僧正つとめられけり。かくて事

はてぬれば後朝の儀式なほいみじ。法親王の御布施被物五かさね（このうち二重織物）御法服一具、鈍色一具、包物は絹十疋、錦一包、關白殿とりて奉りたまふ。次々の衆僧には大中納言ほどほどに隨ふべし。導師の布施、久安仁安など又建暦寛喜などの度は別當とりたりけれど、今日はその人まゐらねば、忠高の中納言とりけり。殿上人は廿餘人まゐる。萬の事人がらと見えて、いとめでたし。かやうの事どもにて今年もくれぬ。又の年寛元二年おづまの大納言頼經の君、一とせ二歳にて下り給ひし峯殿の御子ぞかし。惱み給ふよし聞えしが、御子の六つになり給ふに譲りて都へ御かへりときこゆ。若君はその日やがて將軍の宣旨下され、少將になり給ふ。頼つぐと名のり給ふ。泰時朝臣もおとゞし入道して、うまごの時頼の朝臣に世をば譲りにしかば、この頃は天の下の御後見はこの相摸守時頼の朝臣つかうまつれり。いみじうかしこきものなれば、めでたき聞えのみありてつはものも靡き從ひ、大かた世もをづかにをさまりすましたり。かくて寛元も四年になりぬ。正月廿八日春宮に御位をゆづり申させたまふ。この御門も又四つにぞならせ給ふ。めでたき御ためしどもなれば行く末も推し量られ給ふ。光明峯寺殿御三郎君、左大臣（さね）つねのおとゞ御年二十四にて攝政したまふいとめでたし。御兄の禪光園院殿もと關白にておはしつる、恨みて去ぶしぶにおはしけれど力なし。御はらから三人まで世ふ錄玄給へるためし、古くは謙徳公伊尹、忠義公兼通、東三條大入道殿兼家、その又御子ども中關白殿、粟田殿、法成寺入道殿、これふた度なり。近くは法性寺殿の御子ども、六條殿とも、松殿もとざね、月輪殿かねざねこれぞやがて今の峰殿の御おほぢよ。かやうの事いとたまたまあれ

ど、粟田殿も宣旨かうぶり給へりしばかりにて七日にてうせ給ひにしかば、天下執行し給ふに及ばず。松殿の御子もろいへのおとゞ夢のやうにて、左かも一代にてやみ給ひにき。いづれも御末まではおはせざりしに、この三所の御後のみ今に絶えず、御流久しき藤なみにて立ちさかえ給へるこそたぐひなきやんごとなさなめれ。末の世にもありがたくや侍らむ。今の攝政殿をば後には圓明寺殿とぞ申ゆめりし。一條殿の御家のはじめなり。攝政にて二とせばかりおはしき。女院の御父も太政大臣になり給ひて牛車ゆりたまふ。さるべき事といひながらいとめでたし。その頃北山の花のさかりに院に奏したまふ、その花につけて、

「くちはつる老木にさける花ざくら身によそへても今日はかざゝむ」。

御かへしを忘れたるこそくちをしけれ。かくて御即位御禊も過ぎぬ。大嘗會の頃信實朝臣といひし歌よみのむすめの少將内侍、大内の女工所にさぶらふに、雪いみじう日ごろ降りていかめしう積りたるあかつき、おはきおとゞ（實氏）のたまひつかはしける、

「こゝのへのおはうち山のいかならむかぎりも知らず積もる雪かな」。

御かへし、少將の内侍、

「こゝのへのうちの〳〵雪に跡つけてはるかに千代のみちを見るかな」。

後嵯峨の院のうへはいつしか所々に御幸左げう御あそびなどめでたく今めかしきさまに好ませ給ふ。西園寺に始めて御幸なりしさまこそいとめづらかなるけんぶつにて侍りしか。おはきおとゞ御あるじ申されしさまいかめしかりき。いはずとも思ひやるべし。御贈物に代々

の御手本奉らるとて、おとゞ

「傳へきくひじりの代々のあとをみてふるきをうつす道ならはなむ」。

御返事、御製、

「あらざりしむかしに今や復りなむかしこき代々のあとならひなば」。

中宮も位去り給ひて大宮女院とぞきこゆる。安らかに常はひとつ御車などにて、たゞ人のやうに華やかなる事どものみひまなく、よろづあらまほしき御ありさまなり。院のうへ石清水の社にまうでさせ給ひて日ごろおはしませば、世の人殘りなく仕うまつれり。さるべき事とはいひながら猶いみじう御心にも一とせの事思しいでられて、ことにかしこまり聞えさせ給ふべし。御歌あまたあそばして寶殿にこめさせ給ひし中に、

「いはし水木がくれたりしいにしへを思ひいづればすむこゝろかな」。

寶治の頃神無月二十日あまりなりしにや紅葉御覽じに宇治にみゆきありたまふ。上達部殿上人思ひ思ひいろいろの狩衣、菊紅葉の濃きうすき縫物、織物、綾錦、すべて世になき清らをつくしさわぐ。いみじきけんぶつなり。殿上人の船に樂器を設けたり。橘の小島に御船さしとめて物のねども吹きたてたる程、水の底も耳たてぬべくそゞろ寒きほどなるに、折知りがほに空さへうちしぐれて、まきの山風あらましきに、木の葉どものいろいろ散りまがふけしきいひもらすおもしろし。女房の船にいろいろの袖口わざとなくこぼれいでたる、夕日にかゞやきわひて錦をあらふ九の江かと見えたり。平等院に中一日わたらせ給ひて、さまざまいお

もしろき事ども數をしらず。網代にひをのよるもさながらのゝしりわかしてかへらせ給ふ。鳥羽殿も近頃はいたう荒れて、池も水草がちにうもれたりつるを、いみじう玄ゆりし靡かせ給ひて、はじめて御幸なりし時、池邊松といふ事講せられしに、おほきおとゞ序書き給へりき。夫鳥羽仙洞三五累聖、離宮一百餘處とかや。また御身のいみじき事には、「遂の髪霜寒くて七代に傳へたり」と侍りしこそめでたけれ。

「いはひおくはじめとけふを松が枝の千とせのかげにすめる池水」。

院の御製、

「かげうつす松にも千世の色見えてけふすみそむるやどのいけ水」。

大納言典侍と聞えしは、爲家の民部卿のむすめなりしにや、

「色かへぬときはの松のかげそへて千代に八千代にすめる池みづ」。

ずんながるめりしかど、例のうるさければなむ。御前の御遊はじまるほど、そりはしのもとに龍頭鷁首よせていとおもしろく吹き合せたり。かやうの事常の御遊いと玄げかりき。またおほきおとゞの津の國吹田の山庄にもいと玄ばしばおはしまさせて樣々の御遊かずをつくし、いかにせむともてはやし申さる。川に臨める家なれば、秋深き月のさかりなどは殊に艶ありて、門田の稻の風に靡くけしき、妻とふ鹿の聲、衣うつきぬたの音、峯の秋風、野邊の松虫、とりあつめあはれそひたる所のさまに、鵜飼などおろさせて、篝火どもともしたる川のおもて、いとめづらしうをかしと御覽ず。日比おはしまして、人々に十首の歌召されしついで

でに、院の御製、

「川舟のさしていづくかわがならぬたびとはいはじやどゝさだめむ」

とかうじ上げたるほど、あるじのおとゞいみじう興じ給ふ。「この家のめいぼく今日に侍る」とぞのたまはする。げにさる事と聞く人皆はこらしくなむ。おりゐ給へる太上天皇など聞ゆるは、思ひやりこそおとなびさたすぎ給へる心ちすれど、いまだみそぢにだに満たせ給はねば、よろづ若うあいぎやうづきめでたくおはするに、時のおとなにて重々しかるべきおはきおとゞさへ、何わざをせむと御心にかなふべき御事をのみ思ひまはしつゝ、いかで珍しからむともてさわぎきこえ給へば、いみじうはえばえしきころなり。御門まして幼くおはしませば、はかなき御遊わざより外のいとなみなし。摂政殿さへ若くものし給へば、夜晝さぶらひ給ひて女房の中にまじりつゝ、らんご、貝おはひ、手まり、へんつきなどやうの事どもを、思ひ思ひにをつゝ日をくらし給へば、さぶらふ人々もうちとけにくゝ心づかひすめり。節會臨時の祭何くれの公事どもを、女房にまねばせて御覧ずれば、おはきおとゞ興じ申し給ひて、殊更ちひさき、笏など造らせて、あまた奉り給へば、うへも喜びおぼす。入道おはきおとゞの御女、大納言三位殿といふを關白になさる。按察の典侍、たかひらの女大納言典侍、中納言典侍、勾當内侍、辨内侍、少將内侍、かやうの人々皆男のつかさにあてゝ、その役をつとむ。いとからい事とて、わびあへるもをかし。中納言のすけを權大納言實雄の君になさるゝに、をたうつはく事いかにも叶ふまじとて、曹司におるゝに、うへもいみじう笑はせ給ふ。辨内侍葦

の葉にかきて、かの局にさしおかせける。

「津の國のあしの下ねのいかなればなみに云をれてみだれがちなる」。

かへし、

「津の國のあしの云たねのみだれわびこゝろも浪にうきてふるかな」。

五月五日所々より御かぶとの花、くす玉などいろいろに多くまゐれり。朝餉にて人々これかれひきまさぐりなどするに、三條大納言公親の奉れる根に、露おきたる蓬の中に、ふかきといふ文字を結びたる、絲のさまもなよびかに、いと艶ありて見ゆるを、うへも御目とゞめて「何とまれいへかし」とのたまふを、人々もおよすげて見奉るを、辨内侍、

「あやめ草そこ云らぬまのながき根を深きこゝろにいかゞくらべむ」。

又その頃天王寺に院のまうでさせ給ふついでに、住吉へも御幸あり。「神はうれし」と後三條院仰せられけむためし、思ひ出でられ侍りき。大宮院も御まゐりなれば、出車どもいろいろの袖口ども、春秋の花紅葉を一度にならべて見る心ちして、いとうつくしく目も耀くばかりいどみつくされたり。上達部若き殿上人などは、例のかりあを、すそごの袴など、めづらしき姿どもを心々にうちませたりつる、殿のつゞき殿のイ　簀子に人々さぶらひてあまた聞えしかど、さのみはいかでか。太政大臣さね、

「今日や又さらに千とせをちぎるらむむかしにかへるすみよしの松」。

さても院の第一の御子は、右中辨平のむねのりのぬしのむすめ、四條の院に兵衛内侍とて侍

ひしが、劔璽につきて渡り參れりしを、忍び忍び御覽じけるほどに、その御腹にいでものし給へりしかど、當代生れさせ給ひにし後は、おしけたれておはしますに、又建長元年后腹に二宮さへさし續きひかりいで給へれば、いよいよ今は思ひ絶えぬる御契のほどを、私物にいとあはれと思ひ聞えさせ給ふ。源氏にやなし奉らましなどおぼすに、猶他かねば、唯御子にてあづまのあるじになし聞えてむとおぼして、建長四年正月八日、院の御まへにて御冠玄給ふ。御門の元服にもほとほと劣らず、くらつかさ何くれきよらを盡し給ふ。やがて三品のくらゐたまはり給ふ。御年十一なるべし。中務卿宗尊親王と申すめり。おなじ二月十九日都をいで給ふ。その日將軍の宣旨かうぶり給ふ。かゝるためしはいまだ侍らぬにや、上下めづらしくおもしろき事にいひさわぐべし。御迎にあづまの武士どもあまたのぼり、六波羅よりも名ある者の十人御送にくだる。上達部殿上人女房などあまたまゐるも、院中のほうこうにひとしかるべし。かしこに侍ふともがぎりあらむつかさかうぶりなどは、さはりあるまじとぞ仰せられける。何事も唯人がらによると見えたり。さはことによそほしげなり。誠におはやけとなり給はずばこれよりまさること何事かあむとぞ（侍）にぎはゝしく華やかさはならぶ方なし。院のうへも玄のびて粟田口のほとりに御車たてゝ御覽じおくりけるこそあはれにかたじけなく侍れ。さびはに美くしげにてはるばるとおはしますを、御母の内侍はあはれにかたじけなしと思ひ聞ゆべし。かゝればもとの將軍頼嗣三位中將は、その四月に都へのぼり給ひぬ。いとほしげにぞ見え給ひける。さて今下り給へるをもて崇め奉るさまいはむかたなし。

宮の中のおつらひ、御まうけの事などかぎりあれば善見天の珠妙のおやうごんもかくやとぞ覺えける。かやうにて今年はくれぬ。明くる年は建長五年なり。正月十三日御門御かうぶりし給ふ。御年十一。御いみな久仁と申す。いとあてにおはしませど、あまりさゝやかにて又御こしなどのおやしく渡らせ給ふぞ口をしかりける。いはけなかりし御ほどはなほいとあさましうおはしましけるを、閑院内裏焼けゝるまぎれよりうるはしくたゝせ給ひたりければ、内の焼けたるあさましさは何ならず。この御こしのなほりたるよろこびをのみぞ上下おぼしける。院のうへ鳥羽殿におはします頃神無月の十日頃朝覲の行幸おこなはせ給ふ。世にあるかぎりの上達部殿上人仕うまつる。いろいろの菊紅葉をこきまぜて、いみじうおもしろし。女院もおはしませば拝し奉り給ふを、大きおとゞ見奉り給ふに、喜びの涙ぞ人わろきほどなる。

「ためしなき我が身よいかに年たけてかゝるみゆきに今日つかへつる」。

げに大かたの世につけてだに、めでたくあらまほしき事どもを、我が御末と見給ふおとゞの心ちいかばかりなりけむ。來し方もためしなきまで高麗唐土の錦綾をたちかさねたり。大きおとゞばかりだねび給へれば、裏表白き綾の下がさねを着給へるしもいとめでたくなまめかし。池にはうるはしくからのよそひしたる御船二艘漕ぎよせて、御遊さまざまの事どもめでたくのゝしりて歸らせ給ふひゞきのゆゝしさを、女院も御心ゆきてきこしめす。その頃ほひ熊野の御幸侍りしにもよき上達部あまた仕うまつられき。給十一字。など心ことにいどみかはすべし。車は立てぬ事なりしかど、大宮院ばかりそれも出車は

なくて、唯一輌にて見奉り給ひしこそ、やんごとなさもおもしろく侍りけれ。辨の内侍、

「おりかざすなぎの葉風のかしこさにひかりみちぬる小車のわと」。

御幸熊野の本宮につかせ給ひて、それより新宮の川船に奉りてさしわたすほど、川のおもて所せきまで續きたるも御覽じなれぬさまなれば、院のうへ、

「熊野川せきりにわたすすぎぶねのへなみに袖のぬれにけるかな」。

その後も又ほどなく御幸ありしかば女院もまゐり給ひけり。皆人をろしめしたらむ。なかなかにこそ。

第六　おりゐる雲

春すぎ夏たけて年さりとしきたれば、康元元年にもなりにけり。おほさおとゞの第二の御むすめ東二條院女御にまゐりたまふ。女院の御はらからなれば、すぐし給へる程なれど、かゝるためしはあまた侍るべし。十二月十七日豐のあかりのころなれば内わたり華やかなるにいとゞうちそへて今めかしうめでたく、その日御せうそこを聞えたまふ。

「夕ぐれにまつぞ久しき千とせまでかはらぬ色のけふのためしを」。

關白かゝせ給ひけり。紅の匂の濃に薄になき八重にかさねたるを結びて包まれたり。時ならぬとて人々まうのぼりあつまる。女御の君裏濃きすはう七、濃き一重すはうのうはぎ赤色のからぎぬ、濃きはかま奉れり。じゆごうそひてまゐり給ふ。皆くれなゐのは崩黄のうはぎ、赤色のからぎぬきたまふ。いだし車十輌皆二人づゝのるべし。一の左車に一條殿大殿のすむめ、右に二

條殿（きんとしの大納言のむすめ）、二の左おせちの君（――のかひらの、むすめいもうとイ）、右に中納言の君（されたふ、のむすめ）、三の左に民部卿殿、右別當殿、その次々くだくだしければとゞめつ。御童下仕、御はした、御ざうし、御ひすましなどいふ物まで、形ちよきをえりとゝのへられたるいみじう見所あるべし。御せうとの殿ばら右大臣（きんすけ）、内大臣（きんもと）參り給ふ。かぎりなくよそほしげなり。院の御子にさへおたてまつらせ給へれば、いよいよいつかれ給ふさまいはむ方なし。待賢門院の白河院の御子とて、鳥羽殿に參り給へりしためしにやとぞ心あてには覺え侍りし。御門の一つ御腹の姫宮、この頃皇后宮とて、その御方の内侍ぞ御使に參る。まうのぼり給ふほども、女御はいとはづかしく似げなき事におぼしたれば、とみにえうごかれ給はぬを人々そゝのかし申し給ふ。御太刀一條殿、御几帳按察使殿、御火取中納言もたれたり。上は十四になり給ふに、女御は二十五にぞおはしける。御門きびはなる御程を、なかなかおなづらはしき方に思ひなし聞え給ひぬべかりつるに、いとざれてつゝましげならず聞えかゝり給ふを准后はうつくしと見奉らせ給ふ。御ふすまは紅のうち八四方なるに、かみにはうはざしのくみあり。絲の色などさよらにめでたし。例の事なれば准后たてまつりたまふ。おはさおとゞも三日がほどはさぶらひ給ふ。上達部にけんばいあり。二十三日また御せうそこまゐる。御使頭中將通世、こたみも殿かゝせ給ふめり。この頃殿と聞ゆるはおほいまうちぎみ（かれのおとゞをかのや殿の御せうと（おほいとイ）ぞかし。後には稱念院殿（イ）と申しけり。御手すぐれてめでたく書かせ給ひしよ。應司殿の御家のはじめなるべし。

「朝日かげけふより玄るき雲のうへのそらにぞ千世のいろも見えける」。

御返し、おほきおとゞきこえたまふ。

「朝日かげあらはれそむる雲のうへにゆくすゑとほきちぎりをぞ玄る」。

女のさうぞく細長そへてかづけ給ふ。今日はじめて内のうへ女御の御方にわたらせ給ふ。御供に關白殿、右大臣きん、内大臣きん、四條大納言たか、權大納言さね、家教通成左大將もとひら などおしなべたらぬ人々參り給ふ。もちひの使頭中將隆顯つかうまつる。おほきおとゞ夜のおとゞよりとり入れ給ふ。御心の中のいはひいかばかりかとおしはかる。人々のろく紅梅のにはひ、朽黄のうはぎ、葡萄染のからぎぬ、うちき、はそなが、うらなどしなじなに隨ひてけぢめあるべし。かくて今年はくれぬ。正月いつしか后にたち給ふ。たゞ人の御むすめのかく后國母にて立ちつゞきさぶらひ給へるためしまれにやあらむ。おとゞの御さかえなめり。御子二人大臣にておはす。きんすけきんもとゝて大將にも左右に並びておはせしぞかし。これもためしいとあまたは聞えぬ事なるべし。我が御身太政大臣にて、二人の大將を引き具して最勝講なりしかとよ。參り給へりし御いきほひのめでたさは珍らかなる程にぞ侍りし。后國母の御おや御門の御おほぢにて、まことにそのうつはものに足りぬと見え給へり。昔後鳥羽院にさぶらひし玄もづけの君は、さる世のふるき人にて、おとゞに聞えける。

「藤なみのかげさしならぶみかさ山人にこえたる木ずゑとぞみる」。

かへし、おとゞ、

「思ひやれみかさの山のふぢの花さきならべつゝ見つるこゝろを」。かゝる御家のさかえを自らもやんごとなしとおぼし續けてよみ給ひける、

「春雨は四方の草木をわかねども去げきめぐみはわが身なりけり」。

正嘉元年春の頃より承明門院御惱み重らせ給へば、院もいみじう驚かせ給ひて、御修法などかと聞えつれど、遂に七月五日御年八十七にてかくれさせ給ひぬ。ことわりの御年のほどなれど、昔の御なごりと哀にいとほしういたづき奉らせ給へるに、あへなくて御法事などねんごろにおきてのたまはするいとめでたき御身なりかし。あくる年八月七日二の御子龜山の院坊に居給ひぬ。御年十なり。よろづ定りぬる世の中めでたく心のどかにおぼさるべし。その又の年正嘉三年三月二十日なりしにや、高野御幸こそ、又こし方行く末もためしあらじと見ゆるまで世のいとなみ天の下のさわぎには侍りしか。關白殿、左備右大臣、內大臣、左右の大將、檢非違使の別當をはじめて殘るはすくなし。馬鞍、隨身、舍人、雜色、わらはの髮かたちたけすがたまで、かたはなるなくえりとゝのへ心を盡したるよそひども、かずかずは筆にも及びがたし。かゝる色もありけりと珍しく驚かるゝほどになむ。去ろがねこがねをのべ、二重三重の織物ぬひ物、からやまとの綾錦、紅梅のなほし、櫻のからの木のもんこすそご、ふせんりょう、いろいろさまざまなりし。うへのきぬ、狩衣、思ひ思ひのきぬをいだせり。いかなる龍田姫の錦も、かゝるたぐひはありがたくこそ見え侍りけれ。かたみに語らふ人はおらざりけめど、同じ紋も色も侍らざりけるぞふしぎなる。おまりに染め盡して、なにがしの中將とかや、

紺むらごの指貫をさへぞきたりける。それしもめづらかにて、賤しくも見え侍らざりけるとかや。院の御さまかたち事がらは、いとゞ光をそへてめでたく見え給ふ。後土御門の内大臣定通の御子おきさだの大納言、大将望み給ひしを、院もさりぬべくおぼせられければ、除目の夜殿の内の者どもゝ心づかひして侍るを、心もとなく思ひあへるに引きたがへて、先に聞えつるきんもとのおとゞにておはせしやらむなり給へりしかば、うらみに堪へず頭おろして、この高野にこもり居給へるを、いとほしくあへなしとおぼされければ、今日の御幸のついでにかの室を尋ねさせ給ひて、御對面あるべく仰せられつかはしたるに、昨日までおはしけるが、夜の間にかの庵をかきはらひ跡もなく去なして、いと清げに白きすなごばかりをこと更にちらしたりと見えて人もなし。我が身はかつらのはむろの山荘へ逃げのぼり給ひにけり。そのよし奏すれば「今さらに見えじとなり。いとからい心かな」とぞのたまはせける。かくのみところどころに御幸去げう御心ゆく事ひまなくて、いさゝかもおぼしむすぼるゝ事もなくめでたき御ありさまなれば、仕うまつる人々までも思ふ事なき世なり。吉田の院にても常は御歌合など去たまふ。鳥羽殿にはいと久しくおはしますをりのみあり。春の頃行幸ありしには御門も御まりにたゝせ給へり。二條の關白（よしざね）あげまりし給ひき。内の女房などめして池の御船にのせて物の音ども吹きあはせ、さまざまのふ流のわりご引出物などこちたき事どもゝしげかりき。又嵯峨の龜山のふもと、大井川の北の岸にあたりてゆゝしき院をぞ造らせ給へる。小倉の山の木ずゑ戸灘瀬の瀧もさながら御墻のうちに見えて、わざとつく

ろはぬせん栽もおのづからなさけを加へたる所がら、いみじき繪師といふとも筆及びがたし。寢殿のならびにいぬゐにあたりて西に藥草院、東に如來壽量院などいふもあり。橘の大后のむかし建てられたりし檀林寺といひし、今はあらして礎ばかりになりたれば、其跡に淨金剛院といふ御堂を建てさせ給へるに、道顯僧正上人を長老になされて、淨土宗をおかる。天王寺の金堂うつさせ給ひて多寶院とかや建てられたる。川に望みてさじき殿造らる。大多勝院と聞ゆるは、寢殿のつゞき御持佛すゑ奉らせ給へり。かやうの引き離れたる道は、廊渡殿そり橋などをはるかにして、すべていかめしう三葉四葉に磨きたてられたるいとめでたし。正元元年三月五日西園寺の花ざかりに大宮院一切經供養せさせ給ふ。年比おぼしおきてけるをもいたくあらしめさぬに、女の御願にていとかしこくありがたき御事なれば、院も同じ御心にいでたちのたまふ。がくやのものども地下も殿上もなべてならぬをえりとゝのへらる。その日になりて行幸あり。春宮もおなじく行啓なる。大臣上達部皆うへのきぬにて、左右に別ちて御はしの間の高欄につき給ふ。法會の儀式、いみじさくめでたき事どもまねびがたし。又の日御前の御遊び始まる。御門後深草院御琵琶、春宮御笛、まだいとちひさき御程にびんづらゆひて、御かたちまほに美くしげにて、吹きたて給へる音の雲ゐをひゞかしておもしろき程なれば天つをとめもかくやとおぼえて、おほきおとゞ實氏ことにみもえあへ給はず、日おしのごひつゝためらひかね給へるを、ことわりにおいしらへる大臣上達部など皆御袖どもうるほひわたりぬ。女院の御心のうち、ましておき所なくおぼさるらむかし。さきの世に

いかばかり功徳の御身にて、かくおぼすさまにめでたき御さかえを見給ふらむと、おもひやり聞ゆるもゆゝしきまでぞ侍りし。御遊はてゝのち文臺めさる。院の御製、

「いろいろに袖ぢをつゝらねてさきにけり花もわが世も今さかりかも」。

あたりをはらひてきはなくめでたく聞ゆるに、あるじのおとゞ歌さへぞかけわひて侍るにや、

「いろいろに榮えて匂へさくら花わがきみぎみの千世のかざしに」。

末まで多かりしかど、例のさのみはにてとゞめつ。いかめしうひゞきて歸らせ給ひぬる。またのあした無量光院の花のもとにて、おとゞ昨日の名殘おぼしいづるもいみじうて、

「この春ぞこゝろのいろはひらけぬる六十あまりの花はみしかど」。

その年の八月二十八日、春宮十一にて御元服ぢたまふ。御いみな恒仁ときこゆ。世の中にやうやうはのめき聞ゆる事あれば、御門はおかず心ぼそうおぼされて、夜居の間の玄づかなる御物語のついでに、内侍所の御はいの數をかぞへられければ、五千七十四日なりけるをうけたまはりて、辨内侍、

「千代といへば五つかさねて七十にあまる日かずを神はわすれじ」。

かくて十一月廿六日おりゐさせ給ふ夜、空のけしきさへあはれに雨うちそゝぎて物悲しく見えければ、伊勢の御が「あひも思はぬもゝゝしきを」といひけむふる事さへ今の心ちして心ぼそくおぼゆ。うへもおぼしまうけ給へれど、劔璽の出でさせ給ふほど常の御幸に御身を離

れさりつるならひ、十三年の御名殘ひきわかるゝ猶いと哀に忍びがたき御けしきをかなしと見奉りて、辨内侍、

「いまはとておりゐる雲の去ぐるれば心のうちぞかきくらしける」。

第七　煙の末々

寶治二年十一月二十日ごろ紅葉御覽じがてら宇治に御幸したまふ。（かのや殿の攝政の御程なり。）上達部殿上人、思ひ思ひいろいろの狩衣、菊紅葉のこき薄き、縫物織物あやにしき、かねてより世のいとなみなり。二十一日の朝ぼらけに出でさせ給ふ。御ゑぼう子なほし、薄色の浮織物の御指貫、網代びさしの御車にたてまつる。まづ殿上人下﨟より前行す。中將爲氏ふせんりようの狩衣、右馬頭房名、もとゝも、菊のから織物、內藏頭たかゆき、あきかた、白菊のかり衣、皇后宮權のすけみちよ、右中辨時繼、薄青のかた織物、紫のきぬ、前の兵衞のすけ邦經、赤色の狩衣、衞門のすけ親嗣、ふた藍の狩衣、なりとしひはだ、伴氏、左兵衞のすけ親朝はむすびかり衣に菊をおきものにして紫すそごの指貫菊をぬひたり。上達部は堀川の大納言ともざねなほし、皇后宮大夫たかちかなほし、花山院の大納言さだまさ權大納言され花田の織物のかりぎぬ、かれ野のきぬ、土御門の大納言あきさだ、左衞門のかみさねふちうすあを、衞門のかみみちかれなり野の織物のかりぎぬ、別當定嗣なほし、雜色に野劍をもたせたり。皇后宮の權大夫もろつぐ萠黃のふせんりようのかりぎぬ、浮織物のさしぬき、紅のきぬ、土御門の宰相の中將いへまさ、からの織物の狩ぎぬ、御隨身居飼御廐舍人までいかにせむといろいろをつくす。院の御車のうしろに權大納言

きんすけ緋緒のかりぎぬ、紅のきぬ、白きひとへにて、えもいはぬさまして仕うまつり給ふ。検非違使北面などまで思ひ思ひにいかでめづらしきさまにと好みたるはゆゝしき見物にぞ侍りし。衛府の上達部ばかり、きぬの随身に弓やなぐひをもたせたり。人だまひ二輛、一の車にいろいろの紅葉を濃くうすく、いかなる龍田姫がかゝる色を染めいでけむとめづらかなり。二の車は菊をいだされたるも、なべての色ならむやは。その外院の御めのと大納言二位殿、いとよそほしげにて、諸大夫さぶらひ清げなる召し具してまゐり給ふ。宰相三位殿ときこゆるは、かの若宮の御母兵衛の内侍殿といひし、この頃は三位したまへり。今一きはめでたくゆゝしげにて北面の下臈三人、諸大夫二人心ことにひきつくろひたるさまなり。建久に後鳥羽院宇治の御幸の時、修明門院その頃二條の君とて参り給へりし例をまねばるゝとぞ聞えける。又大納言のすけとは藤大納言爲家のむすめ、それもぞちにひきさがりていたく用意ことにてまゐらる。宇治川の東の岸に御舟まうけられたれば御車より奉りうつるほど夕つかたになりぬ。御舟さしいろいろのかりあをにて八人づゝさまざまなり。もとゝもの中將、院の御はかせもたる。おきとも御ぞぢまゐらず。平等院のつゞどのに御ふねよせておりさせたまふ。本だうにて御誦きやうあり。御導師まかでゝのち、阿彌陀堂御經藏せんぼふ堂までことごとく御らんじわたす。かはの左右のきしにかゞり火ろくたかせて鵜かひどもめす。ゐんの御まへよりはじめて御だいどもまゐる。ゑろかねの脱文　にしきのうちしきなどいときよらにまうけられたり。ばいせんのごんたいなごんきんすけ、やくそうはてんじやうひとな

り。上達部には御盞四本、殿上人には二なり。女房の中にもいろいろさまざまの風流のくだものついかさねなど、よしあるさまになまめかしう玄なしてもて續きたる、こまかにうつくし。院のうへ梅壺のはなちいでに入らせたまふ。攝政殿左のおとゞ皆御供にさぶらひ給ふ。又の日の暮つかた又御舟にてまきの島、梅の島、橘の小島など御覽せらる。御あそびはじまる。舟のうちに樂器ども設けられたれば吹きたてたるもの丶音世に玄らず、所がらはましておもしろう聞ゆるに、水の底にも耳とむるものやとそゞろ寒きほどなり。かのうばそくの宮の「へだて丶見ゆる」とのたまひけむをちの玄ら浪もえんなるおとをそへたるは萬づをりからにや。廿三日還御の日ぞ御贈物ども奉り給ふ。御手本、和琴、御馬二疋まゐらせらる。院よりもあるじのおとゞに御馬奉り給ふ。院の御隨身どもけはひ殊にてほうだうの前の庭にひきいでたれば、衞門のすけ親朝親嗣二人うけとる。殿おり給ひて拜し給ふ。（なかのや殿かれつれのおとゞの御事なり。）その後賞おこなはる。左のおとゞ一品玄給ふべきよし院のうへ自らのたまはすれば、又立ちいで丶なほしを奉りながら拜舞し給ふ。よろづ御心ゆくかぎり遊びの丶しらせ給ひて、かへらせ給ふまゝに、左大臣殿（かれひら）從一位玄たまふ。殿のけいし末より四品ゆるさせ給ふいとこよなし。寬治にはよしつね正四位下、保元に月の輪殿從下の四品をぞ玄給ひける。今の御有樣はかのふるきたしめしにも越えたり。いとめでたくおもしろし。還御の當日に女房のさうぞくかいぐいろいろにいと清らなる十具、おのおのひらつゝみに長櫃にて大納言二位の曹司におくらる。又宰相三位のもとへも別に遣されけり。建久には夏なりしかばひとへがさね

廿具おりけるをおぼし出でけるにや、さまざまゆゝしき事どもにて過ぎぬ。この御るすの程に二條油の小路に火いできて、閑院殿のついがきの内なれば内膳屋焼けて、神代より傳れる御釜も焼けそこなはれけるをぞいとおさましき事には申し侍りし。かの釜昔は三つありけるを、一つをば平野、一つをば忌火、一つをば庭火と申しけるを、圓融院の御代永觀の頃二つはうせにけり。今一つ殘りたるに、かゝる事の出できぬるはいと宜しからぬわざなりとて神祇官に尋ねられ、古き事ども考へらる。平野といひけるを陰陽寮にすゑてみづのとの祭といふ事に用ゐけれど、中頃よりかの祭は絶えぬ。忌火といふにては六月十二月の御神事の御膳をば調じけり。庭火にて常の御膳をばつかうまつるにかゝればいとたいたいしき事にて、始めていもじに仰せらるべきかと申す。古きを損はれたる所ばかりをなほさるべきかとも、いろいろに定めかねられたり。入道おほきおとゞなどもふるきをなほさるべしと申さるとぞ聞えける。その頃宰相の三位の若宮宗尊親王の御事なり。御ふみはじめとて人々まゐりつどひ給ふ。七つにならせ給ふべし。關白殿をはじめ大臣上達部のこりなし。左はずの廿五日なり。文章の博士序奉らる。管絃の具召されて人々例のごと吹きあはせ給ふ。その後文臺めして詩の披講ありき。けんばいの儀式何事も保延のためしとぞ承りし。かくて年明けぬれば寶治も三年になりぬ。春たちかへるわしたのそらの光は思ひなしさへいみじきを、院うちのけしき誠にめでたし。攝政殿にも拜禮おこなはる。院の御まへは更にもいはず、大宮院にもあり。まづ冷泉萬里小路殿といふは殘のをの大納言たかちかの家ぞかし。この頃院のおはしませば拜禮に人

々まゐり給ふ。攝政殿兼經左大臣かれひら右大臣たゞいへ内大臣さねもと大納言には公相、實雄、顯定、道良、中納言に爲常、良教、資季、冬忠、實藤、公光、資成、定嗣、宰相に道行、師繼、顯朝、殿上人は兩貫首をはじめかず知らず、常の年々に越えてこの春はまゐりこみ給へり。人々たちなみ給へる時、左のおとゞは攝政の御子なれば引き退きてたち給へり。右もまたその同じつらに立たれたるに内のおとゞすゝみ出で給へり。それにつぎて大中納言も同じつらなり。よしのり、きんみつ、師繼、顯朝また退きて立ちたれば出入して屏風に似たり。この事見にくしと後までさまざま院の御まへに仰せられて攝政殿に尋ね申され、さたがましく侍りけるを、貞應元年の例などいできて、故野の宮左大臣、今の内のおとゞ、御親の右大臣にて退きたるつらに立たれたりける、その時の記錄など見給はざりけるにやとて、内のおとゞの御ふるまひ心えずとぞ沙汰ありける。院の拜禮はてゝ、内の小朝拜節會などに皆人々こうじ給へるに、又大宮院の拜禮めでたくぞ侍りける。四日は承明門院へ御幸はじめ、院の御さまのつきせずめでたく見えさせ給ふを、あく世なういみじと見奉らせ給ふ。浮織物の薄色の御指貫紅の御ぞたてまつれり。上達部殿上人、直衣うへのきぬ思ひ思ひなり。攝政殿もまゐり給ふ。夜に入りて歸らせ給ひぬれば、やがてやがて又大宮院内へ御幸始め、これも上達部殿上人ありつるかぎりのこりなし、網代びさしにたてまつる。皇后宮の御方の東むきへ御車よせて、宮御對面いとめでたし。うへはまだいといはけなき御程にて、かくいつくしき萬乘のあるじに備り給へる御有さまを女院もいとやんごとなくかたじけなしと見奉り給ふ。皇后宮と聞ゆるはこれも

院の御このかみにて、位におはしましゝ時も、御母ざろなど聞えさせ給ひしを、この御門いとけなくわたらせ給へば、今はいとゞまして内にのみおはしまして、こぞの八月より皇后宮ときこゆる、後には仙花門院と聞えし御事なるべし。院の若宮十三にならせ給ふは公宗の中将といひし人のむすめの御腹なり。圓満院の法親王の御弟子にならせ給ふべしとて正月廿八日にその御用意あり。承明門院よりわたり給ふ。院の網代びさしの御車にて、上達部は車、ともざねの大納言を上ざゆにて六人、殿上人十六人、馬にていろいろにいとよそほしうめでたくておはしましぬ。その夜やがて御ぐしおろして御法名圓助ときこゆ。いとうつくしげさ佛などの心ちして哀れに見え給ふ。院の宮だちの御中には御このかみにてものし給へど、御げさくのよわきは今も昔もかゝることそいといとほしきわざなりけれ。御匣殿の御腹の若宮も三つにならせ給へる、承明門院にて御魚味きこしめしなどすべし。これも法親王がねにてこそはものし給はめ。あまたの御中にこの御子は御かたちすぐれ給へれば、院もいとらうたく思ひ聞えさせ給ひけり。かくいふ程に二月一日の夜、常よりも九重の宮の内人ずくなにて大かた夜もふづかなるに、子の時ばかりに閑院殿の二條おもての對より火いできて、棟もえおつる程にぞ始めて見つけたる、あさましともなのめなる。何のたどりもなく唯あわてさわぎ我も人もうつし心なければ、きんなほの中將の御とのゐにさぶらひけるが、車の陣なるを召して皇后宮の御方へよす。内のうへをば御くしげ殿抱き奉らせ給ひて宮もたてまつる。劔璽ばかりとり具して門を急ぎいでさせ給ふ。とばかりありて權大納言さねをの參り給へり

ける車にめしうつりて、春日富小路に公相の大納言のおはする家に行幸なる。そのほどにぞ攝政殿をはじめおほきおとゞ、左大臣、内大臣よりしも殘りなく人々まゐり集ひ給ふ。院も御車引き出で丶見奉らせ給ふ。かゝるほどに閑院殿より春日はかたはゞかりありとて院のおはします萬里小路殿へひきかへして行幸あり。夜明けはて丶のち又前のおほきおとゞ（うじ）の冷泉富小路へ行幸なりて云ばし内裏になりぬ。内の燒くることはこれをはじめにもあらず、世がりての事はさしおきぬ。天德四年村上のさばかりめでたかりし御代よりこのかた既に廿餘度になりぬるにや、ひじりの御代にしもかゝる事は侍りしかど、承元に燒けにし後は久しくこの四十四年はなかりつるに、去年の冬御釜燒け損じて又かくうち續きぬるをいとあさましう思す。何よりも御門の御車に奉りて出でさせ給へるをいたくれいなき事とかやとて人々かたぶき申す。院もおどろきおぼされて、古き事ども廣く尋ねられなどすべし。院も内もはひわたるほどのちかさなれば、御とのゐの人々など日頃よりも參りつどひて御旅の雲ゐなれどなかなかいとけせうなり。北の對のつまなる紅梅のいとおもしろく咲きたるが、院の御前より御覽じやらるゝほどなれば、雅家の宰相の中將していと艷になよびたる薄葉にかゝせ給ひて、院の上、

「色も香もかさねてにほへ梅の花こゝのへになるやどの主るしに」

とてかの梅に結びつけさせらる。御返し辨の内侍うけたまはりて申すべしとき丶侍りしをなかのぃめなりといふ事にて、おとゞ今出川より申されけるとかや。それも忘れ侍りぬるこそ口

をしけれ。老はかくうきものにぞ侍るや。世の中とかくさわがしとて年號かはる。三月十八日建長になりぬれど、猶火災ことづまらで、廿三日またまた姉小路室町、唐橋の大納言雅親の家のそばより火いできて百餘町やけたり。おびたゞしともいふかたなし。寛元四年の六月にもおそろしき火侍りしかど、この度は猶それよりもこえたり。かの雅親の大納言の家ばかり、四方は皆燒けたるに殘れるいとゞふしぎなりとぞ見る人ごとにあざみける。曉より出できたる火夜に入るまでもえず。未の時ばかりに蓮華王院の御堂にもえつきければ俄に院も御幸なる。御道すがらもさながら烟をわけさせ給ふ。いと珍らかにおさまし。攝政殿も御車に參り給へり。三十三間の御堂の千體の千手一時にほのほにたぐひ給へば、不動堂ほくと堂も殘らず、寶藏鎭守ばかりぞ辛うじてうちけちにける。後白河院のさばかり御志深うおもはしたちて長寬二年供養ありし後はやんごとなき御寺なりつるに、おさましなどいふもおろかなり。又今熊野の鐘樓僧坊などおほくやけぬ。つじ風さへ吹きまじり吹きまじり炎の飛ぶ事鳥のごとし。又の朝までもえけり。その聖つ方さきの火もえつきて後、又雙林寺といふわたりに火いできて、なにがしの姫君の御もと、ふるき昔の跡皆けぶりになりぬ。その火消えて後又夕つかた岡崎わたりに火いできて、攝政殿御もとせうせう燒けゝり。又承明門院の近き程にも火いできて人々まゐりつどふ。中の御門より二條まで又火出できて十八町やけぬ。すべて廿三日よりつごもりに及ぶまで日をへ時をへて、あるは一日に二三度二むら三むらにわけてもえわたる。かゝる程に都は既に三分の二やけぬ。いといとめづらかなりし事

なり。たゞ事にあらずとて院の御前に陰陽師七人召して御占行はる。重き御つゝしみと申せば御修法どもはじめ、山々にも御いのり仕うまつるべきよしことさらに仰せらる。院のうへの御ありさまのよろづにめでたくおはしますを思ふには、何の御つゝしみもなでう事かあらむとぞ覺え侍る。位おりさせ給ひにし後は、年を經て春の中に必ずまづ石清水に七日御こもり、その中に五部の大乘經供養せさせ給ふ。御下向の後はやがて賀茂に御幸、平野北野などもさだまれる御事なり。寺には嵯峨の清涼寺ほうりんうづまさなどに御幸ありて、寺司に賞おこなはれ、法師ばらに物かづけ、すべて神を敬ひ佛を尊びさせ給ふ事、「きしかたも行く末もためしあらじ」とぞ世の人申しあひける。

第八　北野の雪（四字熟）

文永も三年になりぬ。五月に蓮華王院の供養に御幸あり。一院は赤色のうへの御ぞ、新院は青色の御袍たてまつれり。女院（大宮）の御車に平准后も參り給ふ。人だまひ三輛は綿入れる五つぎぬなり。御車の尻に仕うまつられたる上臈だつ人のにや、おはせの五つぎぬ藤のうはぎ袖口いださる。御幸には上達部は皇后宮大夫師繼を上首にて十人、殿上人十二人、御隨身ども藤山吹をつけたり。ゐかひみまやの舍人まで世になくきらめきたり。常のけんぶつにすぎたるべし。行幸は當日の午の時ばかりなるに諸司百官殘るなし。左右の大臣薄色蘇芳などなり。右大將通雅花橘の下がさね、權中納言公藤おなじ色、左大將家經蘇芳の下がさね萠黃の上のはかま、侍從中納言爲氏、權中納言通基、左衞門督通頼、衣笠宰相中將經平これらは皆蘇芳

の下がさね萠黄の上のはかまなり。別當高定、宰相中將通持、三位中將實棟、右衞門督師親、殿上人には頭中將具氏、忠秀この人々は松重の下がさねを着給へりし」と申す人も侍りしはいづれかまとなりけむ。近衞將曹廿四人、とりどりいろいろに織り盡したるめでたかりけり。關白殿御車にて參りたまふ。まづ女院の御車東の廂の北の妻戸へ左右大臣よせらる。院司の大納言通成事のよしを奏せられて樂屋の亂聲など常のごとし。御寺の儀式ありし法勝寺にかはらず。御導師は、聖基僧正、御方々の引出物どもいとゆゝしう法師ばらのたけとひとしき程に積みかさねたり。萬歲樂地久など賞仰せらる。人々の祿、關白殿には織物の袿一重藏人頭とりてたてまつる。大臣には綾の袿、納言は平絹なり。御門、新院御對面の儀式など定めて男の記錄に侍らむかし。御願文の清書は經朝の三位、料紙は紫の色紙、額はかの建て始められし長寬に、敎長書きたりけるが燒けざりければ、この度もそれをぞ用ゐられける。かくて少し人々の心のどかにうち靜まりて思さるゝに、あづまに何事にか煩しき事いできにたりとて將軍宗尊親王七月八日俄なるやうにて御のぼり、かねては始めて御のぼりあらむ時の儀式などになくめでたかるべきよしをのみ聞きしに、思ひかけぬほどにいと怪しき御ありさまにて御のぼりあり。御くだりの、六波羅の北方に建てられたりし檜皮屋に落ちつかせおはしましぬ。この頃あづまに世の中おさてはからふぬしは相模守時宗と左京權大夫政村朝臣なり。政村とはありし義時の四郎なり。京の南(ママ)六波羅は陸奥守時茂、式部太輔時輔とぞ聞ゆる。中務

の御子の御のぼりの代に、かの御子の三つになり給ふ若君近衛殿の姫君の御腹ぞかし。七月廿七日に將軍の宣旨かうぶらせ給ひて頓て四品を給ふ。經任の中納言を御使にてあづまへ下されなどして苦しからぬ御事になりぬとて、十月ばかりに故承明門院の御跡、土御門萬里小路殿へ御移ろひありて後ぞ院のうへ御母准后なども參りはじめて御對面あり。さるべき人々も參りつかうまつりなどして世のつねの御有樣にはなりにけれど、建長四年に十一にて御下ありし後今まで十五年がほど、にきはゝしくいみじうもて崇められさせ給ひて、ゆゝしかりつる御住ひにひきかへ、物淋しく心細うなどおぼさるゝ折々もありけるにや、

「虎とのみもてなされしはむかしにていまは鼠のあなう世の中」。

又雪のいみじうふりたるあした右近の馬場の方御覽じにおはしましてよませ給ひける、

「なほたのむ北野の雪の朝ぼらけ跡なきことにうづもるゝ身は」

などきこえき。大方この御子の歌のひじりにておはします事皆人の口に侍るべし。「枯野の眞葛霜とけて」なども人ごとにめでのゝしる御歌なるべし。又の年二月には龜山殿の淨金剛院にて十五日涅槃の儀式うつし行はせ給ふ。それより五日の御八講に人々才賢き限りを擇びめす。大殿二條殿にも西八條にて故東山殿の御ために八講行はせ給ふ。關白殿も光明峰寺にて結緣灌頂とり行はる。鷹司殿には昔の御北の方の十三年の法事とて大宮殿にていかめしき事どもいとなませ給ふ。中に繪像の阿彌陀、余吾將軍の臨終佛なりけるを、惠心の僧都傳へられたりけるをもたせ給ひて供養し給ふ。常の佛の御さまには變り給ひて化佛の御光

などめでたくおはしましけり。こゝもかしこも尊き事のみ耳にみちて功濁とはいひがたし。安嘉門院も御法事おこなはる。男も法師もいとまなくあかれあかれまゐり仕うまつらる。佛法のさかりとぞ見えたる。その頃殿の大將つねへ内大臣になり給ひぬ。節會はつるまゝに大饗行はる。尊者には新大納言爲氏參られけり。御遊など例の事どもおもしろくなむ。今出川中納言實兼も琵琶彈き給ふ。春のあけぼのゝえんなるに物の音もてはやさるべし。その頃又東二條院熊野へ御まゐり、めでたかりし事どもゝおまりになればさのみはにて漏しつ。かくて四月廿三日より院のうへは又龜山殿にて御如法經あそばす。女院もかゝせおはしましけり。五月廿三日十種供養の御經二部、淨土の三部經もかゝせ給へり。齋會の御わりさまはいつよりも猶いみじ。時なりて寢殿の御左つらひ、淨土のしやうごんもかばかりにこそと見えて、玉の幡、瑠璃の天蓋、天に光をかゞやかし、金銀のかざり地を照せるさま筆にも及び難し。上達部左右につき給ふ。左大臣基平、内大臣家經、大納言は良教、資季、通成、師繼、通雅、中納言は公藤、長雅、通敎、經俊、宰相は時繼、資平、宗雅、雅言、具氏などさぶらはる。盤渉調の調子を吹きて天童二人玉の幡をさゝげて、傳供ども次第に奉るほど鳥向樂を吹き出したり。中島に樂屋はかざられたれば橋の上を樂人つらねてまゐる程、院の上もいでさせ給ひて傳供に立ち加らせおはします御さまいとかたじけなくめでたし。關白殿、おほきおとゞ、左大臣、内大臣皆傳供にまたがはせ給ふ。宗明樂秋風樂を奏して繰り返したる程おもしろき事身の毛だつばかりなり。御前の御遊には笙は公藤、通頼、房名、宗雅、笛は長雅、師親、相保、篳篥は實

成朝臣、光顯、御琵琶は新院、今出川中納言實兼、富小路三位公成、箏は大納言の二位殿、院の上この頃またなき御めしうど放入道相國の御むすめとぞ聞えし。又刑部卿中宮の御母少納言、新兵衛、男には良敎の大納言などぞひかれける。すぐれたる上手どもの手を盡し給ひけむは彌勒菩薩もいかばかりゑみを含み給ひけむ。御經一部は北野の御社へ御奉納、今一部と三部經は八幡へ御幸ありて籠め奉らせ給ふ。女院の書かせ坐しましたるは横川にぞ籠められける。かくおなじ御心に佛法の御いとなみもやんごとなくのみおはしますこそ聖武天皇光明皇后の御ためしにやとありがたく承りしか。今年五月雨常よりもはれまなくて、伊勢の宮河も岸をひたして齋宮の御まゐりも御船なり。祭主も別の船にて御供仕うまつる。道すがら歌うたひ絲竹の吹らべなどしておもしろく遊びくらす。御下りの後四年になりぬ。ふるきためしにまかせて准后の宣旨まゐる。御使に中院の少將爲定朝臣下りて事のよし申す。殿上に召して裝束唐衣祿たまふ。舞踏してのち都の物がたりなどさるべきおとなだつ人々に少し聞えかはす。艶なる心ちして、たゞの宮腹ならばはかなし事なども聞えぬべけれど、かうがうしくけどほき御有樣なればすくよかにてまかでぬ。その年なが月の頃左のおとゞ近衛殿の日野山庄へ一院新院、大宮院御幸あり。世になきさまを盡さる。銀金の御皿ども、螺鈿の御臺、うち敷、めなれぬほどの事どもなり。院の御ぶん御小直衣、皆具、夜の御衾、白御太刀、御馬二疋、からわやぎよりようなどにて、二階つくられて、御草子箱、御硯は世々を經て重き寶の石なり。管絃の御厨子樂器いろいろの綾錦などにて造りておかる。女院の御かた新院の御ぶんなどもおな

じやうなり。大納言二位殿にも裝束まもりの筥までいとなまめかしう清らなるものどもぞありける。上達部殿上人にも馬牛ひかる。銀のかたみを五つくませて松茸入れらる。山へ皆入らせおはしまして御らんの後、御かはらけ幾返となく聞しめせば、人々もゑひ亂れさまざまにて過ぎぬ。そのおなじ頃安嘉門院丼後の天の橋立御らんじにとておはします。それより但馬のきの崎のいでゆめしに下らせ給ふ。爲家の大納言光成の三位など御供つかうまつらる。この女院の御ありさまぞ又いとみじうきしかた行くすゑのためしにもなりぬべく、萬の事御心のまゝにこのましくものし給ひける。童舞、白拍子、田樂などいふ事このませ給ひて、いにしへの郁芳門院にもやゝまさりてぞおはします。侍らふ人々も常にうちとけず、きぬの色あざやかにはなばなと今めかしき院の内なり。又安養壽院といひて山の峰なる御堂には常にたてこもらせ給ひて御觀法などあるには人の參る事もたやすくなし。鳴子をかけてひかせ給ひてぞおのづから人をも召しける。又その頃にや、秋の雨日頃ふりていと所せかりしに、たまたま雲間見えて空の氣色物すごき程に、一院、新院、大宮院、東二條院など皆ひとつ御方におはします。御前におはさおとゞ公相、常磐井入道殿實氏もさぶらひ給ふ。前の左のおとゞ實雄、久我大納言雅忠などうとからぬ人々ばかりにて大御酒參る。あまた下りながれて上下すこしうち亂れ給へるに、おはさおとゞ本院の御盃をたまはり給ひて、もちながらとばかりやすらひて「公相官位共に極め侍りぬ。中宮今出川院さておはしませば、もし皇子降誕もあらば家門の榮花衰ふべからず。實兼もけしうは侍らぬぞのこなり。後めたくも思ひ侍らぬ

に一つのうれへ心の底になむ侍る」と申し給へば、人々何事にかとおぼつかなくなむ思ひあはる。左のおとゞ實雄公は中宮の御事かくのたまふをいでやと耳にとまりてうちおぼさるらむかし。一院「何事にか」とのたまふに、ゑばしわりて「入道相國にいかにも先だちぬべき心ちなむ侍る。恨の至りてうらめしきはさかりにて親に先だつ恨み、悲びのいたりて悲しきは老いて子に後るゝには過ぎずとこそ澄明が願文にもかきて侍りしか」など申し給ひてうちしほたれ給へば、皆いとあはれに聞きおぼす。入道殿はまして墨染の御袖ぬらし給ひけることわりなりかし。又その頃大風ふきて人々の家々損はれうする事數知らぬ中に、明堂殿（みやうだう）まろびぬ。この内には木にて人形をつくりて宮殿を金にて入れたる寶あり。眼をあてゝは見ぬものなり。おのづからもわやまりて見つる人は目のつぶれけるぞおそろしき。陰陽寮の守護神の社もまろびぬ。山の文殊樓、稻荷の中の宮なども吹き損ひてすべてさしかた行くすゑもためしわりがたき風なり。西國のかたには人の家をさながら吹きあぐれば、内なる人はちりのやうにおちて死にうせなどしけるぞめづらかなる。あまりにかくおびたゞしき風なれば御占行はれけるにも、重き人の御つゝしみ輕からぬなど奏しけり。果してその頃西園寺のおはきおとゞ公相なやましく ゑ給ふとて山々寺々、修法讀經祭祓などかしがましくひゞきのゝしりつれど、それもかひなくて十月十二日失せ給ひぬ。入道殿をはじめおぼしなげく人々かず ゑらず。中宮も御服にて出で給ひぬ。北の方は德大寺のおはきおとゞ實基の御女なれどこの御腹には更に御子もなし。中宮をも少納言とて、召しつかふ女房のうみ聞えたれど

北の方の御子になして男公達も腹々にあまたおはすれど、いづれをも北の方の御子になされけり。このおとゞ入道殿よりは少しなさけおくれ、いちはやくなど坐しければ、心の底にはさのみ歎く人もなかりけるとかや。御わざの夜、御棺に入れ給へる御頭を人のぬすみとりけるぞめづらかなる。御顔のきもみじかにてなかばほどに御目の坐しましければ、外法とかやまつるにかゝるなまかうべの入る事にて、なにがしのひじりとかや東山のほとりなりける人とりてけるとて後に沙汰がましく聞えき。中宮の御事などを深くおぼさるめりしかば、いとはしくわたらしきわざにぞ世の人も思ひ申しける。ありし一事をおぼしいでつゝ、誰もあはれに悲しくて女院の御方々もそれをのみのたまはせけり。十二月一日頃皇后宮又御産とて、天下さわぐに、えもいはぬ玉のをのこみ子後宇多院うまれ給ひぬ。おとゞ北の方の御心の中思ひやるべし。今ぞ夜の明けぬる心ちしたまふ。院もいそぎ御幸ありてもてはやし奉らせ給ふ。内より御はかせまゐる。例の夜をへての事どもさながらとゞめつ。近衛の左大臣殿へその頃攝錄わたりぬ。廿二にぞなりたまふ。いとめでたきさまなり。岡のやどのゝ御太郎君ぞかし。御悦申に兩院より御馬ひかる。大宮院御琴、東二條院は御笛など賜物どもいつものことなるべし。西谷殿とも申し、深心院の關白とも申しき。

第九　山のもみぢ葉（六字一本北野の巻）

正元元年十一月廿六日、讓位の儀式常の如し。十二日廿八日御即位、よろづめでたくあるべきかぎりにて年もかへりぬ。おりゐの御門は去はすの二日太上天皇の尊號ありて、新院とき

こゆ。本院と常はひとつに渡らせ給ひて御あそび去げう心やりてなかなかいとのどやかにめやすき御有様におぼし慰むやうなり。中宮も院號の後は東二條院ときこゆ。二條富小路にぞわたらせ給ふ。おほきおとゞも入道し給ひぬ。常磐井とて大炊御門京極なる所にぞ折々すみ給ふ。この入道殿の御おとゝにその頃右大臣實雄と聞ゆる姫君あまた持ち給へる中に優れたるをらうたきものにおぼしかしづく。今上の女御代にいで給ふべきを、やがてそのついでも參り給ふべき聞えはあれど、さしもやはとおしたち給ふ。いと猛き御心なるべし。この姫文應元年入内あるべくおぼしおきてたり。院にも御氣色たまはり給ふ。入道殿の御孫の姫君君の御せうとのおまたものし給ふ中にこのかみにて中納言公宗と聞ゆる、いかなる御心かありけむ、去たゝく烟にくゆりわび給ふぞいとほしかりける。さるはいとあるまじき事と思ひはなつにしも、隨はぬ心のくるしさを、おきふし葦の根なきがちにて御いそぎの近づくにつけても、我かのけしきにてのみほれすぐし給ふを、おとゞは又いかさまにかと苦しうおぼす。初秋風けしきだちて艶なる夕ぐれにおとゞわたり給ひて見たまへば、姫君溯色に女郎花などひきかさねて几帳に少しはづれて居給へるさまかたち常よりもいふよしなくあてにになほひ充ちてらうたく見え給ふ。御ぐしいとこちたく、五重の扇とかやを廣げたらむさましてすこし色なるかたにぞ見え給へど、すぢこまやかに額より裾までまがふすぢなくうつくし。たゞ人にはげにをしかりぬべき人がらにぞおはする。几帳おしやりてわざとなく拍子うちならして、御箏彈かせ奉り給ふ。折しも中納言參り給へり。「こち」とのたまへば、うちかしこま

りて、御簾の内にさぶらひ給ふさまかたち、この君しもぞ又いとめでたく飽くまで気めやかに心の底ゆかしうそゝろに心づかひせらるゝやうにて、こまやかになまめかしうすみたるさましてあてにうつくし。いとゞもて気づめてさわぐ御胸を念じつゝ用意をくはへ給へり。笛すこし吹きなど気給へば雲ゐにすみのぼりていとおもしろし。御箏の音のほのかにらうたげなる掻き合せの程なかなか聞きもとめられず涙うきぬべきを、つれなくもてなし給ふ。撫子の露もさながらきらめきたる小袿に、御ぐしはこぼれかゝりて少し傾ぶきかゝり給へる、傍めまめやかに光を放つとはかゝるをやと見え給ふ。よろしきをだに人の親はいかゞはみなす。ましてかく類ひなき御有様どもなめれば世に知らぬ心の闇に惑ひ給ふもことわりなるべし。十月廿二日参り給ふ儀式これもいとめでたし。出車十輌、一の車の左は大宮殿、二位の中将もとすけのむすめとぞ聞えし。二の左は春日三位の中将さねひらのむすめ、右は新大納言、この新大納言は為家の大納言のむすめとかや聞えしにや。それよりも下はましてくだくだしければむつかし。御ざうし青柳、梅枝、高砂、ぬき川と言し。この貫川を御門忍びて御らんじて姫宮一所いでものし給ひき。その姫宮は末に近衛關白家基の北の政所になり給ひにき。萬の事よりも女御の御さまかたちのめでたくおはしませば上もおぼしつきにたり。女御は十六にぞなり給ふ。御門は十二の御年なれば、いとおとなしくおよすげ給へればめやすきほどなりけり。かの下くゆる心ちにもいとうれしきものから心は心として胸のみ苦しきさまなれば、忍びはつべき心ちも気給はぬぞ、遂にいかになり給はむといとほしき程もなく后だ

ちありしかば、おとゞ心ゆきておぼさるゝ事かぎりなし。西園寺の女御もさし續きて參り給ふをいかさまならむと御胸つぶれておぼせどさしもあらず。これも九つにぞなり給ひける。冷泉のおとゞ公相の御むすめなり。大宮院の御子に左給ふとぞ聞えし。いづれも離れぬ御中にいどみきしろひ給ふ程、聞きにくき事もあるべし。宮づかへのならひかゝることこそ昔人はおもしろくはえある事に左給ひけれど、今の世の人の御心どもはあまりすくよかにてみやびをかはす事のおはせぬなるべし。これも后に立ち給へば、もとの中宮はあがりて皇后宮とぞ聞え給ふ。今后は遊にのみ心入れ給ひて、左めやかにも見え奉らせ給はねば、御おぼえ劣りざまに聞ゆるを思はずなる事に世の人もいひさたしけり。父おとゞも心やましくおぼせど、さりともねびゆき給はゞと唯今はうらみ所なくおぼしのどめ給ふ。かくて弘長三年さゝらぎの頃、大かたの世の景色もうらゝかにかすみわたるに、春風ぬるく吹きて龜山殿の御まへの櫻ほころびそむるけしきつねよりも殊なれば、行幸あるべくおぼしおきつ。關白二條殿良實この三とせばかり又かへりなり給へば、御隨身ども花を折りて行幸よりもさきに參りまうけ給ふ。その外の上達部も例のきらきらしきかぎり殘るはすくなし。新院も兩女院も渡らせたまふ。御まへの汀に船どもうかべて、をかしきさまなる童四位の若きなどのせて、花の木かげより漕ぎいでたるほどになくおもしろし。舞樂さまざま曲など手をつくされけり。御あそびの後人々歌たてまつる。花契遐年といふ題なりしにや。内の上の御製、

「たづねきてわかぬ心にまかせなば千とせや花のかげにすごさむ」。

「かやうの方までもいとめでたくおはします」とぞふるき人々申すめりし。かへらせ給へる御贈物どもいとさまざまなる中に、えんぎの御手本を鶯のゐたる梅の造枝につけて奉らせ給ふとて、院のうへ後嵯峨。

「梅が枝に代々のむかしの春かけてかはらずきゐる鶯のこゑ」。

御返しをわすれたるこそ老のつもりうたて口をしけれ。その年にや五月の頃、本院龜山殿にて如法經書かせ給ふ。いとありがたくめでたき御事ならむかし。後白河院こそかゝる御事はせさせ給ひけれ。それも御ぐしおろして後の事なり。いとかくおぼし立たせ給へるいみじき御願なるべし。さるは數多度侍りしぞかし。男は花山院の中納言もとつぐ一人さぶらひ給ひける、やごとなき顯密の學士どもを召しけり。昔上東門院も行はせ給ひたりしためしにや、大宮の院同じく書かせおはしますとぞ承りし。十種供養はてゝ後は淨金剛院へ御自ら納めさせ給へば、關白、大臣、上達部歩みつゞきて御供つかうまつられけるも、さまざまめづらしくおもしろくなむ。その年九月十三夜、龜山殿の棧敷殿にて御歌合せさせたまふ。かやうの事は白河殿にても鳥羽殿にてもいとゑげかりしかど、いかでかさのみはにて皆漏しぬ。こゝ度は心ことにみがゝせ給ふ。右は關白殿にて歌どもえりとゝのへらる。左は院の御前にて御覽ぜられける。このほど殿と申すは圓明寺殿又一條殿と申す。の御事なり。新院の御位の始つ方攝政にていませしが又この二三年ばかり歸らせ給へり。前の關白殿は院の御方に侍らはせ給ふ。その外すぐれたるかぎり、右は關白殿今出川の大きおとゞ、皇后宮御父の左大臣殿より下みなこの道

の上手どもなり。左は大殿よりかずたてつくりて風流の洲濱沈にて造れるうへに、銀の舟二つにいろいろの色紙を書き重ねてつまれたり。數も沈にて造りて舟にいれらる。左右の讀師一度に御前に參りてよみわぐ。左具氏中將、右行家なり。山紅葉、本院の御製、

「外よりは時雨もいかゞそめざらむ我がうゑて見る山のもみぢ葉」。

終に左御勝の數まさりぬ。披講はて〻夜更けゆくほどに御遊びはじまる。笛は花山院中納言長雅、茂通の中將、笙は公明の中將にて坐せしにや。篳篥はたゞすけの中將、琵琶はおほきおとゞ公相、具氏の中將も彈き給ひけるとぞ。御簾の内にも御箏どもかきあはせらる。東の御方と聞えしは新院の若宮の御母君にや。刑部卿の君もひかれけり。樂のひまひまにおほきおとゞ土御門大納言通茂など朗詠したまふ。たゞすけ、さんおき聲くはへたるほどおもしろし。川浪もふけゆくまゝにすごう月は氷を去ける心ちするに「嵐の山のもみぢ夜のにしき」とは誰がいひけむ。吹きおろす松風にたぐひて御前の簀子にて御みきまゐる。かはらけの中などに散りかゝる、わざと艷なる事のつまにもしつべし。若き人々は身に去むばかり思へり。うら亂れたるさまに各御かはらけどもまた度くだる。明けゆく空も名殘多かるべし。まことやこの年頃前内大臣基家、爲家の大納言、入道侍從二位行家、光俊の辨入道などうけたまはりて撰歌のさたありつる、唯今日あすひろまるべしと聞ゆるおもしろうめでたし。かの元久のためしとて一院みづからみがゝせ給へば心ことに光そひたる玉どもにぞ侍るべき。年月にそへてはいよいよ外ざまにわくる方なく、榮えのみまさらせ給ふ御ありさまのいみじきに、

この集の序にも「やまとしまねはこれ我が世なり、春風に徳をあふがむとねがひ、和歌の浦もまた我が國なり、秋の月にみちをあきらめむ」とかや書せ給へりける。げにぞめでたきや。金葉集ならでは御子の御名のあらはれぬも侍らねど、この度はかのあづまの中務の宮の御なのりぞ書かれ給はざりける。いとやんごとなし。新古今の時ありしかばにや、竟宴といふ事行はせ給ふ、面白かりき。この集をば續古今と申すなり。又の年文永三あづまに心よからぬ事出で來て中務の御子都へのぼらせ給ふ。何となくわわたゞしきやうなり。御後見はなほ時頼朝臣なれば例のおそろしき事などはなけれど、宮は御子の惟康の親王に將軍をゆづりて文永三年七月八日のぼらせ給ひぬ。御くだりのぼり、六波羅に建てたりし檜皮屋ひとつあり。そこにぞはじめは渡らせ給ふ。いと去めやかに引きかへたる御ありさまを年月のならひにさうざうしう物心ぼそうおぼされけるにや、

「虎とのみもちゐられしはむかしにていまはねずみのおなう世の中」。

院にもあづまの聞えをつゝませ給ひて、やがては御對面もなくいと心苦しく思ひ聞えさせ給ひけり。經任の大納言いまだ下﨟なりしほど御使に下されて「何事にか」と仰せられなどして後ぞ苦しからぬ事になりて、宮も土御門殿承明門院の御跡へ入らせ給ひけり。院へも常に御まゐりなどありて人々もつかうまつる。御遊なども去たまふ。雪のいみじう降りたる朝ぼらけに、右近の馬場の方御覽じにおはして御心のうちに、

「なほたのむ北野の雪のあさぼらけあとなきことにうづもるゝ身は」。

世を亂らむなど思ひよりけるものゝふのこの御子の御歌すぐれてよませ給ふによりよるひるいとむつましく仕うまつりけるほどに、おのづからおなじ心なるものなど多くなりて、宮の御けしきあるやうにいひなしけるとにや。さやうの事どものひゞきによりかくおはしますを、おぼし歎き給ふなるにこそ。日頃ながめ降りて少し晴間見ゆるほど空のけしきをめやかなるに、二條富小路殿に本院新院ひとつに渡らせ給ふ頃、ことごとしからぬほどの御遊ありけり。大宮院東二條院も御几帳ばかり隔てゝおはします。御前におはきおとゞ公相、常磐井入道實氏、前の左のおとゞ實雄、久我大納言雅忠などうとからぬ人々ばかりにて御みき參る。あまたくだりながれて上下すこしうち亂れ給へるに、おはきおとゞ本院の御盃たまはりて、持ちながらとばかりやすらひて「公相官位共にきはめ侍りぬ。中宮おはしませば若し皇子降誕もあらば家門の榮花いよいよ衰ふべからず。實乘もけしうは侍らぬをのこなり。後めたくも思ひ侍らぬを、一つのうれへ心の底になむ侍る」と申し給へば、人々何事にかとおぼつかなくおもふ。左のおとゞは中宮の御事かくのたまふをいでやと耳とまりて心の中やすげなし。一院は「いかなるうれへにか」とのたまふに「いかにも入道相國に先だちぬべき心ちなむし侍る。恨のいたりてうらめしきはさかりにて親に先だつうらみ、悲びの切に悲しきは老いて子に後るゝかなしびには過ぎずなどこそすみあきらにおくれたる願文にも書きて侍りしか」など聞えてうち泣はたれ給へば、皆いとあはれとおぼさる。入道殿はまいて墨染の御袖泣ぼるばかりに見え給ふ。さてその後幾程なく惱み給ふよし聞ゆれば、さしもやはと覺えし

にいとあやなく失せ給ひぬ。冷泉太政大臣と申し侍りし事なり。入道殿の御心の中さこそおはしけめ。中宮も御服にてまかで給ひぬ。皇后宮は日にそへて御おぼえめでたくなりたまひぬ。姫宮若宮などいでものし給ひしかど、やがてうせ給へるを御門をはじめ奉りて誰も誰もおぼし歎きつるに、今年又その御けしきあればいかゞとおぼし騒ぎ、山々寺々に御いのりこちたくのゝしる。こたみだにげに又うちはづしてはいかさまにせむと、おとゞ母北の方もやすきいも寝給はず、おぼし惑ふ事かぎりなし。程近くなり給ひぬとて土御門殿の承明門院の御あとへうつらせ給ふ。世の中ひゞきて天下の人たかきもくだれるも司ある程のは参りこみてひしめきたつに、殿の内の人々はましてこゝろならずあわたゞし。おとゞかぎりなき願どもをたて、賀茂の社にもかの御調度どもの中にすぐれて御賽とおぼさるゝ御手箱に、后の宮自ら書かせ給へる願文入れて神殿にこめられけり。それにはたとひ御末まではなくとも皇子一人とかや侍りけるとぞ承りし。まことにや侍りけむ。かくいふは文永四年十二月一日なり。例の物のけども顕れて叫びとよむさまいとおそろし。されども御いのりのしるしにやえもいはずめでたき玉のをのこ御子後宇多生れ給ひぬ。その程の儀式いはずとも推し量るべし。うへもかぎりなき御志にそへていよいよおぼすさまに嬉しと聞し召す。おとゞも今ぞ御胸あきて心おちゐ給ひける。新院の若宮伏見院もこの殿の御孫ながら、それは東二條院の御心の中おしはかられ大かたも又うけばりやんごとなき方にはあらねば、萬聞しめしけつさまなりつれど、この今宮をば本院も大宮院もきはことにもてはやしかしづき奉らせ給ふ。こ

れも中宮の御ためいとはしからぬにはあらねど、いかでかさのみはあらむと、西園寺ざまにぞ一方ならずむすぼゝれ、すさまじう聞き給ひける。

第十　あすか川

ひまゆく駒のおしにまかせて文永も五年になりぬ。正月二十日本院のおはします富小路殿にて今上の若宮御いかきこしめす。いみじうきよらを盡さるべし。今年正月に聞あり。後の二十日あまりの程に冷泉院にて舞御覽あり。明けむ年一院いそぎにみたせ給ふべければ御賀あるべしとて、今より世のいそぎにきこゆ。樂所はじめの儀式は内裏にてぞありける。試樂廿三日と聞えしを雨降りて明くる日つとめて人々參りつどふ。新院はかねてより渡らせ給へり。寢殿の御階の間に一院のおましまうけたり。その西によりて新院の御座をまうく。東は大宮院、東二條院、皆白御袴に二つ御ぞ奉れり。聖護院の法親王、圓滿院僧正など參り給ふ。土御門の中務の宮もまゐり給ふ。上達部殿上人あまた御供したまへり。仁和寺御室、梶井の法親王などもすべて殘りなくつどひ給ふ。月花門院、花山院准后などは大宮院のおはします御座に御几帳おしのけて渡らせ給ふ。寢殿の第四の間に釉口ども心ことにておしいだされる。大納言の二位殿南の御方などやんごとなき上臈は院のおはします御簾の中にひきさがりてさぶらひ給ふ。何れも白き袴に二つぎぬなり。東のすみの一間は、大宮院、月花門院の女房ども參りつどふ。西の二間に新准后さぶらひたまふ。御前の簀子に關白殿をはじめて右大臣、内大臣、兵部卿隆親、二條大納言良教、源大納言通成、花山院大納言師繼、右大將道雅、權大納言

基具、一條中納言公藤、花山院中納言長雅、左衛門督通頼、中宮權大夫隆顯、大炊御門中納言信嗣、前源宰相有資、衣笠宰相中將經平、左大辨宰相經俊、新宰相中將具氏、別當公孝、堀川三位中將具守、富小路三位中將公雄、皆御階の東に着きたまふ。西の第二の間より又前左大臣實雄、二條大納言經輔、前源大納言雅家、中宮大夫雅忠、藤大納言爲氏、皇后宮大夫定實、四條大納言隆行、帥中納言經任、このほかの上達部にしひがしの中門のらう、それより下ざまいわたどのうちはしなどまで着きあまれり。みなほしにいろいろのきぬ重ね給へり。時なりて舞人どもまゐる。實冬の中將からおり物のさくらの狩衣、むらさきのこきうすき、きにて櫻を織れり。あかぢのにしきのうはぎ、紅のにはひの三つぎぬ、同じひとへ、ゑぐらの薄色のさしぬき、人よりはすこしねびたりしもあなきよげと見えたり（二字行）。大炊御門中將冬すけといひしにや。さうぞくさきのにかはらず、かりぎぬはひら織ものなりきィ。花山院中將家長（右大將の御子）魚綾の山吹のかりぎぬ柳さくらをぬひものにしたり。紅のうちぎぬをかゞやくばかりたみかへして萠黄のにはひの三つぎぬ、紅の三重のひとへ、うき織物のむらさきのさしぬきに、さくらをぬひものにしたるめづらしくうつくしく見ゆ。花山院の少將たゞすゑは（諸大夫の御子なり。）さくらのむすびかりぎぬ、白きいとにて水をひまなくむすびたるうへに櫻柳をそれもむすびてつけたるなまめかしくえんなり。赤地のにしきのうはぎ、かねの文をおく。紅の二つぎぬ同じひとへ紫のさしぬき、これも柳櫻をぬひものにいろいろの絲にてゑたり。中宮權亮少將公重（實藤の大納言の子）唐織物の櫻萠黄のかりぎぬ、紅のうちぎぬ、紫の匂ひの三つぎぬ、紅のひとへ、さしぬき例の紫に櫻

を玄ろくぬひたり。堀川の少將基俊、から織物、うら山吹、三重の狩衣、柳だるきを青く織れる中に櫻をいろいろにおれり。萠黄のうちぎぬ櫻をたみつけにして、わちがへをほそく金の文にしていろいろの玉をつく。にほひつゝじの三つぎぬ、紅の三重のひとへこれもはくちらす。二條中將經俊（良教の大納言の御子なり。）これもから織物の櫻萠黄、紅の衣おなじひとへなり。皇后宮權亮中將實守、これも同じ色のかば櫻の三つぎぬ、紅梅の三重のひとへ、馬頭たかよし（隆親の子にや）ろくたいの赤色の狩衣、玉のくゝりを入れ、青き魚綾のうはぎ、紅梅の三つぎぬ、同じ二重のひとへ、薄色のさしぬき、少將實繼松がさねの狩ぎぬ、紅のうちぎぬ、紫の二つぎぬ、これもいろいろのぬひものおきものなどいとこまかになまめかしく玄なしたり。陵王の童に四條大納言の子、裝束常のまゝなれど紫のろくたいのはん玄り、かねのもん、赤地のにしきの狩衣、青き魚綾のはかま、玄やく木のみなえりほね紅の紙にはりてもちたる、用意けしきいみじくもてつけてめでたく見え侍りけり。笛もちみち、たかやす、笙きんわき、宗實、篳篥兼行、大皷敎藤、鞨皷おきなり。三のつゞみのりより、左萬歲樂、右地久、陵王、輪臺、青海波、太平樂、入綾、實冬いみじく舞ひすまされたり。右落蹲、左春鶯囀、右ことり蘇、後參、賀殿の入あやも實冬舞ひ給ひしにや、暮れかゝる程に何のあやめも見えずなりにき。御方々宮だちあかれ給ひぬ。おなじ二月十七日に、又新院富小路殿にて舞御らん。その朝大宮院まづ忍びて渡らせ給ふ。一院の御幸は日たけてなる。冷泉殿より唯はひわたる程なれば、樂人舞人今日の裝束にて上達部など皆歩みつゞく。庇の御車にて御隨身十二人、花ををり錦をたちかさねて聲々御

前華やかに、おひの〳〵しりて近く侍ひつるになくおも白し。新院は御ゑばう子、直衣、御袴きはにて中門にて待ち聞えさせ給ひつる程いとえんにめでたし。御車中門によせて、關白殿御はかせとりて御くしげ殿に傳へ給ふ。二重織物の萠黄の御几帳のかたびらを出されていろいろの平紋のきぬども、物の具はなくておしいだされる。今日は正親町院も御堂の角の間より御覽ぜらる。大臣上達部ありしにかはらず。猶參り加はる人はおほけれどもれたるはなし。實冬、今日は花田うら山吹のかりぎぬ、二重うちもえぎなど思ひ思ひこ〳〵ろ〴〵に先にはみなひきかへてさまざまつくしたり。基俊の少將、この度は櫻萠黄の五重のかりぎぬ、紅の匂ひの五つぎぬ、うちぎぬはやりつき紺山吹のにはひ、うき織物の三重ひとへ、紫の綾の指貫中にすぐれてけうらに見え給へり。この度は多くろくたいのきぬをきたり。萬歳樂を吹きて樂人舞人まゐる。池の汀に枠をたつ。春鶯囀、古鳥蘇、後參、輪臺、青海波、落蹲などあり。日ぐらしおもしろくの〳〵しりて歸らせ給ふ程に。赤地の錦の袋に御琵琶入れて奉らせ給ふ。刑部卿の君御龍のうちよりいだす。右大將とりて院の御前にけしきばみ給ふ。胡飲酒の舞は實俊の中將とかねては聞えしを、父おとゞの事にとゞまりにしかば近衛前關白殿の御子三位中將ときこゆるいまだ童にて舞ひたまふ。別してこの試樂よりさきなりしにや、内々白川殿にてこ〳〵ろみありしに、父の殿も御龍の内にて見給ふ。若君いとうつくしう舞ひ給へば院めでさせ給ひて、舞の師たゞもち祿たまはりなどしけり。かやうに聞ゆる程にむくりの軍といふ事起りて御賀とゞまりぬ。人々口をしくほん意なしとおぼす事かぎりなし。何事もうちさましたるやうにて、御修法やなにやと公家武家たゞこのさわぎなり。されども程なく去づまり

ていとめでたし。かくて今上の若宮、六月廿六日親王宣旨ありて同じき八月廿五日坊に居給ひぬ。かく華やかなるにつけても入道殿はあさましくおぼさる。故おとゞの先立ち給ひしなげきに去づみてのみ物し給へど、かゝる世のけしきをかしこく見給はぬよとおぼしなぐさむ。中宮は御服の後も參り給はず、萬ひきかへ物うらめしげなる世の中なり。一院は御本意遂げむ事をやうやうおぼす。その年の九月十三夜白川殿にて月御らんずるに、上達部殿上人例の多く參りつどふ。御歌合ありしかば、内の女房どもも召されて、いろいろのひき物源氏五十四帖のこゝろ、さまざまの風流にして上達部殿上人までも別ちたまはす。院の御製、

「我のみや影もかはらむあすか川おなじ淵瀬に月はすむとも。

かねてより袖も去ぐれて墨染のゆうべ色ます峯のもみぢ葉」。

「この御歌にてぞ御はいの事おぼしさだめけり」とみな人袖を去ぼりて墜もかはりけり、あはれにこそ。民部卿入道爲家判せさせられけるにも身をせめ心をくだきて「かきやる方も侍らず」とかや奏しけり。かくて神無月の五日龜山殿へ御幸なる。今日をかぎりの御たびなれば心ことにとゝのへさせ給ふ。新院も例のおはします。大宮、東二條、ひとつ御車にておなじく渡らせ給ふ。大宮女院は白菊の御ぞ、東二條院は青紅葉の八つ衲の御小袿奉る。まづ北野、平野の社へ御まゐりあれば御隨身ども花ををりつくし、今日をかぎりとさまあしきまでさうぞきあへり。兩社にて馬あげさせられけり。神もいかに名殘多く見たまひけむ、空さへうち去ぐれて木の葉さそふ嵐もをり去りがほに物悲しう涙あらそふ心ち去給ふ人々多かるべ

し。中務の御子「今日のたもとさぞなぐるらむ」とのたまひし御返し、中將、
「袖ぬらす今日をいつかとおもふにもなぐれてつらき神無月かな」。
やがてその夜御ぐしおろし給ひぬ。御戒の師には青蓮院の法親王參りたまふ。その頃やがて御逆修はじめさせ給へば、そのほど女院いろいろの御捧物ども奉り給ふ。今はいよいよ法の道をのみもてなさせ給ひつゝ、或時は止觀の談義、或時は眞言のふかきさだ、淨土の宗旨などをも尋ねさせ給ひつゝ、よろづに御心遣ひくらからず物し給へば、何事もさきの世よりかしこくおはしましける程顯れて、今行く末もげに賴もしくめでたき御ありさまなり。かくて今年もくれぬ。又の年やよひのついたち月花門院俄にかくれさせ給ひぬ。法皇も女院もかぎりなく思ひ聞えさせ給ひつるにいとゞあさまし。さるは誠にやあらむ、又人たがへにや、とかく聞ゆる御事どもぞいと口をしき。「四辻の彦仁の中將忍びて參り給ひけるを、もとおきの中將かの御まねをして又參り加はりけるほどに、あさましき御事さへありて、それ故かくれさせ給へる」などさゝめく人も侍りけり。猶さまではあらじとぞ思ひ給へれどいかゞありけむ。法皇は又文永七年神無月の頃、御手づからかゝせ給へる法花經一部供養せさせたまふ。御八講名高く才すぐれてかしこき僧共を召しけり。世の中の人殘りなくつかうまつる。新院かねてより渡り給へり。さるべき御事とは申しながら、何につけても御心ばへのうるはしくなつかしうおはしまして、院のおぼいたるすぢの事は必ず同じ御心に仕うまつり、いさゝかもいでやとうちおぼさるゝ一ふしもなく物し給ふを、法皇もいとうつくしうかたじけなし

とおぼされけり。第二日の夜に入りて行幸もなる。五のまきの日の御捧物ども參りつどふ。さまざまねびつくしがたし。内の御捧物はかみや紙にかねを包みて、やないばこにすゑて頭辨ぞ持ちたる。次に新院女院だち宮々御かたがた皆そなたざまの宮司殿上人などもてつゞきたり。關白大臣などは座に着き給ふ。大中納言參議四位五位などはみづからの捧物をもちてわたる。おのおの心々にいどみつくしてさまざまをかしき中に、兵部卿隆親は玄がいをはきて鳩の杖をつきていでたり。この杖をやがて捧物にもなしけり。玄ろがねにてひたうちにしてさきは金なり。結願の日は舞樂などいみじくおもしろくて過ぎぬ。又の年正月に忍びて新院と御方わかちの事をたまふ。初は法皇御負なれば御勝むかひに上達部皆五節のまねをして、いろいろのきぬわつ妻にて「思の川」に船のよれかし」とはやしてまゐる。新院ひきつくろひて渡り給ふ。御みきいくかへりとなくきこしめさる。一つがひづゝの御引出物、伊勢物語の心とぞ聞えし。かねの地盤に玄ろがねのふせごにたきものくゆらかして、「山は不盡のねいつとなく」と、又銀の船にざからのへそにて簑着たる男つくりて、「いざことはむ都鳥」などさまざまいとなまめかしくをかしくせられけり。わざと事々しきさまにあらざりけり。こたみには新院比比勢（三字より）人のまねをして「ぼんならはくびにのる、杯は花にのる」とかやはやして法皇の御迎にまゐる。上達部のおとなび給へるなどは少しきやうきやうにや見えけむとおしはからる。この度は源氏の物語のこゝろにやありけむ、唐めいたる箱に金剛樹の數珠入れて五葉の枝につけたり。又齋院よりのくろぼう、梅の散りすぎたる枝につけなど

これもいとさゝやかなる事どもになむありける。男女房亂りがはしくさわひかはして、御箏どもめし拍子うちならしなどしてあけぬ。かやうの事にのみ心やりて明し暮させ給ふ程に、又の年の秋になりぬ。東二條院日頃たゞにもおはしまさゞりつる、その御氣色ありて世の中さわぐ。院の内にてせさせ給へばいよいよ人參りつどふ。大法秘法のこるなく行はる。七佛藥師五壇の御修法、普賢延命、金剛童子、如法愛染などすべて數をらず。御驗者には常住院僧正參りたまふ。八月二十日よひの事なり。既にかと見えさせ給ひつゝ、二日三日になりぬればあるかぎり物覺ゆる人もなし。いと苦しげに玄給へば、仁和寺の御室の如法愛染の大阿闍梨にてさぶらひ給ふを、御枕上に近く入れ奉らせ給ひて「いとよわう見え侍るはいかなるべきにか」と院もそひおはしまして、あつかひ聞え給ふさまおろかならねば、哀と見奉り給ひて「さりともけしうはおはしまさじ。空定業の亦能轉は菩薩のちかひなり。今さら妄語あらじ」とて御心を致して念じたまふに、驗者の僧正も一ちひみつとて念珠おしもみたるほどげにたのもしくきこゆ。御誦行のものどもはこびいで、女房のきぬなどこちたきまでおしいだせば、奉行とりて殿上人北面の上下あかれあかれに別ちつかはす。そこらの上達部は階の間の左右に着きて皇子誕生を待つけしきなり。陰陽師かんなぎ立ちこみて千度の御はらひつとむ。御隨身北面の下臈などは神馬をぞ引くめる。院拜したまひて廿一社に奉らせ給ふ。すべて上下内外のゝしりみちたるに、御氣色たゞよわりに弱らせ給へば今一しほ心まどひして、さと玄ぐれわたる袖の上もいとゆゝし。院もかきくらし悲しくおぼされて、御心のうち

には石清水のかたを念じ給ひつゝ御手をとらへて泣き給ふに、さぶらふかぎりの人みなえ心つよからず、いみじき願どもを立てさせ給ふ志るしにや、七佛の阿闍梨參りて、「けんじやくはんぎ」とうちあげたる程に辛うじて生れ給ひぬ。何といふ事も聞えぬは姫宮なりけりといと口をしけれど、無下になき人と見え給へるにたひらかにおはするをよろこびて、いかゞはせむとおぼし慰む。人々の祿などつねのごとし。法皇もなかなかいたはしくやんごとなき事におぼしていみじくもてはやし奉らせ給ふ。いでやと口をしく思へる人々おほかり。かゝるにしも實雄のおとゞの御宿世あらはれて、片つ方には心おちゐ給ふも世のならひなれば、ことわりなるべし。五夜七夜など殊に華やかなる事どもにて過ぎもてゆく。その頃はひより法皇時々御なやみあり。世の大事なれば御修法どもいかめしくはじまる。何くれと騒ぎあひたれど、をこたらせ給はで年もかへりぬ。むつきのはじめも院の内かい志めりていみじく物思ひなげきあへり。十七日龜山殿へ御幸なる。これやかぎりと上下心ぼそし。法皇は御輿なり。兩女院は例のひとつ御車にたてまつる。尻に御匣殿さぶらひ給ふ。道にて參るべき御せんじものを胤成師成といふ藥師ども御前にて志たゝめて、志ろがねの水瓶に入れてたかよしの中納言うけたまはりて、北面の信友といふにもたせたりけるを、内野のほどにて參らせむとて召したるにこの瓶に露ほどもなし。いとめづらかなるわざなり。さほどの大事のものをおしくもちてうちこぼすやうはいかでかあらむ。法皇もいとゞ御臆病そひて心ぼそくおぼされけり。新院は大井川の方におはしましてひまなく男女房上下となく、今の程いかにい

かにと聞えさせ給ふ。御使の行きかへる程を猶いぶせがらせ給ふにむ月もたちぬ。いかさまにおはしますべきにかと誰も誰もおぼし惑ふ事かぎりなし。かねてよりかやうのためとおぼしおきける壽量院へ二月七日わたり給ふ。こゝへはおぼろげの人はまゐらず。南松院の僧正、淨金剛院の長老覺道上人などのみ御前にて法の道ならではのたまふ事もなし。六波羅北南御とぶらひに參れり。西園寺の大納言實兼例の奏したまふ。一日行幸あり。中一日わたらせ給へば、泣く泣く萬の事を聞えおかせ給ふ。新院も御對面あり。御門は御本性いと華やかにかしこく御才などもむかしにはちず、何事もとゝのはりてめでたくおはします。世ををさめさせ給はむ事も後めたからずおぼせば、聞え給ふすぢとなるべし。十七日の朝より御氣色かはるとて善智識めさる。經海僧正、往生院の聖など參りてゆゝしき事ども聞え知らすべし。遂にその日の酉の時に御年五十三にてかくれさせ給ひぬ。後嵯峨院とぞ申すめる。今年は文永九年なり。院の中くれふたがりて闇にまよふ心ちすべし。十八日に藥草院におくり奉り給ふ。仁和寺の御室、圓滿院、聖護院、菩提院、青蓮院、皆御供つかまつらせ給ふ。內より頭中將御使にまゐる。三十年がほど世を去たゝめさせ給ひつるに、少しのあやまりなくおぼすまゝにて新院御門春宮うごきなく、又外ざまに別るべき事もなければ、おぼしおくべき一ふしもなし。なき御跡まで人の靡きつかうまつれるさまきし方もためしなき程なり。廿三日御初七日に大宮院御ぐしおろす。その程いみじく悲しき事おほかり。天の下おしなべてくろみ渡りぬ。萬をめやかに哀なる世のけしきに心あるも心なきも涙催さぬはなし。院、內の

御歎きはさる事にて、朝夕むつましく仕うまつりし人々の思ひ歎づみあへるさま、ことわりにもすぎたり。その中に經任の中納言は人よりことに御おぼえわりき。年も若からねば定めて頭おろしなむと皆人思へるに、なよらかなる狩衣にて御骨の御つぼもちまゐらせて參れるを、思ひの外にもと見る人思へり。權中納言公雄ときこゆるは皇后宮の御せうとなり。早うより故院いみじくらうたがらせ給ひて、夜晝御傍去らずさぶらひて明暮つかうまつらせ給ひしかば、かぎりある道にもおくらかし給へることを、若きほどにやる方なく悲しと思ひ入りたまへり。西の對のまへなる紅梅のいとうつくしきを折りて具氏の宰相中將、かの中納言に消息きこゆ。

「梅のはな春はるにもあらぬ世をいつと去りてか咲き匂ふらむ」。

かへし、

「心あらばころもうき世の梅の花をりわすれずばにはばざらまし。夜さり對面に何事も聞えむ」といへるを、この中將も故院の御いとはしみの人にておなじ心なる友におぼえければいとあはれにて、悲しき事も語りあはせむと日ぐらし待ちゐたるに遂に見えず。おやしとおもふにはやその夜頭おろしてけり。齡もさかりに、今も皇后宮の御せうと春宮の御伯父なれば世おぼえ劣るべくもあらず。思ひなしも賴もしくほこりかなるべき身にて、かく捨てはつるほどいみじくあはれなれば、皆人いとほしう悲しき事にいひあつかふめり。經任の中納言にはこよなき心ばへにや。父おとゞも院の御事をつきせずなげき

給ふにうちそへていみじとおぼす。公宗の中納言もかひなき物思ひのつもりにやはかなくなり給ひぬ。又この中納言さへかくものし給ひぬるをさまざまにつけて心ぼそくおぼすに、いく程なく皇后宮さへまたうせ給ひぬ。いよいよ臥し沈みておはするほどにいとよわうなりまさり給ふ。春宮の御代をもえ待ちいづまじきなめりと哀に心ぼそうおぼしつゞけて、

「はかなくもをふのうらなし君が代にならばと身をもたのみけるかな」。

歎に堪へず遂にうせ給ひにけり。物思ひにはげに命も盡くるわざなりけり。哀に悲しといひつゝも、とまらぬ月日なれば故院の御日數もはどなう過ぎ給ひぬ。世の中は新院かくておはしませば、法皇の御かはりに引きうつしてさぞあらむと世の人も思ひ聞えけるに、當代の御ひとつすぢにてあるべきさまの御おきてなりけり。長講堂領、又播磨の國尾張の熱田の社などをぞ御そぶんありける。いづれの年なりしにか新院六條殿にわたらせ給ひし頃、祇園の神輿たがひの行幸ありし時、御對面のやうを故院へ尋ね申されたりしにも「我とひとしかるべき御事なれば朝覲になぞらへらるべし」と申されけり。ひとつ腹の御このかみにてもおはします。かたがたことわりなるべき世を、思ひの外にもと思ふ人々もおほかるべし。いでや位におはしますにつきてさしあたりの御政事などはことわりなり。新院にも若宮おはしませば行く末の一ふしはなどかはなどいひ去ろふ。かゝればいつしか院方、内方と人のこゝろぐゝろも引き別るゝやうにうちつけ事どもいできけり。人ひとりおはしまさぬ跡はいみじきものにぞありける。朝の御まもりとて田村の將軍より傳はりまゐりける御はかしなどを

も、かの御氣色のさかおはしましけるにや御かくれの後やがて内裏へ奉らせ給ひにしかば、それなどをぞ女院のうらめしき御事には院も思ひ聞えさせ給ひける。さてしもやはなれば、このよしをも關の東へぞのたまひつかはしける。内には花山院のおはさおとゞ、後院の別當にあされて世の中自らさたゝめさせ給ふ。もとよりいと華やかに今めかしき所おはする君にてよろづかどかどしうなむ。皇后宮かくれさせ給ひにし後はつきせぬ御なげきさめがたうて、所せき御ありさまもよたけういかで本意をも遂げてばやなどおぼされけり。故院の御はても過ぎさせ給へば、世の中色あらたまりて、華やかに人々の御歎の色も薄らぎゆくしもあはれなるならひなりかし。その夏春宮例にもおはしまさで日頃ふれば、内のうへ御胸つぶれて御修法や何やとさわがせ給ふ。和氣丹波のくすしども氏成、春成夜晝さぶらひて御藥の事いろいろにつかうまつれど、たゞおなじさまにのみおはす。いかなるべき御事にかとあさましうて、上もつとこの御方に渡らせ給ひて見奉らせ給ふに、御目の中大かた御身の色なども殊の外に黄に見えければいとあやしうて御壺一字ナイ召しよせて御覽ぜらる。紙をひたして見せらるゝにいみじう濃く出でたるさはたの色なり。いとあさましく「などかばかりの事を知り聞えざらむ」とて御氣色わしければ、藥師どもいたう畏り色をうしなふ。かばかりになりては御やいとなくてはまがまがしき御事出でくべしとおのおのおどろきさわぐ。いまだ例なき事はいかゞあるべきと定めかねらる。位にては唯一たびためしありけり。春宮にてはいまださる例なかりけれど、いかゞはせむとておぼし定む。七つにならせ給へばさらでだに心

若しき御程なるにまめやかにいみじとおぼす。薬師と大夫定實の君一人召し入れて又人も參らず、御門の御前にて五所ぞせさせ奉らせ給ひける。御乳母どもいと悲しと思ひて、いぶかしうすれどをさをさゆるさせ給はず。宮いとあつくむつかしうおぼせど、大夫につといだかれ給ひて上の御手をとらへ、よろづに慰め聞えさせ給ふ。御氣色のわはれにかたじけなさををさなき御心におぼし去るにやいとおとなしく念じ給ふ。かくて後程なくをこたらせ給ひぬればめでたく御心おちゐ給ひぬ。大方今年はなゐ去げくふり、世の中さわがしきやうなれば、つゝしみおぼされて十月十五日より圓滿院の二品親王内にさぶらひ給ひて尊星王の御修法つとめ給ふに、二十日の宵二の對より火いできたりあさましともいはむかたなし。上下立ちさわぎのゝしるさま思ひやるべし。大宮の院も内におはしましける比にて、急ぎ出でさせ給ふ。御車の棟木にも既に火もえつきけるを又さしよせて春宮奉らせけり。その夜しも勾當の内侍里へいでたりければ、塗籠のかぎをさへもとめ失ひていみじき大事なりけるを、うへきこし召して荒らかにふませ給ひたりければ、さばかり強き戸のまろびてあきたりけるぞおそろしき。さなくばいとゆゝしき事どもぞあるべかりける。故院の御そぶんの入りたる御小唐櫃、何くれの御寶ことゆゑなくとり出だされぬ。それだにもあまり騒ぎて御かもん御うぶぎぬなどの入りたるものは焼けにけり。上はたゞしにて押小路殿へ行幸なりぬ。法親王は「修法のつよきゆゑにかゝる事はあるなり」とぞのたまはせける。この四月に御わたましありつるに幾程なうかゝるはげにいみじきわざなれど、昔も三條院位の御時かとよ、大内つ

くりたてられて御わたましの夜こそやがて火出できて焼けにし事もあれば、これより重き大事もあるべかりけるに、よかはりたらむはいかゞはせむ。かくて今年もくれぬ。上はいよいよ世の中心あわたゞしうおぼされて、おりゐなむの御心づかひすめり。位におはしましては十五年ばかりにやなりぬらむ。いまだ三十にも遥に足らぬほどの御齢なれば今ぞさかりに若うきよらなる御ほどなめる。

第十一　草まくら

文永十一年正月廿六日、春宮に位譲り申させ給ふ。廿五日の夜まづ内侍所劒璽ひき具して押小路殿へ行幸なりて、又の日こゝとさらに二條内裏へ渡されけり。九條の攝政殿いへまゐり給ひて藏人めして禁色おほせらる。うへは八つになら せ給へばいとちひさくうつくしげにて、びんづらゆひて御引なほし、うち御ぞ、はりばかま奉れる御けしきおとなおとなしうめでたくおはするを花山院内大臣扶持し申さるゝを、故皇后宮の御せうと公守の君などはあはれに見給ひつゝ、故おとゞ宮などのおはせましかばとおぼしいづ。殿上に人々多く參り集まり給ひておものまゐる。その後上達部の拜あり。女房は朝餉よりすゑ まで内大臣公親いむすめをはじめにて三十餘人なみゐたり。いづれとなくとりどりにきよげなり。廿八日よりぞ内侍所の御拜はじめられける。かくて新院、二月七日御幸はじめさせ給ふ。大宮院のおはします中御門京極實俊の中將の家へなる。御なほしから庇の御車、上達部殿上人のこりなくうへのきぬにて仕うまつらる。同じ十日、やがて菊の綱代庇の御車奉り始む。この度は御烏ばう子

直衣おなじ院へまゐり給ふ。同じ廿日ほういの御幸はじめ北白川殿へ入らせ給ふ。八葉の御車、萠木の御狩衣、山吹の二御ぞ、紅の御ひとへ、薄色の織物の御指貫たてまつる。本院は故院の御第三年の事おぼし入りて、む月のすゑつかたより六條殿の長講堂にて哀にたふとく行はせ給ふ。御指の血をいだして御手づから法華經など書かせ給ふ。衆僧も十餘人がほど召しおきて懺法などよませらる。御おきての思はずなりしつらさをもおぼし知らぬにはあらねど、それもさるべきにこそはあらめと、いよいよ御心をいたしねんごろにけうじまうさせ給ふさまいとあはれなり。新院もいかめしう御佛事嵯峨殿にて行はる。三月廿六日は御即位めでたくて過ぎもてゆく。十月廿一日御禊なり。十九日官廳へ行幸あり。女御代花山院よりいださる。絲毛の車、寢殿の階の間に左大臣殿、大納言長雅よせらる。みな紅の五の衣、同じきひとへ車の尻よりいださる。十一月十九日又官廳へ行幸。二十日より五節はじまるべく聞えしをむくりおこるとてとまりぬ。廿二日大嘗會。廻立殿の行幸節會ばかり行はれて清暑堂の御神樂もなし。新院は世をそろしめす事かはらねば、よろづ御心のまゝに日頃ゆかしくおぼしめされし所々いつしか御幸をげう華やかにてすぐさせ給ふ。いとあらまほしげなり。本院は猶いとあやしかりける御身の宿世を人の思ふらむ事もすさまじうおぼしむすぼゝれて、世を背かむのまうけにて尊號をもかへし奉らせ給へば、兵仗をもとゞめむとて御隨身どもめして祿かづけいとま賜はするほど、いと心ぼそしと思ひあへり。大方のありさまうち思ひめぐらすもいと忍びがたき事多くて、內外人々袖どもうるひわたる。院もいと哀なる御けし

きにて心づよからず。今年三十三にぞおはします。故院の四十九にて御ぐしおろし給ひしをだにさこそは誰も誰も惜み聞えしか。東の御方もおくれ聞えじと御心づかひしたまふ。さならぬ女房上達部の中にもとりわきむつまじうつかまつる人三四人ばかり御供つかまつるべき用意すめれば、ほどほどにつけて私も物心ぼそう思ひ歎く家々あるべし。かゝる事どもおづまにも驚き聞えて、例の陣のさだめなどやうに、これかれあまた武士どもよりおひよりおひ評定しけり。この頃はおりし時頼朝臣の子時宗相摸守といふぞ世の中はからふぬしなりける。故時頼朝臣は康元元年に頭おろしてのち忍びて諸國を修行しありきけり。それも國々のありさま人の愁など委しくあなぐり見聞かむの謀にてありける。おやしのやどりに立ちよりてはその家ぬしがありさまを問ひ聞き、ことわりある愁などのうづもれたるを聞きひらきては「我はおやしき身なれど、むかしよろしき主をもち奉りし。いまだ世にやおはするとて消息奉らむ。もてまうで、聞え給へ」などいへば、なでふ事なき修行者の何ばかりかはと思ひながら、いひおはせてその文をもちておづまへ行きて、去かじかと啟へしまゝにいひて見れば入道殿の御消息なりけり。「あなかまあなかま」とて永く愁なきやうにはからひつ。佛神のおらはれ給へるかとて皆ぬかをつきて悦びけり。かやうの事すべて數去らずありしほどに國々も心づかひをのみしけり。最明寺の入道とぞいひける、それが子なればにや今の時宗朝臣もいとめでたきものにて、本院のかく世をおぼし捨てむずるいとかたじけなく哀なる御事なり。「故院の御おきては、やうこそあらめなれど、そこらの御このかみにて、させる

御あやまりもおはしまさゞらむ。いかでかは忽ちに名殘なくはものし給ふべき。いとたいだいしきわざなり」とて新院へも奏し、かなたこなたなだめ申して東の御方の若宮を坊に立て奉りぬ。十一月五日節會行はれていとめでたし。かゝれば少し御心なぐさめてこのきはゝ云ひて背かせ給ふべき御道心にもあらねばおぼし留まりぬ。これぞあるべき事とおいなう世人も思ひいふべし。御門よりは今二つばかりの御このかみなり。まうけの君御年まされるためし遠きむかしはさておきぬ、近頃は三條院、小一條院、高倉院などや坐しましけむ。高倉院の御末ぞ今もかく榮えさせおはしませばかしこきためしなめり。いにしへの天智天皇と天武天皇とはおなじ御腹の御はらからなり。その御末ゑばしはうちかはりうちかはり世を云ろしめしゝためしなどをも思ひや出でけむ、御二流れにて位にも坐しまさなむと思ひ申しけり。新院は御心ゆくとしもなくやありけめど、大方の人めには御中いとよくなりて御消息も常にかよひ、上達部などもかなたこなた參り仕うまつれば大宮院もめやすくおぼさるべし。まことや文永のはじめつ方下り給ひし齋宮は後嵯峨院の更衣ばらの宮ぞかし。院かくれさせ給ひて後御ぶくにてお り給へれど、猶御暇ゆりざりければ三とせまで伊勢におはしましゝが、この秋の末つかた御のぼりにて仁和寺に衣笠といふ所にすみ給ふ。月花門院の御次にはいとらうたく思ひ聞え給へりし昔の御心おきてをおはれにおぼしいでゝ、大宮院いとねんごろにとぶらひ奉り給ふ。龜山殿におはします。十月ばかり齋宮をもわたし奉り給はむとて本院にも入らせ給ふべきよし御せうそこあれば、めづらしくて御幸あり。その夜は女院

の御前にてむかし今の御物語などのどやかに聞え給ふ。又の日夕つけて衣笠殿へ御むかひに忍びたるさまにて、殿上人一二人御車ふたつばかり奉らせ給ふ。寝殿の南おもてに御衣とねども引きつくろひて御對面あり。とばかりして院の御方へ御消息聞え給へればやがてわたり給ふ。女房に御はかしもたせて御簾の中に入りたまふ。女院はからのうすにほひの御ぞ香染などたてまつれば、齋宮紅梅のにほひにえび染の御小袿なり。御ぐしいとめでたくさかりにて二十にひとつふたつやあまり給ふらむとみゆ。花といはゞ霞の間のかば櫻尚にほひ劣りぬべくいひ知らずあてに美しうわたりも薫る御さましてめづらかに見えさせ給ふ。院はわれもかう亂れおりたる枯野の御狩衣、薄色の御ぞ、紫苑色の御指貫なつかしきほどなるをいたくたき染めて、えならずかほりみちてわたりたまへり。上臈だつ女房、紫のにほひ五つに、もばかり引きかけて色の御車にまゐり給へり。神代の御物語などよき程にて故院のいまはの頃の御事などおはれになつかしく聞え給へば、御いらへもつゝましげなるものから、いぶせからぬほどに、ほのかに物うちのたまへる御さまなどもいとらうたげなり。をかしき樣なる御みき御くだ物、こはいひなどにて今宵はてぬ。院も我が御方にかへりてうちやすませ給れへど、まどろまれたまはず。ありつる御面影心にかゝりておぼえ給ふぞいとわりなき。さしはへて聞えむも人ぎゝよろしかるまじ、いかゞはせむとおぼしみだる。御はらからといへど年月よそにておひたち給へれば、うとうとしくならひ給へるまゝに、つゝましき御思もうすくやありけむ、なほひたぶるにいぶせくて止みなむはあかず口をしとおぼす。けし

からぬ御本性なりや。なにがしの大納言のむすめ御身近くめしつかふ人、かの齋宮にもさるべきゆかりありてむつましく參り馴るゝを召しよせて「なれなれしきまでは思ひよらず、唯少しけぢかきほどにて思ふ心のかたはしを聞えむ。かくをりよき事もいと難かるべし」とせちにまめだちてのたまへば、いかゞたばかりけむ、夢現ともなく近づき聞えさせ給へれば、いと心うしとおぼせど、あえかに消えまどひなどは玄給はず、らうたくなよなよとしてあはれなる御けはひなり。鳥も玄ばしばおどろかすに心あわだゝしう、さすがに人の御名のいとほしければ夜深くまぎれいで給ひぬ。日たくるほどに大殿籠りおきて御文たてまつり給ふ。うはべは唯大かたなるやうにて、習はぬ御旅寢もいかになどやうにすくよかに見せて、中にちひさく、

「夢とだにさだかにもなきかりふしの草のまくらに露ぞこぼるゝ」。

いとつれなき御氣色の聞えむ方なさにこそあめる㊀。惱ましとて御覽じもいれず、玄ひて聞えむもうたてあれば、なだらかにもかくしてをこたらせたまへなど聞え玄らすべし。さて御方々御臺など參りて、尽つかた又御對面どもあり。宮はいと耻かしうわりなくおぼされて、いかで見え奉らむずらむとおぼしやすらへど、女院などの御氣色のいとなつかしきに聞えかへさひ給ふべきやうもなければ、たゞ大どかにておはす。今日は院の御けいめいにて善勝寺大納言隆顯ひわりでやうのもの色々にいと清らに調じてまゐらせたり。三めぐりばかりはおのおのべちにまゐる。「その後あまりあいなう侍ればかたじけなけれど昔ざまにおぼし

なずらへゆるさせ給ひてむや」と御けしきとり給へば、女院の御かはらけを齋宮まゐる。その後院きこしめす。御几帳ばかりをへだて丶長押のもとへ西園寺大納言實兼、善勝寺大納言隆顯召さる。簀子にながすけ、爲方、兼行、すけゆきなどさぶらふ。あまた度ながれくだりて人々そぼれがちなり。「故院の御事の後はかやうの事もかき絶えて侍りつるに今宵はめづらしくなむ、心とけてあそばせ給へ」などうちみだれ聞え給へば、女房召して御箏ども掻き合せらる。院の御まへに御琵琶西園寺もひき給ふ。兼行篳篥、神樂うたひなどしてことごとしからぬしもおもしろし。こたみはまづ齋宮の御まへに院みづから御銚子をとりて聞え給ふに、宮いと苦しうおぼされてとみにもえうごき給はねば、女院「この御かはらけのいと心もとなく見え侍るめるに、こゆるぎのいそならぬ御さかなやあるべからむ」とのたまへば、「ばいたんの翁はあはれなり、おのが衣は薄けれど」といふ今樣をうたはせ給ふ御聲いとおもしろし。宮きこしめしてのち女院御盃をとり給ふとて、「天子には父母なしと申すなれど十善の床をふみ給ふも賤しき身の宮づかへなりき。一こと報い給ふべうや」とのたまへば、さうなる御事なりやと人々めをくはせつゝ忍びてつき出ろふ。「御まへの池なる龜岡に鶴こそむれゐておそぶなれ」とうたひ給ふ。その後院きこしめす。善勝寺せれうの里をいだす。人々こゑ加へなどしてらうがはしき程になりぬ。かくていたう更けぬれば女院も我が御方に入らせ給ひぬ。かくてそのまゝのおましながら、かりそめなるやうにてよりふし給へば、人々もすこし退きて苦しかりつるなごりにほどなくねいりぬ。あすは宮も御かへりと聞ゆれば、今宵ばか

りの草枕なほむすばざりしき御心の去づめがたくて、いとさゝやかにおはする人の御ぞなどさる心して、なよらかなるをまぎらはしすぐしつゝ忍びやかにふるまひ給へばおどろく人もなし。何やかやとなつかしうかたらひ聞え給ふに、なびくとはなけれども、たゞいみじう大どかにやはらかなる御さまして、おぼしほれたる御けしきをよそなりつる程の御心まどひまではなけれど、らうたくいとほしと思ひ聞え給ひけり。ながき夜なれど更けにしかばにや、程なう明けぬる夢の名殘はいとあかぬ心ちしながら、きぬぎぬになり給ふほど女宮も心苦しげにぞ見え給ひける。その後も折々は聞えうごかし給へど、さしはへてあるべき御事ならねばいとまどほにのみなむ、まくるならひまではあらずやおはしましけむ。あさましとのみつきせずおぼし渡るに、西園寺大納言忍びて參り給ひけるを、人がらもまめまめしくいとねんごろに思ひ聞え給へれば、御母代の人などもいかゞはせむにてやうやうたのみかはし給へば、ある夕つ方「内よりまかでむついでに又必ず參りこむ」とたのめ聞え給へりければ、その心して誰もまち給ふ程に、二條の師忠のおとゞ、いと去のびてありき給ふ道にかの大納言こせうなどあまたしていときらきらしげにて行き逢ひ給ひけるに、女宮の御許なればことごとしかるべき事もなしとおぼして、去ばしかの大納言の車やりすぐしてむにいでむよと思して門の下にやりよせて、おとゞそばう子直衣のなよらかなるにてをり給ひぬ。内には大納言の參り給へるとおぼして、例は忍びたる事なれば門の内へ車を引き入れて對のつまよりおりて參り給ふに、門よりおり給ふにあやしうと思ひながら、たそがれ時のたどたどし

きほど何のおやめも見えわかで、妻戸をはづして人のけしき見ゆれば何となくいぶかしき心ちし給ひて中門の廊にのぼり給へれば、例のなれたる事にて、をかしきほどの童女房わゆみいでゝけしきばかりを聞ゆるを、おとゞはおぼえなきものからをかしとおぼして忘りにつきて入り給ふほどに、宮も何心なくうちむかひ聞え給へるに、おとゞもこはいかにとはおぼせど何くれとつきづきしう日頃の志ありつるよし聞えなし給ひて、いと幾ましう一かたならぬ御思ひ加はり給ひにける。大納言はこの宮をさしてかくまねり給ひけるに、例ならず男の車よりおるゝ氣色見えければ、あるやうあらむとおぼして御隨身一人「そのわたりにさりげなくてをれ」とて留めて歸り給ひにけり。男君はいと思ひの外に心おこらぬ御旅寢なれど、人の御氣色を見たまふもありつる大納言の車などおぼしあはせて、いかにもこの宮にやうあるなめりと心え給ふに、いとすきずきしきわざなり、よしなしとおぼせばふかさで出で給ひにける。殘し置き給へりし隨身このやうよく見てければ「去かじか」と聞えけるに、いと心うしとおぼえて、日頃もかゝるにこそはおりけめ、いとをこがましう、かのおとゞの心の中もいかにぞやとかたがたにおぼし亂れて、かきたえ久しく音づれ給はぬをもこの宮にはかう殘りなく見顯されけむとも玉ろしめさねば、おやしながら過ぎもて行く程に、たゞならぬ御氣色にさへ惱み給ふをも大納言殿は一すぢにしもおぼされねば、いと心やましう思ひきこえ給ひけるぞわりなき。されどもさすがおぼしわく事やありけむ、その御程の事どもゝいとねんごろにとぶらひ聞えさせ給ひけり。異御腹の姫宮をさへ御子になど去給ふ。御そ

ぶんもありけるとていくほどなくて弘安七年二月十五日に宮かくれさせ給ひにしをも、大納言殿いみじう歎きたまひけるとかや。まことや新院には一とせ近衛の大殿基平の姫君、女御にまゐり給ひにしぞかし。女御ときこえつるをこのほど院號あり、新陽明門院とぞきこゆめる。建治二年の冬の頃、近衛殿にて若宮生れさせ給ひにしかばめでたくさらさらしうて、三夜五夜七夜九夜などいまめかしくきこえて、御子もやがて親王の宣下などありき。

第十二　老のなみ

建治三年正月三日、内のうへ御かうぶりしたまふ。十一にぞならせ給ふらむかし。御諱世仁ときこゆ。ひきいれは關白太政大臣殿兼平、理髪頭中將もとあき、御わげまき大炊御門大納言信嗣の君仕うまつられけり。御遊始まる。琵琶玄象　今出川大納言實兼、和琴鈴鹿信嗣大納言、玄やうのこと殿の大納言兼忠の君にて坐せしなめり。とんじき祿などの事常の如し。廿二日朝覲の行幸龜山殿へなりしかば、上達部殿上人例の色々のえり下襲、織物打物めでたくゆゝしかりき。御前の大井川に龍頭鷁首浮べらる。夜に入りて鵜飼どもめして篝火ともしてのせらる。御まへの御あそび地下の舞などさまざまのおもしろき事ども例の事なればうるさくて、さのみもえ書かず。同じ三月廿六日石清水社へ行幸、四月十九日賀茂社へ行幸、孰れもめでたかりき。人々定めて記しおき給へらむとゆづりてとめ侍りぬ。春宮の御元服八月と聞えしを、奈良の興福寺の火の事により延びて十二月十九日にぞせさせ給ひける。十六日にまづ内裏へ行啓はなる。清涼殿の東の廂に倚子をたてらる。御門も倚子につかせ給ふ。ひきいれは

左大臣師忠、理髪春宮權大夫具守つとめらる。御諱熙仁と申しき。持明院殿より女房二なくきよらにおたて〳〵十二人まゐる。東の御方も院の御車にて殿上人北面召次などいと美々しうて參り給へり。御門春宮いづれもいと美しき御わりさまなめり。新院は盡せず皇后宮のおはしまさましかばとのみおはたれがちに、思し忘るゝ世なき御心やなぐさむとこれかれまゐらすれど、をさをさなずらへなるもなし。新陽明門院も始は御おぼえあるやうなりしかど、次第にかれがれなる御事にて御ひとりねがちなり。故皇后宮の御はらからの中の君も御面かげや通ひたらむとなつかしさに忍びてねんごろにのたまひしかば參らせ給へれど、いとしもなくて姫宮一所ばかりとり出で給へりしまゝにてやみにき。姫宮をば大宮院の御傍にぞかしづき聞え給ふ。かくて弘安元年になりぬ。十月ばかり又二條内裏に火出で來ていみじうあさまし。萬里小路殿はわりし火の後又つくられて、今年の八月に御わたましにて新院すませ給へれど、内裏焼けぬればこの院又内裏になりぬ。うちつゞき火のおこりさいと怖し。その頃大宮院いと久しくなやませ給へば、本院も新院も常にわたり給ひて夜などもおはしませば、異御腹の法親王姫宮たちなども絶えず御とぶらひにまうでさせ給ふ。中に故院の位の御時、勾當の内侍といひしが腹に出でものし給へりし姫宮、後には五條院と聞えしいまだ宮の御程なりしにや、いと盛にうつくしげにてせちにかくれ奉り給ふを、新院あながちに御心にかけてうかゞひ聞え給ふ程に、此の御惱の頃いかゞありけむ、いみじう思の外にあさましとおぼしなげく。かの草枕よりはまことしうにがにがしき御事には姫宮までいできさ

せ給ひにき。限なく人目をつゝむ事なればあやしう誰が御腹といふ事もなくて、院の御乳母の按察の二位の里にわたし奉り給へり。幼なき御心にもいかゞ心え給ひけむ、「宮の御母君をば誰とか申す」と人の問ひきこゆれば「いはぬ事」といみじういらへさせ給ひける。御心のあくがるゝまゝに御覧じすぐす人なく亂りがはしきまでたはれさせ給ふ程に、腹々の宮たち數知らず出で來給ふ。大かた十三の御年より宮はいできそめさせ給ひしが、年々に多くのみなり給へばいとらうがはしきまでぞあるべき。故皇后宮の御ざうしにて貫川といひし、御りやうとかや聞ゆる社の神子にてぞありける。先にも聞えしやうに位の御程に度々召されて姫宮生れ給へりしを、それも御乳母の按察の二位殿の里にかの五條院の御腹のと二所おなじ御かしづきぐさにておはせしほどに、近衛殿（このえどの）いらせ給ひぬれば、殿はもとおはせし北政所をもすさめ給ひてこの宮を類ひなく思ひ聞えさせ給ふ程に、かひがひしく若君（左大臣ついでの事）來給へるをもいみじうかしづきいたはり給ひて、前の北政所の御腹の太郎君中將ばかりにて物し給ふをもよくせずばおしのけぬべうもてなし奉り給ひけるを、新院聞かせ給ひて、「いといとほしき事なり。これはいまだ兒なり。もちとおとなしうなり給へるをばいかでか引き違へるやうはあらむ」とのたまはせて、そのおとゞは遂に御家もたもたせ給へりしなり。また北白川殿の女院に大納言の君とてさぶらひし人の曹司に下野といひしものは、田樂とかやいふ事するあやしの法師の名をば玄駒といふがむすめなりき。かの女院は新院の御母代にて、常に御幸もなりしかばおのづから御覧じそめけるにや、ことの外に時めきいでゝこ

の院に召し渡されて、花山院のおはさおとゞの御子になされ、廊の御方とぞつけさせ給ふ。その御腹にも宮生れ給ひぬ。大宮女院に讃岐とて侍らひしは西園寺の御家のもの景房といひしが女なりしを、いみじうおぼいてこれも召しとりて、西園寺おとゞの御子になして二品の加階たまはる。若宮うまれ給ひにき。帥の中納言爲經のむすめの帥典侍どのといひしが御腹にもあまた生れ給ふ。九條殿の北政所、又梨本、青蓮院法親王など大納言典侍の御腹照慶門院は中納言典侍、十樂院慈道法親王は帥典侍殿の腹、かやうにすべて多くものし給ふ。昔の嵯峨天皇こそ八十餘人まで御子も給へりけると承り傳へたるにもはと劣り給ふまじかめり。内にはなかなか女御更衣もさぶらひ給はず、いとさうざうしき雲のうへなり。「西園寺女御參り給ふべしと聞えながらいかなるにかすがすがともおぼしたゝぬは思ふ心おはするなめり」とぞ世の人もさゞめきける。新院の御位の時參り給へりし西園寺の中宮は院號ありて今出川ときこゆなり。「かの御おぼえなどのいと口をしかりしより、この院の御方ざまをつらく思ひ聞え給ふなめり」などぞいひなす人も侍りけるとぞ。やよひの末つかた、持明院殿の花ざかりに新院渡り給ふ。鞠のかゝり御覽せむとなりければ、御まへの花は梢も庭もさかりなるによその櫻をさへ召してちらしそへられたり。いとふかう積りたる花の白雪跡つけがたう見ゆ。上達部殿上人いと多く參りあつまり、御隨身北面の下﨟などいみじうきらめきて侍ひあへり。わざとならぬ袖口どもおし出だされて心ことに引きつくろはる。寢殿の母屋におまし對座に設けられたるを新院入らせ給ひて「故院の御時定めおかれしうへは今

さらにやは」とて長押の下へひきさげさせ給ふ程に、本院いでたまひて「朱雀院の行幸にはあるじの座をこそなほされ侍りけるに、今日の御幸には御座をおろさるゝいとことやうに侍り」など聞え給ふほどいとおもしろし。うべうべしき御物語はすこしにて花の興にうつりぬ。御かはらけなどよきほどの後、春宮伏見殿おはしまして、かゞりの下に皆立ちいで給ふ。両院春宮たゝせ給ふ。中半過ぐる程に、まらう人の院のぼり給ひて御ぞたうづなどなほさるゝほどに、女房別當の君、また上臈だつ久我のおほきおとゞのうまごとかや、かば櫻の七紅のうちきぬ、山吹のうはぎ、赤色の唐衣、すゞしの袴にて、ぞろがねのさかづきやないばこにすゑて同じひさげにて柿ひたしまゐらすればはかなき御たはぶれなどのたまふ。暮れかゝる程風少しうち吹きて花もみだりがはしく散りまがふに、御鞠數多くあがる、人々の心ちいとえんなり。ゆゑある木陰に立ち休らひ給へる院の御かたちいと清らにめでたし。春宮もいと若うらうつくしげにて、濃き紫の浮織物の御指貫、なよびかにけしきばかり引きあげ給へれば、花の絲白く散りかゝりてもんのやうに見えたるもをかし。御覽じあげて一枝おしをり給へるほど繪に書かまほしき夕ばえどもなり。その後も御みきなどらうがはしきまできこしめしさうどきつゝ、夜ふけて歸らせたまふ。六條殿の長講堂も燒けにしを造られて、その頃御わたまし云給ふ。う月のはじめつかたより院のうへひさしの御車にて上達部殿上人御隨身えもいはずきよらなり。女院の御車に姫宮もたてまつる。出車あまた皆白きあはせの五つ、きぬ、濃き袴おなじひとへにて、三日過ぎてぞいろいろの衣ども藤踏蹋撫子など着かへられ

けふ。左ばしこの院にわたらせ給へば人々たえず參り集ふ。西園寺の殿ばらなどもいでとに參りたまふ。御壺わかたせ給ひて前栽合わりしにもをかしうめづらしき事ども多かりき。なにがしの朝臣の槇の島のけしきを造りて侍りけるを、平大納言經親いまだ下臈にて兵衛佐などいひける程にや、その宇治川の橋をぬすみてわがつくろひたるかたに渡して侍りける、いとおそろしく心がしこくぞ侍りける。例の五月のくうげ、やがてうち續きければ女院たち宮々など夜の御時に閼伽奉らせ給へば、御堂のかをりみやうがうの香も外には多くまさりていとをかしうなまめかしう面白し。大かたいづれも年に二たびはむかしよりの事にて、いみじうけいめいし給へば、世の人のなびき仕うまつるさまかぎりなし。日に二たび院いで居させ給ふに、關白大臣以下やんごとなき人々絶えずさぶらひ給ふ。大中納言、二位三位、非參議、四位五位などはましてかず知らず。すべて前の司の人の道などもまゐる事なれば、時ならぬ院の御前ともなくいみじう華やかにおもしろうたふとし。昔の後二條關白師道と聞えしは、おりゐの御門の門に車の立つべき事なしとそしり給ひけるに、今の世を見給はゞと思ひ出でらる。九月の供花には新院さへわたりものし給へば、いよいよ女房の袖口心ことに用意くはへ給ふ。御花はつれば兩院ひとつ御車にて伏見殿へ御幸なる。秋山の景色御らんせさせむとなりけり。上達部殿上人かなたこなたおしわはせていろいろの狩衣すがた菊紅葉こきまぜてうちむれたる、見所おほかるべし。野山のけしき色づきわたるに伏見山田面につゞく宇治の川浪、はるばると見わたされたるほどいとえんなるを、若き人々などは身に

ゑむばかり思へり。故應司殿の大殿も參り給ふべしと聞えけるを、御物忌とてとまり給へれば五葉の枝につけて奏せられける、

「伏見山いくよろづ代も枝そへてさかえむ松のすゑぞ久しき」。

御かへし、

「さかふべきほどぞ久しき伏見山おひそふ松の枝をつらねて」。

又の日は伏見の津にいでさせ給ひて鵜舟御らんじ、白拍子御船にめし入れて歌うたはせなどせさせ給ふ。二三日おはしませば、兩院の家司共我おとらじといかめしき事ども調じてまゐらせあへる中に、やまもゝの二位兼行、ひわりごどもの心ばせありて仕うまつれるに雲雀といふ小鳥を萩の枝につけたり。源氏の松風の卷を思へるにやありけむ、爲兼朝臣を召して本院「かれはいかゞ見る」と仰せらるれば「いと心え侍らず」とぞ申しける。まことに定家の中納言入道が書きて侍る源氏の本には萩とは見え侍らぬとぞうけたまはりし。かやうに御申いとよくて、はかなき御遊わざなどもいどましきさまに聞えかはし給ふを、めやすき事になべて世の人も思ひ申しけり。ある時は御小弓射させ給ひて「御負わざには院の内にさぶらふかぎりの女房を見せさせ給へ」と新院のたまひければ、童の鞠蹴たるよしをつゝりなして、女房どもに水干着せて出だされたる事も侍りけり。新院の御のり物には龜山殿にて五節のまねに舞姫童下仕までになされけり。上達部直衣にきぬ出して露臺の亂舞、御前のめし、北の陣推參まで盡され侍りとぞ承りし。この御代にもまた勅撰のさたをとゝしばかりより

ばべりし。爲氏大納言撰ばれつる。この左はすにぞ奏せられける。續拾遺集と聞ゆ。「たましひあるさまにはいたく侍らざめれど、艶には見ゆる」と時の人々申し侍りけり。續古今のひきうつしおぼろげの事は立ちならび難くぞ侍るべき。かくて年もかはりぬ。その頃新陽明門院又唯ならずおはしますと聞えし。五月ばかり御けしきあれば珍らしうおぼす。ないない殿にてせさせ給へば天下の人々まゐりつどふ。前の度生れさせ給へる若宮はかくれさせ給ひにしを新院本意なしとおぼされけるに、又かくものし給へば、めでたう思ふさまなる御事もおらばと今よりおぼしかしづくに、いとかひがひしう若宮生れさせ給へればかぎりなくおぼさる。八月御子の御わりさごめとて萬里小路殿に渡らせ給ふ。唐廂の御車に後嵯峨院の更衣腹の姫宮、聖護院の法親王のひとつの御腹とかや、御母代にてそひ奉り給ふ。又三條の內大臣公親の御むすめ內の上の御乳母なりしもめでたき御あえものとて御車にふたり乘りたまふ。女院は院のうへひとつ御車に翁のわじろのひさしに奉る。宮の御車にやりつゞけてよそほしくめでたき御事なり。その頃儉約行はるとかや聞えし程にて下簾垂みじかくなされ小金物拔かれける。物見車どものも召次よりて切りなどしけるをぞ「時しもやかゝるめでたき御事のをりふし」などつぶやく人もありけるとかや。この宮も親王の宣旨ありていとめでたく聞えしほどに、明くる年九月又かくれさせ給ひにしいと口をしかりし御事なり。弘安も四年になりぬ。夏頃後嵯峨院の姫宮かくれさせ給ひぬ。後の堀川院の御むすめにて神仙門院と聞えし女院の御腹なれば故院もいとおろかならずかしづき奉らせ給ひけり。御かたちも

たぐひなく美くしうおはしまして「人の國より女の本を尋ねむにはこの宮の似せ給をやらむ」などぞ父の御門もおぼせられける。御めのと隆行の家におはしましける程に、御めのと子隆やすゑのぶて參りける故にあさましき御事さへいできて、これも御うみながしにて俄にうせさせ給ひにけりとぞ聞えし。その頃蒙古おこるとかやいひて世の中騒ぎたちぬ。色々さまざまに恐しう聞ゆれば、「本院新院はあづまへ御下りあるべし。内春宮は京に渡らせ給ひて東の武士ども上りさふらふべし」など沙汰ありて山々寺々御いのりかずゑらず。伊勢の勅使に經任大納言まゐる。新院も八幡へ御幸なりて西大寺の長老召されて眞言の大般若供養せらる。大神宮へ御願に我が御代にしもかゝる亂出できて、まことにこの日本のそこなはるべくは御命をめすべきよし御手づから書かせ給ひけるを、大宮院いとあさましき事なりと猶諫め聞えさせ給ふぞとわりにおはれなる。あづまにもいひゑらぬ祈どもこちたくのゝしる。故院の御代にも御賀の試樂の頃かゝる事ありしかど程なくこそゑづまりにしを、この度はいとにがにがしう牒狀とかやもちて參れる人などありて、わづらはしう聞ゆれば、上下思ひ惑ふ事限りなし。されども七月一日おびたゞしき大風吹きて、異國の船六萬艘兵乘りて筑紫へよりたる皆吹き破られぬれば、あるは水に沈み、おのづから殘れるもなくなく本國へ歸りにけり。石清水の社にて大般若供養說法いみじかりける刻限に、晴れたる空に黒雲一むら俄に見えてたなびく。かの雲の中より白き羽にてはぎたるかぶら矢の大なる西をさして飛び出でゝ鳴る音おびたゞしかりければ、かしこには大風の吹きくると兵の耳には聞えて、

浪荒くたち海の上おさましくなりて皆沈みにけるとぞ。猶吾が國に神のおはします事あらたに侍りけるにこそ。さて爲氏の大納言、伊勢の勅使にてのぼる道より申しおくりける。

「勅をしていのる玄ゐるしの神風によせくる浪はかつくだけつゝ」。

かくて玄づまりぬれば、京にも東にも御心どもおちゐてめでたさかぎりなし。かの異國の御門心うしとおぼして湯水をもめさず「我いかにもしてこの度日本の帝王にうまれて、かの國を亡す身とならむ」とぞちかひて死に給ひけるとぞ聞き侍りし。まことにやありけむ。おなじ六年正月六日、日吉社の訴訟勅裁なしとて御輿は都へ入らせ給ふ。六波羅の武士どもけしきばかり防ぎ奉りけれど、まめやかには神にむかひ奉りて弓いるものもなければ、紫宸殿清涼殿などにふりすてまゐらせて山法師はのぼりぬ。御門は急ぎ對屋にいでさせ給ひて腰輿にて近衛殿へ行幸なる。殿上人ども柏ばさみして仕うまつりけり。七日の節會もまほには行はれず。それより三條坊門富小路の通成のおとゞの家へ行幸なりて玄ばし内裏になりし時、富小路おもての四足はたてられ侍りき。かゝりし程に、この家に石清水の若宮を祝ひまゐらせたる社おはしますに狐多く侍りけるを、瀧口のなにがしとかや過ちたりける御とがめにてよろづわづらはしくかうかうしき事どもありければ萬里小路殿へ歸らせ給ひにき。この御門はねび給ふまゝに、いとかしこく御才など勝れさせ給へれば、なべて世の人もめでたき事に思ひきこゆ。はかばかしき女御后などもさぶらひ給はでいとつれづれなるに、新陽明門院の御かたに堀川の大納言の御むすめ、東の御方とてさぶらひ給ふを忍び忍び御覽じ

ける程に、弘安八年二月ばかり若宮いでものし給へり。いとやんごとなき御宿世なるべし。今年北山の准后九十にみち給へば御賀の事大宮院おぼしいそぐ。世の大事にて天下かしがましくひゞきわひたり。かくのゝしるは安元の御賀に青海波舞ひたりし隆房大納言の孫なめり。鷲尾の大納言隆衡のむすめぞかし。大宮院東二條院の御母なれば兩院の御祖母おはきおとゞの北の方にて天の下皆このにはひならぬ人はなし。いとやんごとなかりける御さいはひなり。むかし御堂殿の北の方鷹司殿と聞えしにも劣り給はず、大方この大宮院の御宿世いとありがたくおはします。すべていにしへより今まで后國母おほく過ぎ給ひぬれど、かくばかりとり集めいみじきためしはいまだ聞き及び侍らず。御位のはじめより選ばれまゐり給ひて、爭ひきじろふ人もなく、三千の寵愛一人にをさめ給ふ。兩院うちつゞきいでものし給へり。いづれもたひらかに思ひのごとく二代の國母にて今は既に御うまごの位をさへ見給ふまで、聊も御心にあはずおぼしむすぼるゝ一ふしもなく、めでたくおはしますさまきし方もたぐひなく行く末にも稀にやあらむ。いにしへの基經のおとゞの御むすめ、延喜の御代の大后宮、ことにかなしう玄給ひし前坊におくれ聞え給ひて、御命の中はたへぬ御歎つきせざりき。九條のおとゞ師輔の御むすめ、天暦の后にておはせし、冷泉、圓融兩代の御母なりしかど、めでたき御代をも見奉り給はず御門にも先だち給ひてうせ給ひにき。御堂の御むすめ上東門院、後一條、後朱雀の御母にて御孫後冷泉、後三條まで見奉り給ひしかども皆先立たせ給ひしかばさかさまの御歎絶ゆる世なく、御命あまりながくて中々人目をはづる思ひ深く

おはしましき。これも皆一の人にて世の親となり給へりしだに、やうをかへてさまざまの御身のうれへはありき。たゞ人には大納言公實の御むすめこそ待賢門院とて崇徳院後白河の御母にておはせしかど、それも後白河の御世をば御覽せず讃岐の院の御末もおはしまさず。されば今のやうにたゞ人の御身にて三代國のおもしといつかれ、兩院とこしなへに仰ぎ捧げ奉らせ給へば、さるの世もいかばかりの功徳おはしまし、この世にも春日大明神をはじめよろづの神明佛陀の擁護厚くものし給ふにこそ。ありがたくぞ推し量られ給ふ。かくて御賀は二月三十日ごろなり。本院、新院、東二條院、遊義門院（いまだ宮と申す。）皆かねてより北山に渡らせ給ふ。新陽明門院も新院の一つ御車にておはします。廿九日の夜まづ行幸あり。雅樂司、樂を奏す。院司左衞門督公衡事のよし申してのち中門によせらる。その後春宮行啓、門よりおりさせ給ふ。傳のおとゞ二條御車に參り給へり。その日になりぬれば寢殿の東おもての母屋廂までとりはらひて釋迦如來の繪像かけたてまつる。道場のかざり、まことの淨土の莊嚴もかくやとぞ見えたる。御經の筥二合、金泥の壽命經九十卷法華經入れらる。こそとめでたく清らをつくされたり。御經の机によせかく。御厨子のうちに西の一間に名香柳の織物に藤をぬひたるにてつゝみて御經の机によせかく。御厨子のうちに西の一間に纐纈二帖唐錦の衣とねぎて內の上の御座とす。おなじ御座の北に大文のからゝい一帖敷きて春宮渡らせ給ふ。西の庇にこれも屏風をそへて、纐纈二帖錦の衣とねに准后居給へり。同じ庇に東二條院わたらせ給ふ。はるばるとかうけつの几帳のかたびらをいだして、色々の袖口どもも御方々けぢめわかれておし出でたるほど、立田姫もかゝる錦の色はいかでかはと

いみじう好ましげなり。事なりぬるにや、兩院、御門、春宮、大宮院、二條院、今出川院、春宮大夫などうちつゞき誦經の鐘のひゞきも耳驚くばかり所せうきこゆ。衆僧集會の鐘うちて後上達部御前の座に着く。階より東に關白左大臣、內大臣、花山院大納言長雅、源大納言通頼、大炊御門大納言信嗣、右大將通基、春宮大夫實雄、左大將公守三條中納言實重、花山院中納言家教、左衞門督公衡など侍ひたまふ。階より西に四條前關白大納言隆親、春宮權大夫具守、權中納言宗冬四條宰相隆保、右衞門督爲世など祗候せられたり。內の上御引直衣、すゞしの御袴、本院御烏ばう子直衣、青にびの御指貫、新院御なほし、あやの御指貫、春宮さくらの御直衣、あられにくゎんのもん紫の御指貫いひおらずなまめかしう見えたまふ。今日はみな御簾の內におはします。大宮女院白き綾の三つ御衣、東二條院から織物の柳櫻の八つ紅梅のひねりおはせの御ひとへ、かばさくらの御小袿奉れり。姫宮紅のにはひ十　紅梅の御小袿、萠黄の御ひとへ、赤色の御からぎぬ、すゞしの御袴たてまつれる常よりもことに美くしうぞ見えたまふ。おはしますらむとおもほすまのとほりに內のうへ常に御まじりたゞならず御心づかひして、御目とゞめたまふ。樂人舞人烏向樂を奏す。けいろうを先だて、亂聲左右枠をふる。その後一越調の調子を吹きて樂人舞人、衆僧集會の所儀にむかひて安樂盬をふく。衆僧左右にわかれてまゐる。階の間よりのぼりて座につく。講師法印憲實、讀師僧正守助、導師高座にのぼりぬれば堂童子花籠をわかつ。杖とりの使公敦朝臣、杖を退けて舞を奏するほど、けしきばかりうちそゝぎたる春のあめ青柳の絲に玉ぬくかと見えたり。一の舞久助といふものすこしねびて、いと

よしよししうおもゝちあしぶみかうさびておもしろし。萬歳樂、賀殿、陵王、右地久、延喜樂、納曾利、久忠二の物にて勅錄(勅祿)の手といふ事仕うまつる時、右のおとゝ座を立ちて、賞おはせらるればうけたまはりて拜し奉る程いと艶なり。久助正秋などいふものどもゝ賞うけたまはりて笛をもちながらおきふし拜するさまもつきづきしうゆゑありて見ゆ。講讃のことばめでたういみじ。今の世には富樓那尊者の如くいはるゝものなれば、心とゞめて人々聞き給ふに涙とゞめがたき事どもをいひつゞく。高座はてゝのち、樂人酒胡子を奏す。その程に僧の祿をたまふ。頭中將公敦よりはじめて思ひ思ひのすがたにて祿をとる。あるはわきあけにひらやなぐひもとはしの袍に革總の劒などこゝろごゝろなり。俊定經繼などは巡方の帶をしたり。衆僧まかりつる程に、廻忽長慶子奏して樂人舞人も退きぬる後、大宮院准后の御臺まゐる。陪膳權中納言、役送實時、實冬、實躬、信輔、俊光など仕うまつる。かくて又の日はやよひの一日なりぬ(如元)。寢殿のよそひ昨日のまゝなり。舞臺樂屋ばかりをとりのけて母屋の四方に壁代をかく。兩院内の上の御簾の役關白さぶらひ給ふ。春宮のは傳遲く參り給へば大夫實兼つとめ給ふ。内のうへ今日は例の御直衣、紅の打ちたる綿厚き御ぞ、織物の御指貫いとめでたき御にはひなり。本院かた織物の薄色の御指貫、少し薄らかなる御直衣、新院雲に鶴の浮織物の御直衣、おなじ御指貫、紅の今すこし色かはれるを奉れるあらまはしき程にねびとゝのほりしうとくにものしき御さまかたちあなきよげ、今ぞ盛に見え給ふ。春宮は色濃き御直衣、浮線綾の御指貫、紅の打ちたるあはせ奉れり。とりどりにめでたくきよらに

おはします。御かたちどものいづれとなく、あな美くしとうち見奉る人の心ちさへそゞろにおぼえまし。大宮院などはまして何事をかはおぼさるらむとおしはかられ給ふ。かなたこなたの御随身ども近くさぶらひつるを、院いでさせ給ひぬれば退きて御階の西になみゐたる、装束ども色々の花をつけ高麗唐土のあやにしき、こがね玄ろがねをのべたるさまいとあまりうたてある程にぞ見ゆる。今日は内、春宮、両院おもの参る。陪膳花山院大納言、役送四條宰相、三條宰相中将、本院の陪膳大炊御門大納言信嗣、新院のは春宮大夫などつとめらる。その後御あそび始まる。内のうへ御笛柯亭といふものとかや、御笛に入れたるを忠世もちてまゐれるを關白とりて御前に奉らる。春宮御琵琶牧馬、宮權亮親定もちてまゐりたるを大夫御前におかる。上達部の笛の箱別にあり。笛兵部卿具教、花山院大納言長雅、笙源大納言通頼、左衛門督、篳篥行朝臣、琵琶春宮大夫、琴洞院左大将、三位中将實泰、和琴大炊御門大納言、拍子徳大寺中納言公孫拍子實冬、みな人々直衣にいろいろの衣をいだす。例の安名尊、席田、鳥破急、律青柳、萬歳樂、三臺急、御遊はてぬれば殿上の五位ども参りて管絃の具をわかつ。御方々からぶりたまはり給ふ。道々の師ども加階たまはる。その後和歌の披講はじまる。為道朝臣もとほしの砲に壺おひて弓に懐紙をとりぐして、上達部の座のまへをとほりて階の間より入りて文臺の上におく。その外の殿上人どもの歌はひとつにとり集めて信輔一度に文臺におく。文臺の東に圓座をおきて春宮披講のほど渡らせ給ふ。内宴などいふ事にぞかくはありける。ふるきためしもおぼしろくこそ。上達部みないろいろの衣をいだす。右大将通基魚綾の山吹の

衣着たまへり。笏に歌をもち具したまふ。内のうへの御歌は殿ぞかき給ひける。

「行く末をなほながき世と契るかなやよひにうつるけふの春日に」。

新院の御製は内大臣かきたまふ。

「百色といまや鳴くらむうぐひすもこゝのかへりの君がはるへて」。

春宮のは左大将にかゝせらる。

「かぎりなきよはひはいまだ九十なほ千世とほき春にもあるかな」。

製に應ずと上文字載せられたるも内宴のためしとかや。次々例のおほけれどむづかしくてもらしつ。春宮大夫こそいとうけばりてめでたく侍りしか。

「代々の跡になほ立ちのぼる老の波よりけむ年はけふのためかも」。

その後東向のまりのかゝりある方へ渡らせ給ふ。御方々の女房いろいろのきぬ、昨日には引きかへてめづらしき袖口を思ひ思ひにおしいでたり。紫のにほひの山吹、おなじにほひの薄紅梅、櫻萠黄などは女院の御あかれ、内の御方は内侍典侍よりしも皆松襲玄ろかうし、うら山吹、院の御方えびぞめに玄ろすぎ、かばざくらの青すぎ、春宮の女房うへ紫かうし柳などさまざまにめもあやなる清らを盡されたり。おなじ文も色もまじらず、こゝろごゝろにかはりていみじうぞ侍りける。後嵯峨院、蓮華王院御幸ありし時、兩貫首おなじやうに藤の下重山吹のうへの袴なりしをばいと念なき事に世の人もいひ侍りしにや、御方々の女房ども、八十餘人おしこみてさぶらはるゝ、いづれともなく目うつりしていみじうかたちもけしきもめ

やすくもてつけたり。後鳥羽院建仁のためしとて新院御上、鞠三足ばかりたゝせ給ひて落されぬ。内のうへ御直衣、紺地の御袴、始めは御草鞋を奉りけれど、後には御沓かたあしかはりの御ぞたうづ、おなじ色革の御ぞたうづ、新院織物の御直衣、御指貫、紋なき紫の御ぞたうづ、關白殿紋なきふすべ革、内のおとゞ紫革に鞘をぬひたり。藤大納言爲氏無紋のふすべ革、その外色々錦皮、藍皮、藍白地おのおのけぢめわかるべし。爲兼紫革、爲道は藍ぞらぢなりけり。爲兼とは爲氏の大納言のをとゝ兵衛督爲敎といひしが子なり。爲道は大納言の孫爲世の太郎なり。はなれぬ中にていとたくいどみかはしたり。内のうへは白骨の御扇左の御手にもたせ給ひて、花のいみじくおもしろき木陰に立ちやすらひ給へる御かたちいとゆゝしきまで清らに見え給ふ。飽かず名殘おほくおぼさるれど、春の司召御燈などいふ事どもあれば行幸はこよひ歸らせ給ふ。御贈物に御本まゐる。明くる日午の時ばかり寢殿より西園寺まで筵道ぞさして兩院御ぞぼうし直衣春宮御くゝりあげて堂々拜ませ給ふ。左衛門督新院の御はかせもたまへり。權亮親定春宮の御はかせもたれたり。妙音堂に御まゐりあるに、遲き櫻一木ほころびそめて今日の御幸を待ちがほなり。佛の御まへにかりそめの御ましながら皆渡らせたまふ。庇に上達部つきて御遊の具めす。笛花山院大納言、笙左衛門督、篳篥兼行、春宮御琵琶、大夫等、大鼓具顯、鞨鼓範藤、盤渉調にぞらべとゝのへて採桑老、蘇合、白柱、千秋樂などいみじうおもしろし。うるはしき事よりもなかなかえんなり。兼行、「花上苑明なり」と打ちいだしたるに、い

とゞ物の音もてはやされてえもいはずきこゆ。具顕範藤など「羅綺重衣」と二返ばかりいへるに「情なき事を機婦にねたみ」と本院くはへ給へば新院御聲たすけ給ふほどそゞろ寒きまで艶なり。歸らせ給ひても又昨日の花のかげにて鞠御覧ぜられつゝ、それよりやがて御船に奉りておしいでたれば遙なる海づらに漕ぎ離れたらむ心ちしていとをかし。小さき船に上達部乗りてはしにつけられたり。ありつる妙音堂の調子をうつされてありつるおなじ人々つかうまつる。春宮また御琵琶箏のことは右衛門督といふ女房御船にまゐれるに彈かせらる。船の中のえらべはいとえんなり。蘇合の五帖、輪臺、青梅波、竹林樂、越殿樂など幾返ともなくおもしろし。兼行「山又山」などうちずんじたるに「變態繽紛たり」と兩院おそばしたるに、水の底もあやしきまで身の毛だちぬべくきこゆ。中島に御船さしとめて見れば、舊苔年ふりたる松が枝さしかはせる岩のたゝずまひいとくらかりたるに、池の水なみ心のどかに見えて名もえらぬ小鳥どもみだれ飛ぶけしき何となくをかし。遠きさかひに望める心ちするに、めぐれる山の瀧つ岩根遙にかすみて見渡さるゝほど、やまびとの洞もかくやとぞおぼゆる。「二百千里の外の心ちこそすれ」などのたまひて、新院、

「雲のなみ煙の浪をわけてけり」。

たれにかあらむ女房の中より、

「ゆくすゑとはき君がみ代とて」。

春宮大夫、

「昔にもなほたちこゆるみつぎ物」。

具顕の中将、

「くもらぬかげもかみのまにまに」。

春宮、

「九十になほもかさぬる老のなみ」。

本院、

「たちゐくるしき世のならひかな」。

暮れはつるほどに釣殿へ御船寄せておりさせ給ひぬ。春宮こよひ歸らせ給へば御贈物に和琴一つ奉らせ給ふ。まことや准后にもけいくわ和尚の三衣、紺地の錦につゝみて玄ろがねの箱に入れてまゐる。いづれも大宮院の御沙汰なり。掃部寮火しげうともしてうち群れつゝ居たるさまもなまめかしうみやびかなり。こゝかしこにもこの御賀のことども書きつけ玄る す人のみぞ多かめれば片はしだにいとかたくならむとおぼさまし。何となく過ぎ行くほどに弘安も十年になりぬ。この御門位に即かせ給ひて十三年ばかりになりぬらむ。本院待遠におぼさるらむといとはしく推し量り奉るにや、例の東より奏する事あるべし。新院の御方ざまには心ぼそうきこしめしなやむべし。去年の春御乳母の按摩の二位殿うせにしかば、一めぐりの佛事に龜山殿へおはしましていかめしう八講行はせたまふ日、雪いたう降りければ、九條三位隆博檜扇のつまを折りて、

「跡とめてとはるゝ御代のひかりをや雪の中にもおもひいづらむ」。女房の中にきこえたるを院御らんじてかへしにのたまふ。

「なき人のかさねし罪もきえねとて雪のうちにもあとをとふかな」。よろづ飽かずおぼさるゝほどなれど、その年の十月におりゐさせ給ふ。もとのうへは廿一にぞならせ給ひける。御本性もいとうるはしくのどめたるさまにおぼして、すくよかに御才もかしこうめでたうおはしませば、御政事などもやうやうゆづりや聞えましなどおぼされつるに、いとあへなくうつろひぬる世をすげなく新院はおぼさるべし。春宮位に即き給ひぬれば天下本院におしうつりぬ。世の中おしわかれて人の心どもゝかゝるさはにぞあらはれける。今の御門にも故山階のおとゞの御うまごにてわたらせ給へば、かの殿ばらのみぞいづ方にもすさめぬ人にておはしける。

第十三　けふの日影（五字傍題）

正應元年三月十五日官廳にて御即位あり。このほどは香園院の左のおとゞ師忠關白にておはしき。その後近衛殿家基、又九條左大臣殿忠教、その後又近衛殿かへりなり給ひき。猶後に歡喜園院などいと去げうかはり給ふ。おりゐの御門を今は新院ときこゆれば、太上天皇三たり世におはします頃なり。いとめづらしく侍るにや。御門の御母三位去たまふ。その御はらからの姫君御傍にさぶらひ給ふを、うへいと忍びたる御むつびあるべし。「東二條院の御ためしにや」などさゞめく人もあれど、さばかりうけばりてはえしもやおはせざらむ。三位殿の御せ

うとの公守の大納言の姫君もをさなくよりかしづきて侍ひ給ふ。それもよそならぬ御契なるべし。この君をぞ父の殿もいとうるはしきさまにても參らせまほしうおぼしつれど、西園寺の大納言實兼の姫君いつしか參り給へばさしろふべきにもあらず。その年六月二日入内あり。その夜まづ御もぎ式たまふ。「さきの御代にもあらましは聞えしかど、いかなるにかさもおはせざりしに、いつしかかうもありけるは猶おぼす心ありけるなめり」とうちつけにひがひがしういひなす人も侍りける。この姫君の母北の方は三條坊門通成の内のおとゝのむすめなり。さぶらふ人々もおしなべたらぬかぎりえりとゝのへ、いみじう清らにとおぼしいそぐ。よろづ人の心も昨日に今日はまさりのみゆくめれば、いやめづらにこのましうめでたし。大かた大宮院の御まゐりの例をおぼしなずらふべし。院の御子にこれも又なり給ふとて東二條院御こしいはせ給ひて時なりぬれば唐廂の御車にたてまつりて上達部十人、殿上人十餘人、本所の前駈二十人、つい松ともして御車の左右にさぶらふ。出車十輌、一の左に母北の方の御妹一條殿、右に二條殿、實顯の宰相中將のむすめを大納言子に玄給ふとぞ聞えし。二車、左に久我大納言雅忠のむすめ三條とつき給ふをいとからい事に歎き給へど、皆人先だちてつき給へれば、おきたるまゝとぞ慰められ給ひける。右に近衛殿、「源大納言雅家の女なり。三の左には大納言の君、室町の宰相中將公重のむすめ、右に新大納言、おなじ三位兼行とかやの女なり、四の左には宰相の君、坊門の三位基輔のむすめ、右は治部卿かねとものの三位のむすめなり。それより下は例のむつかしくてなむ。多くは本所のけいし何くれがむすめど

もなるべし。わらは去もづかへ御ざうしはしたものに至るまで髪かたちめやすく、おやうち具し、少しもかたはなるなくとゝのへられたり。その暮つかた。頭中將爲兼朝臣御消息もてまゐれり。内のうへみづからあそばしけり。

「雲のうへに千代をめぐらむはじめとてけふの日かげもかくや久しき」。

紅の薄樣、おなじ薄樣にぞつゝまれためる。關白殿つゝむやう知らずとかやのたまひけるとて、花山に「心えたる」と聞かせ給ひければ「つかはして包ませられける」とぞ承りし」とかたるに、又此具したる女「いつぞやは御使實敎の中將とこそは語り給ひしか」といふ「女御のよそひは蘇芳のはり一重がさね、濃き裏のひへぎ、濃き蘇芳の御うはぎ、赤色の御唐衣、濃き御はかま地摺の御裳奉る。女房のよそひおしなべて皆蘇芳のはり一重がさね紅のひへぎ、濃き袴、蘇芳のうはぎ、青朽葉の唐衣、薄色の裳、三重だすき、上下同じさまなり。まゐり給ひぬれば、藏人左衞門權佐俊光うけたまはりて手ぐるまのせんじあり。殿上人參りて御車にひき入る。御せうとの中納言公衡別當かね給へり。うへの御甥の左衞門督通重御せうとになずらふるよし聞ゆれば御屏風御几帳たてらる。日の御座へ御車よせらる。御禊二位殿參らせ給ふ。御だいまゐりて夜のおとゞへまうのぼり給ふ。この御禊は、京極院のめでたかりし例とかや聞えて、公守の大納言沙汰し申されけるとかや承りしはまことにや侍りけむ。三ケ夜のもちひもやがてかの大納言沙汰し申さる。内の上の夜のおとゞへ召して、入らせ給ひたる御さうがいをば二位殿とりて出でさせ給ひて、大納言殿と二人の御中に抱きて寢給ふと聞えし。さ

きざきもさる事にてこそ侍りけめ。八日御所わらはしとてうへ渡らせ給へば、袖口ども心ことにてわざとなくおしいださる。今日はおのおの紅のひとへがさね、青朽葉のうはぎ、二藍のから衣なり。大納言殿もさぶらはせ給ふ。うへも御だいまゐる。二位殿御陪膳、女御のは一條殿つかまつり給ふ。女御の君は蘇芳のはり、一重がさね、紅のひへぎ、青朽葉のうはぎ、赤色のから衣、二重おりもの、からのうすものゝ御裳、濃き綾の御袴、御ぐしいとうるはしくて盛にねびとゝのはり給へるいと見所おほくめでたし。御供に参り給へる人々、右大臣、内大臣、大納言左大将、花山院中納言、權大夫、殿上人どもあまたこゝかしこのうちはしわたどのなどにけしきばみつゝ群れ居たるも艶なる心ちすべし。上達部のけん盃はてゝ後、内の御方のめのとをはじめて内侍女官どもかない（元）殿まで祿賜はる。十日の夕つ方下大所の御らんあり。臺盤所の北の御壺へまゐる同じそばのまにて内の御方御らんぜらる。やがて東面より女御も御らんず。二位殿一條殿二條殿をはじめて上臈だつ人々あまたさぶらひ給ふ。御簾のとにも上達部あまたさぶらはる。いとはればれし。十四日又うちのうへ入らせ給ひて、こなたにて始めて御みきこしめせば南おもてへ出でさせ給ふ。女御蘇芳の御ひとへがさね、はぎのたてわをの御うはぎ、朽葉の御小袿、みな二重織物、綾の織物、すゞしの御袴、御紋竹たてわきをおる。うへは御ひきなほし、すゞしの御袴、櫪子まゐる。御陪膳は一條殿、今日よりはうちとけたる心ちにて女房どもいろいろの一重がさね、唐衣、さまざまめづらしき色どもをつくして、すゞしの袴に着かへたる今すこし見所そひなつかしきさまなり。とくせん櫪

子をもてまゐる、次第にとりつぎてまゐらす。かねの御ごき、ゑろがねの片口の御銚子、一條殿御陪膳、その後女御殿も御銚子にてかけさせ給ふ事侍りけり。今宵二位殿今出河へまかで給うて車の宣旨ゆりたまふ。御おくりには御子の公衡の中納言、御甥の通重の左衛門督など殿上人どもあまたなり。縫殿の陣より出で給ふけしきいとよそほし。まことや御入内の夜の御使勾當の内侍まゐれりし祿に、うはぎ唐衣をたまはる。御せうそこの御使にまゐれりしうへ人も女の裝束かづきながら歸り參りて殿上の口におとしすつ。とのもりつかさぞとるならひなりける。後朝の御使には公貫中將なりし、公衡の中納言對面してけん盃の後これも女の裝束かづけらる。かくて八月二十日后に立ち給ふ。かねてより今出川の御家へまかで給ひて、節會の儀式ひきうつし待ちとり給ふさまいとめでたく今さらならぬ事なれど、父の殿もつひの御位はさこそなれど、只今さしあたりてはいまだ淺くおはするに、すがやかに后妃の位に定り給ふ事かぎりなき御世のおぼえとめでたく見ゆ。大宮院、本院、東二條院皆わたりおはしまして見奉り給ふさへぞやんごとなき。今日は紅のはり、ひとへがさね、ひへぎ、をみなへしのうはぎ、二藍の唐衣、薄色の裳、すべて二十人おなじ色のよそひなり。この外いぎの女房八人、白きはり一重がさね、濃きひへぎ、おなじはかま、女郎花の衣にてさぶらふ。いづれとなくかたちども清げにめやすし。その年の十一月八日ぞ后の宮の御父右大將になり給ひぬる。おなじき廿五日正二位ゑたまふ。この程は大嘗會五節などのゝしる。ささの御世にはひきかへて中宮、皇后宮、院たちあかれあかれに多くおはしませば殿上人ども推參の所お

ほく、頭痛さまでめぐりありく。その年の十二月に御門の御母三位殿院號ありき。朝に准后の宣旨ありて同じき日の夕に玄輝門院と申す。めでたくいみじかりき。年かへりて正應も二年になりぬ。よろづめでたき事ども多くて三月廿三日鳥羽殿へ朝覲の行幸なる。本院はかねてより鳥羽殿におはしまして池の水草かきはらひ、いみじうみがゝれて例のことごとしきからの御船浮められて、廿四日に舞樂ありき。廿六日にぞ歸らせ給ひける。さても去年の三月三日かとよ、常氏の宰相のむすめの御腹に若宮いできさせ給へりしを太子に立て奉らせ給ふいとかしこき御宿世なり。中宮の御子にぞなし奉らせ給ひける。おなじうはまことにておはせましかばとぞ大將殿など思しけむかし。おりゐの御門も御子あまたおはしませば、坊になどおぼしけるをひきよぎぬるいとはいなし。十月二十五日、一院の御所にてまなきこしめす。いとめでたき事どものゝしり過ぎもてゆく。おなじき三年三月四日五日の頃、紫宸殿の獅子狛犬中よりわれたり。驚きおぼして御占あるに「血流るべし」とかや申しければ、いかなる事のあるべきにかと誰も誰もおぼしさわぐに、その九日の夜右衛門の陣より、おそろしげなるものゝふ三四人馬に乘りながら九重の中へはせ入りて、上にのぼりて女孺が局の口に立ちて「やゝ」といふに、ものを見あげたれば、丈高くおそろしげなる男の赤地のにしきの鎧直垂に、ひをどしの鎧着て、唯赤鬼などのやうなるつらつきにて、「御門はいづくに御よるぞ」と問ふ。「夜のおとゞに」といらふれば、「いづくぞ」とまた問ふ。南殿よりひんがし北のすみとをしふれば南ざまへ歩みゆく間に女孺内より參りて權大納言典侍殿新内侍殿などにか

たる。うへは中宮の御方に渡らせ給ひければ對の屋へ忍びて逃げさせ給ひて、春日殿へ女房のやうにていと怪しきさまを造りて入らせ給ふ。内侍劔璽を取りていづ。女孺は玄象鈴鹿とりて逃げゝり。春宮をば中宮の御方の按察殿抱きまゐらせて常磐井殿へかちにて逃ぐ。その程の心の中どもいはむ方なし。この男をば淺原のなにがしといひけり。辛くして夜のおとゞへ尋ね參りたれども大かた人もなし。中宮の御方の侍のをさ景政といふもの名のり參りて、いみじく戰ひ防ぎければ、疵かうぶりなどしてひしめく。かゝる程に二條京極のかぢりやびんごの守とかや五十餘騎にて馳せ參りて聞をつくるに、合する聲僅に聞えければ心やすくて内に參る。御殿どもの格子ひきかなぐりて亂れ入るに、かなはじと思ひて夜のおとゞの御しとねのうへにて淺原自害しぬ。太郎なりけるをのこは南殿の御帳の中にて自害しぬ。おとゝの八郎といひて十九になりけるは大ゆかの椽の下にふして寄るものゝ足をきりきりしけれども、さすがおまたして搦めむとすればかなはで自害するとても腸をば皆繰りいだして手にぞもたりける。そのまゝながらいづれをも六波羅へかき續けて出だしけり。ほのぼのと明くる程に、内、春宮御車にて忍びて歸らせ給ひて、晝つかたぞ又更に春日殿へなる。大方雲の上けがれぬればいかゞにて中宮のひの御座へ腰輿よせて兵衛の陣よりいでさせ給ふ。春宮は絲毛の御車にて又常磐井殿へ渡らせ給ふ。中宮も春日殿へ行啓なる。世の中ゆすり騒ぐさまことの葉もなし。この事次第に六波羅にて尋ね沙汰する程に三條の宰相中將實盛も召しとられぬ。三條の家に傳はりて鯰尾とかやいふ刀のありけるを、この中將日頃もたれたり

けるにてかの淺原自害したるなどいふ事ども出できて、中院もゑろしめしたるなどいふ聞えありて心うくいみじきやうにいひあつかふ、いとあさまし。中宮の御せうと權大納言公衡一院の御まへにて「この事は猶禪林寺殿の御心あはせたるなるべし。後嵯峨院の御そぶんを引きたがへ、あづまよりかく當代をもする奉り世をゑろしめさする事を心よからずおぼすによりて世をかたぶけ給はむの御本意なり。さてなだらかにもおはしまさばまさる事や出でまうでこむ。院をまづ六波羅にうつし奉らるべきにこそ」などかの承久のためしも引きいでつゞく申し給へば、いといとはしうあさましと思して「いかでかさまではあらむ。實ならぬ事をも人はよくいひなすものなりかし。故院のなき御影にもおぼさむ事こそいみじけれ」と涙ぐみてのたまふを、心弱くおはしますかなと見奉り給ひて猶内よりの仰などきびしき事ども聞ゆれば、中の院も新院もおぼし驚かせ給ふ。いとあわだゝしきやうになりぬれば、いかゞはせむとてゑろしめさぬよし誓ひたる御せうそこなどあづまへ遣されてのちぞ事ゑづまりにける。さてなが月の初つかた中の院は御ぐしおろさせ給ふ。いと哀なる事ども多かるべし。禪林寺殿にてやがて御如法經など書かせ給ふ。一院の世の中恨みおぼされし時既にと聞えしはさもおはしまさでかくすがやかにせさせ給ひぬるいとさだめなし。ゑばしは禪僧にならせ給ふとてろうさうの御衣にくわらといふ袈裟かけさせ給へり。四十一にぞものし給ひける。御法名金剛覺と申すなり。新陽明門院はじめ奉りていろいろの御召人ども、らうの御方、讃岐の二位殿などさびしき院に殘りてあるはさまかへあるは里へまかでなどさ

まざまちりぢりになる程いと心細し。中務の宮の御むすめはもとよりいとあざやかならぬ御おぼえなりしかば、世を捨てさせ給ふきはとてもとりわきたる御名殘もなかるべし。禪林寺のうへの院の人はなれたる方にする君聞えさせ給へれば、事にふれていとさびしく心ぼそき御ありさまなるをおのづからことと聞ゆる人もなし。源氏の末の君に中將ばかりなる人、院に親しくつかうまつりなれて家もやがてそのわたりにあれば程近きまゝに、をりをりこの宮の御とのゐなど心にかけてつかまつるを、さぶらふ人々もいとありがたくもと思ふ。宮の御方はこの頃いみじき御盛のほどにてまほにうつくしうおはしますをあたらしう見奉りはやす人のなき事と思ひあへり。七月ばかり風あらゝかに吹き、いなづまけしからず閃きて神なりさわぎ、常よりもおそろしき夜、はかばかしき人もなければ上下いとあわたゞしく心ぼそうおぼし惑ふ。法皇は龜山殿に過ぎにし頃よりおはしませば、近きあたりにだに人のけはひも聞えず。哀なる程の御ありさまにて墨をすりたらむやうなる空の氣色のうとましげなるをながめさせ給ひなどするに、例の中將そぼちまゐりてさぶらひめくもの一二人弓などもたせて「御とのゐつかうまつらせ侍るべし。なにがしも侍のかたに侍らむ」など申すにぞいさゝかたのもしくて人々慰め給ふ。おはします母屋にあたれる廂の高欄におしかゝりて、香染のなよらかなる狩衣に薄色の指貫、うちふくだめたるけしきにて忘めじめと物語しつゝいたう更けゆくまでつくづくとさぶらひ給へば、御簾の中にも心づかひしてはかなきいらへなどきこゆ。曉がたになりぬれば、御几帳ひきよせて御殿ごもりぬるかたはらにい

となれがはに添ひ臥すをとこあり。夢かやとおぼして御覧じあげたれば「年月思ひ聞えつるさまおはけなくあるまじき事と思ひかへさひ、こゝら忍ぶるにあまりぬるほど、唯少しかくて胸をだにやすめ侍らむばかり」などいみじげに聞ゆるは、はやうありつる中将なりけり。いとうたて心うのわざやとおぼすに御涙もこぼれぬ。ちかきてわたり御もてなしのなよびかさなどまして思ひ乱づむべうもなければ、いといとはしうゆくりなき事とは思ひながら、のこりなうなりぬる身のうさのかぎりなうもあるかなとさきの世もうらめしういふかひなき事をおぼしつゞけて「よゝ」と泣きたまふさまいよいよらうたし。見るとしもなき夢のたゞちをうちおどろかす鐘の聲、鳥の音も、人やりならぬ心づくしにえいでやらず、

「おきわかれ行く空もなきみち芝の露よりさきに我やけなまし」。

出でがてにやすらひたるおも影も、何の御めとまるふしもなし。さばかりいみじかりし院の御目うつりに、こよなの契の程やとおぼし知らるゝもつらければいらへも乱給はず。わさましうも心うくもさまざまおぼしみだるゝに御心ちもまめやかに損はれぬべし。按察の君といふ人かたらひとられけるなめり。忍びて御消息乱げう聞ゆるをもいとうたて心づきなうおぼされながら、さてしもはてぬならひにやいと又哀なる事さへものし給ひけり。かゝるにつけてもこの世ひとつにはあらざりける御契の程浅からずおしはかるる。中将も夜と共にあくがれまさりて夢の通路あしもやすめずなりゆく。この御氣色もやうやう乱るさまどになり給へば、空おそろしとて忍びて御めのとだつ人の家などいひなして白川わたりかでや

かにをかしき所用意してゐてわたし奉りつゝ、猶自らはさすがに世のつゝましければ忍びつゝぞ御とのゐしける。そこにてこそ御子もうみ給ひけれ。この中將ざえかしこくて末の世にはことの外にもてなされて、まづ一品して去ばしおはせし頃、御百首の歌に、

「位山のぼりはてゝも峰におふる松にこゝろをなほのこすかな」。

さてつひに内大臣までのぼられき。さて元應のころかとよ、百首歌奉りし中に、

「あつめこし窓のひかりも思ひしよりも身をてらすかな」

とよまれ侍りき。有房と聞えしが、若くての世の事なるべし。新陽明門院も禪林寺殿の去もの放出につれづれとしておはします程に、松殿の宰相中將かねつぐ、いかゞしたりけむ常に參り給ひしほどに、はてにはその宰相中將の御子に世をのがれたる人ありき。その御房におぼしうつりてかぎりなくおぼしたりしほどに、御子をさへうみ給ひき。その姫君は初は富小路の中納言秀雄の北の方にておはせしが、後には歡喜園の攝政ときこえ給ひし末の御子に、基敎の三位の中將と聞えしうへになりてうせ給ふまでおはしき。故女院いとはしくし給ひしかば御そうぶんなどいとまうにありき。さのみかゝる御事どもをさへ聞ゆるこそ、物いひさがなき罪さり所なけれど、よしや昔もさる事ありけりと、この頃の人の御ありさまもおのづから輕き事あらば、思ひゆるさるゝためしにもなりてむものぞと思へば、遠き人の御事は今は何の苦しからむぞとて少しづゝ申すなり」とうち笑ふもはしたなし。「いづらこの頃は誰かあしくおはする」と問へば、「いないなそれはそらおそろし」とて頭をふるもさすが

をかし。「さても岩清水のながれをわけて關の東にも若宮ときこゆる社おはしますに、八月十五日都の放生會をまねびて行ふ。そのありさまことにめでたし。將軍もまうで給ふ、位あるつはもの諸國の受領どもなどいろいろの狩衣、思ひ思ひの衣重ねて出でたちたり。あかはしといふ所に將軍とゞめておりたまふ。上達部はうへのきぬなるもあり。殿上人などいと多くつかまつる（つかうまつれりけり）。この將軍は中務の宮の御子なり。この頃權中納言にて右大將かね給へれば、御隨身ども花を折らせてさうぞきあへるさま都めきておもしろし。法會のありさまも本社にかはらず。舞樂、田樂、師子がしら、やぶさめなどささゞま所に出つけたる事どもおもしろし。十六日にも猶かやうの事なり。棧敷どもいかめしく造り並べていろいろの幔幕などひき繞けて將軍の御棧敷の前には相摸守をはじめそこらの武士どもなみゐたるけしき、さまかはりてこのましううけはりたる心ちよげに、所につけては又なく見えたり。その後いくほどなく鎌倉よりうちさわがしき事出できて、皆人きもをつぶしさゝめくといふ程こそあれ、將軍都へ流され給ふとぞ聞ゆる。めづらしき言の葉なりかし。近く仕うまつるをとこ女いと心ぼそく思ひなげく。たとへば御位などのかはる氣色に異ならず。さてのぼらせ給ふありさまいとあやしげなる網代の御輿をさかさまに寄せてのせ奉るもげにいとまがまがしき事のさまなり。うちまかせては都へ御のぼりこそいとおもしろくもめでたかるべきわざなれど、かく怪しきは珍らかなり。御母御息所は近衛大殿と聞えし御女なり。父みこの將軍にておはしましゝ時の御息所なり。先に聞えつる禪林寺殿の宮の御方も同じ御腹なるべし。文

永三年より今年まで廿四年將軍にて天下のかためといつかれ給へれば、日の本の兵をえたがへてぞおはしましつるに、今日はかれらにくつがへされてかくいとあさましき御有樣にてのぼり給ふ。いといとほしうおはれなり。道すがらも思し亂るゝにや御たゝう紙の音えげう漏れ聞ゆるに、武きものゝふも涙おとしけり。さてこのかはりには一院の御子御母は三條內大臣公親の御むすめ、御匣殿とて侍ひ給ひし御腹なり。當代の御はらからにて今少しよせ重くやんごとなき御有樣なれば、唯受禪の心ちぞする。もとの將軍おはせし宮をば造り改めていみじうみがきなす。つはものゝすぐれたる七人御むかへにのぼる中に、いひぬまの判官といふもの前の將軍のぼり給ひし道もまがまがしければあとをも越えじとて足柄山をよぎてのぼるなどぞ、あまりなる事にや。みこは十月三日御元服えたまひて、久明の親王ときこゆ。おなじき十日の日、院よりやがて六波羅の北の方さきさきも宮のわたり給ひし所へおはして、それよりぞあづまに赴かせ給ふ。同廿五日鎌倉へつかせ給ふにも御關むかへとてゆゝしき武士どもうちつれてまゐる。宮はさくのとれんじの御輿に御簾あげて、御覽じ習はぬゐびすどものうち圍み奉れるたのもしく見給ふ。えのぶをみだれ織りたる萠黃の御狩衣、紅の御ぞ、濃き紫の指貫奉りていとはそやかになまめかし。いひぬまの判官とくさの狩衣、青毛の馬に金のかな物の鞍おきて隨兵いかめしく召し具して御輿のきはにうちたり。都にてたとへば行幸にえかるべき大臣などの仕うまつり給へるによそへぬべし。三日が程はわうばんといふ事、又馬御覽、何くれといかめしき事ども鎌倉うちのけいめいなり。宮の中のかざ

り御調度などは更にもいはず、帝釋の宮殿もかくやと、七寶を集めて磨きたるさま目も耀く心ちす。いとあらまほしき御有樣なるべし。關の東を都の外とておとしむべくもあらざりけり。都におはしますなま宮だちのより所なくたゞよはしげなるにはこよなくまさりて、めでたくにぎはゝしく見えたり。時宗朝臣といひしも又頭おろして法禪光寺の入道とていとたふとく行ひて世にもいろはず、太郎貞時相模の守といふにぞ萬いひつけゝる。さてものぼり給ひにし前大將殿は嵯峨のほとりに御ぐしおろし、いとかすかに寂しくてぞおはしける。かくて年かはりぬれば、その年きさらぎの頃一院御ぐしおろし給ふ。年月の御本意なれどたゆたひ過し給ひけるに、禪林寺殿去年の秋思し立ちにしに、いとゞ驚かされ給ひぬるにやありけむ。二月十一日龜山殿にて御いむ事うけさせ給ふ。四十八にぞなら せ給ふ。御法名素實と申すなり。む月の朔日節會などはてゝ夕つ方、內のうへ皇后宮の御方へ渡らせ給へれば、中宮は濃き紅梅の十二の御ぞにおなじ色の御ひとへ、紅のうちたる萌黃の御上着、あひ染の御小袿、花山吹の御唐衣、からの薄物の御裳けしきばかりひきかけて御ぐしぞ少しうすらぎ給へれどいとなよびかに美くしげにて、常より殊に匂加はりて見え給ふ。御まへに御匣殿、花山院內大臣師繼のむすめ、二藍の七つに紅のひとへ、紅梅のうはぎ、赤色の唐衣、地摺の裳、髮うるはしく上げて侍ひ給ふ。かんざしやうだい、これもけしうはあらず見ゆ。新しき年の御悅など少し聞え給ひて例のたゞならぬ御事どもうちさゝめきがちにて、これより公守の大納言のむすめの曹子さしのぞかせ給へば、いとさゝやかにて衣がちにて花櫻のあはひにはは

しきに山吹の上着の裳ひきかけて寄り臥し給へるあてにらうたし。こまやかにうちかたらひ聞え給ふ。玄輝門院の御そばにかしづき聞え給ひしならひにや、おしなべてのうひ宮仕のさまよりは思ひわかれる氣色なり。今一所の御曹子も近き程なれば、そなたざまに歩みおはしていと心しづかならねど、この君をばおしなべてのきはならずおぼすめり。この御腹にみ子達あまたおはしましき。かくめぐらせ給ふ程にいたく更けてぞ中宮のぼらせ給ふ。この御代にもいみじき行幸どもゆゝしき事多かりしかど、年のつもりに何事もさだかならず。月日などおぼろに侍ればなかなか聞えず。程なく明けくれて永仁も六年になりぬ。七月廿二日春宮に御位ゆづりており給ひぬ。霜月になりて五節の頃去年をおぼしいでゝ、そのをりに關白にておはせし兼忠のおとゞに櫛つかはすとて、新院、

「をとめこがさすやをぐしのそのかみにともになれこし時ぞわすれぬ」。

御かへし、歡喜園前攝政殿、

「いとゞ又こぞのこよひぞ玄のばるゝつげのをぐしを見るにつけても」。

堀川の具守のおとゞのむすめの御腹に前の新院の若宮生れ給へりし。六月廿七日御元服玄給ひて八月十日春宮に立ち給ひぬ。御諱邦治とぞこゆ。これも内よりは御年三つまさり給へり。今の御門は十一になり給ふ。御諱胤仁とぞこゆ。あてになまめかしうおはします。中宮の御腹には大かた宮もものし給はねばこの御門をぞ御子に玄奉らせ給ひける。讓位の後は中宮もおりさせ給ひて永福門院と聞ゆめり。皇后宮も此頃は遊義門院と申すなり。法皇の御傍

におはしましつるを中の院いかなるたよりにかはのかに見奉らせ給ひて、いと忍び難くおぼされければ、とかくたばかりて盗み奉らせ給ひて冷泉萬里小路殿におはします。またなく思ひ聞えさせ給へる事かぎりなし。正安二年正月三日御門御元服あり給ふ。今年十三にならせ給へば御行く末はるかなる程なり。又の年む月の頃、内侍所の御あめのをり給へるはいかなるべき事にかなど忍びてさゝめく程こそあれ、東よりの御使のぼるとてまことの中さわぎて禪林寺殿みたてまつり給ふ世にとや、正月廿一日春宮御位に即かせたまひぬ。おりゐの御門御年十四にて太上天皇の尊號あり。いときびはにいたはしき御事なるべし。僅に三とせにておりさせ給へれば何事のはえもなし。この春は春日祉に御幸などあるべしとて世の中まだきよりおもしろき事にいひあへりつるも、かいなめりていとさうざうし。さてこの君を新院と申せば父の院をば中院ときこゆ。御門の御父は一の院と申す。法皇もこの頃一所にはしますなめり。一院世の政事聞しめせば天下の人又おしかへし一かたになびきたる程もさもめの前に移ろひかはる世の中かなとあぢきなし。土御門の前の内のおとゞ定實、六月に太政大臣になり給ふいとめでたし。故大納言入道顯定の本意なかりし御おもておこしたまへるいとゆゝし。院の御おぼえの人なるうへ、ざえもかしこくおはすれば世に用ゐられ給へり。御子の大納言雅房中納言親定とていづれも才ある人にておはしき。持明院殿には世の中すさまじくおぼされて伏見殿に籠りおはしますべくのたまへれど、二の御子坊にさだまり給へば又めでたくてならかにておはしますべし。先に聞えつる御母女院の御はらからの姫

君顯親門院と聞えし御腹なり。八月十五日まづ親王になし奉らせ給ひて同廿四日に春宮に立ち給ひぬ。かくて新帝は十七になり給へば、いとさかりにうつくしう、御心ばへもあてにけだかうすみたるさまして玄めやかにおはします。三月廿四日御即位、この行幸の時花山院三位中將家定、御劔の役をつとめ給ふとてさかさまに內侍に渡されけるを、今出川のおとゞ御らんじ咎めて出仕とゞめらるべきよし申されしかど、應司の大殿「なかなかさたがましくてあしかりなむ。たゞおとなくてこそ」と申しとゞめ給へりしこそなさけ深く侍りしか。後に思へばげにあさましきことの玄るしにや侍りけむ。十月廿八日御祓、この度の女御代にも堀川のおとゞの姫君いで給へり。今のうへも源氏の御腹にてものし給ふ。いとめづらしくやんごとなし。されどうけばりたるさまにはおはせぬぞ心もとなかめる。又の年は乾元元年六月十六日龜山殿へ行幸あり。法皇いと珍らしくうつくしと見奉らせ給ふ。曉歸らせ給ひぬるのち、法皇より內に聞えさせたまふ。

「玄たはるゝなごりにたへず月を見れば雲のうへにぞかげはなりぬる」。

御かへし、內のうへ、

「君はよし千とせのよはひたもてればあひみむことのかずも玄られず」。

一院は忠繼の宰相のむすめの中納言典侍殿といふ腹にも、男女み子だちあまたものし給ふ中にすぐれ給へる內親王をいとかなしきものにかしづき聞えさせ給ふ。この御代にもまた爲世の大納言うけたまはりて撰集あり。新後撰集とぞこゆ。嘉元元年ひろうせらる。かくて

又の年春の頃より東二條院御惱み日々におもり給ひて今はと見えさせ給へば伏見殿へいでさせ給ひて遂にうせさせ給ひぬ。七十にあまらせ給へばことわりの御事なり。法皇もその御なげきの後、をさをさ物聞しめさずなどありしをはじめにて、うち續き心よからず御わらはやみなど聞ゆる程に七月十六日二條富小路殿にてかくれさせ給ひぬ。六十二にぞならせ給ひける。いとあはれに悲しき事どもいへばさらなり。御孫の春宮もひとつにおはしましつれば急ぎて外へ行啓なりぬ。御修法の壇どもこぼこぼと毀ちて、くづれいづる法師ばらの氣色まで今をかぎりととぢめはつる世のありさまいとかなし。宵過ぐるほどに六波羅の貞顯憲時二人御どぶらひに參れり。京極おもての門の前に床子に去りかけてさぶらふ。隨ふものども左右になみゐたるさまいとよそほしげなり。又の日夜に入りて深草殿へいでわたし奉る。御車さしよせて御くわん乘せ奉るほど、うちどよみわひたるひとことわりに心をさむる人もなし。院の御まへ宮たちなどわらぐつとかやいふもの奉りて門まで御送つかまつらせ給ひて、とみにもえのぼらせ給はず、御直衣の袖をおしあてゝ遥に程經てぞ御車にたてまつりて伏見殿への御おくりもせさせ給ひける。院のうちゆゝしきまでなきあへり。後深草院とぞきこゆる。御日數のほどは伏見殿に宮だち遊義門院などおはします。秋さへふかくなり行くまゝによとともの御涙ひる間なくおぼしまどふ。遊義門院、

「物をのみ思ひねざめにつくづくとみるもかなしきともし火の色。

春きてしかすみのころもほさぬまにこゝろもくるゝ秋ぎりの空」。

年かへりぬれば嘉元も三年になりぬ。萬里小路殿の法皇またなやみとて龜山殿へうつらせ給ふ。いろいろに御修法やなにくれ御祈どもこちたくせさせ給へるもをるしなくて、九月十五日のあけぼのに終にかくれさせ給ひぬ。去年今年の世のさがなさ、うち續きたる人々の御歎どもいはむかたなし。世を背かせ給ひにし始つかたは、いとさはたけうひじりだちて女房など御まへにだに參らぬ事なりしかど、後にはおりしより猶たはれさせ給ひし程に、永福門院の御さしつぎの姫君はや御さかりも過ぐる程なりしを、この法皇にまゐらせ給へりしが、かひがひしく水の白浪にわかやがせ給ひて、やがて院號おりしかば昭訓門院とぞきこえつる。その御腹におとゝしばかり若宮生れ給へるをかぎりなくかなしきものにおぼされつるに、今すこしだに見奉らせ給はずなりぬるをいみじうおぼされけり。さてしもわらはなければ、おなじ十七日に御わざの事せさせ給ふ。ことわりといひながらいといかめしう人々仕うまつり給ふ。網代びさしの御車、前右大臣殿よせさせ給ふ。ゑばうし直衣、袴ぎはにて參りたまふ。院のうへも庭におりさせ給ふ。法親王たち三人、山の座主、聖護院、十樂院、法親王などはわらうづをぞ奉る。上の山まで御供せさせ給ふ。上達部には前右大臣公衡、西園寺大納言公顯、萬里小路大納言師重、源中納言有房、三條前中納言、宗氏の二位、重經の二位、爲雄の宰相、經守、爲行、親氏などなり。殿上人には賴俊朝臣、忠氏、爲藤、國房、經世、泰忠、光忠、皆狩衣の袖をゑぼりしぼりまるる氣色さへあはれをそへたり。院も御供にひきさがりて參り給ふ。花山院權大納言、西園寺中納言、土御門大納言、御子親實の少將、御太刀持ちて御供せ

られたり。よそほしかりつる御おりさまもいとほどなく唯時の間の煙にてのぼり給ひぬれば、誰も誰も夢の心ちしてはのぼのと明けゆく程におのおのまかで給ふ。三條大納言入道公貫、萬里小路大納言師重などはとりわき御志ふかくて御だびのはつるまで墨染の袖を顔におしあてつゝさぶらひたまふ。かねてより山道つくられて、木草きりはらひなどせられつれど露けさぞわけむ方なき。涙の雨のそふなるべし。内よりの御使に始め長親朝臣、雅行、有忠朝臣など三度まゐる。ふるき例なるべし。おなじき廿八日、院の上御素服たてまつる。おはします殿には黒き絲にてあみたる簾をかけらる。淺黄べりの御座にうへの御ぞ黒く、うへの御袴裏はかんじ色、御下がさねもくろし。おなじひへぎ、淺黄の御ひわふぎ、御だいまゐるも皆黒き御調度どもなり。この御序に御方々も御素服たてまつる、人數昭訓門院、昭慶門院は御むすめ、近衛殿の北政所、關白殿の北政所、良助法親王、覺雲、順助、慈道、性惠、行仁、性融法親王だち上達部もお山の御供ぞたまふ。人々みなもれず。院の二の御子の御母も近頃は法皇召しとりて、いと時めかせて准后など聞えつるも思ひ歎き給ふべし。昭訓門院やがて御ぐしおろし給ふ。法皇は五十七にぞならせ給ひける。御骨もこの院に法花堂をたてゝをさめさせ給へば、龜山院とぞ申すべかめる。禪林寺殿をば坐しましゝ時より禪院になされき。南禪院といふはこれなめり。院の二のみこ、忠繼の宰相の女、今は准后と聞ゆる御腹におはします。このころ帥宮と聞ゆるを、法皇とりわき御傍さらずならはし奉りたまひて、いみじうらうたがり聞えさせ給ひしかば、人より殊におぼし歎くべし。頃さへぞぐれがちなる雲のけしきに

山の木の葉も涙おらそふ心ちしていとかなし。所がらしもいといあはれをそへたり。川浪のひゞき、となせの瀧の音までもとり集めたる御心の中どもなり。御日數のほどは帥の宮ひとつ御腹の内親王などもこの院におはしますほどつれづれなるまゝに、はかなし事など聞えかはして花紅葉につけてもむつましくなれ聞え給ふべし。帥の御子は大多勝院に西の廂にわたらせ給ふ。御まへの松の木にはひかゝれる蔦の紅葉のいたう染めこがしたるをとりて、九月三十日の夕つかた昭訓門院の御方へ奉らせたまふ。

「あすよりの玄ぐれも待たで染めてけり袖の涙や蔦のもみぢ葉」。

木の葉よりももろき御涙はましていとゞせきかね給へりし。御かへし、

「よもはみな涙のいろにそめてけり空にはぬれぬ秋のもみぢ葉」。

あはれに見奉らせ給ひつゝ名殘もいみじくながめられて高欄におしかゝり給へる、夕ばへの御かたちいとめでたし。ありつる紅葉を西園寺大納言公顯のとのゐ所へつかはす。

「雨とふるなみだの色や此ならむ袖よりほかにそむるもみぢば」。

女院の御せうとなれば、玄めやかなる御山ずみの心ぐるしさにさぶらひ給ふなりけり。御返事、

「いく玄はか涙の色のそめつらむ今日をかぎりの秋のもみぢ葉」。

時雨はしたなく風荒らかに吹きて暮れぬれば、宮は内に入り給ひて御殿油近くめして、晝御覽じさしたる御經など讀み給ふほどに若殿上人どもうちつれてこなたの御とのゐにまゐれ

り。萱のつたの葉の散りそひたるを人々見るに、宮「それにおのおの歌書きて」といまたへば

中將爲藤朝臣、

「もみぢ葉になくねはたえずうつせみのからくれなゐも涙とや見む」。

清忠朝臣、

「やま姫のなみだの色もこのごろはわきてやそむるつたのもみぢ葉」。

光忠朝臣、

「世の中のなげきの色をおらねばやこぞにかはらぬつたのもみぢ葉」。

これらをとりあつめて北殿の内親王の御方へ奉らせ給へれば、

「さすがなほ色は木の葉にのこりけりかたみもかなし秋のわかれ路」。

雨うちそゝぎてけはひおはれなる夜、いたう更けて帥宮例の北殿へ參り給へれば、姫宮も御殿ごもりぬ。さぶらふ人々もみなおづまりぬるにや格子などたゝかせ給へど、あくる人もなければ空しく歸らせ給ふとて、書きてさしはさませ給ふ。

「おのづらながめやすらむとばかりにあくがれきつるありあけの月」。

御かへし、またの日、

「いたづらに待つよひすぎしむらさめは思ひぞたえしありあけの月」。

月日程なくうつりぬれば、院も宮々もおのおのちりぢりにわかれ給ふほど、今すこしものかなしさまさる御心のうちどもはつきせねど、世のならひなればさのみしもはいかゞ。昭慶門

院はおまたの宮だちの御中にすぐれてかなしきものに思ひ聞えさせ給ひしかば、御そうぶんなどもいとこちたし。大井河にむかひて離れたる院のあるをぞ奉らせ給へれば、そこにおはしまし〳〵ほどに川ばたどの〳〵女院など人は申し侍りし。かの所は臨川寺とぞいふめる。都にも土御門室町にありし院、いづれもこの頃は寺になりて侍るめりとぞ、めでたくこそおはれなれ。

第十四　うら千鳥

院のうへは御位におはせしほどはなかなかさるべき女御更衣もさぶらひ給はざりしかど、おりさせ給ひてのちは御心のまゝにいとよく紛れさせ給ふほどに、この程はいどみがはなる御方々かずそひ給ひぬれど、猶遊義門院の御志にたちならび給ふ人はをさをさなし。中務の宮の御むすめもおしなべたらぬさまにもてなし聞え給ふ。すぐれたる御おぼえにはあらねど、御姉宮の故院にわたらせ給ひしよりはいと重々しうおぼしめしかしづきて後には院號ありき。永嘉門院と申し侍りし御事なり。又一條攝政殿の姫君も當代堀川のおとゞの家にわたらせ給ひし頃、上らうに十六にて參り給ひて初つかたはもとゝしの大納言疎からぬ御中にておはせしかば、かの大納言のあづまくだりの後院に參り給ひし程に、ことの外にめでたくて内侍のかみになり給へるむかしおぼえておもしろし。加階去たまへりし朝、院より、

「そのかみにたのめしことのたがはねばなべてむかしの世にやかへらむ」。

御返し、内侍のかんの君頭子とぞきこゆめりし。

「契りこし心のすゑは変らねどもこのひとことやかはらざるらむ」。

露霜かさなりて程なく徳治二年にもなりぬ。遊義門院そこはかとなく御悩みと聞えしかば、院のおぼしさわぐ事かぎりなし。萬に御祈祭祓とのゝしりしかどかひなき御事にていとあさましくあへなし。院もそれゆゑ御ぐしおろしてひたぶるに聖にぞならせ給ひぬる。そのはどさまざまのわれ思ひやるべし。悲しき事どもおほかりしかどみなもらしつ。明くる年の春八幡の御幸の御歸りざまに、東寺に三七日おはしまして御灌頂の御けぎやうとぞ聞ゆる。仁和寺の禪助僧正を御師範にてかの寛平の昔をやおぼすらむ、密宗をぞ學せさせ給ひける。六月には龜山殿にて御如法經かゝせ給ふ。御ぐしおろし給ひて後は大方女房は仕うまつらず。男ぞおりて御臺などもまゐらせ萬に仕うまつる。いつも御持齋にておはします。いとあり難き善智識にてぞ故女院はおはしましける。嵯峨の今林殿にて御佛事なども日々に怠らずせさせ給ふ。この今林は北山の准后の坐せし跡なり。遊義門院の御ぐしにて梵字ぬはせ給へり。かの御手のうらに法華經一字三體に書かせ給ひて攝取院にて供養せらる。大覺寺の覺守僧正御導師なり。故女院の御骨も今林に法華堂建てられておき奉らせ給へれば、月ごとの廿四日には必ず御幸あり。おぼし入りたる程いみじかりき。かくて八月の初つかたより内のうへ例ならずおはしますとて様々の御修法、五壇、藥師、愛染いろいろの秘法ども諸社の奉幣神馬、何かとのゝしり騒ぎつれど、むげにふかくにならせ給ひて廿三日御氣色かはるとて世のひゞきいはむ方なく、馬車はしりちがひ所もなきまで人々は參りこみたれど、いとかひ

なく廿五日子の時ばかりにはてさせ給ひぬ。火の消えぬるさまにて、かきくれたる雲のうへのけしきいはずともおしはかられなむ。まことや中宮は德大寺の公孝のおほきおとゞの御むすめぞかし。めづらしくかの御家にかゝる事のいたくなかりつるに、御おぼえもめでたくてさぶらひ給へるに、あさましともいはむ方なし。廿八日にまかで給ふ。先帝の御わざのさたあり。院號ありて後二條院とぞ聞ゆる。堀川右大將具守御車よせらる。心のうちいかばかりかおはしけむ。大將になり給へるもこの御門の西花門院むつましうも仕うまつり給へるにいとほしき御事なり。御素服を着給はざりしをぞ思はずなる事に世の人もいひさたしける。內侍のかんの君もさまかはり給ふ。中宮も院號ありて長樂門院ときこゆ。よろづ哀なることのみ書きつくしがたし。春宮は正親町殿へ行啓なりて劍璽わたさる。八月廿六日踐祚なり。十二にぞならせ給ふ。夢のうちの心ちにつゝもはどなくすぎうつる。御日數さへはてぬれば讓きせぬわはれさむるよなけれど、人々もおのがちりぢりになる程今一しほたへ難げなり。持明院殿にはいつしかめでたき事どものみぞ聞ゆる。大覺寺殿には遊義門院の御事にうちそへて御涙のひる世なく思さるべし。師のみこの御事をおづまへのたまひ遣したる、相違なしとて九月十九日立太子の節會ありて坊に居給ひぬ。今はと世をとぢむる心ちしつる人々少しなぐさみぬべし。その年十月大なりつるを、保元の例とかやとて十一月朔日に宣下せられたり。あたらしき御代にあたりて月日さへ改まりにけり。十一月十一日御即位あり。攝政は後昭念院殿冬平、今日御悅申ありてやがて行幸に參り給ふ。あるべきかぎりの事ども

ふるきにかはらでめでたく過ぎゆく。延慶二年十月廿一日御禊、おなじ廿四日大嘗會、應長元年正月三日御年十五にて御かうぶりえたまふ。御諱富仁とぞきこゆ。ひきいれには殿、理髪家平つかうまつり給ふ。南殿の儀式はて〳〵御よそひ改めて更にいでさせ給ふ。清涼殿にて御あそびはじまる。攝政殿笋（ふしみといふ名物）右大將公顯琵琶を上、土御門大納言通重笙（きさきに）和琴大炊御門中納言冬氏、笛西園寺中納言兼季、別當季衡笙の笛吹き給ひけり。篳篥公守朝臣、拍子有時、めでたくさまざまおもしろくて明けぬ。五日には後宴とて今すこしなつかしうおもしろき事どもありき。この御門をば新院の御子になし奉らせ給ひてしかば、朝覲の行幸の御拜などもこの御前にてぞありける。廣義門院もおなじく國母の御心ちにてよろづめでたかりき。院のうへさばかり和歌の爲に御名たかくいみじくおはしませば、いかばかりかとおぼされしかども、正應に撰者どもの事ゆゑにわづらひどもありて撰集もなかりしかば、いと〳〵口をしうおぼされて、

「我が世にはあつめぬ和歌のうら千鳥むなしき名をやあとにのこさむ」

などよませおはしましたりしを、いまだにと急ぎたて〳〵せ給ひて爲兼の大納言うけ給はりて萬葉よりこなたの歌ども集められき。正和元年三月廿八日奏せらる。玉葉集とぞいふなる。この爲兼の大納言は爲氏の大納言のをとゝに爲教右兵衛督といひしが子なり。限なき院の御おぼえの人にてかく撰者にもさだまりにけり。そねむ人々おほかりしかどさはらむやは。この院の上好みよませ給ふ御歌のすがたは前藤大納言爲世の心ちにはかはりてなむありけ

る。御手もいとめでたく、「むかしの行成大納言にもまさり給へる」など時の人申しけり。やさしうも強うも書かせおはしましけるとかや。正和も二とせになりぬ。今年御本意遂げなむとおぼさる。なが月の暮つかた賀茂に忍びて御籠のほど、をかしきさまの事ども侍りけり。近くさぶらふ女房どもゝうち玄ほたれつゝ、つごもりがたの空のけしきいとものあはれなるに、御製、

「なが月や木のはもいまだつれなきに玄ぐれぬ袖の色やかはらむ」。

また、

「我が身こそあらずなるとも秋のくれをしむ心はいつもかはらじ」。

人々もさとしぐれわたり、袖のうへ今日かぎりの秋のなごりよりもしのびがたし。大納言爲子、撰者のはらからなり。

「一すぢに暮れゆく秋ををしまばやあらぬなごりを思ひそへずて」。

又たれにか四字イ、

「いかに玄たひいかにをしまむ年々の秋にはまさる秋のなごりを」。

十月十五日、伏見殿へ御幸あり。かぎりのたびとおぼせばえもいはず引きつくろはる。ひさしの御車なり。上達部殿上人數玄らず仕うまつり給ふ。世の政事なども新院にゆづり奉らせ給ひにしかば、御心玄づかにのみ思されて、伏見殿がちにのみぞおはしましゝ程に、そこはかとなく御惱み月日へて文保元年九月三日かくれさせ給ひにき。伏見の院と申しき。御母玄

輝門院、永福門院などゝ御歎思ひやるべし。御門は御輕服の儀なれば天下も色かはらず。この院姫君おまたおはしゝかど院號は章義門院、延明門院ばかりにておはします。二條富小路のむかし院のあとにあづまより造りて奉る内裏、この頃御わたましありしなどいとおもしろかりき。近き事は人皆々御らんぜしかばなかなかにてとゞめつ。

第十五　秋のみ山

文保二年二月廿六日、御門おりゐさせたまふ。春宮は既にみそぎにみたせ給へば、待遠なりつるにめでたくおぼさるべし。法皇都に出でさせ給ひて、世の中をろしめさる。龜山殿はさる事にて、近頃は大覺寺のほとりに御堂たてゝ籠りおはしましつゝ、いよいよ密敎の深き心ばへをのみ勤めまなばせ給へば、おのづからも京にいでさせ給ふ事なく、又參りかよふ人もまれなるやうにてかうさびたりつるを、引きかへ、事しけき世に行も懈怠し給へばむつかしくおぼさる。三月廿九日御即位なり。行幸の當日に左大將内經、花山院右大將家定行列を爭ひて、隨身どもわゝしくのゝしれば、御輿をおさへて、職事さらしくだしなどすめり。左大將の御父君は、内實のおとゞと聞えし。嘉元の頃俄にかくれ給ひしにかば、せふろくもしあへ給はざりしにより、今はたゞ人にてこそいますべければとて、かく爭ふとぞ聞えし。十月廿七日大嘗會、清暑堂の御神樂の拍子のために、綾小路の宰相有時といふ人、大内へまゐり侍るとて、車よりおりられざるほどに、いとすくよかなる田舍侍めくもの、太刀を拔きてはしりよるまゝに、あへなくうちてけり。さばかり立ちこみたる人の中にて、いとめづらかにあ

さまし。さて拍子俄にこと人うけたまはる。大事どもはて〳〵後尋ねさたある程に、かい川の三位顯香といふひと、この拍子をいどみて、我こそつとむべけれと思ひければ、かゝる事をせさせけり。道にすけるほどはやさしけれども、いとむくつけし。さてかの三位はながされぬ。かくて今年はくれぬ。まことやこたみの春宮には、後二條院の一の御子定り給ひぬれば、御門坊にておはしまし〳〵時のまゝに、冷泉萬里小路殿寢殿にうつりすませ給へるに、ささらぎの頃軒ばの櫻さかりにをかしき夕ばえを御覽じて、內に奉らせ給ふ。かの花につけて、

「なれにける花は心やうつすらむおなじのさばの春にあへども」。

御返しは南殿の櫻にさしかへたまふ。

「花はげに思ひいづらむ春をへてわかぬ色香にそめしこゝろを」。

おりゐの御門は、御このかみの本院とひとつ持明院殿にすませ給ふ。もとより御子のよしにておはしませば、まいてひとつ院の內にて、いさゝかもへだてなく聞えさせ給ふ。いと思ふやうなる御ありさまなり。さるべき御中といへども、昔も今も御腹などかはりぬるはいかにぞや。そはそはしき事もうちまじり、くせあるならひにこそあるを、この院の御あはひまめやかにおもはしかはしたるいとありがたうめでたし。本院は廣義門院の御腹の一の御子を、この度の坊にやとおぼされしかど、ひき過ぎぬれば、いとはるけかるべき世にこそと、さうざうしくおぼさるべし。御歌合のついでなりしにや、

「いろいろに都は春のときにあへどわがすむ山は花もひらけず」。

大覺寺殿には、ひきかへ馬車の立ちこみたるを御覽じて、法皇よませたまひける。

「我すめばさびしくもなし山里もあさまつりごとをこたらずして」。

今のうへは、はやうより西園寺の入道おとゞ實兼の末の御むすめ兼孝の大納言のひとつ御腹にものし給ふを、忍びてぬすみ御覽じて、わく方なき御おもひ、年にそへてやんごとなうおはしつれば、いつしか女御の宣旨などきこゆ。ほどもなくやがて八月に后だちあれば、入道殿もよはひのすゑに、いとかしこくめでたしとおぼす。北山にまかで給へる頃行幸ありき。八月十五日の夜、名をえたる月も殊に光をそへたる、所がらをりからおもしろく、めでたき事ども華やかなるに、御姉の永福門院より、今の后の御方へ御消息聞えたまふ。

「こよひしも雲ゐの月もひかりそふ秋のみやまをおもひこそやれ」。

「御返しはまろ聞えむ」とのたまはせて、內のうへ、

「むかし見し秋のみやまの月かげをおもひいでゝや思ひやるらむ」。

みかどのおなじ御腹の前齋宮も皇后宮にたゝせたまふ。御母准后も院號ありて、談てん門院とぞきこゆめる。よろづ華やかにめでたき事ども云ひつゞけ聞ゆ。內には萬里小路大納言入道師重といひしが女、大納言の典侍とていみじう時めく人あるを、堀川春宮の權大夫ともちかの君、いと忍びて見そめられけるにや、かの女かきけちうせぬとて、もとめたづねさせ給ふ。二三日こそあれ。ほどなくその人とあらはれぬれば、うへいとあさましくにくしとおぼす。やんごとなきさはにはあらねど、御おぼえの時なれば、きびしく咎めさせ給ひて、げに須磨の

浦へも遣さまほしきままでおぼされけれども、さすがにてつかさ皆とゞめて、いみじうかうせさせ給へば、かしこまりて、岩倉の山庄にこもりゐぬ。花の盛におもしろきをながめて、

「うき事も花にはえばしわすられて春のこゝろぞむかしなりける」。

すけの君は歸りまゐれるを、つらしとおぼすものから、うきにまぎれぬ戀しさとや、いよいよらうたがらせ給ふを、さしもわらず、さうじみはなほすき心ぞ絶えずありけむかし。

「たえはつるちぎりをひとり忘れぬもうきもわが身の心なりけり」

とてひとりごたれける。すゑざまには公泰の大納言いまだ若うおはせし頃、御心とゆるして給はせければ、思ひかはしてすまれしほどに、かしこにてうせにき。御門の御母女院十一月うせ給ひにしかば、内のうへ御服たてまつる。天下ひとつにそめわたして、葦簾垂とかいとまがまがしきものども懸け渡したるも、あはれにいみじくぞ見ゆる。五節もとまりぬ。若き人々などさうざうしく思へり。當代もまたおさしまの道もてなさせ給へば、いつしかと勅撰のことおぼせらる。前藤大納言爲世うけたまはる。玉葉のねたかりしふしも、今ぞ胸あきぬらむかし。この大納言のむすめ權大納言の君とて、坊の御時かぎりなくおぼされたりし御腹に、一の御子、女三のみこ、法親王などおまたものし給ふ。かの大納言の君はやうかくれにしかば、この頃三位おくらせ給ふ。贈從三位爲子とて、集にもやさしき歌おほく侍るべし。さて大納言は人々に歌すゝめて、玉津島の社にまうでられけり。大臣上達部よりはじめて、歌よむと思へるかぎり、この大納言の風を傳へたるは漏るゝものなし。子ども孫どもなど、いき

ほひことにひゞきてくだる。まづ住吉へまうづ。道遙玄つゝのゝしりて、九月にぞ玉津島へまうでける。歌どもの中に、大納言爲世、

「今ぞ知るむかしにかへるわが道のまことを神もまもりけるとは」。

かくて元應二年四月十九日勅撰は奏せられけり。續千載といふなり。新後撰集とおなじ撰者の事なれば、多くはかの集にかはらざるべし。爲藤の中納言、父よりは少し思ふ所加へたるぬしにて、今すこしこの度は心にくきさまなりなどぞ、時の人々沙汰しける。院にも內にもおさまつりごとのひまひまには、御歌合のみ召げう聞えし中に、元亨元年八月十五日夜かとよ、つねよりことに月おもしろかりしに、うへ萩の戸にいでさせ給ひて、殊なる御遊などもあらまほしげなる夜なれど、春日の御局うつし殿におはします頃にて、絲竹の音らべはをりあしければ、例の唯うちうち御歌合あるべしとて、侍從の中納言爲藤召されて、俄に題たてまつる。殿上にさぶらふかぎり、左右おなじほどの歌よみをえらせたまふ。左內のうへ、春宮大夫公賢、左衛門督公敏、侍從中納言爲藤、中宮權大夫師賢、宰相雅繼、昭訓門院の春日爲世の女右に藤大納言爲世、富小路大納言實敎、洞院中納言季雄、公修、宰相實任、少將內侍爲佐の女、忠定朝臣、爲冬、忠守などいふくすしも、この道のすきものなりとて召しくはへらる。衞士のたく火も月の名たてにやとて、安福殿へ渡らせたまふ。忠定中將、晝の御座の御はかしをとりてまゐる。殿上のかみの戸をいでさせ給ひて、無名門より右近の陣の前をすぎさせたまへば、遣水に月の映れるいと面白し。安福殿の釣殿に障子たてゝ、ひんがし面におはします。上達

部は簀子の高欄にせなかおしあて、、殿上人は庭にさぶらひあへるもいとえんなり。池の御舟さしよせて、左右の講師たかすけ爲冬のせらる。御みきなどまゐるさまも、うるはしきことよりは艶になまめかし。人々の歌いたくけしきばみて、とみにも奉らず。いと心もとなし。照る月なみもくもりなき池のかゞみに、いはねどゑるき秋のもなかは、げにいと殊なる空のけしきに、月もかたぶきぬ。明方ちかうなりにけり。うへの御製、

「鐘のおともかたぶく月にかこたれてをしと思ふ夜はこよひなりけり」

と講じわげたるほど、景陽の鐘もひゞきをそへたるをりからいみじうなむ。いづれもけしうはあらぬ歌ども多く聞えしかど、御製の鐘の音にまされるはなかりしにや。かくて今年もまたくれぬ。明くる春元亨二正月三日朝覲の行幸あり。法皇は御弟の式部卿のみこの御家、大炊御門京極常磐井殿といふにぞおはします。内裏は二條萬里小路なれば、陣の中にて大臣以下かちより仕うまつらる。關白内經、太政大臣道雄、左大臣實泰、右大將兼季、左大將冬教、中宮大夫實衡、中納言には具親、公敏、爲藤、顯實、經定、宰相には實任、冬定、公明、光忠、中將は公泰、資朝、殿上人は頭中將爲定、修理大夫冬方をはじめて、のこるはすくなし。この院も池のすまひ山の木だちもとよりよしあるさまなるに、時ならぬ花の木ずゑをさへ造りそへられたれば、春の盛にかはらず咲きこぼれたるに、雪さへいみじく降りてのこる常磐木もなし。洲崎にたてる鶴のけしきも、千代をこめたる霞の洞は、誠にやまびとの宮もかくやと見えたり。京極おもての棟門に御輿おさへて、院司事のよしをそうす。亂聲ののち中門に御輿をよす。中門

の下よりいづる遣水に、ちひさく渡されたるそりはしの左右に、両大将ひざまづく。劔璽は権亮宰相中将公泰つとめられしにや、関白公卿の座の妻戸の御簾をもたげて、入れ奉らせたまふ。とばかりありて寝殿の母屋の御簾皆あげわたして、法皇いでさせたまへり。香染の御衣、おなじ色の御袈裟なり。御袈裟の箱御そばにおかる。内のうへ公卿の座より高欄をへたまふ。御供に関白さぶらひたまふ。階の間より出で給ひて、廂におまし奉りたれば、御拝したまふほど、西東の中門の廊に上達部おほくたちかさなりて、見やり奉る中に、内の御めのとの吉田の前大納言定房、まみいたうあかぐれたるぞおはれに見ゆる。そのかみの事など思ひいづるに、めでたきよろこびの涙ならむかし。御拝をはりぬれば、又もとの道を経給ひて、公卿座に入らせ給ひぬ。法皇も内に入りたまひて、さばしありて左右の楽屋の調子とゝのほりてのち、又御門入らせ給ふ。法皇も同じ間の内に御さとねばかりにておはします。末のひさしに、内より参れる女房ども侍ふ。一の車に小大納言君（師重の女）「うきも我が身」のとよみし人の妹なり。帥典侍（資茂王女）さぬき、こいまとかや、二の左に新兵衛、中宮内侍、後に准后と聞えにき。さりには夏引、いはねを、三の車に少将内侍、尾張内侍、さりに青柳、今参りなど聞ゆ。上達部御前の座に着きてのち御だいまゐる。やくそう公泰宰相中将、陪膳右大将（雅季）、そのほど舞人ひざまづく。地下の舞はめなれたる事なれど、をりからにや、今日は殊におもゝちあしぶみもめでたく見ゆ。院の御おぼえにて、壽王といふ人、松殿のなにがしとかやが子なり、落蹲など舞ふと聞きしかど、夜もふけ雪もことにかきくらして、何のあやめも見えざりき。その後御

まへの御あそびはじまる。頭大夫冬方御箱の蓋に御笛入れてもちて參る。關白とりて御前にまゐらせたまふ。右大將も笛、中宮大夫琵琶、大宮大納言笙、春宮大夫琴、右宰相中將和琴、光忠宰相篳篥。兼資も吹きしにや。拍子左大臣、すゑ冬忠の宰相。更けゆくまゝにうへの御笛の音すみのぼりて、いみじくさえたり。左のおとゞの安名尊、伊勢のうみ限なくめでたく聞ゆ。事どもはてぬれば御贈物まゐる。錦の袋に入れたる御笛、箱の蓋にすゑらる。左大臣とりつぎて關白にたてまつる。御前に御らんぜさせて、冬方を召してたまはす。次に唐の赤地の錦の袋に、御琵琶入れてまゐる。その後御馬殿上人口をとりて、御まへにひきいでたり。ほのぼのと明くるほどにぞ歸らせ給ひぬる。法皇はやゝもすれば、大覺寺殿にのみ籠らせおはしますす。人々世の事ども奏しにまゐりつどふ。今は一すぢに御行にのみ御心入れ給へるに、いとうるさくおぼせば、その夏頃定房の大納言あづまへ遣さる。御門に天の下の事ゆづり申さむの御消息なるべし。大方はいとあさましうなりはてたる世にこそあめれ。かばかりの事は父御門の御心に、いとやすく任せぬべきものをとめざましけれど、きのふ今日にはじまりたるにもあらず。承久よりこなたはかくのみなりもてきにければなめり。内に近く侍ふ上達部などのなまはらぎたるなき、わが思ふ事のとゞこほりなどするを、法皇をうれはしげに思ひ奉りて、此の事いかであづまより許し申すわざもがなと祈などをさへぞしける。かくて大納言はどなく歸りのぼりぬ。御心のまゝなるべく奏したりとて、院のふどの議定所にうつされ、評定衆などせうせうかはるもあり。さて世を去たゝめさせ給ふ事、いとかしこうあきらかにお

はしませば、昔に耻ぢずいとめでたし。御才もいとはしたなうものし給へば、萬の事くもりなかめり。三史五經の御論議などもひまなし。みな月の頃中殿の作文せさせ給ふ。題は式部大輔藤範奉る。久しかるべきは賢人の徳とかや聞えしにや、女のまねぶべき事ならねば漏しつ。上達部殿上人三十餘人まゐれり。關白殿房實ばかり直衣にて、御几帳の後にさぶらはせたまふ。うへは御ひきなはし御琵琶玄上ひかせ給ふ。右大將實衡琵琶、春宮大夫公賢箏、權大納言親房笙、權中納言氏忠和琴、左宰相中將雅泰笙、右衛門督嗣家笛、右宰相中將光忠篳篥、拍子は例の左のおとゞ參實するは冬定なりしにや。うへの御琵琶の音いひ知らずめでたし。右大將何にかあらむ、心とけてもかきたてられざりき。御遊はてゝのち文臺めさる。藏人内記俊基人々のふみをとりあつめて、一度に文臺のうへにおく。披講の終るほどに、みじか夜もはのぼのと明けはてぬ。御製を左のおとゞかへすがへす誦じて、うるはしく朗詠に云たまふ。こゝいとうつくし。をりふし郭公の一聲なのりすてゝ過ぎたるは、いみじくえんなり。かやうのまことしきことは、かねて人も心づかひすればおやまちなかるべし。ときにのぞみて俄にかたき題をたまはせて、うちうち詩をつくらせ歌をよませて、かしこくおろかなると御らんじわくに、いとからいことおほく心ゆるびなき世なり。その七月七日乞巧奠、いつの年よりも御心とゞめて、かねてより人々に歌どもめされ、ものゝ音どもゝ試みさせたまふ。その夜はれいの玄象ひかせたまふ。人々の所作ありし作文にかはらず。笛篳篥などは殿上人どもなる板のほどにさぶらひてつかうまつる。中宮もうへの御局にまうのぼらせ給ふ。御簾の内にも琴琵琶わたあり

き。播磨の守なかきよのむすめ、今は左大臣の北の方にて、三位殿といふも箏ひかれけり。宮の御方のはりまの内侍も、同じく琴ひきけるとかや。琵琶は權大納言の三位殿（師藤大納言女）いみじき上手におはすれば、めでたうおもしろし。蘇香、萬秋樂、のこる手なく幾返となくつくされたる。明け方は身にぞむばかり若き人々めでおへり。さらでだに秋の初風はげにそゞろ寒きならひをことわりにや。御遊はて、文臺めさる。この度は和歌の披講なれば、その道の人々藤大納言爲世、子どもうまごども引きつれてさぶらへば、うへの御製、

「ふえ竹のこゑも雲ゐにきこゆらしこよひたむくる秋のしらべは」。

ずんながるめりしかど、いづれも唯天の川かさゝぎのはしより外は、めづらしきふしは聞えず。まことに實教の大納言なりしにや、

「おなじくは空までおくれたきものゝにはひをさそふ庭の秋かぜ」。

げにえならぬ名香の香どもぞ、めでたくかうばしかりし。花も紅葉もちりはてゝ、雪つもる日數のほどなさに、又年かはりて正中元年といふ。やよひの二十日あまり、石清水の祉に行幸したまふ。上達部殿上人いみじき清らをつくせり。關白殿は御車なり。右大臣實衡松がさねの下がさね、鶸のまるをおる。蘇芳のかたもんのきぬ、左大將經忠櫻萠黄の二重織物の御下がさね（櫻に蝶をいろいろにおる。）花山吹のうへのはかま、紅のうちたる御ぞ、人よりことにめでたく見えたまふ。御かたちもにほひやかにけだかきさまして、誠に一の人とはかゝるをこそは聞えめと飽かぬ事なく見えたまふ。土御門の中納言顯實、花ざくらの下がさねなりき。花山院の中納言

經定などぞ、上﨟の若き上達部にて、いかにもめづらしからむと世人も思へりしかど、家のやうとかや何とかやとて、たゞいつものまゝなり。公泰宰相中將劒璽の役つとめらる。櫻萠黄のうへのはかま、かばざくらの下がさね、山吹の浮織物のきぬ、紅のうちたるひとへを重ねられたり。白くまろく肥えたる人の眉いとふとくて、おいかけのはづれもなきよげと、たのもしくぞ見えられし。頭亮藤房樺櫻の下がさね、蘇芳の浮織物のきぬ、弟の職事季房も山吹の下がさね、くれなゐのきぬ、衙府のすけどもは、うちこみたれば見もわかず。別當左兵衛督資明、はしり下部とかやいふもの八人、太刀はみなゑろがね延べたるにやと見ゆるに、鶴の丸をきにみがきたる、頼もしうきよげなり。舞人にもよき家の子どもをえらびとゝのへられたり。一の左に中院の前の大納言通顯の子通冬少將、まだいとちひさきに、童などもおなじ程なるを好みとゝのへて、いと清らにいみじうゑたてゝ、秦の久俊といふ御隨身をぞ具せられたる。右に久我の少將通宣いたくすぐしたるほどにて、ひげがちにねび給へるかたちして、小さに立ちならばれたる、いとたとしへなくぞ見えし。それよりつぎつぎは、むつかしさに忘れぬ。大將の隨身どもこそむかしの事はげには見ねばゑらず。いとゆゝしくまことに花をおるとはこれにやとめでたうおもしろかりし。左大將殿の隨身は、赤地の錦の色も紋も目なれぬさまにこのましきを、情なきまでさながらだみて、まぜに山吹を白がねにてうちものにして、ひしとつけたり。花の色かさなりなどまで、こまかにうつくし。露を水晶の玉にておきたる、朝日にかゞやきて、すべていみじうぞ見ゆる。西園寺の隨身もおなじ錦なれど、松を

むすびて鶴のまろを白と黄とにうちてつけたる、山吹よりはにほひなく見ゆ。さまざまの神寶神馬みてぐらなど、夜もすがらのゝしりあかして、又の日の暮つかたかへらせ給ひぬ。おなじ卯月十七日、賀茂の社に行幸なる。上達部など多くはさきにおなじ。衣がへの下がさねども、けぢめなくすゞしげなり。別當の下部このたびは十二人、かちんに雉の尾を去ろううちちがへてつけたり。これもけちえんにこのましげなり。明くる日は祭なれば、かんだちのかたうち續き華やかにおもしろし。今日の使は德大寺中將公清なり。春宮大夫公賢の聲にておはすればにや、左大臣の大炊御門富小路の御家よりぞいでたゝれける。人がらといひよろづめでたく見ゆ。萌黄の下がさね御家の紋のもかうをいろいろに織りたりしにや、近比のつかひには似ずいとゆみじくさゝらめき給へり。中宮の使は亮藤房なり。この頃時にあひたるものなれば、いと清げに劣らぬさまなり。その廿七日に任大臣の節會おこなはる。左大將經忠右大臣にならせ給ふ。內大臣冬敎左にうつりたまへば、右大將實衡內大臣になさる。又の日やがて右大臣殿大饗行ひ給へば、尊者には內大臣參り給ふ。近衛殿近頃は御惱みがちにてのみ臥し給へれど、今日の御悅にめづらしくいでゐさせ給へり。法皇は今は大覺寺殿にのみおはしませば、大炊御門式部卿のみこの御家を內大臣殿申しうけて、おなじ日大饗したまふ。尊者には右のおとゞ、やがて我が御家の大饗はつるまゝに、ひきつれてわたり給へり。あるじもまれ人も大將かねたまへば、隨身どもえならずけいめいして、かたみにけしきとりかはしたるいと面白し。あるじのおとゞ琵琶、右衛門督兼高箏篳、隆資朝臣笙、室町三位中將公春

琴、敬宗朝臣笛、有賴宰相拍子とりて遊びくらし給ふ。御前の物どもなど、常の作法にことをそへてこまかにきよらなり。その後いくほどなく右大臣殿の御父君前關白殿家平、御惱重くなり給ひて御ぐしおろす。にはかなれば殿の内の人々いみじう思ひさわぐ。大かた若くてぞすこし女にもむつまじくおはしまして、この右大臣殿などもいでき給ひける。中頃よりは男をのみ御傍にふせ給ひて、法師の兒のやうにかたらひ給ひつゝ、ひとわたりづゝいと華やかに時めかし給ふ事けしからざりき。左兵衛督忠朝といふ人もかぎりなく御おぼえにて、七八年がほどいとめでたかりし。時すぎてその後は、成定といふ諸大夫いみじかりき。この頃は又隱岐守賴基といふもの、童なりし程よりいたくまどはし給ひて、昨日今日までの御召人なれば、御ぐしおろすにもやがて御供仕うまつりけり。病おもらせ給ふほども、夜晝御傍はなたずつかはせ給ふ。既にかぎりになり給へる時、この入道も御うしろにさぶらふに、よりかゝりながらきと御覽じ返して、「おはれ諸共にいでゆく道ならば、うれしかりなむ」とのたまひもはてぬに、御息とまりぬ。右大臣殿も御前にさぶらはせ給ふ。かくいみじき御氣色にては給ひぬるを、心うしとおぼされけり。さてその後かの賴基入道も病みつきて、あと枕も知らずまどひながら、常は人にかしこまるけしきにて、衣ひきかけなどしつゝ、「やがて參り侍る參り侍る」とひとりごちつゝほどなくうせぬ。粟田の關白のかくれ給ひにし後、「夢見ず」となげきしものゝ心ちぞする。故殿のさばかりおぼされたりしかば、とりたるあめりとぞいみじがりあへりし。

第十六　春のわかれ

卯月のすゑつかたより法皇御惱み重くならせ給へば天下のさわぎ思ひやるべし。御門もいみじくおぼしなげき、御修法どもいとこちたく、またまたはじめ加へさせ給へど、去るしもなくて日々におもらせ給へば、夜晝となく、「いかにいかに」ととぶらひ奉らせ給ふ。若き上達部などは、直衣にかしはばさみして、夜中曉となく、遙けき嵯峨野を料の御馬にて馳せありき給ふめり。今はむげにたのみなきよし聞ゆれば、大覺寺殿へ行幸ありし事おぼしいづ。萬の事ども聞えさせ給ふ。うへの二つ御腹の二品法親王性圓と聞ゆるを、いとかなしきものに思ひ聞えさせ給ひて、この大覺寺に、そこらのみさうみまきなどをよせおかる。法のあるじとしておはしますべくおぼしおきてけり。さやうの事など見給へざらむあと、後めたからぬさまなどぞ聞えさせ給ひける。その後御うまごの春宮行啓あり。世を去ろしめさむ時の御心づかひなど、今すこしこまやかに聞え去らせ給ふ。宮は先帝の御かはりにもいかで心の限仕うまつらむと、あらましおぼされつるに、飽かず口をしうて、いたう去ほたれさせ給ふ。御門の御なからひ、うはべはいとよけれども、まめやかならぬをいと心苦しとおぼさるれど、ことにいで給ふべきならねば、唯大かたにつけて、世にあるべき事ども、又この頃少し世にうらみあるやうなる人々の、我が御心にはあはれとおぼさるゝなどあまたあるをぞ、「御心のまゝなる世にもなりなむ時は、必ず御用意あるべく」など聞え給ひける。中御門の大納言經繼、六條の中納言有忠、右衞門督敎定、右衞門佐俊顯など聞えし人々の事にやありけむ、き

てその夜とまり給へるも云ふしめさで、夜うち更けて少し驚かせ給ひて、「春宮はいつかへり給ひぬるぞ」との給ふに、うちこわづくりて近く参り給へれば、「未だおはしましけるな」とて、いとらうたしとおぼされたる御氣色おはれなり。大方のけしき院の内のかい云めりたるありさまなど、よろづおぼしめぐらすに、いと悲しき事多かれば、宮うちなき給ひぬ。御心ぼそういみじとのみおぼさるゝに、正中元年六月廿五日終にかくれさせ給ひぬ。御年五十八にぞならせ給ひける。後宇多院と申すなるべし。御門又御服たてまつる。おけくれねんごろにけうじ奉り給ふさまいとかたじけなし。御母の皇后宮ときこえし今は達智門院と申すも、まいて一所をのみ頼み聞えさせ給へるに、心ぼそういみじとおぼし歎く事かぎりなし。むかしの内侍のかんの殿院號ありて、萬秋門院ときこゆるも、故院の御かげにてのみ過ぐし給へれば、より所なくおはれげなり。御四十九日は八月十日あまりの程なれば、世の氣色何となくおはれおぼかるに、女院宮だちの御心のうちども、朝霧よりもはれまなし。十五夜の月さへかきくもれるに、故院の御位の御時に、宰相典侍とてさぶらひしは、雅有の宰相のむすめなり。その世のふるき友なれば、おなじ心ならむとおぼしやるも、むつまじくて、萬秋門院のたまひつかはす。

「あふぎみし月もかくるゝ秋なればことわり云れどくもるそらかな」。

いとおはれに悲しと見奉りて、御かへし、宰相典侍、

「ひかりなき世はことわりの秋の月なみだそへてやなほくもるらむ」。

永嘉門院、西花門院などいづれもおぼし歎く人々おほかり。春宮もいと戀しく哀とのみ思ひ聞え給ふまゝには御法事をぞまめやかに勤めさせ給ひける。大覺寺にては、性圓法親王とりもちて行はせたまふ。御門春宮の御法事は龜山殿の大多勝院にてつとめらる。あはれあはれといひつゝも過ぎやすき月日のみうつりかはりて年もかへりぬ。をとゝしばかりより又重ねて撰集の事仰せられしを、爲世の大納言二たびになりぬればにや、爲藤の中納言にゆづりしを、いくほどなくかの中納言惱みてうせぬ。いとゝほしうあはれなり。故爲道朝臣のうせにし、唯年月ふれど絕えぬうらみなるに又かくとり重ねたるなげき、大納言の心のうちいはむかたなし。春宮より玄ばしばとぶらはせ給ふ御消息のついでに、

「おくれゐる鶴のこゝろもいかばかりさきだつ和歌のうらみなるらむ」。

御かへし、大納言爲世、

「おもへたゞ和歌の浦にはおくれゐて老いたるたづのなげくこゝろを」。

世に歌よむとおぼしき人のあはれがり歎かぬはなし。せめて勅撰の事撰びはつるまでなどかはとぞひとびとのなげきいとほしげなり。故爲道の中將の二郎爲定といふを、故中納言とりわき子にして何事もいひつけしかば、せんかのこともうけつぎて沙汰すべしなどぞ聞ゆる。大納言は、末の子爲冬の少將といふをいたくらうたがりてこのまぎれに引きや越さましと思へるけしきありとて爲定もうらみ歎きて、山伏すがたに出でたちて修行に出でうせぬるなどいひさたすれば、人々いとほしうあはれになどもてあつかへど、さすが求めいだして

元のやうにおだしく定まりぬとなむ。その頃なが月ばかりまだきのゝめの程に世の中いみじくさわぎのゝしる。何事にかと聞けば美濃國の兵にて土岐の十郎とかや、また但見の藏人などいふものども忍びのぼりて四條わたりに立ちやどりたる事ありて人にかくれてをりけるを、早う又告げきらするものありければ、俄にその所へ六波羅よりおしよせてからめとるなりけり。あらはれぬとや思ひけむ、かのものどもはやがて腹切りつ。又別當資朝、藏人内記俊基、おなじやうに武家へとられて、きびしくたづねとひまもりさわぐ。事のおこりは御門世をみだり給はむとてかの武士どもを召したるなりとぞいひあつかふめる。さてその宣旨なしたる人々とて、この二人をもあづまへ下して戒むべしとぞ聞ゆる。いかさまなる事の出でくべきにかといとおそろしくむづかし。故院おはしましゝ程は世ものどかにめでたかりしを、いつしかかやうの事ども出できぬるよし人の口安からざるべし。正應にも淺原といひしさわぎは後嵯峨院の御そうぶんを、あづまよりひきたがへし御恨とこそは聞えしかば、今も其の御憤の名殘なるべし。過ぎにし頃資朝も山伏のまねびして柿の衣にあやゝい笠といふ物きて、あづまの方へ忍びて下れりしは少しはあやしかりし事なり。早うかゝる事どもにつけて、あなたざまにも宣旨を受くるものゝありけるなめり。俊基も紀伊國へゆあみに下るなどいひなして田舎わたりきえげかりしも今ぞ皆人思ひあはせける。さるまゝにはいひきらず聞ゆる事どもあればまだきにいと口をしうおぼされて、この事をまづおだしくやめむとおぼせば、かの正應にありしやうなるちかひの御せうそこをつかはす。宣房の中納言御使にて

あづまに下る。大かたふるき御世よりつかへきて年もたけたるうへ、この頃は天下にいさぎよくうべうべしき人に思はれたる頃なれば、この事更に御門のおろしめさぬよしなどけざやかにいひなすに、荒さえびすどもの心にもいと忝き事となげみて、ぶいなるべく奏しけり。此の御使の賞にや宣房、大納言になされぬ。いといみじきさいはひなり。親は三位ばかりにて入道してき。子どもなどさへいと清げにてあまたあめり。さればおほやけはおろしめされぬにても、かの人々は遁るべき方なしとて別當は佐渡國へながされぬ。俊基はいかにして遁れぬるにか都へかへりぬれど、ありしやうには出でつかへず籠り居たるよしなり。かやうにて事なくおづまりぬればいとめでたけれど、うへの御心のうちは猶安からず、いかならむ時とのみおもはしわたるべし。月日程なくうつりゆきて嘉暦元年にはなりぬ。やよひのはじめつ方より春宮例ならず坐しまして日々におもらせ給ふ。さまざまの御修法どもはじめ御祈なにやかやと伊勢にも御使たてまつらせ給へど、かひなくて三月二十日遂にいとあさましくならせ給ひぬ。宮の内火をけちたる心ちしてまどひあへり。御めのとの對の君といふ人夜晝御傍さらずさぶらひなれたるに、いみじき心まどひ誠にをさめがたげなり。かぎりと見え給ふ御顔にさしよりて、「かくのこりおほき身を御覽じすてゝは、えおはしましやらじ。今一度御聲なりとも聞かさせ給ひて、いづ方へも御供にゐておはしましてよ」と聲も惜まずなき入り給へるさまいとあはれなり。すべて宮の内とよみかなしぶさまいはむかたなし。永嘉門院は御子もおはしまさねば年月このみやを故院聞えつけさせ給ひしかば、今もひとつ院に

おはします、御息所にもやがて故院の姫宮を女院の御傍にかしづき聞え給ひしをおはせ奉り給へれば、又なきさまにおぼしかはして過ぐさせ給へるなどいみじう志づみ入り給へり。さておるべきならねば、常の行啓のさまにて先帝のおはしまし〳〵北白川殿へぞ入り奉らせ給ひぬる。土用のほどにて志ばしかしこにおはしますさへいとかなし。院號などの沙汰もあるべくこそ。されどおはしまし〳〵時にその事はよしなかるべく仰せられおきしかば、内よりも聞しめしすぐしけり。晝の御座のよそひとりこぼち、火たきやなどかき拂ふ程猶うつ〳〵とおぼえず。堀川の女御の「見えしおもひの」などのたまひけむは、この世ながら御心との御おかれなればうらやましくさへおぼゆ。さしあたりてのおはれはさしおきて、先帝の位ながらうせ給へりしだにあるを、又かくなかばなるやうにてあさましければ、世の人の思はむ事も心うく、一方ならぬ歎にそへたる憂へいはむ方なし。大方我が身をかぎりはてぬると思ふ人のみ多かり。有忠の中納言先坊の御使にてあづまに下りにし、いつしかと思ふさまならむ事をのみ待ち聞えつる。踐祚の御使の都に參らむと同じやうにのぼらむとていまだかしこにものせられつるに、かくわやなき事の出できぬればいみじともさらなり。三月三十日やがてかしこにて頭おろす。心のうちさこそはとかなし。

「おほかたの春のわかれの外にまた我が世つきぬる今日のくれかな」。

都にも前の大納言經繼、四條三位隆久、山の井の少將あつすゑ、五辻の少將ながとし、公風の少將、左衞門佐としあきなど皆頭おろしぬ。女房には御息所の御方對の君、帥の君、兵衞督、内

侍の君などすべて男をんな三十餘人さまかはりてけり。やんごとなき君の御時もかくばかりの事はいとありがたきを、佛などのあらはれ給ひて殊更にまよひふかき衆生を導き給ふかとまで見えたり。御本性のいとなごやかにおはしましゝかば、近う仕うまつるかぎりの人は年ごろの御名殘を思ふもいと忍びがたきうへ、大かたの世にもさしはなたれて身をようなきものに思ひすつるたぐひなど、さまざまにつけていとひそむくなるべし。若宮三所、姫宮などもおはしましけり。御息所の御腹にはあらねど、いづれをも今は昔の御かたみとおはれに見奉らせたまふ。卯月のすゑつかた夏木立心よげに茂りわたれるもうらやましくながめさせ給ふ。曉がた郭公のなきわたるもいかに聞りてかと御涙のもよほしなり。

「もろともにきかましものを郭公まくらならべしむかしなりせば」。

まことや例のさきに聞ゆべき事を時たがへ侍りにけり。兵衛督爲定、故中納言のあとをかけて撰びつる撰集の事正中二年十二月の頃、まづ四季を奏するよし聞えし。のこりこの程世にひろまれるいとおもしろし。御門ことの外にめでさせ給ひて續後拾遺とぞいふなる。中宮大夫師賢うけたまはりて、この度の集のいみじきよしさまざま仰せつかはせたるに御返しに、爲定、

「いまぞ知るひろひし玉のかずかずに身をてらすべき光ありとも（俤は）」。

御返し、内の御製、

「かずかずにあつむる玉のくもらねばこれもわが世の光とぞなる」。

この大夫はもとより中よきどちにて常に消息などつかはすに、かく世にはめらるゝをいとよしと思ひて兵衛督のもとへいひやる、

「和歌の浦のなみもむかしにかへりぬと人よりさきにきくぞうれしき」。

かへし、

「和歌の浦やむかしにかへる浪ぞともかよふこゝろにまづぞきくらむ」。

この爲定のはらから、中宮に宣旨にてさぶらふも、うへ例の時めかし給ひて若宮いでものし給へり。その宮の御めのとは師賢の大納言うけたまはりていみじうかしづき奉らる。又宮の内侍の御腹にも次々いとあまたおはします。一の御子は、藤大納言の御腹、吉田の大納言定房の家に渡らせたまふ。二の御子もいとさゝらさらしとて源大納言親房の御あづかりなり。かくさまざまにおはしますをこの度いかで坊にとおぼしつれど、かねてだにもよはし仰せられし事なればあづまより人まゐりて本院の一の宮を定め申しつ。いとけやけくきこしめせど、いかゞはせむにて七月廿四日に皇太子の節會行はる。陣の座より引きわたして持明院殿に人どもまゐる。院の殿上にて祿などたまはる。常の事なれど俄にいとめでたし。八月になりて陽徳門院の土御門東の洞院殿へ行啓はじめあり。先坊の宮は應司なれば、ま近きほどに世のおとなひきこしめす。入道の宮女院などの御心のうち今さらにいとかなし。本院新院ひとつ御車にたてまつりて先立ちて入らせ給ふ。行啓は東の洞院おもての棟門に御車とゞめて中門まで筵道を敷きて歩み入らせたまふ。御びんづらゆひていとさびはにうつくしげなり。

十四ばかりにやおはしますらむ、宮づかさども院の殿上人など多くつかうまつり、花ひらけたる心ちどもすべし。あはれなる世のならひなりかし。かくて今年も暮れぬれば嘉暦も二年になりぬ。一の宮御かうぶりして中務卿尊良親王ときこゆ。去年より内に御とのゐ所してわたらせ給ふ。む月の十六日の節會にめづらしく出で給ふ。御門も德治の頃帥にて七日の節にいでさせ給へりしためしおぼしいづるにや、大方ふるくは皆さこそありけれど、近頃はいたくかやうにはなかりつるを、御子たち御かうぶりの後は孰も昔おぼえて、さるべきをりをりいでつかへさせ給ふめり。今日の節會は常よりことにひきつくろはるゝなるべし。みこはすはうの上のきぬ奉れり。左大臣冬教右大臣經忠、內大臣基嗣、右大將公賢、權大納言顯實、藤中納言實任、別當光經、三條中納言實忠、左衛門督公泰、權中納言藤房、宰相雅繼、親賢、爲定、冬信、國資などまゐれり。二の宮は西園寺宰相中將實俊のむすめの御腹なり。帥の御子世良の親王ときこゆ。昭慶門院とりわき養ひ奉らせたまふ。この宮は御めのと源大納言親房なり。それもうちうちへの御ぞにて御門南殿へ出でさせ給へば御供にさぶらはせ給ふ。又常磐井の式部卿宮は龜山院の御子なれど、當代といとねんごろなる御中にてこの御子だちと同じやうに常はうちつれ御殿居などさせ給ふ。今日もまゐりて御子だち歩み續かせ給へるいとおもしろし。若き女房など心づかひことなる頃ならむかし。ささらぎになればやうやう故宮の御一めぐりの事ども永嘉門院にはいとなませ給ふもあはれつきせず。應司の大殿もうせ給ひぬ。この頃の世にはいと重くやんごとなくものし給へるにいとあたらし。北政所は中院の內の

おとゞ通重の御はらからなり。それもさまかはり給ひぬ。近頃よき人々おほくうせたまふさまこそいと口をしけれ。

第十五（如元）　むら時雨

竹のそのふは玄げ〳〵れど、秋の宮の御腹には唯一品内親王ばかりものし給ふをいとあかずおもほしわたるに、この頃めづらしき御惱のよし聞ゆれば、いとめでたくおらまほしき御事なるべきにやとうへもいみじくおぼされて、かねてより御修法どもこちたく始められる。ましてその程近くならせ給ひぬれば、式部卿の宮の常磐井殿へ出でさせ給ひて、うへも二三日へだてず通ひおはします。陣の内なれば上達部殿上人夜晝となく袴のそばとりて參りちがふ。御せうとの兼季のおとゞも絶えずさぶらひ給ふ。いみじき世のさわぎなり。故入道殿今玄ばしおはせましかばとおぼしいづる人々おほかり。山、三井寺、山科寺、仁和寺すべて大法秘法まつり祓かずを盡してのゝしるさまいと賴もし。七佛藥師の法、青蓮院二品法親王（慈道）つとめさせ給ふ。金剛童子常住院の道昭僧正、如意輪法道意僧正、五壇の御修法の中壇は座主の法親王行はせ給ふ。如法佛眼は昭訓門院の御志にて慈勝僧正うけたまはりたまふ。一字金輪は淨羅僧正、如法尊勝は桓守僧正、愛染王賢助僧正、六字法聖尋僧正、准胝法は達智門院の御沙汰にて信耀僧正つとむ。その外なほ本坊にて樣々の法ども行はせらる。六月ばかりいみじう暑き程に、壇ども軒をきしりて護摩の煙みちみちたるさまいとおどろおどろしきまでけぶたし。社々の神馬はさらにもいはず、藥師陰陽師かんなぎども立ち騒ぎ世のひゞくさまで

たくゆゝしきにも、もし皇子にておはしまさゞらむをりいかにと思ふだに胸つぶるゝに、いかなる御事にかあやしうさるべき程もうち過ぎゆけば、なほ去ばしはさこそあれと待ち聞ゆれど、さらにつれなくて十七八廿卅月にも餘らせ給ふまでともかくも坐しまさねば今はそらごとのやうにぞなりぬる。大かた上下の人の心ちあさましともいふべきさはならず、御うぶやの儀式、あるべき事どもなどこちたきまでもよほしおかれ、よろしき家の子ども二親うち具したるえらばれしかど、こゝらの月頃にはあるはぶくになり、そのぬしも病して頭おろしなどすべてよろづあいなくめづらかなればいはむ方なし。前坊のはじめつかた、中院の内のおとゞ通重の御むすめ參り給ひて十八月にて若宮うまれ給へりしかど、やがて御子も母御息所もうせ給ひにしかば、いみじうあさましき事にいひさわぎし程に、又その後このとまり給へる入道の宮參り給へりしも、十七月ばかりにやたゞならずおはしまして、既に御氣色ありとて、宮の中たちさわぐ程に、たゞゆくゆくと水のみいでさせ給ひて、むかしの弘徽殿の女御の太秦にてありけむやうにてやみき。をりふし賀茂の祭の頃にて、春宮の使もとゞまりなどしてさやうのをりを人の口さがなさ、せめても先坊の御かたざまの事をおとしめざまにいひなやまし、人々もこの頃ぞ又かくまさるためしもありけりと、はしたなく思ひあはせける。さのみやは、さてしもおはしますべきならねば、内へ歸り入らせ給ふにもいとあさましう珍らかなる事をおぼしなげくべし。御修法どもゝありしばかりこそなけれど猶少しづゝは絶えず、いつをかぎりにかと見えたり。その頃左のおとゞ實泰もうせ給ひぬ。世の

中いみじくなげきあへり。かくて元徳元年にもなりぬ。今年いかなるにかおほばぶきやみはやりて人多くうせたまふ中に、伏見院の御母玄輝門院、前坊の御母代の永嘉門院、近衛大北政所などやんごとなきかぎりうち續きかくれ給ひぬれば、こゝかしこの御法事おげくていとあはれなり。かやうの事どもにて今年もまた暮れぬ。明くる春の頃、内には中殿にて和歌の披講あり。序は源大納言親房かゝれけり。かねてよりいみじう書かせ給へば人々心づかひすべし。題は花契二萬春一とぞきこえし。御製、

「時ならぬ花もときはの色にさけわがこゝのへはよろづ代の春」。

中務卿尊良親王、

「のどかなる雲ゐの花の色にこそよろづ代ふべき春は見えけれ」。

帥御子世良、

「百敷の御がきの櫻さきにけりよろづ代ふべき千世のかざしに」。

つぎつぎおほかれどもむつかし。やよひの頃春日の社に行幸したまふ。例のいみじき見ものなれば棧敷どもえもいはずいどみつくしたり。其の後日吉の社にも參らせ給ひき。今年も人おほくにはかやみして死ぬる中に、帥の御子重くなやませ給ひていとあへなくうせ給ひぬ。内のうへおぼし歎く事おろかならず。一の御子よりも御ざえなどもいとかしこくよろづきやうざくに物し給へれば、今より記錄所へも御供に出でさせ給ふ。儀定などいふ事にも參り給ふべしと聞えつるにいとあさまし。御めのとの源大納親房、我が世盡きぬる心ちしてとり

わへず頭おろしぬ。この人のかく世を捨てぬるを、親王の御事にうちそへてかたがたいみじく御門も口をしくおぼしなげく。世にもいとあたらしく惜みあへり。おなじ年の冬の頃、平野北野兩社に一たびに行幸なり、勘修寺の殿ばら、むかしより近衞司などにはならぬ事にてありつれど、内の御めのと吉田大納言定房過ぎにし頃從一位していとめづらしくめでたければ今は上臈とひとしきにや、をさなき子の宗房といふも少將になさる。色ゆりなどしてこの平野行幸の舞人にまゐる。土御門大納言顯實の子に通房の中將、堀川の大納言子具雅の中將など皆よき君だち舞人にさゝれて、いづれも清らに美くしう出でたちて仕うまつられたり。その外はくだくだしければ例のとゞめつ。かやうのめでたきまぎれにて過ぎもてゆく。又の年の春やよひのはじめつかた花御覽じに北山に行幸なる。常よりも殊におもしろかるべいたびなればかの殿にも心づかひ左給ふ。まづ中宮行啓、又の日行幸、前の右のおとゞ兼季まゐり給ひて樂所の事などおきてのたまふ。康保の花の宴のためしなど聞えしにや、北殿のさじきにてうちうち試樂めきて家房朝臣舞はせらる。御廉の内に大納言二位殿、播磨内侍など琴かき合せていとおもしろし。六日の辰の時にことはじまる。寢殿の階の間に御左とねまゐりて内のうへおはします。第二の間に后の宮、その次永福門院。昭訓門院も渡らせたまひけるにや。階の東に二條前殿道平、堀河大納言具親、春宮大夫公宗、侍從中納言公明、御子左中將爲定、中宮權大夫公泰など侍らはる。右のおとゞ兼季琵琶、春宮權大夫冬信笛、源中納言具行箜篌、治部卿篳篥、琴は室町宰相公春、琵琶園宰相基氏など聞えしにや。その日の事見給はねばさ

だかにはなし。をさなきわらはべなどのえどけなくかたりしまゝなり。この中に御覧じたる人もおはすらむ。うけたまはらまほしくこそ侍れ」といふ。「御簾のうちにも、大納言二位殿琵琶、播磨の内侍箏、女藏人高砂といふも琴弾くとぞきこえし。まことにやありけむ。中務の宮もまゐり給へり。兵仗たまはり給ひて御直衣に太刀はき給へり。御随身どもいと清らにさうぞきて所えたるさまなり。萬歳楽より納蘇利まで十五帖手をつくしたるいとみどころおはし。青海波を氣色ばかりにてやみぬるぞ飽かぬ心ちしける。暮れかゝるほど、花の木の間に夕日華やかにうつろひて山の鳥も聲をしまぬほどに、陵王のかゞやき出でたるはえもいはずおもしろし。その程うへも御引直衣にて倚子につかせ給ひて御笛吹かせたまふ。常より殊に雲ゐをひゞかすさまなり。宰相中將顯家、陵王の入あやをいみじうつくしてまかづるを召しかへして前關白殿御ぞとりてかづけ給ふ。紅梅のうはぎ二色のきぬなり。左の肩にかけていさゝか一曲舞ひてまかでぬ。右のおとゞ太鼓うち給ふ。その後源中納言具行採桑老を舞ふ。これも紅の打ちたるかづけ給ふ。又の日は無量光院の前の花の木陰に上達部たちつゞき給ふ。廂に倚子立てゝうへはおはします。御遊はじまる。拍子に治部卿まゐる。うへも櫻人うたはせ給ふ。御聲いとわかく華やかにめでたし。去年の秋ぞろかとよ、すけちかの中納言にこの曲はうけさせ給ひて、賞に正二位ゆるさせ給ひしも、今日のためとにやありけむといとえんなり。物の音どもとゝのほりていみじうめでたし。その後歌どもめさる。花を結びて文臺にせられたるは保安のためしとぞいふめりし。春宮大夫公宗序かゝれけり。

「海内苅安之世城北花開之春、我君保二宸臨於此處一調樂懸二於厥中一。重課二六義之言葉一、屢賞二數柯之濃花一。奉レ揩二疑出雲之昔一雲再懸二滿庭省一廻雪之昨一雪猶殘。雖レ小二風情一恐瀆二露詠一。其詞曰

時をえてみゆきかひある庭の面にはなもさかりのいろやひさしき」。

御製、

「代々の御幸のあと〳〵思へば」

このかみわすれ侍る。後にも見いだしてぞ。中務のみこ、

「代々をへてたえじとぞ思ふこの宿の花にみゆきのあとをかさねて」。

誰も誰もこのすぎにのみ惑はれて花のみゆきの外はめづらしきふしもなければ、さのみ云るしがたし。よろづ飽かず名殘多かれどさのみはにて九日に歸らせ給ひぬ。其の夏の頃御門例ならずおはしまして御藥の事などきこゆ。いと重くのみならせ給ふとて世の中わわてたるさまなり。時しもあれや、かの一年とられたりし俊基を又いかに聞ゆる事の出できたるにか、からめとらむとしければ內へ逃げてまゐるを、おひさわぎて陣のほとりまでものゝふどもうち圍みのゝしれば、こは何事と聞きわくまでもなし。いとものさわがしくきもつぶれてあるかぎり惑ひあへり。うへも物覺え給はぬ御ありさまにて大殿ごもれるに、かゝるよし奏すればいみじうおぼさる。遂に又の日六波羅へつかはしたればあづまへなてくだりぬ。うへは御惱をこたらせ給ひて、いとゞ安からずおぼす事まされり。日頃も御心にかけさせ給へる事なれば速にこのあらまし遂げてむとひたぶるにおぼしたちて、忍びてこゝかしこにその

用意すべし。后の宮の御腹の一品内親王御ぐしにおはせ給ひて去年の冬頃より御ぐしおはりつる、今日明日齋宮に居給ふ。八月二十日まづ河原へいでさせたまひてやがて野の宮に入らせ給ふ。その程の事どもいみじうきよらなり。この御いそぎ過ぎぬればまづ六波羅を御かうじたおるべしとてかねてより宣旨に從へりしつは者どもを去のびてめす。源中納言具行とりもちて事行ひけり。むかし龜山院に御子など産み奉りてさぶらひし女房、この頃は后の宮の御方にて民部卿三位と聞ゆる御腹に當代の御子もいでものし給へり。山の前の座主にて今は大塔の二品法親王尊雲と聞ゆる、いかでならはせ給ひけるにか弓ひく道にもたけく、大かた御本性はやりかにおはしてこの事をもおなじ御心におきてのたまふ。又中務のみこひとつ御腹に妙法院の法親王尊澄と聞ゆるは今の座主にてものし給へば、かたがた比叡の山の衆徒も御門の御軍に加はるべきよし奏しけり。つゝむとすれど事廣くなりにければ武家にもはやう漏れ聞きてさにこそあなれと用意す。まづ九重をきびしくかためゐすべしなどさだめけり。かくいふは元弘元年八月廿四日なり。雜務の日なれば記錄所におはしまして、人の爭ひうれふる事どもを行ひくらさせ給ひて人々もまかで、君も本殿に去ばしうち休ませ給へるに「今夜既に武士どもさはひ參るべし」と忍びて奏する人おりければとりあへず雲の上をいでさせたまふ。中宮の御方へわたらせ給ひても去めやかにもあらずいとあわたゞし。かねておぼし設けぬにはあらねども、事のさかさまなるやうになりぬれば、よろづうきうきと我も人もあきれゐたり。内侍所神璽寶劒ばかりをぞ去のびてゐてわたらせ給ふ。

うへはなよらかなる御直衣たてまつり、北の對よりやつれたる女車のさまにて忍のび出でさせ給ふ。かの二條院のむかしもかくやと思ひ出でらる。日頃の御用意にはまづ六波羅を攻められむまぎれに山へ行幸ありて、かしこへつはものどもを召して山の衆徒をも相具し、君の御かためとせらるべしと定められければ、かの法親王たちもその御心して坂本に待ち開え給ひけれど、今はかやうに事たがひぬればあいなしとて俄に道をかへて奈良の京へぞ赴かせ給ふ。中務の宮も御馬にて追ひて參りたまふ。九條わたりまで御車にてそれより御門もかりの御ぞにやつれさせ給ひて御馬にたてまつるほど、こはいかに忍つる事ぞと夢の心ちしておぼさる。御供に按察大納言公敏、萬里小路中納言藤房、源中納言具行、四條中納言隆資などまゐれり。いづれもおやしき姿にまぎらはして暗き道をたどりおはするほど、げに聞のうつゝの心ちして我にもあらぬさまなり。丑三つばかりに木幡山過ぎさせ給ふ。いとむくつけし。木津といふわたりに御馬とめて東南院の僧正のもとへ御消息つかはす。それより御輿を參らせたるに奉りて奈良へおはしましつきぬ。こゝに中一日ありて廿七日わづかの鷲峯山へ行幸ありけれども、そこもさるべくやなかりけむ、笠置寺といふ山寺へ入らせ給ひぬ。所のさまたやすく人の通ひぬべきやうもなく、よろしかるべしとて、木の丸殿のかまへを始められる。これよりぞ人々少し心ちとり忍づめて近き國々の兵などめしにつかはす。さて都には廿四日の夜、六波羅より常陸介時知馳せ參りて百敷の中をあさりさわぐ。其の程人の曹子などにおのづから落ち殘りたる女房の心ちいはむかたなし。おはしますおとゞを見れば、近

き御づし御調度どもなにくれ硯などもさながらうち散りて、唯今までおはしましけるあと〳〵見えながら宮人などだに一人もなし。女房の曹子曹子よりひすましめくめの童など我先にと走りいで、調度ども運び騒ぎくづれいづる氣色どもいとあさましくめもあやなり。錦の几帳の内にいつかれましましつる后の宮も、何の儀式もなく忍びてあわて出でさて給ひぬれば、あたりあたりかきはらひ、時の間にいとあさましく御簾几帳などふみ去たきおとして火の影もせずこ〳〵もかしこもくらがりてうちあれたる心ちす。今朝まで九重のまがき宮の中に出で入り仕へつる男女ひとりとまらず。えもいはぬもの〳〵ふどもうち散り、あらあらしげなるけはひについ松高くさ〳〵げて、細殿、渡殿何くれまかげさしてあさりたるけしきけうとくあさまし。世はうきものにこそ。時の間にげに心あらむ人はやがて修行の門出にもなりぬべくぞ覺えぬる。中宮はさのびて野の宮殿の傍にぞおはしましつきにける。宣房の大納言の二郎季房の宰相ばかり御とのゐにさぶらふ。廿五日の曙に武士どもみちみちて、御門の親しく召しつかひし人々の家々へ押しいり押し入りとりもてゆくさま、ごくそつとかやの顯れたるかといとおそろし。萬里小路の大納言宣房、侍從中納言公明、別當實世、平宰相成輔一度に皆六波羅へゐて行きぬ。かやうの事を見るにいとゞ膽心もうせて、おのづからとりのこされたる人も心と皆かきけち行きかくるゝほどに、ぬしなき宿のみぞおほかる。坂本には行幸をまち聞え給ひけるに引きたがへ南ざまへおはしましぬれば、そのよし衆徒に聞かれなばあしかりぬべし、又とまれかくまれ、まことのおはしまし所を、おぶなく武家へ知らせじ

のたばかりにやありけむ、花山院の大納言師賢を山へつかはして忍びて御門のおはしますよしにもてなして、かの兩法親王事行ひ給ひつゝ、六波羅のつはものどものかこみをも防がせ給ふ。その日は大納言も大塔の前座主の宮もうるはしきものゝふ姿にいでたゝせ給ふ。卯花をどしの鎧に鍬形の兜たてまつりて大矢おひてぞ坐する。妙法院の宮はすゞしの御衣の下に萠黄の御腹巻とかや着給へり。大納言はからの香染の薄物の狩衣にけちえんに赤き腹巻をすかして、さすがに巻繪の細太刀をぞはき給ひける。六波羅より御門こゝにおはしますと心えて武士どもおほくまゐりかこむ。山法師もたゝかひなどして海東とかやいふつはものの討たれにけり。事のはじめにひんがしうせぬるめでたしなどぞいふめる。かゝれども御門笠置におはしますよし程なくきこえぬれば、謀られ奉りにけるとて山の衆徒もせう〳〵心がはりしぬ。宮々も逃げいでたまひて笠置へぞまうで給ひける。大納言は都へまぎれおはすとて、夜ふかく志賀の浦を過ぎ給ふに、有明の月くまなくすみわたりて寄せかへる浪の音もさびしきに、松ふく風の身に去みたるさへとりあつめ心ぼそし。

「思ふ事なくてぞみましほのほのとありあけの月の志賀のうら波」。

その後辛うじてぞ笠置へはたどり參られける。かやうの事ども、例のはや馬にてわづまへ告げやりぬ。唯今の將軍はむかし式部卿久明親王とて下り給へりし將軍の御子なり。守邦の親王とぞ聞ゆる。相摸の守高時といふは病によりて、いまだわかけれど一とせ入道して今は世の大事どもいろはねど鎌倉のぬしにてはあめり。心ばへなどもいかにぞや。うつゝなくて

朝夕このむ事とては犬くひ田樂などをぞおひしける。これは最勝園寺入道貞時といひしが子なれば、承久の義時よりは八代にあたれる。この頃私のうしろみには長崎入道圓基とかやいふものあり。世の中の大小事唯皆この圓基が心のまゝなれば、都の大事かばかりになりぬるをもかの入道のみぞとりもちておきて計らひける。重き武士ども多くのぼすべしと聞ゆ。大かた京も鎌倉もさわぎのゝしるさまけしからず。承久のむかしもかくやと今さらに思ひやらる。持明院殿には春宮おはしませば、思の外にめでたかるべき事なれど、今日あすはいまだ軍のまぎれにて何のさたもなし。御とのゐのものゝうべうべしきもなくて離れおはしますもおぶなき心ちすればにや、せめても六波羅近くとて六條殿へ本院、新院、春宮引き續きてうつらせ給ひぬれど、日にそへて天の下さわぎおそろしき事のみ聞ゆれば、猶これも危しとて六波羅の北に代々の將軍の御料とてつくりおける檜皮屋ひとつあるに兩院、春宮まゐらせ給ふ。大かたはいとものしきやうなれどよろしき時こそあれ、かばかりのさはには何の儀式もなかるべし。笠置殿には大和河内伊賀伊勢などより兵ども參りつどふ。中に事のはじめより頼みおぼされたりし楠木兵衛正成といふものあり。心猛くすくよかなるものにて河内國におのがたちのあたりをいかめしく云たゝめて、このおはします所若し危からむをりは行幸をもなしきこえむなど用意しけり。あづまのえびすどもゝやうやう攻め上るよしきこゆ。もとより京にある武士どもゝ我先にときはひまゐる。木の丸殿には、さこそいへ、むねむねしきものなし。いかになりゆくべきにかといと物心ぼそくおぼしみだる。我が御心も

ての事なればかこつかたなけれど、故郷の空もおはれにおぼしいでらる。秋も深くなりゆくまゝに山の木の葉のうち玄ぐれ、谷の嵐のおとづるゝもあたのきほふかと膽をけす。御すまひいつしか御身をかへたる心ちし給ふもあぢきなし。

「うかりける身を秋風にさそはれて思はぬ山のもみぢをぞみる」。

既にあづまぶしども雲霞のいきほひをたなびき上るよし聞ゆれば、笠置にもいみじう思しさわぐ。もとよりいとけはしき山の深きつゞらをりをえもいはず木戸、逆木、石弓などいふ事ども玄たゝめらる。さりともたやすくは破れじと頼ませ給へるに、後の山より御かたきくづれ參りて、木戸ども焼きはらひ、おはしますわたり近く既に煙もかゝりければ、今はいかゞせむにてあやしき御姿にやつれてたどり出でさせ給ふ。座主の法親王尊澄御手をひき奉り給へるもいとはかなげなる御ありさまなり。中務の御子大塔の宮などはかねてよりこゝを出でさせ給ひて楠がたちにおはしましけり。行幸もそなたざまにやとおぼし心ざして、藤房具行兩中納言、師賢の大納言入道手をとりかはしてはのぼの中をまぬがれいづる程の心ちども夢とだに思ひもわかずいとあさまし。少しのびさせ給ひてぞ御馬たづね出でゝ、君ばかりたてまつりぬれどならはぬ山路に御心ちも損はれて、誠にあやふく見えさせ給へば、たかまの山といふわたりに玄ばし御心ちをためらふ所に、山城國の民にて、ふかすの五郎入道とかいふもの參りかゝりて案内聞えたるしもいとめざましう口をし。上達部思ひやるかたなくて唯目を見かはしていかさまにせむとおぼされたるに、あづまより上れる大將軍にてみち

の國の守貞直といふもの大勢にて參れり。今はたゞともかくものたまはすべきやうなければ、遂にかひなくてかたきのために御身をまかせぬるさまなり。やがて宇治にみゆきあるべきよし奏すれば、御心にもあらでひかされおはします程に、心うしといふもなのめなり。具行、藤房、忠顯少將などやがておのが手のものどもに從へさせつ。大納言入道御馬の左りに走りおくれてこゝかしこの岩かげ木のもとに休みつゝ、とかくためらふ程に、それも見つけられてとられぬ。君をば宇治へ入れ奉りて、まづ事のよし六波羅へ聞ゆる程に、一二日御逗留あり。かくいふは九月三十日なれば空のけしきさへ時雨がちに涙もよほしがほなり。平等院の紅葉御覽じやらるゝもかゝらぬ行幸ならばとおぼいなし。後冷泉院かとよ、こゝに行幸去給ひて三四日おはしましける。その世の人の心ち上下何事かはと、うらやましくおはれにおぼさる。十月三日都へ入らせ給ふも思ひしにかはりて、いとすさまじげなるものゝふども衛府のすけの心ちして御輿近くうちかこみたり。鳳輦にはあらぬ網代輿のあやしきにぞたてまつれる。六波羅の北なる檜皮屋にはもとより兩院、春宮おはしませば、南の板屋のいとあやしきに御左つらひなどしておはしまさするもいとはしうかたじけなし。間近きほどによろづきこしめし、御覽じふるゝことごとにつけてもいかでか御心動かぬやうはあらむ、口をしうおぼしみだる。ならはぬ御やどりに時雨の音さへはしたなくて、

「まだなれぬいたやの軒のむら時雨音をきくにもぬるゝ袖かな」。

中務の宮は正成がもとにおはしましつれど、御門のかくならせ給ひぬれば今はかひなしと

てそれも都へ入らせ給ひて、佐々木判官時信といふもの〻家にわたり給ひぬ。つれづれと物おぼしみだるゝより外の事なし。

「世のうさを空にも云るや神無月ことわりすぎてふる云ぐれかな」。

この御子は藤大納言爲世のうまごにてものし給へばかの家に常はすみ給ひしほどに大納言の末のむすめ大納言の典侍と聞ゆるに御覽じつきてその御腹に姫宮などいできたまへり。又中宮の御匣殿は、宮の御せうとの右のおとゝ公顯と聞えし御むすめなり。その御腹にも男みこなど坐します。思ふまゝなる世をも待ちいで給はゞと誰も行く末たのもしく思ひ聞えつるに、かくおもひの外にわさましき事の出できぬるを深う思ひなげく人々かず云らず。御匣殿はうせ給ひしかばこの頃はたゞこの典侍の君をのみまたなきものにおぼしかはしつるに、吹きかふ風もま近きほどにはおはすれど御對面はおもひもよらず。おぼつかなさの慰むばかりなる御消息などに通ふこともかなはぬ御ありさまを哀にいぶせくおぼしむすぼゝれたり。ひとの御腹の座主の法親王も長井のたかひろとかやいふものわづかりたてまつりぬ。「御門遠くうつらせ給はむほど、この御子達もおのがちりぢりになり給ふべし」など聞えけり。春宮は世をつゝしみて六波羅に渡らせ給ふ。先帝はあたのために同じ御やどり葦垣ばかりをへだてにておはしませば、ぬしなき院のうちいとさびしくて衛士のたく火もかげだに見えず。内にはいつしかけしかるものなどすみつきて或時は紅の袴長やかにふみたれて火ともしたる女、見るまゝに丈は軒とひとしくなりて後にはかきけち失するもあり。又いみじ

う光を放ちて髪前にみだしかけたる童なども見えけり。鬼殿などはかくやありけむとおそろし。八すまで年へあれぬる所などにこそかゝる事もおのづからありけれ、僅に一月二月の中にかゝるべきにはあらぬを、これかれと怪しきわざなるべし。さて例のおづまより御使のぼれり。代々のためしとかやとて、あい田の城のすけ高景、二階堂出羽の入道道雲とかやいふものぞ参れる。西園寺大納言公宗に事のよし申して春宮御位につき給ふ。さるべき御中といひながら今日あすとは見えざりつるに、いとめでたし。さて六波羅よりこの度は世のつねの行啓の儀式にて持明院殿へ入らせ給ふ。両院もひきつくろひたる御幸のよしなり。ひしめきたちぬる世の音なひを聞しめす先帝の御心ちたとしへなくねたく人わろし。もとの内裏へ新帝うつらせ給ふ。上達部のこりなく仕うまつらる。院も常磐井殿へおはしまいて世の政事聞しめせば、後宇多院のむかし思ひ出でられておはれなり。いつしか十月十二日令旨下されて前の御代の人々大中納言宰相すべて十人、宣房、公明、藤房、具行、隆資、實世、實治、季房、隆重、忠顕司やめらるゝよしきこゆるも、昨日までの時の花と見えし人々つかのまの夢かとおはれなり。かゝるにつけては一御ぞうのみ今はわく方なく定り給ふべきかと、世の人も思ひきこゆる程に、龜山院の御流の絶ゆべきにはあらずとにや、先坊の一宮を太子にたてまつる。御乳母の雅藤の宰相の法性寺の家に渡らせ給へるを、土御門高倉の先坊の御跡へ入れ奉りて十一月八日坊に定まり給ふ。今は思ひたえぬる心ちしつるにいとめでたし。松が浦島に年経給ひぬる入道の宮も御親の心ちにて坐しますべければ、太上天皇になずらへて崇

明門院ときこゆ。よろづ斧の柄朽ちにしむかしを改めたる宮のうちなり。おりし後おのがさまざまかで散りける女房、上達部殿上人など世の中くんじいたくて、こゝかしこに籠り居たりしもいつしかと參りつどふさま、谷の鶯の春待ちつけたる心ちしていとたのもしげなり。傳に久我の右のおとゞ長通、大夫に中院の大納言通顯なり給ふ。なべて世に年頃うづもれたりし人々いつしかと司位さまざまに思ふまゝなる氣色ども目の前にうつりかはる世のありさま、今さらならねど、いと去るくけちえんなるもおぢさなし。かくて年もくれぬ。

第十六（如元）久米のさら山

元弘二年の春にもなりぬ。新しき御代の年のはじめには思ひなしさへ華やかなり。うへも若うきよらにおはしませばよろづめでたく百敷の内何事もかはらず。さるべき公事のをりをり、さらでも院、内おなじ陣の中なれば一つに立ちこみたる馬車ひまなくにぎゝはしけれど見し世の人はひとりもまじろはず、參りまかづる顔のみぞかはれる。先帝はいまだ六波羅におはします。ささらぎの頃空の氣色のどやかにかすみわたりて、ゆるらかに吹く春風に軒の梅なつかしくかをりきて鶯の聲うらゝかなるも、うれはしき御心ちにはものうかるねにのみ聞しめしなさる。ことやうなれどかの上陽人の宮の内思ひよそへらる。長き日かげもいとゞくらし難き御なぐさめにとや聞え給ひけむ、中院より御琵琶奉らせ給ふついでに、いさゝかなる物のはしに、

「思ひやれちりのみつもる四つの緒にはらひもあへずかゝるなみだを」。

げにとおぼしやるにいとかなしくて玉水のながるゝやうになむ。御かへし、

「かきたえしねをたちいでゝ君こふるなみだの玉の緒とぞなりける」。

かの承久のためしにとや、あづまよりの御使には長井の右馬助高冬といふものなるべし。これは頼朝の大将の時より鎌倉に重きものゝふにて、いまだ若けれどもかゝる大事にものぼせけるとぞ申しける。遂に隠岐國へうつし奉るべしとて、やよひのはじめの七日都を出でさせ給ふ。今はと聞しめす御心まどひどもいへばさらなり。所々のなげき近うつかまつりし人々の心ちどもおき所なくかなし。御門もかぎりなく御心悩むべし。いとからしも人に見えじとかつはおぼし忘づむれど、あやにくにすゝみ出づる御涙をもてかくしつゝおはします。ふりにし事をおぼしいづるにも、立ちかへりまた世をやすくおぼさむ事のいとかたければ、よろづ今をとぢめにこそとおぼしめぐらすに人やりならず口をしき契加はり侍る。前の世のみぞつきせずうらめしき。

「つひにかく沈みはつべき報あらばうへなき身とはなにうまれけむ」。

卯の時ばかりにいでさせ給ふ。網代の御車に御せんどもなどは故院の御世より仕うまつりなれにし者どもあるかぎりまゐれり。御車寄に西園寺中納言公重さぶらひたまふ。うへは御かうぶりに世の常の御直衣、指貫、白綾の御ぞ一かさね奉れり。こぞの今日は北山にて花の宴せさせ給ひしもわはれにおぼしいでられて、その日の事書きつらねこひしくおぼさる。人々の祿人にこそはたまはせしを、今日は御旅衣にたちかふるもわはれに定なき世のならひ、

今さらこゝろうし。御車にたてまつるとて日頃おはしましつる傍の障子に書きつけさせたまふ。

「いさ去らずなほうき方のまたもあらばこのやどゝても去のばれやせむ」。

御供には内侍の三位殿、大納言、小宰相など、男には行房の中将忠顕少将ばかりつかまつる。おのがじゝ都の名殘どもいひつくしがたし。六波羅よりの御おくりの武士、さならでも名あるつはものども千葉介貞胤をはじめとしておほえことなるかぎり十人選びて奉る。いろいろのおやにしきの水干直垂などいふものさまざまに織りつくし染めつくしていみじき清らを好みとゝのへたれば、かくてしも世にめづらしき見ものなり。六波羅より七條を西へ大宮を南へをれて東寺の門前に御車おさへらる。とばかり御念誦あるべし。物見車所せきほどなり。よろしき女房もつぼさうぞくなどしてかちの物どもゝうちまじれり。さらでも老いたる尼法師わやしき山がつまで立ちこみたるさま竹の林に異ならず。おのおの目押しのごひ鼻すゝりわへるけしきどもげにうき世のきはめは今につくしつる心ちぞする。崇徳院の讃岐におはしましけむ程のありさま、後鳥羽院の隠岐にうつらせ給ひけむ時なども、さこそはありけめなれど音にのみ聞きて見ねばしらず。これを始めたる心ちぞする。日頃は何の御にほひにもふれず。數ならぬ人及ばぬ身までも今日の御別のわはれさ、なべておき所なげにぞ惑ひあへるかし。君も御簾少しかきやりてこのもかのも御覽じわたしつゝ御目とまらぬ草木もあるまじかめり。岩木ならねばものゝふの鎧の袖どもゝ去ほどけにぞ見ゆる。都のこず

ゐをかくるゝまで御覽じおくるも猶夢かとおぼゆ。鳥羽殿におはしましつきて御よそひあらため、わりごなどまゐらせけれど氣色ばかりにてまかづ。これより御輿にたてまつれば留るべき御せんどもの、空しき御車をなくなくやりかへるとてくれまどひたるけしき、いと堪へがたげなり。かくて君は遙に赴かせたまふ。淀のわたりにて、むかし八幡の行幸ありし時橋わたしの使なりし佐々木の佐渡の判官といふもの今は入道して今日の御おくりつかうまつれるに、その世の事おぼしいでられていと忍びがたさに給はせける。

「去るべする道こそあらずなりぬとも淀のわたりはわすれしもせじ」。

又の日は中務のみこ土佐の國へおはします。御供に爲明中將まゐる。日頃かくあやしき御やどりにものし給ふを忝く思ひきこえつるに、遙なる世界にさへゐておはしませば、ましていかさまなるわざをして御覽せられむとあるじ時信けいめいしさわぐ。宮既にたゝせ給ふとて、瓶にさしたる花を折りて、

「花はなほとまるあるじにかたらへよわれこそ旅にたちわかるとも」。

おなじ日やがて妙法院の座主尊澄法親王も讃岐國へおはします。先帝は今日津の國こやの宿といふ所に着かせ給ひて、夕づく夜はのかにをかしきをながめおはします。

「いのちあればこやの軒端の月も見つまたいかならむゆくすゑのそら」。

こやより出でさせ給ひて武庫川、神崎、難波、住吉など過ぎさせ給ふとて御心のうちにおぼすすぢあるべし、廣田の宮のわたりにても御輿とゞめて拜み奉らせ給ふ。あしやの松原、す

ぢめの森、布引の滝など御覽じやらるゝもふるき御幸どもおぼしいでらる。生田の里をばとはで過ぎさせ給ひぬめり。湊川の宿につかせ給へるに、中務の宮はこやの玄ゆくにおはしますほど、ま近く聞き奉らせ給ふもいみじうあはれにかなし。宮、

「ひとせめてうき人やりの道ながらおなじとまりと聞くぞうれしき」。

福原の島より宮は御船にたてまつる。御門は和田のみさき苅藻川をわたして須磨の關にかゝらせ給ふ。かの行平の中納言「關ふきこゆる」といひけむはうらよりをちなるべし。あはれに御覽じわたさる。源氏の大將の「なくねにまがふ」とのたまひけむうらなみ、今もげに御袖にかゝる心ちするもさまざま御涙のもよほしなり。播磨の國へつかせ給ひて、玄はやたるみといふ所をかしきを問はせ給へば、「さなむ」と奏するに「名を聞くよりからき道にこそ」とのたまはせて、さしのぞかせ給へる御さまかたちふりがたくなまめかし。けぢかきかぎりはあはれにめでたうもと思ひ聞ゆべし。大くら谷といふ所少し過ぐるほどにぞ人麿のつかはありける。明石の浦をすぎさせ給ふに、島がくれゆく船どもほのかに見えてあはれなり。

「水のあわのきえてうき世をわたる身のうらやましきはあまの釣舟」。

野中の玄みづ、ふたみの浦、高砂の松など名ある所々御らんじわたさるゝもかゝらぬ御幸ならばをかしうもありぬべけれど、よろづかきくらす御みだり心ちに御目とまらぬも我ながらいたうくんじにけるかなとおぼさる。いと高き山の峯に花おもしろく咲きつゞきて白雲をわけゆく心ちするも艶なるに、都の事かずかずおぼしいでらる。

「花はなほうき世もわかずさきてけりみやこも今やさかりなるらむ。
　おと見ゆるみちの云をりのさくら花この山びとのなさけをぞしる」。
十二日にかこ川の宿といふ所におはします程に、妙法院宮讃岐へわたらせ給ふとて、同じ道少しちがひたれど、この川のひんがし野ぐちといふ所まで参り給へるよし奏せさせ給へば、いと哀におぼし見まはしうおぼさるれど、御送のつはものどもゆるし聞えねば、宮空しく歸らせ給ふ御心のうち堪へがたく亂れまさるべし。さらなる事なれど、かばかりの事だに御心にまかせずなりぬる世の中、いへばえにつらくうらめしからぬ人なし。十七日美作の國におはしましつきぬ。御心ちなやましくてこの國に二三日やすらはせ給ふほど、かりそめの御やどりなれば物深からでさぶらふかぎりのものゝふども、おのづからけぢかく見奉るをおはれにめでたしと思ひ聞ゆ。君もおぼし續くる事ありて、
「おはれとはなれも見るらむ我が民を思ふこゝろはいまもかはらず」。
おはしますに續きたる軒のつまより煙の立ちくれば、「いほりにたける」とうち誦せさせ給へるもえんなり。
「よそにのみ思ひぞやりしおもひきや民のかまどをかくや見むとは」。
廿一日雲清寺といふ所にて、いとおもしろき花を折りて忠顯少將そうしける。
「色も香もかはらぬしもぞうかりけるみやこのほかの花のこずゑは」。
又小山の五郎とかやいふ武士におなじ花をやるとて、少將、

「うきたびと思ひはてじ一えだの花のなさけのかゝるをりには」。

かくてなほおはしませば、こし方はそことはかとなくかすみわたりておはれに遠くもきにけるかなと、日數にそへて都のいとゞ隔たりはつるも心ぼそうおぼさる。ほのかに咲きそむと見えし花の梢さへ、日數も山もかさなるにそへてうつろひまさりつゝ、上り下るつゞらをりにいと白く散りつもりてむらぎえたる雪の心ちす。

「花の春また見むことのかたきかなおなじ道をばゆきかへるとも」。

ひとかたしとおぼすものから、猶さりともたひらかにだにあらばおのづから御本意遂ぐるやうもありなむなど御心もて慰めおぼすもはかなし。久米のさら山といふ所越えさせ給ふとて、

「きゝおきしくめのさら山越えゆかむ道とはかねて思ひやはせし」。

逢坂といふは東路ならでもありけりときこしめして、

「立ちかへりこえゆく關とおもはゞやみやこにきゝしあふ坂の山」。

みか月の中山にて、昔後鳥羽院の仰せられけむ事おぼしいづるさへげにうかりけるためしなり。

「傳へきくむかしがたりぞうかりけるその名ふりぬるみか月の森」。

御道なかばになりぬれば御送のものども上下、都いでしよりも猶華やかに今めかしうさうぞきかへたり。大方はおやしうさまことなる御幸なれど、道すがらの御まうけ國々に心づか

ひしたる氣色などはかうざまの御ありきとは見えず、いとやんごとなくなむ。さはいへど今まで國のあるじにて世をもいみじう治めさせ給へりける名殘にやあらむ、いとねんごろにのみつかうまつれり。「いにしへの御幸どもにはかうはあらざりけり」とぞふるき事知れる人々いひ侍りける。四月一日の頃、百敷の宮の内おぼしいでられて

「さもこそは月日も去らぬ我ならめ衣がへせし今日にやはあらぬ」。

出雲の國やすぎの津といふ所より御船にたてまつる。大船二十四艘、小舟どもはしに數知らずつけたり。遙におしいだすほど今一かすみ心ぼそうあはれにて、まことに二千里の外の心ちするも今さらめきたり。かの島におはしましつきぬ。昔の御跡はそれとばかりの去るしだになく、人のすみかもまれに、おのづから蜑の鹽やく里ばかりはるかにていとあはれなるを御覽ずるにも、御身のうへはさしおかれて、まづかの古への事おぼしいづ。かゝる所に世をつくし給ひけむ御心のうちいかばかりなりけむと、哀に忝くおぼさるゝにも、今はたさらにかくさすらへぬるも何により思ひたちし事ぞ、かの御心のすゑやはたし遂ぐると思ひしゆゑなり、昔の下にもあはれとおぼさるらむかしとよろづにかき集めづきせずなむ。海つらよりは少し入りたる國分寺といふ寺をよろしきさまにとり拂ひておはしまし所にさだむ。今はさはかくてあるべき御身ぞかしとおぼし去づまるほど、猶夢の心ちしていはむ方なし。そこら參りしつはものどもゝまかづれば、かいしめりのどやかになりぬるいとゞ心ぼそし。昔こそ受領どもゝ任のはどその國を去たゝめ行ひしか、この頃は唯名ばかりにて、いづくにも

守護といふもの丶目代よりはおそましきをすゑたれば、武家のなびきにてのみおはやけざまの事はよろづおろそかにぞ去ける。葛城の大君をみちの國へ遣したりけむもかくやとあはれなり。中務の御子も土佐におはしましつきて御おくりの武士にたまはせける。

「思ひきやうらめしかりし武士のなごりを今日は去たふべしとは」。

かやうのたぐひあまた聞えしかど、何かはさのみ皆人もゆかしからずおぼさるらむとてなむ。都には三月廿二日御即位の行幸あれば世の中めでたくのゝしる。本院新院ひとつにたてまつりて待賢門院のほとりに御車立てゝ見奉らせ給ふ。よろづある べきさまにとゝのほりてめでたし。まことや中宮はそのまゝに御ぐしもたぐる時もなく沈み給へる御ありさまいとことわりに、遣き御別のかなしさにうちそへて御胸のやすきまもなくおぼしこがる。后の位もとゞめられたまひて院號のさだめなど人のうへのやうにはのかに聞しめすもうれしからぬ世なり。禮成門院とかや申すなり。年月は御身の人わらへなるさまにて天下のさわがれなりしをこそおぼし歎き、御門も苦しき事におぼしのたまはせけるに、今はなかなかそのすぢの事はかけてもおぼさず、さまざまなりし御修法の壇どもゝあとかたなく毀ちはてゝかきさましぬ。ひたすらに唯かゝる世のうさをのみおぼし惑ふに、日頃ふれど御ゆなども絶えて御覽じいれねば、そこはかとなくいとゞ損はれまさりてながらふべくも見え給はず。隱岐よりはたまさかの御消息などの通ふばかりにて、おぼつかなくいぶせき事多く積りゆくも、いつをあふせの限りともなく定なき世にやがてかくてやとぢめむとすらむとかたみにいみ

じうおぼさる。かしこに参り給へる内侍三位の御腹にも御子たちあまたおはします。いづれもいまだいはけなき御程にはあれど、物おぼし知りていみじう戀ひ聞え給ひつゝ、をりをりは忍びてうち泣きなど玄給ふ。をさあうものし給へば遠き國まではうつし奉らねど、もとの御後見をばあらためて西園寺大納言公宗の家にぞ渡し奉る。八つになり給ふぞ御このかみならむかし。北山におはするほど、夕暮のそらいと心すごう山風おらゝかに吹きて、常よりも物悲しくおぼされければ、

「庭松綠老秋風冷　　菌竹葉繁白雪埋。

つくづくとながめくらして入あひのかねのおとにも君ぞこひしき」。

をさなき御心にはかなくうちひそみ給へるいとあはれなり。こゝもかしこも盡させずおぼし歎くさまいはずとも皆推し量るべし。宮の宣旨もいたう時めきて三位してき。その御腹の若宮は花山院大納言師賢の御めのとにて、ことの外にかしづかれ給ひしも、この頃はひき忍びておはします。母君も世のうさに堪へずさまかへて、心深くうち行ひつゝ涙ばかりを友にておかしくらすに、をば北の方さへうせたりときゝて時々いひかはしけるなま女房のもとより、程經てのちなりければ、

「うきにまた重ぬる夢を聞きながらおどろかさでもなげきこしかな」。

かへし、宣旨三位殿、

「うきにまたかさなる夢を聞きながらおどろかさではなど歎きけむ」。

このせうとの爲定の中納言も前の御代にはおぼえ華やかにていと時なりしにひきかへ、去めやかにつれづれと籠り居たれば、おほぢの大納言爲世、度々院の御氣色たまはられけれどいとふようなれば心もとなう思ひわびて、春宮大夫通顯の君して重ねて奏しける。

「和歌のうらに八十ぢあまりの夜の鶴の子を思ふ聲のなどかきこえぬ」。

大夫はうけばりたる傳奏などにてはいませざりけれど、この大納言歌の弟子にてさり難きうへ、事のさまもゆゑあるわざなれば直衣のふところに引き入れて參り給へりけるに、後伏見(三條)院の上のどやかにいで居させ給ひて、世の御物語など仰せらる。折よくて思ひ歎くさまなどねんごろに語り申して、ありつる文ひきいでつゝ御氣色とり給ふ。大方いとなごやかにおはします君の、まいて何ばかり罪ある人ならねばかうしおぼすまではなけれど、いさゝかも武家よりとり申さぬことを御心にまかせ給はぬに、かくとゞこほるなるべし。」いとふびんにこそ」とのたまはせて、やがて御かへし、

「雲の上にきこえざらめや和歌の浦に老いぬるつるの子をおもふこゝろ」。

今年は祭の御幸あるべければ、めづらしさに人々常よりも物見車心づかひして、かねてより棧敷などもいみじう造れり。使どもゝいかで人にまさらむとかたみにいどみかはすべし。本院、新院、廣義門院、一品宮も忍びて入らせ給ふなどぞ聞えし。御車寄にて菊亭の右のおとゞの御子實尹の中納言參りたまへり。殿上人もよき家の君達ども色ゆりたるかぎり、いと清らにこのましう出でたちつかまつれり。御隨身なども花を折れるさまなり。出車にいろい

ろの藤つゝじ、卯花、撫子、燕子花などさまざまの袖口こぼれ出でたるいと艶になまめかし。祭など過ぎて世の中のどやかになりぬるほどに、先帝の御供なりし上達部ども、罪重きかぎりとはき國々へつかはしけり。按察大納言公敏、頭おろして忍びすぐされつるもなほゆりがたきにや、小山の判官秀朝とかやいふもの具して下野の國へときこゆ。花山院大納言師賢はりさまどもさらなり。千葉介貞胤うしろみて下總へくだる。五月十日あまりに都出でられけり。思ひかけざりしあ

「別ともなにかなげかむ君すまでうきふる里となれるみやこを」。

北の方は花山院入道右のおとゞ家定の御むすめなり。その御腹にも又こと腹にも君だちあまたあれど、それまでは流されず。うへのいみじう思ひ歎きたまへるさまあはれにかなしけれど、今はかぎりの對面だに許されねば、はるくる方なく口をしく、よろづに思ひめぐらされていと人わろし。

「今はとていのちをかぎる別路に後の世ならでいつをたのまむ」。

源中納言具行もおなじ頃あづまへ下りてゆく。あまたの中にとりわきて重かるべく聞ゆるは、さまことなる罪に當るべきにやあらむ。内にさぶらひし勾當の内侍は經朝の三位のむすめなりき。はやうは御門むつましくおはしまして姫宮などとうで奉りしを、其後この中納言いまだ下臈なりし時よりゆるし給はせて、此の年頃二つなきものに思ひかはして過ぐしつるにかくさまざまにつけてあさましき世をなべてにやは。日にそへて歎き玄づみながらも、お

なじ都にありと聞く程は吹きかふ風のたよりにも、さすがことふなぐさめのありつるを、遂にさるべき事とは人のうへを見聞くにつけても思ひまうけながら、猶今はと聞く心ちたとへむかたなし。この春さみの都別れたまひしに、そこらつきぬと思ひし涙もげにのこりありけりと今一しほ身も流れいでぬべくおぼゆ。中納言はものにもがなやとくやしうはしたなき事のみぞそこにはちゞにくだくめれど、めゝしう人に見えじと思ひかへしつゝ、つれなくつくりて思ひ入らぬさまなり。去年の冬頃あまたきこえし歌の中に、

「ながらへて身はいたづらに初霜のおくかた去らぬ世にもふるかな。

今ははやいかになりぬるうき身ぞとおなじ世にだにとふ人もなし」。

佐々木の佐渡判官入道伴ひてぞ下りける。逢阪の關にて、

「かへるべき時しなければこれやこのゆくをかぎりのあふさかの關」。

かしは原といふ所に去ばしやすらひて、あづかりの入道まづあづまへ人を遣したる返事待つなるべし。その程物語などなさけなさけしううちいひかはして「何事も去かるべき前の世のむくいに侍るべし。御身一つにしもあらぬ身なれば、ましてかひなきわざにこそ、かくたけき家に生れて弓箭とるわざにかゝづらひ侍るのみうきものに侍りけれ」などまはならねどはのめかすに心えはてられぬ。隱岐の御送をもつかうまつりしものなれば、御道すがらの事など語り出でゝ、「かたじけなういみじうも侍りしかな。まして朝夕近う仕うまつりなれ給ひけむ御心どもさながらなむ推し量り聞えさせ侍りし。何事も昔に及びめでたうおはし

ましゝ御事にて、世下り時衰へぬるぞるにはあまりたる御ありさまにや、かくもおはしますらむとさへせめては思ひ給へよらるゝ」など大かたの世につけてもげにとおぼゆるふしぶし加へて、のどやかにてみきなど所につけてことそぎあらあらしけれど、さる方に玄なしてよきほどにて、下しつるあづまよりの使歸りきたるけしき玄るけれど、とさらにいひいづる事もなし。いかならむと胸うちつぶれて覺ゆるもかつはいと心よわしかし。いづくの島もりとなれらむもあぢきなく、たれも千とせの松ならぬ世になかなか心づくしこそまさらめ。遂に遁るまじき道はとてもかくてもおなじ事、そのきはの心亂れあくだにあらば、すゞしき方にも赴きなむと思ふ。心はこゝろとして、都の方もこひしうあはれにさすがなる事ぞ多かりける。よろづにつけて事の氣色を見るに行く末遠くはあるまじかめりとさとりぬ。あづか顔のめかしくも情ありて思ひ玄らすれば、おなじうはと思ひて又の日「頭おろさむとなむ思ふ」といへば、「いとあはれなる事にこそ。あづまの聞えやいかゞと思ひ給ふれど、なんでふことかは」とてゆるしつ。かくいふはみな月の十九日なり。かの事は今日なめりと氣色見玄りぬ。思ひまうけながらも猶ためしなかりけるむくいのほどいかゞ淺くはおぼえむ。

「消えかゝる露のいのちのはてはみつさてもあづまのするぞゆかしき」。

猶も思ふ心のあるなめりとにくき口つきなりかし。その日の暮つかた、終にそこにて失はれにけり。今はのきはもさこそ心の中はありけめど、いたく人わろうもなくあるべき事ども思へるさまになむ見えける。内侍の待ちきく心ちいかばかりかはありけむ。やがてさまかへて

近江國高島といふわたりに、むかしのゆかりの人々尊く行ひてすむ寺にぞたち入りぬる。萬里小路中納言藤房は常陸國につかはさる。父の大納言母おもとなど、老のすゑに引き別るゝ心ちどもいへばさらなり。身にかへて求めまほしう思へどかひなし。弟の季房の宰相も頭おろしたりしかど猶下野の國へながさる。平宰相成輔はあづまへと聞えしかど、それも駿河の國とかやにてぞ失はれける。又元亨の亂れのはじめに流されし資朝の中納言をも、いまだ佐渡の島に玄づみつるを、このほどのついでにかしこにて失ふべきよしあづかりの武士におほせければ、このよしを知らせけるに思ひまうけたるよしいひて、都にとゞめける子のもとにあはれなる文かきてあづけゝり。既にきられけるときの頌とぞ聞きはべりし。

「四大本無主　五温本來空
將頭傾白刃　但如贈夏風」

いとあはれにぞ侍りける。俊基もおなじやうにぞ聞えし。かくのみ皆さまざまに罪にあたり遠き世界にはなちすてらるゝ、おのおの思ひ歎けども筆にもおよびがたし。大塔の尊雲法親王ばかりは虎の口を遁れたる御さまにて、こゝかしこさすらへおはしますもやすき空なく、いかですぐしはつべき御身ならむと心苦しくみえたり。隱岐の小島には月日ふるまゝに、いと忍びがたうおぼさるゝ事のみぞ數そひける。いかばかりのをこたりにてかゝるうきめを見るらむと前の世のみつらくおぼし知らるゝにも、いかでその罪をも報いてむとおぼして、打ちたへて御精進にて朝夕つとめ行はせ給ふ。法の玄るしをも心みがてらとかつはおぼ

すなるべし。自ら護摩などもたかせ給ふにいとたのもしき事夢にも現にも多くなむありける。徒然に思さるゝ折々は、ららめく所に立ち出でさせ給ひて遥に浦の方を御覧じやるに、蜑の釣舟はのかに見えて秋の木の葉の浮べる心ちするも哀にいづくをさしてかと思さる。

「心ざすかたをとはゞや浪のうへにうきてたゞよふあまの釣舟。

浦ごく船のかぢをたえ」とうち誦して御涙のこぼるゝを何となくまぎらはし給へる、いふよしなく心ふかげなり。ねびたまひにたれどなまめかしうをかしき御さまなれば、所につけてはましてやんごとなきあたらしさを自らいとかたじけなしとおぼさる。京には十月になり て御禊大嘗會などの急ぎに天の下物さわがしう、くらづかさ、たくみづかさ、うち殿、そめ殿、何くれの道々につけてかしがましう響きあひたるも片つ方は涙のもよほしなり。悠紀主基の御屏風の歌人々にめさる。書くべきものゝなければ、かしこへ參れる行房中將をや召しかへされましなど定めかね給ふを、まだきに傳へ聞しめしければ宵の間の玄づかなるにはいかゞあらむとすらむ。さもあらばいとこそうらやましからめ」とうちおぼせられて、火をつらつらとながめさせ給へる御まみの、忍ぶとすれどいたう玄ぐれさせ給へるを見奉るに、中將も心づよからずいとかなし。いかばかりの道ならばかゝる御ありさまを見おき聞えながら、うきふる里にはいでかへらむと思ふもえきこえやらず。後夜の御行にさながらおはしませば、鹽風いとたかう吹きくるに霰の音さへたへがたく聞えて、いみじう寒き夜の氷を

うち叩きて閼伽たてまつるも、山寺の小法師ばらなどの心ちぞするや。少將この中將などをきみをりて參れるもいつならひてかと哀に御らんせらる。今一たびいかで世を御心にまかするわざもがなと、人の心のけぢめわかるゝにつけても深う思しまさる事のみ數をらず。都には十月廿五日御禊の行幸なり。女御代には大炊御門大納言信嗣のむすめいだされるときこゆ。十月十二日より五節はじまる。前の御代には談天門院の御忌月にてとまりにしかばさうざうしかりしに、めづらしくて若きうへ人どもなど心ことに思へり。隱岐の御門の御めのとなりし吉田の一品宣房も、當代につかへて五節など奉る。こゝろの中ぞおはれにおしはからるゝ。定房の大納言もさるべき雜務の事などにはいでつかへけり。春宮大夫は内大臣になりて、大嘗會の時もたかみくらの行幸に前行とかやいふ事などつとめ給ふ。右のおとゞ兼季も太政大臣になりて、清暑堂の神樂に琵琶つかうまつりなどきこえて、よろづめでたくおらまほしくて年もくれぬ。まことやこの卯月の頃より年の名かはりにしぞかし。正慶とぞいふなる。大塔の法親王楠の正成などは猶同じ心にて世を傾ぶけむ謀をのみめぐらすべし。正成は金剛山千はやといふ所にいかめしき城をこしらへてえもいはず武きものども多く籠りゐたり。さて大塔の宮の令旨とて國々の兵をかたらひければ、世にうらみあるものなどこゝかしこにかくろへばみてをるかぎりは集りつどひけり。宮は熊野にもおはしましけるが、大峯をつたひて吉野にも高野にもおはしまし通ひつゝ、さりぬべきくまぐまにはよく紛れものし給ひて、武き御ありさまをのみ顯し給へば、いとかしこき大將軍にていますべしとて、附き

隨ひ聞ゆるものいと多くなり行きければ、六波羅にもあづまにもいと安からぬ事ともてさわぎて、猶かの千はやをせめくづすべしといへば、つは者などのぼり重なると聞ゆ。正成は聖徳太子の御墓の前を軍のそのにしていでおひかけひき寄せつ返しつ鹽のみちひく如くにて年はたゞくれ暮れはてぬれば、春になりて事どもあるべしなどいひしろふもいとむづかしう心ゆるびなき世のありさまなり。さても日野大納言俊光といひしは、文保の頃始めて大納言になりにしをいみじき事に時の人いひさわぐめりしに、その子この頃院の執權にて資名といふ、又大納言になりぬ。めでたくたびをさへ重ねぬるいといみじかめり。前の御代にも定房一品して藤房大納言になされなどせしをば、かうざまにぞ人思ひいふめりし。内には女御もいまださぶらひ給はぬに、西園寺の故内大臣殿の姫君、廣義門院の御傍に今御方とかや聞えてかしづかれ給ふをまゐらせ奉り給へれば、これや后がねと世人もまだきにめでたく思へれど、いかなるにか御おぼえいとあざやかならぬぞ口をしき。三條前大納言公秀のむすめ三條とてさぶらはる、御腹にぞ宮々あまたいでものし給ひぬる。つひのまうけの君にてこそおはしますめれ。

第十七　月草の花

かの島には春さても猶浦風さえて浪あらく、渚の氷もとけがたき世のけしきにいとゞおぼしむすぼる、事つきせず。かすかに心細き御すまひに年さへ隔たりぬるよとあさましくおぼさる。さぶらふ人々もゑばしこそあれいみじくくんじにたり。今年は正慶二年といふ。閏

二月あり。後のささらぎのはじめつかたよりとりわきて密教の祕法を試みさせ給へば、夜も大殿ごもらぬ日數へてさすがいたうこうじ給ひにけり。心ならずまどろませ給へる曉方、夢うつゝともわかね程に後宇多院ありしながらの御面かげさやかに見え給ひて聞え玄らせ給ふことおほかりけり。うちおどろきて夢なりけりとおぼすほどいはむ方なく名殘かなし。御涙もせきあへず、さめざらましをとおぼすもかひなし。源氏の大將須磨の浦にて父御門見奉りけむ夢の心ち玄給ふもいとあはれにたのもしう、いよいよ御心づよさまさりて、かの玄はぢが御むかへのやうなる釣舟もたよりいできなむやと待たるゝ心ちし給ふに、大塔の宮よりもあま人のたよりにつけて聞え給ふ事絶えず。都にも猶世の中玄づまりかねたるさまに聞ゆれば、よろづにおぼしなぐさめて關守のうち寢るひまをのみうかゞひ給ふに、玄かるべき時のいたれるにや、御垣守に侍ふつはものどもゝ御氣色をはの心えて靡き仕うまつらむと思ふ心つきにければ、さるべきかぎりかたらひ合せておなじ月の廿四日のあけぼのにいみじくたばかりてかくろへゐて奉る。いとあやしげなるあまの釣舟の樣に見せて、夜ふかき空の暗きまぎれにおしいだす。折しも霧いみじうふりてゆくさきも見えず、いかさまならむとあやふけれど御心を玄づめて念じ給ふに、思ふかたの風さへ吹きすゝみて、その日の申の時に出雲の國につかせ給ひぬ。こゝにてぞ人々心ち玄づめける。同じ廿五日伯耆國稻津浦といふ所へうつらせ給へり。この國に名和の又太郎ながとしといひて、あやしき民なれどいとまうに富めるが類ひろく心もさかさかしくむねむねしきものあり。かれがもとへ宣旨を遣

したるに、いとかたじけなしと思ひてとりあへず五百餘騎の勢にて御迎にまゐれり。又の日賀茂の社といふ所にたち入らせ給ふ。都の御社おぼしいでられていとたのもし。それより舟上寺といふ所へおはしまさせて九重の宮になずらふ。これよりぞ國々のつはものどもに御かたきを亡すべきよしの宣旨つかはしける。比叡の山へものぼされけり。かくて隱岐にはいでさせ給ひにし世つ方よりさわぎあひて、隱岐の前の守追ひて參るよし聞ゆれば、いとむくつけく思されつれど、こゝにも其の心してゐみじう戰ひければ引き返しにけり。京にもあづまにも驚き騷ぐさま思ひやるべし。正成が城のかこみにそこらの武士どもかしこにつどひをるに、かゝる事さへそひにたれば、いよいよあづまよりも上りつどふめり。三月にもなりぬ。十日あまりのほど俄に世の中いみじうのゝしる。何ぞと聞けば播磨の國より赤松なにがし入道圓心とかやいふもの先帝の勅に從ひて攻めくるなりとて都の中わわて惑ふ。例の六波羅へ行幸なり。兩院も御幸とて上下たちさわぐ。馬車走りちがひ、武士どものうちこみのゝしりたるさまいとおそろし。されど六波羅の軍つよくてその夜はかのものども引き返しぬとて少しおさまづれるやうなれど、かやうにいひ立ちぬれば猶心ゆるびなきにや、そのまゝ院も御門もおはしませば春宮もはなれ給へる、よろしからぬ事とて、廿六日六波羅へ行啓なる。內のおとゞ御車にまゐり給ふ。傅は久我右のおとゞにいますれど、大かたの儀式ばかりにてよろづこの內大臣殿御後見つかまつり給へば、いまたきびはなる御程を後めたがりてとのゐにもやがてさぶらひ給ふ。御修法のために法親王たちもさぶらはせ給へり。こゝもか

しこも軍とのみ聞えて日數ふるに、院よりのたまふとて上達部殿上人までも、ほどほどに隨ひてつはものを召せば、弓ひく道もおぼおぼしき若侍などをさへぞ奉りける。げにひぢもをりぬべき世の中なり。かやうにいひしろふ程に彌生もくれぬ。卯月の十日餘り又あづまよりものゝふ多くのぼる中に、をとゝし笠置へも向ひたりし治部大輔源高氏のぼれり。院にも賴もうしろめたく二心あるまじきよし、おろかならずちかごとぶみを書きてけれども、そこの心やいかゞあらむ、かく聞ゆるすぢもありけり。この高氏はいにしへの賴義朝臣の名殘なりければ、もとのねざしはやんごとなき武士なれど、承久よりこのかた頭さしいだす源氏もなくてうづもれすぐしながら、類ひろく勢四方にみちて、國々に心よせのもの多かればかやうに國の危きをりをえて思ひたつ道もやあらむなど云たにさゝめくも云るく、伯耆國へむかふべしといひなして先づ西山大原かたりに一とまりして、五月七日はのぼのと明くるほどより大宮の木戸どもをおしひらきて、二條より云も七條の大路を東ざまに七手に別れて旗をさしつゞけて六波羅をさして雲霞の如くたなびき入るに、更におもてをむかふるものなし。聞つくるとかやいふ聲は雷の落ちかゝるやうに、地の底もひゞき、梵天の宮の中も聞きし。御門、春宮、院のうへ、宮たちなどましてひとりさかしきもおはしまさず。絲竹の云らべ

をのみ聞しめしならひたる御心どもに、珍らかにうとましければたゞあきれ給へり。武士どもなかばをわけて金剛山へむかひたれば、さならぬのこり都にあるかぎりは戦をなす。今をかぎりの軍なれば手を盡しての〻しる程まねびやらむ方なし。雨のあしよりも矢げく走りちがふ矢にあたりて目のまへに死をうくるもの數を知らず。一日一夜いりもみとよみあかすに両六波羅殘るてなく防ぎつれど、遂に陣の内やぶられて今はかくと見えたり。日頃さぶらひ籠り給へる上達部殿上人なども今日と思ひまうけたらむだに、君のおはしまさむかぎりはいかでかまかでもちらむ。ましてかねてよりかくかまへけるをも知ろしめさで、昨日かとよ當代の宣旨をたまはりしもの〻、かくうらがへりぬれば誰かおもひよらむ。すべて上下となくひとつに立ち込みてわわて惑ひたり。日ぐらし八幡、山崎、竹田、宇治、勢多、深草、法性寺など、もえあがる煙ども四方の空にみちみちて日のひかりも見えず、墨をすりたるやうにて暮れぬ。こ〻にも火かゝりていとあさましければ、いみじう固めたりつる後の陣を辛うじて破りてそれより免れて出でさせ給ふ。御心ちども夢路をたどるやうなり。内のうへもいと怪しき御姿にことさらやつしたてまつる、いとまがまがし。両院御手をとりかはすといふばかりにて人に助けられつ〻出でさせ給ふ。上達部大臣たち、袴のそばとりてからぶりなどの落ちゆくも知らず空を歩む心ちして、あるは河原を西へ東へ様々ちりぢりになり給ふ。両六波羅仲時時益ひんがしをさしてあづまへと心がけておちければみゆきも同じさまになる。西園寺の大納言公宗は北山へ坐しにけり。右衛門督經顯、左兵衛督隆蔭、資明宰相などはみゆきの

供にまゐらる。按察の大納言資名は足を傷ひて東山わたりにとまりぬなどいひしはいかゞありけむ。内大臣殿は御子の別當道冬伴ひ給ひて八日のあけぼのゝいまだ暗きほどに、我が御家の三條坊門萬里小路に坐しましつきたるに、歩み入り給ふほども心もとなくて北の方門へはしり出でゝ、平らかにかへりおはしたると思ふうれしさに急ぎて見れば、おとゞは御直衣に指貫ひきあげ給へればえるく見え給ふ。別當は道の程のわりなきに折烏ぼう子に布直垂といふ物うち着て、ほそやかに若き人の御せんどもに紛れたればとみにも見えず。火などもわざとなければくらきほどのおやめわかれぬに、はやういかにもなり給へるにやと心ちまどひて御方は、いかにいかにと聲もわなゝきて聞えける。いとことわりにいみじうわはれなり。さてはみゆきは近江國に坐します程に、いぶきといふほとりにてなにがしの宮とかや法師にていましけるが、先帝の御心よせにてかやうのかたもほの心え侍りけるにや、待ちうけて矢を放ちたまふ。又京よりも追手かゝるなど聞えければ六波羅の北といひし仲時、内春宮兩院具し奉り、番馬といふ所の山のうへに入れ奉りぬ。手のものどもゝ猶殘りて從ひつきけれども戰もかなはずやありけむ、遂にこの山にて腹切りにけり。おなじきみなみ時益といひしはこれまでもまゐらず、守山のへんにてうせにけりとぞ聞えし。おやなくいみじき事のさまなり。御所々の御供には俊實の大納言、經顯の中納言、賴定の中納言、資名の大納言、資明の宰相、隆蔭などぞ殘りさぶらひける。俊實、資名、賴定などはやがてそこにて髻切りてけり。一院よりも歸り入らせ給ふ。御門に御文を奉り給ひて面々に御出家あるべしなどまで

申されけれども、思ひもよらぬよしをかたく申されけるとかやとぞ聞えし。伯耆の御所へは人々參り集ふ。上達部殿上人數知らず。さる程にあづまにもかねて心しけるにや、尊氏のすゑの一族なる、新田小四郎義貞といふもの、今の尊氏の子四つになりけるを大將軍にして武藏國より軍を起してけり。この頃のあづまの將軍は守邦親王にて坐します。御後見つかうまつる高時入道、貞顯入道、城介入道圓明、長崎入道圓基などいふものども驚き騒ぎて、高時入道おとゝに四郎左近大夫泰家といひし、今は入道したるをぞ大將に下しける。五月十四日鎌倉をたちてむかふ。其の勢十萬餘騎。高時入道の一ぞう附き從ふものそこら皆ひろごりて鎌倉はじまりし賴朝の世、時政より今に到るまで多くの年月をつめり。僅ある新田などいふ國人にたやすくいかでかは亡さるべきと覺えしに、程なく十五日にかたき既に鎌倉に近づくよし聞えて家々を毀ちさわぎのゝしる。世の既に滅するにやと覺えしとぞ人は語り侍りし。四郎左近大夫入道軍にうち負けゝるにや、從ふ武士ども殘りなく新田が方へつきぬれば、えさゝぬものどもばかり五六百騎にて十六日の夜に入りて鎌倉へ引き歸る。僅に中一日にてかくなりぬる事夢かとぞおぼえし。かくて日々の軍にうち負けゝれば、おなじき廿二日、高時以下腹切りてうせにけり。さて都には伯耆よりの還御とて世の中ひしめく。まづ東寺へ入らせ給ひて事どもさだめらる。二條の前のおとゞ道平めしありて參り給へり。こたみ内裏へ入らせ給ふべき儀、重祚などにてわるべけれども、璽の箱を御身にそへられたれば、唯遠き行幸の還御の儀式にてわるべきよし定められる。關白をおかるまじければ二條のおとゞ氏長

者を宣下せられ、都の事管領あるべきよしうけたまはる。天の下唯この御はからひなるべしとてこのひとつわたり喜びあへり。六月六日東寺より常の行幸のさまにて内裏へぞ入らせたまひける。めでたしとも言の葉なし。去年の寒いみじかりしはやと思ひいづるもたとしへなく、今も御供の武士どもありしよりは猶なし（三字傍記）。いくへともなくうち圍み奉れるはいとなくつけきさまなれど、こたみはうとましくも見えず、たのもしくてめでたき御まもりかなと覺ゆるも、うちつけめなるべし。世のならひ時につけてうつる心なればさぞあるらし。先陣は二條富小路の内裏につかせ給ひぬれど、後陣の兵は猶東寺の門まで續きひかへたるとぞ聞えしはまことにやありけむ。正成もつかうまつれり。かの名和の又太郎は伯耆守になりてそれも衛府のものどもにうちまぜたる、めづらしくさまかはりて、ゆすりみちたる世の氣色かくもありけるをなどおさましくは歎かせ奉りけるにかと、めでたきにつけても猶前の世のみゆかし。車などたち續きたるさま、おりし御くだりにはこよなくまされり。物見ける人の中に、

「むかしだに左づむうらみをおきの海に波たちかへるいまぞかしこき」。

むかしのことなど思ひあはするにやありけむ。金剛山なりしあづまの武士どもゝさながら頭を垂れて參りきほふさま涙のはじめもかくやと見えたり。禮成門院も又中宮ときこえまいつしか五旬の御修法はじめらる。八日より議定行はせたまふ。昔の人々のこりなく參りつ

どふ。十三日大塔の法親王都に入りたまふ。この月頃に御ぐしおはしてえもいはずきよらなる男になり給へり。からの赤地の錦の御鎧直垂といふもの奉りて御馬にてわたり給へば、御供にゆゝしげなるものゝふどもうち圍みて、御門の御供なりしにもはとはと劣るまじかめり。遂に將軍の宣旨をかうぶり給ひぬ。流されし人々はどなくきほひのぼるさま、枯れにし木草の春にあへる心ちす。その中に季房の宰相入道のみぞ、預りなりけるものゝ情あき心ばへやありけむ、あづまのひしめきのまぎれに失ひてければ、兄の中納言藤房は歸り上れるにつけて、父の大納言母の尼うへなどなげきつきせず胸あかぬ心ちしてけり。四條中納言隆資といふも、頭おろしたりしまた髪おはしぬ。「もとよりちりをいづるにはあらず。かたきのために身を隱さむとてかりそめにそりしばかりなれば、今はた更に眉をひらく時になりて男になれらむ何のはゞかりかあらむ」とぞおなじ心なるどちいひはせける。天台座主にていませし法親王だにかくおはしませばまいてとぞ。誰にかありけむそのころきゝし。

「すみぞめの色をもかへつつき草のうつればかはる花のころもに」と。

増鏡　終

明治三十六年六月廿五日印刷
明治三十六年六月三十日發行

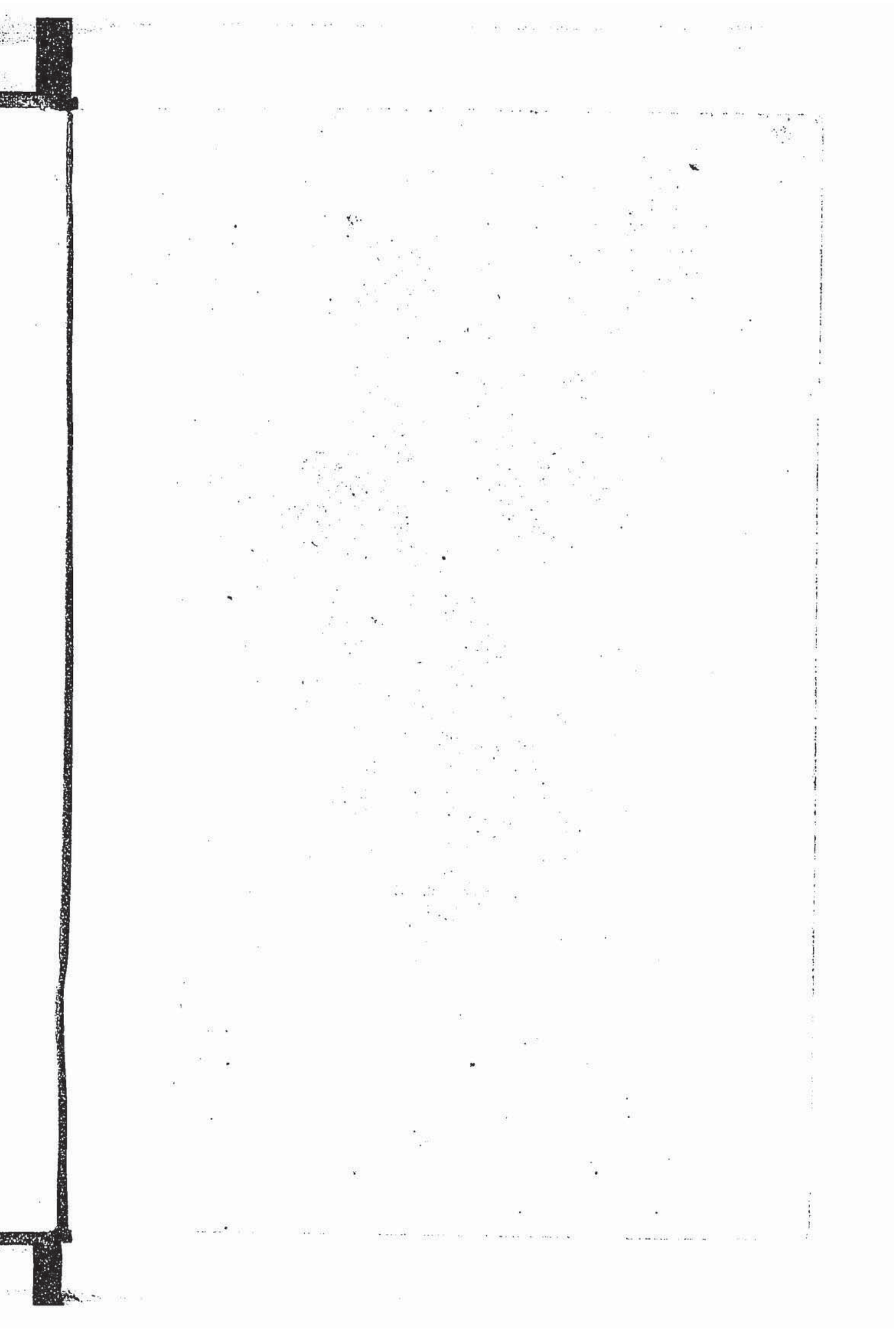
不許複製

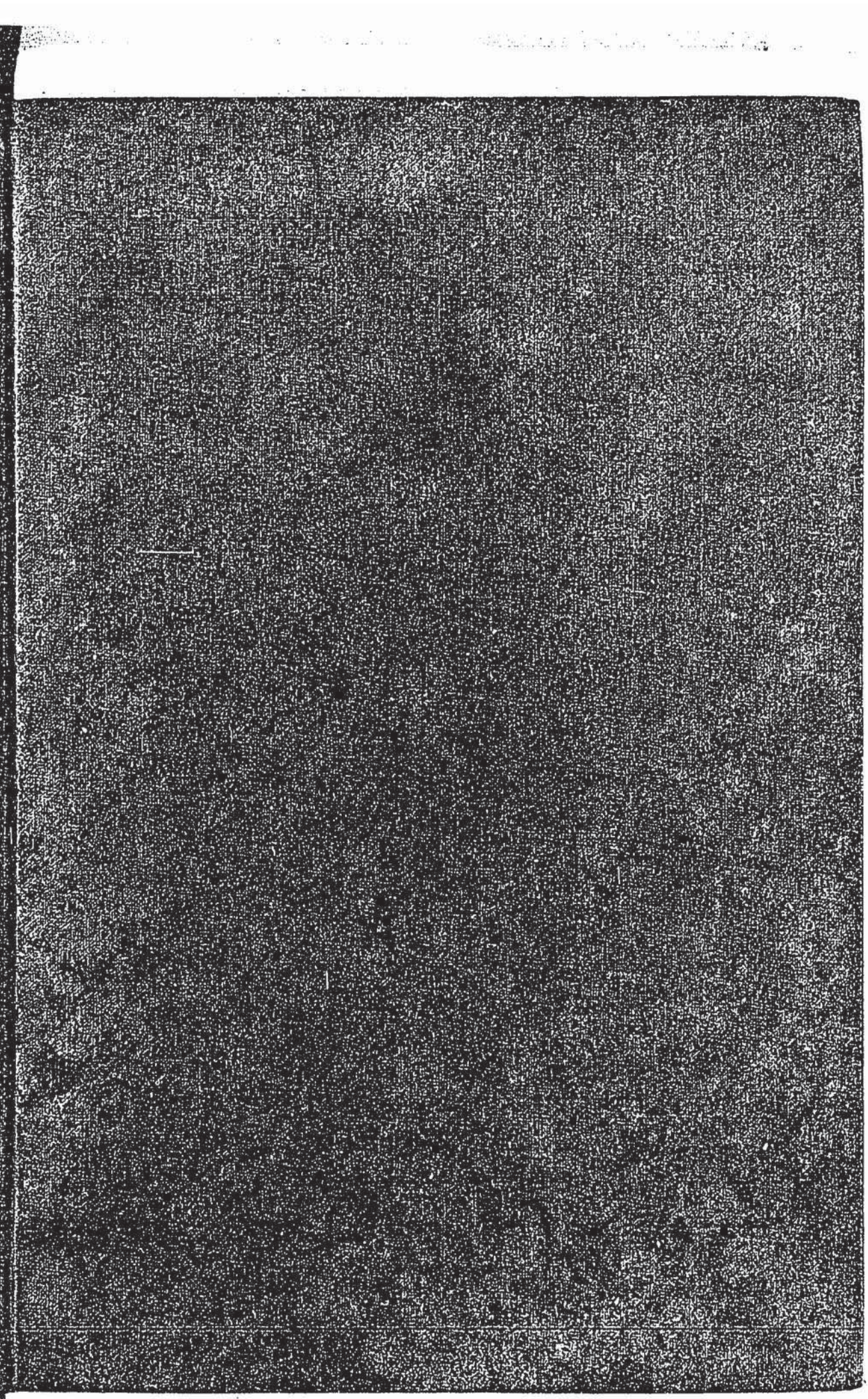
國文大觀歷史部壹輿附
全九册定價金貳拾圓

編纂者　丸岡桂
編纂者　松下大三郎　東京市京橋區銀座二丁目十番地
發行者　下田度計　東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷者　河本龜之助　東京市京橋區築地二丁目廿一番地
印刷所　株式會社國光社印刷部　東京市京橋區銀座二丁目十番地
發行所　板倉屋書房（電話長距離加入新橋一六三四番）

明治三十六年八月

井村真琴





918.
Ko547
M